兵庫県文化財調査報告　第210冊

揖保郡太子町

亀田遺跡（第１分冊）

－ 亀田遺跡Ⅱ地点の調査 －

太子竜野バイパス関係　埋蔵文化財調査報告書

平成１２年１１月

兵庫県教育委員会

SK03　弥生土器出土状況

SK03　出土弥生土器

奈良時代の土器

中世の土器

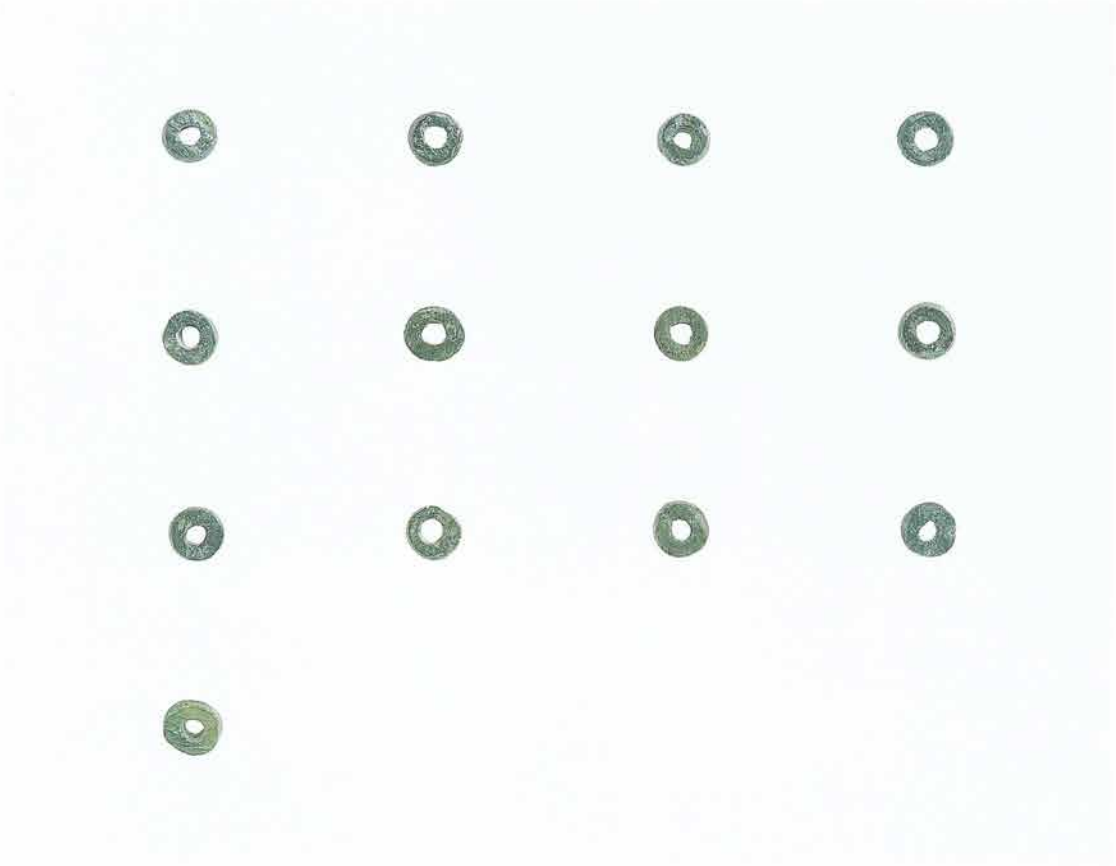
分銅形型土製品506（表）

分銅形土製品506（表）

遺跡出土の分銅形土製品

銅剣形磨製石剣

碧玉製管玉



石製小玉

例　言

1．本書は、兵庫県揖保郡太子町上太田字亀田に所在する亀田遺跡Ⅰ地点及びⅡ地点の埋蔵文化財調査報告書である。

2．発掘調査及び整理作業については、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

3．発掘調査は、太子・龍野バイパス建設事業に関連して、平成３年度～７年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施した。

4．全面調査は、株式会社神崎組と作業委託を交わして実施した。

5．整理作業は、平成10～12年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

6．本書は、亀田遺跡の調査成果をⅠ・Ⅱ地点に分け、２分冊で構成している。
　亀田遺跡Ⅱ地点を１分冊（兵庫県文化財調査報告　第210冊）
　亀田遺跡Ⅰ地点を２分冊（兵庫県文化財調査報告　第209冊）

7．遺物写真の撮影にあたっては、株式会社タニグチ・フォトと委託契約を交わして、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

8．本書に使用した方位は国土座標Ⅴ系を基準にし、水準は東京湾平均海水準（T.P.）を使用した。また、各遺構図面で使用している方位は座標北を指す。

9．本書に使用した遺跡分布図等の地図については、国土地理院発行５万分の１地形図「竜野」・「姫路」図幅を使用した。

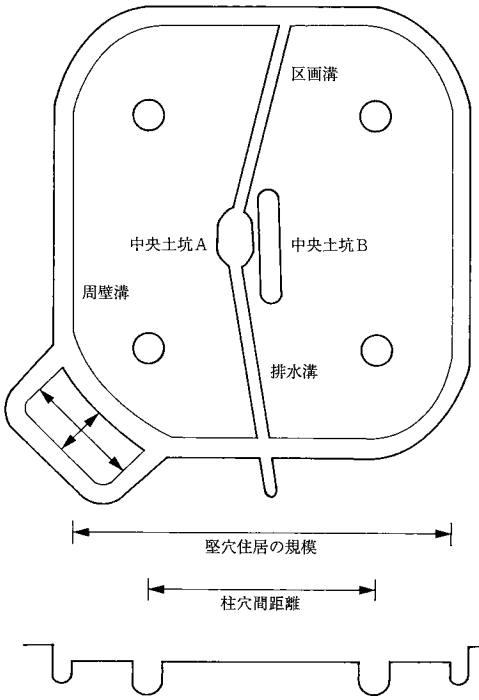
10．本書の執筆は、調査担当者で分担した。編集は、池田悦子の補助を得て、亀田遺跡１分冊を高木芳史が、亀田遺跡２分冊を深江英憲が主に担当し、共同で行った。なお、各執筆担当は本文目次に記した。

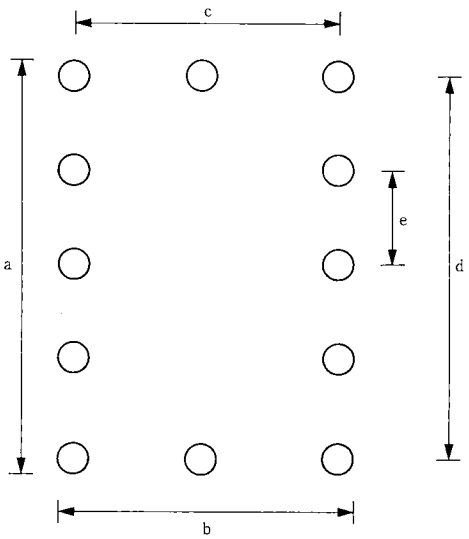
11．本書の調査成果は、既に現地説明会資料等で公表している。本報告では若干内容を異にする部分もあるが、本書が現時点における最新の担当者の見解と理解されたい。

12．本書作成にあたっては、以下の方々からの御寄稿と御協力を頂いた。記して謝意を表します。（敬称略順不同）
藁科哲男（京都大学原子炉実験所）・村上　隆（奈良国立文化財研究所）
後藤博彌（神戸女子大学）・パリノ・サーヴェイ株式会社

凡　例

・竪穴住居跡の面積についてはデジタルプラニメーター（株式会社小泉測器製作所：PLACOM KP-90）を用い、1/30～1/40に縮小した実測図上で３回測定した平均値である。
・掘立柱建物跡の面積については、桁行き方向の両端の柱痕間の芯々距離（d）と梁行き方向の両端の柱痕間の芯々距離（c）とを掛け合わせて算出したものである。
・掘立柱建物跡の規模は、桁行方向は（a）、梁行方向は（b）を測った値である。
・竪穴住居跡の中央土坑については一般的に中央土坑と呼称されるものを「中央土坑０」、それに付帯する長楕円形の土坑を「中央土坑１」と呼び、この組み合わせをまとめて呼ぶ場合は「１０（イチマル）土坑」と称する。
・竪穴住居跡の規模については、最大時における周壁溝の内側から反対側の周壁溝の内側までの距離である。





本 文 目 次

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯 ……（別府洋二）　‥‥1
第２節　調査の経過 ……（別府）　‥‥1
第３節　整理の経過 ……（深江英憲）　‥‥6
　１．平成10年度の整理作業
　２．平成11年度の整理作業
　３．平成12年度の整理作業

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境 ……（鐵　英記）　‥‥9
第２節　歴史的環境 ……（鐵）　‥‥10

第３章　確認調査および遺跡の基本層序

第１節　確認調査の概要 ……（深江）　‥‥16
第２節　No.Ⅱ地点の基本層序……（深江）　‥‥16
第３節　No.Ⅰ地点の基本層序……（深江）　‥‥18

第４章　No.Ⅱ地点の遺構

第１節　No.Ⅱ地点の概要……（柏原正民）　‥‥19
第２節　竪穴住居 ……（池田征弘・柏原・高木芳史）　‥‥20
第３節　掘立柱建物 ……（池田・柏原・鐵・高木）　‥‥32
第４節　土坑・井戸 ……（池田・柏原・高木・別府）　‥‥49
第５節　埋設土器 ……（深江）　‥‥50
第６節　溝・流路・旧河道 ……（池田・鐵・高木）　‥‥52
第７節　その他の遺構 ……（池田・鐵・別府）　‥‥55

第５章　No.Ⅱ地点の出土遺物

第１節　土器・土製品 ……（池田・柏原・深江・別府）　‥‥57
　１．確認調査出土土器 ……（深江）　‥‥57
　２．全面調査出土土器
　　弥生時代の土器 ……（深江）　‥‥58

古墳時代の遺物 ……（柏原） ……73
奈良時代の遺物 ……（池田） ……84
平安時代以降の遺物 ……（池田） ……87
土製品 ……（別府） ……94
第２節　石器・石製品・玉類 ……（高木） ……95
第３節　金属器 ……（柏原）……101
第４節　木器 ……（別府）……104

巻頭図版（Ⅱ地点）

図版１　上：SK03弥生土器出土状況
下：SK03出土弥生土器
図版２　上：奈良時代の土器
下：中世の土器
図版３　上：分銅形土製品506（表）
下：分銅形土製品506（裏）
図版４　上：遺跡出土の分銅形土製品
下：銅剣型磨製石剣
図版５　上：碧玉製管玉
下：石製小玉

挿図目次

第１図　遺跡の位置
第２図　調査位置図 …… 2
第３図　地区割り図 ……4
第４図　平成10年度の整理作業風景 ……6
第５図　平成11年度の整理作業風景 ……7
第６図　平成12年度の整理作業風景 ……8
第７図　周辺の遺跡 ……12
第８図　亀田遺跡トレンチ配置図 ……17
第９図　確認調査風景 ……18

表目次

表１　周辺の遺跡 ……13
表２　古墳時代土器観察表（1）……79

表 3　古墳時代土器観察表（2）……80
表 4　古墳時代土器観察表（3）……81
表 5　古墳時代土器観察表（4）……82
表 6　古墳時代土器観察表（5）……83
表 7　古墳時代土器観察表（6）……84
表 8　出土遺物観察表（奈良時代以降）（1）……89
表 9　出土遺物観察表（奈良時代以降）（2）……90
表10　出土遺物観察表（奈良時代以降）（3）……91
表11　出土遺物観察表（奈良時代以降）（4）……92
表12　出土遺物観察表（奈良時代以降）（5）……93
表13　出土遺物観察表（奈良時代以降）（6）……94
表14　石鏃計測値……96
表15　打製石剣計測値……97
表16　石錐計測値……97
表17　削器計測値……97
表18　楔形石器計測値……98
表19　磨製石斧計測値……98
表20　石庖丁計測値……99
表21　敲石計測値……99
表22　砥石計測値……99
表23　石皿・凹石計測値……100
表24　石核計測値……100
表25　玉類計測値……101
表26　出土金属器一覧表……104

図版目次

図版 1　亀田遺跡№Ⅱ地点全体図
図版 2　亀田遺跡微地形図
図版 3　土層堆積状況図
図版 4　竪穴住居配置図
図版 5　竪穴住居 1
図版 6　竪穴住居 2
図版 7　竪穴住居 3
図版 8　竪穴住居 4
図版 9　竪穴住居 5
図版10　竪穴住居 6
図版11　竪穴住居 7
図版12　竪穴住居 8
図版13　竪穴住居 9
図版14　竪穴住居10
図版15　竪穴住居11
図版16　竪穴住居12
図版17　竪穴住居13
図版18　竪穴住居14
図版19　竪穴住居15
図版20　竪穴住居16

図版21　竪穴住居17
図版22　竪穴住居18
図版23　掘立柱建物配置図
図版24　掘立柱建物１
図版25　掘立柱建物２
図版26　掘立柱建物３
図版27　掘立柱建物４
図版28　掘立柱建物５
図版29　掘立柱建物６
図版30　掘立柱建物７
図版31　掘立柱建物８
図版32　掘立柱建物９
図版33　掘立柱建物10
図版34　掘立柱建物11
図版35　掘立柱建物12
図版36　掘立柱建物13
図版37　掘立柱建物14
図版38　掘立柱建物15
図版39　掘立柱建物16
図版40　掘立柱建物17
図版41　掘立柱建物18
図版42　掘立柱建物19
図版43　掘立柱建物20
図版44　掘立柱建物21
図版45　土坑１
図版46　土坑２
図版47　土坑３・不明遺構
図版48　埋設土器１
図版49　埋設土器２
図版50　墓１
図版51　流路１
図版52　溝
図版53　井戸・橋脚
図版54　確認調査出土土器
図版55　弥生時代の土器１（竪穴住居）
図版56　弥生時代の土器２（竪穴住居）
図版57　弥生時代の土器３（竪穴住居・土坑）
図版58　弥生時代の土器４（土坑）
図版59　弥生時代の土器５（埋設土器）
図版60　弥生時代の土器６（方形区画溝「SD04」・ピット）
図版61　弥生時代の土器７（ピット・溝・流路）
図版62　弥生時代の土器８（溝）
図版63　弥生時代の土器９（流路）
図版64　弥生時代の土器10（包含層）
図版65　弥生時代の土器11（包含層）
図版66　古墳時代の土器１（竪穴住居・掘立柱建物）
図版67　古墳時代の土器２（ピット・溝・土坑）
図版68　古墳時代の土器３（溝・流路）
図版69　古墳時代の土器４（流路）
図版70　古墳時代の土器５（包含層）
図版71　奈良時代の土器１（ピット・溝・流路）
図版72　奈良時代の土器２（流路）
図版73　奈良時代の土器３（流路）
図版74　奈良時代の土器４（流路・包含層）
図版75　奈良時代の土器５（流路・包含層）
図版76　平安時代以降の土器１（ピット・溝・土坑・流路）
図版77　平安時代以降の土器２（流路・包含層）
図版78　打製石鏃
図版79　銅剣型石剣・打製石剣・石錐・削器１
図版80　削器２
図版81　削器３・楔形石器
図版82　磨製石斧１
図版83　磨製石斧２
図版84　磨製石斧３・磨製石庖丁・敲石１
図版85　敲石２・砥石１
図版86　砥石２
図版87　石皿・凹み石・石核
図版88　石製品・玉類・土製品１
図版89　土製品２・金属器１
図版90　金属器２
図版91　金属器３
図版92　木器１（包含層・流路）
図版93　木器２（流路）
図版94　木器３（流路・橋脚）

写真図版（Ⅱ地点）

図版１　亀田遺跡調査前空中写真
図版２　亀田遺跡全景（北東から）
No.Ⅱ地点（真上から）
平成４年度調査区（Ｃ３・４・６・７、Ｄ３～５）
図版３　Ｄ－３～５区
平成５年度調査区（Ａ１・２、Ｂ１～７、Ｄ１・２）
Ｅ地区（真上から）
図版４　調査区東半遺構群（真上から）
調査区南半（西から）
図版５　調査区東半（北から）
Ａ－３区（西から）
Ａ－４区（南西から）
図版６　Ｃ－２区（西から）
Ｃ－６区（南西から）
Ｄ－３区流路上面の遺構群
図版７　Ｃ－３～５区（北東から）
平成４年度Ｃ－３・４区（北東から）
図版８　平成４年度Ｃ－３・４区（南から）
平成４年度Ｃ－３・４区（北から）
Ｅ区（東から）
図版９　SH01（西から）
SH02（西から）
SH03（西から）
図版10　SH04（北から）
上段左：SH02中央土坑（西から）
上段右：SH03中央土坑セクション（南から）
中段左：SH03中央土坑（東から）
中段右：SH03周壁溝内弥生土器出土状況
下段左：SH04遺物検出作業風景
下段左：SH04周壁溝内弥生土器出土状況
図版11　SH01～04（北から）
SH05（西から）
SH06（東から）
図版12　SH06検出作業風景
SH06中央土坑遺物出土状況（東から）
SH07（西から）

図版13　SH08（南から）
SH09,10（北西から）
SH11（西から）
図版14　上段左：SH11,12（南から）
上段右上：SH12カマド（南から）
上段右下：SH12カマド（東から）
SH12（西から）
SH13,14（西から）
図版15　SH13（北から）
中段左：SH13床面検出作業風景
中段右：SH14炭化材検出状況
SH14炭化材検出状況（北西から）
図版16　SH14（北から）
SH15（北から）
SH16（南から）
図版17　SH17（西から）
SH18（南から）
SH18炭化材検出状況（南から）
下段右下：SH18中央土坑（南から）
図版18　SH19（南東から）
SH20西半部（南から）
SH20東半部（南から）
図版19　SH21西半部（南東から）
SH21東半部（南東から）
SH18～21（南西から）
図版20　SH22西半部炭化材検出状況（東から）
SH22東半部炭化材検出状況（南から）
左：SH22中央土坑セクション（西から）
右：床面炭化材検出状況（南東から）
SH22西半部完掘状況（東から）
左：SH22床面台石出土状況（西から）
右：SH22作業風景
図版21　SH22西半部（南から）
SH22東半部（南から）
図版22　SH23（北から）
左上：SH23中央土坑セクション（西から）
左下：SH24中央土坑セクション（西から）
右：SH23中央土坑弥生土器出土状況（西から）
SH24（西から）

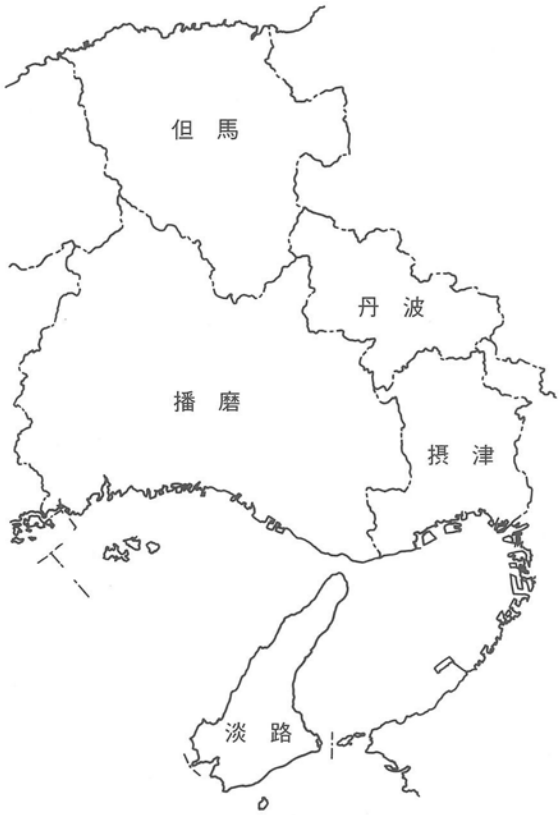
図版23　SH24弥生土器出土状況
SH24完掘状況（西から）
左上：SH25検出状況（北から）
左下：SH25弥生土器出土状況全景（南から）
右・上中下：SH25弥生土器出土状況
図版24　左：SH25中央土坑セクション（西から）
右：SH25中央土坑セクション（北から）
SH25（北から）
SH26（南から）
図版25　左上：SH27（南から）
右上：SH28（南東から）
左下：SH29（南東から）
右下：SH31（西から）
SH30（西から）
左上：SH32（北から）
右上：SH33（西から）
右：作業風景
図版26　SB01（南から）
SB03（南東から）
SB05（北から）
図版27　SB06（南から）
SB08～12（北から）
図版28　SB08（南から）
SB10（東から）
SB15（南から）
図版29　SB16（南から）
SB33（西から）
SB34,35（西から）
図版30　SB36（北から）
SB37～45（南西から）
SB37（東から）
図版31　B区掘立柱建物群（北西から）
SB38（西から）
SB38（南から）
図版32　SB39（東から）
SB40（南から）
SB41（西から）
図版33　SB42～45（北東から）
SB43（南東から）

SB44検出状況（北東から）
図版34　SB44（南東から）
SB45（南から）
SB46（東から）
図版35　SK03　弥生土器出土状況（東から）
SK03　弥生土器出土状況（南から）
SK03　完掘状況（南から）
図版36　SK24（南東から）
SK39（北から）
SK35（北東から）
図版37　SX01検出状況（南から）
SX01遺物出土状況（南から）
左：炭化棺材検出状況
右：灰釉陶器出土状況
図版38　SX01完掘状況（西から）
SE01（南から）
図版39　ST01（南から）
左：ST01（東から）
右：ST01（南東から）
ST02検出状況（南から）
図版40　一段目左：ST02検出状況（南西から）
一段目右：ST02検出状況（南東から）
二段目左：ST02棺身（南西から）
二段目右：ST02棺身（東から）
三段目左：ST03（南東から）
三段目右：ST03（東から）
四段目左：ST04（西から）
四段目右：ST04（北から）
図版41　流路（西から）
左：流路　東セクション（東から）
右：流路　西セクション（東から）
SD500　北側セクション（南東から）
SD500（南東から）
図版42　流路（南東から）
流路　セクション（南東から）
SD500　杭列検出状況（東から）
図版43　SD500　杭列検出状況（北から）
左：SD38　遺物出土状況（北東から）
右：SD38　セクション（東から）

左：SD24（南西から）
右上：SD24　セクション（南西から）
右下：SD503（南西から）
SD50　セクション（南西から）
図版44　旧河道内橋脚状遺構検出状況（南東から）
旧河道内橋脚状遺構検出状況（南西から）
図版45　確認調査出土土器
図版46　弥生時代の土器１（竪穴住居）
図版47　弥生時代の土器２（竪穴住居）
図版48　弥生時代の土器３（竪穴住居）
図版49　弥生時代の土器４（竪穴住居）
図版50　弥生時代の土器５（土坑）
図版51　弥生時代の土器６（土坑）
図版52　弥生時代の土器７（土坑・埋設土器）
図版53　弥生時代の土器８（埋設土器・方形区画溝「SD04」）
図版54　弥生時代の土器９（方形区画溝「SD04」・ピット）
図版55　弥生時代の土器10（ピット）
図版56　弥生時代の土器11（ピット・溝）
図版57　弥生時代の土器12（溝）
図版58　弥生時代の土器13（溝・流路）
図版59　弥生時代の土器14（流路・包含層）
図版60　弥生時代の土器15（包含層）
図版61　弥生時代の土器16（包含層）
図版62　弥生時代の土器17（包含層・その他）
図版63　確認調査出土土器
弥生時代の土器18（竪穴住居）
図版64　弥生時代の土器19（竪穴住居）
弥生時代の土器20（竪穴住居）
図版65　弥生時代の土器21（竪穴住居）
弥生時代の土器22（土坑）
図版66　弥生時代の土器23（土坑）
弥生時代の土器24（土坑）
図版67　弥生時代の土器25（土坑）
弥生時代の土器26（方形区画溝「SD04」）
図版68　弥生時代の土器27（溝）
弥生時代の土器28（溝）
図版69　弥生時代の土器29（溝）
弥生時代の土器30（流路）
図版70　弥生時代の土器31（包含層）

弥生時代の土器32（包含層）
図版71　古墳時代の土器１（竪穴住居）
図版72　古墳時代の土器２（竪穴住居・掘立柱建物・ピット）
図版73　古墳時代の土器３（ピット・溝・土坑）
図版74　古墳時代の土器４（溝・流路）
図版75　古墳時代の土器５（流路）
図版76　古墳時代の土器６（流路・包含層）
図版77　古墳時代の土器７（包含層）
図版78　古墳時代の土器８（包含層）
図版79　古墳時代の土器９（竪穴住居）
古墳時代の土器10（掘立柱建物）
図版80　古墳時代の土器11（ピット）
古墳時代の土器12（溝）
図版81　古墳時代の土器13（ピット）
古墳時代の土器14（溝）
図版82　古墳時代の土器15（ピット）
古墳時代の土器16（流路）
図版83　奈良時代の土器１（ピット・溝・流路）
図版84　奈良時代の土器２（流路）
図版85　奈良時代の土器３（流路）
図版86　奈良時代の土器４（流路）
図版87　奈良時代の土器５（流路）
図版88　奈良時代の土器６（流路・包含層）
図版89　平安時代以降の土器１（ピット・溝・土坑）
図版90　平安時代以降の土器２（流路）
図版91　平安時代以降の土器３（流路・包含層）
図版92　平安時代以降の土器４（包含層）
図版93　打製石鏃・銅剣型石剣・打製石剣・石錐
図版94　削器１
図版95　削器２・使用痕のある剥片・楔形石器
図版96　磨製石斧１（伐採斧）
図版97　磨製石斧２（伐採斧・加工斧）
図版98　磨製石庖丁・敲石１
図版99　敲石１・砥石１
図版100　砥石２
図版101　砥石３・石皿・凹石・石核
図版102　土製品
図版103　金属器１
図版104　金属器２

図版105　金属器 3
図版106　木器 1（包含層・流路）
図版107　木器 2（流路・橋脚）



第１図　遺跡の位置

第１章　調査に至る経緯と調査の経過

第１節　調査に至る経緯

亀田遺跡は1980年前後に太子・龍野バイパスの建設に先立って、一部発掘調査がおこなわれており、上太田亀田遺跡及び上太田茶屋ノ前遺跡として太子町史に報告されている。上太田亀田遺跡では布留式土器並行期の方形竪穴住居跡が検出されており、滑石製の勾玉なども出土している。その他にも掘立柱建物跡や溝・水田跡・自然流路が検出されている。水田跡は12世紀末頃のものと推定されており、掘立柱建物跡は水田跡以前のものである。自然流路からは弥生時代後期後半から古墳時代前期頃の大量の土器、及び６世紀前半頃の須恵器が出土している。そして、この遺跡が弥生時代中期にまで遡ることが指摘されている。以上のようにこれまでも亀田遺跡はその存在を知られていたが、断片的な調査であり、遺跡の範囲等は依然として不明であった。

建設省近畿地方建設局姫路工事事務所によって計画された姫路西バイパスは、国道２号線のバイパスである太子・龍野バイパスと山陽自動車道を結ぶ連絡道として、揖保郡太子町上太田から姫路市相野間の約 2.9kmを南北に走ることになる。この計画を受けて、兵庫県教育委員会では計画路線内の分布調査を実施し、８ケ所の地点で遺物散布地や古墳群などを確認した。これらの遺跡の中には、平成３年度に姫路市教育委員会によって全面調査がおこなわれた御坊ケ山１号窯、平成４年度に太子町教育委員会によって全面調査が実施された内山戸古墳群、また、兵庫県教育委員会が全面調査を実施した太市中古墳群や境谷遺跡が含まれている。亀田遺跡は太子・龍野バイパスから分岐するインターチェンジ部分にあたり、このバイパス工事によって太子・龍野バイパスを挟んだ約30,000㎡が埋蔵文化財調査の対象となった。この他にも、亀田遺跡では平成４年に県道石倉太子線改良工事に伴って、２月に確認調査が、７月に全面調査がおこなわれているが、大津茂川に近い部分であるため集落跡本体ではなく、水田跡が検出されている。

参考文献

松本正信「考古学からみた太子町」『弥生時代の太子町』太子町史第三巻・章－３　1989

第２節　調査の経過

確認調査

亀田遺跡では分布調査の結果、広範囲に遺物が散布していることが判明したため、平成３年９月には大津茂川に近いバイパス拡幅部（No.Ⅰ地点E区）の確認調査（遺跡調査番号910063）を、また、平成４年５月からはインターチェンジ本体部分他の確認調査（遺跡調査番号920175）を約３ケ月にわたっておこなった。この結果、竪穴住居・土器棺・流路・柱穴などの多くの遺構と遺物包含層がほぼ全面に広がっており、遺跡の時期も弥生時代中期から平安時代にまたがる複合遺跡であることが判明した。また平成５年１月には全面調査に平行して、No.Ⅱ地点北端部にあたるひょうたん池改修に伴い、池の堰堤部分の確認調査がおこなわれた。この調査ではひょうたん池の南端部で方形竪穴住居跡が検出されたが、それより北側では遺構・遺物は検出されず、ほとんどが溜池の工事や水田造成によって削平されているこ

Ⅰ地点

Ⅱ地点

0　200m

第２図　調査位置図

とがわかった。また東から延びる谷地形が検出され、遺跡の範囲はこの谷よりも北側には広がらないことが推定できた。

なお確認調査時の調査体制は以下の通りである。

確認調査　　（遺跡調査番号910063）　平成３年９月10日～平成３年９月11日
調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　久保弘幸・鐵　英記

確認調査　　（遺跡調査番号920175）　平成４年５月１日～平成４年７月31日
調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　久保弘幸・深江英憲

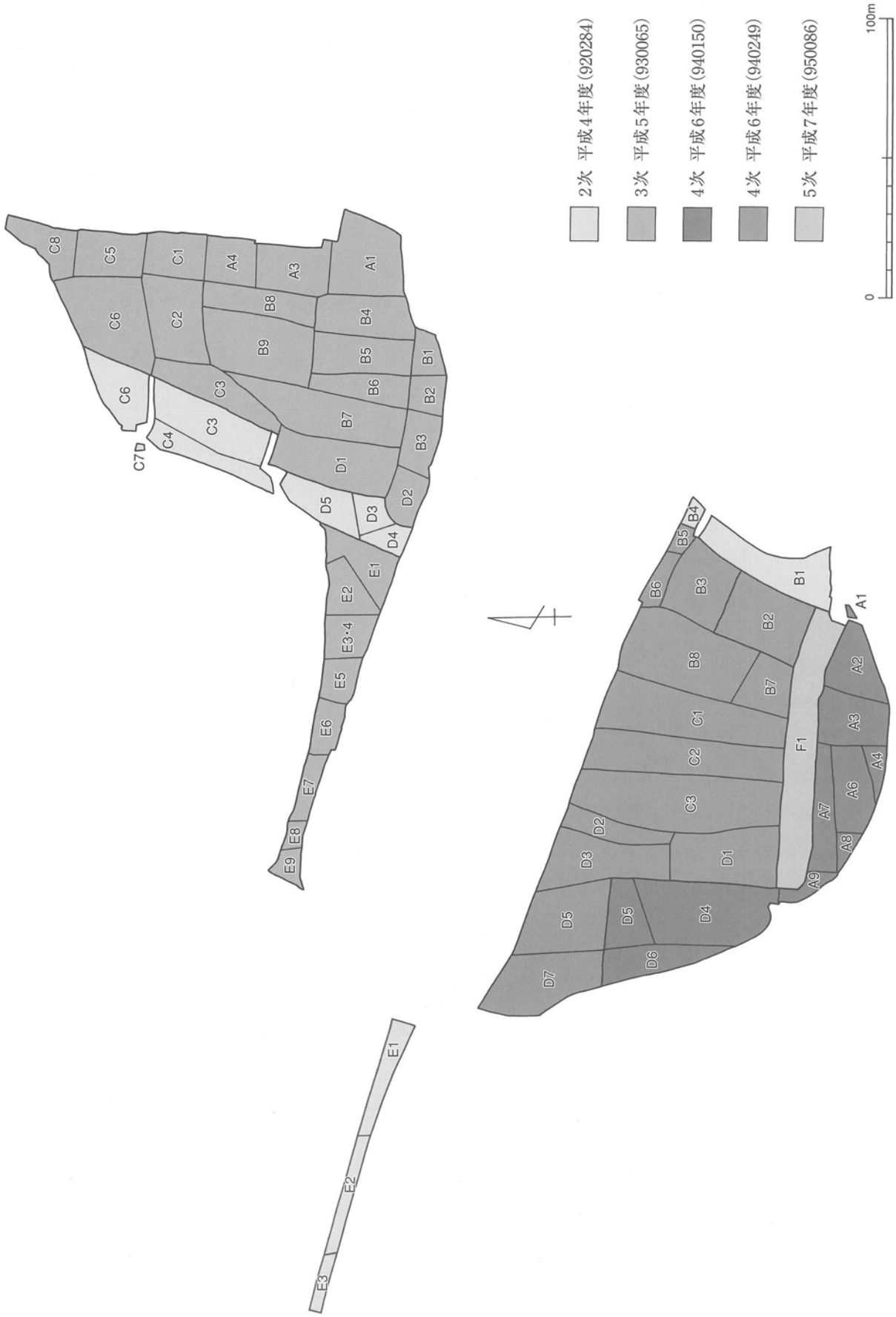
確認調査　　（遺跡調査番号920374）　平成５年１月29日～平成５年２月１日
調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　水口富夫

全面調査

この確認調査結果を受けて、平成４年11月に亀田遺跡の全面調査が開始された。全面調査に際して、太子・龍野バイパスの南側を亀田遺跡No.Ⅰ地点、北側を亀田遺跡No.Ⅱ地点とし、現地形に則してA～F、或いはA～Eの大地区に細分し、更に各地区に含まれる水田１枚毎に番号を付加して調査地区名とした。平成４年度の全面調査（遺跡調査番号920284）は本体工事の急がれる部分についておこなわれたため、太子・龍野バイパスを挟んだNo.Ⅰ地点、No.Ⅱ地点の両側に及んでいる。No.Ⅰ地点では東端部にあたるB－１・４区（約696㎡）と西端部にあたるバイパス拡幅部のE－１～３区（約540㎡）の調査を実施した。また、No.Ⅱ地点では溜池改修工事に伴う工事用道路の調査のため、No.Ⅱ地点を南北に貫くようにC－３・４・６・７区、D－３～５区（約2,014㎡）の調査を実施した。また平成５年２月に地元説明会をおこなった。

平成５年度からの調査では、本体工事の進捗状況に合わせて細分された調査範囲では手間・期間の無駄が生じることから、No.Ⅱ地点を集中的に調査し、続いてNo.Ⅰ地点の完了を目指して計画した。１年間で調査をおこなう面積が１万㎡近くなることから、遺構実測に空中写真測量を実施することを検討したが、経費的な面で採用されず、20分の１の平面図を全て手作業で実測した。平成５年５月からの全面調査（遺跡調査番号930065）では、No.Ⅱ地点のA－１・３・４区、B－１～９区、C－１～３・５・６・８区、D－１・２区、E－１～９区（約11,464㎡）の調査を実施し、No.Ⅱ地点の発掘調査を完了した。更にNo.Ⅰ地点のB－２区（約846㎡）の調査も合わせて実施した。No.Ⅱ地点の成果については平成5年11月3日に現地説明会をおこなった。

平成６年６月からの全面調査（遺跡調査番号940150）では、上半期にNo.Ⅰ地点のA－１～９区、D－４・６区（約3,584㎡）の調査を実施し、下半期（遺跡調査番号940249）にはB－３・５～８区、C－１


2次 平成4年度(920284)
3次 平成5年度(930065)
4次 平成6年度(940150)
4次 平成6年度(940249)
5次 平成7年度(950086)
0
100m
C8
C5
C1
A4
A3
A1
C6
C2
B8
B4
B9
B5
B1
C6
C3
B6
B2
C3
B7
C4
B3
C7
D1
D5
D3
D2
D4
E1
E2
E3・4
E5
E6
E7
E8
E9
B5
B4
B6
B3
B1
A1
B2
B8
B7
A2
C1
F1
A3
C2
A4
C3
A6
A7
D2
A8
D3
D1
A9
D5
D5
D4
D6
D7
E1
E2
E3

第3図　地区割り図

～３区、D－１～３・５・７区（約8,597㎡）の調査を実施した。No.Ⅰ地点の成果については平成７年3月11日に地元説明会をおこなった。また、この年度にはNo.Ⅱ地点の東側の山裾部分で太子町教育委員会が発掘調査を実施しており、溝、ピットなどの遺構を検出している。

平成７年４月からは、残されたNo.Ⅰ地点F区（約1,272㎡）の現水路下の調査（遺跡調査番号950086）を実施した。この水路の底は周辺で検出された遺構面よりも上にあり、それまでの調査から一部中世に埋没していることが判明していた。このため水路付け替え後の同年度の調査となった。このF区の調査をもって同事業における亀田遺跡の発掘調査は完了した。確認調査から５ケ年、８次にわたる調査で、確認調査で約815㎡、No.Ⅰ地点約15,536㎡、No.Ⅱ地点約13,478㎡、延べ約29,829㎡の発掘調査を実施し、弥生時代中期から平安時代を中心とした巨大な複合遺跡であることが判明した。

なお、全面調査時の調査体制は以下の通りである。

平成４年度　（遺跡調査番号920284）　平成４年11月16日～平成５年３月18日
　調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
　調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　井守徳男・別府洋二・鐵　英記
　調査補助員　田中　騰

平成５年度　（遺跡調査番号930065）　平成５年５月17日～平成６年３月18日
　調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
　調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　井守徳男・別府洋二・柏原正民・池田征弘・高木芳史
　　清水一文（高砂市教育委員会より研修）
　調査補助員　西口亜佳音・藤田彩子・吉井剛
　室内作業員　寺田章子・藤井昭子・森崎由起子・森崎宏子

平成６年度　（遺跡調査番号940150）　平成６年６月６日～平成６年９月22日
　　（遺跡調査番号940249）　平成６年９月26日～平成７年３月20日
　調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
　調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　別府洋二・鐵　英記・深江英憲・高木芳史・國本綾子
　調査補助員　西口亜佳音・藤田彩子・團正雄・石井潤・小川和男・渋谷正孝・竹内範斉
　室内作業員　寺田章子・藤井昭子・森崎由起子・古川賀律子・森田朝子・寺田尚美
　　田尾春美・曽賀瑞恵

平成７年度　（遺跡調査番号950086）　平成７年４月29日～平成７年７月12日
　調査主体　兵庫県教育委員会社会教育・文化財課
　調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
　　別府洋二・深江英憲・國本綾子

調査補助員　藤田彩子

室内作業員　寺田章子・藤井昭子・森崎由起子・森田朝子・曽賀瑞恵

第３節　整理の経過

亀田遺跡の整理作業は、遺物の水洗い・ネーミング作業については全面調査時に現場事務所でおこない、以後の作業については平成10～12年度にかけて兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

整理作業にあたっては、発掘調査契約時の地区割りである亀田遺跡No.Ⅰ地点、亀田遺跡No.Ⅱ地点と同様、２地区に分割した整理契約を交わした。従って、整理作業は、発掘調査をおこなった地区順で、先ず亀田遺跡No.Ⅱ地点、そして亀田遺跡No.Ⅰ地点の順序でおこなった。また、当初の整理計画では、平成13年度の刊行であったが、太子竜野バイパスの太子インターチェンジ無料化に伴い、整理計画の見直しがおこなわれ、平成12年度10月末の刊行となった事で、同一年度でのNo.Ⅰ・No.Ⅱ地点の同時並行作業を余儀なくされ、多くの人員を要した。

平成10年度の整理作業

実施した作業は、亀田遺跡No.Ⅱ地点の土器の接合補強・実測・金属器の保存処理である。

整理担当職員	整理普及班	主　査	加古千恵子
		主　査	長濱誠司
	調査第１班	主　査	別府洋二
	調査第３班	主　任	鐵　英記
	企画調整班	技術職員	柏原正民
	復興調査班	技術職員	深江英憲
	調査第２班	技術職員	池田征弘
	復興調査班	研 修 員	高木芳史

整理技術属託員　古谷章子　中村　睦　八木和子　宮田麻子　小山みゆき　本窪田英子
石野照代　茨木恵美子　飯田章子　佐伯純子　鈴木まき子　横山キクエ
竹内素子　萩原聡美　岸野奈津子　岡田美穂　山口幸恵　真子ふさ恵

第４図　平成10年度の整理作業風景

宮野正子　綾小路公子　川村由紀　前田恭子　岡井とし子　溝上くみ

（保存処理担当）　（栗山美奈　和田寿佐子　前川悦子　藤川紀子）

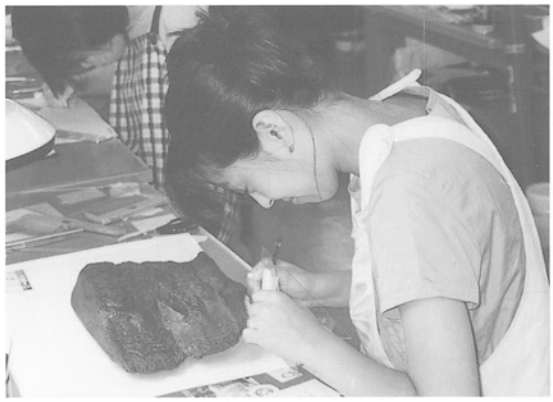
平成11年度の整理作業

実施した作業は、亀田遺跡No.Ⅱ地点の土器の復元・遺物写真の撮影・写真整理、亀田遺跡No.Ⅰ地点の土器の接合補強・遺物実測・復元・金属保存処理である。

整理担当職員	整理普及班	主　　査	加古千恵子
		技術職員	長濱誠司
		技術職員	岡本一秀
	企画調整班	主　　査	別府洋二
	調査第１班	主　　任	鐵　英記
	調査第３班	技術職員	柏原正民
	調査第３班	技術職員	深江英憲
	調査第２班	技術職員	池田征弘
	復興調査班	研 修 員	高木芳史

整理技術属託員　古谷章子　池田悦子　増田麻子　前山三枝子　香川フジ子　石野照代　茨木恵美子　西野淳子　飯田章子　佐伯純子　喜多山好子　村上京子　萩原聡美　高田めぐみ　宮野正子　綾小路公子　又江立子　津田友子　岡井とし子　岡田祥子　矢持竜児　梶川華代　澤野有里　桑田寛子　長川加奈子　蓬莱洋子

（保存処理担当）　（栗山美奈　和田寿佐子　前川悦子　藤川紀子）



第５図　平成11年度の整理作業風景

平成12年度の整理作業

実施した作業は、亀田遺跡No.Ⅱ地点の図補正・トレース・レイアウト、亀田遺跡No.Ⅰ地点の復元・遺物写真撮影・写真整理・図補正・トレース・レイアウト・木器保存で、No.Ⅰ地点・No.Ⅱ地点の刊行である。

整理担当職員	整理普及班	主　任	中村　弘
		主　任	深江英憲
	企画調整班	主　査	別府洋二
	調査第３班	主　任	柏原正民
	調査第１班	技術職員	池田征弘
	調査第２班	研 修 員	高木芳史

整理技術属託員　池田悦子　香川フジ子　平松ゆり　岸野奈津子　松本嘉子　木村淑子　前田千栄子　島田留里　鈴木まき子　八木富美子　河上智晴　西岡敬子　早川有紀　藤井光代　岡田祥子　佐々木誓子　三島重美

第６図　平成12年度の整理作業風景

第２章　位置と環境

第１節　地理的環境

亀田遺跡は兵庫県の西部、揖保郡太子町上太田字亀田に所在し、大津茂川中流域左岸の扇状地に立地している。

太子町を含む揖龍平野は、中国山地の東端を構成している播但山地を大きく刻んで南流する揖保川、林田川、および独立した小規模河川である大津茂川の流域に当たる。町域の北西部には播但山地の一部である西播山地があり、火成岩からなる独立丘陵も散在するが、大部分は揖保川の氾濫原とされる平野部が続いている。

高橋学氏の研究によると、これまでデルタ性平野あるいは氾濫原とされてきた揖保川下流域の平野部は、１ｍの等高線図を見るとかなり起伏に富んでおり、扇状地的性格を有する。ただし、詳細に見ると、揖保川左岸域は盛んに河川の氾濫堆積を受けて形成された扇状地状であるのに対し、右岸地域では突出した尾根によって本流性の土砂の流入が妨げられると同時に、谷の入り口部が堆積物により堰き止められたために、谷部が埋め残されている。

揖保川の左岸には前述のように、馬山・壇特山・朝日山などの基盤岩の突出がみとめられる。これらの独立丘陵は、8,000万年前から6,500万年前にかけて、流紋岩の山塊が揖保川本流の堆積作用によって埋没したために生まれた地形である。これらによって本流の影響を受けず、埋没を免れたと考えられる大津茂川の河谷が平野の東端に位置している。

揖保川左岸の扇状地は龍野市日飼を扇頂として南へ低下して行くが、標高４～５ｍ付近を境として、それより下流では海岸に平行して延びる微高地群とそれらに挟まれた凹地群の卓越するデルタ的性格が強くなってくる。

揖保川下流域の低地は三つの地形面に分類することができる、そのうち大きな地形面が二つあり、0.5～2ｍの崖によって限られている。そして低位のものが氾濫原面であり、今も地形の形成が続く沖積面に当たる。高位のものは完新世段丘面であり、洪水が及ぶことがほとんどなく、及んだとしても積極的な地形の形成がおこなわれることがなく、条里タイプの土地割りが広がっている。

完新世段丘面を細分すると、現在集落・耕作地が立地することが多い微高地と帯状に長く延びる凹地をなす旧河道、いずれにも属さない平坦地からなっている。これらのうち旧河道は、ほとんどのものが現在の流路と比べ東向きの網状の流れを有し、川島付近で旧揖保川もしくは旧林田川が大津茂川に合流していた。微高地はこれまでの分類では自然堤防とされてきた部分であるが、大礫～小礫で構成されている場合が多く、中州として形成されたものと考えられる。また、平坦部は小規模な旧河道や旧中州が氾濫堆積物で埋められたものと考えられる。以上のことから、完新世段丘面もかっては扇状地として形成されたものである。

低位の地形面である氾濫原は河川の影響のみで形成された自然堤防帯と、海と河川が形成に関与した三角州帯、海によって形成された砂堆帯に細分される。自然堤防帯は完新世段丘面と氾濫原面の境界が形成された後で発達した新しい地形である。

海成層の分布は揖保川沿いでは姫路市下余部付近、大津茂川沿いでは姫路市田井付近までとなっている。また、海進にともない低湿化した場所に堆積したと思われる層は京見山南麓から姫路市宮田・坂出

付近まで広がっている。したがって、縄文海進時の海岸線は現在のT.P.4～5m付近に位置していたと考えられる。

第2節　歴史的環境

旧石器時代

播磨地方では明石市藤江でハンドアックスが出土しており、人々の暮らしが中期旧石器時代まで遡る可能性も指摘されている。しかし、現在までのところ太子町を含めた西播地域で最初に人類の足跡が認められるのは後期旧石器時代になってからである。揖保川下流域では御津町碇岩遺跡で2群に分かれた石器類ブロックが姶良Ｔｎ火山灰より上層で検出された。揖保川右岸では現地表面の浅いところで姶良Ｔｎ火山灰が検出され、当時と現在で地表面にほとんど差がないことが判明しており、今後当該期の遺跡が発見される可能性が高い。

太子町内は遺構は確認されていないが、坊主山遺跡（85）から国府型ナイフ型石器と有舌尖頭器が各1点出土しているほか、北山向池遺跡（73）でナイフ型石器と尖頭器、山田峠遺跡（167）でナイフ型石器が採集されている。これらの遺跡は山麓部に分布しており、遊動的であった当時の生業形態を反映しているものと思われる。

縄文時代

内陸部では最近になって新宮町家原遺跡のように縄文時代早期の調査例も認められるが、海浜部では前期以降になると段丘面や丘陵部を中心に遺跡の分布が認められる。ただし、前項で述べたように坊主山遺跡では有舌尖頭器が出土していることから、古い時期に位置づけられる遺跡が見つかる可能性がある。揖保川下流では片吹遺跡（33）で前期まで遡る遺構が見つかっており、中期末頃の住居も検出されている。後期から晩期にかけて遺跡の数が徐々に増え始め、平野部にも集落が立地するようになる。林田川・大津茂川の流域でも、段丘上や平野部に位置する東南遺跡（120）、大津茂川床遺跡（175）、城山遺跡（94）、常全遺跡（112）、立岡遺跡（118）、丁・柳ヶ瀬遺跡（179）等でこの時期の遺構・遺物が見つかっている。しかし、その多くは遺物が検出されているにすぎず、集落の構成が判明する資料は少ない。しかし、東南遺跡では後期中葉を中心とした時期の住居跡・埋甕・配石墓等が検出されており、集落の規模・構成が推測できる良好な資料となっている。

弥生時代

揖保川・林田川および大津茂川下流域における弥生時代遺跡の分布は、前期においてはそれほど顕著ではなく、門前遺跡（36）、福地相坂遺跡（129）、斑鳩寺遺跡（105）、平方遺跡（96）、丁・柳ヶ瀬遺跡（179）などが知られている。住居跡が検出されている平方遺跡を除けば、遺物のみが確認されている場合が多い。この他にも袋尻遺跡（38）では前期の土器棺墓が確認されている。

中期になると遺跡の数は増大する。これらの遺跡には前期から継続するものと中期に出現するものがあり、立地や規模に異なる集落から構成された地域社会が成立していたと考えられる。この中で横内遺跡（23）、助久五反田遺跡（103）、鵤遺跡（108）、川島遺跡（176）の中核的な集落と思われ、鵤遺跡では分銅型土製品も検出されている。中期になってから出現する寄井遺跡（61）・内山遺跡（78）・福田天神遺跡（89）・福田片岡遺跡（90）・馬場遺跡（93）・城山遺跡・桜ヶ坪遺跡（32）・中臣山遺跡（34）・立岡遺跡（118）・山田峠遺跡群（166・167）等は派生的な集落であると考えられる。今回、亀田遺跡で

は広範囲にわたって住居跡が検出され、磨製石剣も出土する等、当該期の良好な資料となっている。また、片山東山遺跡（27）・壇特山遺跡（122）は丘陵頂部にある典型的な高地性集落であり、家島群島男鹿島の大山神社遺跡と眺望関係にある。

中期において増加した集落の多くは、後期に継続しないものが多く、中期と後期の間に断絶が認められる。後期において登場する片吹遺跡（33）・門前遺跡（36）・常全遺跡（112）・上構遺跡（130）・茶屋ノ前遺跡（158）、蓮常寺北遺跡（127）等は相対的に小型の集落が多く、土器編年の問題もあって、後期前半の遺跡がほとんどなく、一部の遺跡は庄内並行期も含めて後期と捉えられているという状況にあるが、今後の資料の増加によって空白は埋まっていくと思われる。

弥生時代末になると箱式石棺を主体部として採用する墳丘墓を含む墳墓群が成立する。黒岡山墳丘墓（169）、笹山墳墓群（80）中の湯ノ谷墳丘墓では墳丘裾に列石が認められ、後者の主体部は竪穴式石槨が用いられている。また、鏡片あるいは小型倣製鏡の副葬がおこなわれるのも当地域の特色である。白鷺山１号墓（12）では鏡片、白鷺山２号墓（13）では小型倣製内行花文鏡、檀特山５号墳（123）では平縁素文鏡が副葬され、西方の影響が考えられる。

古墳時代

揖保川下流域と大津茂川流域の前方後円墳・前方後方墳は30基を越え、前期古墳が多いことから、複数の首長が小地域に分かれて蟠踞していたことが想定されている。下流域においては前方後方墳である権現山51号墳（48）が舶載三角縁神獣鏡・特殊器台型埴輪等からみて、最古の段階に位置づけられる。権現山古墳群では50号墳がこれに続く首長墓であると考えられる。大津茂川流域では古式前方後円墳として丁瓢塚古墳（180）が挙げられるが、規模の点で突出しており、被葬者の勢力基盤が揖保川下流域をも含むものであった可能性が指摘されている。やや時期が下る壇特山１号墳（124）・山戸４号墳（188）がそれに続くものであり、山戸４号墳では方形の竪穴式石槨に讃岐系土器を用いた合わせ蓋壺棺が納められている。そのほかに前期の古墳として首長墓系列には当てはまらないとおもわれる松田山古墳（97）は明確な墳丘も持たないものの、竪穴式石室に割竹型木棺が納められていたと思われ、斜縁二神二獣鏡・鉄器・銅鏃・筒形銅器・玉類といった豊富な副葬品を誇る。

中期の古墳は現在のところ、確定的な首長墓がほとんどない状況にある。太子町内においても、箱式石棺を主体部とし、倣製ダ龍鏡の他豊富な鉄製品を副葬品とする黒岡山古墳（168）が知られているにすぎず、当地域における首長のあり方が大きく変わったことを示唆している。

後期になると丘陵部を中心に小型の円墳で構成される群集墳が数多く営まれるようになる。これらの群集墳は横穴式石室を主体部とするものが多く、それらに混在して権現山59号墳（49）・丁薬司古墳（184）・山戸12号墳のような小型の前方後円墳が立地している場合がある。大津茂川下流では最近新たな前方後円墳の存在も報告されておりまた、播磨では最大級の横穴式石室を持ち、三累環頭大刀が副葬された中井古墳群（74）のように平野部に立地する例もある。太子町内では立岡山古墳群（117）・太市中古墳群（155）・黒岡古墳群（161）・山田古墳群（165）等が横穴式石室を持つものである。黒岡古墳群中に含まれ、大型の横穴式石室を持つ黒岡神社古墳（162）では家形石棺が石室に残存している。太市中古墳群では規模に差がある石室が営まれているほか、うち１基の石室に九州系の要素が認められる。その他には原北町古墳（173）・丁山頂古墳（185）のように単独で立地するものもあり、丁山頂古墳は「T」字形の平面プランと穹窿状石室を持つ。丹生山１号墳（102）は箱式石棺を主体部とするタイプで、石製品・玉類が副葬されたほか、形象埴輪・円筒埴輪を持つ例である。終末期になると内山戸古墳群

第７図　周辺の遺跡

(156) のような小石室を持つものや上太田古墳群 (157) のように切石造石室を持つものが出現する。

以上のように墳墓に関してはその存在がかなり明らかであるが、それらの墳墓を造営した集団については、集落跡の調査例が少なく、不明な点が多い。そのような中で、城山遺跡・鵤石田遺跡 (109) は古墳時代後期の方形住居跡からなる集落が確認されいる希少な例であるが、今回の亀田遺跡の調査でも後期の住居跡が検出されている。

生産遺跡としては姫路市と太子町境界の峰相山を中心とする丘陵部で須恵器の窯跡が確認されている。桜峠窯跡群 (151～154)・大池窯跡群 (146～149) 等が6世紀中葉から7世紀代にかけて操業されたも

第1表　周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
0	亀田遺跡	48	権現山51号墳	96	平方遺跡	144	打越2号窯跡
1	馬立遺跡	49	権現山59号墳	97	松田山古墳	145	赤坂窯跡群
2	井野原城	50	口佐見古墳	98	柳山古墳	146	大池4号窯跡
3	曽我井遺跡	51	上伊勢1号窯	99	坊主山古墳	147	大池3号窯跡
4	曽我井赤禿古墳群	52	上伊勢2号窯	100	沼田古墳	148	大池2号窯跡
5	興聖寺裏山遺跡	53	下伊勢古墳群	101	南柳遺跡	149	大池1号窯跡
6	下野田1号墳	54	ドンデン4号墳	102	丹生山古墳群	150	殿清水窯跡
7	柴摺城	55	下伊勢古墳	103	助久五反畑遺跡	151	桜峠4号窯跡
8	觜崎・天満遺跡	56	下伊勢西山古墳	104	東保山古墳群	152	桜峠3号窯跡
9	前期龍野城跡	57	追分古墳	105	斑鳩寺遺跡	153	桜峠5号窯跡
10	龍野城城下町遺跡	58	野部古墳	106	鵤構居跡	154	桜峠3号窯
11	野見宿祢古墳	59	田中遺跡	107	斑鳩寺南遺跡	155	太市中古墳群
12	白鷺山1号墳	60	山田遺跡	108	鵤遺跡	156	内山戸古墳群
13	白鷺山2号墳	61	寄井遺跡	109	鵤石田遺跡	157	上太田古墳群
14	狐塚1号墳	62	上入野山麓古墳	110	阿曽北遺跡	158	上太田茶屋ノ前遺跡
15	狐塚2号墳	63	上入野古墳	111	阿曽南遺跡	159	栖岩城跡
16	林田陣屋跡・窪山城跡	64	中井廃寺	112	常全遺跡	160	城山古墳群
17	大住寺群集墳	65	中井瓦窯跡	113	常全古墳	161	黒岡古墳群
18	皿池遺跡	66	中井鴨池窯跡	114	常全日蓮寺遺跡	162	黒岡神社古墳
19	奥池遺跡	67	観音寺1号墳	115	船塚遺跡	163	天神山古墳群
20	愛宕山古墳	68	観音寺窯跡	116	石蜘蛛城跡	164	山田大山古墳群
21	上横内遺跡	69	観音寺2号窯跡	117	立岡山古墳群	165	山田古墳群
22	奥村遺跡・廃寺	70	西脇古墳群	118	立岡遺跡	166	山田小丸山遺跡
23	横内遺跡	71	西脇廃寺	119	立岡東遺跡	167	山田遺跡
24	古代美作道	72	向山遺跡	120	東南遺跡	168	黒岡山古墳
25	椰神社裏山1・2号墳	73	向池遺跡	121	矢田部城跡	169	黒岡山墳墓
26	沢田群集墳	74	中井古墳群	122	壇特山遺跡	170	北山古墳群
27	片山東山墳墓群	75	広坂古墳群	123	壇特山古墳群	171	郷ノ谷古墳群
28	片山古墳群	76	広坂壷棺墓	124	壇特山1号墳	172	鷲山古墳群
29	古代山陽道	77	内山墳墓群	125	朝日山古墳群	173	原北町古墳
30	小宅荘遺跡	78	内山遺跡	126	朝日山城跡	174	塚村古墳群
31	宮脇遺跡	79	笹山経塚・円通寺跡	127	蓮常寺北遺跡	175	大津茂川床遺跡
32	桜ヶ坪遺跡	80	笹山墳墓群	128	福地宮ノ前遺跡	176	川島遺跡
33	片吹遺跡	81	松尾寺跡	129	福地相坂遺跡	177	下太田遺跡
34	中臣山古墳群	82	北山古墳	130	上構遺跡	178	下太田廃寺
35	宝林寺北遺跡	83	鵜飼1号墳	131	高田区整遺跡第1地点	179	丁・柳ヶ瀬遺跡
36	門前遺跡	84	鵜飼2号墳	132	高田区整遺跡第2地点	180	丁瓢塚古墳
37	西構遺跡	85	坊主山遺跡	133	高田区整遺跡第3地点	181	茶屋遺跡
38	袋尻遺跡	86	筑紫大道跡	134	和久遺跡	182	山戸遺跡
39	梶山城	87	明神山墳丘墓群	135	上伊勢古墳	183	南山戸遺跡
40	市場遺跡	88	福田八軒屋遺跡	136	打越奥山窯跡群	184	丁薬司古墳
41	市場W遺跡	89	福田天神遺跡	137	西奥谷窯跡	185	丁山頂古墳
42	南山1号墓	90	福田片岡遺跡	138	鶏足寺跡	186	丁古墳群
43	南山2号墓	91	春日神社遺跡	139	無奥谷窯跡	187	勝山町古墳群
44	南山賀茂神社裏山古墳群	92	樋ノ上遺跡	140	大谷窯跡	188	山戸4号墳
45	権現山古墳群・梶山古墳群	93	馬場遺跡	141	藤谷窯跡	189	山戸古墳群
46	権現山14号墳	94	城山遺跡	142	大谷山古墳	190	則直1号墳
47	権現山50号墳	95	平方宮ノ本遺跡	143	峰相口窯跡群	191	則直2号墳

のである。また、中井鴨池窯跡（66）では中井古墳群に須恵器を供給している。

古代

律令国家の成立と前後して、寺院の建立・地方官衙・官道等の整備がおこなわれていく。当地域は播磨国揖保郡に当たり、「播磨国風土記」には一八里、「和名抄」には一九郷が掲載されている。

白鳳時代に遡る寺院跡としては下太田廃寺（178）がある。全面的な調査はおこなわれていないが、塔心礎・礎石群が現存しており、法起寺式伽藍配置と考えられている。7世紀後葉から8世紀後半にあたる第Ⅰ期は軒丸瓦には鋸歯文縁複弁八葉蓮華文・素弁十葉蓮華文、軒平瓦には忍冬唐草文が使用されている。第Ⅱ期は長坂寺式・野条寺式といった播磨国府系瓦が使用されている。「播磨風土記」大田里条に呉勝を祖とする渡来人集団が摂津国島上郡から揖保郡へ移住したという記事があり、茨木市大田廃寺でも第1期と同系の瓦が出土している点が注目される。この他にも山陽道に沿って西脇廃寺（71）、中井廃寺（64）等、古代美作道（24）に面して奥村廃寺（22）が建立されている。奥村廃寺は金堂と東西の塔が直線に並ぶ特異な伽藍配置を持ち、創建時に軒丸瓦は複弁八葉蓮華文・軒平瓦には忍冬唐草文を用い、続いて国分寺式瓦を採用している。また、中世末まで法灯を保つ鶏足寺跡（138）からも下太田廃寺・奥村廃寺等と同時期の瓦が見つかっている。法隆寺の別院として創建された斑鳩寺（105）は、創建時期については明らかではなかったが、平安時代後期に遡る可能性が指摘されている。

官衙関係の遺跡では古代山陽道（29）の太市駅と推定される向山遺跡（72）がある。布勢駅推定地である小犬丸遺跡ほど調査は進んでいないが、国府系の瓦である長坂寺式軒丸瓦・軒平瓦、古大内式軒丸瓦が出土している。一般の集落遺跡については、亀田遺跡で規格性の高い掘立柱建物が多数検出されいる他、やや時期は下るものの坊主山遺跡で墨書土器が出土している。

これらの寺院・駅館に瓦を供給し、同時に播磨国の貢納物であった須恵器を生産した窯跡は前項で述べた峰相山を中心とする地区の古墳時代窯跡群と重なるように分布する。打越奥山窯跡群（136）・西奥谷窯跡（137）・無奥谷窯跡（139）・藤谷窯跡（141）・峰相口窯跡群（143）・赤坂窯跡群（145）等が8世紀代から操業を開始するものである。少し離れるが上伊勢1号窯跡（54）も峰相山周辺の窯跡と連動するものかもしれない。前述の窯跡は当初は須恵器を中心とし、赤坂1号窯跡をはじめとして瓦陶兼業窯も認められる。瓦専業窯はあまり認められないが、現在のところ殿清水窯跡（150）・上伊勢2号窯跡（55）が知られている。やや時期は下るものの、中井瓦窯はロストル式の平窯で中井廃寺に瓦を供給したことがわかっている。

中世～近世

前節でも述べたように、古代末から中世にかけて、この地域は段丘面の安定した地域を中心に荘園としての開発が進んでいく。揖保川下流域の初期の荘園には林田荘・大田荘・鵤荘・福井荘・大江島荘・網干荘・桑原荘・布施荘・小犬丸保があり、やや遅れて小宅荘・弘山荘などが成立する。なかでも11世紀初頭には成立していた大和法隆寺領鵤庄は文書・絵図などの資料が豊富に残ることもあり、中世荘園を語る上で欠かせないものとなっている。考古学的に見ても福田天神遺跡では中世の屋敷と考えられる掘立柱建物・土坑墓、条理割に一致する溝が検出され、土坑墓には舶載された磁器類が副葬されていた。福田片岡遺跡では当時の灌漑水路の一部が見つかっており、当時の景観を考える上で重要な資料となっている。そして、春日神社遺跡（91）では鵤荘絵図に描かれた春日社跡にあたり、神社の基壇と思われる列石が検出されている。また、平方遺跡では鎌倉期の軍用道路である筑紫大道と思われる遺構も発見され、樋ノ上遺跡（92）で平安から鎌倉時代の集落が検出されている。小宅荘・弘山荘に関連するもの

としては宮脇遺跡（31）で条里地割に一致する掘立柱建物群・溝等の遺構が確認されている。中世播磨の地誌である『峰相記』には寺院関係の記述も多いが、遺跡として確認できるものは少ない。中世の寺院跡としては斑鳩寺に関連する円勝寺跡（79）・願成寺跡（81）が知られ、円勝寺周辺には笹山経塚があり、出土した経筒が斑鳩寺に伝えられている。

この地域は赤松氏の本拠地に近いこともあり、『播磨鑑』・『揖保郡地誌』等の地誌類には赤松氏関連の城館についての記載が多く認められるが、事実関係には不明な点が多い。嘉吉年間・弘安年間に築城されたとする鵤構居（106）石蜘蛛城（116）矢田部城（121）等は現在のところその遺構は確認されておらず、室町期にさかのぼるとされる柴摺城（7）・楯岩城（159）・梶山城（39）・朝日山城（126）についても、縄張や石垣が認められるものの、実体に不明な点が多い。龍野城（9・10）は15世紀末に築城され、山上に郭・堀・土塁等の一部が残るとともに、江戸時代初期に麓に移り、中世城郭から近世城郭への変遷が看取できる例である。

幕藩体制の成立以後、この地域は姫路藩・龍野藩・林田藩に分割して統治されることとなる。この時期の遺跡は、現在の集落と重複していることもあり、調査例がほとんどない。林田藩陣屋跡（16）、斑鳩寺遺跡で近世遺構が調査された程度であり、今後の調査が待たれている。

参考文献

今里幾次　「龍野市奥村廃寺の古瓦」『奥村廃寺』龍野市教育委員会（1997）
岸本道昭　「断絶の中期と後期－西播磨弥生社会の理解のために－」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』第３号（1995）
岸本道昭　（播磨地域史研究会）「播磨の前方後円墳研究序説－測量調査と集成による基礎作業－」『播磨学紀要』第６号（2000）
後藤博弥・田中眞吾　「龍野市とその周辺の地質図の説明」『龍野市史』第４巻（1984）
後藤博弥・田中眞吾　「太子町の地形・地質図とその説明」『太子町史』第３巻（1989）
高橋　学　「丁・柳ヶ瀬遺跡の地形環境」『丁・柳ヶ瀬遺跡』兵庫県教育委員会（1995）
永井信弘　「播磨における古墳時代須恵器の変遷」『小谷遺跡（第６次）』加西市教育委員会（1995）
松本政信・中溝康則・今里幾次　「考古学から見た太子町」『太子町史』第３巻（1989）
兵庫県教育委員会『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』（1982）
兵庫県教育委員会『丁・柳ヶ瀬遺跡』（1995）
兵庫県教育委員会『宮脇遺跡発掘調査報告』（1995）
兵庫県教育委員会『西脇古墳群』（1995）
兵庫県教育委員会『兵庫県遺跡地図』第１・２分冊（2000）
太子町教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告Ⅰ』（1988）
太子町教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告Ⅱ』（1989）
太子町教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告Ⅲ』（1990）
太子町教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告Ⅳ』（1991）
太子町教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告Ⅵ』（1994）
太子町史編集専門委員会編『太子町史』第１巻（1996）
龍野市教育委員会『播磨国鵤荘現況調査報告Ⅴ』（1993）
「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川日本地名大辞典23　兵庫県』（1988）角川書店
今井林太郎監修『日本歴史地名大系29Ⅱ　兵庫県の地名Ⅱ』（1999）平凡社

第３章　確認調査および遺跡の基本層序

第１節　確認調査の概要

亀田遺跡における確認調査は、平成３年９月及び平成４年５月、そして平成５年１月の３度に渡っておこなった。この内、平成４年度に実施したインターチェンジ部分の確認調査は、調査対称総面積約30,000㎡の非常に広範囲なものとなった。確認調査では、既存の太子竜野バイパスを中心として南側をNo.Ⅰ地点、北側をNo.Ⅱ地点と呼称し、当初No.Ⅰ地点に９箇所、No.Ⅱ地点に８箇所のトレンチ調査を計画したが、現地の地形の状況などから、最終的にNo.Ⅰ・No.Ⅱ地点共に各12箇所のトレンチ調査を実施した。

亀田遺跡No.Ⅱ地点では、最高延長150mのトレンチを東西に配し、延長10～20mのトレンチ溝を掘削した。その結果、トレンチNo.T11・T12・T14・T23を除く８箇所のトレンチについては、弥生時代中期の竪穴住居跡や土坑、古墳時代から中世と考えられる柱穴・溝・流路を検出した。また、トレンチNo.T22では弥生時代中期後半の埋設土器（ST02）を検出し、トレンチNo.T10の西側では７世紀後半の須恵器を共伴する長胴甕の埋設土器（ST04）を検出した。

亀田遺跡No.Ⅰ地点では、第No.Ⅱ地点と同様に最高延長150mのトレンチを東西に配し、延長５～20mを主体とするトレンチ溝を掘削した。その結果、全てのトレンチにおいて弥生時代から中世にかけての溝・土坑・柱穴等の遺構を確認した。トレンチNo.T１では、竪穴住居跡等の弥生時代中期に属する遺構も検出した。また、トレンチNo.T１西側とトレンチNo.T18に堆積する黒色シルト層からは、多量の弥生土器を主体に、木製品等も出土した。

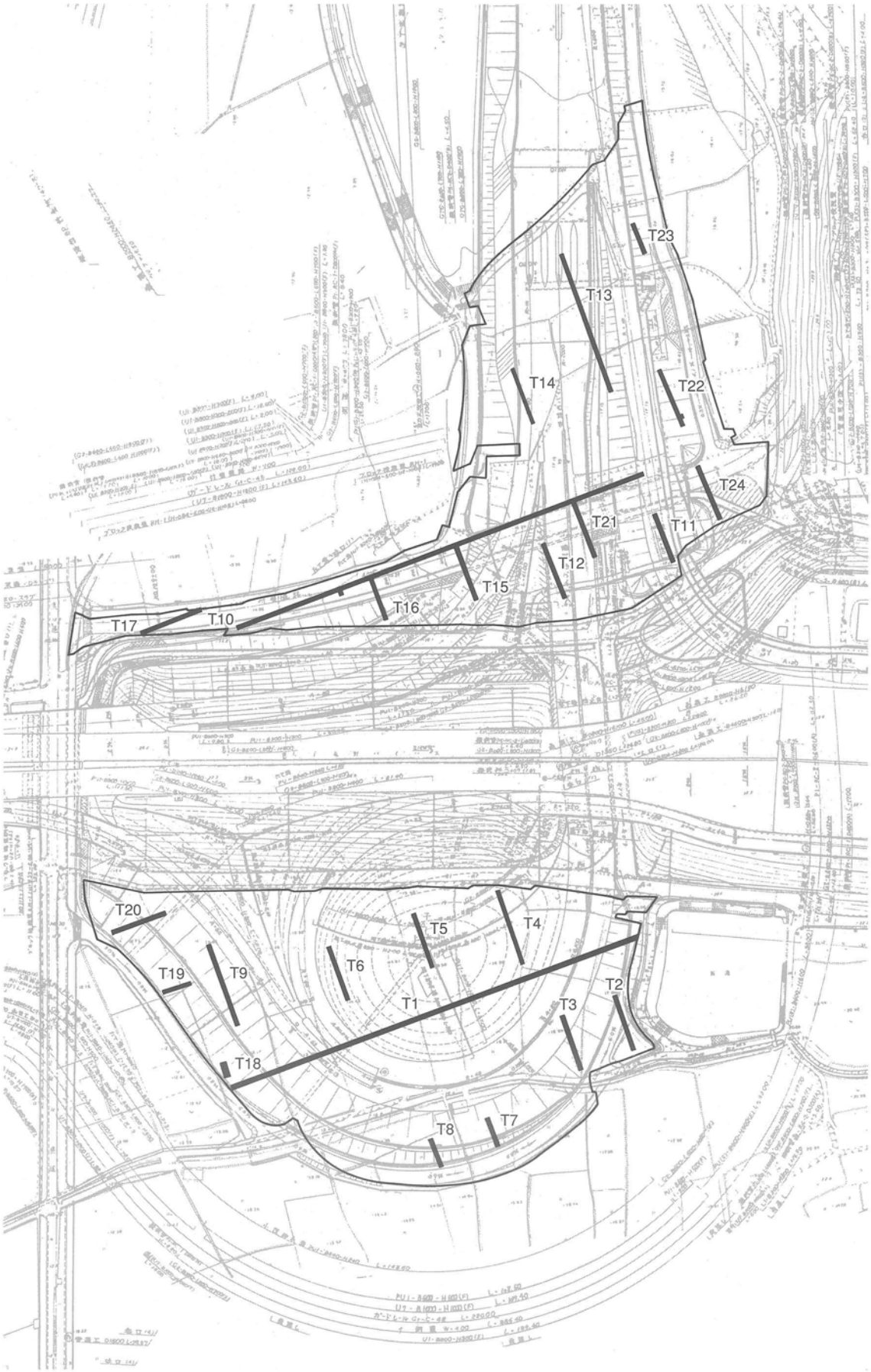
第２節　No.Ⅱ地点の基本層序

No.Ⅱ地点の基本層序は、調査区壁面の３箇所について土層堆積状況図「第１分冊（図版３）」で示している。遺跡は東側の山塊から大津茂川へ向かって広がる扇状地上をベースとして形成される。ベースは、シルト質砂を主体として、洪水等の土石流による礫混じり堆積もその一部を成している。

No.Ⅱ地点における基本的な堆積状況は、ベース上に弥生時代から古墳時代の遺物包含層（以下包含層１）が堆積し、部分的に間層を挟んで奈良時代から中世の遺物包含層（以下包含層２）が堆積するといったものである。しかし、包含層は、洪水等による流失や、中世以降の耕作及びそれに伴う造成等により大きく削平されており、その残存も部分的である。

調査区東側を南北に切る断面（C－C'）では、南側の高い部分に包含層１（６層・11層）と包含層２（５層）が比較的良好な状況で残るが、北側へは比高約４mを測る谷地形上では残存しておらず、洪水等による包含層の流失が考えられる。また、No.T23では、シルトの厚い堆積下に遺構・遺物を検出していないため、集落域の北限を想定できた。

調査区中央を南北に切る断面（B－B'）では、北側の谷へ緩やかに落ちていく比較的平坦な地形で、東西方向へ延びる谷状の微地形部分に包含層１（９層・13層）と包含層２（４層・11層）が堆積しており、やや高い部分は耕作により削平されている。断面南側では、中世包含層堆積下で東西方向に走る流路を検出しており、谷状の自然地形に沿った流路である。この付近のNo.T15では、風字硯や須恵器碗等



第８図　亀田遺跡トレンチ配置図

の奈良時代から中世の遺物が出土している。また、北側では古墳時代の竪穴住居跡及び掘立柱建物跡等、ピット群を検出しており、同時代の遺構の集中が想定される。

調査区中央から西側へ向けてを東西に切る断面（A－A'）は、大津茂川の堆積と大津茂川へ向かって延びる扇状地が形成する沖積地で、ベース層（11層）上に包含層１（10層・17層）と包含層２（４層・12層）が堆積し、特に西側では包含層２が良好な堆積状況を示している。しかし、No.T17では遺構があまり検出されていない事から、集落の西限と考えられる。

第３節　No.Ⅰ地点の基本層序

No.Ⅰ地点の基本層序は、調査区北側壁面の１箇所について土層堆積状況図「第２分冊（図版４）」で示している。遺跡の立地条件は、No.Ⅱ地点と同様である。また、包含層等の基本的な堆積状況についても、ほぼ同様の状況を示している。

断面は、山側のCから大津茂川側のAに向かって緩やかに下っている。調査区の山側にあたる断面東半部（C－B）は、包含層１（８層・15層・18層）と包含層２（16層・17層）が堆積するが、包含層の連続性が見られない。これは、No.T１の東側やNo.T２・T３・T４においてあまり遺構が検出されていない事から、削平による影響が大きかったことが推測できる。

逆に、大津茂川へ延びる断面西半部（B－A）では、包含層１（25層・28層・30層・32層）と包含層２（22層・27層・31層）が比較的安定した堆積状況を示しており、No.T１の中央から東側やNo.T５では遺構を多く検出している。また、同断面西側では、古墳時代の土器を伴う２本の流路が見られるが、No.T１西端やNo.T18・T19の厚いシルト状堆積からも、旧河道あるいは流路が南北に延びている事が分かると共に、居住域の西の境界を示すものと考えられる。

さらに、No.T２・T３・T７・T８では、柱穴よりも溝あるいは流路の掘り方等を主に検出しており、出土遺物も古墳時代以降の奈良時代から中世の遺物が比較的多く出土している事から、溝状の遺構が集中すること、奈良時代から中世の遺構がこの周辺に集中する事を示唆した。

第９図　確認調査風景

第４章　No.Ⅱ地点の遺構

第１節　No.Ⅱ地点の概要

太子竜野バイパスの北側にあたる。溜池「瓢箪池」からバイパス料金所までの部分（Ａ～Ｄ区）、ならびに県道石倉太子線からバイパス北に沿ってのびる細長い部分（Ｅ区）を調査した。

調査範囲は大津茂川の左岸段丘上にあたり、東は城山山塊の丘陵、西は大津茂川の沖積地に連なる。地形は東から西へ傾斜し、標高において４～５ｍの比高差があった。この状況を反映して、調査前には斜面を階段状に造成した水田が設けられていた。この地形改変は、遺跡の遺存状態にも大きな影響を与えている。削平が顕著な箇所では、遺構面そのものが消滅して、帯状の空白地帯となっている。

調査範囲の北側は、城山と馬山の丘陵地が幅200ｍで近接した、狭隘な谷地形である。このため谷の開口部分にあたる調査区付近は、大津茂川の氾濫の影響を受けやすい場所といえよう。Ｅ区の西端では、大津茂川旧河道の一部が検出され、奈良時代の橋脚が検出された。また河道の氾濫に起因する流路の痕跡を、数箇所で確認した。

包含層は、地形改変の影響で消滅した部分が多い。含まれていた遺物には、旧石器や縄文時代後期の土器も見られるが、遺構を伴う時期としては弥生中期後半がもっとも遡る。以後、数回の断絶を挟みつつ、中世にかけて継続する集落跡と判明した。遺構面は基本的に１面で、複数時期の遺構をすべて同一面で検出した。検出遺構の中心を占めるものは、竪穴住居跡・掘立柱建物跡である。このほかに井戸・土坑・ピットなどが検出された。

竪穴住居跡は33棟を検出した。削平により周壁のほとんどを失うものが多い。弥生時代と古墳時代に属するものに大別され、平面形状も円形と方形に分かれる。円形住居跡では、焼失による炭化材を内包するもの、１～２回の拡張を施したものがある。また方形住居跡は造り付けカマドを有するものが１棟見られた。

掘立柱建物跡は65棟認識した。柱穴内に遺物が見られず、時期決定の証左を欠くものも多い。おおむね、古墳・奈良～平安・中世の時期に該当する。規模・配置にはバラツキが顕著である。

土坑には、内部から完形または遺存状態の良い土器が出土したものがある。性格を示す状態が得られたものは少ないが、土器を棺として使用した可能性の高いものが含まれている。また、墓として確実な遺構として、奈良～平安時代の火葬墓が１基存在する。

遺構や包含層の遺存状況は良好といえなかったが、出土遺物は多い。弥生から中世にかけての土器が中心を占め、なかでも弥生時代中～後期の土器が他の時期を凌駕する。当該時期における亀田遺跡の位置付けを示唆するものであろう。

古墳時代以降は、多少遺物量は減少するものの、奈良・平安～中世にかけて数多くの土器が出土した。須恵器・土師器のほか、緑釉・灰釉・輸入陶磁器などがある。

このほか、石器（石庖丁・磨製石斧・石鏃など）、木製品（舟形木製品・部材など）、鉄製品（鉄斧・鉄鏃・釘など）、玉類などが出土した。特筆すべき遺物として、銅剣型石剣と分銅形土製品２点がある。分銅形土製品のうち一点は、表面に目・口を作り出し、裏面には祭文の線刻と赤色顔料の塗布がみられた。

第２節　竪穴住居

SH01（図版5　写真図版9）

検出状況　調査区の南部に位置し、東5mにSH02がある。他の住居跡とは切り合い関係を持たない。

規模・形態　平面は円形を呈する。周壁溝のプランから復元すれば、南北方向がわずかに長い。東西軸の長さは4.56m、南北軸は良好に遺存する箇所がないため北東ー南西方向の長さで4.68m、わずかに遺存する東側の周壁部分が最大深度となり、10cmを測る。床面は緩やかな傾斜を持つが、比較的遺存状態のよい東半部の状況から、本来は平坦と考えられる。貼り床などは確認できなかった。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　1条を検出した。東半はほぼ全周、削平の著しい西半では消失・断絶が著しい。床面における幅は東部で23cm、深さ8cmをそれぞれ測る。

中央土坑　中央からやや西寄りに位置する。東西に長い楕円形を呈し、各部位の規模は長軸62cm、短軸58cm、中央部での深さ28cmをそれぞれ測る。単独で存在し、排水溝などの付属施設は見られない。

柱穴　主柱穴は5基で構成され、南北方向に長い五角形をなす。平均の柱間距離は2.15mである。各柱穴の平面は円形、径・深さは、P1：34cm・11cm、P2：28cm・9cm、P3：36cm・10cm、P4：40cm・15cm、P5：42cm・13cmをそれぞれ測る。柱根および柱痕跡の遺存するものはない。

出土遺物　埋土内からの遺物出土はなかった。

SH02（図版11　写真図版9）

検出状況　西南隅を後世の地形改変により削平されているが、ほぼ住居跡全体を検出した。北側に隣接するSH03に切られている。

規模・形態　平面は隅円方形を呈し、東西幅5.20m、南北幅5.38mである。

埋土　（10YR4/2灰黄褐色極細砂礫混じり）

屋内施設　周壁溝・中央土坑・排水溝・柱穴を検出した。

中央土坑　「10型土坑」を中央部で検出した。東側に位置する土坑1の平面形は長楕円形を呈し、長径168cm、短径35cmである。また床面からの深さは10cmである。埋土には炭を多く含んでいる。北側に位置する土坑0の平面形は楕円形を呈し、長径86cm、短径74cmである。また床面からの深さは46cmである。

柱穴　総数39基を検出したが、このうち主柱穴と考えられるものは4基である。平均主柱穴間距離は2.88mを測る。P1は掘り方径32cm、床面からの深さ12cm、P2は掘り方径28cm、床面からの深さ15cm、P3は掘り方径35cm、床面からの深さ28cm、P4は掘り方径27cm、床面からの深さ37cmを測る。

排水溝　中央土坑の土坑0からやや離れた位置から、西側へ向かって延びているが、住居跡の外側にまでは検出できなかった。長さ164cm、幅20cm、深さは6cmである。

出土遺物　弥生土器が出土している。そのうち壺（16）を図化した。

SH03（図版6　写真図版9）

検出状況　西端を後世の地形改変により削平されている。南側に隣接するSH02を切っている。周壁溝の検出状況から、2度の建て替えがおこなわれたことがうかがわれる。

規模・形態　平面は円形を呈し、直径8.4mである。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　住居跡の遺存するところでは、全周している。内側のもので床面での幅12～20cm、床面からの深さ約10cm、外側のもので床面での幅8～30cm、床面からの深さ12cmである。

中央土坑　中央部で検出した。周囲に土を盛り上げて堤状の高まりを構築している。土坑から北西方向に小溝がとりつくが、その性格は明らかでない。土坑の平面形はほぼ円形を呈し、直径85cm、また床面からの深さは60cmである。

柱穴　総数56基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは6基である。平均主柱穴間距離は2.76mを測る。P1は掘り方径40cm、床面からの深さ33cm、P2は掘り方径27cm、床面からの深さ27.8cm、P3は掘り方径25cm、床面からの深さ17cm、P4は掘り方径32cm、床面からの深さ20cm、P5は掘り方径20cm、床面からの深さ10cm、P6は掘り方径25cm、床面からの深さ27.5cmを測る。

出土遺物　埋土中から多量の土器片、サヌカイトチップなどが出土しているが、後世の遺物の混入も多い。住居に確実に伴うと考えられるものは、中央土坑から出土した壺（18）・鉢（19）、周壁溝から出土した鉢（17）がある。

SH04（図版7　写真図版10）

検出状況　調査区内の中央から南西寄りに位置し、南東13mにはSH03がある。他の住居跡との切り合いは認められない。

規模・形態　周壁自体はほとんど消失しているが、円形の住居跡と考えられる。特に南西部では大きく削平を受け、周壁溝も消失している。周壁溝の円弧から復元して、南北方向の長さ2.23m、東西方向の長さ2.34mの楕円形気味になる。床面までの深さは、良好に遺存する箇所でも10cmに満たない。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　3条を検出した。最も外側の溝は、東～南部の半周近くまで痕跡をたどることができる。内側の2条は断絶が著しく、全容は把握しがたい。外と内の溝は幅30cm前後を測る。最深部における深さは、外側が20cm、内側が8cmであった。中央の溝は規模が小さく、幅15cm・深さ8cmを測る。3条が並列する箇所もあるが、前後関係は判断できなかった。

柱穴　床面からは45基のピットを検出したが、規模・配列ともに規則性がなく、明確に主柱穴を比定できなかった。

出土遺物　外の周壁溝から、弥生土器の高杯（20）が出土した。床面から周壁溝に向けて落ち込み、脚部が折れた形で検出された。

また至近で炭化材が出土している。周壁溝の検出面に横たわり、埋没する直前に入り込んだ状況であった。

SH05（図版17　写真図版11）

検出状況　西側の大半部分を後世の地形改変により削平されており、周壁溝がわずかに残存する。

規模・形態　平面は円形であったと考えられる。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　住居跡の遺存するところでは、後世のピットに切られた箇所をのぞけば、全周している。床面での幅22～30cm、床面からの深さ約7.2cmである。

柱穴　総数4基を検出したが、主柱穴を判別するのは困難であった。ピットの掘り方は径18～25cm、床面からの深さ9～27cmを測る。

出土遺物　土器片がわずかに出土している。

SH06（図版8　写真図版11）

検出状況　調査区内の中央からやや南西寄りに位置する。南東10mにはSH05があるが、他の住居跡との切り合いは認められない。

規模・形態　周壁は完全に消失していることから、周壁溝のプランによって住居の形・規模を判断した。平面は円形、南北方向の長さ7.08mに対して、東西方向の長さは7.28mでわずかに大きい。検出面ですでに床面が露出し、住居跡に関連する埋土は検出できなかった。床面は東から西への緩やかな傾斜を持つが、周壁溝の消失する箇所と一致し、本来の特徴を示すものではない。また検出面において、貼り床は確認できなかった。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　部分的に2条を検出したが遺存状態は悪く、本来のプランは不明。外側の溝は東半部を半周し、内側の溝は北東周辺で検出された。いずれも西半部が削平によって消失する。規模は一致しており、最も良好に遺存する部分では幅20cm、深さ5cmを測る。

中央土坑　住居跡のほぼ中央に位置する。平面は南北に長い楕円形を呈する。北寄りの部分が最も深く、断面は逆台形に近い。長軸は210cm、短軸は157cm、最深部の深さ28cmをそれぞれ測る。排水溝などの付属施設は認められない。埋土は茶褐色シルト質細砂の単層で構成され、炭化物や焼土の堆積は見られなかった。床面からは、杯部を伏せた高杯と、内面を上に向けた壺の底部が検出された。

柱穴　主柱穴と考えられるものは6基で、平面は円形を呈する。平均の柱間距離は2.55m、整美な六角形で配置される。各主柱穴の径・深さは、P1：30cm・20cm、P2：40cm・18cm、P3：50cm・8cm、P4：40cm・13cm、P5：38cm・19cm、P6：25cm・22cmをそれぞれ測る。柱根および痕跡を残すものはなかった。

出土遺物　中央土坑から出土した壺（21）底部と高杯（22）のほか、埋土にも弥生土器が数点含まれていた。ただし、細片化して図化できなかった。

SH07（図版18　写真図版12）

検出状況　流路の南岸、調査区南端に位置する。著しく削平を受けており、周溝の一部と、中央土坑と考えられる土坑を検出した。

規模・形態　平面形態はその全容を類推する材料に欠けるため判断できない。規模は9.5mに復元できる。

屋内施設　周壁溝・中央土坑を検出した。

周壁溝　南端でごく一部が残存している。幅12cm、検出面からの深さ3～5cmを測る。

中央土坑　中央部で検出した。周囲に土を盛り上げて堤状の高まりを構築している。土坑から北西方向に小溝がとりつくが、その性格は明らかでない。土坑の平面形は東西60cm、南北40cmの楕円形で、床面からの深さは20cmである。

柱穴　総数22基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは4基である。平均主柱穴間距離は

2.76mを測る。P1は掘り方径35cm、床面からの深さ24cm、P2は掘り方径38cm、床面からの深さ42cm、P3はやや方形で掘り方43×70cm、床面からの深さ11cm、P4は掘り方径45cm、床面からの深さ18cmを測る。P1－P2間で3.78m、P3－P4間では2.51mである。主柱穴は元来6本あったと考えられる。その配置は中央土坑の両脇にP3・P4を建て、その周囲をP1・P2および検出し得なかった2基が方形に巡っていたと考える。

出土遺物　この住居跡に確実に伴うと考えられる遺物はない。

SH08（図版19　写真図版13）

検出状況　調査区の西端に位置する。ほぼ全体を検出したが、北西隅については調査区外へと続いている。周壁溝の検出状況から、1度建て替えがおこなわれたことがうかがわれる。

規模・形態　平面は円形を呈し、直径8.4mである。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　外側は住居跡の遺存するところでは全周している。床面での幅10～30cm、床面からの深さ約5cmである。内側のものは東辺でのみ検出された。床面での幅10～13cm、床面からの深さ約5cmである。

柱穴　総数10基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは4基である。平均主柱穴間距離は1.80mを測る。P1は掘り方径21cm、床面からの深さ11cm、P2は掘り方径27cm、床面からの深さ35cm、P3は掘り方径27cm、床面からの深さ10cm、P4は掘り方径30cm、床面からの深さ5cmを測る。

出土遺物　住居に伴う遺物は出土していない。

SH09（図版22　写真図版13）

検出状況　調査区北西部分で検出した。SH10に切られている。

規模・形態　平面は方形を呈するものと思われる。東側で一辺3.25mを測る。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　床面での幅8～22cm、床面からの深さ約3cmである。

柱穴　総数5基を検出したが、主柱穴は認定しがたい。掘り方径15～40cm、床面からの深さは最大で32cmを測る。

出土遺物　土師器の壺（229）が出土している。

SH10（図版22　写真図版13）

検出状況　調査区北西部分で検出した。調査区外へと続いている。SH09を切る。周壁溝の検出状況から、1度建て替えがおこなわれたと考えられる。

規模・形態　平面は方形を呈するものと思われる。現存値で最大3.10mあり、元来はそれ以上の規模が見込まれる。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　床面での幅8～22cm、床面からの深さ約3cmである。

柱穴　総数5基を検出したが、主柱穴は認定しがたい。掘り方径15～40cm、床面からの深さは最大で32cmを測る。

出土遺物　土器の細片が出土しているが、図化はしていない。

SH11（図版12　写真図版13）

検出状況　調査区の東部に位置し、東半部は調査区外へと続く。また北部は、SH12に切られて消失する。

規模・形態　平面は円形を呈する。検出した範囲における各部位の規模は、南北方向4.8m、東西方向3.78mである。周壁が消失して、検出面において床面が露出していた。上面は後世の地形改変による影響を受けて、造営当時の状況は完全に失われている。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。また住居の範囲内で方形の土坑を2基検出したが、住居との関連は明らかにできなかった。

周壁溝　南西部において1条検出した。削平による消失や調査区外に続く部分があり、調査できたのは全体の3分の1程度である。床面における幅は30～16cm、深さ9cmを測る。

中央土坑　周壁溝から復元したプランでは、中心よりも北側に偏って位置する。長軸は東西方向で全長115cm、南北方向は68cmを測る。平面は長方形に近い。最深部分は中央部で、検出面からの深さ18cmである。土坑の南側には、長軸と平行で延びる溝が1条ある。東端は調査区外へ続き、検出した範囲の全長182cmである。溝の両肩はほぼ平行、幅34cm・深さ8cmをそれぞれ測る。配置状況から土坑との関連が考えられるが、確実な証左は得られなかった。

柱穴　主柱穴は周壁溝に沿って3基検出できた。柱間距離は180cmで、ほぼ等間隔で配される。いずれも円形で、それぞれの径・深さはP1：37cm・15cm、P2：30cm・17cm、P3：38cm・14cmである。内部から柱根ならびに痕跡の確認されたものはない。

出土遺物　埋土から出土した弥生土器のうち、壷3点（23・24・25）を図化した。

SH12（図版20　写真図版14）

検出状況　調査区の東部に位置し、東半部は調査区外へと延びる。また南部においてSH11を切る。

規模・形態　平面は方形で、西周壁の中央に造り付けのカマドを持つ。東西方向が南周壁付近で4.4mを測り、さらに東へと延びる。南北方向は東周壁付近で4.6m、最深部は南周壁の中央付近で0.18mであった。検出した床面は、ほぼ平坦であった。貼り床などは確認できなかった。

埋土　上下2層の堆積を確認した。いずれも、ほぼ平行の堆積であった。

屋内施設　周壁溝・カマド・柱穴を検出した。

周壁溝　周壁にそって1条検出した。カマドの焚口部分で途切れているほかは、周壁の直下に設けられる。幅は25cm前後、床面からの深さは5～8cmである。

カマド　わずかにハの字をなす両袖を有する。袖は土を積み上げて構築され、内部から芯材などは認められなかった。カマドには焼土ならびに炭化物の堆積が顕著で、焚口付近の床面及び袖の内壁が被熱によって赤化している。煙道部は周壁よりも外へ続くが、削平を受けているため、上端の状況については不明。

柱穴　検出した範囲内で、床面からは6基の柱穴を検出した。規模・配置がばらつき、いずれが主柱穴か認定しがたい。各柱穴の形状は円形、規模は直径が42～26cm、深さは35～19cmを測る。

出土遺物　埋土から、図化のできる遺物は出土しなかった。

SH13（図版21　写真図版15）

検出状況　調査区の東部に位置する。西部において切り合い関係が生じ、SH14を切る。

規模・形態　平面は方形を呈する。南北方向の長さは6.2m、東西方向は5.6m、床面積は24.7㎡である。検出面が北に向かって削平を受けている影響から、最深部は南東隅付近で0.21mを測る。床面は凹凸が少ない。貼り床の存在については確認できなかった。

埋土　住居の埋土は茶褐色シルト～シルト質細砂だが、北部では遺存していなかった。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　周壁に沿って方形にめぐる。検出したのは1条で、北壁の中央付近で幅0.25mの途切れ部分がある。幅は多少の差異を認めるものの15～20cm、床面からの深さは0.5cm前後をそれぞれ測る。

柱穴　主柱穴の数は4本である。周壁溝の平面とは若干軸を異にするが、四隅に配される。柱間距離は長軸側が3.6m、短軸側が2.5mを測る。平面形は円形で、径・深さはP1：38cm・5cm、P2：76cm・22cm、P3：75cm・30cm、P4：78cm・36cmである。柱根および痕跡の確認できたものはない。

出土遺物　埋土中から、須恵器·土師器が数点出土している。そのうち須恵器の蓋（211・212）と杯（213）が図化できた。

SH14（図版9　写真図版15・16）

検出状況　調査区の東部に位置する。東部をSH13に切られる。西部を攪乱で、北部は削平によってそれぞれ消失する。検出段階では床面の南半部から多量の炭化材が検出された。また床面が赤化して火を受けた痕跡が明瞭に認められ、焼失によって廃絶したことがわかる。

炭化材は、外周壁から中央に向けて放射線状に検出され、屋根を支える梁材と考えられる。炭化材の下からは土器が数点出土した。

規模・形態　平面は円形を呈する。削平などの影響で、全容の規模を把握できる部位はない。検出した範囲での、南北方向7.96m、東西方向7.04mである。周壁は南側を除いてほぼ消失している。南側の良好に遺存する部位では、床面までの深さ10cmであった。床面の北西部における緩やかな傾斜は、後世の削平によるものであろう。貼り床は確認できなかった。

なお、周壁溝のプランや切り合い関係、焼失材や焼土の検出状況などから、1回の拡張がなされたと考えられる。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　3条が同心円状に検出された。いずれも遺構面の削平が著しい北側部分で消失している。それぞれの幅・深さは、外側：60cm・5cm、中央：33cm・8cm、内側：22cm・7cmをそれぞれ測る。中央と内側の2条は非常に近接しているが、調査区における切り合いは認められなかった。しかし中央の周壁溝から中央土坑へ取り付く排水溝が、内側の周壁溝を切っているため、内側→中央の順で設けられたことがわかる。廃絶の起因と考えられる炭化材・焼土は、すべて外側の周壁溝より内部で検出されており、この溝が周壁沿いに巡っていたのであろう。また中央の周壁溝からは、落ち込んだ炭化材や焼土を検出したことから、外側の溝と同時期に存在した可能性が高い。

以上を整理すると、当初は内側の周壁溝を外周とする直径5m程度の住居だったものが、直径9m前後に拡張され、焼失をもって廃絶したと考えられる。

中央土坑　周壁から復元される範囲のほぼ中央に位置する。平面は不整の長楕円形を呈する。長軸は

南東－北西方向で150cm、短軸は中央部分で122cm、深さは24cmを測る。長軸を貫く形で排水溝が1条検出され、土坑から南東方向へ延びる溝は、内側の周壁溝を切って中央の周壁溝と連結する。このことから拡張後の住居に伴っているといえるが、拡張前のプランにおいても中央に位置しており、拡張前からすでに機能していた可能性がある。

柱穴　5基で形成される主柱穴が2プラン存在する。北の柱穴（P3）を共有、北東の柱穴（P4・P8）で切り合いが生じている。外側（P1～P5）は、平均の柱間距離2.99mを測る。柱穴の径・深さはP1：45cm・20cm、P2：30cm・20cm、P3：35cm・20cm、P4：40cm・24cm、P5：27cm・21cmである。内側（P6～P9・P3）は、平均の柱間距離が2.26m、各柱穴径・深さはP6：24cm・9cm、P7：23cm・25cm、P8：36cm・20cm、P9：40cm・17cmである。それぞれの主柱穴とも形状は円形、柱根ならびに痕跡の確認されたものはない。

P8がP4に切られ、内側の柱穴列が先行している。またP1やP5が内側の周壁溝を切っているため、内側は拡張前の住居、外側は拡張後の住居にそれぞれ伴うと考えられる。

出土遺物　埋土を中心に多くの土器片が出土している。そのうち図化できたものには、脚付無頸壷（26）、高杯（27）壷（30）、消失した炭化材の下から出土した壷（29）、内側の周壁溝から出土した器台（28）がある。

SH15（図版12　写真図版16）

検出状況　削平を受けており、立ち上がりは全く確認できなかった。SB40、SB41、SD18に切られる。

規模・形態　平面形態はいびつな円形、もしくは隅円方形を呈し、南北5.4m、東西5.25mを測る。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　ほぼ全周している。床面での幅12～21cm、床面からの深さ約12cmである。

中央土坑　中央部で検出した。土坑の平面形は長楕円形で、長軸方向に1.32m、短軸方向に0.72mである。また床面からの深さは10.8cmである。北縁部分は一段深くなっている。

柱穴　総数19基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは4基である。平均主柱穴間距離は2.76mを測る。P1は掘り方径24cm、床面からの深さ21cm、P2は掘り方径25cm、床面からの深さ16.8cm、P3は掘り方径19.2cm、床面からの深さ17.4cm、P4は掘り方径26.4cm、床面からの深さ19cmを測る。平均柱間距離は2.54mを測る。

出土遺物　この住居跡に確実に伴うと考えられる遺物はない。

SH16（図版18　写真図版16）

検出状況　北半部を後世の地形改変により削平されている。SB38に切られる。

規模・形態　平面は方形を呈する。東西方向で3.16mを測る。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　約半周分が検出された。所々を後世のピットに切られている。削平を受けているため、埋土の違いは認められるものの、立ち上がりは顕著に確認できなかった。床面での幅9～20cm、床面からの深さ約6cmである。

柱穴　総数17基を検出したが、確実に主柱穴と判断できるピットは提示できない。掘り方径20～33cm、床面からの深さ19～23cmを測る。

出土遺物　柱穴中から土器の細片が出土している。図化はできなかった。

SH17（図版22　写真図版17）

検出状況　西側の大半部分を後世の地形改変により削平されており、周壁溝がわずかに残存する。

規模・形態　平面は円形であったと考えられる。周壁溝の弧度から判断すれば、本来の規模はかなり大形であったと推察されるが、遺存状況から具体的な数値で規模を復元することは困難である。

屋内施設　周壁溝を検出した。

周壁溝　床面での幅20cm、床面からの深さ約6cmである。

出土遺物　土器片がわずかに出土している。

SH18（図版5　写真図版17）

検出状況　一部削平を受けているが、ほぼ全体を検出した。床面および中央土坑中から炭化材が出土しており、焼失したことがうかがわれる。

規模・形態　平面形は円形に近い隅円方形を呈し、東西方向に3.98m、南北方向に3.99mである。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　南端で、後世のピットに切られているが、ほぼ全周している。床面での幅13～29cm、床面からの深さ約4cmである。

中央土坑　中央部で検出した。土坑の平面形は長方形を呈し、長軸方向で61cm、短軸方向で48cmを測る。また床面からの深さは14cmである。掘り方断面形は皿状を呈する。

柱穴　総数7基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは2基である。主柱穴間距離は1.6mを測る。P1は掘り方径48cm、床面からの深さ25cm、P2は掘り方径43cm、床面からの深さ22cmを測る。

出土遺物　床面直上および中央土坑中から炭化材が出土している。土器片も少なからず出土しているが、図化できたのは弥生土器の甕（31）だけである。

SH19（図版13　写真図版18）

検出状況　調査区北半に位置する。92年度に西半分を93年度に東半分の調査をおこなった。

規模・形態　西側では周壁溝を検出し得てないため全容は不明であるが、平面形はいびつな円形を呈すると推察される。東西方向に6.56m、南北方向に5.84mである。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　東半部で断続的ではあるが、ほぼ半周にわたって検出している。床面での幅8～21cm、床面からの深さ約5cmである。

中央土坑　中央部で検出した。土坑の平面形はいびつな方形を呈し、最大で170cm、狭いところで120cmを測る。また床面からの深さは4cmである。掘り方断面形は皿状を呈する。おそらく本来は中心部に、深く掘り込まれた土坑が存在したことが考えられるが、調査区の境界にあたることもあり、うまく検出できなかった。

柱穴　総数30基を検出したが、積極的に主柱穴と考え得るものは提示できなかった。ピットの掘り方は径14～40cm、床面からの深さで4～18cmの規模である。

出土遺物　弥生土器片が出土している。小形高坏の脚部（32）を図化している。

SH20（図版19　写真図版18）

検出状況　調査区北半に位置し、92年度に西半分を93年度に東半分の調査をおこなった。

規模・形態　平面は方形を呈する。南北方向で4.52m、東西方向で4.36mを測る。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　後世のピットに切られているため断続的に検出した。南東および南西隅では遺存状況が悪く検出できなかった。床面での幅16～26cm、床面からの深さ約6.6cmである。

柱穴　総数16基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは3基である。元来、主柱穴は4本であったと想定している。平均主柱穴間距離は1.72mを測る。P1は掘り方径23cm、床面からの深さ40cm、P2は掘り方径25cm、床面からの深さ6.5cm、P3は掘り方径20cm、床面からの深さ5cmを測る。

出土遺物　わずかに土器の細片が出土しただけで、図化できなかった。

SH21（図版10　写真図版19）

検出状況　調査区北半に位置する。92年度に西半分を93年度に東半分の調査をおこなった。各年度の調査成果をつきあわせるにあたって、周壁溝については多少の齟齬が生じたため、93年度調査を元に整合を図ったことを断っておく。

建て替えは少なくとも1度おこなわれている。

規模・形態　平面は円形を呈し、外側で直径7.0～7.2m、内側で直径5.7～5.9mである。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴・排水溝を検出した。

周壁溝　住居跡の遺存するところでは、全周している。床面での幅10～32cm、床面からの深さ約9cmである。

中央土坑　中央部で2基検出した。

土坑1　平面形は楕円形を呈し、長軸方向で76cm、短軸方向で58cm、床面からの深さ17cmを測る。

土坑2　土坑の平面形はほぼ円形を呈し、直径69～74cm、また床面からの深さは17cmである。下層には炭を多く含んでいる。

柱穴　検出したピットのうち、主柱穴と考え得るものは6基である。平均主柱穴間距離は2.76mを測る。P1は掘り方径30cm、床面からの深さ5cm、P2は掘り方径24cm、床面からの深さ24cm、P3は掘り方径35cm、床面からの深さ24cm、P4は掘り方径31cm、床面からの深さ16cmを測る。

排水溝　土坑2から北へ向かって住居の外へ約30cmのびる。検出面で幅15～21cm、深さ9cmをはかる。

出土遺物　弥生土器片が出土している。脚付きの無頸壺（34）を図化した。

SH22（図版14　写真図版20・21）

検出状況　2つの地区にまたがっているため、住居跡中央の南北にわたって側溝によって削平されている。他の遺構との切り合いはない。周壁溝の検出状況から、1度の建て替えがおこなわれ、拡張されたことがうかがわれる。床面では炭化した垂木材や焼土などが部分的に検出されていることから焼失したものと考えられる。

規模・形態　平面は円形を呈する。直径は当初で7.64m、建て替え時で8.52mである。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・排水溝・柱穴を検出した。

中央土坑　中央部で検出した。「10型土坑」と考えられるが検出できたのは南側に位置する土坑1のみ

である。土坑1の平面形は長楕円形を呈し、長径203cm、短径53cmである。また床面からの深さは12cmである。埋土には炭を多く含んでいる。

排水溝　住居跡を東西に横切って検出され、少なくとも西側は住居外へ延びている。幅は17～25cm、深さは12cmである。中央土坑の土坑0に取り付いていたものと推測される。

柱穴　総数34基を検出したが、このうち主柱穴は2組8基を考えることができる。P1～5は6本柱の主柱穴と考えられる。平均主柱穴間距離は3.30mを測る。P1は掘り方径30cm、床面からの深さ7cm、P2は掘り方径30cm、床面からの深さ41cm、P3は掘り方径45cm、床面からの深さ43cm、P4は掘り方径35cm、床面からの深さ29cm、P5は掘り方径30cm、床面からの深さ34cmを測る。P6～8は4本柱の主柱穴と考えられる。平均主柱穴間距離は3.68mを測る。P6は掘り方径46cm、P7は掘り方径32cm、床面からの深さ9cm、P8は掘り方径25cm、床面からの深さ26cmを測る。

出土遺物　弥生土器が出土している。そのうち高杯（35,39,40）、無頸壺（36）、甕（37,38）を図化した。

SH23（図版15　写真図版22）

検出状況　住居跡の北側２／３を検出した。ほぼ床面まで削平されている。

規模・形態　平面はややいびつな円形を呈し、直径7.8mである。

埋土　埋土は10YR2/3黒褐色極細砂である。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

中央土坑　「10型土坑」を中央部で検出した。南側に位置する土坑１の平面形は長楕円形を呈し、長径190cm、短径60cmである。また床面からの深さは14cmである。埋土には炭を多く含んでいる。北側に位置する土坑０の平面形は楕円形を呈し、二段掘りになっている。長径180cm、短径100cmである。埋土の下層は10YR2/1黒色シルト質極細砂で、炭化物を多く含んでいる。中央土坑の東西両脇にはピットが設けられている。東側のピットは直径30cm、深さ10cm、西側のピットは直径30cm、深さ5cmである。

柱穴　検出したピットのうち主柱穴と考えられるものは３基である。平均主柱穴間距離は4.0mを測る。P1は掘り方径40cm、床面からの深さ24cm、P2は掘り方径30cm、床面からの深さ18cm、P3は掘り方径30cm、床面からの深さ26cmを測る。

出土遺物　中央土坑からほぼ完形の高杯（42）が出土している。このほか高坏（41）、甕（43）を図化した。

SH24（図版16　写真図版22・23）

検出状況　住居跡全体を検出した。残存深は約40cmと比較的深い。

規模・形態　平面は円形を呈し、直径5.7mである。

埋土　（上層10YR5/2灰黄褐色極細砂粗砂混じり、下層10YR5/6黄褐色極細砂粗砂混じり）

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

中央土坑　「10型土坑」を中央部で検出した。土坑は全体的に浅く窪んでおり、さらに土坑1、土坑0の部分が深く窪んでいる。南側に位置する土坑1の平面形は長楕円形を呈し、長径156cm、短径47cmである。また床面からの深さは16cmである。埋土には炭を多く含んでいる。北側に位置する土坑0の平面形は楕円形を呈し、長径72cm、短径60cmである。埋土は（10YR2/1黒色極細砂質シルト）。

中央土坑の東西両脇にはピットが設けられている。東側のピットは直径25cm、深さ15cm、西側のピットは直径25cm、深さ15cmである。

柱穴　総数22基を検出したが、このうち主柱穴と考えられるものは4基である。平均主柱穴間距離は2.80mを測る。P1は掘り方径37cm、床面からの深さ25cm、P2は掘り方径43cm、床面からの深さ35cm、P3は掘り方径38cm、床面からの深さ26cm、P4は掘り方径32cm、床面からの深さ55cmを測る。

出土遺物　弥生土器が出土している。そのうち台付き鉢（45）、壺（46）を図化した。

SH25（図版17　写真図版23・24）

検出状況　住居跡の南端部は調査区外である。

規模・形態　平面は隅円方形を呈する。東西幅は5.04m、南北幅は4.42m以上である。

埋土　（7.5YR4/1褐灰色極細砂細砂混じり）

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴・焼土を検出した。

中央土坑　中央部で検出した。土坑の平面形はほぼ円形を呈し、2段掘りになっている。直径は104cm、床面からの深さは43cmである。埋土は（7.5YR3/2黒褐色シルト質極細砂）。中央土坑の東西両脇にはピットが設けられている。東側のピットは直径21cm、深さ16cm、西側のピットは直径26cm、深さ18cmである。

柱穴　総数23基を検出したが、このうち主柱穴は4本柱のうち3基を検出した。平均主柱穴間距離は3.16mを測る。P1は掘り方径27cm、床面からの深さ21cm、P2は掘り方径32cm、床面からの深さ29cm、P3は掘り方径24cm、床面からの深さ35cmを測る。

焼土　中央土坑より約90cm離れた位置で3カ所検出した。直径は30～20cmである。

出土遺物　弥生土器が出土している。そのうち鉢（47）、把手付直口壺（48・49）、壺の底部（50）、器台（51）、高坏（52）を図化した。

SH26（図版17　写真図版24）

検出状況　住居跡の北部は調査区外で、東部は流路1に切られているため残存していない。

規模・形態　平面は円形を呈する。直径は5.5m程度に復元できる。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

柱穴　総数12基を検出したが、調査できた部分が狭いため、主柱穴を特定することは難しい。

出土遺物　弥生土器細片が出土しているが図化にたえない。

SH27（図版22　写真図版25）

検出状況　調査区北西端に位置し、調査区外へとのびる。コーナー部を含むごく一部分を検出したに留まる。SH28の北東側に隣接する。

規模・形態　平面は方形を呈する。現存値で最大3.44mを測り、元来はそれ以上の規模が見込まれる。

屋内施設　周壁溝を検出した。

周壁溝　住居跡の遺存するところでは、全周している。床面での幅15～24cm、床面からの深さ約7.2cmである。

出土遺物　須恵器の坏身（217・218）、壺（219）のほか、埋土中から須恵器片が出土している。

SH28（図版22　写真図版25）

検出状況　調査区北西端に位置し、調査区外へとのびる。南側はSH29と隣接する。さらにすぐ南で検出しているSH32とは切り合う可能性が高いが、調査区内では確認できなかった。

規模・形態　平面は方形を呈する。南北方向で5.7mあり、元来はそれ以上の規模が見込まれる。

屋内施設　周壁溝・溝・柱穴を検出した。

周壁溝　床面で幅16～22cm、床面からの深さ約9cmを測る。

溝　床面の中央部に設けられており、南東から北東方向へ緩やかに蛇行し調査区外へと続く。機能は不明である。床面での幅18～25cm、床面からの深さ約8cmである。

柱穴　総数10基を検出したが、このうち主柱穴と思われるのは2基である。元来は4本柱か。P1は掘り方径40cm、床面からの深さ10cm、P2は掘り方径45cm、床面からの深さ17cmを測る。柱穴間距離はP1－P2間で2.35mを測る。

出土遺物　須恵器の坏身（216・222～226）、坏蓋（220・221）、短頸壺（227）のほか、埋土中から多量の須恵器片が出土している。

SH29（図版22　写真図版25）

検出状況　調査区北西端に位置し、半分以上は調査区外へと続く。コーナー部分を全体の約1/4ほど検出した。南側はSH28、SH32と隣接する。

規模・形態　平面は方形を呈する。現存値で最大3.60mあり、元来はそれ以上の規模が見込まれる。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　床面で幅20～34cm、床面からの深さ約11.2cmを測る。

柱穴　総数5基を検出したが、主柱穴を提示することは困難である。掘り方径18～48cm、床面からの深さ9～19cmを測る。

出土遺物　柱穴から土器の細片が出土しているが、図化できなかった。

SH30（図版13　写真図版25）

検出状況　西半は後世の削平を受けている。SH31の北東側に隣接する。周壁溝の検出状況から、2度の建て替えがおこなわれたことがうかがわれる。

規模・形態　平面は円形を呈し、直径5.9mに復元できる。

屋内施設　周壁溝・中央土坑・柱穴を検出した。

周壁溝　南東部分で1/4周ほど検出した。多いところで、3条巡っており、内側の2条は交錯する。床面での幅10～18cm、床面からの深さ約9.6cmである。

中央土坑　中央部で検出した。土坑0は長方形を呈し、長軸方向で70cm、短軸方向で44cm、床面からの深さ31cmを測る。土坑1は長楕円形を呈し、長軸方向で60cm、短軸方向で23cm、床面からの深さ5cmを測る。

柱穴　総数17基を検出したが、このうち主柱穴と考え得るものは5基である。主柱穴は4本であったと考えているが、P2とP3の真偽を把握できないので、P1－P2－P4－P5とP1－P3－P4－P5の2組の可能性を示しておく。前者をとった場合平均主柱穴間距離は2.48m、後者の場合2.60mとなる。P1は掘り方径32cm、床面からの深さ32cm、P2は掘り方径27cm、床面からの深さ15cm、P3は掘り方径25cm、床面からの深さ

14cm、P4は掘り方径34cm、床面からの深さ23cm、P5は掘り方径23cm、床面からの深さ15cmを測る。

出土遺物　中央土坑から弥生土器の高杯（120）が出土している。

SH31（図版22　写真図版25）

検出状況　調査区北西端に位置する。コーナー部分にかけて全体の1/4ほどを検出した。西側については、削平を受けているため、遺存していない。

規模・形態　平面は方形を呈する。現存値で最大2.78mを測る。

屋内施設　柱穴を検出した。

柱穴　総数5基を検出したが、確実な主柱穴を提示することは難しい。掘り方径20～26cm、床面からの深さは最大で24cmを測る。

出土遺物　土器の細片がわずかに出土している。

SH32（図版22　写真図版25）

検出状況　調査区北西端に位置する。コーナー部分をわずかに検出したにとどまっており、大半は調査区外へと続く。SH28、SH29と隣接する。これらの住居と切り合う可能性もあるが、調査区内では確認できなかった。

規模・形態　平面は方形を呈する。現存値で最大1.20mある。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝　南壁に沿って検出した。東壁では遺存していない。床面で幅15～18cm、床面からの深さ約3.2cmを測る。

柱穴　総数2基を検出したが、主柱穴を提示することは困難である。それぞれ最大値で、掘り方径43cm、床面からの深さ14cmを測る。

出土遺物　土師器の高坏（228）が出土している。

SH33（図版22　写真図版25）

検出状況　調査区北西端に位置する。コーナー部分をわずかに検出したにとどまっており、大半は調査区外へと続く。

規模・形態　平面は方形を呈する。現存値で最大1.80mある。

屋内施設　周壁溝を検出した。

周壁溝　L字状に検出した。床面で幅21～27cm、床面からの深さ約8.8cmを測る。

出土遺物　土師器（54～57）が出土している。

第3節　掘立柱建物

SB01（図版24　写真図版26）

検出状況　調査区の西北端に位置する。SB02との切り合い関係が認められる。

形状・規模　北に棟軸方向をとり、桁行3間、梁行3間からなる掘立柱建物である。東側桁行方向で7m、南側梁行方向で4.67mを測る。平均主柱穴間距離は東側桁行方向で2.33m、南側梁行方向で1.56mを測る。

面積は32.69㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形・方形のものからなる。柱穴の規模は不揃いで短辺35～69cm、長辺42～80cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は20～42cmである。

出土遺物　古墳時代の須恵器片、土師器片が出土した。

SB02（図版24）

検出状況　調査区の西北端に位置する。SB01との切り合い関係が認められる。

形状・規模　N34°Wに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる総柱建物である。西側桁行方向で3.25m、北側梁行方向で3.17mを測る。平均主柱穴間距離は西側桁行方向で1.62m、北側梁行方向で1.58mを測る。面積は10.30㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形で、南側梁行中央の柱穴を欠く。柱穴の規模は不揃いで径17～47cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は11～23cmである。

出土遺物　古墳時代の須恵器片、土師器片が出土した。

SB03（図版24　写真図版26）

検出状況　SB01・02の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N34°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる掘立柱建物である。東側桁行方向で5.76m、北側梁行方向で3.85mを測る。平均主柱穴間距離は東側桁行方向で1.92m、北側梁行方向で1.92mを測る。面積は22.17㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形で、南側梁行の柱穴は西側の2穴を欠く。柱穴の規模は不揃いで径21～40cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は15～22cmである。

出土遺物　土師器細片が出土している。

SB04（図版25）

検出状況　SB03の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N34°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる総柱建物である。西側桁行方向で5.06m、南側梁行方向で4.10mを測る。平均主柱穴間距離は西側桁行方向で2.53m、南側梁行方向で2.05mを測る。面積は20.74㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形で、東側桁行の柱穴は北側の2穴を欠く。柱穴の規模は不揃いで径25～35cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は16～23cmである。

出土遺物　古墳時代の須恵器片が出土している。

SB05（図版25　写真図版26）

検出状況　SB03の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N32°Eに棟軸方向をとり、桁行5間、梁行2間以上からなる掘立柱建物である。西側桁行方向で6.13m、北側梁行方向で3.13mを測る。平均主柱穴間距離は西側桁行方向で1.22m、北側梁行方向で1.56mを測る。

柱穴　掘り方の平面形は歪な円形のものが主体であり、方形のものが混じる。方形のものからなる円

形の柱穴の規模は不揃いで径38～70cm、方形の柱穴の規模は1辺42cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は22～32cmである。

出土遺物　須恵器の坏（10）、風字硯（13）、土師器の羽釜（14）などが出土している。

SB06（図版25　写真図版27）

検出状況　SB05の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N60°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる掘立柱建物である。西側桁行方向で5.24m、南側梁行方向で4.16mを測る。平均主柱穴間距離は西側桁行方向で1.74m、南側梁行方向で2.08mを測る。面積は21.79㎡である。

柱穴　掘り方の平面形はいずれも隅円方形である。柱穴の規模は不揃いで1辺63～93cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は22～36cmである。

出土遺物　柱穴内から奈良時代の須恵器が出土している。ただ図化できたものは弥生土器の壺（1）のみである。

SB07（図版25）

検出状況　SB06の西側に位置し、調査区外に延びる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N15°Eに棟軸方向をとり、桁行5間以上、梁行1間以上からなる掘立柱建物である。東側桁行方向で7.10m、南側梁行方向で1.70mを測る。平均主柱穴間距離は東側桁行方向で1.42mを測る。

柱穴　掘り方の平面形は円形・方形のものからなる。柱穴の規模は不揃いで円形のものは径38～52cm、方形のものは1辺21～42cmである。梁行北端の柱穴を除いて、柱痕を確認することができ、その径は16～25cmである。

出土遺物　出土していない。

SB08（図版26　写真図版27・28）

検出状況　SB06の南側に位置する。SB09との切り合い関係が認められる。

形状・規模　N20°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行2間からなる掘立柱建物である。東側桁行方向で6.73m、北側梁行方向で4.12mを測る。平均主柱穴間距離は東側桁行方向で1.68m、北側梁行方向で2.06mを測る。面積は27.72㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形・方形のものからなる。柱穴の規模は不揃いで1辺29～65cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は18～36cmである。

出土遺物　古墳時代須恵器片が出土している。図化したのは弥生土器の甕（8）である。

SB09（図版26　写真図版27）

検出状況　SB06の南側に位置する。SB08との切り合い関係が認められる。

形状・規模　N65°Eに棟軸方向をとり、桁行5間、梁行3間からなる掘立柱建物である。西側桁行方向で7.50m、北側梁行方向で5.26mを測る。平均主柱穴間距離は西側桁行方向で1.50m、北側梁行方向で1.75mを測る。面積は39.45㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形のものが主体で、隅円方形のものが混在する。柱穴の規模は不揃いで円

形のものは径20～52cm、隅円方形のものは1辺44～67cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は14～39cmである。

出土遺物　古墳時代須恵器細片が出土している。図化したのは弥生土器の壺（2）である。

SB10（図版27　写真図版28）

検出状況　SB08・09の南側に位置する。SB11との切り合い関係が認められる。

形状・規模　N65°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる総柱建物である。東側桁行方向で5.43m、南側梁行方向で3.10mを測る。平均主柱穴間距離は東側桁行方向で1.81m、南側梁行方向で1.55mを測る。面積は16.83㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形のものが主体となり、円形のものが混在する。柱穴の規模は不揃いで隅円方形のものは1辺36～65cm、円形のものは径39～45cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は22～26cmである。

出土遺物　古墳時代須恵器細片が出土している。図化したのは弥生土器の壺（5）である。

SB11（図版27）

検出状況　SB08・09の南側に位置する。SB10との切り合い関係が認められる。

形状・規模　N24°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる掘立柱建物である。東側桁行方向で4.00m、南側梁行方向で3.44mを測る。平均主柱穴間距離は東側桁行方向で2.00m、南側梁行方向で1.72mを測る。面積は13.76㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形と円形のものが混在している。柱穴の規模は不揃いで隅円方形のものは1辺56～65cm、円形のものは径44～65cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は22～28cmである。

出土遺物　須恵器、土師器共に細片が多く出土している。土師器の甕（105）を図化した。

SB12（図版27）

検出状況　SB10・11の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N53°Eに棟軸方向をとり、桁行2間以上、梁行1間以上からなる掘立柱建物である。東側桁行方向で3.06m、南側梁行方向で1.35mを測る。平均主柱穴間距離は東側桁行方向で1.53mを測る。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形と円形のものからなる。柱穴の規模は不揃いで隅円方形のものは1辺40～56cm、円形のものは径44～75cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は25～39cmである。

出土遺物　須恵器片、土師器片が出土した。いずれも細片である。

SB13（図版27）

検出状況　SB12の西側に位置し、調査区外へ延びる。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N17°Eに棟軸方向をとり、桁行5間以上、梁行は不明の掘立柱建物である。桁行方向で6.54mを測る。平均主柱穴間距離は桁行方向で1.30mを測る。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形と円形のものからなる。柱穴の規模は不揃いで隅円方形のものは1辺

40～48cm、円形のものは径36～60cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は20～42cmである。

出土遺物　古墳時代の須恵器片、土師器片が出土した。土師器の甕（247）を図化している。

SB14（図版27）

検出状況　SB13の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N70°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる掘立柱建物である。南側梁行の東側2穴を欠く。西側桁行方向で3.90m、北側梁行方向で2.90mを測る。平均主柱穴間距離は西側桁行方向で1.85m、北側梁行方向で1.45mを測る。

柱穴　掘り方の平面形は円形のものからなる。柱穴の規模は不揃いで径44～60cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は19～25cmである。

出土遺物　古墳時代の須恵器片が出土している。

SB15（図版28　写真図版28）

検出状況　SB16の北側に位置する。SH08を切っている。西側は調査区外へ延びる。

形状・規模　N25°Eに棟軸方向をとり、桁行2間以上、梁行2間からなる総柱建物である。南側桁行方向で3.16m以上、東側梁行方向で3.24mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.58m、梁行方向で1.62mである。面積は10.24㎡以上である。

柱穴　掘り方の平面形は不整円形のものが主体をしめる。柱穴の規模は径90～45cmである。柱痕は確認することができなかった。

出土遺物　須恵器の坏身（239）を図化した。

SB16（図版28　写真図版29）

検出状況　SB15の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N13°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる側柱建物である。東側桁行方向で6.55m、北側梁行方向で4.10mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で2.18m、梁行方向で2.05mである。面積は26.86㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形のものが主体をしめる。柱穴の規模は1辺112～53cmである。柱痕を確認することができたのは1つで、その径は32cmである。

出土遺物　須恵器の甕（230）、壺（231）、坏身（240）を図化した。

SB17（図版28）

検出状況　SB15の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N20°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間以上からなる側柱建物である。西側桁行方向で5.62m、南側梁行方向で2.00mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.87m、梁行方向で1.80mである。面積は11.24㎡以上である。

柱穴　掘り方の平面形は不整円形のものが主体をしめる。柱穴の規模は径100～28cmである。柱痕は確認することができなかった。

出土遺物　掘り方内から須恵器片が出土している。

SB18（図版28）

検出状況　調査区の東南隅に位置し、東7mにSB66がある。他の建物と切り合いは認められない。

形状・規模　南北3間×東西1間を確認した。柱穴の配置から、東西方向はさらに広がる。長軸にあたる南北の全長は4.23m、長軸の角度はN45°Eを測る。東西方向は1.57mである。柱穴間の距離には僅かなばらつきがあるものの、南北・東西とも平均して1.2mを測る。

柱穴　掘り方の平面は円形をなし、径は29～45cmを測る。検出面からの深さは一定ではないが、内部から柱痕跡の確認されたものは比較的浅く、15cm前後であった。柱痕跡の確認できたものは5基、痕跡の径は平均して8cmである。

出土遺物　柱穴の掘り方から、土師質の土器片が出土している。遺存状況が悪く、時期はわからない。

SB19（図版29）

検出状況　調査区の東南部に位置する。SB66と主軸方向を違えて重なるが、柱穴の切り合いは存在しない。

形状・規模　南北3間×東西2間の掘立柱建物である。桁行である南北方向の全長は5.20m、梁間の東西方向は4.50mをそれぞれ測る。長軸角度はN23°E、床面積は23.4㎡である。柱穴間の距離は、桁行1.6m、梁間1.95mの等間隔でそれぞれ配置される。

柱穴　掘り方は大きな隅円方形も含むものの、全体に方形への意識が窺える。径は45～67cm、深さは位置によって違いがある。柱痕跡の遺存するものは17～20cmと浅く、遺存しないものは30～40cmの範囲に収まる。柱根の遺存しないものは、柱を抜き取る際に規模の改変が行われた可能性が高い。柱痕跡の確認できたものは4基で、痕跡の径は10～15cmを測る。

出土遺物　柱穴から、古墳時代と考えられる須恵器片が出土した。

SB20（図版29）

検出状況　調査区の東南部に位置する。西に近接してSB19·66がある。

形状・規模　南北3間×東西1間の小さい建物で、長軸角度はN65°Wを測る。桁行である南北方向は3.6m、梁間の東西方向は2.8m、床面積は10.08㎡である。柱穴の間隔は、桁行では中央が1.4mと広く両側はいずれも1.0mである。梁間は2.4mで広い。

柱穴　掘り方は隅円方形だが、円形に近いものも含まれる。径は33～48cm、深度は16～23cmである。6基の柱穴から柱痕跡を確認した。痕跡の径は平均して11cmである。

出土遺物　建物に伴う遺物として、須恵器片が出土している。古墳時代の特徴を有するものが含まれる。

SB21（図版30）

検出状況　調査区の東南部に位置し、北東5mにSB20がある。他の建物との切り合いは認められない。

形状・規模　建物の北東隅にあたる、東西2間×南北1間を検出した。南側および西側が調査区外へ広がる。検出した長軸である東西の全長は4.02m、南北方向は2.03mを測る。長軸方向はほぼ正方位をなす。柱穴間の距離は、長軸が1.5m・短軸は1.6mのほぼ等間隔で配置される。

柱穴　掘り方の平面は基本的に方形を指向する。一辺60cm前後を測るが、隅柱だけが38cmと小さい。深さは検出面の状況によって差が生じ、27～19cmを測る。隅柱および西に延びる柱穴で柱根を確認した。径は19～23cmをそれぞれ測る。また残る2基からは柱の抜き取り痕跡が検出された。なお隅柱において、石が1個内包されていた。

出土遺物　建物に伴う遺物として、須恵器の細片が数点出土した。奈良時代の所産と考えられるものが見られる。図化できたのは奈良時代の土師器の甕（311、312）である。

SB22（図版30）

検出状況　調査区の南部に位置する。南にはSB58があり、一部で重なりを持つが、柱穴の切り合いは認められない。

形状・規模　2間×2間の小規模な建物である。中央に柱穴は確認されず、側柱のみの構造をなす。南北方向の全長が3.40mに対して、東西方向は3.82mとわずかに長い。長軸方向は、N75°Wに向ける。床面積は12.98㎡である。東西列の柱穴間距離は1.67m、南北列は1.45mの間隔で、各柱穴の配列に大きな乱れは見られず、柱通りも整っている。

柱穴　掘り方はいずれも円形をなす。径は47.5～62.5cmでばらつきが大きい。また検出面が後世の削平による影響を受けていることから、深さも21.0～32.0cmと位置によって差が生じる。柱痕跡は、南東隅の2基および北西の隅柱を除いて確認できた。痕跡の径は18～28cmであった。

出土遺物　掘り方内からは、須恵器・土師器が出土した。須恵器は胎土や器形などから、古墳時代の所産と考えられる。

SB23（図版30）

検出状況　調査区の南部に位置し、北10mにSB25がある。他の建物との切り合いは認められない。

形状・規模　建物の南東隅にあたる南北4間×東西1間を検出した。後世の削平によって遺構面が分断される西側へと広がる。北側への広がりも未確定ではあるが、遺構面の状態から削平等による消失は考えがたく、現在の北端を北東隅柱と判断した。

検出した長軸にあたる南北方向の全長は7.18m、東西方向は2.13mを測る。長軸角度はN4°Eで、ほぼ正方位を示す。柱穴間の距離は、南北方向において多少のばらつきがあるものの、平均して1.65mとなる。

柱穴　掘り方はいずれも円形、直径もほぼ等しく47～52cmを測る。深さは柱穴によって異なり、14～28cmである。柱の痕跡が確認できたものは、南北列の北端だけであった。痕跡の径は平均して27cmであった。

出土遺物　柱穴から須恵器・土師器が出土した。須恵器は胎土や器形などから、古墳時代の所産と考えられる。

SB24（図版30）

検出状況　調査区の南部で検出された。北7mにはSB27がある。他の建物と直接の切り合い関係は生じない。

形状・規模　2間×2間の小規模な建物である。南北方向2.76m・東西方向2.70mで、僅かに南北の柱列が長い。床面積は7.45㎡、南北軸の角度はN75°Eを測る。柱穴間距離は、南北・東西とも1.17mの等間隔

をなす。

柱穴　掘り方の平面は、円形を基本とする。径は32.5～46.0cm、深度は平均して13cmであった。柱痕跡の確認できたものは5基で、痕跡の径は10cm前後を測る。北西の隅柱内からは石が検出され、柱痕跡との位置関係から礎石としての役割を果たしたと考えられる。

出土遺物　柱穴からは土師質・瓦質の土器片が出土している。

SB25（図版31）

検出状況　調査区の南部に位置する。北側でSB26、南側でSB59とそれぞれ重なりを持つが、直接の切り合いは認められない。

形状・規模　南北3間×東西3間の総柱建物である。東西方向6.54mに対して、南北方向が7.85mと長い。長軸の角度はN16°E、床面積は51.34㎡を測る。南北の柱列は2.4～2.8mの等間隔で配置されるが、東西はいくぶん乱れがある。東端と第2列は1.9m、第2列と第3列は2.5mのそれぞれ等間隔を保つが、西端の2列には乱れが生じている。北になるほど間隔が開き、建物の平面は台形となる。

柱穴　掘り方はいずれも円形で、径25～55cm・深さ15～33cmと規模のばらつきが激しい。柱痕跡の確認できたものは5基あり、内部からは直径12～17cmの柱痕跡が確認できた。

出土遺物　建物に伴う遺物として、中世の土器が数点出土している。細片化が著しく、図化する状態になかった。

SB26（図版30）

検出状況　調査区の南部に位置する。SB25と重なるが、切り合い関係は生じない。

形状・規模　建物の北西隅を中心とする東西3間×南北1間を検出した。規模は南側および東側へ広がると考えられ、総柱の構造が想定される。東西方向の全長は5.00m、南北方向は2.7mを測る。東西を長軸とすると角度はN88°Wである。柱穴間の距離は、東西が平均して1.5m、南北は2.3mで幅広い。

柱穴　掘り方の平面は円形だが、歪曲の著しいものもある。平均規模は、径46cm・深度23cmをそれぞれ測る。柱痕跡の確認できた柱穴は4基で、痕跡の径は35～40cmと太い。

出土遺物　柱穴から出土した遺物には、細片化した須恵器がある。図化できなかったが、特徴から奈良時代と考えられる。

SB27（図版32）

検出状況　調査区の南部に位置する。東部でSB59と重なりを持つが、切り合い関係は生じない。

形状・規模　東西2間×南北2間の規模をもつが、平面は東西の長方形をなす。長軸である東西方向が全長4.14m、対する南北方向は2.97mをそれぞれ測る。長軸角度はN78°E、床面積は12.32㎡である。柱穴の間隔は、東西が1.8m・南北は1.3mで配される。

柱穴　掘り方は円形を指向するものが多い。径は34～68cmでばらつきが著しい。深度は、西側が遺構面の削平による影響で浅く、遺構面の状態が良い南東の隅柱では32cmを測る。そのうち4基では、中央から径10cmの柱痕跡を確認した。

出土遺物　細片化した須恵器が出土した。奈良時代の特徴を持つものがある。

SB28（図版31）

検出状況　SB17の北側、SB29の南側に位置する。溝と切り合いがある。

形状・規模　N70°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行1間からなる側柱建物である。東側桁行方向で5.90m、北側梁行方向で3.90mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.97m、梁行方向で3.85mである。面積は23.01㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形・方形と様々である。柱穴の規模は径あるいは1辺100～33cmである。柱痕を確認することができたのは、1つのみで、その径は28cmである。

出土遺物　掘り方内から土師器の細片が出土している。

SB29（図版32）

検出状況　SB28の北側、SB32の南側に位置する。SH06を切っている。

形状・規模　N29°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる側柱建物である。東側桁行方向で5.40m、北側梁行方向で3.24mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.79m、梁行方向で1.53mである。面積は17.50㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形である。円形の柱穴の規模は径60～20cmである。柱痕を確認することができたのは、2つのみで、その径は18～30cmである。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の所産と思われる須恵器片が出土している。

SB30（図版32）

検出状況　調査区中央やや南よりで検出された。

形状・規模　N55°Wに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間の側柱建物である。北西側桁行方向で4.8m、南東側梁行方向で4mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.07m、梁行方向で1.37mである。面積は14.37㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形のものが主体をなす。柱穴の規模は径50cm程度である。検出面からの深さは17～44cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師器細片が出土している。

SB31（図版32）

検出状況　調査区中央やや南よりで検出された。

形状・規模　N36°Eに棟軸方向をとり、桁行2間以上、梁行2間の側柱建物である。東側桁行方向で4.6m、南側梁行方向で3.8mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で13.9m、梁行方向で1.5mである。面積は13.97㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形のものと隅円方形のものが混在する。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺約50～70cm、円形の柱穴の規模は径約40～80cm程度である。検出面からの深さは14～20cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師器細片が出土している。

SB32（図版33）

検出状況　調査区中央西よりで検出された。

形状・規模　N68°Wに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行1間の側柱建物である。東側桁行方向で3.60m、南側梁行方向で2.49mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.51mである。面積は6.14㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。柱穴の規模は掘り方で径43～68cm、柱そのものは柱痕の下端から20cm程度に復元できる。検出面からの深さは16～26cmを測る。

出土遺物　掘り方内から土師質の細片と古墳時代の須恵器が出土している。

SB33（図版33　写真図版29）

検出状況　調査区東端、中央部に位置している。SB34,35,54と重なって検出された。

形状・規模　N77°Wに棟軸方向をとり、桁行6間、梁行2間の側柱建物である。南側桁行方向で8.8m、西側梁行方向で4.7mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.46m、梁行方向で2.35mである。面積は35.53㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。柱穴の規模は径35～50cm程度である。検出面からの深さは13～42cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片および土師質の細片が出土している。

SB34（図版33　写真図版29）

検出状況　調査区東端、中央部に位置している。SB33,35,54と重なって検出された。

形状・規模　N86°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行2間の側柱建物である。北側桁行方向で6.55m、東側梁行方向で4.00mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.50m、梁行方向で1.75mである。面積は21.10㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形のものが主体をなす。柱穴の規模は掘り方で径50～80cm程度である。検出面からの深さは17～34cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片が出土している。

SB35（図版34　写真図版29）

検出状況　調査区東端、中央部に位置している。SB33,34,54と重なって検出された。

形状・規模　N84°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行2間の側柱建物である。北側桁行方向で7.06m、西側梁行方向で5.40mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.60m、梁行方向で2.38mである。面積は30.4㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形で、柱穴の規模は径40～80cm程度である。検出面からの深さは20～35cm程度である。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片が出土している。須恵器の坏身（232）と土師質の土錘（499）を図化した。

SB36（図版34　写真図版30）

検出状況　SH13・14を切って検出された。

形状・規模　N15°Eに棟軸方向をとり、桁行5間、梁行3間の側柱建物である。東側桁行方向で7.6m、北側梁行方向で4.7mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.52m、梁行方向で1.57mである。面積は

35.7㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形を呈する。柱穴の規模は不揃いで、径40～70cm、検出面からの深さは20cm程度である。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片が出土している。

SB37（図版35　写真図版30）

検出状況　SB38の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N26°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる総柱建物である。東側桁行方向で4.04m、南側梁行方向で3.50mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.58m、梁行方向で2.16mである。面積は約20.61㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をなすが、円形のものも混在する。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺15～44cm、円形の柱穴の規模は径25～35cmである。いずれの柱穴とも柱痕を確認することができ、その径は10～26cmである。また、検出面からの深さ8～30cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片が出土している。図化できたのは弥生土器の甕（127）である。

SB38（図版35　写真図版31）

検出状況　SH16を切って検出された。

形状・規模　N24.5°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間さらに建物の中心に1間柱を立てる。壁建ちの可能性も考えられる建物である。東側桁行方向で4.40m、南側梁行方向で4.66mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.25m、梁行方向で1.36mである。面積は15.72㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をなすが、円形のものも混在する。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺41～80cm、円形の柱穴の規模は径55cm程度である。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の所産と考えられる須恵器および土師器片が出土している。

SB39（図版36　写真図版32）

検出状況　SB38の北側に隣接し、かつ棟軸方向はほぼ直交している。

形状・規模　N65°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間の総柱建物である。南側桁行方向で5.54m、東側梁行方向で4.16mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.70m、梁行方向で1.83mである。面積は18.57㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形と円形のものが混在する。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺47～68cm、円形の柱穴の規模は径40cm程度である。検出面からの深さは8～24cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代と思われる須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB40（図版36　写真図版32）

検出状況　SB39の東に隣接し、SB41と切り合い関係にある。新旧については不明である。

形状・規模　N20°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行2間の側柱建物である。西側桁行方向で7.44m、南側梁行方向で4.78mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.69m、梁行方向で2.16mである。面積

は約29.30㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をなすが、円形のものも混在する。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺49～95cm、円形の柱穴の規模は径50～76cm程度である。検出面からの深さは10～24cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB41（図版37　写真図版32）

検出状況　SB40と一部切り合って検出された。調査区のほぼ中央に位置する。

形状・規模　N32°Eに棟軸方向をとり、桁行4間、梁行3間の総柱建物である。西側桁行方向で5.82m、南側梁行方向で4.90mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.33m、梁行方向で1.38mである。面積は23.3㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。柱穴の規模は掘り方で径50cm程度、柱そのものは柱痕から25cm程度に復元できる。検出面からの深さは12～37cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片土師質の細片が出土している。

SB42（図版37　写真図版33）

検出状況　東半部を削平のため消失しており、一部分の検出にとどまっている。

形状・規模　N22.5°Eに棟軸方向をとり、桁行2間以上、梁行2間の側柱建物である。現存値で、南側桁行方向では3.76m、西側梁行方向では3.82mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.57m、梁行方向で1.6mである。面積は10.0㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。柱穴の規模はおおむね径60cm程度であるが、北東端で検出したものは不定形で一辺は最大で105cmを測る。検出面からの深さは15～28cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB43（図版38　写真図版33）

検出状況　調査区中央やや北寄りにあり、SB44の南西に隣接する。

形状・規模　N46.5°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間の総柱建物である。北東側桁行方向で5.38m、北西側梁行方向で4.34mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.61m、梁行方向で1.98mである。面積は19.1㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形である。柱穴の規模は掘り方で径40～70cm程度で、柱の太さは柱痕から判断しておよそ20cmと考えられる。検出面からの深さは10～30cmを測る。

出土遺物　土師質の細片がわずかに検出されたにとどまる。

SB44（図版38　写真図版33・34）

検出状況　調査区中央やや北寄りにあり、SB43の北東に隣接する。

形状・規模　N40°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行3間の総柱建物である。北西側桁行方向で5.66m、南西側梁行方向で5.46mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.73m、梁行方向で1.56mである。面積は24.4㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。柱穴の規模は掘り方で径45～60cm程度である。1基のみ長方形様を呈し、58×80cmを測る。検出面からの深さは18～23cmである。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB45（図版39　写真図版34）

検出状況　東側を後世の水路によって切られている。

形状・規模　N24°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行は2間以上の側柱建物である。西側桁行方向で6.28m、南側梁行方向で現存値3.92mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.87m、梁行方向で1.70mである。面積は19.04㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をなす。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺50～65cm、円形の柱穴の規模は径60cm程度である。検出面からの深さは15～25cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB46（図版39　写真図版34）

検出状況　調査区北に位置する。平成４年度と５年度の２度の調査にまたがって全体を検出した。

形状・規模　N86°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間の側柱建物である。南側桁行方向で3.62m、東側梁行方向で3.65mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.57m、梁行方向で1.33mである。面積は8.3㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円が主体をなす。柱穴の規模は径50cm程度である。検出面からの深さは15～25cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB47（図版39）

検出状況　調査区東端A－3区で検出した。

形状・規模　N85°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間の側柱建物である。北側桁行方向で4.68m、東側梁行方向で4.22mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.03m、梁行方向で1.80mである。面積は14.62㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形と円形のものが混在する。柱穴の規模は50～70cm程度である。検出面からの深さは15～25cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB48（図版39）

検出状況　調査区東端A－3区で検出した。

形状・規模　N68.5°Wに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間の側柱建物である。北側桁行方向で4.36m、東側梁行方向で3.6mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.96m、梁行方向で1.65mである。面積は12.94㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円が主体をなす。柱穴の規模は径28～55cmである。検出面からの深さは8～40cmを測る。

出土遺物　掘り方内からは弥生土器が出土している。

SB49（図版39）

検出状況　調査区東端A－3区で検出した。SB52と重なっているが、切り合いの前後関係は明らかにできなかった。

形状・規模　N69°Wに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間の総柱建物で3.94×3.8mの規模である。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.69m、梁行方向で1.77mである。面積は11.97㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。柱穴の規模は掘り方径50cm程度、柱痕は20cmほどである。検出面からの深さは6～18cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB50（図版40）

検出状況　調査区東端に位置する。SB51,52,53と重なって検出されたが、前後関係は不明である。

形状・規模　N28°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行1間の側柱建物である。東側桁行方向で4.26m、北側梁行方向で3.74mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.65m、梁行方向では3.15mである。梁方向に関しては、検出はできなかったが、中間にもう1基ずつ柱穴があったものと考えたい。面積は10.4㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をなす。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、1辺45cm程度から1辺70cmのものまである。検出面からの深さは12～34cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片、サヌカイト片が出土している。

SB51（図版40）

検出状況　調査区東端に位置する。SB50,52,53と重なって検出されたが、前後関係は不明である。

形状・規模　N25°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行1間の側柱建物である。東側桁行方向で5.82m、北側梁行方向で3.68mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.74m、梁行方向で3.24mである。梁行方向に関しては、検出はできなかったが、中間にもう1基ずつ柱穴があったものと考えたい。面積は16.91㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をなす。隅円方形の柱穴の規模は1辺55～85cm、検出面からの深さは17～42cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師質の細片が出土している。

SB52（図版40）

検出状況　調査区東端に位置する。SB49,50,53と重なって検出されたが、前後関係は不明である。

形状・規模　N74°Wに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行1間の側柱建物である。北側桁行方向で6.5m、東側梁行方向で2.98mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.96m、梁行方向で2.6mである。面積は15.29㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をなすが、円形のものも混在する。隅円方形の柱穴の規模は1辺60～70cm、円形の柱穴の規模は径35cm程度である。検出面からの深さは10～21cmを測る。

出土遺物　掘り方内から土師質の土器片が出土している。

SB53（図版40）

検出状況　調査区東端に位置する。SB50,51,52と重なって検出されたが、前後関係は不明である。

形状・規模　N20°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間の側柱建物である。東側桁行方向で3.44m、北側梁行方向で3.42mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で1.56m、梁行方向で1.57mである。面積は9.8㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。柱穴の規模は径22～35cm程度である。検出面からの深さは17～42cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師器の細片が出土している。

SB54（図版41）

検出状況　調査区東端に位置する。SB33と重なって検出されたが、前後の切り合い関係は不明である。

形状・規模　N18°Eに棟軸方向をとり、桁行4間以上、梁行2間以上の側柱建物である。西側桁行方向で9.98m、南側梁行方向で現存値3.6mを測る。平均主柱穴間距離は、桁行方向で2.29m、梁行方向で1.64mである。面積は14.9㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は一部うまく検出できないものもあるが隅円方形が主体をなすものと考えられる。隅円方形の柱穴の規模は不揃いで、掘り方1辺75～80cm程度、柱痕は23～30cmである。検出面からの深さは6～22cmを測る。

出土遺物　掘り方内から古墳時代の須恵器片と土師器の細片が出土している。

SB55（図版41）

検出状況　SB60·61の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N63.5°Wに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行1間からなる側柱建物である。西側桁行方向で4.96m、北側梁行方向で2.16mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で2.44m、梁行方向で2.02mである。面積は10.71㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形が主体をなす。円形の柱穴の規模は径32～28cmである。柱痕を確認することができたのは1つのみで、その径は19cmである。

出土遺物　掘り方内から土師質の土器片が出土している。

SB56（図版41）

検出状況　調査区の南東部に位置し、西10mにSB57がある。

形状・規模　東西3間×南北2間の建物である。北西の隅柱を消失する。桁行である東西方向は6.92m、梁間は5.38m、床面積は37.23㎡である。長軸角度はN91°Eで、ほぼ正方位を向く。桁行は柱穴の並びが不揃いで、直線の通りをなさない。柱穴の間隔も2.0～2.6mと乱れがある。梁間は北が2.1m、南が2.9mと差が認められる。

柱穴　掘り方はいずれも円形を指向する。径は28～50cmとばらつきが顕著、深度も上面を削平されていることから6～16cmと浅い。柱痕跡の確認できたものは7基ある。痕跡の径や形状には差が見られ、抜

き取られた結果生じたものも混在する。本来は10～12cm程度の柱と考えられる。

出土遺物　柱穴の掘り方からは須恵器、土師器が出土した。図化にはいたらなかったが、須恵器は胎土などから古墳時代の所産と考えられる。

SB57（図版42）

検出状況　調査区の南部に位置し、東10mにSB56、南6mにSB22がある。他の建物との切り合いは認められなかった。上面は西から東へと大きく削平されており、東端の柱穴列は底部付近がわずかに残る状態であった。

形状・規模　東西3間×南北2間の建物で、全容を調査区内で検出することができた。桁行にあたる東西方向の全長は6.74m、梁間の南北方向は4.31mを測る。長軸角度はN94.5°E、床面積は29.04㎡である。柱穴の間隔は、桁行では東側の3基が1.8mで配置されるが、西端の間は3.0mと極端に広い。梁間は1.5mと2.4mで差が見られる。

柱穴　掘り方はいずれも円形で、径は28.0～48.0cmとばらつく。深さも位置によって差が激しく、南西隅柱が27cmに対して南東の隅柱は7cmしか遺存していない。柱痕跡の確認できたものは2基のみで、南の柱穴では直径10cmの正円形で検出されたが、北東の隅柱は東西に長いことから、抜き取り痕の可能性が高い。南東の隅柱から石が2点出土した。いずれも底面に据え置かれ、うち1点は中央で検出された。形状などから、礎石の役割を果たしたものであろう。

出土遺物　柱穴からは須恵質・土師質の土器が数点出土している。細片化がすすみ、時期・器形等はわからない。

SB58（図版42）

検出状況　調査区の南部に位置する。北東でSB22と重なるが、柱穴の切り合いは生じない。

形状・規模　東西4間×南北2間の建物で、西側の梁間がわずかに広く、平面は台形気味となる。桁行である東西方向は全長9.2m、梁間は東端で4.73mを測る。長軸角度はN75°E、床面積は43.4㎡である。柱穴の間隔は、梁間が東側2.3m・西側2.5mでそれぞれ等間隔を保つのに対して、桁行では西側の2間が1.8mの等間隔、東側の2間が2.5～3.0mとばらつきを見せる。

柱穴　掘り方は円形、径は柱穴ごとの差が著しいが、40～50cmを測るものが多い。柱穴の深さは10～20cmと全体に浅い。柱痕跡の確認できたものは6基で、径は平均して13cmであった。

出土遺物　柱穴からは細片化した須恵質・土師質の土器が出土している。

SB59（図版43）

検出状況　SB61の北側に位置する。流路に切られている。

形状・規模　N87.5°Eに棟軸方向をとり、桁行2間以上、梁行3間以上からなる側柱建物である。

南側桁行方向で4.8m以上、西側梁行方向で4.4m以上を測る。平均柱穴間距離は桁行方向で2.4m、梁行方向で1.47mである。面積は21.12㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は隅円方形が主体をしめる。柱穴の規模は1辺66～28cmである。柱痕を確認することができたのは5つで、その径は30～21cmである。

出土遺物　掘り方内から奈良時代の須恵器片、他に土師質土器片が出土している。

SB60（図版44）

検出状況　SB60の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。。

形状・規模　N81°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる総柱建物である。南側桁行方向で5.10m、東側梁行方向で4.00mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.70m、梁行方向で2.0mである。面積は20.40㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は不整円形のものが主体をしめる。柱穴の規模は径70～30cmである。柱痕を確認することができたのは4つで、その径は26～23cmである。

出土遺物　掘り方内から奈良時代の須恵器片、他に土師質土器片が出土している。

SB61（図版43）

検出状況　SB63の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N64°Eに棟軸方向をとり、桁行3間、梁行2間からなる総柱建物である。南側桁行方向で4.32m、西側梁行方向で3.10mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.44m、梁行方向で1.55mである。面積は13.39㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形である。柱穴の規模は径37～20cmである。柱痕を確認することができたのは6つで、その径は22～15cmである。

出土遺物　掘り方内から土師質土器細片が出土している。

SB62（図版43）

検出状況　SB64の南側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N56°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行1間からなる側柱建物である。南側桁行方向で3.52m、西側梁行方向で1.75mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.7m、梁行方向で1.78mである。面積は6.16㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形である。柱穴の規模は径85～45cmである。柱痕を確認することができたのは4つで、その径は25～30cmである。

出土遺物　掘り方内から土師質土器細片が出土している。

SB63（図版44）

検出状況　SB63の北側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N4°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる側柱建物である。東側桁行方向で4.60m、北側梁行方向で3.40mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で2.3m、梁行方向で1.80mである。面積は15.64㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は不整円形のものが主体をしめる。柱穴の規模は径90～25cmである。柱痕を確認することができたのは、7つで、その径は40～13cmである。

出土遺物　掘り方内から土師質土器細片が出土している。

SB64（図版43）

検出状況　SB64の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　N68.5°Eに棟軸方向をとり、桁行2間、梁行2間からなる総柱建物である。北側桁行方向で3.10m、東側梁行方向で2.38mを測る。平均柱穴間距離は桁行方向で1.52m、梁行方向で1.19mである。面積は7.38㎡である。

柱穴　掘り方の平面形は円形である。柱穴の規模は径52～25cmである。柱痕を確認することができたのは3つで、その径は28～24cmである。

出土遺物　掘り方内から土師質土器細片が出土している。

SB65（図版44）

検出状況　調査区の東南部に位置する。平面プランはSB19・20と重なるが、柱穴の切り合い関係は生じない。

形状・規模　細長い総柱建物で、南北5間×東西2間を検出することができた。柱穴が消失している南部へ、さらに広がりを持つ可能性もある。長軸にあたる南北方向は10.30m、東西方向は5.18mをそれぞれ測る。長軸角度はN3°E、ほぼ正方位をなす。東西方向における柱穴間隔は2.3～2.6m、南北方向では中央の柱間が1.0mと極端に短いほかは、東西方向と同じ間隔で配される。

柱穴　掘り方はいずれも円形、径は50cmを測るものもあるが、大半は17～30cmにおさまる。深度は後世の削平などの影響から10～30cmと浅い。柱痕跡の確認できたものは1基のみで、中央に径10cmの痕跡がある。

出土遺物　胎土から中世の所産とみられる土器片が数点出土した。細片のため器形などはわからなかった。

第4節　土坑・井戸

SK03（図版45　写真図版35）

検出状況　No.Ⅱ地点で最も標高の高いA－3区で検出された。

形状・規模　歪な形の土坑を一段下げると、その偏った位置に0.9×0.4mの長方形の土坑が更に掘られている。この土坑の壁はほぼ垂直に近く立ち上がる。

出土遺物　土坑の上面からは弥生時代中期の高杯・壺・甕などが出土しているが、高杯1点を除くと小型の精製土器である。特に把手をもつ甕は焼成等も含めて特異な形態である。土器群より下の面にはサヌカイトのチップが水平に散らばっていた。小型ではあるが木棺墓の可能性が高く、棺上の土器が落ち込んだものであろう。同時代の近隣では類例をあまり見ない埋葬方法である。

SK10（図版47）

検出状況　調査区の西北端に位置する。

形状・規模　平面形は東西に長い長方形で、長軸3.90m、短軸2.20mを測る。断面形は浅い逆台形を呈する。埋土は上下2層に分かれ、灰黄褐色細砂～粗砂の上に同色の極細砂～細砂が堆積している。

出土遺物　弥生土器の壺（66,68,70）・高杯（67）が出土している。

SK13（図版47）

検出状況　調査区の西北端に位置する。溝との切り合い関係が認められる。

形状・規模　平面形は南北に長いやや歪な長方形で、長軸4.18ｍ、南側梁行方向で2.90～3.65ｍを測る。断面形は角張った浅い皿状で、埋土は褐灰色シルト混り細砂と黒褐色シルト混り細砂の２層に分かれる。

出土遺物　弥生土器の鉢（79,80,83）・壺（81）・甕（82）が出土している。

SK24（図版45　写真図版36）

検出状況　大型の柱穴の可能性もあるが、柱根の痕跡は認められなかった。

形状・規模　平面形態が円形の土坑で、直径、深さとも約60cmの規模をもつ。

出土遺物　埋土の上層から丸底壺が出土している。下層には礫が入れられていた。

SK35（図版46　写真図版36）

検出状況　SB61の北側に位置する。

形状・規模　平面形は楕円形を呈し、規模は長径1.60m、短径1.45mである。検出面からの深さは14cmを測る。径30cm以下の礫が80個程度、雑然と入れられている。

出土遺物　須恵器碗、（446,447）・小皿（449）土師器小皿（450）・椀（451）・甕（448）、白磁碗（451）などが出土している。

SK39（図版45　写真図版36）

検出状況　竪穴住居跡埋没後に設けられた土坑で、ある程度埋めた段階で土器を正置している。土器は赤褐色を呈する須恵器稜碗に、やはり赤褐色を呈する土師器台付皿の蓋を被せたものであり、意図的に同じ色合いの土器を選んでいる。胞衣容器の可能性を考えて、神戸市教育委員会の協力を得てX線撮影をおこない、内容物を調査したが、銭等は認められず、シルト質の土が堆積していた。

形状・規模　深さ20cm、一辺55cm程度の歪な隅円方形を呈する。

出土遺物　須恵器稜碗（314）、土師器台付皿（315）が埋納してあった。

SK40（図版46）

検出状況　A区ＳＢ66の西側に位置する。

形状・規模　平面は不整形で、東西1.56m、南北1.08mである。深さは6～4cmと浅い。土坑の西側よりに径20cm以下の礫が入れられている。

出土遺物　土師器の高杯の破片が出土している。

第５節　埋設土器　（図版48・49　写真図版39・40）

ST01（図版48　写真図版39）

検出状況　標高約17mと、調査区内では比較的高い部分に位置し、身となる土器、及び別個体の土器の一部を検出した。ほぼ直位で埋設される身の土器は、口縁部が欠損しているが、土器内に落ち込んだ土器片の状況から、埋設当初から意図的に打ち欠いたものと考えられる。また、別個体の土器は、甕及

び高杯の一部であり、身の土器の外側に接しているが、蓋となるかについては不明な点が多い。

規模・形態　埋設土坑の平面形は円形を呈し、直径約67cmである。また、埋設土器の上端から埋設土坑の床面までの深度は26cmである。

出土遺物　身の土器は広口壺（101）で、落ち込んだ土器との接合でほぼ完形となった。また、身の土器の外側に接していた土器は、甕（102）と高杯（100）で、埋設土坑内の破片遺物との接合で、同一個体のものがあり、個々の土器として、図上での復元は出来た。

機能・用途　人骨等の出土が無く、断定するには難があるが、身となる広口壺と、蓋や補強材としての可能性を持つ高杯や甕のセットを考慮すれば、土器棺として理解しても差し障りは無いと考える。

ST02（図版48　写真図版39・40）

検出状況　確認調査時にトレンチの調査区境で検出したものである。標高約18.3mと、調査区内では比較的高い部分に位置し、身となる土器と、蓋となる土器との合わせ口で検出した。土器は、長軸を北西に向けた斜位で埋設されている。蓋となる土器は高杯だが、脚部が欠損している。遺構中の出土土器からは、破片も確認していないことから、埋設時に意図的に打ち欠いたものか、後世の削平によるものかは不明である。

規模・形態　埋設土坑の平面形は、やや長軸方向に長い変形した卵形を呈し、長軸63cm、短軸51cmである。また、埋設土器の上端から埋設土坑の床面までの深度は約22cmである。

出土遺物　身の土器は大型の無頸壺（99）で、完形である。また、蓋となる土器は高杯（98）で、脚部は欠損している。

機能・用途　人骨等の出土は無いが、身となる無頸壺と蓋となる高杯とのセット関係、及び検出状況から、土器棺で間違いなかろう。

ST03（図版49　写真図版40）

検出状況　標高約15.7mと、調査区内では中段よりやや低い部分に位置し、身となる土器と、土器から遊離して、埋土上に浮いた状態で出土した土器片とで形成される。土器は、土器の規模より二周り程広い土坑内に、据えるための土坑を設けて、ほぼ直位に埋設している。身となる土器は、上半部が欠損してるが、埋設土坑検出面のレベルを考えれば、埋設当初の状況であることが想定できる。

規模・形態　埋設土坑の平面形は、やや太めの楕円形を呈し、長軸63cm、短軸50cmである。また、埋設土坑の検出面から、埋設土器を据えた床面までの深度は約24cmである。

出土遺物　身の土器は、上半部が欠損する甕（103）である。蓋となる土器は出土していない。

機能・用途　人骨等の出土は無く、土坑に対して土器の残存状況も悪い事から、土器棺とは性格を異にするものと考える。

ST04（図版49　写真図版40）

検出状況　確認調査時にトレンチの調査区境で土器の一部を検出し、拡張して全掘したものである。標高約14.4mと、調査区内の低い部分に位置し、身となる土器と、蓋となる土器との合わせ口の状態で検出した。土器は、ほぼ水平で埋設され、土圧及び後世の削平により、破片遺物の一部は埋設土器内に落ち込み、その他は欠損している。また、身と蓋の口縁部が合わさる部分の傍らには、副葬と考えられる

須恵器の坏身がほぼ完形の状態で据えられている。なお、この須恵器の坏身内には、調査時に炭化物が遺存していたが、内容物の確認には至らなかった。

規模・形態　埋設土坑の平面形は、やや変形した隅円長方形を呈し、長辺110cm、短辺87cmである。また、埋設土器の上端から埋設土坑の床面までの深度は約24cmである。

出土遺物　身の土器は、7世紀代の土師器の長胴甕（105）である。蓋となる土器は、底部が欠損するが、同時期の丸底の甕（104）である。また、副葬遺物として置かれた須恵器の坏身（11）が出土している。

機能・用途　人骨等の出土は無いが、2基の土器の合わせ口状況や、近接して据え置かれた須恵器の坏身の特異性を見ても、土器棺として理解するに難は無い。

第6節　溝・流路・旧河道

流路1（図版51　写真図版41）

検出状況　東側の谷から、西側に向かって流れる自然流路である。西側からやや北へ振りながら、等高線にほぼ直交して流れ、E区で大きく北へ屈曲している。SD500を切っている。SD500との交点付近では堰状の施設が確認されている。かなり埋まった段階のSD500へ水を流していたと考えられる。

形状・規模　幅は9～3mで、深さは検出面より1.2～0.4mである。断面は逆台形を呈する部分が多い。

埋土　中・下層（断面Bの5～9層）の埋土には礫を含む部分が多く、幾度か洪水を繰り返していたことがわかる。上層（断面Bの1～4層）の埋土は細砂～極細砂の部分が多く、流路としての機能を失ってのち、徐々に埋没していったようである。

出土遺物　中・下層には弥生～奈良時代の土器が大量に含まれている。上層には平安後期までの須恵器・土師器・陶磁器などが含まれている。

SD500（図版51　写真図版41）

検出状況　南北方向に、ほぼ等高線に沿って流れている。流路1、SX01、ピットなどに切られている。基本的には古墳時代の溝であるが、流路1との交差部分では堰状の施設が確認されていることから部分的には奈良時代まで流れていたと考えられる。

形状・規模　幅は5.5～3.5mで、深さは検出面より2.2mである。断面は逆台形を呈する部分が多い。

出土遺物　古墳時代の須恵器・土師器などが出土している。

SD15（図版52）

検出状況　SH17の周壁溝である。

形状・規模　幅は15～25cmで、深さは検出面より10cmほどである。断面は逆台形を呈する部分が多い。

出土遺物　土器片もわずかに出土している。

SD20（図版52）

検出状況　調査区東に位置する。東西方向に流れている。一部をピットに切られている。SD19と重な

っているが、切り合い関係ははっきりしていない。枝分かれした可能性も考えられる。また西端では北側のSK39を切る。西端は後世の水路によって切られている。

形状・規模　総延長約7.1mで、幅は約0.8m、検出面からの深さ27cmである。断面は逆台形を呈する部分が多い。

出土遺物　須恵器の坏（318、319）、白磁碗（492）などが出土している。

SD24（図版52　写真図版43）

検出状況　調査区北に位置する。北東－南西方向に緩やかに蛇行してのびており、おおむね等高線に沿う。両端は地形改変のため削平されて消失している。

形状・規模　総延長約16mで、幅は1.3～0.8m、検出面からの深さ18cmである。断面は逆台形を呈する部分が多い。

出土遺物　古墳時代の須恵器の坏蓋（250）などが出土している。

SD29（図版52）

検出状況　調査区北に位置する。東西方向に流れている。西端はSE01に切られるかもしくは取り付く。東端は後世の攪乱によって切られている。

形状・規模　総延長10.8m、幅は45～75cmで、検出面からの深さ18cmである。断面は椀形を呈する。

出土遺物　土師器の甕（258）などが出土している。

SD30（図版52）

検出状況　調査区の北端に位置する。SH21との切り合い関係が認められるが、前後関係は定かではない。

形状・規模　やや弧状を呈して、調査区外に延びる。幅は85cm、深さ15cmを測る。断面形は片側が浅く、底部に灰黄褐色細砂～粗砂が上部に褐色粗砂が堆積している。

出土遺物　弥生土器の甕（132,133,135）、台付鉢（136）、有孔円盤（505）等が出土している。

SD36（図版52）

検出状況　調査区北に位置する。東へ緩く張り出し弧を描きながら南北方向にのびる。SD34を切っている。

形状・規模　総延長約8ｍ、幅は20～40cmで、検出面からの深さ13cmである。断面は椀形を呈する。

出土遺物　須恵器の碗（257）などが出土している。

SD38（図版52　写真図版43）

検出状況　調査区西に位置する。東西方向に流れている。西端は調査区外へと続き、東端はSD39と接するところで収束する。

形状・規模　総延長4ｍ、幅は60～120cmで、検出面からの深さ35cmである。断面は逆台形を呈する。

出土遺物　遺物は中層から出土することから溝がある程度埋まった段階で廃棄されたものと考えられる。須恵器の高坏（248,249）を図化した。

SD39（図版52）

検出状況　調査区西に位置する。東西方向に流れている。西端はSD38と接するところで収束し、東端は削平されている。

形状・規模　総延長6.5ｍ、幅は50～100cmで、検出面からの深さ15cmである。

出土遺物　弥生土器の壺（138・139）を図化した。

SD41（図版52）

検出状況　調査区南部で検出された自然流路の東側に位置する。SD42とほぼ接し、柱穴との切り合い関係が認められる。

形状・規模　南東から北西に向かって流れ、調査区外へ延びる。検出長は約７ｍで、幅1.12ｍ、深さ27cmを測る。断面は桝状である。

出土遺物　弥生土器の壺（140）、古墳時代の須恵器の坏身（254）が出土している。

SD42（図版52）

検出状況　調査区南部で検出された自然流路の東側に位置する。SD41とほぼ接し、柱穴との切り合い関係が認められる。

形状・規模　南東から北西に向かって流れ、調査区外へ延びる。検出長は約40ｍで、幅約１ｍ、深さ38cmを測る。断面はやや逆台形で、埋土は７層に分かれるが、大きく分けて下部には粗砂～礫が、上部には細砂～極細砂が堆積している。

出土遺物　古墳時代の須恵器の坏身（256）・甕（255）・提瓶（261）・有孔円盤（502）が出土している。

SD50（図版52　写真図版43）

検出状況　北東から南西に向かって流れる溝である。弥生時代の集落域を限るものとも考えられる。

形状・規模　断面は2段掘りになっている。上段はゆるやかで、下段は弧状に掘り込まれている。上段の幅は2.5m、下段の幅は64cmで、上段よりの深さは50cmである。

埋土　下段の溝内には細砂～極細砂が堆積し、その上は洪水による中砂に覆われている。

出土遺物　弥生土器の破片が出土している。

SD51（図版52）

検出状況　流路1の北側に沿って流れる溝である。

形状・規模　断面はゆるい弧状である。幅は2.2m、深さは36cmである。

埋土　礫が多く堆積し、洪水によって埋まったことがうかがわれる。

出土遺物　奈良時代の須恵器の破片が出土している。

旧河道（図版3）

検出状況　旧河道の東岸より15mまでの範囲を検出した。大津茂川の旧河道と考えられる。調査区の幅が狭小なため、ベース面より80cm程度までしか掘削できず、それ以下については部分的に掘り下げたのみである。東岸部で橋脚と考えられる杭列を検出した。

埋土　粗砂～シルトのラミナやシルトが厚く堆積していることから、比較的安定した穏やかな流れであったと考えられる。

出土遺物　橋脚より下流部で岸に沿って須恵器杯Ghや大甕など奈良時代の須恵器が比較的まとまって出土している（322～382）。橋脚付近から投棄された可能性が高い。掘り下げ部からは古墳時代の土師器が出土している。

橋脚（図版53　写真図版44）

検出状況　旧河道の東岸付近で橋脚と考えられる杭列を7本検出した。検出できたのは東岸から2間分のみで、北西方向の調査区外に向かって延びている。

形状・規模　杭は85～75cmの幅をもって2列に並んでいる。岸より1.2mと3.7mのところで確認された。さらに補助的に杭が隣接して打ち込まれている。杭は径10cm程度で、検出面より50cmほど打ち込まれている。

第7節　その他の遺構

井戸

SE01（図版53　写真図版38）

検出状況　調査区の北端に位置する。底部はわずかながら水が浸み出しており、素掘りの井戸と考えられる。

形状・規模　平面は楕円形で、長径1.92m、南北1.52mである。深さは80cmである。

出土遺物　須恵器片が出土したが、細片のため図化することができなかった。

不明遺構

SX02（図版47）

検出状況　調査区の西北部に位置する。溝・柱穴との切り合い関係が認められる。

形状・規模　平面形は北東・南西に長軸方向をとる長方形で、長軸6.60～7.50ｍ、短軸6.20ｍを測る。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は一部ににぶい褐色細砂～極細砂がみられるが、大きくは中央部に黒褐色細砂・粗砂が、その周りに褐色細砂が堆積する。

出土遺物　弥生土器の甕・高杯・無頸壺・壺・小型鉢等が出土している。

中世墓

SX01（図版50　写真図版37・38）

検出状況　SD500の埋土上で検出された。土坑は棺の長側板の一方を広く掘っており、その部分に転倒した状態で、口縁部を打ち欠いた灰釉の小壺が出土している。棺の上面では蓋板と思われる炭化した板材がたわんだ状態で検出された。木棺の上面は炭で覆われていたと考えられ、木棺の埋土にも炭・灰を多く含んでいる。底や側の板材は明確には確認できなかった。これは棺の内側に燃料を充填して火をつけたことを物語っているのであろう。また、径20cm弱の石が木棺内に落ち込んでおり、墓上に標石が置かれていたと考えられる。

形状・規模　掘り方はややいびつな楕円形を呈し、東西96cm、南北74cmである。地表面からの深さは23cmを測る。掘り方の北よりに木棺が据えられている。木棺は長方形を呈し、東西72cm、南北38cmである。棺の高さは20cm強程度である。木棺としては小型であることから小児用か、あるいは火葬骨を納めた木櫃と考えられる。

出土遺物　木棺内からは鉄釘、鉄滓状塊、木棺外の掘り方内から灰釉陶器の瓶（445）が出土している。周辺のSD500上層からはやはり口縁部を打ち欠いた須恵器小壺が出土していることから、別の墓が存在した可能性もある。

第５章　出土遺物

第１節　土器・土製品

１．確認調査出土土器（１～15）

１～５は、広口壺の口縁部である。１は、やや開きながら垂下して面をなす口縁端部で、３条の擬凹線文上に刺突列点文と円形浮文を施す。器面調整は、外内面共にヨコナデである。２は、頸部に４条の凹線文を施す。口縁端部は上下に肥厚して面をなし、羽状列点文を施した上に円形浮文を貼付する。３は、頸部に３条の凹線文を施す。口縁部は口縁端部にかけて大きく外反して上端に面をなし、羽状列点文を施す。また、口縁端部は僅かに垂下する。器面調整はヨコナデ及びナデであろう。４は、頸部に指頭圧痕文凸帯を貼付し、口縁部は開きながら大きく外反する。口縁端部は、上下に拡張して面をなし、３条の擬凹線文を施した後に円形浮文を貼付する。器面調整は、外面をハケメの後ナデ、内面をイタナデで仕上げたと見られ、工具痕が残る。５は、開きながら短く外反し、口縁端部はやや開きながら垂下して面をなす。端面は４条の擬凹線文を施し、一部に貼付していた円形浮文の痕跡が残る。頸部外面には、縦方向のハケメの後に７～８条を基本とする櫛描き直線文と波状文を交互に施す。内面は、縦方向のハケメと頸部付近をイタナデで仕上げ、口縁端部付近に波状文を施す。

６～７は、甕であろう。６は、胴部中位に最大径を持ち、口縁部は稜の鈍い外傾気味の「く」字状を呈する。口縁端部は外下気味に肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面に縦及び横方向のハケメ、内面をナデであろう。７は、やや直口気味の「く」字状口縁を呈し、口縁端部は内に強く拡張する。器面調整は、外内面共に不明である。

８～９は、底部である。８は、やや裾広がりの底部から大きく開きながら立ち上がるもので、壺の底部と考えられる。器面調整は、外面に縦方向のハケメ、内面にヘラケズリである。９は、小型の甕であろう。外内面調整は、磨滅により不明である。

10～12は、須恵器である。10は、坏身である。全体に小型で、口縁部は内傾気味に立ち上がり、口縁端部は細身に丸くおさめる。底部付近はヘラケズリで仕上げ、それ以外は回転ナデである。時期は、６Ｃ末～７Ｃ初頭であろう。11は、坏身である。全体に小型で、器形は碗状を呈し、口縁端部は丸くおさめる。器面は回転ナデで仕上げる。時期は、７Ｃ前半である。12は、碗である。回転糸切り痕を残す底部からやや内彎気味に開く体部を呈する。体部は、外内面共に回転ナデで仕上げる。12Ｃ代のものと考えられる。

13は、須恵質の風字硯である。全体の器形は、片側の脚部のみの残存で不明であるが、海部は非常に良好な研磨状況を示す。

14は、土師質の羽釜である。器形は口縁部のみの残存で、ほぼ水平に伸びる羽部から内へ内彎気味に立ち上がる口縁部を呈する。外面はヨコナデ調整で、内面は横方向のハケメが残る。

15は、青磁碗の一部である。やや外反気味に開く口縁部で、口縁端部は丸くおさめる。外面には、連弁文を施す。

2．全面調査出土土器

弥生時代の土器

1．竪穴住居出土土器（16～57）

SH02（16）

16は、広口壺である。口縁部は、比較的強く窄まる頸部から大きく外反する。口縁端部は下方に強く拡張して面をなし、波状文を施す。器面調整は、外面をタテハケで、肩部に列点文を施し、内面をナデで、頸部付近には指頭圧痕が残る。

SH03（17～19）

17・19は、鉢である。17は、小型で、小振りの平底からラッパ状に開く形態を呈する。器面調整は、外面を斜方向のタタキ、内面をイタナデで、底部付近に工具痕が残る。19は、やや大型で、尖底気味の丸底からラッパ状に開く形態を呈する。器面調整は、外面を斜方向のタタキ、内面をイタナデで、底部付近に工具痕が残る。

18は、壺形のミニチュア土器である。平底から内彎気味に立ち上がり、屈曲して短く開く口縁部を持つ。器面調整は、外面をナデ及びヨコナデで仕上げ、内面をナデで底部付近はイタナデであり、指頭圧痕と粘土接合痕が残る。

SH04（20）

20は、ほぼ完形の高杯である。受口状の杯部外面には４条の擬凹線文が巡り、口縁端部の肥厚は小さい。脚部は円筒状の柱状部と短く緩やかに開く裾部を持つ。器面調整は、杯部の外内面をハケの後ナデで、脚部の外面をハケメ若しくはイタナデで、内面をケズリで仕上げる。また、裾部には16箇所程の円孔が施される。

SH06（21・22）

21は、大型器種の底部である。やや上げ底で大きく開く。器面調整は外面をケズリで、内面を粗いケズリの後にイタナデで仕上げる。

22は、高杯の杯部である。受口状の杯部外面には、２条の退化凹線文が巡る。口縁端部は、僅かに肥厚し、上端に面を持つ。脚部との接合は、杯部の底に粘土円盤を充填する連続成形技法がとられる。器面調整は、外内面共に縦方向のヘラミガキを主体とし、口縁部付近をヨコナデである。

SH11（23～25）

23は、小型の広口壺である。口縁部は大きく外反し、口縁端部で上下へ僅かに拡張して面をなす。器面調整は、外内面共にヨコナデで仕上げ、外面に縦方向のハケメが若干残る。

24は、大型の直口壺の口縁部である。口縁部は、口縁端部付近でやや内彎気味に開き、口縁端部は僅かに肥厚し、面をなす。口縁端部下外面には、４条の凹線文を施す。器面調整は、外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメで、後にヨコナデで仕上げる。

25も、直口壺である。口縁部は、稜線の緩い屈曲部からほぼ垂直に短く立ち上がる。口縁端部は、丸くおさめ、外面に１条の沈線を有す。器面調整は、外内面共に縦方向を主体としたハケメの後ナデで、口縁部付近はヨコナデだが、磨滅により不明確である。

SH14（26～30）

26は、脚付き無頸壺である。脚部は中空で、裾部に向かって緩やかに開くものである。無頸壺は、やや下膨れの稜の鈍い算盤玉状を呈し、底を粘土円盤で充填する。器面調整は、脚部外面を縦方向のヘラミガキで仕上げ、無頸壺外内面をナデ及びヨコナデであるが、磨滅により不明確である。

27は、高杯とした。杯部は、中空の脚部から大きく開き、中位で内側へ強く屈曲する鉢状を呈する。口縁端部は、小さく屈曲して突起状を成す。器面調整は、内面を横方向のハケメで、口縁部付近をヨコナデであろうが、外面は磨滅により不明確である。

28は、器台である。器壁が厚く、比較的小型の器種で、中位に円孔を有す。器面調整は、外面に縦方向のハケメが見えるが、他は磨滅により不明である。

29は、長頸壺であろう。口縁部は、僅かに開きながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。器面調整は、内面に横方向を主体とするハケメが顕著に残る他は、磨滅により不明である。

30は、ミニチュア土器である。僅かに接地面を持った丸底に、緩やかに外反する口縁部を有す。器面は手捏ね成形に伴う指頭圧痕が多く残る。

SH18（31）

31は、甕である。胴部最大径は、中位よりやや上半部に位置し、稜線はやや鈍いながら強く屈曲する「く」の字状口縁を有する。口縁端部は、僅かに摘まみ上げて、面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面を縦方向のヘラケズリで、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。

SH19（32）

32は、小型高杯の脚である。柱状部はほぼ中実で、短く開く裾部を持つ。脚端部は、上下にやや拡張して面をなす。器面調整は、外面を縦方向の粗いヘラミガキ、内面をイタナデである。

SH21（34）

33は、脚付き無頸壺である。脚部は、中空の柱状部から緩やかに開く裾部で、裾部付近には円孔を有す。無頸壺は、やや稜の鈍い算盤玉状を呈し、底を粘土円盤で充填する。器面調整は、磨滅及び付着物により不明である。

34は、小型高杯の脚部であろう。短い柱状部から緩やかに開く裾部を持ち、脚端部は肥厚が小さい。器面調整は、外面をナデで、杯部付近をヨコナデで仕上げ、口縁部内面に横方向のケズリが残る。

SH22（35～40）

35は、高杯の杯部である。受口状のもので、口縁端部は僅かに肥厚して面をなし、端部下から屈曲部付近にかけて3条の凹線文を施す。器面調整は、外面を脚部付近に縦方向、杯部に横方向のヘラミガキで、内面を縦方向を主体としたヘラミガキで仕上げる。また、口縁部付近はヨコナデである。

36は、無頸壺である。窄まりの弱い口縁部は、上方に屈曲して短く立ち上がる。口縁部下には、紐通し孔2箇所を有す。器面調整は、外面をナデ及びヨコナデで、内面にミガキが見える。

37は、甕の口縁部である。口縁部は「く」の字状を呈し、口縁端部は内へ若干拡張して面をなす。器面調整は、外面を縦方向のハケメの後ヨコナデ、内面をケズリの後ナデであるが不明瞭である。

38は、甕の底部である。平底の底部には、焼成後穿孔を施す。器面調整は、外面を縦方向のハケメ、内面を縦方向のイタナデである。

39は、小型高杯の脚部であろう。中空の柱状部から裾部にかけて緩やかに開き、脚端部でやや拡張して面をなす。裾部付近には円孔7箇所を施す。器面調整は、外面を縦方向のヘラミガキ、内面をケズリで、脚端部をヨコナデで仕上げる。

40は、高杯の杯部である。受口状の杯部で、外面の口縁部下と屈曲部には2箇所の沈線を有す。器面調整は、外内面共にナデ及びヨコナデであるが、外面にはヘラミガキが見える。

SH23（41～43）

41・42は、高杯である。41は、水平口縁高杯の杯部である。器面調整は、外内面共にヨコナデで仕上げる。42は、水平口縁の完形のものである。柱状部はやや円筒状の中空で、脚端部は外に拡張して面をなす。柱状部外面には、6条と8条の単位で2箇所のヘラガキ沈線を施す。また、裾部には7箇所の円孔を施す。器面調整は、杯部外内面と脚外面をヘラミガキ、脚内面をヘラケズリである。また、口縁部はヨコナデで仕上げる。

43は、甕である。平底で卵倒形の器形は胴部中位に最大径を持ち、強く窄まる口縁部は、「く」の字状を呈する。口縁端部は、丸みながら上方へ僅かに肥厚する。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後に刺突列点文を施し、内面をイタナデ、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。

44は、台付き鉢である。44は台部のみであり、鉢底部の粘土円盤が剥離している。外面は、磨滅により調整不明で、内面は横方向のケズリを施す。また、屈曲部下には推定5箇所の円孔を施す。

SH24（45・46）

45は、台付き鉢である。形態は44とほぼ同様であるが、やや小振りである。器面調整は、外面をナデ及びヨコナデで、内面をケズリで仕上げる。

46は、広口壺の口縁部である。強く窄まる頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁端部は垂下し、面をなす。器面は、磨滅のため調整不明である。

SH25（47～52）

47は、小型の鉢であろう。器形は、平底からやや内彎気味に開く。器面調整は、磨滅により不明瞭ながら、内面に横方向のイタナデの痕跡が見える。

48・49は、把手付きの直口壺である。48は、胴部最大径を上部に持つやや肩張りの胴部で、ほぼ直上に短く立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は、僅かに肥厚して面をなす。口縁部下外面には1条の凹線文を施す。肩部には、把手装着時の穿孔が残る。器面調整は、磨滅により不明である。49は、頸部から開きながら立ち上がる「く」の字状口縁を呈し、所謂水差しとも言える。口縁端部は、僅かに肥厚して面をなす。口縁部下外面には、2条の凹線文を施す。肩部には、把手を直立気味に装着する。器面調整は、磨滅により不明ながら口縁部は、ヨコナデであろう。

50は底部であるが、49と同一固体の可能性がある。

51は、器台の裾部であろう。端部は、若干肥厚する。外面には、3条と現状で2条の凹線文を持つ。また、凹線文間には円孔の痕跡が見える。器面は磨滅により不明ながらナデ及びヨコナデであろう。

52は、高杯の脚部である。円筒状の柱状部に、緩やかに開く裾部を持つ。脚端部は肥厚及び外側へ大きく拡張して面をなす。裾部には10箇所の円孔を施す。杯底部は粘土円盤充填によるものである。脚外面は縦方向のヘラミガキで、内面は横方向のケズリ及びナデで仕上げる。

SH31（53）

53は、甕の口縁部である。口縁部は、強く屈曲して外反しながら開く「く」の字状を呈し、口縁端部にかけて段を持って短く開く、複合口縁をなす。口縁部外内面はヨコナデで、胴部内面には斜め方向のハケメで調整する。

SH33（54～57）

54・55は、広口壺の口縁部である。54は、やや小型のもので、多く外反する口縁部に、若干外側へ垂下して面をなす口縁端部を持つ。外端面には、３条の凹線文を巡らす。器面調整は、ヨコナデである。

55は、大型のもので、口縁端部は上下方に拡張して面をなし、３条の凹線文を巡らす。器面調整は、ヨコナデであろう。

56は、甕の口縁部である。口縁部は、「く」の字状を呈し、口縁端部でつまみ出して端面をなす。器面調整は、ヨコナデ及びナデであろう。

57は、直口壺の口縁部である。僅かに外反しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。口縁端部下外面には、１条の凹線文が巡る。器面調整は、外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメで、口縁端部付近はヨコナデである。

２．土坑出土土器（58～96）

SK01（60・61）

60・61は、甕である。60は、「く」字状口縁を呈し、口縁端部は上方に拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面をハケメの後にナデ、内面をイタナデであろう。また、口縁部はヨコナデである。61は、甕の上半部である。口縁部は強く外へ屈曲し、口縁端部は上方に拡張して面をなす。胴部最大径付近外面には、柳葉状の列点文を施す。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後にナデで、内面をヘラケズリの後にナデである。また、口縁部はヨコナデである。

SK17（58・59,62～64）

58は、広口壺の口縁部である。口縁部は強く外反し、口縁端部は上下方に若干拡張して面をなす。端面には、僅かながら波状文が見える。器面調整はヨコナデである。

59は、器台であろう。形態は小片のため不明だが、胴部から裾部にあたる部分と考えられる。外面には、現状で５条の凹線文と２本の縦線の区画内に斜格子を配した、ヘラ描き線刻文様を施す。

62は、口縁端部を僅かにつまみ上げるものである。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメで、内面をイタナデで仕上げる。また、口縁部はヨコナデである。

63は、器台の受け部であろう。器形は、緩やかに窄まる胴部からやや内彎気味に立ち上がるもので、外面には３条と２条の凹線文の間に羽状列点文を施し、口唇部外面に竹管形の円形浮文を貼付する。器面は、外面をヨコナデ、内面を横方向のハケメの後にヨコナデで仕上げる。

64は、器台の裾部である。外側へ緩やかに開くもので、端部は肥厚して面をなす。外面には、現状で３条の凹線文を施す。器面は、外面をヨコナデ、内面をイタナデで仕上げる。

SK04（65・71）

65は、広口壺である。胴部最大径は中位にあり、頸部で急激に窄まる。短く開きながら立ち上がる頸部は、口縁端部にかけて大きく外反する。端部は、上下方に若干拡張して面をなし、端面に波状文を施す。また、胴部中位には列点文を施す。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後にナデ、内面をケズリで仕上げ、中位には指頭圧痕が残る。

71は、広口壺65の底部と考えられる。器面調整は、外面を縦方向のヘラミガキで仕上げるが、内面は磨滅のため不明である。

SK10（66～68・70）

66は、大型広口壺の口縁部である。屈曲後大きく外反する口縁部は、口縁端部で肥厚しつつやや拡張

して面をなし、端面に3条の凹線文を巡らす。また、頸部屈曲部付近には、貼付け凸帯の剥離痕跡が見える。器面は、磨滅のため調整不明である。

67は、高杯の杯部である。口縁部は、屈曲部に突起を持つ水平口縁で、口縁端部は若干下方気味肥厚する。器面は、磨滅のため調整不明である。

68・70は、甕の口縁部である。口縁部は、稜の鈍い「く」の字状口縁で、口縁端部でやや肥厚する。68の器面は、胴部外面を縦方向のハケメで、内面に指頭圧痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。70の器面は、磨滅により調整不明である。

SK02（69）

69は、甕の口縁部である。口縁部は、稜が鈍いながら屈曲の強い「く」の字状を呈し、口縁端部はやや肥厚して面をなす。器面調整は、胴部外面を複数原体のハケメを縦横に施し、内面を粗い縦方向のハケメで仕上げる。内面には粘土接合痕跡が残る。また、口縁部は、ヨコナデである。

SK03（72～76）

72は、小型の広口壺で、ほぼ完形のものである。胴部は、最大径を中位に持ち、丸みを帯びた算盤玉状を呈する。強く窄まる頸部は、口縁端部にかけて大きく外反し、口縁端部は肥厚しつつ上方に拡張する。頸部外面には、貝殻腹縁状の刺突列点文を施し、口縁部内面には列点文を施す。器面調整は、磨滅のため不明瞭だが、胴下半部内面には縦方向のハケメが残る。

73は、小型の甕である。胴部上半に最大径を持つ胴部で、「く」の字状口縁を有す。胴部の屈曲部付近には把手を有すが、状況から双把手と考える。器面調整は、外面を縦方向のハケメの後ヘラミガキで仕上げ、内面を下半部で縦方向のイタナデ、上半部でナデだが、指頭圧痕が顕著に残る。

74は、ミニチュア土器である。器形は、台付無頸壺を模倣したもので、口縁端部付近には紐孔2箇所を穿つ。器面調整は、手捏ね成形の後ナデを主体とするが、外面に縦方向のヘラミガキも見える。

75は、小型の高杯である。受口状の杯部に、円筒状の柱状部から短く緩やかに開く裾部を有す。杯部の口縁端部は面を持たず、細身に丸くおさめる。脚端部は、僅かに肥厚して面をなし、端部付近には12箇所の円孔を巡らす。器面調整は、杯部外面にヘラミガキの痕跡を残すのみである。

76は、完形の高杯である。杯部は、屈曲部に突起状の張出を持つ水平口縁で、口縁端部は強く垂下する。脚部は、円筒状の柱状部から屈曲せずに大きく開く裾部を持つ。脚端部は、肥厚しつつ若干外へ拡張する。脚部の柱状部外面には、12条と8条の退化凹線文の間に、2箇所1単位の円孔を2箇所配している。また、裾部には、24箇所の円孔を施す。器面調整は、外面と杯部内面を縦方向のヘラミガキで、脚部内面をケズリで仕上げる。また、杯部口縁部は、ヨコナデである。

SK30（77・78）

77は、直口壺の口縁部である。口縁部は緩やかに屈曲して、外傾気味に立ち上がる。口縁端部は、僅かに肥厚して面をなす。頸部の屈曲部外面には2条の凹線文が巡る。器面調整は、口縁部内面に板状工具痕跡が見える以外は、磨滅により不明である。

78は、底部である。器種は不明である。器面調整は、外面を縦方向のヘラミガキであろう。

SK13（79～83）

79・80は、小型の鉢であろう。口縁は外側へ折り曲げて丸くおさめ、「逆L字」状を呈する。79の器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をナデである。また、口縁部をヨコナデで仕上げる。80の器面調整は、胴下半部外面をハケメ、内面をミガキである。また、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。

81は、直口壺の口縁部である。口縁部は、やや内彎気味に立ち上がるもので、口縁端部は肥厚して面をなす。内彎する付近の外面には2条の凹線文が巡る。器面調整は、外面を縦方向のハケメで、凹線文付近から内面にかけてヨコナデである。

82は、甕の口縁部である。「く」字状を呈する口縁部は、僅かに外反しながら立ち上がる。口縁端部は、肥厚しつつ上方につまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面をハケメ、内面をナデで一部工具痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

83は、大型の鉢である。器形は、胴部上位に最大径を持ち、稜の鈍い「く」字状口縁を有する。口縁端部は、肥厚しつつやや上方に拡張して面をなす。器面調整は、磨滅のため不明である。

SK24（84）

84は、甕の口縁部である。器形は、強い窄まりから頸部で大きく屈曲する「く」字状口縁を有する。口縁端部は、粘土の継ぎ足しにより上方に拡張して面をなす。口縁端部外面にはヨコナデ時の沈線状の凹みが残る。器面調整は、胴部外面をハケメの後ナデ、内面をイタナデで、口縁部はヨコナデである。

SK34（85・86）

85は、無頸壺である。器形は強く内彎する鉢状で、口縁部は屈曲して内へ大きく拡張する。口縁部及び胴部中位外面には、それぞれ1条と3条の凹線文が巡る。器面調整は、磨滅のため不明だが、ヨコナデを主体とするものであろう。

86は、器台の受け部である。器壁は分厚く、大きく外傾する。口縁端部は、肥厚しつつ下方へ若干拡張して面をなす。端面には3条の凹線文を巡らし、恐らく2個1単位となる円形浮文を貼付する。

SK31（87）

87は、小型の台付き鉢であろう。形態は、低く短く開く脚台に受け口状の口縁部を持つ鉢が付くものである。口縁端部は、肥厚して面をなす。口縁部下外面には、2条の凹線文が巡る。器面調整は、杯部外面にヘラミガキが見える他は、磨滅のため不明だが、口縁部はヨコナデであろう。

SK41（88～96）

88は、広口壺の口縁部である。口縁部は強く外反し、口縁端部は外傾気味に垂下して面をなす。端面には施文方向をする羽状列点文を施す。調整は磨滅のため不明である。

89～91は甕の口縁部である。89の口縁部は、強い屈曲を持つ「く」字状で、口縁端部は肥厚しつつやや上方に拡張して面をなす。端面には調整時による1条の沈線を有す。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後ナデ、内面をイタナデで、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。90は、大型の甕で、口縁部は「く」字状を呈する。口縁端部は上下方に拡張して面をなし、端面に4条の擬凹線文が巡る。器面調整は、磨滅のため不明ながら、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。91の口縁部は、屈曲の強い「く」字状で、口縁端部は肥厚しつつ僅かに下方へ拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面をハケメの後ナデ、内面をイタナデで、口縁部はヨコナデで仕上げる。

92は、広口壺の口縁部である。口縁部は、短く緩やかに外反し、口縁端部は肥厚して面をなす。器面調整は、外面をハケメの後ナデ、内面をイタナデで、工具痕も残る。また、口縁部はヨコナデである。93は、高杯の脚部である。器壁が厚く、中空の柱状部に短く緩やかに開く裾部を持つ。脚端部は、外傾気味に上方へ拡張して面をなす。端面には3条の擬凹線文が巡る。裾部には、推定5箇所の円孔を施す。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をケズリで、シボリ痕も残る。

94は、台付き鉢あるいは無頸壺である。鉢部は、やや内彎気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめ

るものである。器面調整は、外内面共に縦及び横のヘラミガキで仕上げる。

95・96は、器台である。95は大型器台の胴部で、外面に現状で17条の凹線文を施す。また、凹線文下の裾部に至る部分では、円形透かしがあり、その周囲に内区に斜行文を有す鋸歯文がヘラ描きで施される。器面調整は、磨滅のため不明ながら、内面にはハケメが見える。96はやや小型の裾部で、裾端部がやや外傾気味に拡張して面をなす。裾部付近には、現状で2条の退化凹線が巡る。器面調整は、外面をナデ、内面をイタナデである。

D地区土器溜まり（97）

97は、器台の裾部であろう。外面には現状で9条の凹線文が巡り、円形透かしの一部が残存する。また、円形透かしの周囲には、波状文も見える。器面調整は、磨滅により不明ながら、内面に横方向のイタナデが看取される。

3．埋設土器（98～103）

98は、高杯の杯部である。口縁部は、屈曲部に断面長方形の突起を有する水平口縁で、口縁端部は比較的厚身を持って垂下して面をなす。外端面にはヨコナデによる凹線状の凹みを持つ。器面調整は、杯部外内面をヘラミガキで仕上げる。本遺物は、ST02（99）の蓋に使用されたものである。

99は、大型の無頸壺である。器形は、胴部最大径を中位に持つ、丸味を帯びた算盤玉状を呈する。口縁部は僅かに屈曲し、口縁端部で肥厚して面をなす。口縁部下には、2箇所の紐孔を有する。器面調整は、底部付近外面をヘラミガキ、口縁部下の胴上半部内面をハケメである。本遺物は、ST02の身に使用されたものである。

100は、高杯である。杯部は、屈曲を持たない受け口状の口縁部で、脚部は成形時の絞りによりやや狭いながら中空の柱状部の、緩やかに開く裾部を持つ。杯部口縁端部は、僅かに肥厚し面をなす。また、外面には二条の凹線文が巡る。脚部は上部に4条の退化凹線文を施し、脚端部は肥厚して面をなす。器面調整は、脚部外面をヘラミガキ、内面をケズリでシボリ痕が残る。本遺物は、ST01（101）の蓋などに使用されたものである。

101は、広口壺である。器形は、胴部最大径を中位よりやや上部に持ち、強い窄まりから大きく短く外反する口縁部を呈する。口縁端部は、やや下方に強く拡張して面をなす。端面には3条の凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面の下位を縦方向、中位を横方向のヘラミガキ、上位をハケメで、内面を下半部にイタナデ、上半部ハケメである。本遺物は、ST01の身に使用されたものである。

102は、甕である。器形は、胴上半部に最大径を持つ卵倒形を呈する平底のものである。強く窄まる口縁部は、やや稜の鈍い「く」字状で、口縁端部は上方につまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面上半部を縦方向のハケメで、下半部を縦方向のヘラミガキ、内面をイタナデである。また、口縁部はヨコナデで仕上げる。本遺物は、ST03の身に使用されたものである。

103は、甕の底部であろう。小振りの平底から緩やかに開くものである。器面調整は、外面を縦方向のハケメで、内面を縦方向のケズリである。本遺物は、残存度が低いことから、不明な部分が多いが、ST01の蓋として理解している。

104は、土師器の甕である。器形は球体を呈する。口縁部は窄まりが弱く、稜の鈍い屈曲の「く」字状で、僅かに外反しつつ口縁端部で丸くおさめる。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメで、特に内面は指頭圧痕と粘土接合痕が顕著である。また、口縁部付近は、横方向のハケ

メとヨコナデである。本遺物は、ST04の蓋に使用されたものである。

105 は、土師器の長胴甕である。器形は、胴部の張りが弱い卵倒形を呈する。口縁部は、大きく外反する「く」字状で、口縁端部は細身の面を持つ。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメである。また、口縁部は内面を横方向のハケメ、外面をヨコナデである。本遺物は、ST04の身に使用されたものである。

4．ピット出土土器（119～131）

P01（119・120）

119 は、脚杯付き無頸壺である。脚部の殆どは欠損するが、中空の柱状部に円孔 4 箇所を施す。無頸壺は、緩やかに内彎して立ち上がる体部で、口縁部は内側へ強く拡張して、上部に面をなす。口縁部下外面には、5 条の凹線文が巡り、上部に紐通しの円孔を施す。器面調整は、外面下半部をミガキで、内面をヨコナデあるいはナデである。また、口縁部付近はヨコナデであろう。

120 は、脚付き無頸壺である。脚部は殆ど欠損しているが、細身で中空の柱状部である。無頸壺は、やや稜の鈍い屈曲の算盤玉状を呈し、口縁部は屈曲して短く開く「く」字状を呈すると考えるが、不明である。器面調整は、外面をハケメの後、横方向を主体とするヘラミガキを施す。内面は、磨滅により不明である。

P264（121）

121 は、直口壺である。器形は、胴部最大径が中位よりやや上にある胴部で、口縁部はやや内彎気味に立ち上がる。口縁端部は、僅かに肥厚して面をなす。頸部外面には 1 条の細い凹線文が巡る。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をイタナデで指頭圧痕が顕著に残る。また、口縁部はヨコナデで、内面にハケメが僅かに残る。

P78（122・123）

122 は、土師器の甕の口縁部である。窄まりの強い「く」字状口縁を呈し、大きく外反する。口縁端部は、細身に丸くおさめる。器面調整は、胴部から頸部外面を右上がりのタタキで、内面をナデである。また、口縁部はヨコナデで仕上げる。

123 は、底部である。僅かに平坦部を残して丸味を帯びた底部は、底面のほぼ中央に焼成後穿孔を有す。器面調整は、磨滅により不明である。

P143（124）

124 は、甕である。口縁部付近と底部のみだが、復元形態は、胴部最大径が中位よりやや上にある卵倒形を呈する。口縁部は、稜が鈍いながら屈曲強い「く」字状を呈し、口縁端部は上方に若干つまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面上半部をハケメ、下半部をヘラミガキで、内面をケズリで仕上げる。また、口縁部はヨコナデである。

P266（125）

125 は、小型の甕である。器形は、胴部上位に最大径があり、外傾度の強い屈曲の「く」字状口縁を持つ。口縁端部は、肥厚しつつ上方に拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面をヘラミガキで、上位にハケメが残り、内面をイタナデで、指頭圧痕が顕著に残る。また、口縁部はヨコナデである。

P146（126）

126 は、脚付き無頸壺である。脚部は欠損しており不明である。無頸壺の器形は、下位に最大径を持

つ算盤玉状を呈する。口縁部は、強く屈曲して折り返し、口縁端部は上方につまみ出して面をなす。器面調整は、外内面共に横方向を中心とするヘラミガキで、口縁部をヨコナデである。

P155（127）

127 は、甕である。器形は、胴部最大径を上位に持つ卵倒形で、口縁部は強い窄まりで稜の鈍い屈曲を持つ「く」字状を呈する。口縁端部は肥厚しつつ上方に大きくつまみ出して面をなす。胴部上位外面には、貝殻腹縁状列点文を施す。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。SB37の柱穴をなす。

P226（128）

128 は、大型の鉢である。最大径を中位に持つ胴部は緩やかな球体をなし、口縁部の窄まりも弱い。口縁部は「く」字状を呈し、口縁端部は上下方に若干拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面を横方向のタタキの後に縦方向のハケメで仕上げ、内面をイタナデである。

P332（129）

129 は、甕であろう。胴部上位に最大径を持つ肩張りの形態を呈し、口縁部の窄まりが強い。器面調整は、胴上半部外面を横方向のタタキの後縦方向のハケメ、後に下半部をヘラミガキで仕上げる。また、内面の上半部を横方向、下半部を縦方向にケズリをいれる。

P373（130）

130 は、土師器の甕であろう。下半部は欠損するが、体部は球体を呈するものである。口縁部は、稜の鈍い「く」字状を呈し、口縁端部は僅かに肥厚して面をなす。器面調整は、縦方向のハケメで、内面を縦方向の強いイタナデで仕上げる。また、口縁部はヨコナデである。

P487（131）

131 は、小型の甕である。胴部最大径は中位にあり、卵倒形に近い形態である。稜の鈍い「く」字状口縁部は、口縁端部で上方へ僅かにつまみ出し面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメで仕上げ、中位より若干上に羽状の刺突列点文を施す。また、口縁部はヨコナデである。

5．溝出土土器（106～118 、132～143）

SD04（106～118）

106～109 は、土師器の甕である。106は、球体に近い胴部で、「く」字状口縁を呈する。口縁端部は細身に丸くおさめる。器面調整は、外面を右上がりを主体とするタタキを口縁部まで施し、内面をイタナデで仕上げる。また、口縁部はヨコナデである。107も106とほぼ同様の形態を呈し、口縁部の外反が若干強い。器面調整もほぼ同様である。108は、屈曲を持って短く外反する複合口縁を呈する。口縁端部は、細身に丸くおさめる。器面調整は、磨滅により不明だが、胴部外内面に粘土接合痕が残る。109は、稜が鈍く外反の強い「く」字状口縁を呈する。口縁端部は、外傾気味につまみ出して、面をなす。器面調整は、頸部外面に右上がりのタタキが残り、口縁部をヨコナデで仕上げる。また頸部内面には、粘土接合痕が顕著に残る。

110 は、土師器の二重口縁壺の口縁部である。大きく外反する頸部は、屈曲してさらに外反しつつ開く。口縁端部は、丸味をもちながら面をなす。器面調整は、外内面共にヨコナデである。

111 は、土師器の短頸壺の口縁部であろう。口縁部は、直口気味の頸部から短く外反する。口縁端部は、外傾気味に面をなし、端面には調整による１条の凹線状沈線を持つ。器面調整は、外内面共にヨコ

ナデである。

112 は、土師器の蓋であろう。器形は、恐らく笠形と考えるが、詳細は不明である。器面調整は、外面に縦方向、内面に横方向を主体とするハケメで仕上げる。また、つまみ部分はナデで仕上げるが、成形時の指頭圧痕が顕著に残る。

113 は、土師器の小型丸底壺である。器形はほぼ球体で、稜の鈍い「く」字状口縁を呈する。口縁端部は、細身に丸くおさめる。器面調整は、体部外内面共にイタナデで、口縁部をヨコナデで仕上げる。また、頸部内面には粘土接合痕が顕著に残る。

114 は、土師器の小型器台と考えられる。器形は、短い中実の柱状部に低い笠形の裾部を有し、浅い皿状の受け部がつくものである。器面調整は外内面共に、ヘラミガキを主体とする調整がなされ、口縁部はヨコナデで仕上げる。

115 は、土師器の低脚高杯の脚部である。器形は、中実の柱状部に低く大きく開く笠形の裾部を有すものである。裾部上位には、竹管文を施す。器面調整は、裾部外面を横方向、柱状部外面を縦方向のヘラミガキで仕上げる。また、裾部内面はイタナデと考えられる。

116 は、土師器の高杯の杯部である。器形は、屈曲を持たず立ち上がる椀状を呈し、口縁部は大きく外反する。口縁端部は、丸くおさめる。器面調整が杯部底面に若干ミガキが見える以外は、磨滅及び剥離等により不明である。

117 は、底部である。小振りの平底で、底面のほぼ中央には凹みをもつ。器面調整は、外面をタタキで、内面をナデである。小型の甕、あるいは鉢と考えられる。

118 は、無頸壺の口縁部である。窄まりの強い口縁部で、口縁端部で内外に拡張して、上部に面をなす。口縁部下外面には、4条の退化凹線が巡る。器面調整は、磨滅のため不明である。

SD30（132・133・135・136）

132 は、甕の口縁部である。口縁部は、屈曲して短く開く「く」字状を呈する。口縁端部は、外傾気味に肥厚して面をなす。器面調整は、胴部内面を横方向のケズリで、胴部外面から口縁部にかけてヨコナデである。

133 は、甕の口縁部であろう。口縁部は、若干外反しながら短く立ち上がる。口縁端部は、僅かに肥厚する。器面調整は、胴部内面を横方向のケズリである。また、口縁部はヨコナデである。

135 は、底部である。器壁が厚く、大型の壺のものと考えられる。器面調整は、外面にヘラミガキの痕跡が見えるが、磨滅により不明である。

136 は、台付き鉢の台部であろう。台部は短く開く裾部を持ち、端部で僅かに肥厚して面をなす。器面調整は、外面にハケメの痕跡が見える以外は、磨滅のため不明である。

SD04（134・137）

134 は、器台の裾部である。裾部は、やや内彎気味に開き、幾分踏ん張る様な形態である。端部は、僅かに肥厚して面をなす。外面には、現状で6条の凹線文が巡り、端部付近には、波状文を施す。器面調整は、外面をヨコナデで、内面をイタナデである。

137 は、広口壺の口縁部である。口縁部は、大きく外反しながら短く開き、口縁端部で上下に拡張して面をなす。器面調整は、外面を縦方向のハケメで、口縁部をヨコナデである。

SD39（138・139）

138 は、広口壺の口縁部であろう。窄まりの強い口縁部は大きく外反し、ラッパ状に開く。口縁端部

は肥厚しつつ、上方に拡張して面をなす。器面調整は、磨滅のため不明ながら、ヨコナデであろう。

139 は、底部である。底部は、やや上げ底気味で高台状をなす。器面調整は、外内面共にナデの後ミガキで、底面付近には指頭圧痕が残る。小型の壺のものと考えられる。

SD41（140）

140 は、広口壺の口縁部である。大きく外反する口縁部で、口縁端部は肥厚しつつ下方に拡張して面をなし、列点文状の施文痕跡を残す。器面調整は、ヨコナデである。

SD34（141）

141 は、高杯の脚部である。ラッパ状に緩やかに開く裾部で、脚端部は大きく拡張して面をなす。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面を横方向のケズリとナデである。また、脚端部はヨコナデである。

SD F（142）

142 は、短頸壺であろう。大きく外反した口縁部は、短く外へ開く。口縁端部は、肥厚しつつ上方に拡張して面をなす。器面調整は、横方向のハケメで口縁端部から外面は、ヨコナデである。また、外面の一部には工具痕が残る。

SD50（143）

143 は、台部である。短く大きく開く台部は、端部で肥厚しつつ、内外に若干拡張して面をなす。また、鉢部に近い所には推定 4 箇所の円孔を施す。鉢の底面は、粘土円盤充填法によるものである。器面調整は、台部外面をヨコナデ、内面を横方向のケズリである。

流路（144～171）

144 は、短頸壺の口縁部である。口縁部は、強い窄まりから大きく外反するもので、口縁端部にかけて徐々に肥厚して、端面をなす。端部はキザミを施し、外面に断面三角形の凸帯を 4 条貼付する。器面調整は、外内面共にナデ及びヨコナデで仕上げ、内面に指頭圧痕が残る。

145 は、大型の鉢であろうか。口縁部は、強い屈曲の「く」字状を呈し、口縁端部は内に強く拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面に縦方向のハケメで、口縁部をヨコナデである。

146 は、大型の甕であろう。口縁部は、稜の鈍い「く」字状を呈し、口縁端部は内に強く拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面に縦方向のハケメで、口縁部をヨコナデである。

147 は、大型器種の底部である。器壁の厚い平底のものである。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面を縦方向の粗いハケメである。器種は壺の範疇で考えて良かろう。

148 は、底部である。小振りの底部からラッパ状に立ち上がるものである。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をイタナデで、底面付近には指頭圧痕が残る。器種は甕であろう。

149 は、大型器台の裾部である。大きくラッパ状に開く裾部で、端部はやや肥厚して面をなす。外面には現状で11条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をヨコナデ、内面をナデである。

150 は、大型器台の受け部である。受け部は大きく外反し、端部は上下方に拡張して面をなす。外端面は、3 条の擬凹線文上に 3 個 1 単位の円形浮文を貼付する。器面調整は、外内面共に横方向のハケメで、端部付近をヨコナデで仕上げる。

151 は、広口壺である。器形は、胴部中位に最大径を持つ丸みを持った算盤玉状をなす。口縁部は、強い窄まりから、外反しながら短く開くもので、口縁端部は上下方に拡張して面をなす。外端面には、波状文を施す。胴部状半外面には、直線文を施す。器面調整は、外面を縦方向のハケメを主体として、中位を横方向のヘラミガキで仕上げる。内面をハケメ及びイタナデで、口縁部はヨコナデで仕上げる。

152 は、広口壺の口縁部である。大きく外反するもので、口縁端部は下方に強く拡張して面をなす。端面には、4条の擬凹線文が巡り、円形浮文を貼付する。器面は、磨滅のため調整不明である。

153 ～155 は、広口壺の口縁部である。153 は、外反して短く開く口縁部で、口縁端部は僅かに肥厚して面をなす。胴部外面には、波状文を施す。器面調整は、外面及び口縁部はナデとヨコナデで、胴部内面をハケメで仕上げる。154 は、内傾気味の頸部から、若干屈曲して短く開く口縁部を持つ。口縁端部は、外傾気味に肥厚しつつ上方にやや拡張して面をなす。端面や頸部外面には波状文を施す。器面調整は、外面を縦方向のハケメ、内面を横方向のハケメ及びヨコナデで、頸部内面には指頭圧痕が残る。155 は、弱い屈曲から外反して短く開く口縁部で、口縁端部は下方に大きく拡張して面をなす。端面には、羽状列点文を施す。頸部外面には、3条の凹線文を施す。器面調整は、外面を縦方向、内面を横方向のヘラミガキで仕上げ、口縁部付近はヨコナデである。

156 は、高杯の杯部である。器形は、屈曲部に断面方形状の突起を持つ水平口縁を呈し、端部で大きく垂下するものである。器面調整は、磨滅のため不明である。

157 は、甕の口縁部であろう。「く」字状を呈するもので、口縁端部は内へ強く拡張して面をなす。器面調整は、ヨコナデである。

158 は、甕の口縁部である。強く屈曲する「く」字状口縁で、口縁端部は上下方へ僅かに拡張して面をなす。端面には、3条の擬凹線文が巡る。器面調整は、外内面共に斜め方向を中心としたハケメで、口縁部付近はヨコナデである。

159 は、底部である。小振りの平底で、ラッパ状に立ち上がる。底面には、焼成前穿孔を有し、工具痕も残る。器面調整は、外面を縦方向のハケメの後ヘラミガキ、内面をケズリである。

160 は、大型の甕である。器形は、胴部最大径を上位に持つ卵倒形を呈し、強い屈曲の「く」字状口縁部を有する。口縁端部は、肥厚しつつ下方に若干拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメの後に下半部う中心としてヘラミガキ、内面をナデで、口縁部下に指頭圧痕を顕著に残す。また、口縁部はヨコナデである。

161 は、高杯の脚部である。中空の柱状部から緩やかにラッパ状に開く。端部は僅かに肥厚して面をなし、2条の擬凹線文が巡る。器面調整は、外面をヘラミガキで、内面をケズリである。

162 は、台付き鉢の台部である。短く大きく開く台部は、端部で大きく肥厚して面をなす。鉢部の底面は粘土円盤充填法によるものである。器面調整は、内面をケズリで、端部付近はヨコナデである。

163 は、大型の甕であろう。「く」字状を呈する口縁部で、内傾気味の口縁端部は肥厚しつつ上方に拡張して面をなす。器面調整は、外面を縦方向、内面を縦方向及び横方向のハケメで、口縁部はヨコナデである。

164 は、高杯の脚部である。中空の柱状部で、裾部付近で緩やかに開く。脚端部は、肥厚しつつ外へ拡張して面をなす。器面調整は、磨滅のため不明である。

165 は、直口壺の胴部であろう。器形は、胴部最大径が上位にある、細身の卵倒形を呈する。器面調整は、下半部外面をヘラミガキ、内面をイタナデで、底面付近には指頭圧痕が残る。

166 は、広口壺の口縁部である。強い窄まりから大きく外反して上端で面を持つ。口縁端部は、僅かに垂下しつつ上方にも若干拡張して面をなす。端部にはキザミを施し、4個1単位の円形浮文を推定6箇所貼付する。頸部外面には断面三角形の凸帯を貼付する。器面調整は、外面に縦方向のハケメ、後にヨコナデで仕上げる。

167 は、無頸壺である。器形は、内彎しながら立ち上がる。口縁部は、内に多く張り出して上端で面をなす。外面には現状で5条の凹線文を施し、口縁部付近に紐孔を2孔有す。器面調整は、ヨコナデである。

168 は、小型の甕あるいは脚付きの無頸壺であろう。器形は、胴部最大径を上位に持つもので、口縁部は稜の鈍い「く」字状を呈する。口縁端部は、上方へ僅かにつまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面にタタキの後上半部をナデ、下半部をヘラミガキで、内面をイタナデである。また、口縁部はヨコナデである。

169 は、高杯の杯部である。杯部は、屈曲を持ちやや開きながら短く立ち上がる。口縁端部は、内外に肥厚して上部に面をなし、上端部に3条の凹線文を施す。器面調整は、ヨコナデである。形態の特徴から吉備地方の搬入品、若しくは影響を強く受けたものと考えられる。

170 は、脚部・台部である。器形は、中空で短い柱状部から大きくラッパ状に開くもので、端部はやや肥厚して面をなす。脚部の上位には2個1単位の円孔を2箇所施す。また、外面には5条の擬凹線文が巡る。器面調整は、端部をヨコナデ、内面をケズリで仕上げる。

171 は、小型高杯の脚部である。器形は、緩やかなラッパ状を呈し、端部は外側へ若干拡張して面をなす。脚部の下位には、円孔を7箇所施し、上位外面には現状で6条の擬凹線文が巡る。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をケズリで、端部はヨコナデである。

172・173は、中世の土師器の甕と考えられ、本時期の遺物として、誤って取り扱ったものである。172は、「く」字状の口縁部に大きく上方へ拡張する立ち上がりをもつもので、外端面に2条の凹線が巡る。器面調整は、外面をナデ、内面をケズリで、口縁部付近はヨコナデである。173 は、「く」字状の口縁部で、やや内彎気味に立ち上がり、外端で面をなす。端面には、3条の浅い凹線を持つ。器面調整は、ヨコナデである。

6．包含層出土土器（174～207）

174 は、甕である。張りの小さい胴部で、「く」字状の口縁部を有す。口縁端部は、微妙に上方につまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面をハケメ、内面をケズリで、内面に若干ハケメが残る。また、口縁部はヨコナデである。

175 は、広口壺の口縁部である。口縁部は、ほぼ直口する頸部から短く外反するもので、口縁端部は僅かに上方へ拡張しつつ垂下して面をなす。頸部外面には、現状で1条の凹線文が見られる。口縁端部内面には、内に円弧を描く半円状の扇状文を施す。器面調整は、ヨコナデである。

176 は、広口壺である。器形は、張りの小さい胴部で、直口気味の頸部から大きく外反する口縁部を持つ。口縁端部は、内傾気味に上下に拡張して面をなし、外端面に波状文を施す。器面調整は、外内面共にハケメの後ナデで、口縁部はヨコナデである。

177 は、広口壺の口縁部である。口縁部は、短く外反するもので、口縁端部は僅かに外傾しつつ上下方に拡張して面をなす。外端面には、3条の凹線文が巡り、更に推定12箇所の棒状浮文を貼付する。また、上端部には、キザミメがほぼ等間隔で施される。器面調整は、外面をヘラミガキで、口縁部付近をヨコナデである。内面は、磨滅のため不明である。

178 は、大型の甕或いは鉢である。器形は、張りの大きい胴部に、稜の鈍い「く」字状口縁部を有すもので、口縁端部は、外傾気味に上下方に拡張して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦横のハケメの

後ナデ、内面をイタナデで、粘土接合痕が残る。また、口縁部はヨコナデである。

179 は、大型の甕の口縁部であろう。口縁部は、「く」字状で、口縁端部は、内傾して上下に大きく拡張して面をなし、端面に3条の擬凹線文が巡る。器面調整は、胴部外内面共にハケメで、口縁部はヨコナデである。

180 は、大型の鉢であろう。器形は、張りの強い胴部に、強い屈曲の「く」字状口縁部を有すもので、口縁端部は、肥厚しつつ僅かに上方へつまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面を縦方向、内面を横方向のハケメで、口縁部はヨコナデである。

181 は、ミニチュア土器である。器形は、やや細身の椀状で、口縁部は逆「L」字状に屈曲する。口縁端部は、微妙につまみ出して面をなす。器面調整は、体部内面をユビナデで仕上げ、口縁部付近に指頭圧痕も残る。口縁部はヨコナデで、体部外面は磨滅のため不明である。

182 は、二重口縁壺の頸部であろう。器形は、内傾気味に直口する頸部で、胴部との境に断面三角形の凸帯を貼付して、凸帯上にキザミメを施す。器面調整は、外面をハケメの後ナデ、内面をナデで仕上げる。残存率が悪いため、形態は不明である。

183・184は、器台の受け部である。183 は、器壁が厚く、大きく外反する受け部で、口縁端部は上下方に拡張して面をなす。端面には4条の擬凹線文が巡り、円形浮文を貼付して棒状キザミメを施す。また、端部内面には、2単位の波状文を施す。器面調整は、外面をハケメの後ナデ、内面をヘラミガキで、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。184 は、器壁が厚く、大きく外反する受け部で、口縁端部は肥厚しつつ内側へ拡張して面をなす。端面には、3条の凹線文が巡り、円形浮文及び棒状浮文を貼付する。器面調整は、外内面共にナデ及びヨコナデで仕上げるが、外面にハケメが残る。

185 は、高杯の杯部である。口縁部は、緩やかな屈曲部で僅かに下方に拡張して、微妙に外反しながら開く。口縁端部は、丸くおさめる。器面調整は、外内面共にヘラミガキで、屈曲部及び口縁部をヨコナデで仕上げる。

186 は、甕である。器形は、胴部最大径を上位に持つ卵倒形を呈し、窄まりの強い「く」字状口縁部を有する。口縁端部は、上方につまみ出して面をなす。器面調整は、胴部外面をハケメで、後に下半部をヘラミガキで仕上げ、内面下半部をヘラケズリで、上半部をイタナデで仕上げる。また、口縁部はヨコナデである。

187 は、広口壺の口縁部である。口縁部は、ラッパ状に開く頸部から端部付近で屈曲する様に外反する。口縁端部は、上方に拡張して面をなす。器面調整は、頸部外面にタタキの痕跡が残るが、磨滅のため不明瞭である。

188 ～190 は、高杯の杯部である。188 は、屈曲して短く立ち上がる受口状の口縁部である。口縁端部は、僅かに肥厚して上端面をなす。口縁部下及び屈曲部には、それぞれ1条と2条の凹線文が巡る。器面調整は、口縁部付近をヨコナデである。189 は、屈曲して僅かに内傾しながら立ち上がる受口状を呈するが、やや深めの鉢状である。口縁端部は、やや内に張り出しつつ肥厚して上端面をなす。口縁部下及び屈曲部には、それぞれ2条と3条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をナデで、口縁部をヨコナデである。

190 は、屈曲して短く立ち上がる受口状の口縁部である。口縁端部は、やや肥厚して上端面をなす。屈曲部付近には、2条の凹線文が巡る。器面調整は、外内面共にヘラミガキで仕上げ、口縁部はヨコナデである。

191 は、無頸壺であろう。内傾する口縁部は、端部を丸くおさめる。口縁部下には、紐孔状の円孔を2孔有す。器面調整は、内面をイタナデで、口縁部付近をヨコナデである。

192 は、脚付き無頸壺である。脚部は裾部が欠損し、詳細は不明であるが、外面に現状で3条の凹線文が巡る。無頸壺は、やや内彎気味に立ち上がる鉢状を呈し、口縁端部は内に強く張り出して上端に面をなす。口縁部下には、紐孔状の円孔を2孔有す。外面には6条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をミガキで内面をナデである。口縁部はヨコナデである。

193 は、台付き鉢である。台部は低く短く開き、端部は僅かに肥厚して面をなす。鉢部は、受口状に開き、口縁端部は微妙に肥厚して上端に面をなす。口縁部下から屈曲部の外面には、3条の凹線文が巡る。器面調整は、鉢部外面をミガキ、内面をナデとイタナデで、口縁部をヨコナデで仕上げる。また、台部の外面はヨコナデ、内面をケズリで、鉢部と台部との接合部分は、指頭圧痕が顕著に残る。

194 は、無頸壺である。体部中位で屈曲して内傾気味に立ち上がり、口縁端部は強く内側へ張り出して上端に面をなす。口縁部下には、紐孔状の円孔を2孔有す。器面調整は、口縁部をヨコナデである。

195 は、両把手付きの直口壺である。器形は、球体に近い胴部に、やや開き気味に立ち上がる口縁部を有し、口縁端部は微妙に肥厚して面をなす。口縁部外面には、9条の凹線文が巡る。また、把手は胴部上位に対面状に配される。器面調整は、胴部外面を縦方向のハケメ、内面をナデで指頭圧痕が顕著に残る。また、口縁部はヨコナデである。

196 は、台付き鉢の台部であろう。台部は、緩やかに外反するもので、端部は外側へ肥厚して面をなす。裾部外面は、6条の凹線文が巡り、上位には列点文を施す。器面調整は、外面をヘラミガキで仕上げ、口縁部付近はヨコナデである。

197 は、脚付き無頸壺である。脚部は、中空の柱状部と緩やかなラッパ状に開く裾部からなる。端部は肥厚しつつ上方に拡張して面をなす。無頸壺は、最大径を中位に持つ算盤玉状の胴部を呈し、稜の鈍い「く」字状口縁部を持つ。口縁端部は、僅かに上方につまみ出して面をなす。器面調整は、外面をヘラミガキで仕上げ、無頸壺内面をナデ、口縁部や脚裾部をヨコナデで仕上げる。

198 は、高杯である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くもので、脚端部は肥厚しつつ上方へ僅かに拡張して面をなす。杯部は、やや開き気味に上方へ立ち上がる受口状を呈するもので、口縁端部は微妙に肥厚して面をなす。器面調整は、外面と杯部内面をヘラミガキで、口縁部付近をヨコナデで仕上げる。また、脚部内面はナデで、脚端部はヨコナデである。

199 は、高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くもので、脚端部は肥厚しつつ上方へ僅かに拡張して面をなす。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をケズリで、脚端部はヨコナデである。

200 は、小型高杯の脚部である。脚部は、中空の柱状部からラッパ状に開くもので、脚端部は肥厚しつつ上方へ僅かに拡張して面をなす。器面調整は、外面をヘラミガキ、内面をケズリで、脚端部はヨコナデである。また、粘土円盤で充填される杯部底面の内面は、横方向のハケメで仕上げている。

201 は、小型高杯の脚部であろう。脚部は、ラッパ状に開く裾部のみの残存である。脚端部は、外傾しつつ外側へ拡張して面をなす。外面には、横方向のクシ描き直線文の間に、縦方向のクシ描き直線文を3本1単位で一定間隔の施文がなされる。器面調整は、外面をヨコナデ、内面をナデだが、端部内面の強い凹みは、強いヨコナデ或いはヘラケズリである。

202 は、器台の一部である。外面は、縦のヘラ描き直線文と斜格子文を施しており、直線文により斜

格子文の施文範囲を区画している。また、ヘラ描き文の下部を区画する様に、現状で5条の凹線文が巡る。器面調整は、外面をヨコナデ、内面をナデである。

203は、器台の裾部である。裾部は、緩やかに開くもので、端部は微妙に肥厚して面をなす。外面には、現状で5条の細い凹線文が巡る。器面調整は、外面と端部をヨコナデ、内面をイタナデで、内面の一部に工具痕が残る。

204・205は、高杯の杯部である。204は、屈曲部に断面長方形の突起を有す水平口縁を呈するもので、口縁端部は大きく垂下して外端面をなす。器面調整は、ヨコナデと考えられるが、磨滅のため調整は不明である。205は、屈曲部に突起を有す水平口縁を呈するものだが、204と比較して突起は丸い。また、垂下する口縁端部は、器壁も厚く全体にシャープさに欠ける。器面調整は、外内面共にナデで、口縁部をヨコナデである。

206は、広口壺等の垂下する口縁端部と考えるが、不明である。上端部は水平で、ほぼ直に垂下して外端面をなす。端面には、上側をトップとするヘラ描きの鋸歯文と、その内側に斜格子文を施す。器面調整は、ナデである。

207は、器台の受け部であろう。端部のみの残存で、端部は上下に若干拡張して外端に面をなす。端面には、下側をトップとするヘラ描きの鋸歯文と、その内側に右上がりの斜行文を施す。器面調整は、ナデである。

古墳時代の遺物

1．概要

本項目では、おおまかに5～6世紀の所産となる遺物を中心に取り扱う。具体的な目安としては、いわゆる「布留式土器」の特徴を備える土師器甕の出現から、たちあがりと受部を有する須恵器杯の消滅までとする。

報告した土器では須恵器の占める割合が高いが、土師器は全体に遺存状況が悪いうえ、図化や観察ができなかった資料も少なくない。

須恵器では、蓋・杯が多く見られるほか、高杯、瓶、提瓶などが出土した。また厳密な器形はわからないが、「装飾付須恵器」の一部と考えられる破片が注目される。土師器は、壺・甕類が大半を占めるほか、高杯・器台も出土した。図化できたものにおいて、器形の全容が遺存したものはわずかであった。

以下、それぞれの遺物を種別・器種ごとに分類して観察する。なお遺物の調整については、煩瑣を避けるため後掲の観察表に一括、特徴ある事象のみ記述した。

2．須恵器

A．蓋

図化した遺物は20点である。そのうち、天井部にツマミの遺存するものは3点(211・246・294)あった。

形態と調整の特徴、なかでも　①稜線の突出具合、鋭さ　②口縁端部の形態　③口径と器高のバランス　④天井部外面の回転ヘラケズリ範囲　に着目して4つの類にわけた。類ごとに状況を記述する。

a．1類（238・246）

口径に対して器高が高く、平坦な底部から緩やかに屈曲した体部は、口縁に向かって垂下する。稜線は鋭く突出、口縁端部は内傾して段を有する。

238は稜線や端部が鋭く、シャープな印象を与える。器面の調整も丁寧である。

246は頂部につまみを有する。238と比べて、稜線の位置がわずかに高い。

b．2類（235・250・276・277・292・293）

稜線の鈍化・退化が認められ、凹線状のものが多くなる。292は稜線がごくわずかとなり、293では見られなくなる。

いずれも天井部には広い平坦面があり、緩やかに湾曲して口縁部へといたる。口縁端部は内傾するが、段は明瞭さを欠く。277は口縁部がわずかに外反気味となる。

天井部外面の回転ヘラケズリは粗くなり、回転ヘラ切りの痕跡が残るものも多い。277・293では、回転ヘラケズリの後にナデを施す。

c．3類（211・212・233・234・236・291・294）

稜線は消失するが体部の屈曲が明瞭で、天井部との境界は識別できる。天井部の平坦面は小さくなり、ドーム状をなす。体部は垂下気味に口縁へと続く。天井部外面は回転ヘラケズリを施すが、範囲は頂部付近に限定される。

口縁端部は内傾するものに混じって、211・233・294など丸くおさめるだけのものが現れる。212・236ではわずかに外反気味となる。また段は291を除いて見られなくなる。291は内面が肥厚する。

d．4類（220・221・268・278・279）

天井部はドーム状で、緩やかに弧を描いて口縁にいたる。口径と比較して器高が低くなり、扁平な印象を受ける。

口縁端部の内傾は明瞭さを欠き、丸くおさめたものが多くなる。220は口縁端部の外側、ほぼ全面に縦方向の刻みを付す。端部は外反気味となる。

天井部外面は全面に回転ヘラケズリを施すもののほか、回転ヘラ切り後に周囲だけを回転ヘラケズリするもの（220）、回転ヘラ切りのまま未調整のもの（278・279）がある。

B．杯

28点を図化した。蓋と同じく、形態や手法などの共通点から4類にわけることができた。分類の中心をなす特徴は、①器高に対するたちあがりの長さ　②口縁端部の形態　③底部付近の形態　④外面の回転ヘラケズリ範囲　である。各類の特徴と、含まれる土器への観察を以下に記す。

a．1類（209・253・296）

器高に対して、長いたちあがりを有する。受部の突出も明瞭。底部は平底を保ち、外面の広い範囲に回転ヘラケズリを施す。

209は体部で屈曲して内傾したまま真っ直ぐ口縁に達する。外面の広い範囲に回転ヘラケズリを施し、受部の直下付近にまで及ぶ。

253は口縁～体部がわずかに遺存する。たちあがりは長く、外反気味に口縁にいたる。口縁端部は内傾して、段を有する。

296は底部から体部にかけて緩やかにたちあがる。たちあがりは途中で屈曲し、口縁部は直立に近くな

る。口縁端部は丸くおさめる。底部内面の器壁には、漆が付着していた。

b．2類（208・216・223・224・225・280・297・298）

たちあがりは長め、内傾して直線でのびるものが多いなか、223・294は外反気味にたちあがる。口縁端部の形態は、丸くおさめるもの（216・223・224・297）、丸みを帯びつつも内傾気味となるもの（208・225）、内傾して段を持つもの（280・298）がある。298の段は凹線状の極めてわずかなものである。

受部の突出は短くなる。そのまま外方へ引き出されるもの（208・216・223）、斜め上にのびるもの（297・298）、わずかに外反するもの（224・225・280）がある。

底部から体部にかけては、いずれも緩やかにたちあがるが、平坦な底部に混じって丸みを帯びるもの（223・225・280）も認められる。回転ヘラケズリの範囲は、底部付近に限定される。

c．3類（217・222・226・251・256・257・262・295）

器高に対して口径が大きく、扁平な印象を受ける。たちあがり・受部ともに、短小化・鈍化がすすんだ形態である。

たちあがりは、直立気味の262を除いて、内傾気味に口縁へ達する。そのまま端部にいたるもの（226・256・295）と、口縁でさらに屈曲を見せるもの（217・222・257）がある。257は、たちあがりの屈曲が鈍化して、受部との境界も不明瞭になる。口縁端部は段を持つものが少なくなり、ほとんどは丸くおさめる形態である。

受部の突出は極めてわずかとなり、大半で体部との境界が不明瞭になる。217・256は外反気味、222・262・295は斜め上方向にのびる。

体～底部は浅い擂鉢状を呈する。底部外面の回転ヘラケズリは範囲が縮小し、295は回転ヘラ切り痕をとどめたまま、2次調整を省略する。

295は焼成時に生じたひずみで口縁～受部が歪曲する。

d．4類（213・218・232・239・240・254・263・269・270）

短小なたちあがりと受部を有する。受部の鈍化がいっそう顕著となり、たちあがり・体部との境界が不明瞭になる。

たちあがりは、内傾したまま口縁端部にいたるものと（232・239・240・263）と、内傾して途中で屈曲を見せるもの（213・218・254・269・288）がある。254は屈曲が大きく、基部から外反して口縁にいたる。口縁端部はすべて丸くおさめる。

受部は、上方向へ屈曲するもの（218・239・254）もあるが、多くは斜め上方向へ引き出される。

大半は口縁付近だけの遺存で、体～底部の形態を観察できる資料は少ないが、緩やかな曲線をなすもの（263・269・270）と、明瞭な屈曲を持つもの（213・232）がある。底部外面の調整は回転ヘラ切り未調整が目立つ。213は底部中央にヘラ切りの痕跡をとどめ、その周囲を回転ヘラケズリで調整する。

C．高杯（210・248・249・265・299）

図化できたものは全部で5点、うち2点は杯部を、1点は脚部をそれぞれ欠損する。杯部には、たちあがりと受部を持つもの（248・299）と、皿状の形態をなすもの（249）が見られる。

完形で出土した248は、たちあがりが器形に対して高く、受部も外方へ突出する。口縁端部は内面にわずかな段を有する。脚部は短めで、1段の方形スカシを3箇所に開ける。裾部は内側へ屈曲させ、端部を丸くおさめる。

299は杯部のみが遺存する。体部は箱型で、底部から鋭角に曲がりたちあがりへいたる。たちあがりは途中でかるく屈曲する。口縁端部は内傾して段をなす。

249は、完形で遺存する。焼成時に起因する焼きひずみで、皿状の杯部は歪曲している。脚部のスカシは一段だが長脚化への傾向が看守できる。端部は外側へ大きく折り返して、縁をなす。杯部外面に弱い凹線が２条施されるほかには装飾もなく、調整も粗雑になりつつある。

脚部のみ遺存するものには、屈曲して裾部をなす210と、脚柱部からハの字に開く265がある。いずれもスカシを持たない。

210は脚柱部から外反気味に開き、裾端部付近で再び内湾する。裾部の内面にカエリ状の突出を持つ。

265は裾部付近で軽く屈曲する。屈曲部分の外面には三角形の突帯をつける。裾部は端面を方形に整えている。

D．提瓶（261・281）

２点を図化した。いずれも肩に環状の把手を持つ。261は体～底部を、281は口縁をそれぞれ欠損している。

261は頸部から斜め上方向に開き、途中さらに大きく開く。口縁は下端が肥厚気味となる。環状の把手は、頸部直下から貼りつけられる。体部は裏側が扁平で、ユビオサエを帯状に連ねている。粘土板を接合した成形の状況がうかがえる。

281は体部が扁平な球形で、外面は中心部をカキメ、他の部位を回転ナデで調整する。把手は頸部から少し離れた位置に設けられる。

E．瑠（259・271・300・301・302）

図化できたものは、５点である。丸い体部から長めの頸部が大きく上方向へ開く。いずれも口縁部を欠損し、全容の遺存するものはなかった。

体部や頸部には凹線を施すものが多い。259では、頸部で凹線の上下、体部で凹線の下にそれぞれカキメを施す。302では、体部に施した２条の凹線間に櫛状工具による縦方向の刺突文を加える。300・301も最大径部分に凹線を加えるが、271では装飾が見られない。

259は体部が扁平な球形をなす。底部の重心は低く、安定がよい。穿孔は中心よりやや下方に開けられる。

271は肩部が大きく張り出し、「怒り肩」になる。体部最大径に対する頸部の径は、他のものと比べて広い。穿孔は体部の屈曲部分に施される。底部の回転ヘラケズリは広範囲にわたり、体部にまで及ぶ。

300は底部の丸みが少なく、安定がよい。穿孔は肩部寄りの高い位置になされる。

301はソロバン玉形の体部をなす。底部中央は平底に近く、安定具合はきわめてよい。頸部から肩部にかけての内面には、成形時のシボリ痕が明瞭に残る。穿孔は体部のほぼ中央に、凹線を切る形で施す。

302の底部は尖り気味となる。体部は丸みを帯びるものの、肩および底部との境界が明瞭で、体～底部の縦断面は六角形に近い。穿孔は体部のほぼ中央になされる。

F．壷・甕

図化したものは全部で10点だが、器形全体を把握できたものは少なく、大半は口縁部のみの遺存である。器形の比定が困難なものも多いため、一括して記述する。

壷と考えられるものは、3点（215・227・303）ある。

215は広口壷で、体部から鋭く屈曲する肩部とラッパ状に大きく開く口縁部を持つ。口縁端部は上方向に肥厚させ、端面を整えている。体部の張り出した部分に1条、頸部に2条の凹線を巡らせる。

303は口縁から肩部にかけて遺存する。口縁は斜め外方へ真っ直ぐのび、端部付近でわずかに屈曲、縁状をなす。肩部は大きく屈曲し横方向にのびることから、横瓶の可能性もある。頸の基部付近では、内面に粘土接合痕が認められた。

227は体部のみが遺存する。扁球の体部を持つ。肩の欠損部分は上方向を向き、内面には頸部を接合した際の粘土継ぎ目が残る。

甕のうち、遺存状況から状態が検討できたものは3点（264・274・290）であった。

274・290はいずれも短い口縁部と、球形の体部を有する。274は肩部から緩やかに外反し、口縁端部で折り返して縁をなす。290の口縁は短く上方向に延び、端部付近で肥厚する。

264は口縁部のみの出土だが、規模から甕に比定した。頸部から緩やかに開きつつ口縁部にいたり、軽く上方向へと屈曲する。口縁部は屈曲部分から外側へ帯状に肥厚、口縁端部は内側に拡張させて端面を平坦に整える。口縁部に1条、頸部に3条の凹線を配する。

口縁部付近が遺存するもの（219・230・231・252・255）については、その特徴のみ記述する。いずれも大きく開いた口縁部を持つ。口縁端部は、端部を拡張して縁を形作るもの（219・230）、外側へ折り返し、縁状をなすもの（255）、軽く上方向へ屈曲を見せるもの（231・252）が存在する。231は口縁直下に3条の突帯を巡らせ、細かい櫛描波状文を施す。

G．擂鉢（273）

底部から口縁に向かってV字状に体部が開く形態である。1点（273）だけ出土した。円盤状の底部は外面が平坦で、刺突痕などは認められない。

逆円錐形の体部はわずかに器壁を減じつつ、口縁へと直線的に延びる。外面では遺存する全面に、カキメを施す。

H．その他（266・272・304）

器台の一部（266）、大型の鉢状をなす（304）もの、器形不明の破片（272）がある。

266は器台の裾部先端にあたる。内湾気味に端部へいたる途中で軽く屈曲し、屈曲部分に凹線を3条配する。端部は内傾する。

304は深い鉢状をなし、直径27.5cm・器高8.8cmとかなり大きい。鉢と仮定して各部位の特徴を記述する。口縁部付近で直立し、端部は丸くおさめる。底部から体部にかけて、緩やかな曲線をなす。体部外面では、ヘラ記号とみられる縦方向の沈線が1条認められた。体部から口縁部にかけては内外とも回転ナデ、底部は外面が回転ヘラケズリ、内面には同心円の当て具痕が複数回施された後、粗い回転ナデを加える。器形から、大型の杯や鉢を想定させるが、疑問の余地もある。外面の底部に丁寧な回転ヘラケズリを施すのと対照的に内面中央に同心円の当て具跡をとどめる点が、露出に対する意識の違いとするならば、大型の器種に対応する蓋の可能性もある。

272は円筒形で、片側には端部が遺存する。内傾して外端は欠損、内側は突出する。内傾部分には等間隔の刻み目を配する。外器面には剥離痕があり、棒状の粘土がつけられていたことがわかる。

外面には多くの装飾が見られる。二重の凹線で３つに区切り、中央と下の区画にカキメを加えた後、すべての区画に斜め平行線の線刻を施す。左上から右下へ方向を統一し、下と中の区画は１列、上の区画は全面に施される線刻と凹線の直上に角度を違えた短い列の２列が認められる。

内面は粘土の輪積み痕跡が残る。割れ口には方形スカシの存在が認められる。形状・規模は不明だが、中下区画に直列して２段以上設けられている。

器面の装飾が目立つ点から、広義の「装飾付須恵器」の一部と考えられるが、器形や部位の比定はできなかった。スカシを有する点や円柱状の形態は脚柱部を想起させるものの、内傾面に線刻文を施した端部が口縁部となる可能性も否定できない。

３．土師器

A．壷（242・260・283・284・286・287・305・307・308）

９点を図化した。直口壷・広口壷・長頸壷が認められる。

a．直口壷（242・307・308）

球形の体部に、斜め上方向へ真っ直ぐのびる口縁がつく。

242はやや扁球気味の体部から口縁がのびる。口縁端部は丸くおさめる。

307は張り気味の肩部からのびる口縁の途中で、外面に断面三角形の突出部がある。端部は内傾気味となる。断面の観察では、粘土を貼りつけた突帯ではなく、口縁成形の際に粘土を継ぎ足した部分とわかった。二重口縁壷の屈曲部が形骸化、突帯の形で残ったものであろう。

308は小型で、胴部最大径よりも口径がわずかに大きい。口縁内面には縦方向の粘土継ぎ目が残り、縦長の粘土板を張り合わせて成形している。

b．広口壷（260・283・284・287・305）

球形の体部と、短い外反気味の口縁を持つ。頸部の径は広い。法量から、中型（283・284）と小型（260・287）の２類に分かれる。

中型の283は口縁が外反気味、端部は内傾して両端が水平となるように整形する。284の口縁は直線的で、器壁の厚みを減じつつ端部にいたる。端部は丸くおさめる。

小型の260は中型に近い器形を持つ。口縁は端部に向かって緩やかに外反する。端部は丸くおさめる。287は調整が粗雑で、口縁には粘土の継ぎ足し痕が残り、端部が歪曲する。305は器壁が厚く、口縁部はほとんど直立に近い。

c．長頸壷（286）

扁平な球形の体部から長い頸部がのびる。頸～口縁部は外反気味であり、口縁端部は丸くおさめる。

B．甕（214・229・247・258・267・275・282・285・289・306）

図化した個体は10点である。いずれも胴部以下を欠損しており、器形の全容が観察できた遺物はない。

285と306は肩部が大きく膨らみ、球形の体部を想起させる。285はわずかに内湾気味、306は短かく直線にのびる口縁を持つ。いずれも端部は丸くおさめる。247・282は肩部の膨らみがわずかで、頸部の屈曲も緩い。

口縁は、247が外反気味となり端部で内傾する。282は内湾気味で、端面に整形の意識が見られる。258

は直線的な肩部から大きく外反する。

以下は口縁端部がわずかに遺存するものである。

214は口縁端部が上下に拡張、端面を整形する。229は短く外反気味の口縁をなす。275は頸部の屈曲が明瞭。口縁は端部に向かって外反する。289はわずかに外反気味で、口縁端部は丸くおさめる。267は口縁端部を内側に巻き込む。

C．高杯（228・237・245・309・310）

図化できた5点のうち、全容が把握できたものは3点である。228は杯部、245は脚部のみが遺存する。口縁は端部付近で緩やかに外反するものが多い。228は口縁の屈曲が明瞭で縁状をなす。310は体部からそのまま内湾して端部にいたる。端部はいずれも丸くおさめている。

杯部は深く、口縁が外方へ大きく開く。杯底部から体部への屈曲は緩やかで、明瞭な境界は認められない。237・309では杯底部内面の中央に、粘土を充填した痕跡が残る。

脚部は円錐形の脚柱部から裾部でラッパ状に大きく外反する。外面は緩やかに裾端部へといたるが、内面では屈曲部が明瞭にのこる。310は円形のスカシを3箇所に穿つ。

D．器台（288）

脚部以下が遺存し、形態や規模から器台に比定した。脚部は裾に向かって緩やかに開く。円形のスカシを二箇所、縦に並べて穿つ。裾では端部付近で内側へと屈曲気味になる。端面は垂下し、内側の端部を下方へ拡張して接地面とする。

第2表　古墳時代土器観察表（1）

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観　察
211	須恵器	蓋	SH13	14.9	5.1		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリの後、ツマミ貼り付け。内面は回転ナデ。
212	須恵器	蓋	SH13	15.0	4.05		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラ切りの後､回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
220	須恵器	蓋	SH28	15.2	4.3		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部中央に回転ヘラ切り痕をとどめ、周囲を回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、底部中央に一方向へ仕上げナデ。
221	須恵器	蓋	SH28	15.1	5.68		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
233	須恵器	蓋	SB44	14.9	3.9		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に粗いカキメか。内面は回転ナデ。
234	須恵器	蓋	SB44	13.9	4.6		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、天井部に一方向への仕上げナデ。
235	須恵器	蓋	P001	13.75	4.8		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部の中央がヘラ切り未調整、その周囲を粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
236	須恵器	蓋	P080	13.25	3.95		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部の中央には回転ヘラ切り痕が明瞭。その周囲を回転ヘラケズリか。内面は回転ナデ。
238	須恵器	蓋	P005	12.4	4.75		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
246	須恵器	蓋	P253	12.5	6.4		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリの後粗いカキメを施し、ツマミ貼り付け。内面は回転ナデ。

第３表　古墳時代土器観察表（2）

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観　察
250	須恵器	蓋	SD024	14.5	5.0		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部が回転ヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。内面は天井部に同心円の当て具痕、その後口縁～底部に回転ナデ。
268	須恵器	蓋	旧河道	13.3	3.25		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、天井部に一方向への仕上げナデ。
276	須恵器	蓋	旧河道	15.15	4.6		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部が回転ヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、天井部に一方向への仕上げナデ。
277	須恵器	蓋	旧河道	15.45	4.4		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部が回転ヘラケズリの後、粗いナデ。内面は回転ナデ。
278	須恵器	蓋	旧河道	14.7	4.4	18.2	外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は天井部に同心円の当て具痕、その後口縁～底部に回転ナデ。
279	須恵器	蓋	旧河道	13.15	4.1	7.7	外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部が回転ヘラ切り未調整。内面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に指オサエ。
291	須恵器	蓋	包含層	14.1	4.85	10.9	外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ痕跡を認めるが、器面が荒れて詳細不明。内面は天井部に同心円の当て具痕、その後口縁～体部に回転ナデ。
292	須恵器	蓋	包含層	14.9	5.1		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリ。内面は天井部に同心円の当て具痕、その後口縁～底部に回転ナデ。
293	須恵器	蓋	包含層	13.15	4.1	8.75	外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリの後、粗い回転ナデ。内面は回転ナデ。
294	須恵器	蓋	包含層	12.08	5.0		外面は口縁～体部に回転ナデ、天井部に回転ヘラケズリの後、ツマミ貼り付け。内面は回転ナデの後、天井部に一方向の仕上げナデ。
208	須恵器	杯	SD04	12.5	3.9		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
209	須恵器	杯	SH10	12.5	5.0	6.3	外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
213	須恵器	杯	SH13	12.95	4.3		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリでわずかに平行タタキ痕跡をとどめる。内面は回転ナデの後、底部中央に２方向への仕上げナデ。
216	須恵器	杯	SH28	14.25	4.7	6.38	外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。底部中央を欠損するため、仕上げナデの有無は不明。
217	須恵器	杯	SH27	14.8	3.59		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は口縁～底部に回転ナデ。底部中央は欠損。
218	須恵器	杯	SH27	13.8	2.7		口縁～体部は、内外とも回転ナデ。
222	須恵器	杯	SH28	12.6	3.6		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
223	須恵器	杯	SH28	12.95	4.85		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部がヘラ切りの後に粗いナデ。内面は底部に複数回の同心円当て具痕、その後口縁～底部に回転ナデ。
224	須恵器	杯	SH28	12.5	3.75		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、底部中央に一方向への仕上げナデ。
225	須恵器	杯	SH28	11.95	4.45		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、底部中央に一方向への仕上げナデ。

第４表　古墳時代土器観察表（3）

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観　察
226	須恵器	杯	SH28	12.8	4.15		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部が回転ヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、底部中央に一方向への仕上げナデ。
232	須恵器	杯	SB35	14.4	3.7	9.9	外面は口縁～受部に回転ナデ、体～底部は灰かぶりで調整不明。内面は口縁～体部が回転ナデ。
239	須恵器	杯	SB15	13.0	3.35		口縁～体部は、内外面とも回転ナデ。外面底部付近にヘラケズリ？の痕跡有り。
240	須恵器	杯	SB16	13.45	2.7		口縁～体部は、内外とも回転ナデ。
251	須恵器	杯	SD006	14.9	4.1		焼成不良で軟質。外面の口縁～体部に回転ナデ、底部および内面の全域は、調整不明。
253	須恵器	杯	SD014	12.2	4.4		口縁～体部は、内外とも回転ナデ。
254	須恵器	杯	SD041	14.25	3.1		口縁～体部は、内外とも回転ナデ。
256	須恵器	杯	SD042	13.9	3.5		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部は大半が欠損するが、回転ヘラケズリ痕あり。内部は口縁～体部に回転ナデ。
257	須恵器	杯	SD036	13.18	2.5		全体に摩滅が著しく、調整は不明。
262	須恵器	杯	SR04	14.85	4.0		焼成不良。外面は口縁～体部に回転ナデ、底部が摩滅のため不明。内面は回転ナデ。
263	須恵器	杯	SR04	12.85	4.0		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、底部中央に一方向への仕上げナデ。内面の一部に黒色の付着物。
269	須恵器	杯	流路	12.4	3.9		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部が回転ヘラ切り未調整。内面は回転ナデの後、底部中央に仕上げナデ。
270	須恵器	杯	流路	11.0	4.1		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部がヘラ切りのあと、ユビオサエ痕が一部に残る。内面は回転ナデの後、底部中央に一方向への仕上げナデ。
280	須恵器	杯	旧河道	9.95	4.6		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ。
295	須恵器	杯	包含層	11.95	4.3	5.96	外面は口縁～受部に回転ナデ、底部が灰かぶりで調整不明。内面は回転ナデ。全体に歪みあり。
296	須恵器	杯	包含層	12.85	5.3	9.6	外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は回転ナデ、底部には付着物があるため調整不明。
297	須恵器	杯	包含層	12.35	4.6	6.0	外面は口縁～体部に回転ナデ、底部が回転ヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。内面は回転ナデの後、底部中央に不定方向への仕上げナデ。
298	須恵器	杯	包含層	12.0	4.85	12.3	底部を安定させて設置すると、口縁～受部が傾く。外面は口縁～体部に回転ナデ、底部が回転ヘラ切りの後、粗い回転ヘラケズリ。底部外面にはヘラ記号。
210	須恵器	高杯	SH10		4.3	9.3	外面は脚柱～裾部に回転ナデ。内面は杯底部および脚柱～裾部に回転ナデ。
248	須恵器	高杯	SD038	11.6	9.45	14.4	外面は口縁～杯体部に回転ナデ、杯底部に回転ヘラケズリ、脚柱～裾部に回転ナデ。内面は口縁～杯底部、脚柱～裾部それぞれに回転ナデ。
249	須恵器	高杯	SD038	13.98	11.9	7.05	口縁～杯底部、脚柱～裾部は、内外とも回転ナデ。
265	須恵器	高杯	SR04		5.65	8.7	脚柱～裾部は内外とも回転ナデ。脚柱部内面の基部には粘土の接合痕が認められる。

第５表　古墳時代土器観察表（4）

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観　察
299	須恵器	高杯	包含層	9.75	5.05		外面は口縁～杯体部に回転ナデ、杯底部に回転ヘラケズリ。内面は口縁～杯底部に回転ナデ。
261	須恵器	提瓶	SD042	8.0	13.05		外面は口縁～頸部に回転ナデ、体部裏面にヘラケズリの後ユビオサエ、体部側面に回転ナデの後ハケメ。内面は口縁～頸部に回転ナデ、体部裏面にユビオサエ、体部側面に回転ナデ。
281	須恵器	提瓶	旧河道		17.4		外面は体部表面の中央にカキメ、体部全面に回転ナデ。裏面は中央にナデ、周囲にヘラケズリ。頸部内面はユビオサエ。
259	須恵器	瓏	包含層		12.7		外面は体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。頸・体部にカキメあり。完形に遺存するため、内面の調整不明。
271	須恵器	瓏	流路	12.0	9.7		外面は頸～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。体部内面は頸～体部に回転ナデ、底部に成形時の突き出し痕。
300	須恵器	瓏	包含層		7.0		外面は肩～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は完形に遺存するため調整不明。
301	須恵器	瓏	包含層		9.65		外面は頸～底部に回転ナデの後、体部下半～底部に多方向のナデ。内面は頸～底部に回転ナデ。頸～体部上半に成形時の絞り痕が明瞭。
302	須恵器	瓏	包含層		7.8		外面は肩～底部に回転ナデ。体部中央にカキメの後、縦ヘラ状工具で刺突文。内面は回転ナデ。
215	須恵器	壷	SH23	18.55	7.9		外面は口縁～体部に回転ナデ。内面は口縁～体部に回転ナデの後、頸部の一部に指ナデ。
227	須恵器	壷	SH28		9.58		外面は肩～体部に回転ナデ、体部下半に回転ヘラケズリ、底部にナデ。内面は回転ナデ。
303	須恵器	壷	流路	10.75	5.4		外面は口縁～頸部に回転ナデ。内面は口縁～頸部に回転ナデ、肩部は同心円の当て具痕をナデ消し。
219	須恵器	甕	SH27	19.45	4.1		口縁～頸部は、内外とも回転ナデ。
230	須恵器	甕	SB16	24.05	8.3		外面は口縁～頸部に回転ナデ、肩部にタタキの後ナデ。内面は口縁～頸部に回転ナデ、肩部に同心円の当て具痕。
231	須恵器	甕	SB16	31.95	3.6		外面は口縁端部に回転ナデ、頸部に3条の突帯を巡らせて、波状文を施す。内面は自然釉がかぶり調整不明。
252	須恵器	甕	SD012	22.7	4.9		内外とも、口縁～頸部に回転ナデ。
255	須恵器	甕	SD042	19.6	6.35		内外とも、口縁～頸部に回転ナデ。頸部内面に粘土の接合痕が残る。
264	須恵器	甕	SR04	33.0	17.4		内外面とも、口縁～頸部に回転ナデ。
274	須恵器	甕	包含層	17.25	30.5		外面は、口縁～頸部に回転ナデ、頸部～肩部にナデの後カキメ、体～底部にタタキの後カキメ。底部のカキメは粗い。内面は口縁～頸部に回転ナデ、肩～底部は同心円の当て具痕、体部の中央のみナデ消す。
290	須恵器	甕	包含層	19.9	17.25		外面は口縁～頸部をナデ、体部にタタキの後粗いカキメ。内面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部にタタキの後ナデ、体部に同心円の当て具痕。
266	須恵器	器台	SR04		6.35		外面は、脚柱部下端にハケメの後ナデ、裾部にナデ・指オサエ。内面はナデ。
272	須恵器	器台？	流路		10.8		外面の上部に回転ナデ、中央から下部にカキメ。調整の後、斜め方向の線刻を連続して施す。内面はナデ、粘土接合痕をとどめる。
273	須恵器	擂鉢	流路		10.8	9.95	外面は体部にカキメ、底部に回転ヘラケズリ、底面の中央にナデ。内面は回転ナデ。

第6表　古墳時代土器観察表（5）

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観　察
304	須恵器	鉢？	包含層	27.5	8.8		外面は口縁～体部に回転ナデ、底部に回転ヘラケズリ。内面は口縁～体部に回転ナデ、底部が同心円当て具痕を粗い回転ナデで消す。
229	土師器	壷	SH09	13.9	3.8		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部にハケメ。摩滅のため、調整は全体に不明瞭。
242	土師器	壷	P-092	11.58	15.05	13.8	外面は口縁～頸部にヨコナデ、頸部にハケメ。体部にタタキの後、ナデ。内面は口縁部に斜め方向の板ナデの後ナデ、頸部～体部にナデ。頸部および底部に指オサエ痕が残る。
260	土師器	壷	SK29	8.4	9.35	10.2	外面は、口縁～底部にハケメの後、口縁部にヨコナデ。内面は、口縁部にハケメ、体部にヘラケズリ、底部には指オサエの成形痕。
283	土師器	壷	旧河道	10.9	13.6		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～底部にハケメの後、肩部の上端および底部にナデ。内面は口縁～頸部にハケメの後ヨコナデ、肩～体部にヘラケズリ、底部に板ナデ。
284	土師器	壷	旧河道	12.25	13.31		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～底部にハケメの後、肩部の上端および底部にナデ。内面は口縁～頸部にハケメ、肩～底部に板ナデ。指オサエの成形痕。
286	土師器	壷	旧河道	7.62	14.38		外面は口縁部にナデ、頸部に板ナデ、肩～体部にハケメの後ヘラミガキ。底部が摩滅のため調整不明。内面は口縁～頸部にナデ、体部以下は完形のため、観察できず。
287	土師器	壷	旧河道	9.3	7.4	3.0	外面は口縁～頸部にヨコなで、体部が手づくね、底部中央にナデ、周囲にヘラ削り。内面は口縁部にヨコナデ、肩部に指オサエ、体～底部に板ナデ。
305	土師器	壷	包含層	7.8	6.85	3.95	外面は口縁部に粗い指ナデ、肩～底部は未調整。内面は口縁部内面に粗い指ナデ、肩～底部に板ナデ。
307	土師器	壷	包含層	14.62	9.0		内外面とも、摩滅のため調整不明瞭。
308	土師器	壷	旧河道	9.6	9.4		外面は口縁部に板ナデ、頸部に指オサエ、肩部～体部がヘラケズリの後ナデ、底部にヘラケズリ。内面は口縁部にヨコナデ、頸部～体部がヘラケズリの後ナデ、底部が指オサエの後ナデ。
214	土師器	甕	P280	14.2	3.5		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部にハケメ。内面は口縁部にヨコナデ、頸～肩部にヘラケズリ。
247	土師器	甕	SB13	11.95	6.15		肩～体部の外面にハケメ。全体に摩滅のため、調整不明瞭。
258	土師器	甕	SD029	17.6	7.0		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～体部がハケメの後、肩部上端にヨコナデ。内面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～体部がハケメの後でヨコナデ。
267	土師器	甕	SR04	17.7	7.9		外面は口縁部にヨコナデ、頸～肩部がハケメの後、頸部のみヨコナデ。内面は口縁～肩部にハケメ、体部にヘラケズリ。
275	土師器	甕	流路	20.6	4.8		外面は口縁～肩部にハケメの後、口縁付近をヨコナデ。内面は口縁～頸部にハケメ、肩部に板ナデ。
282	土師器	甕	旧河道	15.62	8.7		外面は口縁～頸部にヨコナデ、体部にハケメ。内面は口縁部にヨコナデ、頸～体部にヘラケズリの後、頸部をヨコナデ。

第７表　古墳時代土器観察表（6）

No.	種別	器種	出土遺構	口径	器高	底径	観　察
285	土師器	甕	旧河道	23.0	7.3		外面は口縁～肩部にハケメの後、口縁～頸部をヨコナデ。内面は口縁部にヨコナデ、頸部にハケメ、肩部にヘラケズリ。
289	土師器	甕	旧河道	30.1	7.1		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩部にハケメ。内面は口縁～頸部にハケメの後、粗くナデ消し。肩部に指オサエ痕。
306	土師器	甕	包含層	12.4	8.0		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～体部はハケメの後、肩部の上端をヨコナデ。内面は口縁～体部にハケメの後、ヨコナデ。
9000	土師器	甕	P487	25.8	10.8		外面は口縁～頸部にヨコナデ、肩～体部はハケメで肩部の上端はヨコナデにより消される。内面は口縁～体部にハケメの後、部分的に粗くナデ消す。体部内面には指オサエの痕跡。
228	土師器	高杯	SH32	19.18	4.5		内面は口縁～杯体部にハケメの後、ヘラミガキ。外面は摩滅のため調整不明瞭。
237	土師器	高杯	P004	22.2	15.3	13.7	外面は口縁～脚裾部にヨコナデ。内面は口縁～杯体部にヨコナデ、杯底部の粘土充填部分にナデ、脚柱部が未調整、裾部にヨコナデ。
245	土師器	高杯	P146	2.95	7.05	11.25	外面は脚柱部に板ナデ、裾部はナデか。内面は脚柱部が未調整、裾部にナデ。
309	土師器	高杯	包含層	16.7	15.0	13.8	外面はヨコナデ。内面は口縁～杯体部にヨコナデ、杯底部の粘土充填部分にナデ、脚柱部が未調整、裾部にヨコナデ。
310	土師器	高杯	包含層	13.9	10.85	9.05	内外面とも、杯部にヨコナデ、脚部にナデ。
288	土師器	器台？	旧河道		8.5	16.5	外面はヨコナデ。内面は脚部にヘラケズリ、裾部に板ナデ。

奈良時代の遺物

遺構から出土した遺物は、旧河道・流路から出土したもの以外はほとんどない。包含層からもそれほど多くの遺物は出土していない。ここでは基本的に奈良時代の遺物を取り上げるが、律令期的な様相の続く平安前期の遺物も一部取り上げる。

A－１区SB21　P52

311　土師器　甕　端部に面をもつ。頸部内面に稜もつ。

A－１区SB21　P40

312　土師器　甕　端部に面をもつ。

B－６区P450

313　須恵器　杯B　大型で器高の高い杯BⅠである。

B－７区SK39

314を身、315を蓋として埋納されていたものである。

314　須恵器　稜碗　体部は丸みを帯び、口縁部は極端に外反している。稜ははっきりしない。西奥窯跡（姫路市）に類例がある。

315　土師器　台付皿　高い輪高台をもつ。口縁端部は内側に巻き込んだようになり、沈線をもつ。環状つまみの蓋に見立てたものであろう。高い高台を持つ点では、丁・柳ヶ瀬遺跡（姫路市）D66、D74が近い。

E－１区P47

316　土師器　杯　回転台を使用して作られた土師器で、器壁は非常に薄い。底部はヘラ切りと思われる。

B－7～9区P38

317　土師器　製塩土器　内面に布目を残している。

C－1区SD20

318　須恵器　杯Ｇｈ　口縁部がやや外反する。

319　須恵器　杯Ｂ　小型の杯ＢⅣに相当する。

E－1区SK36

320　須恵器　杯Ｇｈ　体部から口縁部にかけて全体的に丸みを帯びている。

321　須恵器　高杯　低くハの字に開く脚をもつ。杯部は平たく、丸みを帯びている。

流路1

遺物は河道の埋土中から出土したものである。出土量は比較的多く、須恵器の供膳具、貯蔵具、土師器の煮炊具などが出土しているが、土師器の供膳具は極めて少ない。

323～335、350　須恵器　杯Ａ　323、350は器高の低い杯ＡⅢである。底部と体部の境は丸みをもたず、体部は直線的である。324～335は器高の高い杯ＡⅣである。杯ＡⅢと同様に底部と体部の境は丸みをもたないもの（325、326～328、332、333）と、杯Ｇｈの系譜を引く体部下半に丸みをもつものがある（324、329～331、334、335）。334は内面見込みに「×」のヘラ記号をもっている。

336～340　須恵器　杯Ｂ　336は口径の大きい杯ＢⅡである。337～340は杯ＢⅢである。340は高く踏ん張った形態の高台をもっている。

341　須恵器　椀Ｂ　口径は小さく、器高は高い。

342～348　須恵器　杯Ｂ蓋　端部にかえりをもつものはない。頂部は扁平のものが多いが、笠形のものもの（344）もある。小型のもの（345～348）の端部はやや丸みをおびている。つまみは343、344がやや宝珠形を呈する以外は、扁平である。

349　須恵器　ⅢＡ　やや内湾して立ち上がる口縁をもつ。

351　須恵器　稜碗蓋　環状のつまみをもつ。端部は明瞭に屈曲するが、丸みをもっている。

352　須恵器　稜碗　体部下半は丸味をもち、底部はヘラケズリである。

353、354　須恵器　高杯　353の杯部は丸みをおびている。354はⅢ状の杯部である。

355～362　須恵器　甕　口縁が外反し、端面が外方を向くもの（335～359）、口縁が外反し、端部を上方につまみ上げたもの（361）、口縁部が直線的で端面が上方を向くもの（360、362）などがある。

363～367　須恵器　壺　363は長頸壺の口縁で、端部は大きく上につまみ上げられている。364は長頸壺の底部で、ハの字に踏ん張った高い脚をもっている。365は短頸壺で、肩はなだらかである。板状の耳が残存しているのは１つであるが、四耳壺と考えられる。外面には自然釉がかかっている。366は平瓶の体部上半で、肩部に１条以上、上面に２条の沈線が施されている。上面の沈線上には円形浮文を１つ（本来は２つか）有している。367は横瓶で、口縁部が直線的で端面が上方を向いている。

368　土師器　Ⅲ　手づくねの土師器である。口縁端部は丸く巻き込んでいる。

322、369　土師器　杯　322は手づくねの土師器である。底部から体部にかけて急に立ち上がる。415は回転台土師器である。底部はナデである。

372～382　土師器　甕　372～379は長胴の甕と考えられるもので、口縁端部に面をもっている。372～378は口縁部が頸部で外側に大きく折れて開き、頸部の内面に稜をもっている。379の口縁部は頸部から

ゆるやかに外反している。380、381は小型の甕である。70の口縁端部は丸みをもち、71の口縁端部は面をもっている。382は把手付きの甕である。口径に対して器高が低い。

370、371　平瓦　370は凸面に1辺8㎜程度の格子タタキが施されている。371は凸面に平行タタキが施されている。

流路2

383～385　須恵器　杯A　器高の低い杯AⅣである。いずれも体部に丸みをもつ。

386　須恵器　杯B蓋　扁平な形態の蓋で、端部の屈曲も不明瞭である。

387　須恵器　杯B　器高の低い杯BⅣである。

388　須恵器　甕　口縁部にやや内湾して立ち上がる縁帯をもっている。縁帯下端と頸部のやや上に3条の沈線をもつ。縁帯部に斜め方向の、縁帯の下に縦方向の沈線が施されている。

389　須恵器　壺　長頸壺の底部である。

390　土師器　椀　高い高台をもち、体部の丸い椀形の器形である。

旧河道

遺物は橋脚付近の岸辺で、まとまって出土したものが多い。須恵器杯Ｇｈなどの供膳具の他は非常に少ない。

391～404　杯Ｇｈ　体部に丸みをもち、口縁部は内湾しながらそのまま立ち上がるものと、外反するものがある。393は墨書土器で、底面に「大家」と書かれている。

405　須恵器　杯G　直線的に立ち上がる体部をもっている。底部は回転ヘラケズリが施されている。

406　須恵器　杯B蓋　頂部は笠型で、扁平なつまみをもつものである。

407、408　須恵器　杯B　杯BⅢである。

409　須恵器　鉢　体部下半は丸みをもち、口縁部は上方へ立ち上がる。底部は平底で、手持ちヘラケズリが施されている。

410　須恵器　高杯　体部に丸みをもつ杯部である。

411　須恵器　壺A　肩部に稜をもつ短頸壺である。

412、413、431　須恵器　甕　412は口縁部が上方を向き、端部に丸みをもつものである。413は口縁が外反し、端面が外方を向くものである。431は口縁部にやや内湾する縁帯をもっている。頸部には2条の沈線が3列施され、縁帯の下位に波状文、沈線と沈線の間に列点文が施されている。

414　土師器　壺　底部ヘラ切りの回転台土師器であるが、口縁部はてづくねを意識したためかゆがんでいる。

415、416　土師器　甕　口縁端部に面をもっている。514は口縁端部に向かって尖り気味になり、端面の幅は狭い。

包含層

417～421　須恵器　杯A　遺構出土のものと同様、体部に丸みをもつものである。417は杯AⅢ、418～420は杯AⅣである。

421　須恵器　杯Gh　体部に丸みをもつものである。

422・423　須恵器　杯B　422は小型の杯BⅤ、423は杯BⅢである。

424　須恵器　碗B

425須恵器　高杯　ハの字状に開く脚部で、端部が玉縁状に肥厚している。

426　須恵器　蓋　壺の蓋と思われるもので、宝珠形のつまみをもっている。内面と破面に炭が付着していることから、破損後に転用硯として使用されたと考えられる。

427　須恵器　壺　ミニチュアの壺Cである。

428、429　土師器　皿　497は底部ヘラ切りの小皿である。512は手づくねの皿で、口縁端部は丸い。

432　土師器　竈　上部はやや肥厚し、上面は平坦である。焚口部には鍔をもっている。

430　平瓦　凸面は1辺5㎜前後の格子タタキが施されている。

平安時代以降の遺物

A－1区P16

433　土師器　小皿　底部ヘラ切りの回転台土師器である。

A－1区P25

434　土師器　托　底部ヘラ切りの回転台土師器である。

A－1区P18

437　白磁　碗　森田・横田分類白磁碗Ⅳ類である。

B－7区SB59　P365

435　須恵器　碗　底部は糸切りである。体部に丸みをもち、口縁端部が外反する。見込みには若干凹みをもつ。西播系須恵器と考えられる。

B－7区SB59　P516

436　土師器　羽釜　口縁部は真上に立ち上がり、端部に面をもつ。口縁部直下に幅の狭い突帯状の鍔をもつ。

D－1区P123

438　白磁　碗　森田・横田分類の白磁碗Ⅴor Ⅷ類である。口縁端部は外反して、水平となる。

D－5区P64

439　須恵器　碗　底部が糸切りの東播系須恵器である。

440　白磁　碗　森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類である。

D－5区P23

441　白磁　碗　森田・横田分類の白磁碗Ⅲ類である。

E－1区P48

442　白磁　碗　森田・横田分類の白磁碗Ⅱ類である。釉色は透明で、細かい貫入が入る。

B－4区SD29

443　土師器　甕　口縁は比較的ゆるやかに外反し、端部は丸みをもつ。

444　青磁　碗　森田・横田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類である。露胎部は赤化している。

D－5区SX01

445　灰釉陶器　瓶　底部は糸切りである。黒笹90号窯式のものである。

E－1区SK35

446・447　須恵器　碗　底部糸切りの碗である。体部下半に丸みをもつが、口縁部にかけては直線的である。見込みには若干凹みをもつ。西播系須恵器である。

449　須恵器　小皿　底部はヘラ切りである。

448　土師器　鍋　口縁部は厚手で、端部に面をもつ。

450　土師器　小皿　回転台土師器である。

451　土師器　碗　高めの輪高台をもつ。

452　白磁　碗　森田・横田分類の白磁碗Ⅱ類である。釉色は透明で、細かい貫入が入る。

流路1

453～455　須恵器　碗　453は底部ヘラ切りである。しっかりした平高台に、体部は直線的に開く。西後明7号窯（9世紀前半）頃のものである。454は底部糸切りである。体部下半に丸みをもつが、口縁部にかけては直線的である。見込みには凹みをもたない。西播系須恵器と考えられる。455は底部糸切りである。体部に丸みをもち、口縁端部が外反する。見込みには凹みをもたない。西播系須恵器と考えられる。

456・457　須恵器　小碗　底部は糸切りである。体部は丸みをもち、口縁部は外反気味である。

458　須恵器　皿　底部は糸切りである。

459　須恵器　小皿　底部糸切りの皿である。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部は尖り気味となる。

460　須恵器　捏鉢　口縁端部は断面方形で、やや内側につまんだようになっている。東播系須恵器で12世紀前半のものである。

461　須恵器　双耳壺　肩部に2条の突帯をもち、その上に紐状の耳を貼り付けている。

462　須恵器　甕　口縁部内面にくぼみをもつ。東播系須恵器で、12世紀代のものである。

463　土師器　小皿　底部ヘラ切りの回転台土師器である。

464～466　土師器　鍋　土師器の甕が器高を減じたものである。器壁は厚手で、胎土も粗い。464の口縁端部は丸みをもち、465・466は尖り気味である。

467・468　土師器　羽釜　467は口縁部が真上に立ち上がり、端部に面をもつ。口縁部直下に幅の狭い突帯状の鍔をもつ。器壁は厚手である。468も口縁部が真上に立ち上がり、端部に面をもつ。口縁部やや下に幅の広い板状の鍔をもつ。器壁は薄い。

469　土師器　坩堝　手づくねで成形され、内面に滓が付着している。

470　緑釉陶器 碗　削り出しの蛇の目高台であるが中央は削り残されている。内外面にはミガキを確認することができる。やや軟質の黄味がかった胎土で、釉は全面施釉され、釉色は淡い黄緑色である。京都産で、9世紀中頃から後半にかけての時期である。

471　緑釉陶器　底部　565と同様削り出しの蛇の目高台であるが中央は削り残されている。焼成は軟質で肌色の胎土である。釉は全面施釉され、釉色は淡い黄緑色である。京都産で、9世紀中頃から後半にかけての時期である。

472・473　白磁　碗　森田・横田分類の白磁碗Ⅳ類である。

包含層

474～478　須恵器　碗　底部は糸切りである。

479　須恵器　小碗　底部はヘラ切りである。

480　須恵器　耳皿　底部は糸切りである。

481　須恵器　壺　小型で、底部は丸底である。

482　土師器　羽口　外面は被熱により変色している。

483　土師器　碗　回転台土師器である。体部下半はやや丸みをもち、口縁部は直線的に開く。

484・485　白磁　碗　484は森田・横田分類の白磁碗Ⅲ類である。玉縁の下に焼成前穿孔がある。485は森田・横田分類の白磁碗Ⅴ類である。

486～489　白磁　皿　486は森田・横田分類の白磁皿Ⅱ類である。487は低い平高台の皿である。胎土は白く、焼成は硬質である。釉色はわずかに青みがかった白色である。11世紀代のものと考えられる。488は森田・横田分類の白磁皿Ⅵ類である。489は森田・横田分類の白磁皿Ⅸ－1類である。

490　白磁　小壺　小型の無頸壺である。釉色は灰白色である。

491～493　青磁　碗　491は森田・横田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1類である。浅い沈線が口縁部内面に1条、外面に4条めぐる。492は森田・横田分類の同安窯系青磁碗Ⅰ－1類である。493は森田・横田分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類である。

494　青磁　皿　森田・横田分類の同安窯系青磁皿Ⅰ－2類である。

表8　出土遺物観察表（奈良時代以降）（1）

No.	器種	器形	地区	遺構	口径	器高	底径	調整および備考
311	土師器	甕	A-1	P52	(13.0)	3.5		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はナデ
312	土師器	甕	A-1	P40	(26.6)	(4.7)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ
313	須恵器	杯B	B-6	P450	(28.9)	2.6		外面は摩滅
314	須恵器	稜椀	B-7	SK39	17.8	5.4	7.4	内面～体部上半外面は回転ナデ、体部下半外面は回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り後ナデ
315	土師器	台付皿	B-7	SK39	20.1	4.8		口縁部内面～見込み外周部はヨコナデ、見込み中心部はナデ、高台内外面はヨコナデ、外面は摩滅
316	土師器	杯	E-1	P38	12.7	3.4	7.7	外面は回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ、内面は摩滅
317	土師器	製塩土器	B-7～B-9	P38		(3.7)		内面は布目、外面はナデ
318	須恵器	杯G h	C-1	SD20	(9.8)	3.2	(6.5)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
319	須恵器	杯B	C-1	SD20	(11.4)	3.9	(7.2)	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部は回転ヘラケズリ
320	須恵器	杯G h	E-1	SK36	(8.9)	3.3	(4.6)	内外面とも回転ナデ、底部は回転ヘラ切り後ナデ
321	須恵器	高杯	E-1	SK36	(11.9)	6.2	8.3	内外面とも回転ナデ
322	土師器	杯A	D-2	流路1	(16.0)	3.3	(11.7)	体部内面～口縁部外面はヨコナデ、見込みはナデ、体部外面～底面はナデ、指オサエ
323	須恵器	杯A	D-2	流路1	(13.0)	28.6	(11.3)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
324	須恵器	杯A	E-1,E-2	流路1	13.0	3.6	8.2	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
325	須恵器	杯A	D-1	流路1	12.8	3.6	12.5	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部は回転ヘラケズリ
326	須恵器	杯A	D-3,D-4	流路1		(9.2)	9.6	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
327	須恵器	杯A	E	流路1	12.8	3.8	9.0	内外面とも回転ナデ、見込みに仕上げナデ、底部はヘラ切り後ナデ
328	須恵器	杯A	D-3,D-4	流路1	12.5	3.6	8.6	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
329	須恵器	杯A	D-2	流路1	(12.0)	3.8	(6.9)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
330	須恵器	杯A	E-1,E-2	流路1	(11.7)	3.8	(8.0)	内外面とも回転ナデ、底部は回転ヘラ切り後ナデ
331	須恵器	杯A	E-1,E-2	流路1	(11.2)	(3.9)	(5.3)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
332	須恵器	杯A	D-3,D-4	流路1	(11.5)	(3.7)	(8.3)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
333	須恵器	杯A	D-2	流路1	(11.4)	(3.3)	(7.6)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
334	須恵器	杯G'	E-1,E-2	流路1	10.9	3.7	6.2	内面～外面上半は回転ナデ、外面下半は回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り、見込みにヘラ記号「×」
335	須恵器	杯G'	D-2	流路1	(10.8)	3.5	(6.0)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ

表9　出土遺物観察表（奈良時代以降）(2)

No.	器種	器形	地区	遺構	口径	器高	底径	調整および備考
336	須恵器	杯B	B-2	流路1	(17.0)	5.9	(12.7)	内面～体部上半外面は回転ナデ、体部下半外面は回転ヘラケズリ、底部はヘラ切り後ナデ、爪形圧痕あり
337	須恵器	杯B	E	流路1	13.9	4.0	10.6	内外面とも回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ
338	須恵器	杯B	B-3	流路1	(12.9)	4.6	(10.0)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
339	須恵器	杯B	B-2	流路1	(12.4)	4.6	(8.7)	内面～体部上半外面は回転ナデ、体部下半外面は回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラケズリ
340	須恵器	杯B	B-7	流路1	(13.2)	(4.1)	(8.8)	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部は回転ヘラケズリ
341	須恵器	杯B	D-2	流路1	11.2	6.3	7.3	内外面とも回転ナデ、底部はヘラケズリ後ナデ
342	須恵器	杯B蓋	E-1,E-2	流路1	16.9	2.7		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラケズリ、つまみと内面中央部にヘラ記号「一」あり
343	須恵器	杯B蓋	B-2	流路1	15.6	3.2		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラケズリ
344	須恵器	杯B蓋	E-1,E-2	流路1	15.6	3.3		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラケズリ
345	須恵器	杯B蓋	B-2	流路1	14.6	1.8		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラ切り後ナデ
346	須恵器	杯B蓋	B-3·D-2	流路1	13.6	1.9		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラケズリ
347	須恵器	杯B蓋	D-2	流路1	13.6	2.3		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラ切り後ナデ
348	須恵器	杯B蓋	D-3,D-4	流路1	12.6	4.1	9.1	内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラケズリ
349	須恵器	皿A	D-3,D-4	流路1	(15.0)	(2.3)	(12.9)	内外面とも回転ナデ見込み部分は仕上げナデ、底部はヘラ切り、内外面に火襷あり
350	須恵器	皿A	E-1,E-2	流路1	13.9	2.7	11.4	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り、内外面に火襷あり
351	須恵器	稜碗蓋	E-1,E-2	流路1	18.5	3.2		内外面とも摩滅
352	須恵器	稜碗	D-2	流路1		(4.2)	(8.1)	内面～体部上半は回転ナデ、体部下半～底部は回転ヘラケズリ、底面に墨付着
353	須恵器	高杯	D-3,D-4	流路1	21.0	(5.9)		外面は摩滅
354	須恵器	高杯	D-3,D-4	流路1	(25.8)	(2.9)		内外面とも回転ナデ
355	須恵器	甕	D-2	流路1	(32.9)	(9.1)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は格子タタキ、体部内面は当具痕
356	須恵器	甕	B-2,B-3	流路1	(29.1)	(7.4)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ、体部内面は同心円当具痕
357	須恵器	甕	D-3,D-4	流路1	(20.0)	(15.3)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は格子タタキ後カキ目、体部内面は同心円当具痕
358	須恵器	甕	B-3	流路1	(21.6)	(7.7)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ、体部内面は無文の当具痕あり
359	須恵器	甕	E-1	流路1	(15.9)	(6.8)		口縁部の内外面は回転ナデ、体部外面は平行タタキ後部分的にナデ、体部内面は同心円文の当具痕あり
360	須恵器	甕	E-1	流路1	(23.0)	(6.9)		内面～口縁部外面は回転ナデ、体部外面は平行タタキ
361	須恵器	甕	D-3,D-4	流路1	(13.5)	(2.8)		口縁部は内外面は回転ナデ、体部外面は平行タタキ後ナデ、体部内面は同心円当具痕
362	須恵器	甕	D-3,D-4	流路1	(11.4)	(18.9)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ後部分的にミガキ、体部内面は同心円当具痕
363	須恵器	壺	E-2	流路1	(13.9)	(7.5)		内外面とも回転ナデ
364	須恵器	台付壺	C-6	流路1		(4.5)	(11.8)	内外面とも回転ナデ
365	須恵器	四耳壺	E-1	流路1	(11.8)	(9.2)		口縁部内面は回転ナデ、体部内面はナデ、外面は自然釉

表10　出土遺物観察表（奈良時代以降）（3）

No.	器種	器形	地区		口径	器高	底径	調整および備考
366	須恵器	平瓶	D-3,D-4	流路1		(3.0)		内面は回転ナデ
367	須恵器	横瓶	D-3,D-4	流路1	(10.9)	(6.2)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ後カキ目、体部内面は同心円当具痕
368	土師器	Ⅲ	D-3,D-4	流路1	(4.8)	(8.0)		内面～口縁部外面はヨコナデ、底部は摩滅
369	土師器	杯	E-1,E-2	流路1	(12.8)	(3.1)	6.4	内外面とも回転ナデ、底部はナデ
370	瓦	平瓦	E-1,E-2	流路1				haba;1.8　凸面は格子タタキ、凹面は布目（9本×8本／1cm）、のちナデ、側面と側縁はヘラケズリ
371	瓦	平瓦	D-3,D-4	流路1				凸面は平行タタキ後ナデ、凹面は布目（7本×7本／1cm）
372	土師器	甕	D-2	流路1	(27.9)	(7.5)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ後ナデ
373	土師器	甕	B-3	流路1	(27.8)	(6.4)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ
374	土師器	甕	D-2	流路1	(26.6)	(5.8)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はハケ後ナデ
375	土師器	甕	D-2	流路1	(24.2)	(5.8)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はナデ
376	土師器	甕	D-2	流路1	(23.4)	(7.5)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はケズリ
377	土師器	甕	D-2	流路1	(27.3)	(15.9)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面は上部のみヨコハケ、下半はナデで部分的に指オサエ
378	土師器	甕	B-2	流路1	(13.4)	(11.0)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面上部はヨコハケ、下部はナデ、部分的に指オサエ
379	土師器	甕	D-2	流路1	(35.2)	(12.2)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケで下半のみ板ナデ
380	土師器	甕	E-1	流路1	(16.9)	(5.9)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ後ナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ
381	土師器	甕	B-3	流路1	(12.6)	(9.9)		？口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面は指オサエ後、部分的にヘラケズリ、粘土紐の接合痕を残す
382	土師器	把手付甕	D-3,D-4	流路1	(28.1)	(11.7)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケ、体部内面ヘラケズリ
383	須恵器	杯A	C-拡張区	流路2	(14.4)	(3.5)	11.1	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
384	須恵器	杯A	C-拡張区	流路2	12.2	3.6	7.2	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り、板状圧痕あり
385	須恵器	杯A	C-6	流路2	12.0	2.6	7.8	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
386	須恵器	杯B蓋	C-拡張区	流路2	15.9	1.6		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部はヘラ切り後ナデ
387	須恵器	杯B	C-6	流路2	(13.8)	4.3	(10.2)	内外面とも回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ
388	須恵器	甕	C-拡張区	流路2	(38.9	(14.3)		内外面とも回転ナデ
389	須恵器	台付壷	C-拡張区	流路2		(7.2)		体部外面下部のみ回転ヘラケズリ、その他は回転ナデ
390	土師器	椀	C-拡張区	流路2	(15.8)	6.2	(9.2)	内面～口縁部外面はヨコナデ、体部外面は手持ちヘラケズリ、高台内外面はヨコナデ
391	須恵器	杯A	E-8,E-9	旧河道	11.3	3.4	7.3	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
392	須恵器	杯A	E-8	旧河道	11.8	3.8	7.0	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
393	須恵器	杯A	E-8,E-9	旧河道		(1.7)	6.9	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り、底面に墨書「大家」あり

表11　出土遺物観察表（奈良時代以降）（4）

No.	器種	器形	地区		口径	器高	底径	調整および備考
394	須恵器	杯A	E-7,E-8,E-9	旧河道	(11.5)	3.7	7.3	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
395	須恵器	杯A	E-7,E-8,E-9	旧河道	11.5	4.3	6.9	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
396	須恵器	杯A	E-8,E-9	旧河道	11.6	3.8	6.6	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
397	須恵器	杯Gh	E-8,E-9	旧河道	10.9	4.2	7.1	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
398	須恵器	杯Gh	E-8,E-9	旧河道	10.4	4.2	6.1	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
399	須恵器	杯Gh	E-8,E-9	旧河道	10.7	3.1	7.0	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部はヘラ切り、内面にヘラ記号
400	須恵器	杯Gh	E-7,E-8,E-9	旧河道	10.6	3.8	6.4	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り、内面にヘラ記号「×」あり
401	須恵器	杯Gh	E-8,E-9	旧河道	10.4	3.5	5.6	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
402	須恵器	杯Gh	E-7,E-8,E-9	旧河道	10.0	2.9	6.4	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り、見込みにヘラ記号「×」あり
403	須恵器	杯Gh	E-9	旧河道	9.8	3.1	6.1	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
404	須恵器	杯Gh	E-8	旧河道	9.6	3.7	4.6	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
405	須恵器	杯Gh	E-7,E-8,E-9	旧河道	10.1	4.0		内外面とも回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ
406	須恵器	杯B蓋	E-8,E-9	旧河道	15.1	3.6		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラケズリ
407	須恵器	杯B	E-8,E-9	旧河道	(15.0)	4.8	(12.4)	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ、爪形圧痕あり
408	須恵器	杯B	E-7,E-8,E-9	旧河道	14.3	4.3	10.8	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部は回転ヘラケズリ
409	須恵器	鉢	E-8,E-9	旧河道	14.1	6.0		内外面とも回転ナデ、底部は手持ちヘラケズリ
410	須恵器	高杯	E-8,E-9	旧河道	10.6	4.7		内外面とも回転ナデ
411	須恵器	短頸壺	E-8,E-9	旧河道	11.1	15.2	12.5	内面は指オサエ後回転ナデ、外面は回転ナデ、下部のみ手持ちヘラケズリ、底部内面は不定方向仕上げナデ、底部外面は指オサエ後ナデ、内面に黒い漆状と白いカルシウム状の付着物あり。
412	須恵器	甕	E-8,E-9	旧河道	13.9	8.8		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ後カキ目、体部内面は同心円当具痕
413	須恵器	甕	E-8,E-9	旧河道	(22.0)	(7.2)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ、体部内面は同心円当具痕
414	土師器	壺	E-8	旧河道	8.5	5.5		内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
415	土師器	甕	E-8,E-9	旧河道	(19.8)	(5.4)		外面は摩滅
416	土師器	甕	E-9	旧河道	(32.0)	(10.1)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ
417	須恵器	杯A	E-2	包含層	14.1	3.4	9.3	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
418	須恵器	杯A	E-3,E-4	包含層	12.0	3.5	7.7	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
419	須恵器	杯A	D-5	包含層	(12.4)	(3.6)		内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
420	須恵器	杯A	C-6	包含層	12.2	4.2	8.3	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ
421	須恵器	杯Gh	E-3	包含層	10.6	8.4	3.2	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り後ナデ、板状圧痕を残す
422	須恵器	杯B	E-3,E-4	包含層	10.9	4.0	7.8	内面～外面上部は回転ナデ、外面下部～底部はヘラケズリ
423	須恵器	杯B	E-2,E-3	包含層	14.2	4.3	11.2	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底面は回転ヘラケズリ
424	須恵器	碗B	E-3,E-4	包含層	11.5	5.4	7.8	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底面は回転ヘラケズリ
425	須恵器	高杯	D-5	包含層		(6.1)		内外面とも回転ナデ、杯部見込みに同心円当て具痕
426	須恵器	蓋	E区西半	包含層	9.4	2.0		内面～縁部外面は回転ナデ、頂部は回転ヘラケズリ、内面は摩滅、内面と破面に墨が付着
427	須恵器	壺	B-7	包含層	3.1	2.1	2.4	内外面とも回転ナデ
428	土師器	Ⅲ	C-5,8	包含層	8.1	1.1	5.7	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
429	土師器	Ⅲ	A-1	包含層	(14.2)	(1.9)	(13.1)	口縁部は内外面ともヨコナデ、見込みは仕上げナデ、底面は指ナデ

表12　出土遺物観察表（奈良時代以降）（5）

No.	器種	器形	地区		口径	器高	底径	調整および備考
430	瓦	平瓦	E-2	包含層				凸面は格子タタキ、凹面は布目（８本×７本／1cm）、側面は２面にヘラケズリ
431	須恵器	甕	E-8,E-9	旧河道	44.5	101.1		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ、体部内面は同心円当具痕
432	土師器	竈	D-5	包含層	(17.5)	(2.4)		内面はタテハケ、外面はヨコハケ、接合部は粗雑に粘土を足している
433	土師器	小皿	A-1	P16	(8.9)	(1.2)		内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
434	土師器	托	A-1	P25	8.3	2.3	5.5	内外面とも回転ナデ、見込みは仕上げナデ、底部はヘラ切り
435	須恵器	碗	B-7	P365	15.6	6.4		内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
436	土師器	羽釜	B-7	P516	(19.5)	6.8		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケor板ナデ
437	白磁	碗	A-1	P018	(13.1)	(2.7)		内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅳ類
438	白磁	碗	D-1	P123	(17.0)	(2.4)		内外面とも施釉、森田･横田分類白磁碗Ⅴor Ⅷ類
439	須恵器	碗	D-5	P64	(16.7)	4.8	(5.2)	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
440	白磁	碗	D-5	P64	(16.6)	(3.4)		内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅳ類
441	白磁	碗	D-5	P23		(4.3)	4.8	体部外面下位以下露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅲ類
442	白磁	碗	E-1	P48		(3.0)		内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅱ類
443	土師器	甕	B-4	SD29	(25.8)	(10.8)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケ、部分的に指オサエ
444	青磁	碗	B-4	SD29		(2.7)	5.1	高台部内面まで施釉、森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅱ類
445	灰釉陶器	瓶	D-5	SX01		(10.6)	6.2	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、K-90号窯式
446	須恵器	碗	E-1	SK35	14.9	5.0	5.5	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
447	須恵器	碗	E-1	SK35	15.2	5.3	6.2	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
448	土師器	鍋	E-2	SK35	(49.0)	(5.5)		口縁部内面はヨコハケ後ナデ、口縁部外面はヨコナデ後部分的に指オサエ
449	須恵器	小皿	E-1	SK35	(9.1)	1.7	(3.3)	内外面とも回転ナデ、見込みは指ナデ、底部は回転ヘラ切り後ナデ
450	土師器	小皿	E-1	SK35	(9.6)	1.5	(7.8)	内外面とも摩滅
451	土師器	碗	E-1	SK35		(1.7)	5.8	内外面とも摩滅
452	白磁	碗	E-2	SK35		(2.8)	5.9	体部外面下半以下露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅱ類
453	須恵器	碗	B-2,B-3	流路1	14.7	5.9	8.3	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り、西後明７号窯
454	須恵器	碗	B-3	流路1	15.4	5.7	5.8	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
455	須恵器	碗	E-2	流路1	14.9	4.8	5.1	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
456	須恵器	小碗	B-3	流路1	8.1	3.3	5.0	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
457	須恵器	小碗	B-2	流路1	8.4	3.2	4.0	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
458	須恵器	皿	B-3	流路1	(12.9)	2.6	(6.2)	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
459	須恵器	小皿	D-2	流路1	9.3	1.7	6.2	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り、板状圧痕あり
460	須恵器	捏鉢	B-3	流路1	30.7	11.3	(10.4)	内外面とも回転ナデ、内面のみ仕上げナデ、底部は糸切り後ナデ
461	須恵器	壷	B-2	流路1		(6.8)		内外面とも回転ナデ
462	須恵器	甕	B-2,B-3	流路1	(28.4)	(6.4)		口縁部は内外面とも回転ナデ、体部外面は平行タタキ、体部内面はナデ、無文の当具痕あり
463	土師器	小皿	B-3	流路1	4.5	1.4	5.6	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
464	土師器	鍋	D-4	流路1	(31.6)	(20.8)		口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケ、体部内面はおそらくナデ
465	土師器	甕	B-7	流路1	(28.9)	(9.8)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケor板ナデ、体部内面はナデ

表13　出土遺物観察表（奈良時代以降）（6）

No.	器種	器形	地区		口径	器高	底径	調整および備考
466	土師器	鍋	D-3	流路1	(24.7)	(5.9)		口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はハケor板ナデ
467	土師器	羽釜	D-3	流路1	(24.0)			口縁部は内外面ともヨコナデ、体部外面はタテハケ
468	土師器	羽釜	D-3,D-4	流路1	30.2	23.2		口縁部外面はヨコナデ、体部上半外面はタテハケ、体部下半外面は平行タタキ、内面上半はヨコハケ、内面下半は摩滅
469	土師器	坩堝	B-1	流路1	(31.8)	(23.0)		内面に鉱滓が付着
470	緑釉陶器	碗	B-3	流路1	13.1	4.4	5.7	内外面ともヘラミガキ、全面施釉、京都系
471	緑釉陶器	底部	D-2	流路1		(1.2)	5.8	全面施釉、京都系
472	白磁	碗	B-2,B-3	流路1	(16.6)	(3.0)		内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅳ類
473	白磁	碗	D-2	流路1		(4.4)	5.4	体部外面下半以下露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅳ－1類
474	須恵器	碗	D-2	包含層	14.8	5.2	5.5	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
475	須恵器	碗	D-1	包含層	15.5	6.7	7.3	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、内外面に火襷あり、西播系
476	須恵器	碗	D-1	包含層	15.5	5.7	5.6	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
477	須恵器	碗	D	包含層	13.8	4.7	10.4	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
478	須恵器	碗	D-1	包含層	12.7	5.3	5.2	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り、西播系
479	須恵器	小碗	B-7	包含層	10.3	4.4	5.5	内外面とも回転ナデ、底部はヘラ切り
480	須恵器	耳皿	C-3,C-4	包含層		3.7	4.0	内外面とも回転ナデ、底部は糸切り
481	須恵器	小瓶	E-1,E-2	包含層	(9.1)		外面は回転ナデ、底部は手持ちヘラケズリ、ナデ	
482	土製品	羽口	D-5	包含層				外面は被熱により変色している
483	土師器	碗	D-5	包含層	14.7	5.2	7.2	内外面とも摩滅
484	白磁	碗	D-1	包含層	(15.8)	(2.2)		内外面とも施釉、森田・横田分類白磁碗Ⅲ類
485	白磁	碗	B-7	包含層		(2.4)	6.0)	体部外面下半以下露胎、森田・横田分類白磁碗Ⅴ類
486	白磁	碗	D	包含層		(1.3)	4.8	外面は露胎、森田・横田分類白磁皿Ⅱ類
487	白磁	碗	D-3,D-4	包含層		(1.9)	(6.2)	体部外面下位以下露胎、11世紀代
488	白磁	皿	C-5,8	包含層		(2.0)	(5.0)	ほぼ底面のみ露胎、森田・横田分類白磁皿Ⅵ類
489	白磁	皿	C-5,8	包含層		(2.4)		口縁端部のみ露胎、森田・横田分類白磁皿Ⅸ－1類
490	白磁	小壷	D	包含層	2.4	3.1		内外面とも施釉
491	青磁	碗	D-3,D-4	包含層		(4.6)		内外面とも施釉、森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ－1類
492	青磁	碗	C-1	包含層		(1.7)		内外面とも施釉、森田・横田分類龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類
493	青磁	碗	D-1	包含層		(2.4)		内外面とも施釉、森田・横田分類同安窯系青磁碗Ⅰ－1類
494	青磁	皿	D-5	包含層		(1.9)0	5.2	底面のみ露胎、森田・横田分類同安窯系青磁皿Ⅰ－2類

土製品

495～499は土錘で、漁網用として用いられていたものと思われる。495～497は円筒形を呈した管状土錘で、平面形態は紡錘形をなす。495・497は土師質で、495はD－3～5区の流路SD500から、497はB－5区竪穴住居SH03から出土している。後者は弥生土器と同様の胎土・焼成であるが、後世のものの混入の可能性もある。496は須恵質のもので、B－2区の旧河道から出土している。498・499は両端穿孔棒状土錘と呼ばれるもので、土師質のものである。498はA－4区のSK41から出土している。他のものと異なり、端部のみを断面方形に作っている。499も同地区のP185から出土した。この両端穿孔棒状土錘は瀬戸内を中心として分布しており、小型のものであるが、主に海で使われる。弥生時代後期から出現し、13世紀頃まで見られるものである。特に498は弥生時代のものの可能性がある。

500～503は土製の有孔円盤で、小型軽量であるが、紡錘車として用いられたものであろう。500～502は土器を円盤状に加工し、両面から穿孔して作っている。502は大きく削平を受けたSH07上面の包含層から、他のものも溝周辺や包含層出土のものである。3点とも磨滅が著しい。503はA－2区の包含層から出土しており、円錐台状に手づくねで作っている。古墳時代に見られる石製紡錘車を模したものであろうか。

504はB－5区のSH03から出土した独楽状の土製品で、上面に円孔を中途まで穿っており、棒等を突き刺して使用したものと思われるが、用途は不明である。上半部には指で押さえた痕跡が残っているが、下半部はナデによって調整している。一部に黒斑が見られる。

505はC－6区のSD01から出土しており、直径8.5cmの円盤の相対する位置に円孔を4ケ所穿っているが、大きく欠損しているため、孔の痕跡のみが認められる。中央がやや厚く、器表面には指で押さえた痕跡が残るものの、ナデミガキを施して仕上げている。弥生土器と共通する胎土・焼成を呈しており、円盤が復元できるならば、土器等の蓋の用途が推測できる。

506・507は分銅形土製品である。506は調査区の中でも最も標高の高いA－3区の包含層から出土している。下半部と繰り込みの先端部を欠いている。繰り込みが他の同製品と比べて大きいため、中央部が著しく細く作られている。繰り込み先端部や上側縁部によく見られる貫孔は見られない。上半部表面には人面が描かれており、眉と鼻はおそらく粘土紐を貼り付けて作っており、鼻は剥離している。目と口はヘラ描きで表現されており、他の紋様の施紋具に比べ幅が太い。器表面を丁寧に磨いた後、繰り込み部も含めて、外縁部に鋭利な工具で非常に細い沈線を巡らせている。この外周の沈線は裏面にも見られる。裏面にはやはり鋭利な工具で縦方向に二条の直線を描き、その中を右下がりの斜めの沈線で区切り、さらにその中を左下がりの並行沈線で埋めている。複合鋸歯紋を描いたものであろう。この複合鋸歯紋帯は上下で幅が異なる。表面に顔面、裏面に複合鋸歯紋と縁取りの沈線紋を施した後、全面に赤色顔料を塗布している。但し、目や口のヘラ描きの中には顕著な顔料が認められない。その後、裏面の下半分の複合鋸歯紋に一部重ねてやはり鋭利な工具で、S字状に3つ渦巻き紋を描いている。507はA－4区P504から出土した比較的大型の分銅形土製品である。わずかに反る表面側にのみ刺突による紋様を施す。上縁に沿って二重に細かい列点紋を施し、繰り込み部にも横方向に二重、二列に列点紋を施す。上側の列点紋は他のものに比べてやや孔径が大きい。裏面は平滑で無紋である。繰り込み先端部や上側縁部によく見られる貫孔は見られないことから、下半部の可能性がある。

第2節　石器・石製品

ここでは、No.Ⅱ地点出土資料についてあつかう。総数572点である。以下、特徴あるものについて述べる。個別の諸属性については器種ごとに表で示すこととする。

狩猟具・武器

石鏃

部位と名称　石鏃の各部位は刺突する部分を作用部、矢柄に装着する部分を基部、作用部の切先がなす角度を「切先角（先端角）」とし呼称する。

出土遺物の検討

1類　平基式石鏃（S1～3）

5点出土した。3点を図化した。また、1点は未製品である。（S3）は大形の石鏃で重量6.7ｇを測る。全長26.8～46.6㎜、全幅16.5～23.2㎜、重さは1.1～6.7gを測る。

2類　凹基式石鏃（S4～6、20）

10点出土したうち4点を図化した。小分類の内訳はB類が2点、D類が2点あり、縄文時代の所産と考えられる。E類は6点で、作用部縁辺が直線的なものと、外湾して全体が砲弾形になるものの2種類がある。長さは1.8～3.0cm、幅は1.3～2.0cmを測る。長幅比はおよそ3：2で揃っている。重さは0.4～3.2gを測り、3gを超える大形のものは2点見られる。

3類　円基式石鏃（S7）

4点出土している。二上山産のものが1点ある。図化したのは1点のみである。（S7）の基部は微妙に角をなしており、有茎式石鏃の茎部が欠失したものとも考えられる。

4類　尖基式石鏃（S8～10）

8点出土した。2点を図化した。作用部側縁が緩やかに外湾し、木の葉形の平面形を呈するものと、やや細身の紡錘形を呈するものがある。二上山産のものは1点ある。（S8）は腹面側の一次剥離面に摩滅が見られる。

全長21.1～38.3㎜、全幅9.8～18.9㎜、重さは0.8～2.9gを測る。

5類　有茎式石鏃（S11～19）

53点出土した。11点を図化した。二上山産のものは1点ある。切っ先が約30度以下と鋭く細身で逆刺の甘いもの、切っ先が約50度以上で、幅広かつ鋭い逆刺を作り出すもの、その中間形態のものがある。薄い剥片の縁辺を加工して作用部を作り出すものが多いが、いずれも、一次剥離面を残している。なかでも（S17）は自然面を残す。

表14　石鏃計測値

（単位：㎜, g）

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	出土地点	産地	先端角	抉り幅	抉り長さ	類型
1	26.8	16.5	3.8	1.1	D-1	包含層	金山	33	—	—	1
2	34.3	16.8	4	2.1	D-1	包含層	金山	41	—	—	1
3	46.6	23.2	6.9	6.7	A-1	包含層	金山	75	—	—	1
4	17.9	12.6	2.2	0.4	A-4	包含層	金山	49	0.4	—	2
5	29	19	5.3	3	D-2	P-17	金山	87	2.7	—	2
6	29.1	20.2	4.2	1.7	B-6	SH03	金山	49	4.2	13.6	2
7	30	18.9	5	2.1	A-2	包含層	金山	52	—	—	4
8	38.3	13.5	5.3	2.9	D-1	包含層	二上山	31	—	—	4
9	35.2	11.7	6.5	2.2	C-3・4	包含層	金山	45	—	—	5
10	35	13	5.4	1.8	B-8	SH16	二上山	26	—	—	5
11	43.7	20.5	5.9	5.8	B-7	SH04	金山	—	—	—	5
12	37.7	16.6	6.4	3.7	A-3	包含層	金山	42	—	—	5
13	35.2	19.2	6.5	3.6	B-7	包含層	金山	48	—	—	5
14	23.7	14.4	4.1	1.3	B-7	SH04	金山	59	—	—	5
15	30.5	21.4	5.8	2.5	D-1	包含層	金山	90	—	—	5
16	31	18.1	4.9	1.7	D-1	包含層	金山	54	—	—	5
17	32.5	17.5	4.9	2.1	D-1	P-156	金山	48	—	—	5
18	36	13.2	5.7	1.9	A-1	包含層	金山	39	—	—	5
19	38.2	16.4	6	2.4	D-1	包含層	金山	30	—	—	5
20	24.1	18.5	4.9	1.2	B-4	P-32	金山	36	5.5	—	2

打製石剣（S21,22）

平行する両側縁を調整し、エッジをつぶすもの。幅はおよそ35mmまでに収まる。（S22）は石剣の基部（柄部分）に相当するものと判断した。切っ先側を折損している。

表15　打製石剣計測値　（単位：mm, g）

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	出土位置	石材産地	先端角
22	62.8	28.9	8.8	16.4	D-1	包含層	金山	―

加工具

石錐（S23～31）

10点出土している。

（S27）は二上山産の石材を用いる。尖端の一部に主軸と直交する方向の擦痕が見られる。加工対象物との摩擦で生じたものと思われる。（S28）は装着部をもたないが、折損して欠いている可能性も考えられる。（S30）は剪断面を持つL字形を呈する剥片を利用したもの。主軸が端に偏っていることもあり、手に持って使用したことが想定される。（S31）は二上山産の石材を用いている。楔形石器を素材として転用したものか。

削器

一縁辺に連続した加工を施し、刃部を形成するもの。当地点では40点出土している。そのうち6点を図化した。

図化したもののうち、（S33）は端部に抉った箇所が認められることから、打製石庖丁の可能性があることを指摘しておく。ただ、コーングロス等の使用痕は確認できなかった。

表16　石錐計測値　（単位：mm, g）

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	錐部長さ	錐部幅	錐部厚さ
23	28.7	18.3	4.6	1.7	B-7	SH04	6.4	7.7	3.8
24	36	17.4	5.4	2	A-3・4	包含層	16.7	6.3	4.8
25	48	18.3	5.4	2.9	D-2	包含層	23.4	8.8	5
26	37.5	14.3	4.5	2.1	C	包含層	15.3	7.6	4.4
27	43.2	13.2	5.5	2.3	A-3	包含層	22.6	7.5	5
28	36.4	8.9	4.9	1.6	C-3・4	包含層	36.4	8.9	4.9
29	32	24.4	7.7	4.2	D-1	包含層	12.6	12.4	5
30	27.7	21.4	4.7	1.4	B-8	SH04	13	4.9	3.3
31	58	17.4	9.9	11	D-1	包含層	―	―	―

表17　削器計測値　（単位：mm, g）

番号	刃部形態	刃部調整	背縁処理	自然面	長さ	幅	厚さ	重さ	刃部幅	刃角	地区	遺構
32	直線刃	両面	無	無	65.3	48.6	13.1	37	52.7	40～45	A-4	P-216
33	直線刃	両面	有	無	58.8	45.2	10.5	32.4	52.1	75	D-2	包含層
34	直線刃	両面	無	有	95	100.6	16.8	139.8	55.3	60	E-1	P-168
35	直線刃	両面	無	無	77.1	81	11.1	64	37.4	60	B-7	包含層
36	直線刃	両面	無	有	115.8	83.9	13.1	101	110.6	56	D-1	包含層
37	外湾刃	両面	有	無	52	47.6	11	34.8	41	46	C-3・4	包含層

楔形石器

1つ以上の縁辺に、微細な階段状剥離の観察可能なもの。282点出土しており、そのうち8点を図化した。（S41）は安山岩製で、片面を研磨している。

磨製石斧

太型蛤刃石斧

7点出土したうち5点を図化した。

分類　横断面形が楕円形を呈するものと、扁平な隅円長方形を呈するものがある。前者はいわゆる太型蛤刃石斧で幅厚比は0.68～0.81の範囲に収まる。

ただし、(S47) は幅狭で小形の石斧であり、規模の点からみていわゆる太型蛤刃石斧の範疇で捉えられないものである。刃部は両面から研ぎ出してあるが、刃先の潰れはなく、前主面を上にしたとき右側がやや片減りしている。

(S48) は幅厚比が0.49と他の石斧に比べて極端に扁平な断面形態を有する。類例としては、刃先まで遺存したものが龍野市尾崎遺跡でみられる。

表18　楔形石器計測値

(単位：mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	類型
38	41.3	39.4	8	12.9	B-6	SH03	B1
39	31	56.8	7.1	16.3	B-7	SH04	B2P
40	53.3	31.1	10.7	15.3	D-1	包含層	B2V
41	56.2	62.1	13.7	61	D-5	包含層	A2
42	25.6	32.6	7.3	5.3	B-7	SH04	B3
43	35.5	40	12.4	8.9	D-2	包含層	B3
44	40.1	33.2	9.9	6.4	A-4	SK01	S2
45	35.4	25.4	6.8	3.6	E-5	SH24	S2

柱状片刃石斧

1点出土している。横断面は本来長方形になるように作られていたと考えられる。右側面は節理に沿って大きく剥離しているが、再度研磨して使用されている。このため、現状では横断面はいびつな台形を呈する。幅よりも厚さの方が大きい。刃先は完全につぶれており、敲打痕を伴う面が形成されている。現状で加工斧として機能したとは考えにくく、敲石として転用されたものととらえたい。また、基部にも敲打痕が観察できる。肉眼では、前主面の中央部分の広い範囲と、後主面の両端、側面と境をなす肩付近に弱い光沢が認められる。装着の痕跡である可能性を指摘しておく。

表19　磨製石斧計測値

(単位：mm, g)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	刃幅	刃角	地区	遺構	石材
47	太型蛤刃石斧	137.2	44.5	36.0	365.7	34.3	86	D-2・3	流路南岸上	細粒砂岩
48	太型蛤刃石斧	(136.5)	73.5	36.2	671.9	—	—	C-6	包含層	閃緑岩
49	太型蛤刃石斧	(110)	67.5	45.9	570.5	—	—	A-2	包含層	変質安山岩（プロピライト）
50	太型蛤刃石斧	(84.6)	69.0	51.0	516.0	—	—	A-3	SH12	閃緑岩
51	太型蛤刃石斧	(112.5)	71.0	51.2	624.3	—	—	A-4	P-408	閃緑岩
52	柱状片刃石斧	110.5	23.0	30.1	170.8	18.3	50	E-1・2	包含層	黒色片岩

農具

石庖丁

3点出土している。刃部はいずれも直線刃で両面から研ぎ出す。平面形は長方形様のもの (S53) と、半月形のもの (S54,55) がある。穿孔はすべて直接回転穿孔をおこなったものと考えられる。(S55) には未貫通の回転穿孔痕が認められる。(S53) には8×8mm程度の範囲で敲打が認められるが、顕微鏡レベルの観察では敲打面にも使用光沢痕が見られる。また、裏面は風化のためか、器表が剥落し荒れて

いる。刃部については、3点共に摩滅しており、よく使い込まれている。なお、いずれも、両刃もしくはそれに近い偏片刃である。そのほか紐ずれなどの痕跡は認められなかった。

表20　石庖丁計測値

(単位：mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	背縁形態	刃部			紐孔								石材
								形態	刃付け	刃角	紐孔断面	穿孔技法	穿孔位置	外径		内径		紐孔間距離	
														左	右	左	右		
53	104.5	40	7	48.9	C-1	包含層	直線	直線	両刃	60	蝶形	直接	7.7	4.4	5	3	3.1	16.7	結晶片岩
54	71.9	46.7	10.6	44.6	A-4	包含層	外湾	直線	両刃	60	—	直接	—	—	—	—	—	—	結晶片岩
55	(62)	41.3	7.4	28.9	B-7	SH04	外湾	直線	偏片刃	52	蝶形	直接	9.3	8.4	—	3.3	—	12.5	粘板岩

加工具・調理具

敲石・磨石

敲く道具、あるいは擦る道具、もしくは両者を併用するものである。10点出土したうち5点を図化している。

(S59) は亜円礫の突出部を作用部として利用している。隣り合う平坦な3面の中央部分にも敲打痕が見られるが、手で掴むときの滑り止めの機能を有したものかもしれない。(S60) は三角柱様形態の亜角礫である。稜線部分3辺共に敲打痕が見られる。石材はチャートである。

表21　敲石計測値

(単位：mm, g)

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	敲打部の位置類型	石材
56	敲石	93.1	75.9	57.9	598.1	B	包含層	A2,B1	花崗斑岩
57	敲石	76.9	64.3	57.9	390.6	A-3	SH11	A2	花崗岩
58	敲石	66	57	43.5	227.3	A-1（北端）	包含層	B1	花崗斑岩
59	敲石	100.4	84	85.8	1053	D-1	包含層	亜円礫の突出部を利用。	流紋岩質火砕岩
60	敲石	77.1	57.3	45	236.1	C-1	SH13	亜角礫の稜線を利用する。	チャート

砥石

15点出土したうち、6点を図化した。

いずれも直方体を呈し、長軸方向の4面を砥面として利用している。シャープな擦痕が見られることから、金属用と考えられる。

表22　砥石計測値

(単位：mm, g)

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	砥面					石材
							数	砥面構成				
								表	裏	左側面	右側面	
61	65.3	30	21.1	50.3	E-3	SK37	5	1	1	1	2	流紋岩質凝灰岩
62	79.5	34.5	35.2	83.7	C	包含層	—	1	1	1	1	凝灰岩
63	73.8	51.9	44.2	154.1	E-1・2	包含層	—	1	1	1	1	流紋岩質凝灰岩
64	101.6	63.5	56.2	352.9	E-2	包含層	—		1	1	2	流紋岩質凝灰岩
65	133	80	42.7	375.6	B-7	P-330	4	1	1	1	1	流紋岩質凝灰岩
66	151	80.8	42.2	590.6	E-6	SH25	—	1		1	1	凝灰岩

石皿・くぼみ石

石皿が２点、凹み石が２点出土した。各１点ずつを図化している。

（S67）は扁平な礫を利用した石皿である。作業面の中央部に硬質の鉱物が筋状に通っているため、摩滅の度合いが遅く、結果として作業面を仕切ったようになっている。

表23　石皿・凹石計測値

（単位：mm, g）

No.	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	敲打部			皿部		石材
								長さ	幅	深さ	長さ	幅	
67	石皿	144.6	128.2	31.5	1056.6	B-7	包含層	×	×	×	(116)	106	安山岩質火砕岩
68	凹石	84.8	81.2	43.8	415.2	C-1	SH13	22.8	12.4	1.5	×	×	凝灰岩

石屑、剥片

石核

腹面のみで構成されるもの。２点出土している。

表24　石核計測値

（単位：mm, g）

No.	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構
69	81.7	58.1	34.3	163.5	D-1	包含層
70	27.4	38.9	19.6	24.2	D-1	包含層

祭祀具

磨製石剣（S21）

いわゆる銅剣型石剣である。基部から剣身にかけての部分が出土した。剣身の横断面はレンズ形を呈し、翼は全く形成されていない。樋は脊を表現する役割しか果たしておらず、非常に形骸化したものである。柄部分は円柱状で、端部は平坦に仕上げる。樋は幅２mmで非常に浅く断面はV字形を呈する。本来、剣先へ向かって２条の樋が平行して、脊を作り出すかあるいは表現するものであるが、本例は遺存している２条の樋の方向が平行しておらず稚拙な作りといえる。

石製品

玉類

臼玉（T1～T20）

質の悪い滑石製の臼玉である。作りは粗雑で、特に切り口の面は仕上げの処理がほとんど施されていない。側面は強弱はあるが、両側から削りだして緩く稜を形成している。

滑石製模造品（T21）

滑石製模造品の破片である。約半分を欠失している。薄い板状の滑石に２孔を穿ったものと思われる。遺存している端部を見ると、直線的に仕上げられていることから、平面は方形、もしくは多角形を呈するものと推測される。

管玉（T22,23）

（T22）はSH14から出土している。炭化物の下から出土したことから、この住居に確実に伴うと考えられる。（T23）は大型の管玉である。

表25　玉類計測値

(単位：mm, g)

No.	種類	長さ	幅	厚さ	重さ	地区	遺構	石材
T 1	臼玉	3.4	1.8	1.8	0.02	B	SH03	滑石
T 2	臼玉	3.7	2.2	1.8	0.05	B	SH03	滑石
T 3	臼玉	5	1.8	1.9	0.05	B	SH03	滑石
T 4	臼玉	4.8	3	1.5	0.09	B	SH03	滑石
T 5	臼玉	5.4	2.5	2.5	0.09	B	SH03	滑石
T 6	臼玉	5.2	2.9	2.8	0.1	B	SH03	滑石
T 7	臼玉	7	3.7	1.2	0.26	B	SH03	滑石
T 8	臼玉	5.7	2.9	1.8	0.13	E-9	旧河道	滑石
T 9	臼玉	5.9	2.9	2.8	0.12	E-9	旧河道	滑石
T 1 0	臼玉	6	4	2.5	0.16	E-9	旧河道	滑石
T 1 1	臼玉	5.7	2.1	2.5	0.09	E-9	旧河道	滑石
T 1 2	臼玉	5.8	2.5	2.5	0.1	E-9	旧河道	滑石
T 1 3	臼玉	6.3	2.2	2.8	0.09	E-9	旧河道	滑石
T 1 4	臼玉	5.7	3.1	2.5	0.1	E-9	旧河道	滑石
T 1 5	臼玉	6	3.2	2.3	0.15	E-9	旧河道	滑石
T 1 6	臼玉	5.7	3.5	2	0.14	E-9	旧河道	滑石
T 1 7	臼玉	5.7	2.5	2.8	0.11	E-9	旧河道	滑石
T 1 8	臼玉	5.8	3.2	2.1	0.15	E-9	旧河道	滑石
T 1 9	臼玉	5.8	2.8	2	0.08	E-9	旧河道	滑石
T 2 0	臼玉	6.1	3.2	2.1	0.13	E-9	旧河道	滑石
T 2 1	滑石製模造品	17.5	2.7	13.9	0.9	E-1.2	SH22上面	滑石
T 2 2	管玉	8.8	3.3	3.3	0.2	C-1	SH14	碧玉
T 2 3	管玉	28.2	9.9	10	4.7	D-5（南半）	P-1	碧玉

第4節　金属器

1．概況

No.Ⅱ地点では、69点の金属器が出土した。住居跡・土壙墓などから出土したものは少なく、時期の特定は困難なものが多い。種別は銅製品が1点出土した以外、すべて鉄製品である。また製品のほかに、鉄・銅のスラグが数点出土している。

全体に遺存状態が悪いため、形態などの特徴から確証が得られた場合のみ、器種を同定した。遺存状態が悪く、確証が得られなかったもののうち、規模の小さい円筒形のものについては釘、その他は不明品として一括した。

なお、個々の法量については、後掲の一覧表にまとめている。

2．鉄製品

(1) 釘（F2,3,7,8,11,15～29,31,32,34,40,51,54,58,61）

大半は火葬墓（SK03）から出土している。木質の遺存するものが多く、埋葬主体である木棺を組むために使用されたと考えられる。このほか、包含層や旧河道、ピット・小土坑などからも数多く見られ、出土した器種としては最も多い。

なお、釘頭や尖端部分を欠損するものには、形状の似た鉄鏃の茎部分が混在する可能性がある。

SK03からの出土品

SK03から出土したものは15点（F15～29）を数える。全容がわかるものはなく、いずれも局部的な遺存状態であった。木質が付着しているものも多く、木棺を結合するために使用されたことがわかる。

釘頭の形態は2つ見られ、一度屈曲させ、「L」字状にするもの（F15、16、21、22、23、24、25）と、数回屈曲させて「U」字状にするもの（F17、18、20）がある。いずれも明瞭に屈曲させており、わずかに肥厚させるだけの形態は見られない。

また尖端部だけが遺存（F19、27、28）するもの、両端が欠損（F26、29）するものもある。断面形は、F27、29が円形、他はいずれも角をなす。

その他の遺構

SK03以外から出土した釘も状態が悪く、全容が遺存するものは1点だけであった。

釘頭は、一端を肥厚させる（F32、58）ものと、一端を僅かに折り返して頭部とする（F3、40）2形態が見られる。

F31は釘頭がつぶれている以外、全容が遺存する。F32は大型の釘で、屈曲して折れた同一固体の尖端部付近がある。F8は軸のみ遺存するが、結合した木質が付着している。

この他にも、釘の一部と見られる軸状の鉄製品が多く出土した。いずれも軸部だけの微細な遺存であった。

（2）馬具（F36,37,43）

旧河道ならびに包含層から、轡や兵庫鎖の一部が出土した。

F36は、環状部分の一端から軸がのびる。軸は先端が欠損して、全長不明。側面では、環状部分は「く」の字状に軸と連接する。連接状況から、環状をなす引手部分と考えられる。

F43も環状の一端から軸がのびるが、軸と環状部分の側面は直線である。また環状部分は正円をなさず、一方が正面の厚みを減じる。厚みを減じた個所は断絶し、端部を打ち伸ばして環状を成形している。軸先は欠損する。遺存部分がわずかなため、全容を推し量るには限界もあるが、環の状態から、轡の先端または引手の鏡板との接合部分が考えられる。

F37は3つの環状金具が連結している。上下は環状部分に軸が取り付く形態で、いずれも先端を欠損する。中央の環状金具のみ形状が異なり、板状の基部からのびる2本の軸を、環状に合わせている。板状の基部は周囲をすべて欠損して、本来の形状はわからない。

連結状況などから、兵庫鎖もしくは環状鏡板の一部と考えられる。

（3）鉄鏃（F44,45,46,47,48,49,55,56）

包含層から数点が出土した。鏃身の一部だけを遺存するものがほとんどである。

F44～46は、いずれも方頭の鏃身をなす。F44は鏃身の先端を欠損する。遺存する鏃身から篦被ならびに茎の断面はいずれも方形。篦被には台形の関部を持つ。

F45は鏃身の先端ならびに頸部を欠損する。鏃身の上端は両刃をなす。F46は頸部を欠損するほか、遺存部分も状態が悪い。先端は厚みを減じて片切刃をなす。

F47は片刃箭の長頸鏃で、完形に遺存する。鏃身は片切刃で撫角の関部を持つ。頸部では篦被の下端がわずかに突出し、台形の関部をなす。

F48は無頸の鉄鏃で、鏃身の基部片側を欠損する。

F49は断面が長方形の軸状をなす。釘の可能性もあるが、遺存している先端の状態や断面形から、茎の一部と判断した。

F55・56は長頸鏃の頸部と考えられる。いずれも両端が欠損するが、F56は、中央に篦被の関部が見られる。またF55は遺存状態が悪いが、欠損する下方に向かって幅を減じていることから、撫角の関部と判

断した。

（４）鉄斧（F5,41,69）

３点が出土した。うち２点は袋状鉄斧、１点は板状鉄斧の刃部である。

F5は袋状鉄斧で、鋳造によって製作される。袋部の一部と刃部の先端を欠損する。袋部は、前面の合わせ部分が欠損する。中空の形状は楕円形、内径は長軸3.3cm／短軸1.8cmである。刃部は袋部と同じ幅をなす。刃先は欠損し、両端も鈍化が顕著である。

F41は袋部の上端部分を欠損する。袋部は断面が「U」字状で、合わせ部分の片側を欠損する。閉じ合わせが認められないことから、柄との装着状況は不明。刃部は袋部と同じ幅で、両端は鈍化する。

F69は板状鉄斧の一部で、遺存する部分がわずかなため、本来の形状は不明。装着部が完全に欠損し、刃部のみが残る

（５）刀子（F1,14,30,35,39,63,64,68）

全容のわかるものはなく、大半が刃の一部のみ遺存する。

F1、14は刃の一部だけが遺存する。片刃をなし、刃部分は切先に向かって幅を減じる。

F30は切先ならびに中茎部分を欠損する。遺存部分では直刃に近く、棟側が先端に向かって幅を減じる。関部は上下で大きさが異なる。

F35は遺存状態が悪く、刀身の一部が断片化した状態で出土した。棟側のみが遺存することから幅広の刀身が想定され、長い刀の可能性もある。

F63は細身の刀子で、中茎部分を欠損する。関は撫角状をなすが、本来の形状をとどめているとは言いがたい。棟がほぼ直線なのに対し、刃は切先に向かって緩やかに幅を減じる。

このほか、形状は刀子に近いが、両端に刃部を確認できなかったものが３点（F39、64,68）ある。

（６）その他

鈴？・紡錘車・鎌のほか、ヤリガンナ・鋤先・鑿とみられるものが出土した。

ａ．ヤリガンナ（F4）　遺存状態が悪く、両刃の先端がわずかに遺存する。

ｂ．鎌（F6）　長方形の刃部分がほぼ完形で出土した。板の両端を1cm近く折り返して、装着部とする。装着部は刃部に向かってわずかに袋状となる。

ｃ．環（F13）　径5.9mmの軸材を環状にする。ほぼ正円形で、具体的な用途は不明。

ｄ．紡錘車（F42）　紡輪部分が遺存する。厚さ6.5mmの円盤で、中央に直径2.8mmの軸孔がある。軸孔の周囲には、高さ5.9mmの軸受が遺存する。

ｅ．鈴？（F62）　中空で球形をなす形態から、鈴と判断した。外壁は厚さ1.2mmで一部が欠損、内部が露出する。

ｆ．鋤先（F65）　U字状をなす鋤先の、中央部分のみが遺存する。刃は緩やかな曲線をなす。

ｇ．鑿（F9、33）　F33は板状で、片端を欠損する。欠損側に向かって、わずかに幅・厚みを減じる。

F9は、板状の形態から鑿を想定したが、長方形で幅厚みの変化は認められない。

３．銅製品（F66）

平坦な棒状をなす。一端が遺存し、隅は丸みを帯びる。製品前の塊とも考えられるが、器形からは性格を特定するには至らなかった。

表26　出土金属器一覧表

No.	器種	遺構	縦	横	厚	No.	器種	遺構	縦	横	厚
F1	刀子	SH03	2.45	2.6	1.0	F36	馬具	流路	4.62	3.35	0.9
F2	釘？	SH03	4.85	1.2	1.05	F37	馬具	流路	3.98	3.45	0.7
F3	釘	SH05	4.7	1.05	0.9	F38	釘？	流路	2.6	0.55	0.5
F4	ヤリガンナ	SH05	3.05	1.1	0.4	F39	刀子？	流路	3.7	1.0	0.38
F5	鉄斧	？？	11.13	5.15	1.4	F40	釘	流路	3.7	1.0	0.5
F6	手鎌	SK04	7.2	1.95	0.95	F41	鉄斧	流路	14.45	0.65	3.55
F7	釘？	SX01	2.09	0.59	0.5	F42	紡錘車	包含層	4.55	4.6	0.65
F8	釘	SX01	2.91	0.65	0.55	F43	馬具	包含層	3.5	1.8	0.58
F9	不明	SD47	7.4	3.65	0.9	F44	鉄鏃	包含層	6.6	2.73	0.9
F10	不明	SD09	3.7	3.4	0.65	F45	鉄鏃	包含層	7.6	2.55	0.6
F11	釘？	SD09	3.25	0.85	0.45	F46	鉄鏃	包含層	4.22	1.65	0.63
F12	不明	SD39	2.45	1.55	0.49	F47	鉄鏃	包含層	14.5	0.4	0.5
F13	環	SD500	4.45	4.45	0.59	F48	鉄鏃	包含層	2.6	2.1	0.5
F14	刀子	SD04	2.65	1.7	0.65	F49	鉄鏃	包含層	3.75	0.7	0.3
F15	釘	SX01	2.9	0.6	0.5	F50	不明	包含層	3.6	1.35	1.3
F16	釘	SX01	3.5	0.45	0.42	F51	釘？	包含層	3.0	1.75	1.3
F17	釘	SX01	3.4	0.3	0.3	F52	釘？	包含層	4.1	0.95	0.5
F18	釘	SX01	2.1	0.35	0.4	F53	不明	包含層	3.2	1.2	0.35
F19	釘	SX01	1.8	0.35	0.25	F54	釘？	包含層	2.9	0.75	0.6
F20	釘	SX01	2.25	0.35	0.4	F55	鉄鏃	包含層	4.45	1.2	0.6
F21	釘	SX01	3.01	0.83	0.5	F56	鉄鏃	包含層	4.35	1.35	0.7
F22	釘	SX01	2.0	0.2	0.3	F57	不明	包含層	5.03	2.08	0.7
F23	釘	SX01	3.91	0.85	0.6	F58	釘	包含層	3.05	0.95	0.8
F24	釘	SX01	3.31	0.81	0.48	F59	不明	包含層	4.95	2.8	0.65
F25	釘	SX01	3.28	0.71	0.45	F60	不明	包含層	2.85	3.47	0.75
F26	釘	SX01	2.86	0.4	0.4	F61	釘？	包含層	3.85	1.21	0.9
F27	釘	SX01	2.38	0.67	0.43	F62	鈴？	包含層	1.65	1.5	1.2
F28	釘	SX01	2.05	0.3	0.2	F63	刀子	包含層	12.6	1.8	0.56
F29	釘	SX01	2.15	0.45	0.4	F64	刀子？	包含層	2.95	1.4	0.3
F30	刀子	D-5区P-06	7.85	2.05	0.55	F65	鋤先	包含層	5.95	2.8	0.55
F31	釘	A-1区P-71	11.35	0.98	0.55	F66	銅製品	D-1区P-121	8.2	1.8	0.45
F32	釘	A-1区P-133	9.73	0.95	0.8	F67	刀子	包含層	4.01	2.0	0.82
F33	鑿？	D-1区P-42	6.5	1.8	0.7	F68	刀子？	包含層	4.4	1.6	0.7
F34	釘？	A-1区P-64	2.8	0.4	0.5	F69	鉄斧	包含層	3.55	3.45	0.4
F35	刀子	A-4区P-157	3.5	2.35	0.45						

第３節　木器

出土状況

亀田遺跡は扇状地から沖積地にかけて広がっている。扇状地を西流して縦断する流路や、沖積地を南流する大津茂川の旧河道が検出されることが確認調査でも判明していた。No.Ⅱ地点の木器の内、平安時代以降の包含層出土のもの以外は、流路・旧河道からの出土である。

（ｗ１，２）は、平安時代以降の包含層から検出された。（ｗ１）はマツ属複維管束亜属の小片で、一方の端が焼け焦げている。（ｗ２）も同様のもので、樹脂分が多いことから松明や付け木に用いられたものと思われる。

（ｗ３，４）は、Ｄ－３・４区のＳＤ500内に設けられた杭列の水路から出土した。（ｗ３）は針葉樹の付札である。幅約3.1cmの両側に切り欠きをもつ。墨書は認められない。（ｗ４）は針葉樹の板目材を用いた直径約16.2cmの円形の曲物底板である。１面には幅約0.6cmの側板の痕跡が残されているが、結束のための小孔は見られない。他面は非常に平滑に仕上げている。

（ｗ５～８）は流路から出土した。（ｗ５）は針葉樹の角材で、断面は一辺約2.5 cmの正方形につくる。

（ｗ６）はスギ材を年輪に沿って加工しているが、残りが悪く全容は不明である。刳り抜きの桶や臼の可能性もある。

（ｗ７）は、Ｄ－３・４区の流路内に設けられた杭列の一部で、マツ属複維管束亜属の丸太材を用いて

いる。先端部は５方向から尖らせており、枝の部分も丁寧に削り落としている。樹皮は残存していないが、面取り等は見られない。

（ｗ８）は、Ｅ－１区から出土した杭である。樹皮を残しており、先端部は変則的な２方向から削って尖らせている。他端部は１方向から刃先が弧状を呈した刃物で平らに仕上げている。

（ｗ９～20）は、調査区西端Ｅ－８・９区の旧河道から出土している。この旧河道からは様々な時代の遺物が出土しているが、主な時代としては飛鳥時代から平安時代にかけてのものである。埋没後は中世以降の水田として利用されていたようである。

（ｗ９）は、第２層から出土した舟形木製品である。スダジイのかなり大きな材から縦木取りして作られており、粗くではあるが、鋭利な刃物によって削りだしている。残存長約15.8cm、幅約6.0cm、高さ約4.3 cm、内法の深さ約2.7cmを測る。底部は湾曲しているが、安定のためか平底となる。一端を失っているため、舳先か舳か判別がつかないが、その先端部分の上面には面を持っているが、舷側部分は薄く作られている。

（w10）も第２層から出土した幅約3.8cm、厚さ約1.1cmのヒノキ柾目の板材である。片側の端辺を片面から削って薄くしており、角も丸く落としている。表面は丁寧に仕上げている。（w11～13）は、第２層から出土した曲物底板である。

（w11）は針葉樹の柾目材を用いており、直径約16.5cmで上面の角を削っている。４ケ所に小孔を穿って側板結束に備えており、１ケ所には桜皮が３重に巻かれている。この孔と対向する孔とを結ぶように毛引き線が引かれているが、円盤の中心は通らない。小孔を穿つ計画線であろうか。また、別方向の小孔は２ケ所づつ穿たれており、内１ケ所には目釘と思われる材が残存している。

（w12）は、ヒノキの板目材を用いている。直径17～19cmの円盤が復元できる。側板結束の痕跡は残存していない。

（w13）は、針葉樹の板目材を用いている。直径28～30cmの大形の円盤が復元できる。側板結束の小孔は上面は２ケ所穿たれており、下面では１ケ所に連結する。

（w14）は、第２層から出土した。ヒノキの樹心を外した部分を用いて直方体を作りだしている。全ての角を斜めに落とし、表面も平滑に仕上げている。一方の木口面には直線的な小さな段が観察され、鋸によって切断された可能性がある。

（w15）は、Ｅ－８区旧河道下層から出土した。飛鳥時代のものと思われる。直径約11.5cmのヤブツバキの丸太材を用いている。一方の端部は５方向から粗く刃物を打ち込んで切断している。刃物は鋭利であるが、ツバキのような固い材を切断するために１方向で最高12回も打ち込んでいる。刃先は幅4.5cm以上で、形状は緩やかに弧を描く。一部に刃こぼれが認められる。他端部は側面から丁寧に面取りを行っており、丸くなった端面はひび割れの中までも磨滅しており、何かをすりつぶしたり、砕いたりする道具として使用されていたものと思われる。側面の一方には長さ２cm程度の非常に細かい鋭利な刃物の痕跡が無数に観察できる。その対向する下面には切り離し部に類した幅５cm程の刃物を打ち込んで形状を変えている。接地面として安定させるためか、或いはこの面も粗い作業をおこなう台として用いられたものであろうか。側面にも細かい刃物傷が認められるものの少ない。本製品は作業台として転用されているが、本来の用途として杵の可能性がある。兵庫県山垣遺跡の竪杵や大阪府上田部遺跡の唐臼の杵もツバキを用いている。

（w16～20）は、Ｅ－８区旧河道東岸から不規則ながら岸に直交して打ち込まれた杭列で、簡易な橋状

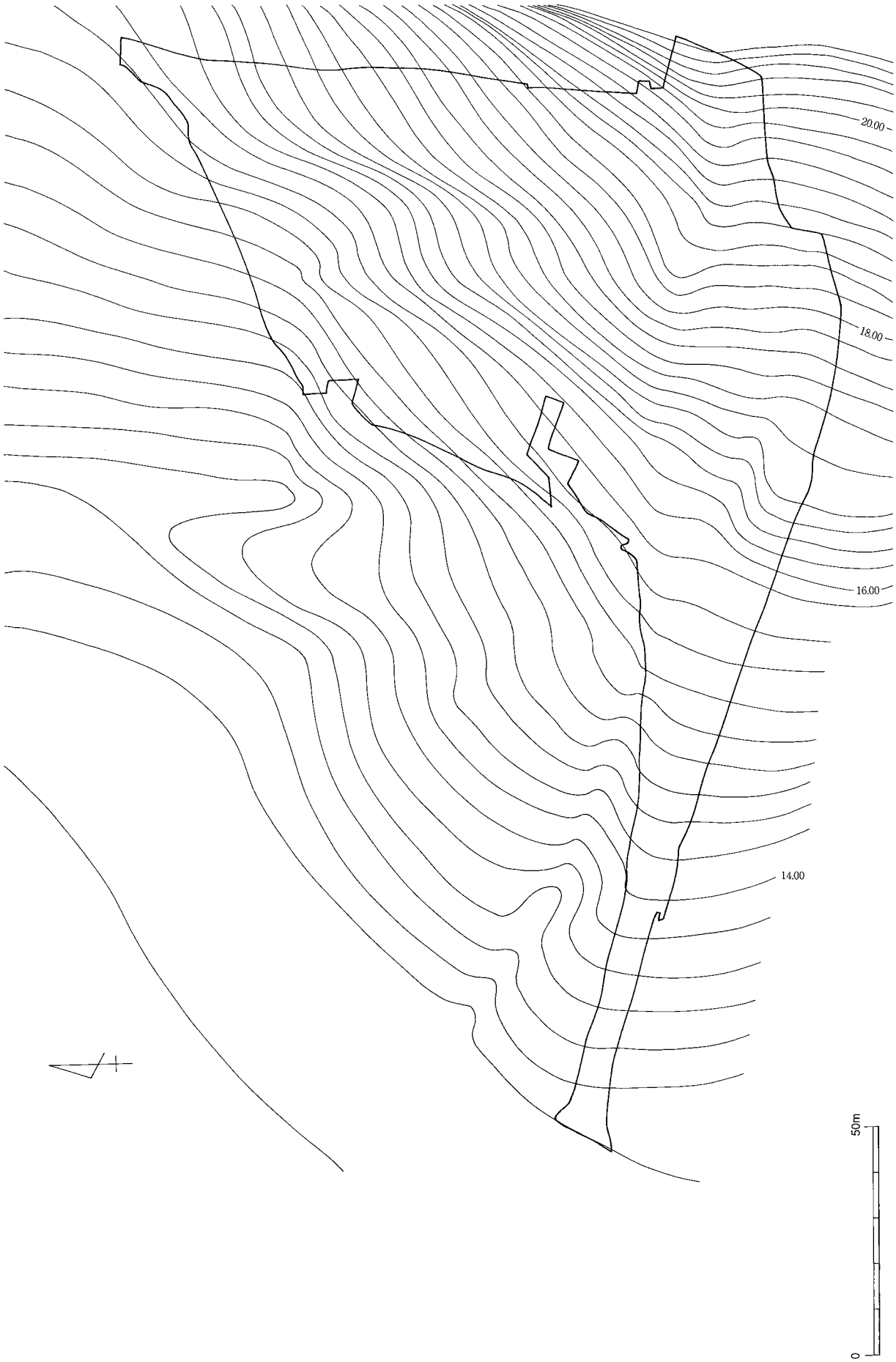
遺構と思われる。杭には２時期あるものと思われ、（w16）は残存状態が悪いことから古い時期のものと考えている。一部樹皮を残したままのコナラ節の丸太材先端を１方向から樹心近くまで大きく落とし、そこで生じた角２ケ所を更に削って先端を尖らせている。そのため1/3ほどは自然面が残っている。幅が５cmほどで刃先が緩やかに弧を描く鋭利な刃物で整形している。新しい時期のものと思われる（w17～20）は、全てマツ材を用いており、樹皮は残っていない。枝の部分は粗く落としただけである。丸太材の細い方を全周から落として尖らせている。細かい整形であるため刃物の幅や先端の形状を復元することが困難であるが、全ての杭で幅約0.2cmの刃こぼれの痕跡を確認しており、同一の工具で一時に作成されたものと推定できる。川岸の斜面に打ち込まれた杭から流心に近い部分に打ち込まれた杭まであり一様ではないが、器表面の劣化の状況から深いものでは90cm以上打ち込まれたものも見られる。

〔参考文献〕

木器集成図録　近畿古代編　奈良国立文化財研究所　1985

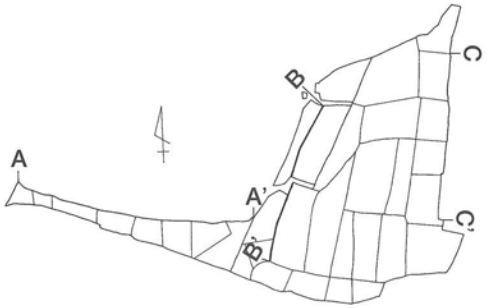
図　　版

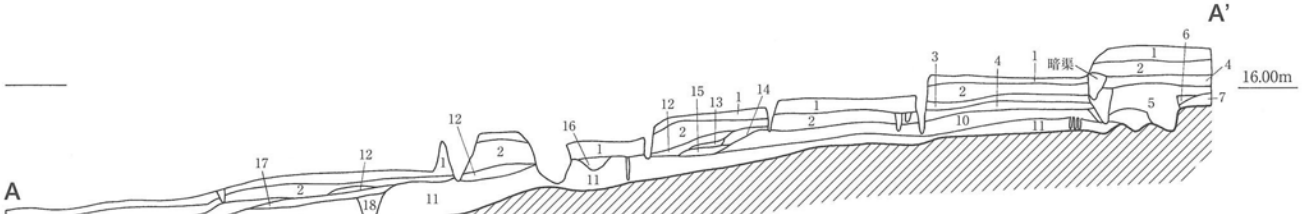
亀田遺跡 No.Ⅱ地点 全体図



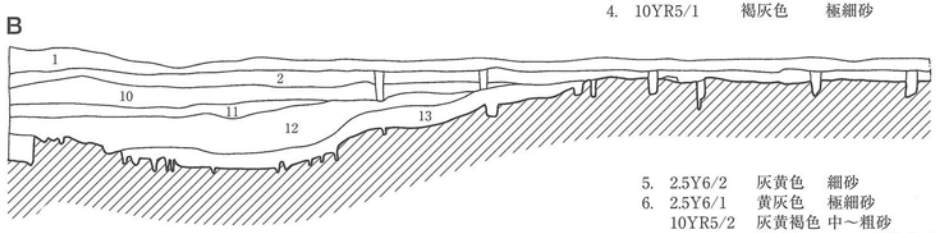
亀田遺跡微地形図

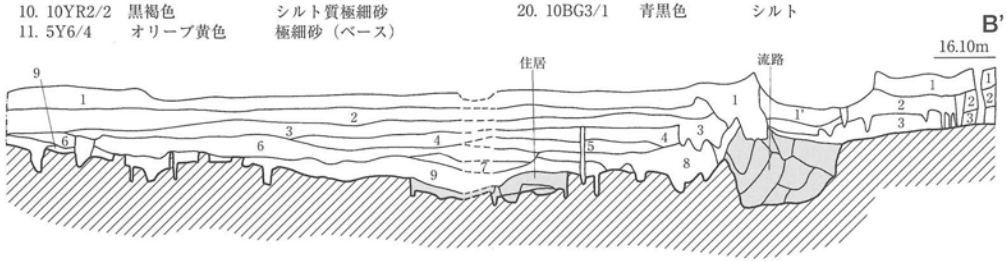
土層堆積状況図



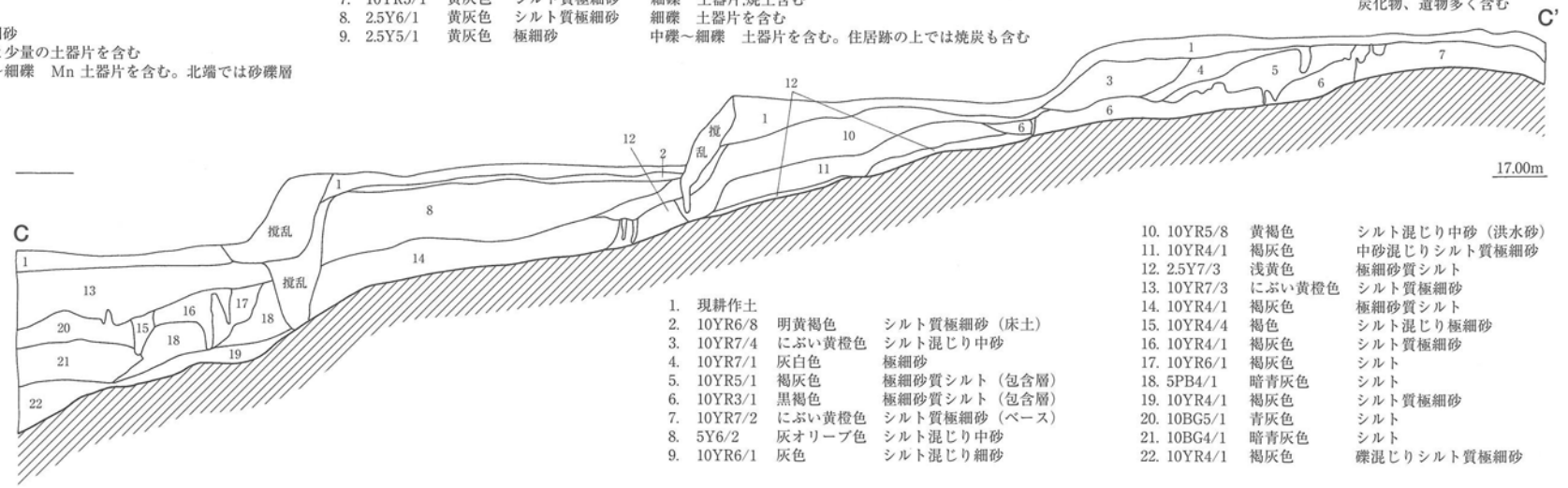


1. 現耕作土
2. 10YR6/1　褐灰色　極細砂（床土）
3. 礫層
4. 10YR5/1　褐灰色　極細砂
5. 10YR4/2　灰黄褐色　シルト混じり極細砂
6. 10YR3/3　暗褐色　細砂
7. 10YR2/1　黒色　細砂～極細砂（住居跡埋土）
8. 礫層（ベース）
9. 10YR4/1　褐灰色　粗砂混じりシルト質極細砂
10. 10YR2/2　黒褐色　シルト質極細砂
11. 5Y6/4　オリーブ黄色　極細砂（ベース）
12. 5Y4/1　灰色　極細砂
13. 10YR6/4　にぶい黄橙色　細砂
14. 10YR6/1　褐灰色　中砂混じり極細砂
15. 10YR3/1　黒褐色　粗砂混じり極細砂
16. 砂礫
17. 10YR2/1　黒色　ロームブロック混シルト質極細砂
18. 10YR5/1　褐灰色　中砂
19. 10BG3/1　青黒色　粗砂～シルトのラミナー
20. 10BG3/1　青黒色　シルト

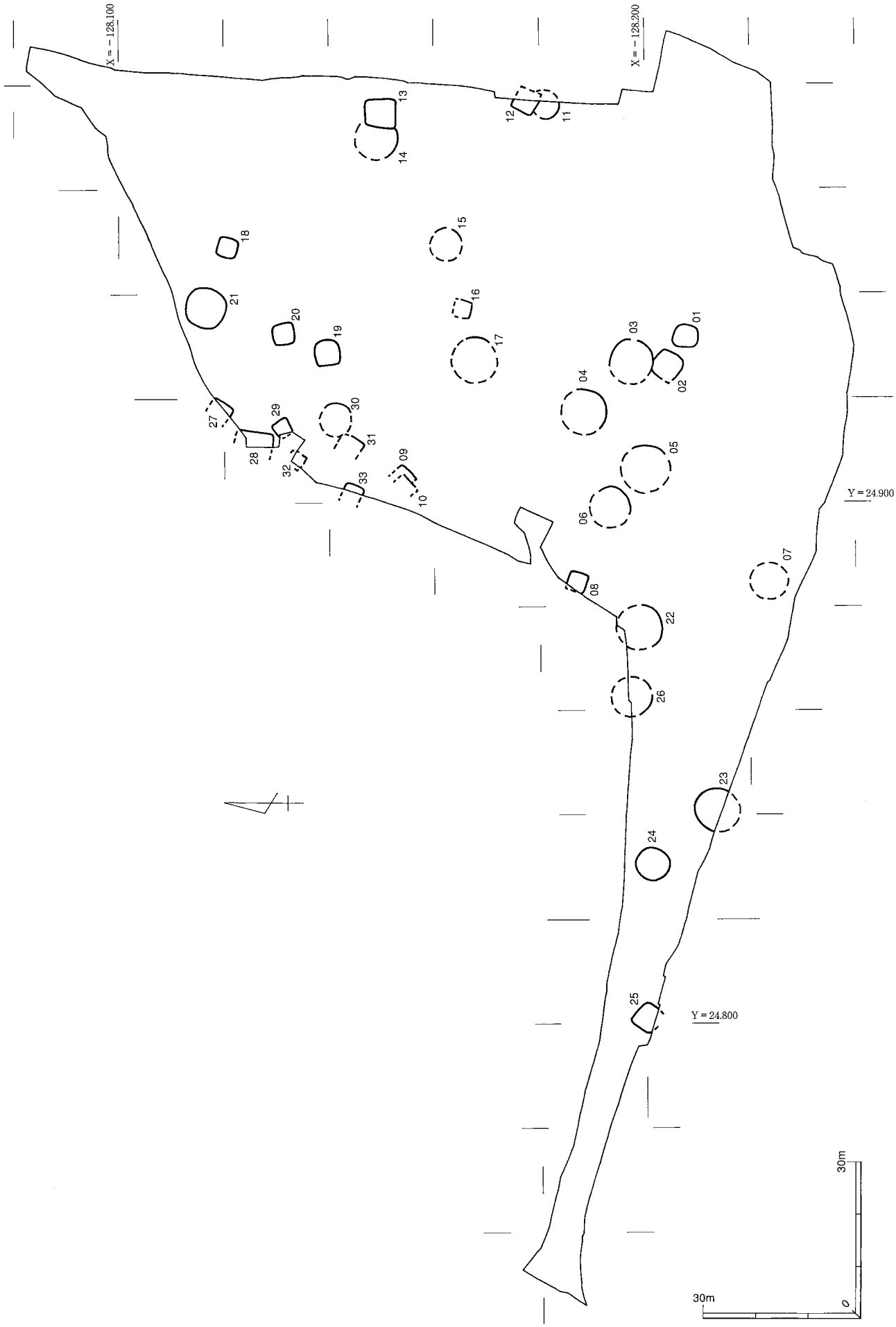




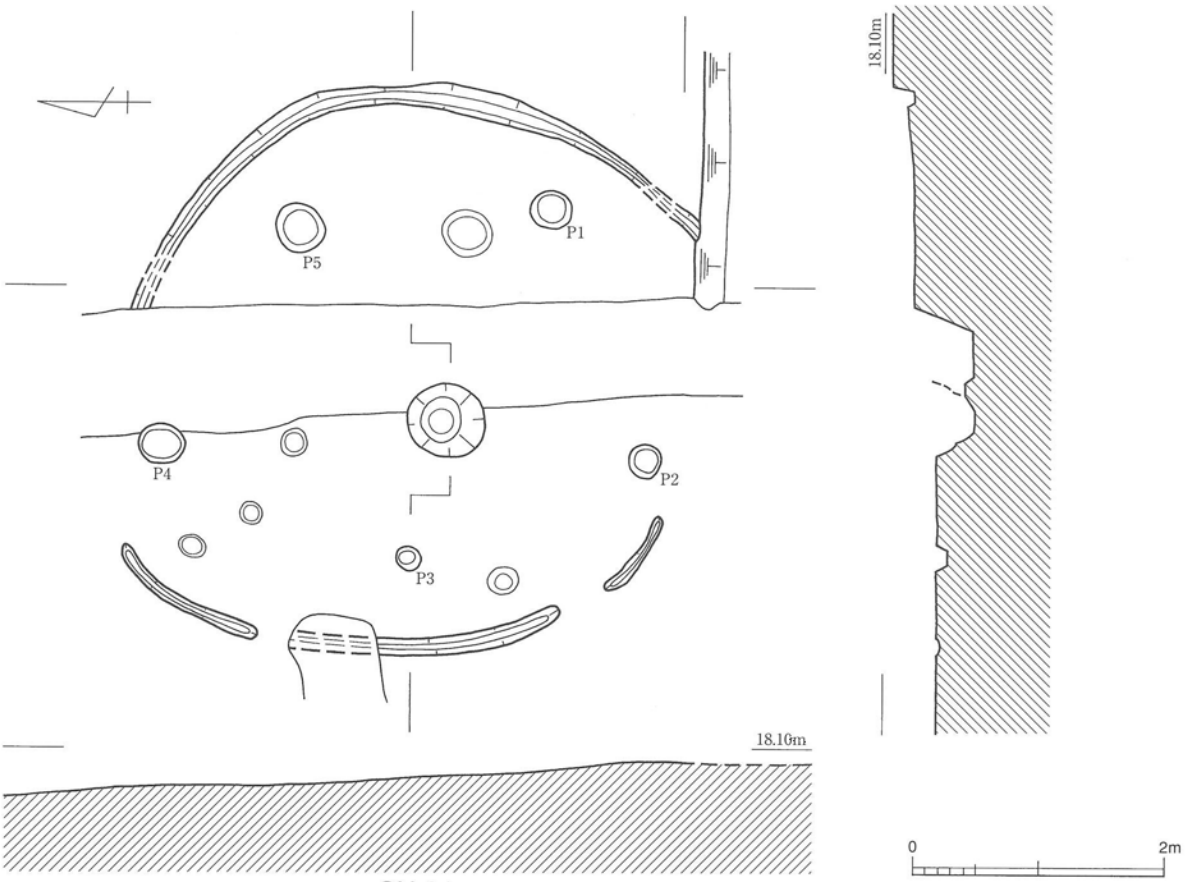
1. 現耕作土
2. 2.5Y6/2　灰黄色　シルト質極細砂
3. 2.5Y7/1　灰白色　極細砂細礫と少量の土器片を含む
4. 2.5Y6/1　黄灰色　極細砂中礫～細礫　Mn 土器片を含む。北端では砂礫層
5. 2.5Y6/2　灰黄色　細砂　中礫～細礫を含む
6. 2.5Y6/1　黄灰色　極細砂　中礫～細礫　土器片を含む
   10YR5/2　灰黄褐色　中～粗砂
7. 10YR5/1　黄灰色　シルト質極細砂　細礫　土器片,焼土含む
8. 2.5Y6/1　黄灰色　シルト質極細砂　細礫　土器片を含む
9. 2.5Y5/1　黄灰色　極細砂　中礫～細礫　土器片を含む。住居跡の上では焼炭も含む
10. 7.5YR6/1　褐灰色　シルト～細砂（粗砂含む）
11. 7.5YR5/2　灰褐色　シルト～粗砂（$Mn.FeO_3$含む）
12. 7.5YR3/2　黒褐色　極細砂（粗砂　少礫混じり）
13. 10YR4/1　褐灰色～7.5YR1.7/1黒　細砂（粗砂、少礫、Mn含む）
    炭化物、遺物多く含む



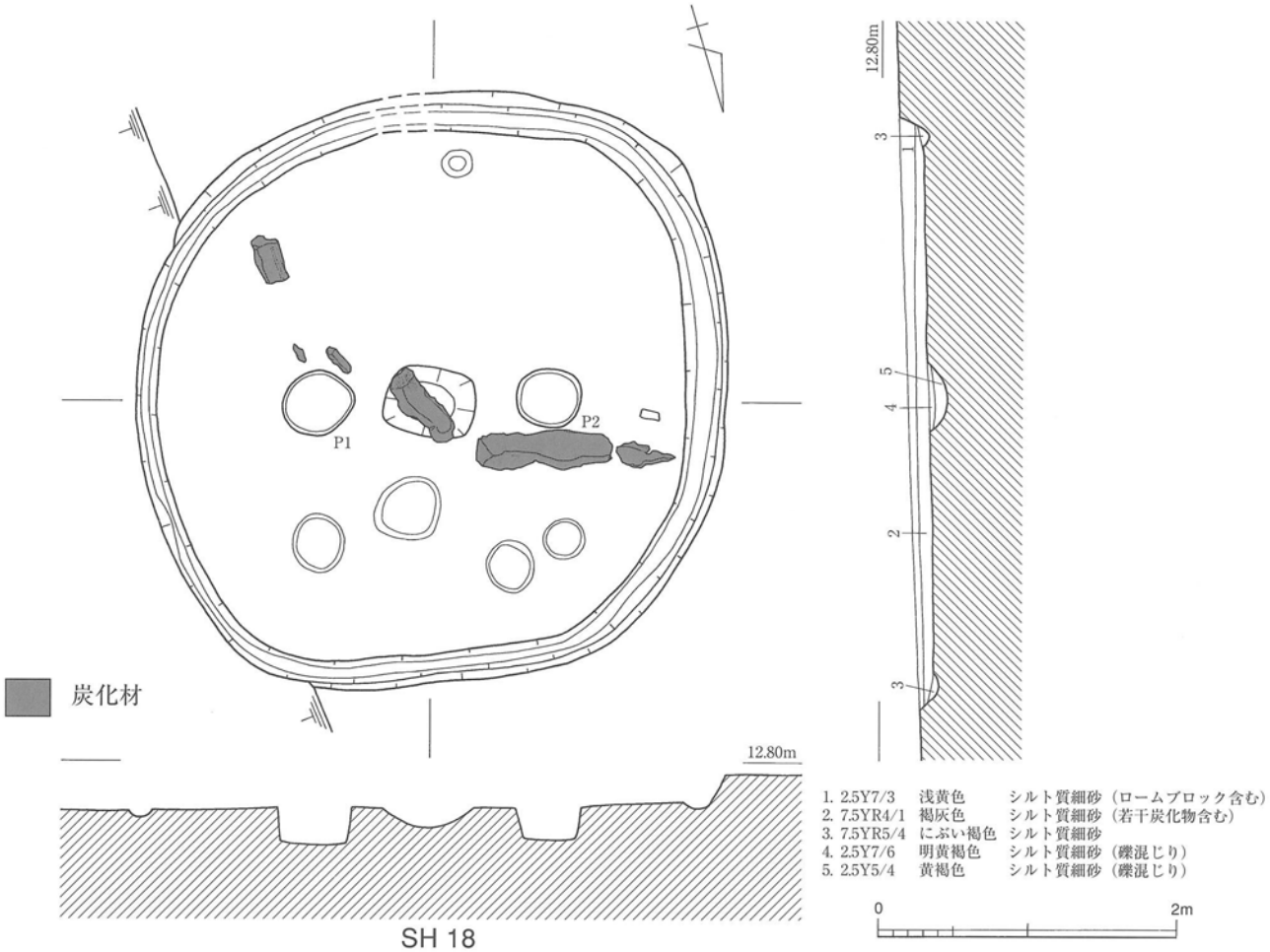
1. 現耕作土
2. 10YR6/8　明黄褐色　シルト質極細砂（床土）
3. 10YR7/4　にぶい黄橙色　シルト混じり中砂
4. 10YR7/1　灰白色　極細砂
5. 10YR5/1　褐灰色　極細砂質シルト（包含層）
6. 10YR3/1　黒褐色　極細砂質シルト（包含層）
7. 10YR7/2　にぶい黄橙色　シルト質極細砂（ベース）
8. 5Y6/2　灰オリーブ色　シルト混じり中砂
9. 10YR6/1　灰色　シルト混じり細砂
10. 10YR5/8　黄褐色　シルト混じり中砂（洪水砂）
11. 10YR4/1　褐灰色　中砂混じりシルト質極細砂
12. 2.5Y7/3　浅黄色　極細砂質シルト
13. 10YR7/3　にぶい黄橙色　シルト質極細砂
14. 10YR4/1　褐灰色　極細砂質シルト
15. 10YR4/4　褐色　シルト混じり極細砂
16. 10YR4/1　褐灰色　シルト質極細砂
17. 10YR6/1　褐灰色　シルト
18. 5PB4/1　暗青灰色　シルト
19. 10YR4/1　褐灰色　シルト質極細砂
20. 10BG5/1　青灰色　シルト
21. 10BG4/1　暗青灰色　シルト
22. 10YR4/1　褐灰色　礫混じりシルト質極細砂


X = −128.100
X = −128.200
Y = 24.900
Y = 24.800
01
02
03
04
05
06
07
08
09
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
30m
0
30m

竪穴住居配置図

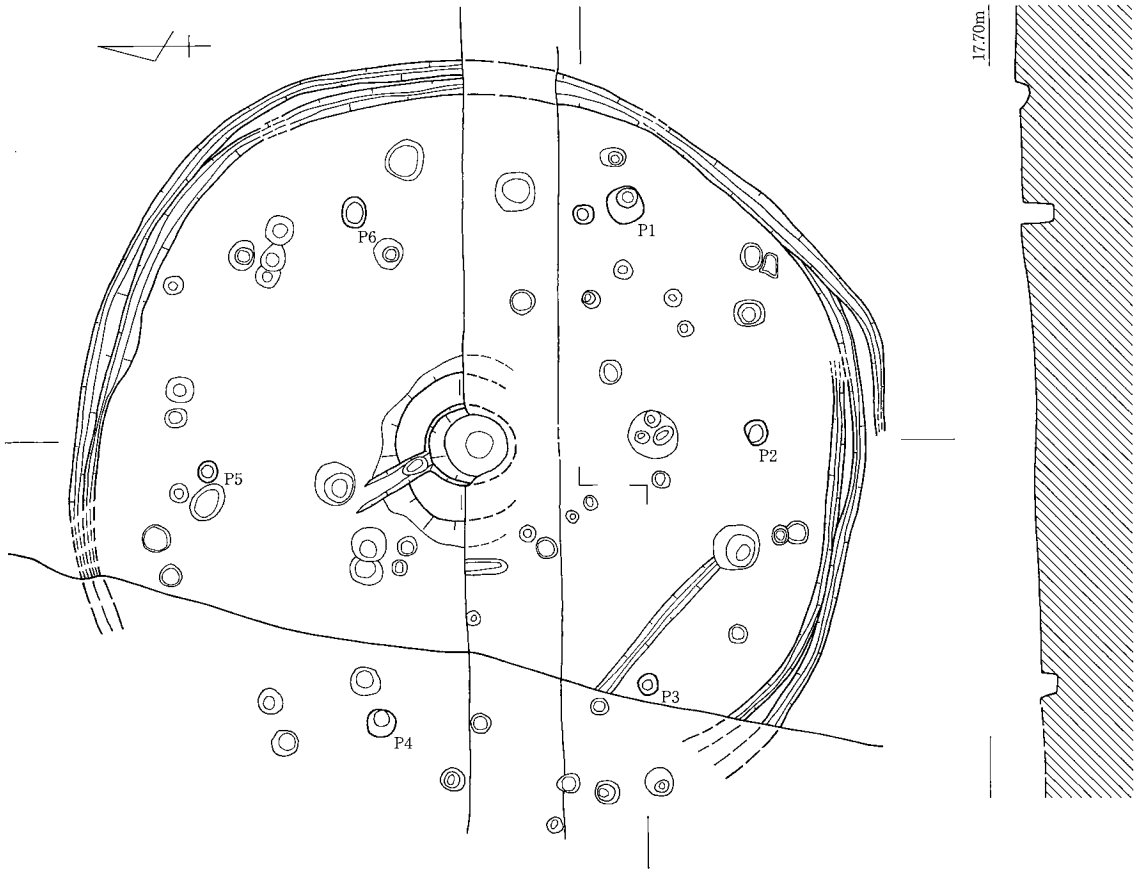


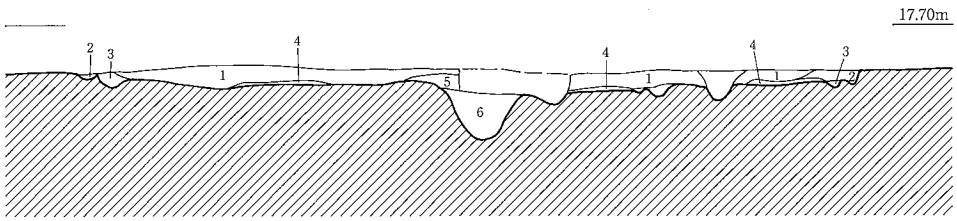
SH 01



SH 18

竪穴住居1

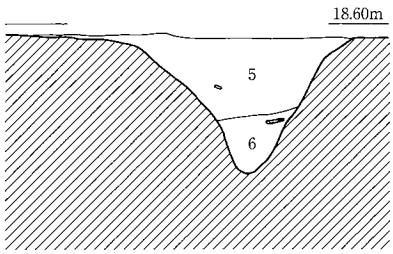




SH 03

0 4m

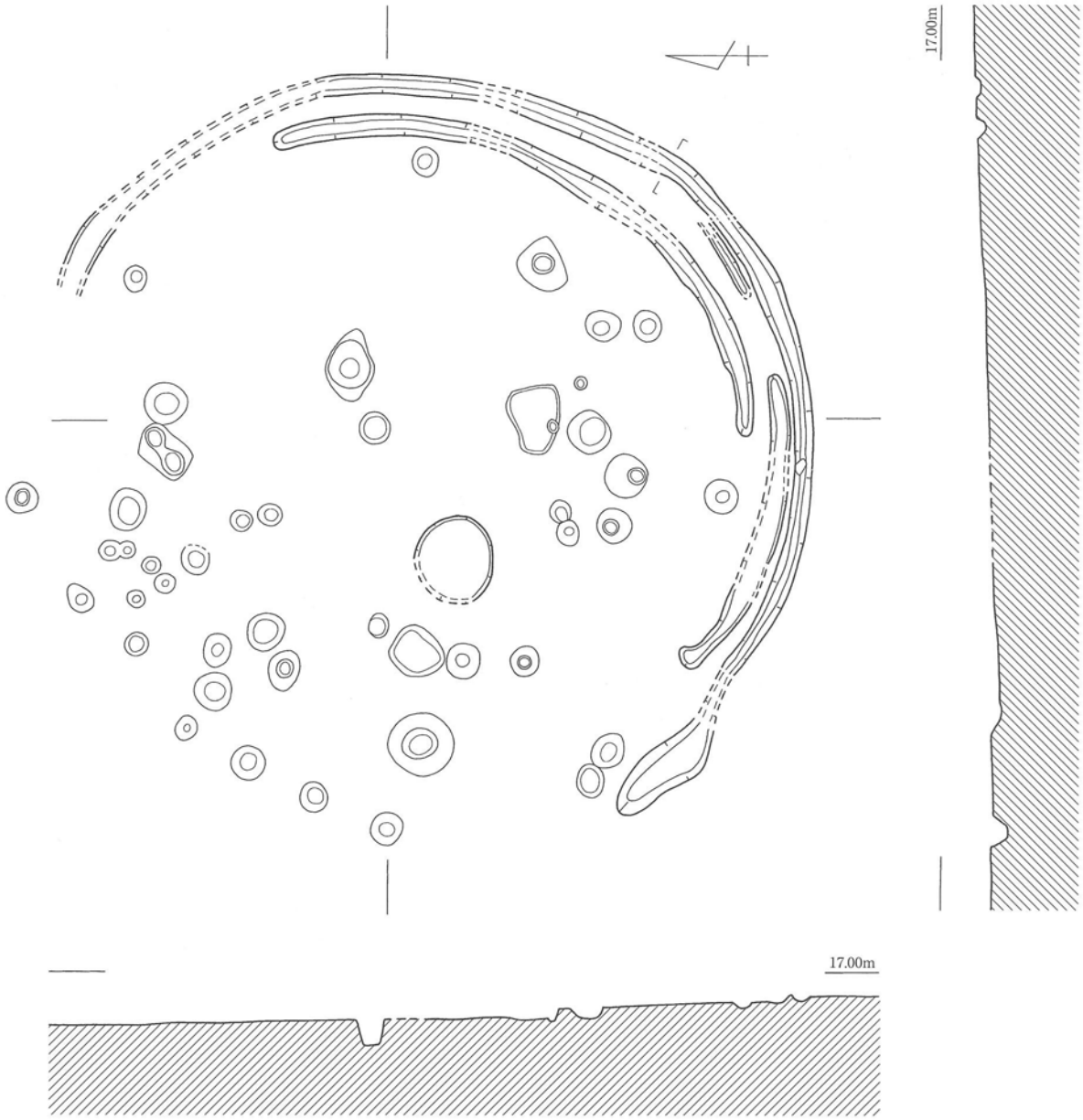
1. 10YR4/3 にぶい黄褐色 礫混極細砂
2. 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質極細砂（礫混じり）
3. 10YR3/2 黒褐色 ロームブロック混シルト
4. 10YR4/4 褐色 ロームブロック混シルト
5. 10YR3/2 黒褐色 礫混シルト
6. 10YR3/2 黒褐色 シルト



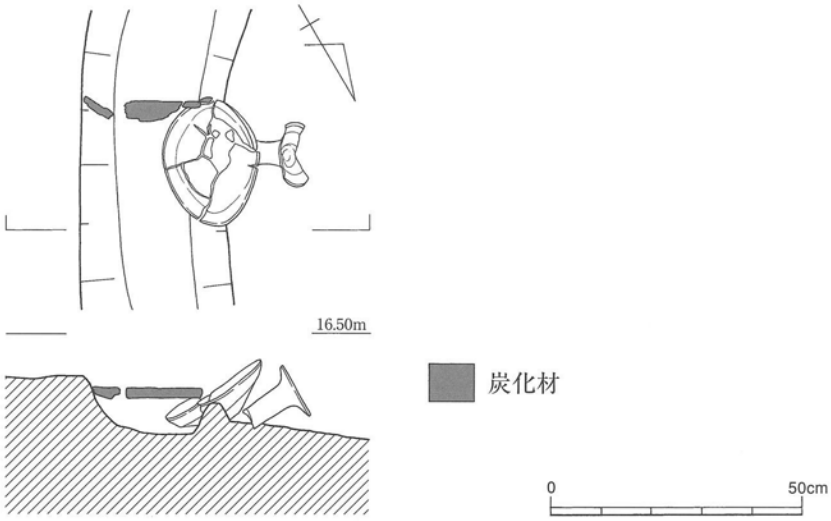
0 1m

SH 03 中央土坑

竪穴住居2

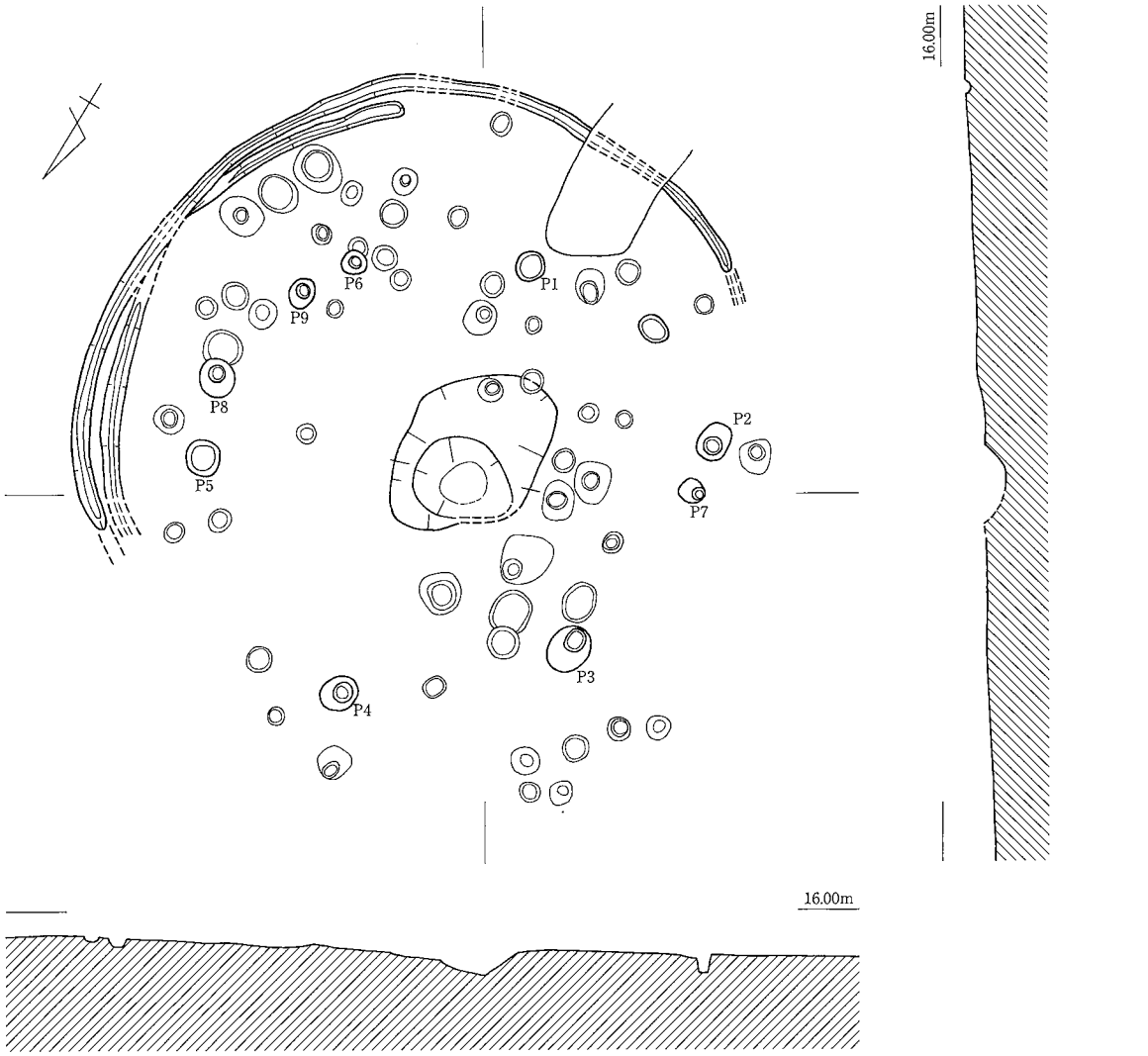


SH 04



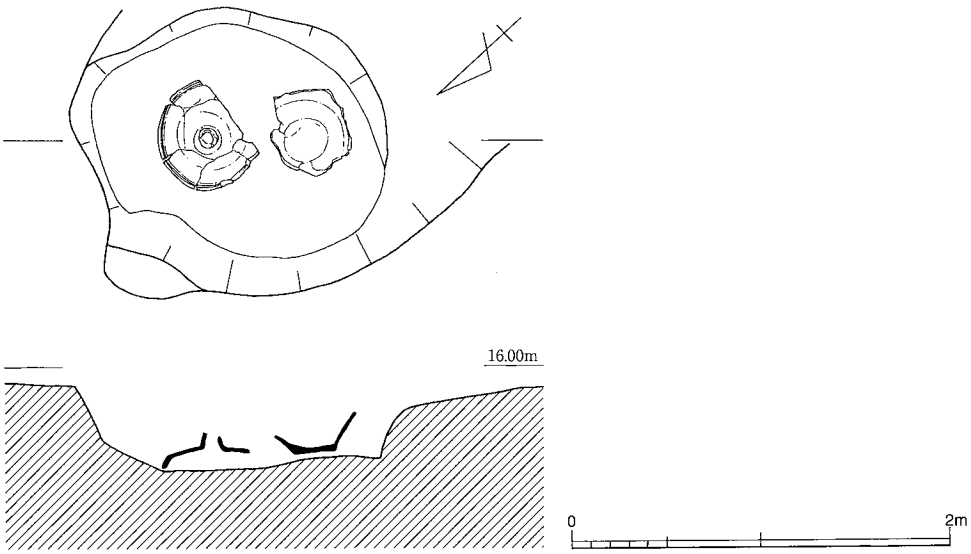
SH 04 周壁溝内遺物出土状況

竪穴住居3



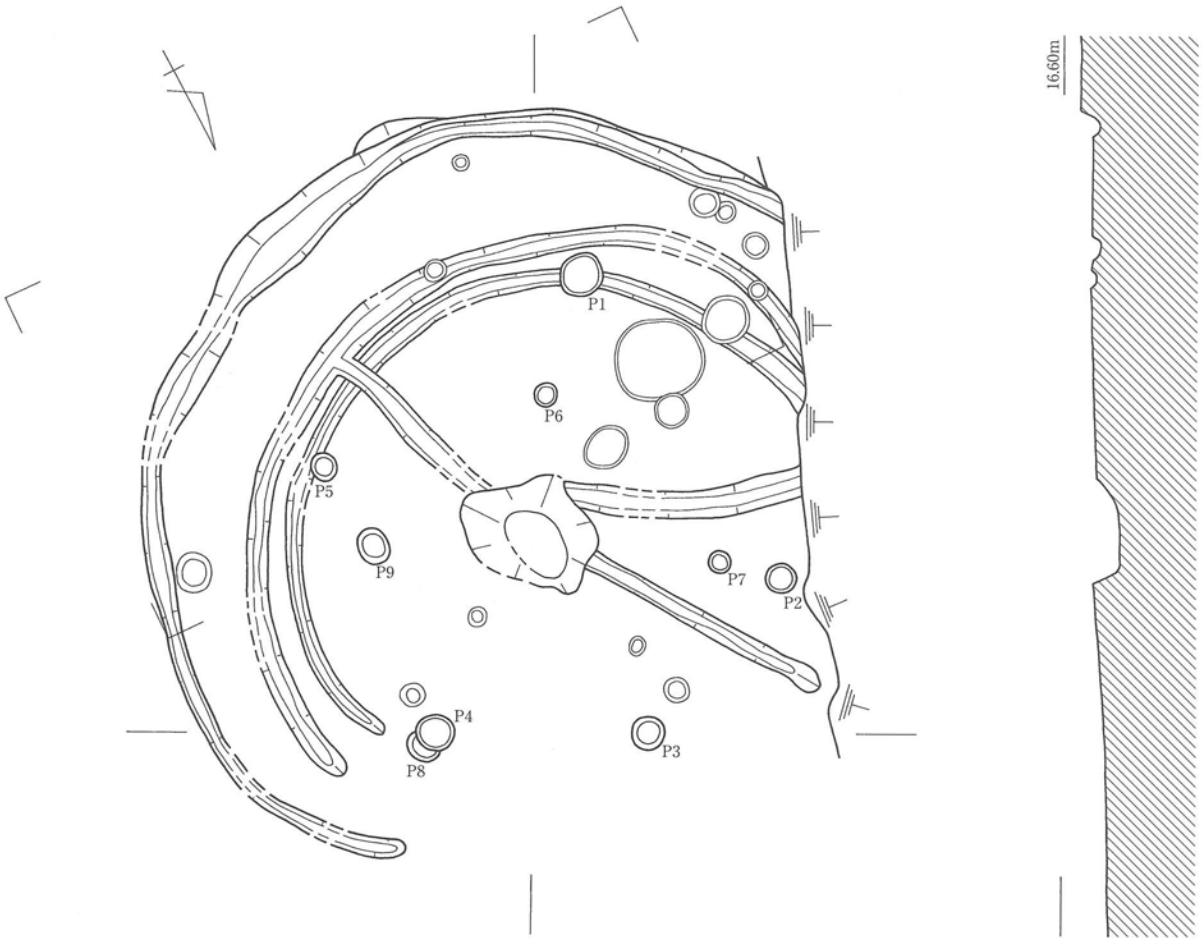
SH 06

0 4m



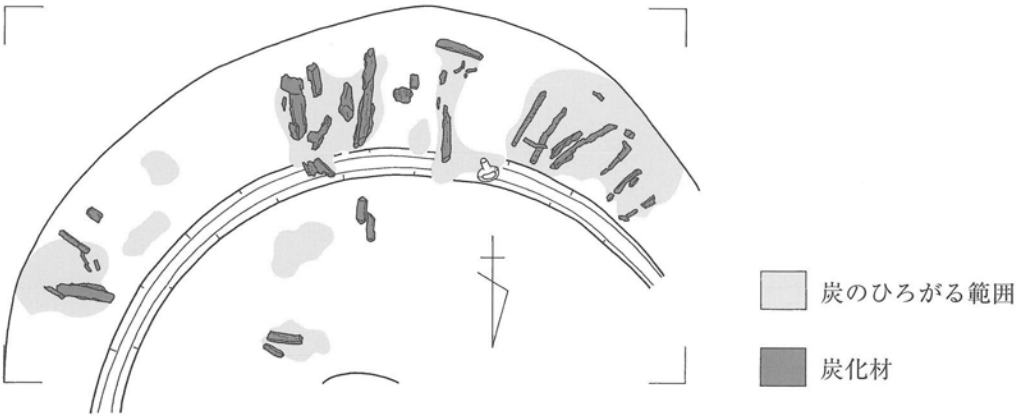
SH 06 中央土坑遺物出土状況

竪穴住居 4



SH 14

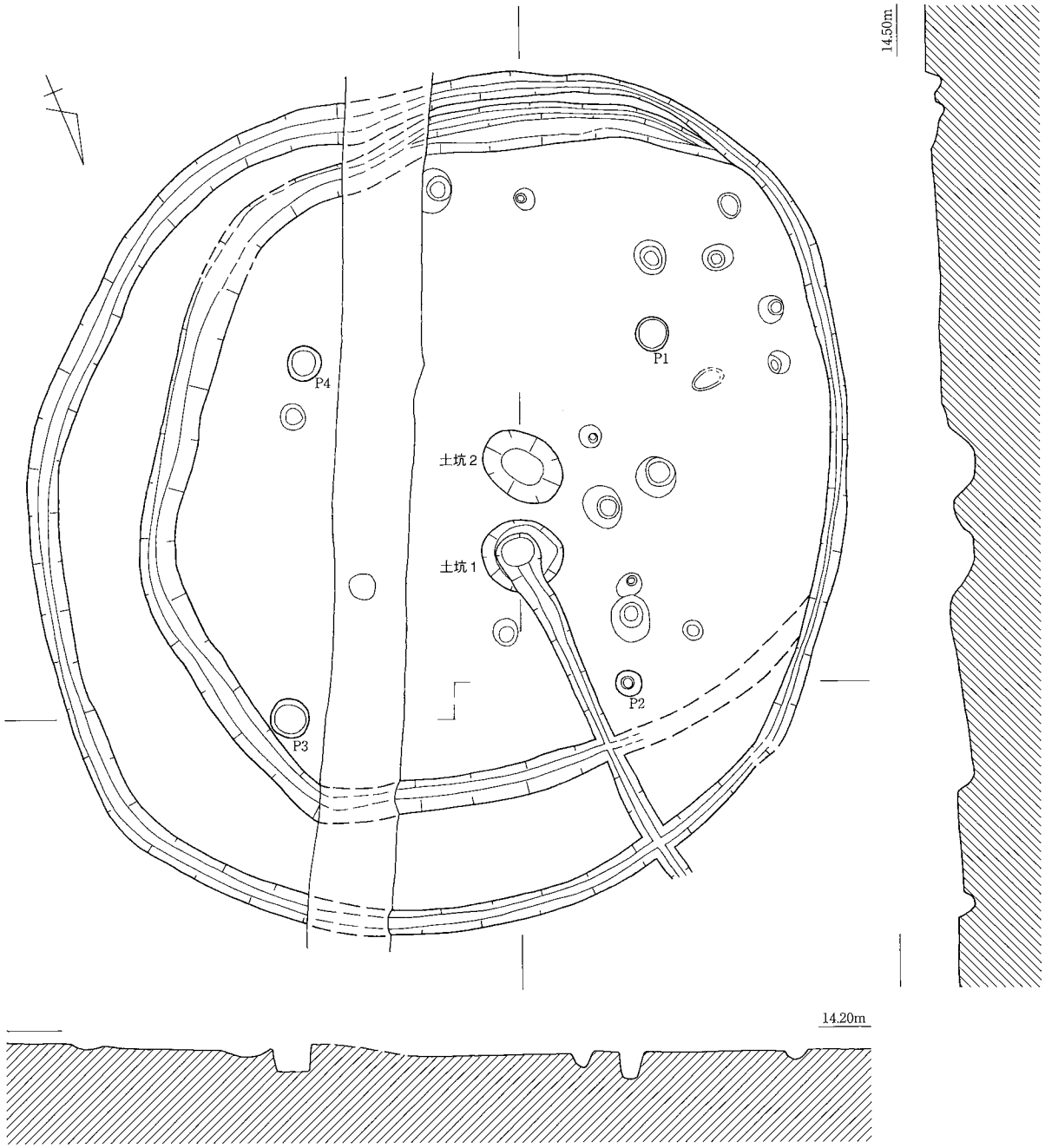
0 4m



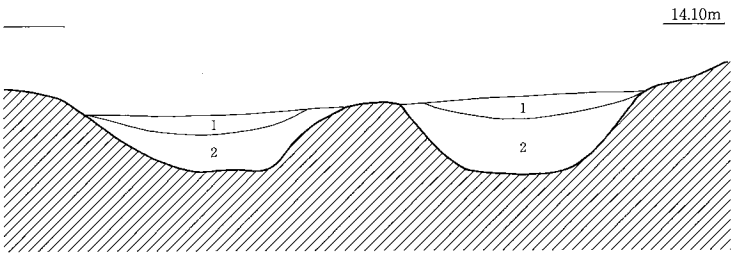
SH 14 炭・炭化材検出状況

0 4m

竪穴住居5



SH 21



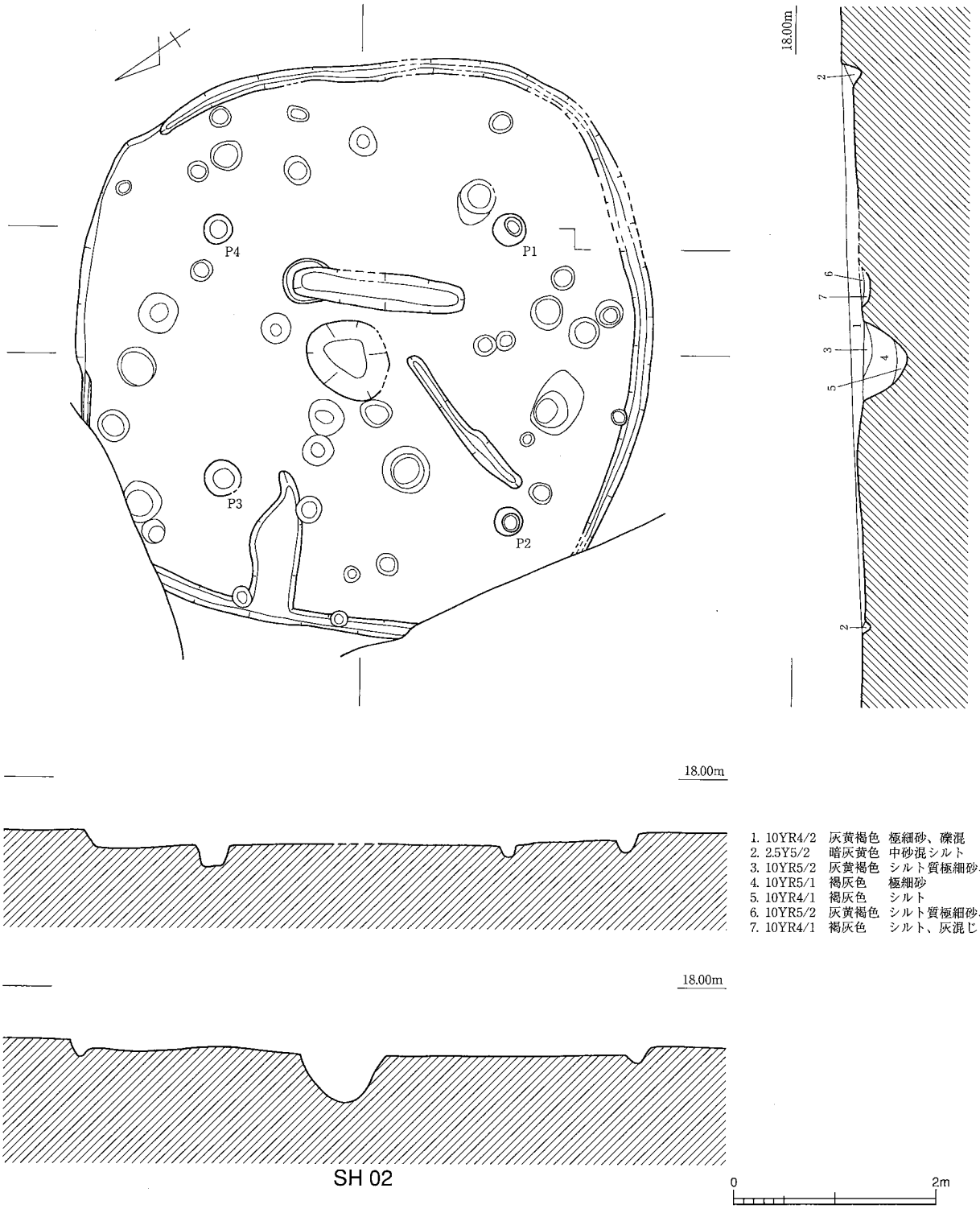
1. 10YR3/2　黒褐色　粗砂　炭多しシルト混
2. 5YR3/2　黒褐色　中～粗砂　炭多しシルト混

土坑1

1. 10YR3/2　黒褐色　シルト混粗砂　炭多し
2. 5YR3/2　暗赤褐色　中～粗砂　炭多し

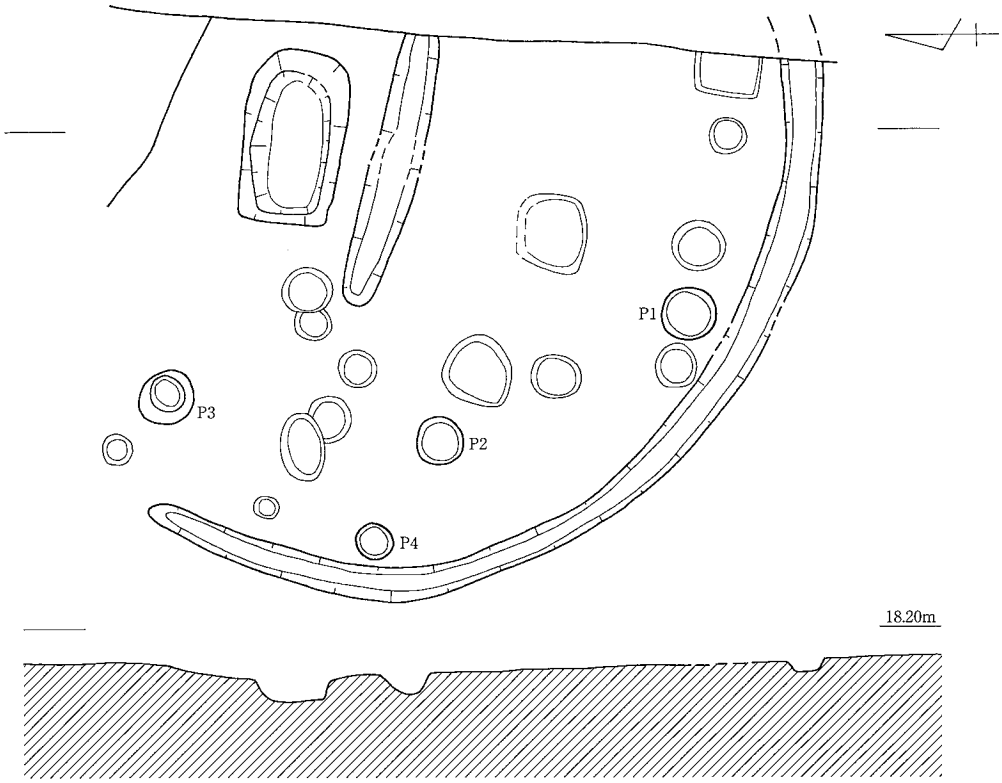
土坑2

竪穴住居6

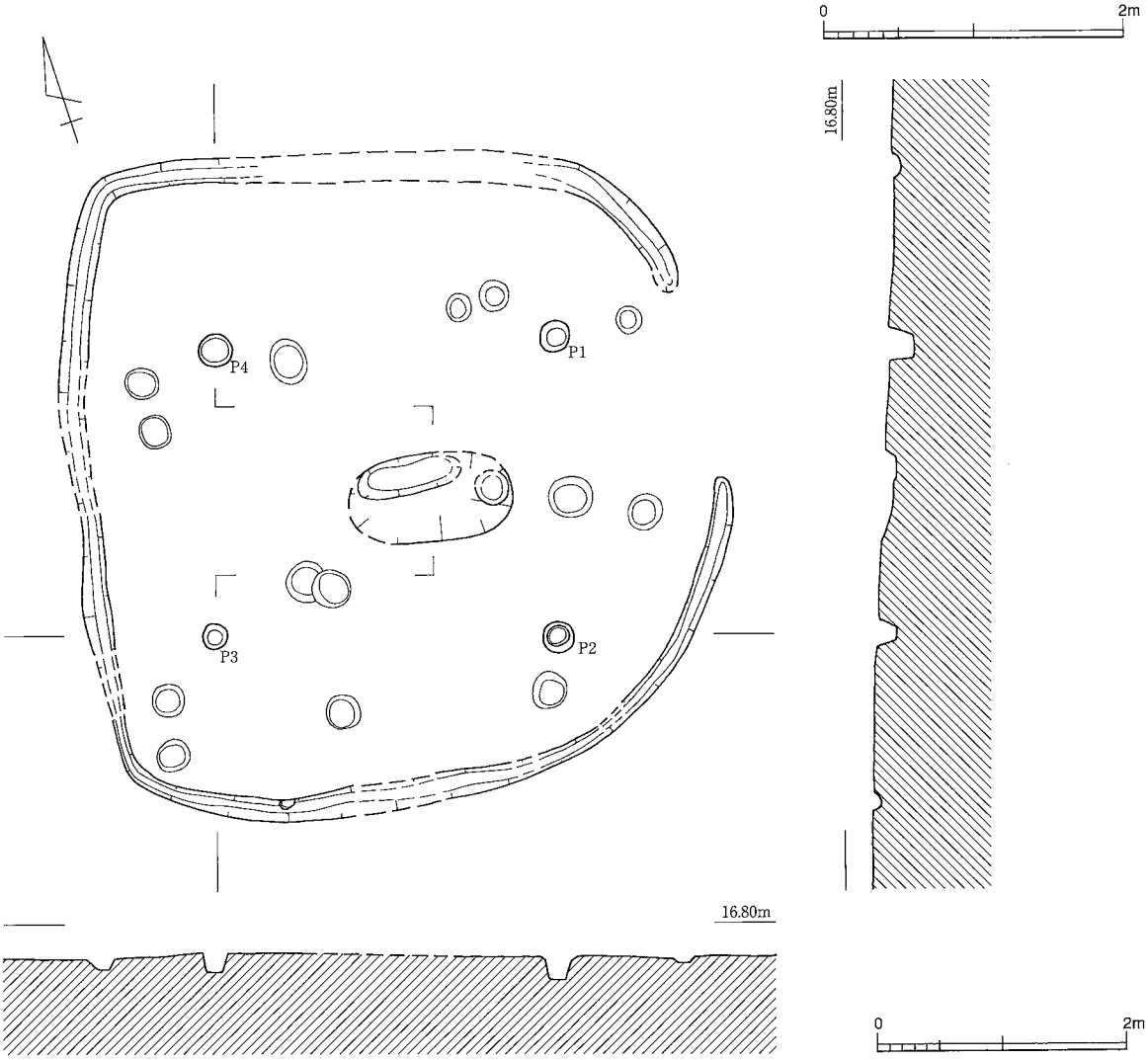


1. 10YR4/2　灰黄褐色　極細砂、礫混
2. 2.5Y5/2　暗灰黄色　中砂混シルト
3. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質極細砂、礫混
4. 10YR5/1　褐灰色　極細砂
5. 10YR4/1　褐灰色　シルト
6. 10YR5/2　灰黄褐色　シルト質極細砂、小礫混
7. 10YR4/1　褐灰色　シルト、灰混じり

竪穴住居7

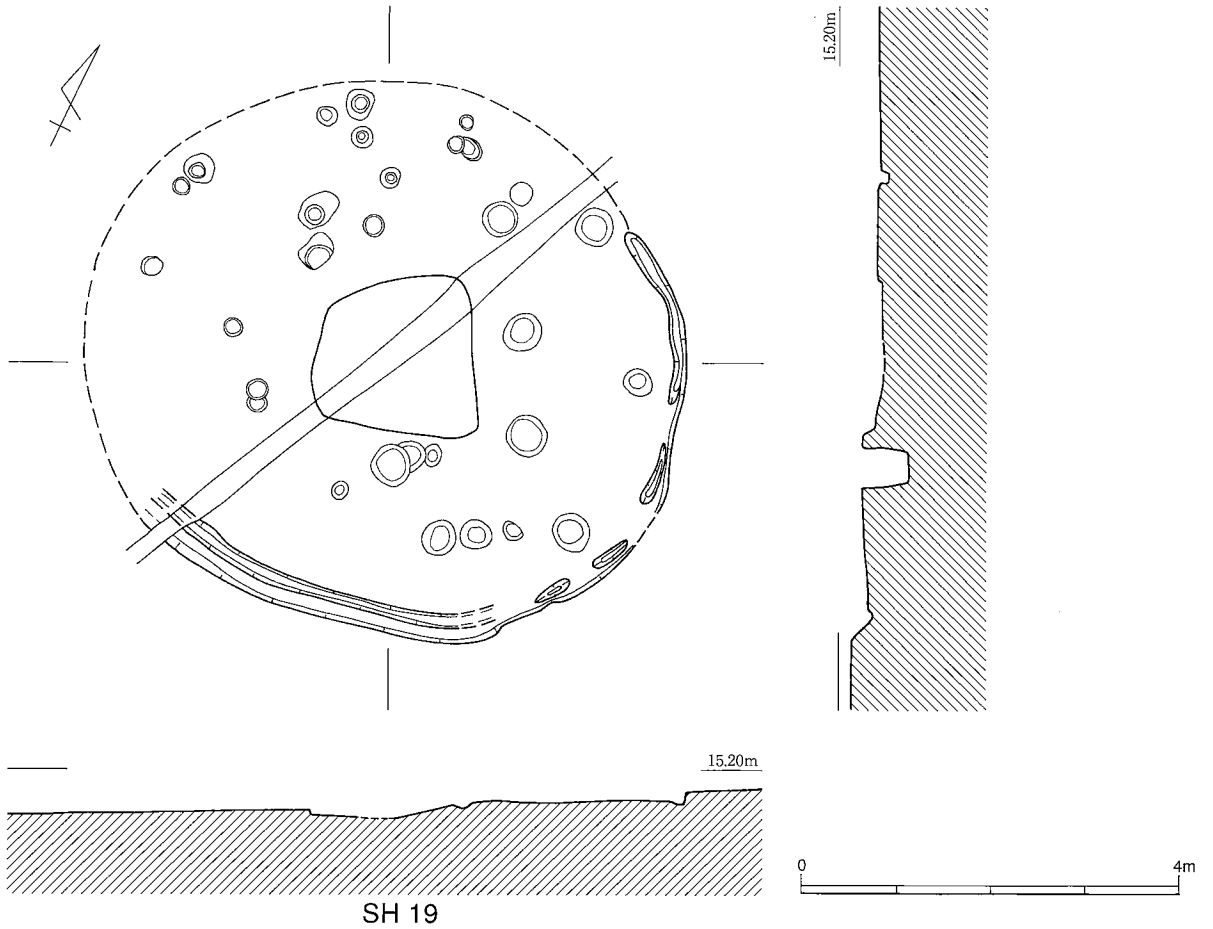


SH 11

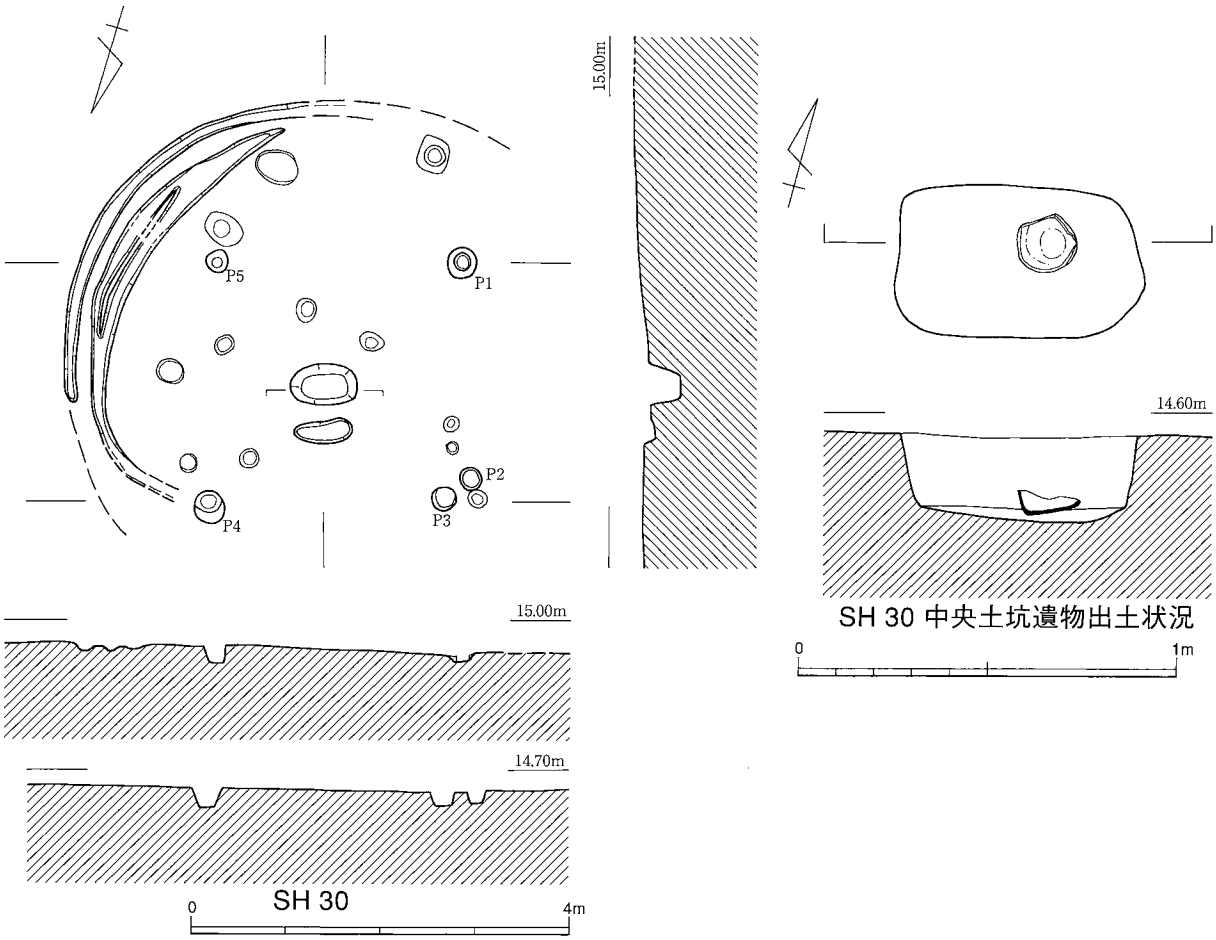


SH 15

竪穴住居 8



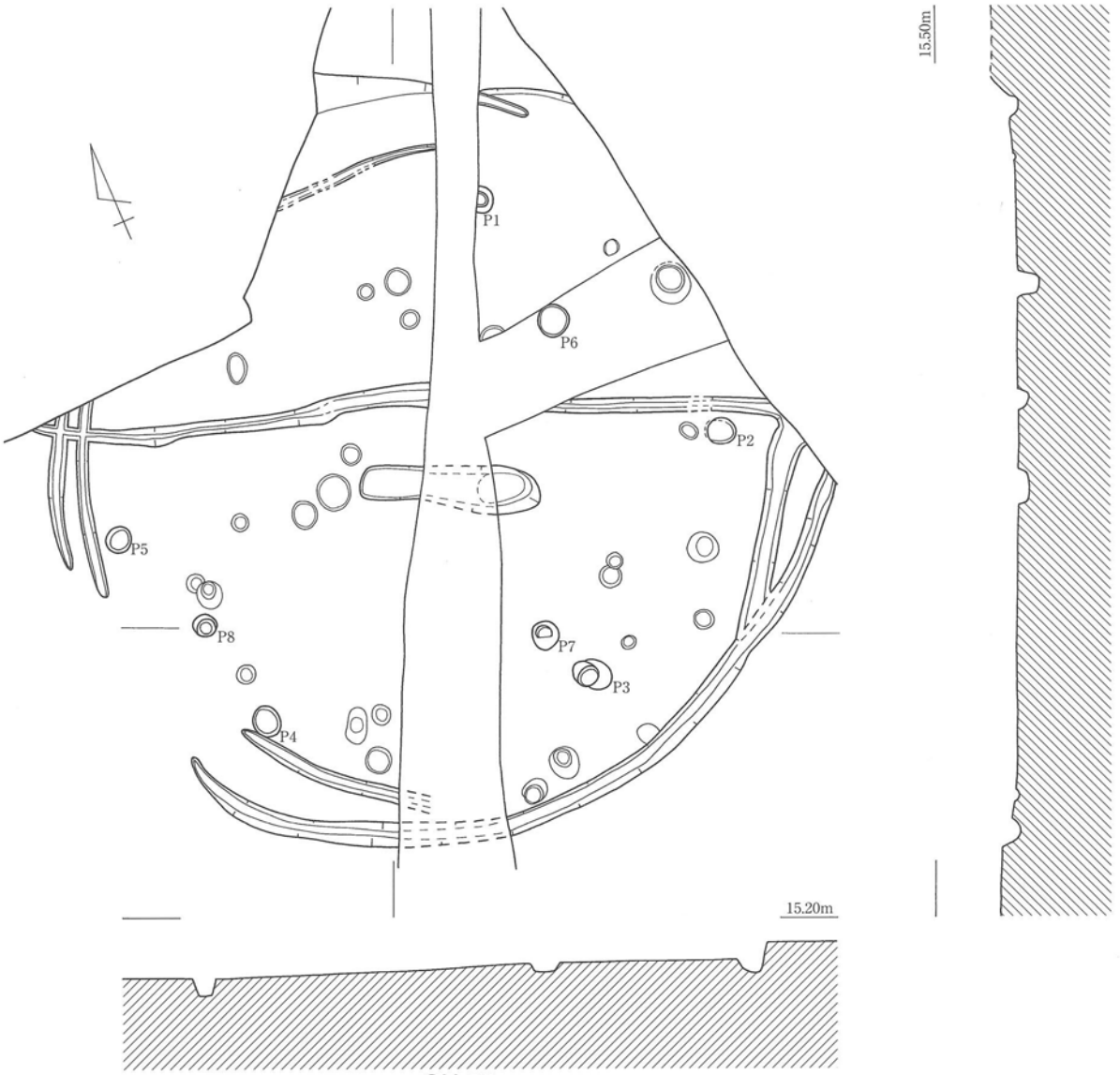
SH 19



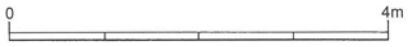
SH 30 中央土坑遺物出土状況

SH 30

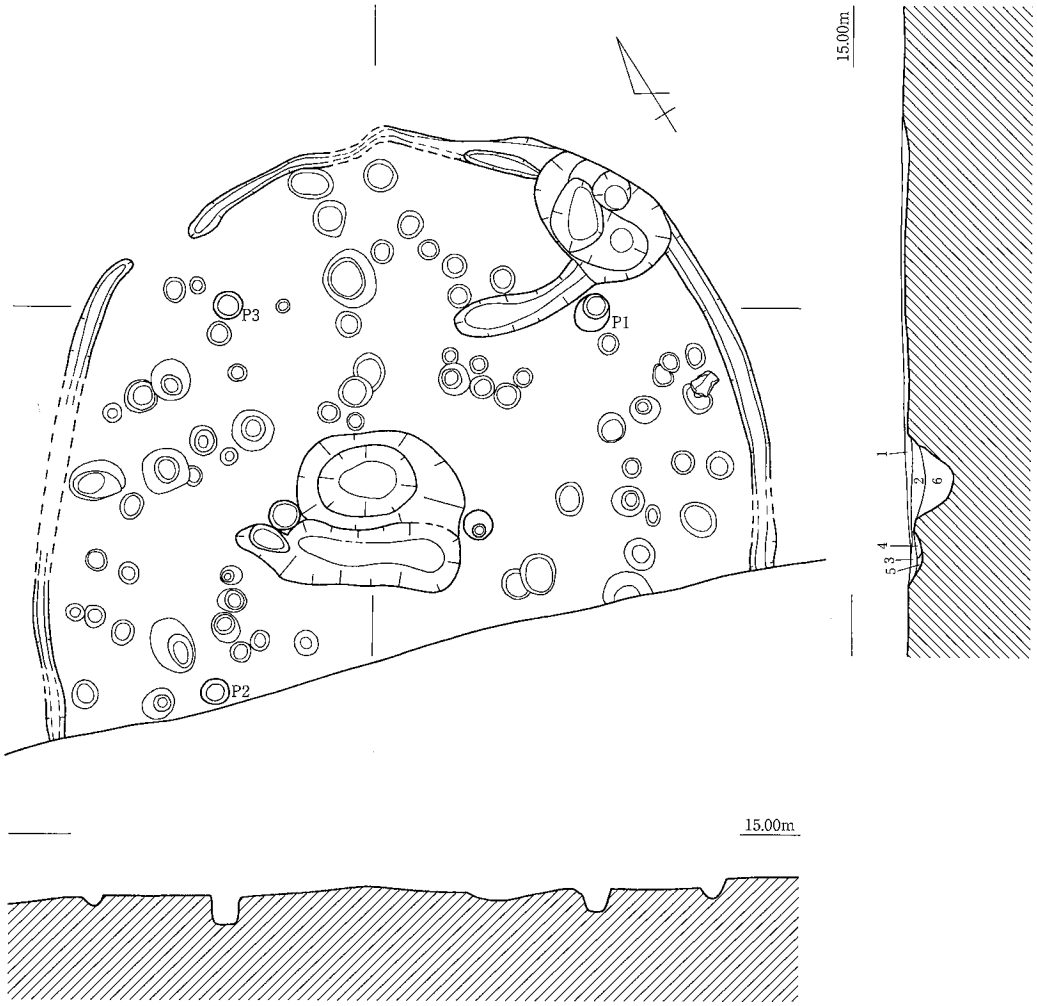
竪穴住居9



SH 22



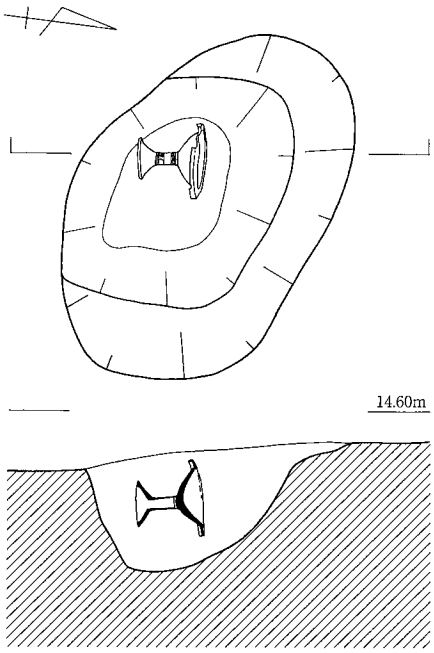
SH 22 焼土・炭化材検出状況



SH 23

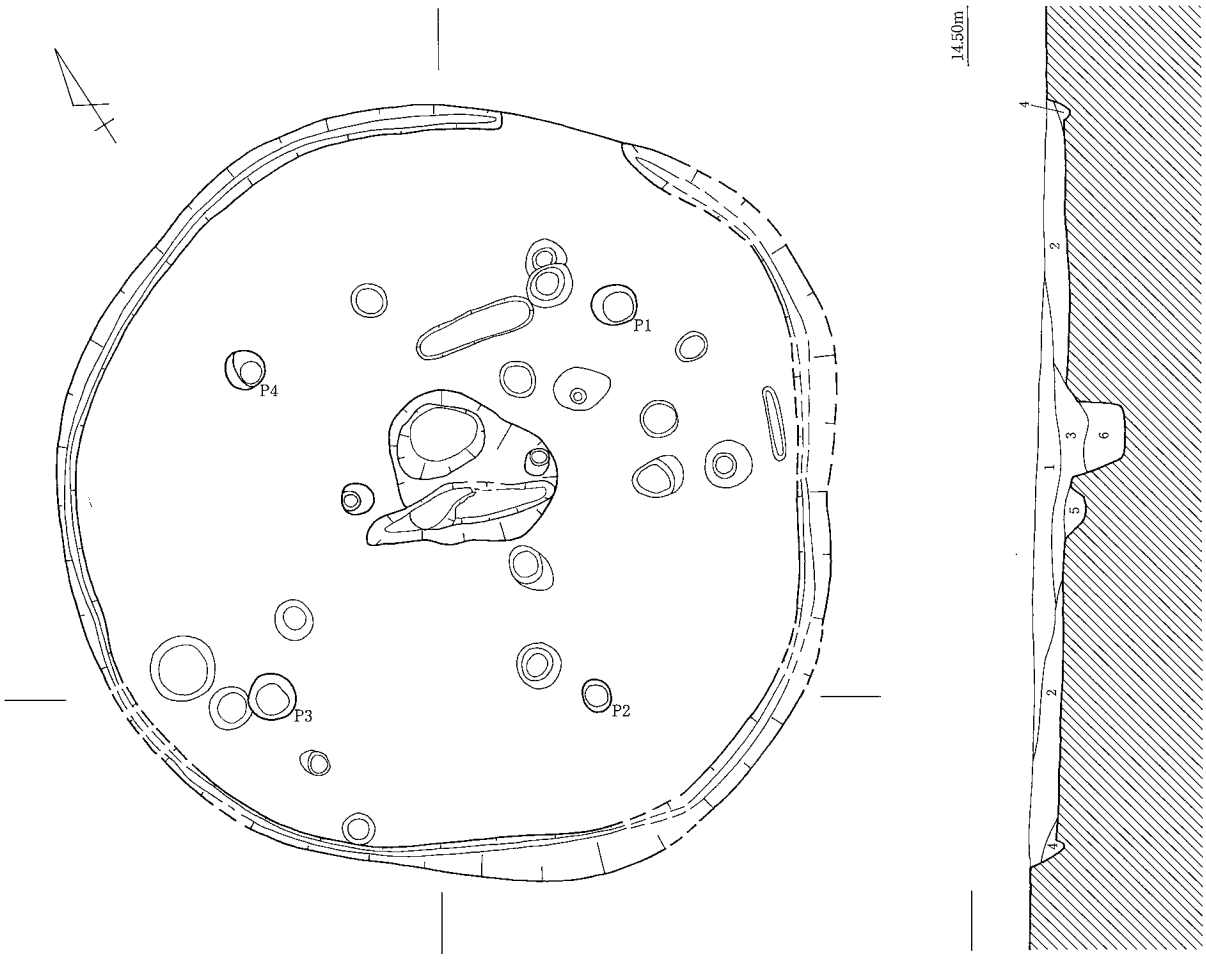
1. 10YR2/3　黒褐色　極細砂
2. 10YR2/1　黒色　極細砂
3. 10YR3/2　黒褐色　極細砂
4. 10YR2/1　黒色　シルト質極細砂（灰を含む）
5. 10YR2/3　黒褐色　極細砂
6. 10YR2/1　黒色　シルト質極細砂（炭を多く含む）

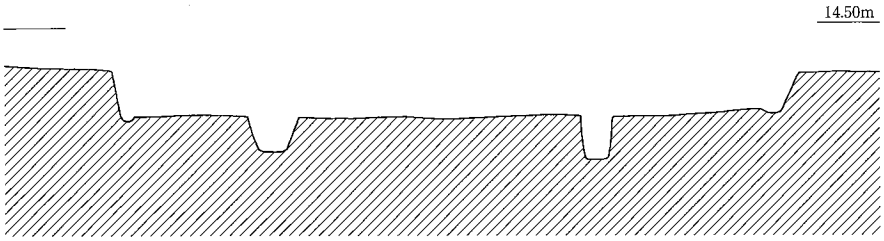
0　4m



SH 23 中央土坑遺物出土状況

0　1m



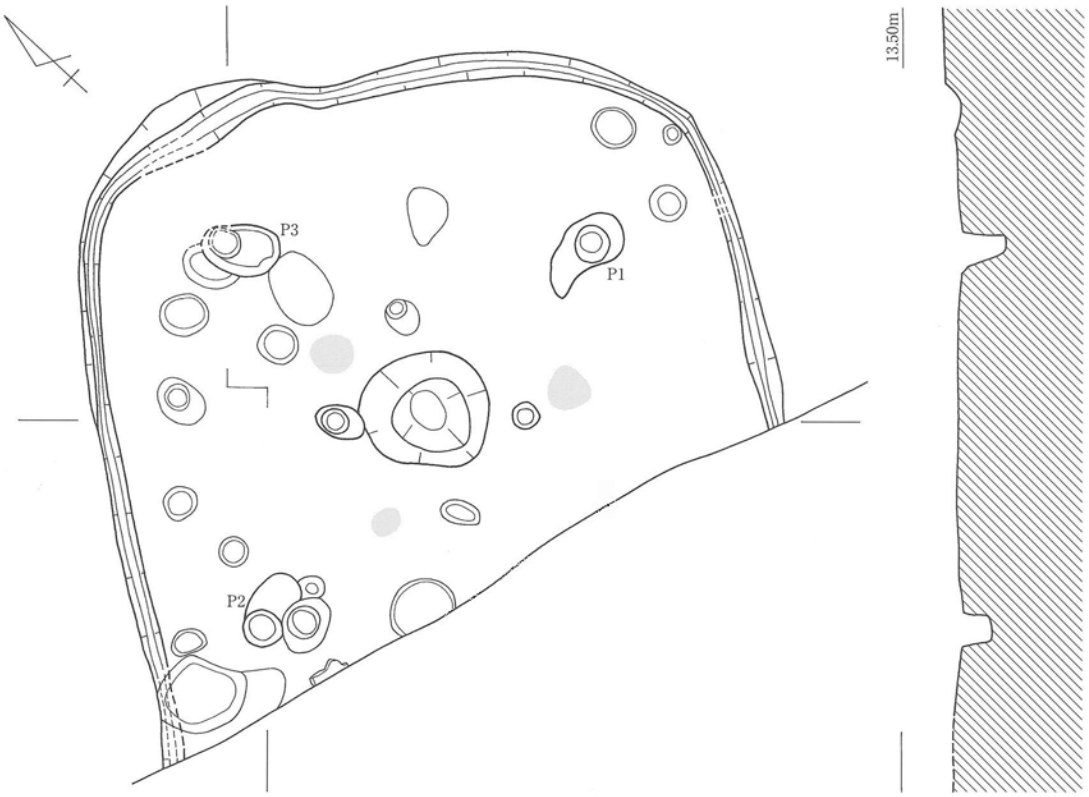


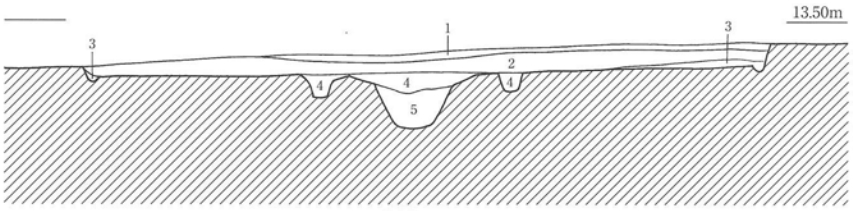
1. 10YR5/2　灰黄褐色　極細砂（粗砂混）
2. 10YR5/6　黄褐色　極細砂（粗砂混、炭多い）
3. 10YR2/2　黒褐色　細砂（粗砂混）
4. 10YR6/2　灰黄褐色　細砂
5. 10YR1.7/1　黒色　シルト（炭混じり）
6. 10YR2/1　黒色　極細砂質シルト（炭混じり）

SH 24

0　2m

竪穴住居12

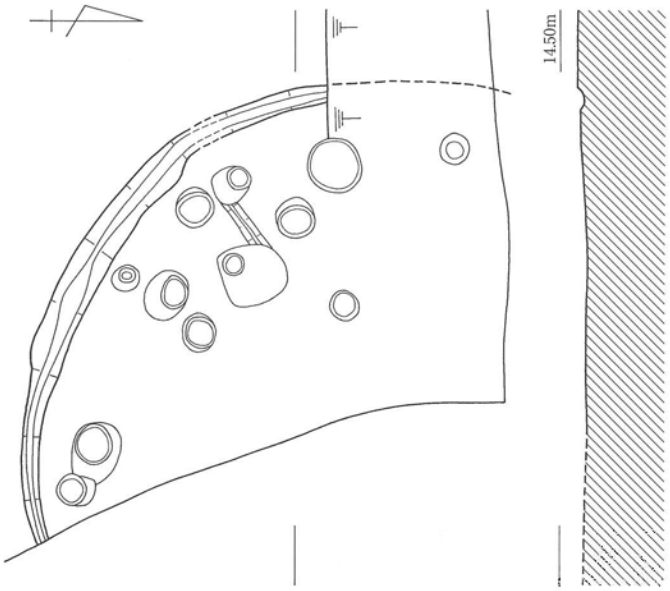




1. 7.5YR3/3　暗褐色　極細砂、小礫混
2. 7.5YR4/1　褐灰色　極細砂、細砂混
3. 7.5YR3/3　暗褐色　極細砂
4. 7.5YR4/1　褐灰色　極細砂、粗砂混
5. 7.5YR3/2　黒褐色　シルト質極細砂

焼土

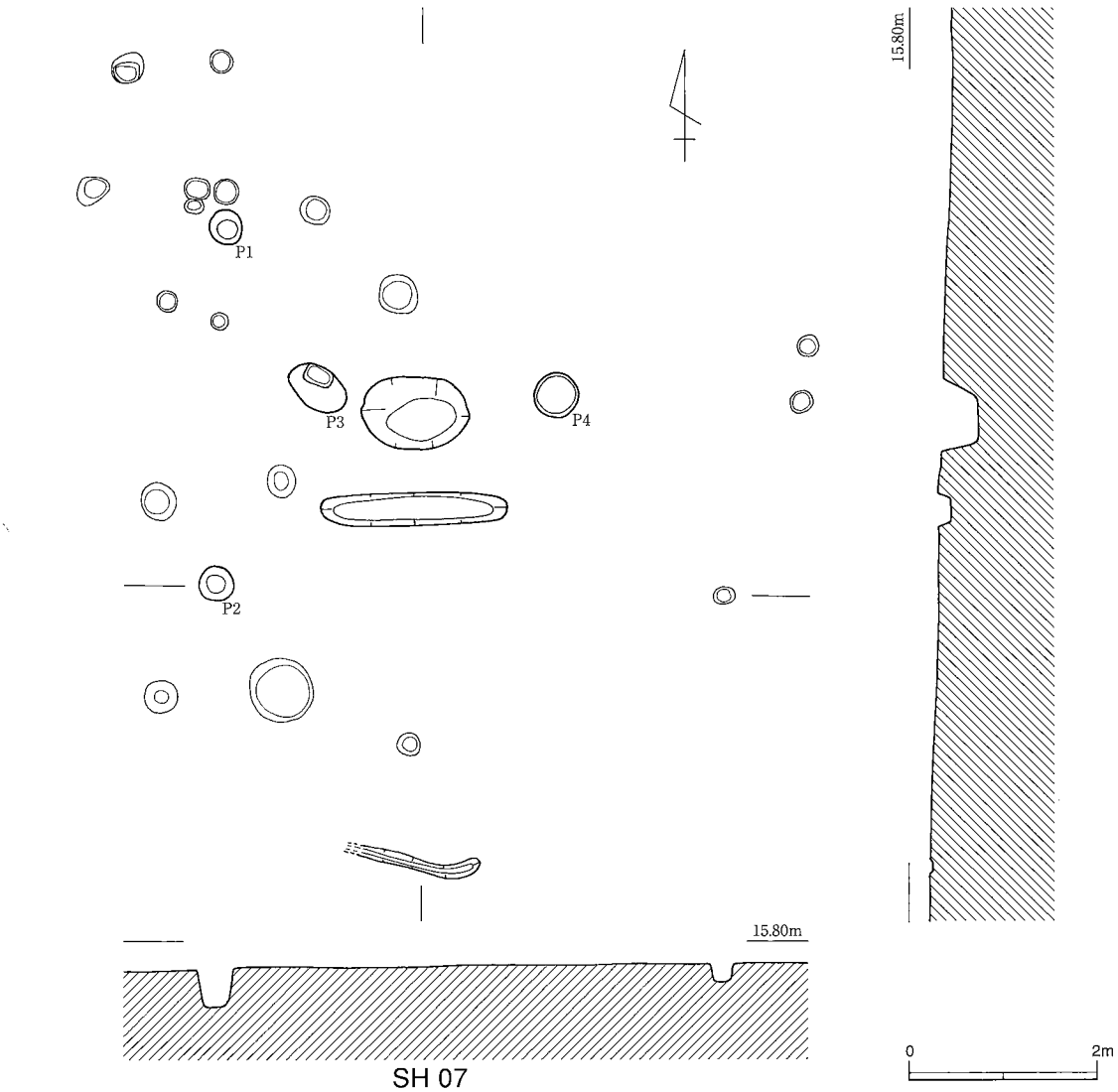
SH 25



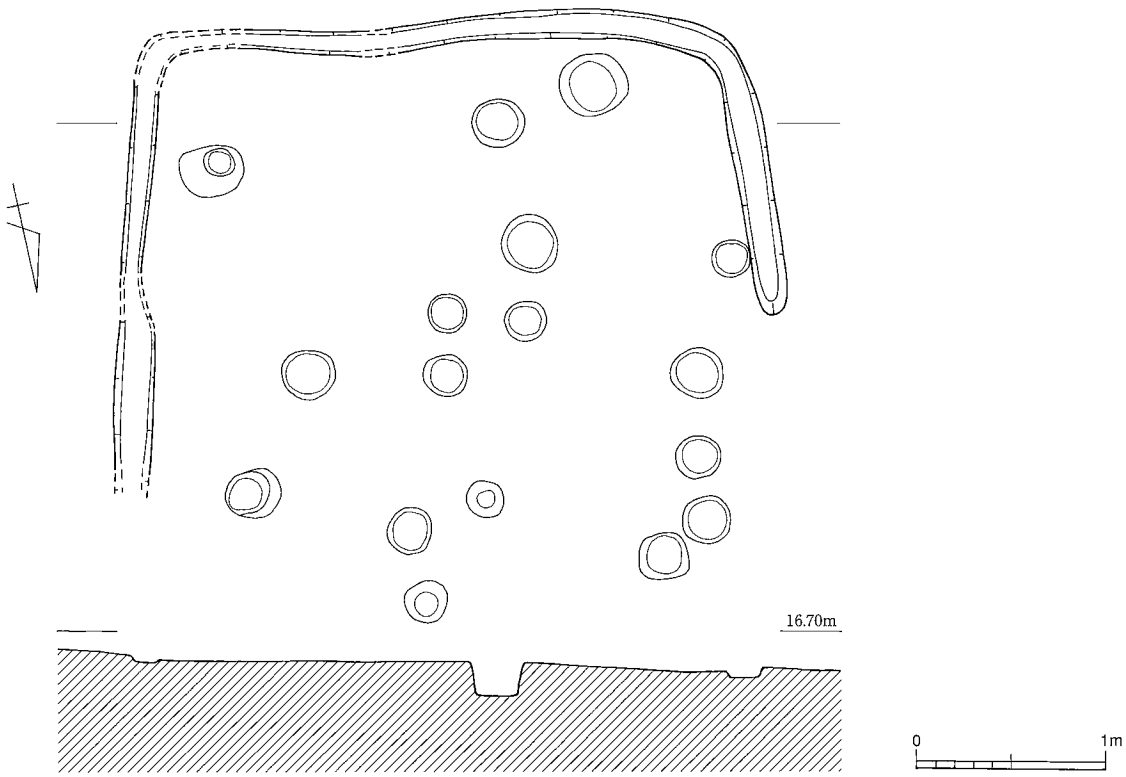
SH 26

0　2m

竪穴住居13

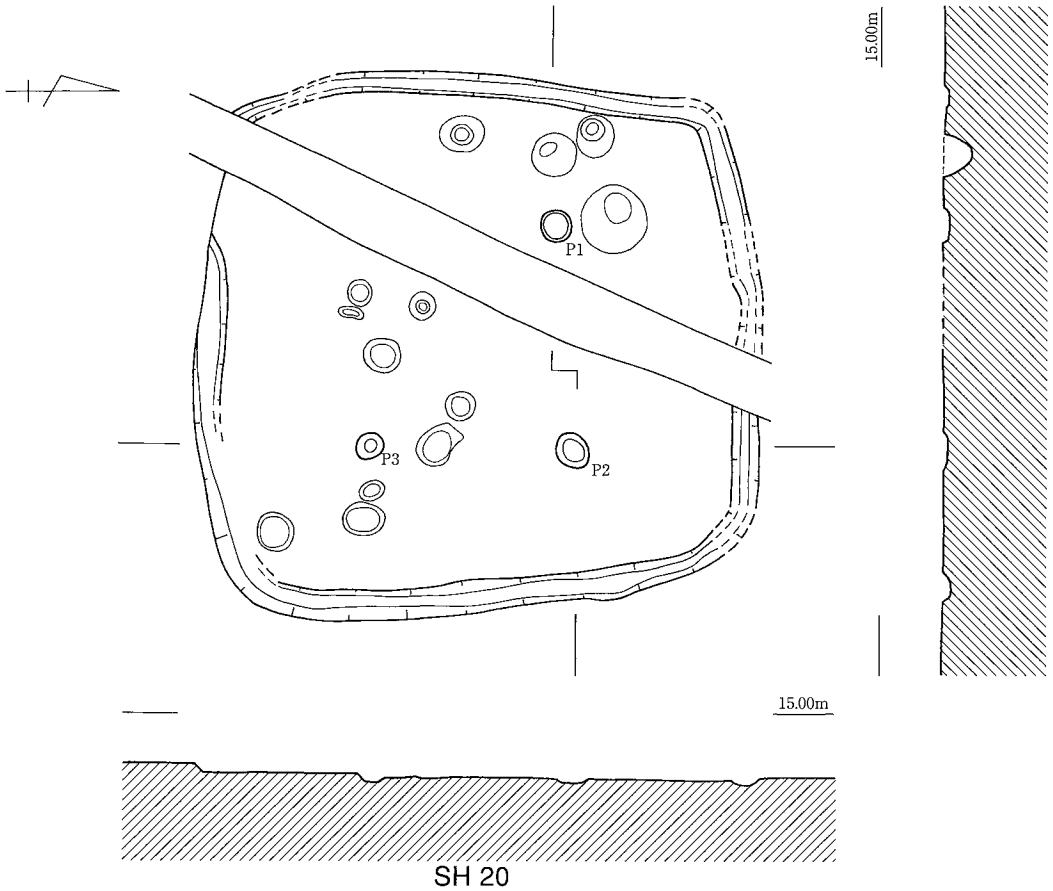


SH 07

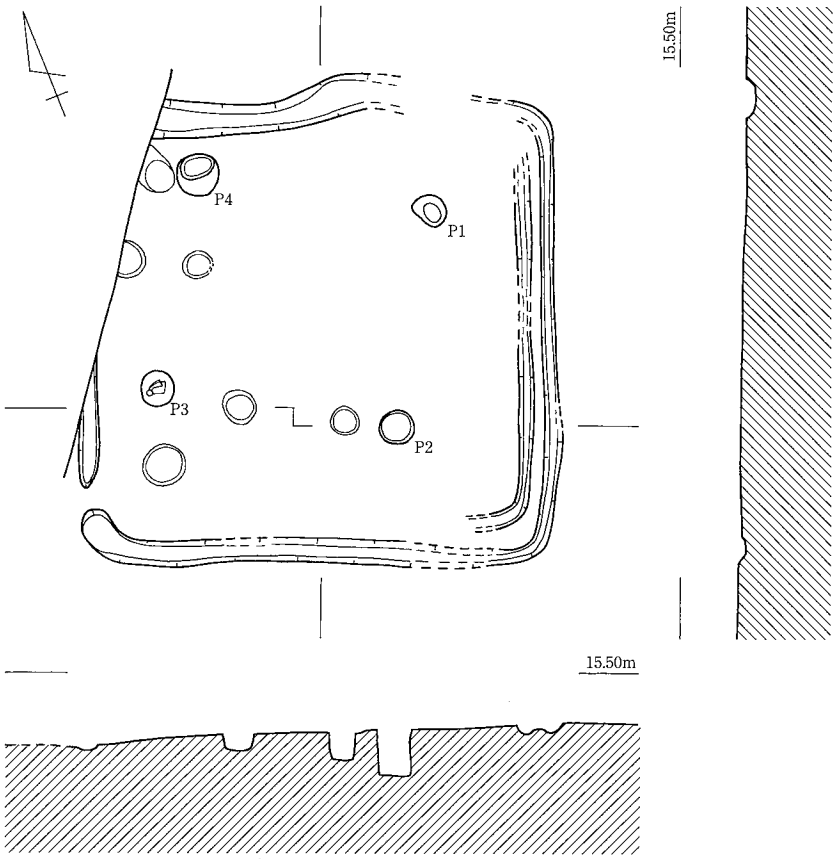


SH 16

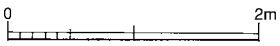
竪穴住居14



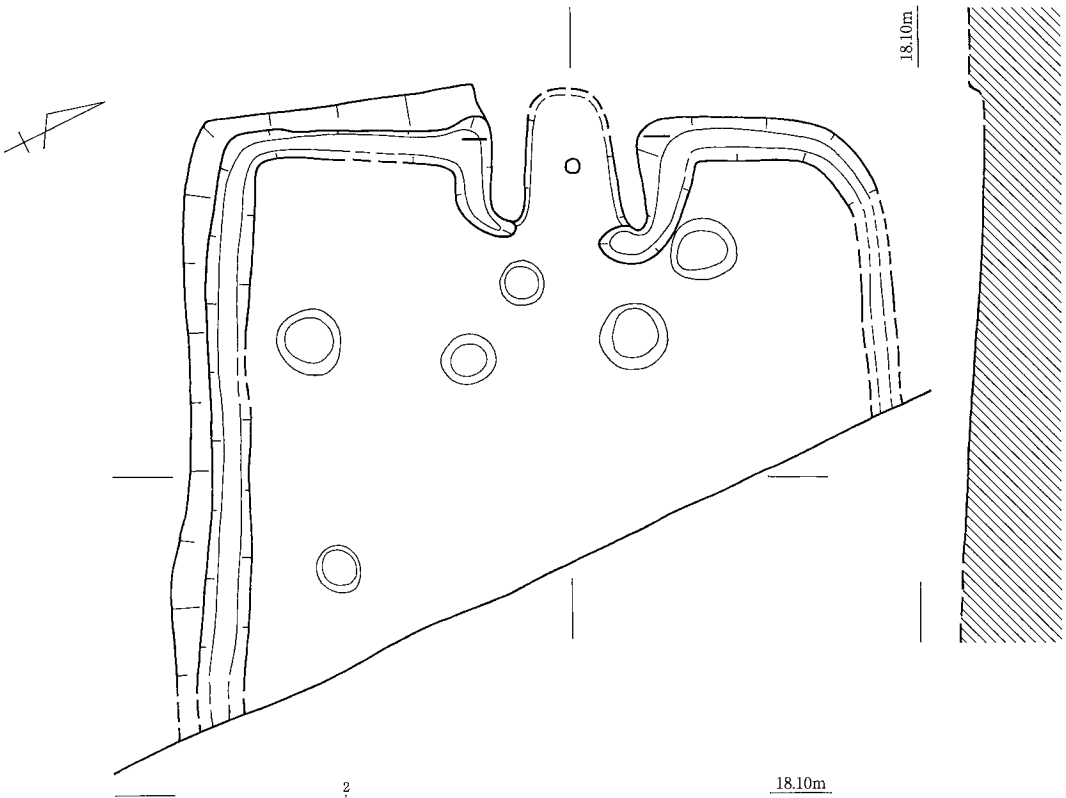
SH 20

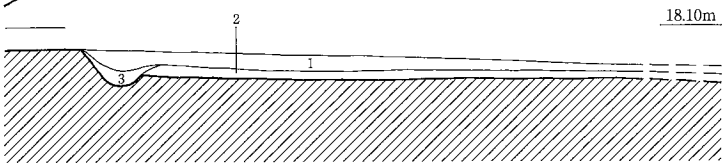


SH 08



竪穴住居15

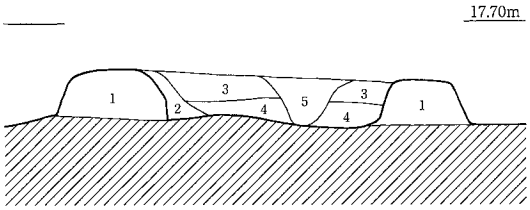




1. 7.5YR5/1 褐灰色 シルト質細砂、小礫を含む
2. 7.5YR3/2 黒褐色 シルト質細砂イブリ混
3. 7.5YR3/3 暗褐色 礫混じりシルト

SH 12

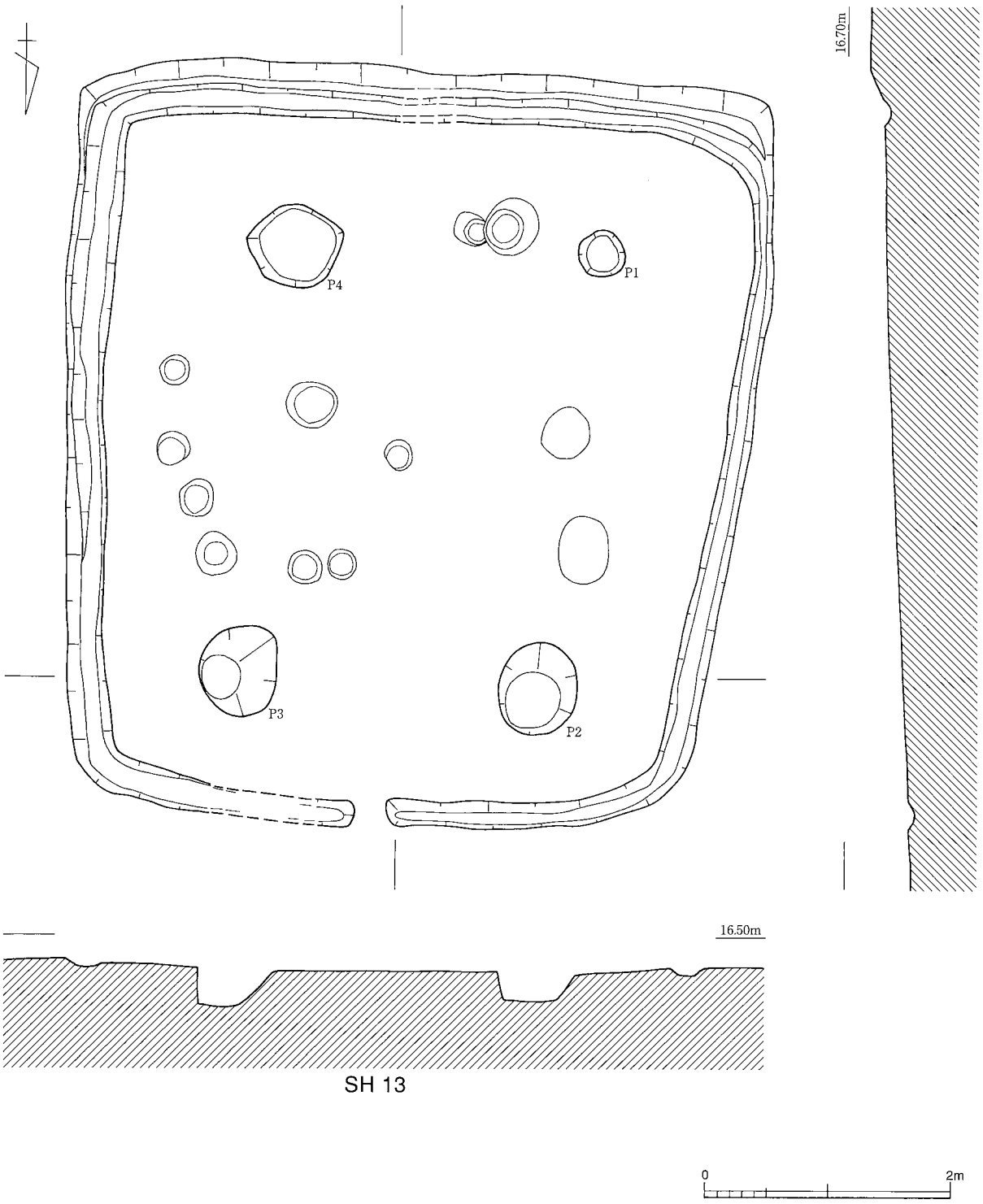
0 2m



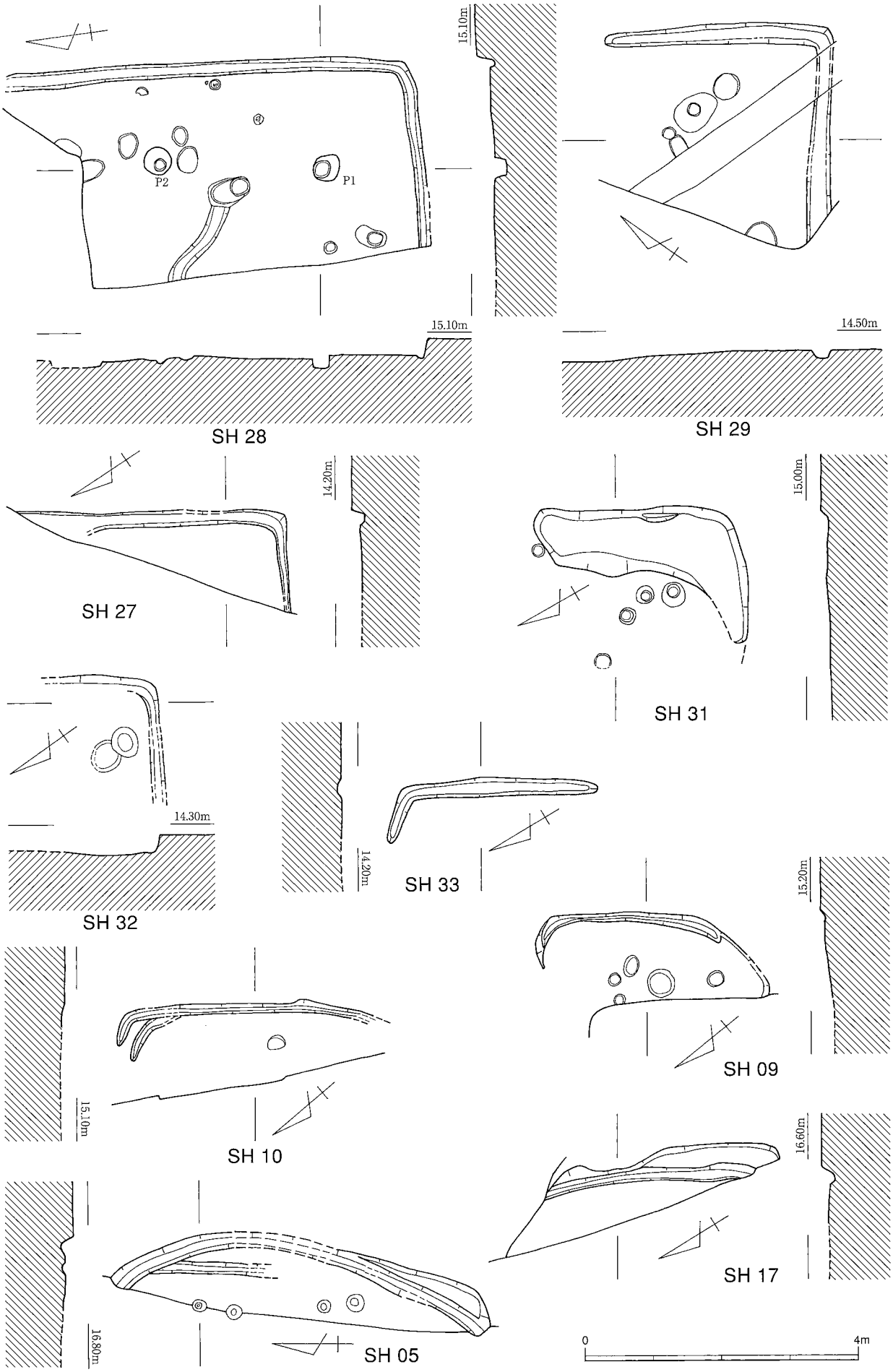
1. カマドの袖
2. 7.5YR4/1 褐灰色 シルト質細砂
3. 5YR4/8 赤褐色 シルト質細砂
4. 5YR4/3 にぶい赤褐色 シルト質細砂
5. 7.5YR7/2 明褐灰色 シルト質細砂

SH 12 カマド内埋土土層断面図

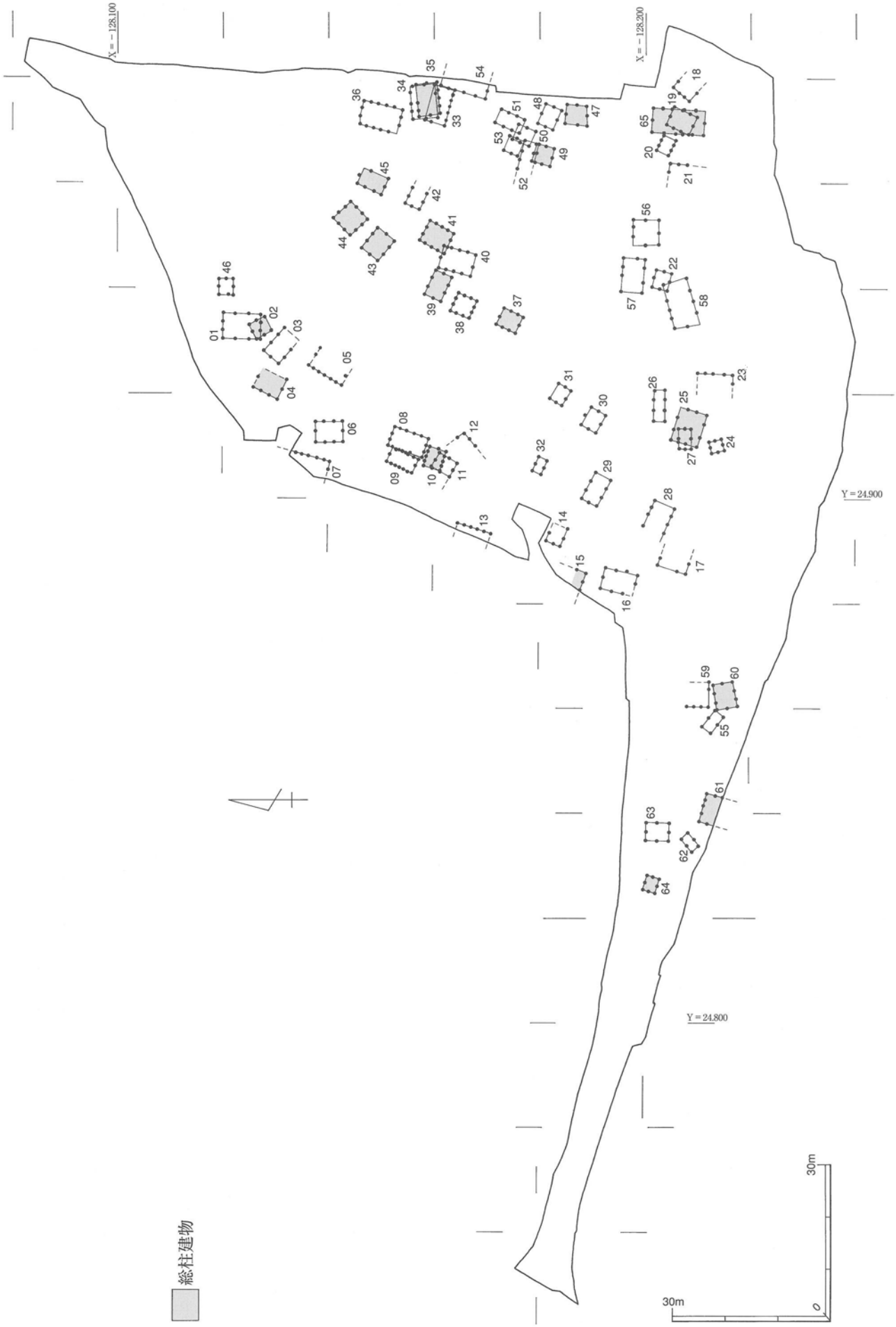
0 1m



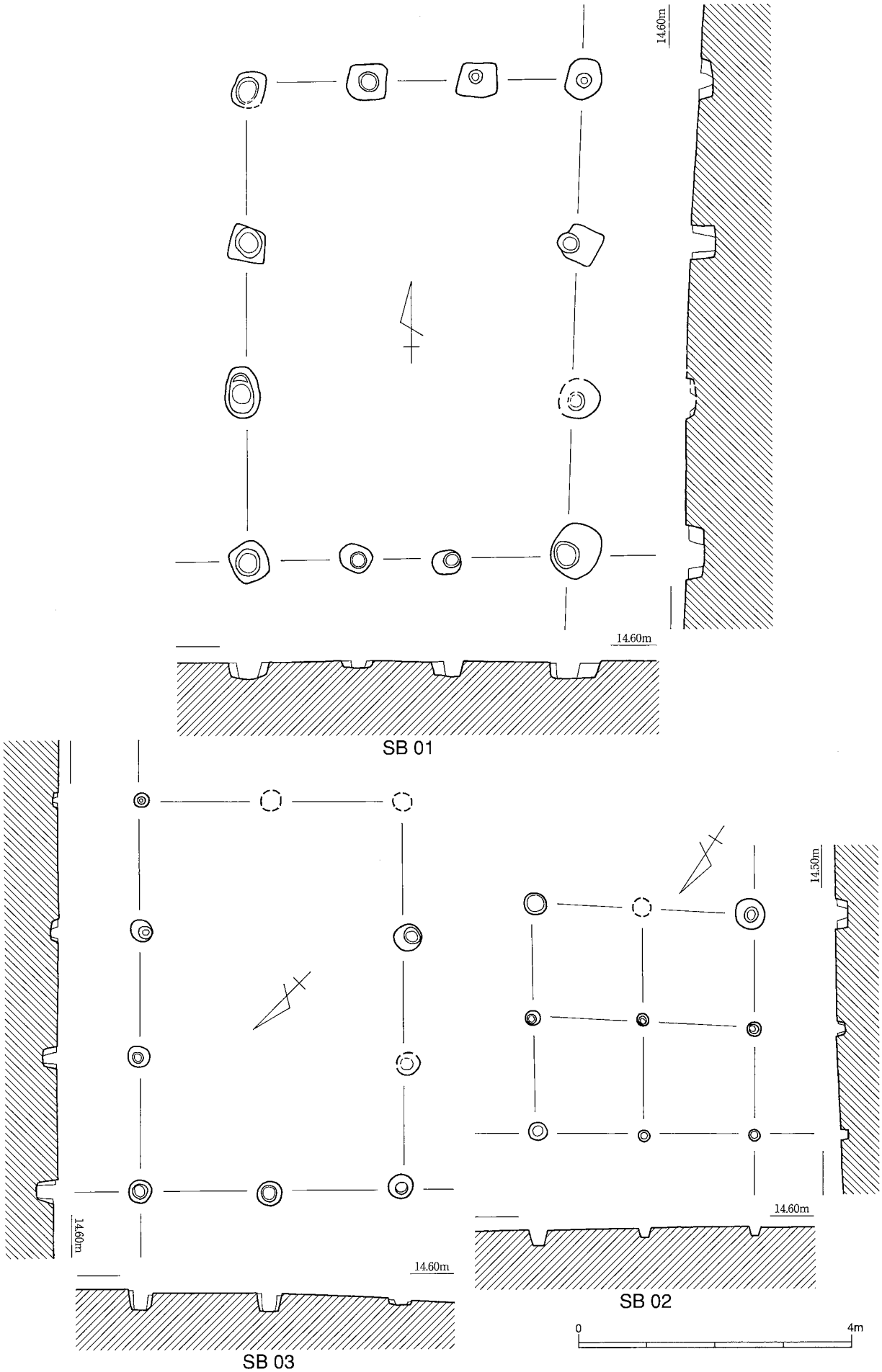
SH 13


15.10m
P2
P1
15.10m
SH 28
14.50m
SH 29
14.20m
SH 27
15.00m
SH 31
14.30m
SH 32
14.20m
SH 33
15.20m
SH 09
15.10m
SH 10
16.60m
SH 17
16.80m
SH 05
0
4m

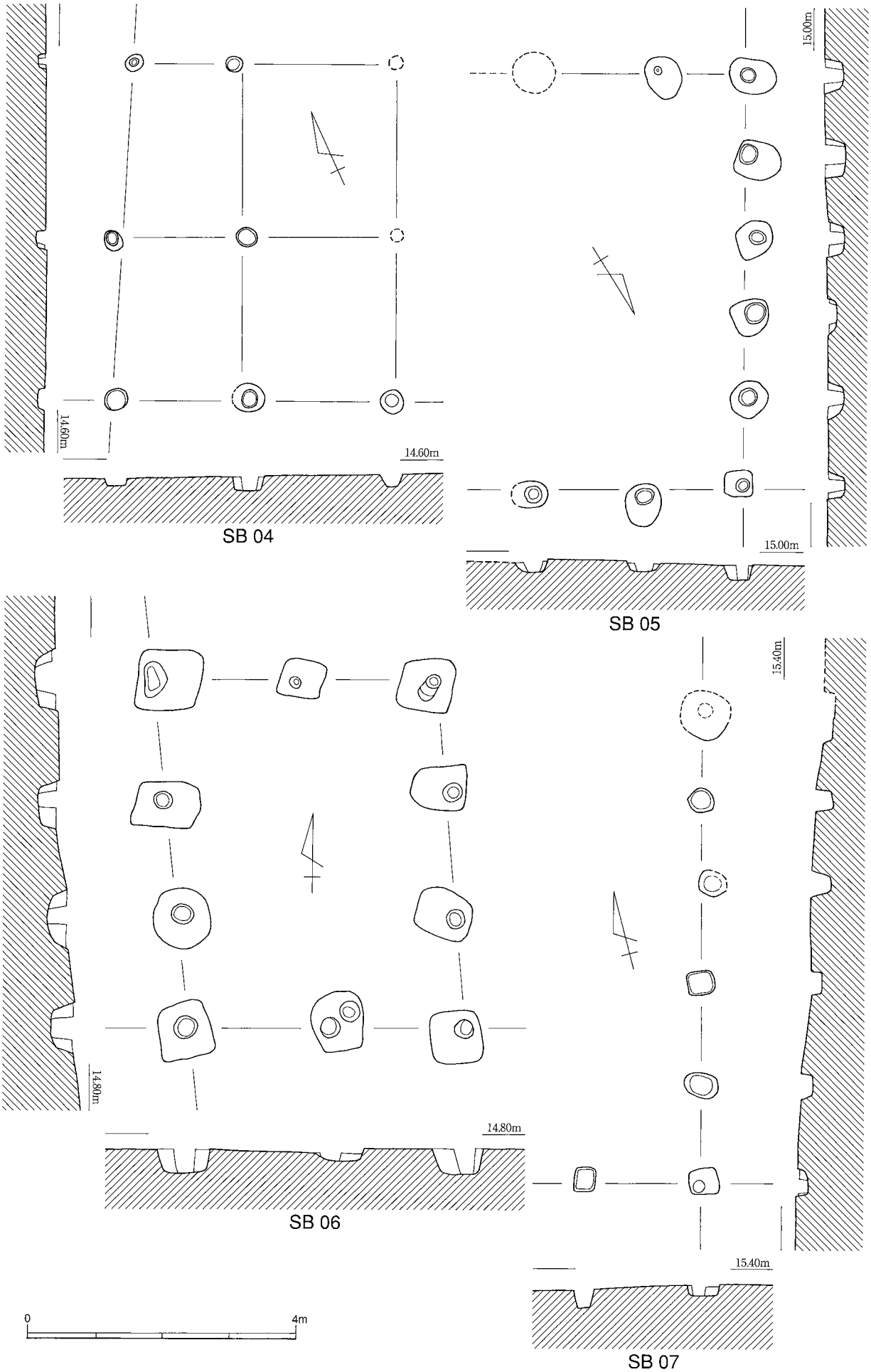
竪穴住居18



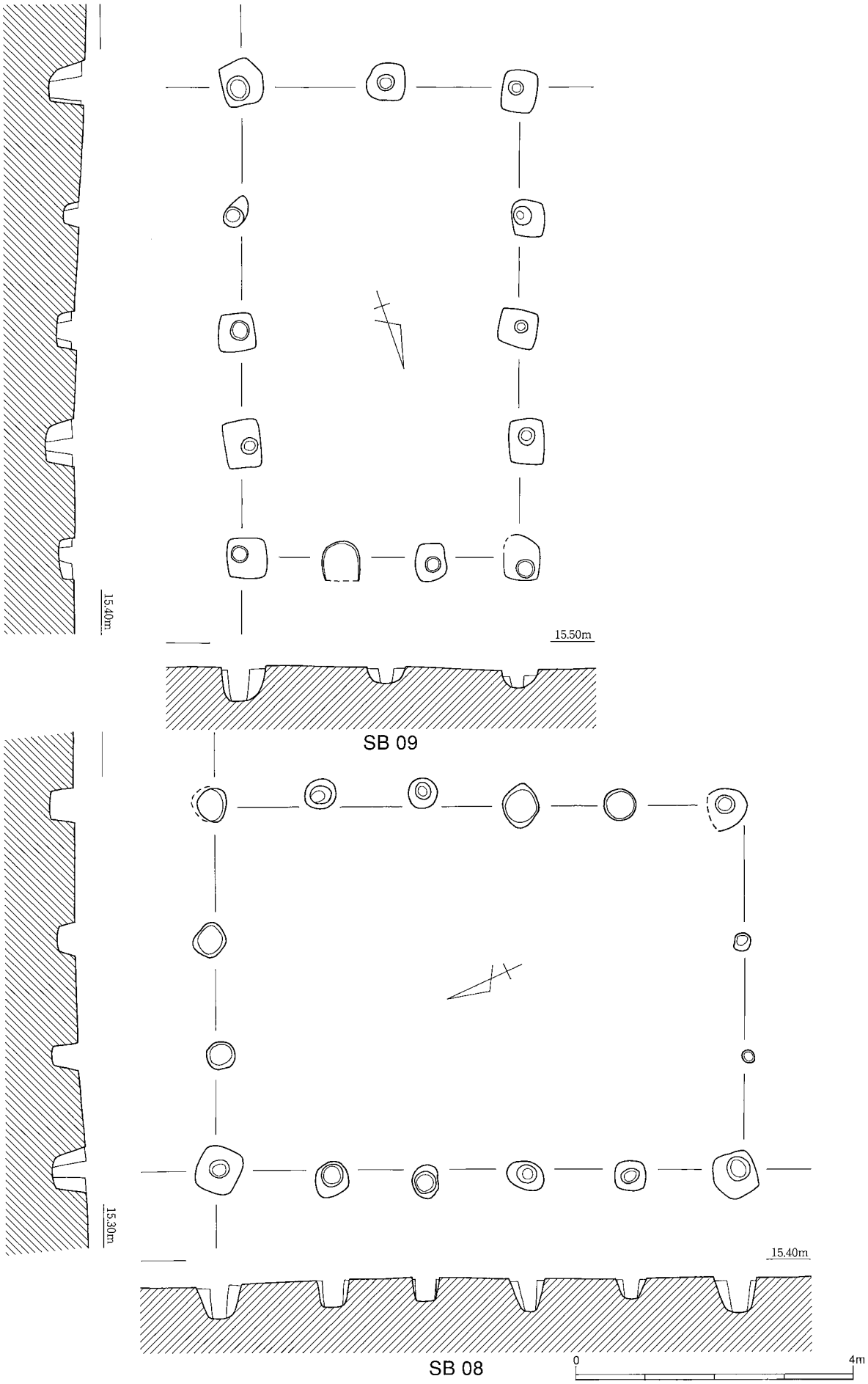
掘立柱建物配置図



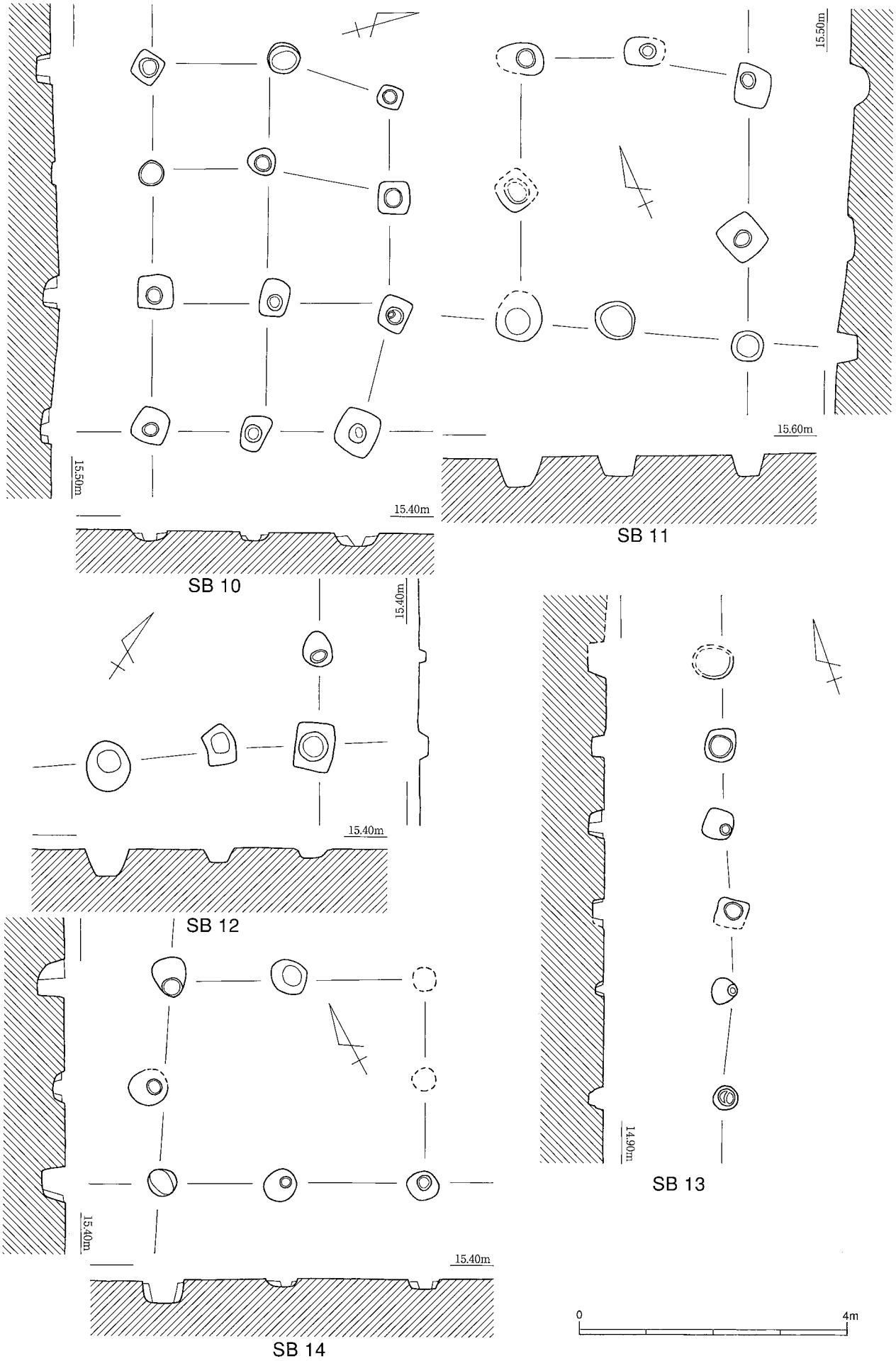
掘立柱建物 1


14.60m
14.60m
SB 04
15.00m
15.00m
SB 05
14.80m
14.80m
SB 06
15.40m
15.40m
SB 07
0
4m

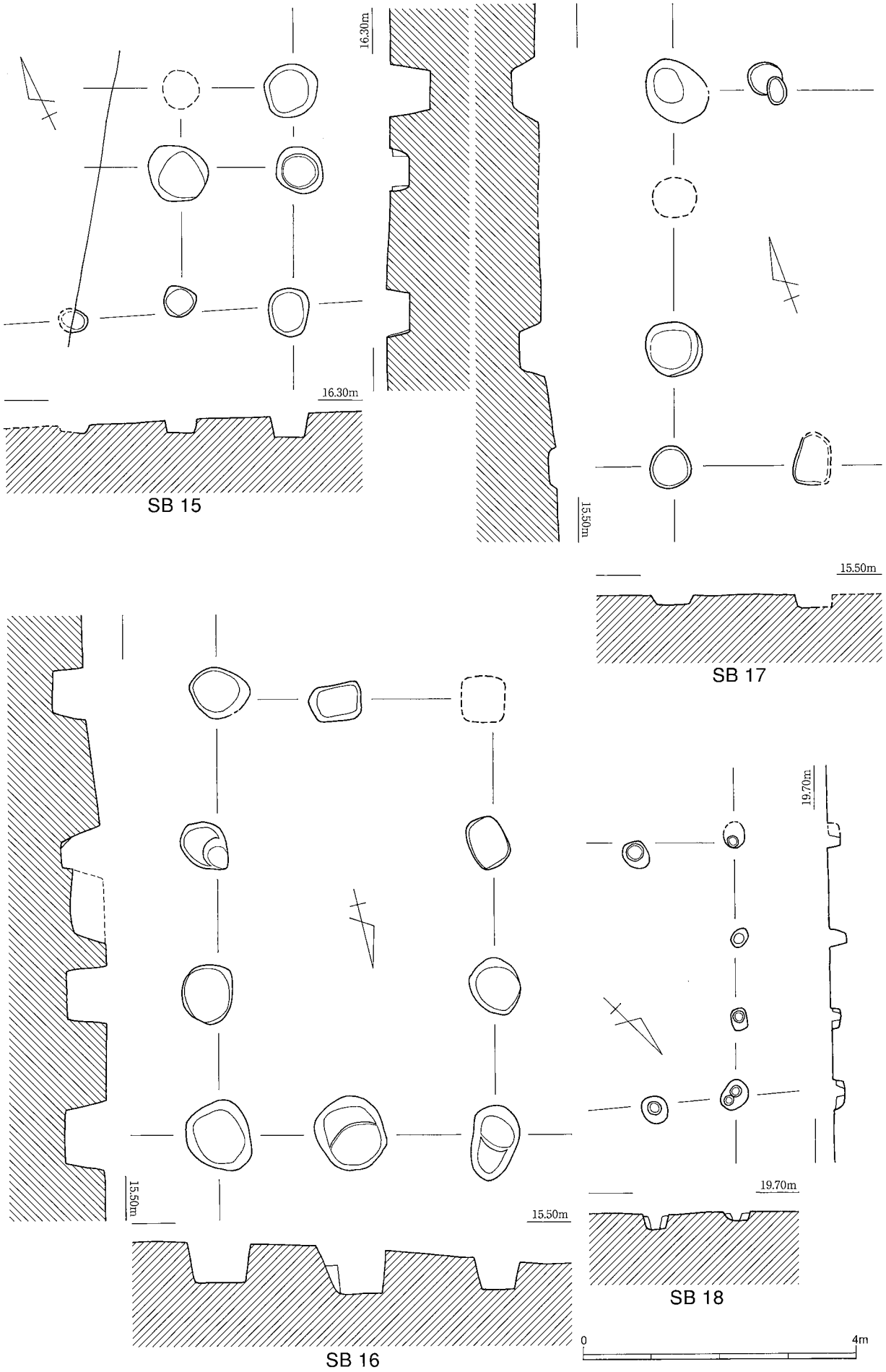
掘立柱建物2



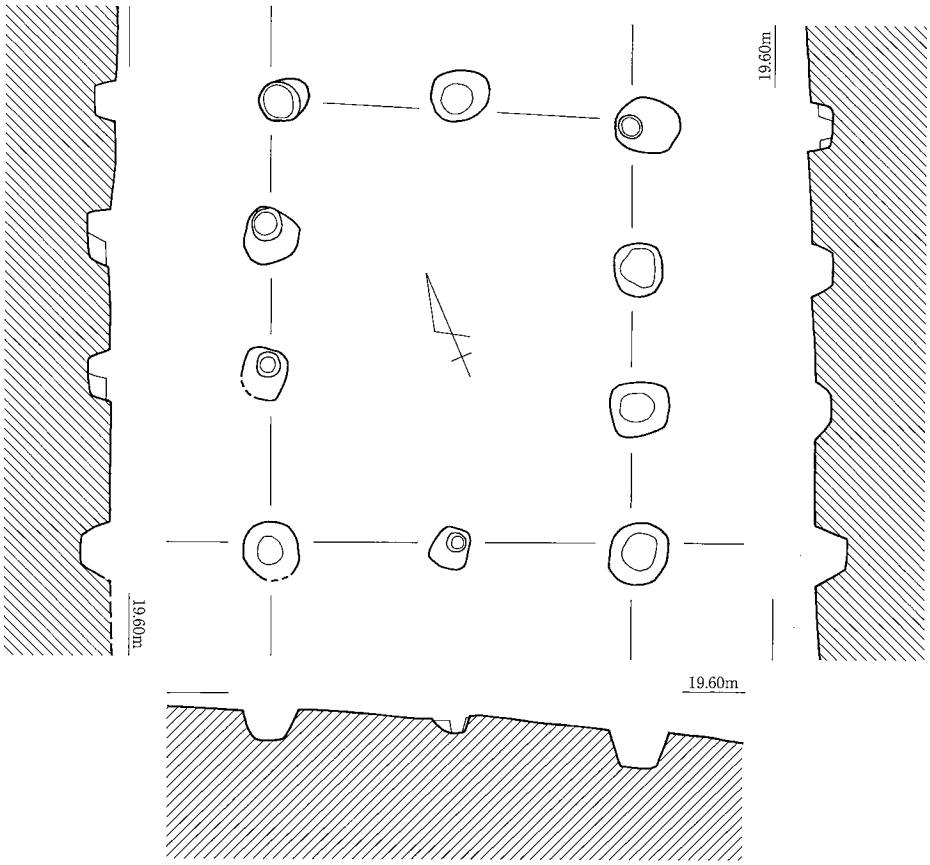
掘立柱建物3


15.50m
15.40m
SB 10
15.50m
15.60m
SB 11
15.40m
15.40m
SB 12
14.90m
SB 13
15.40m
15.40m
SB 14
0
4m

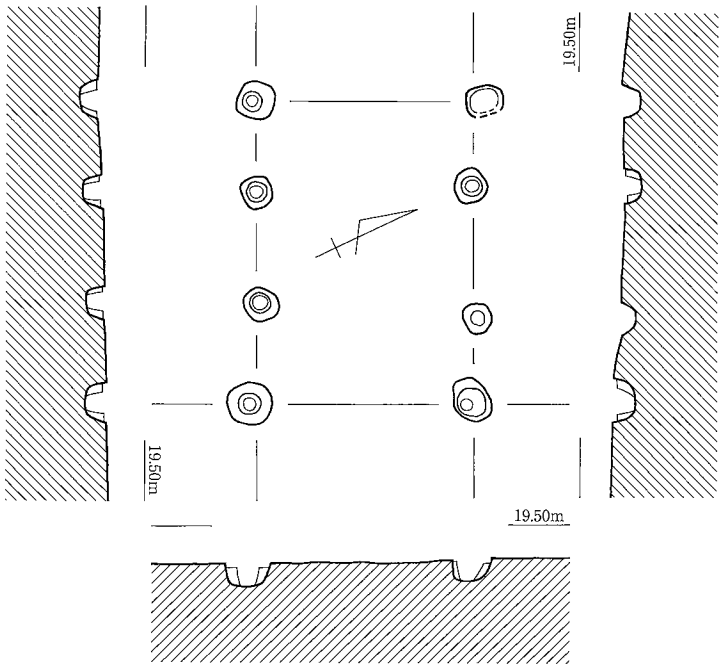
掘立柱建物4


16.30m
16.30m
SB 15
15.50m
15.50m
SB 17
19.70m
19.70m
SB 18
15.50m
15.50m
SB 16
0
4m

掘立柱建物5

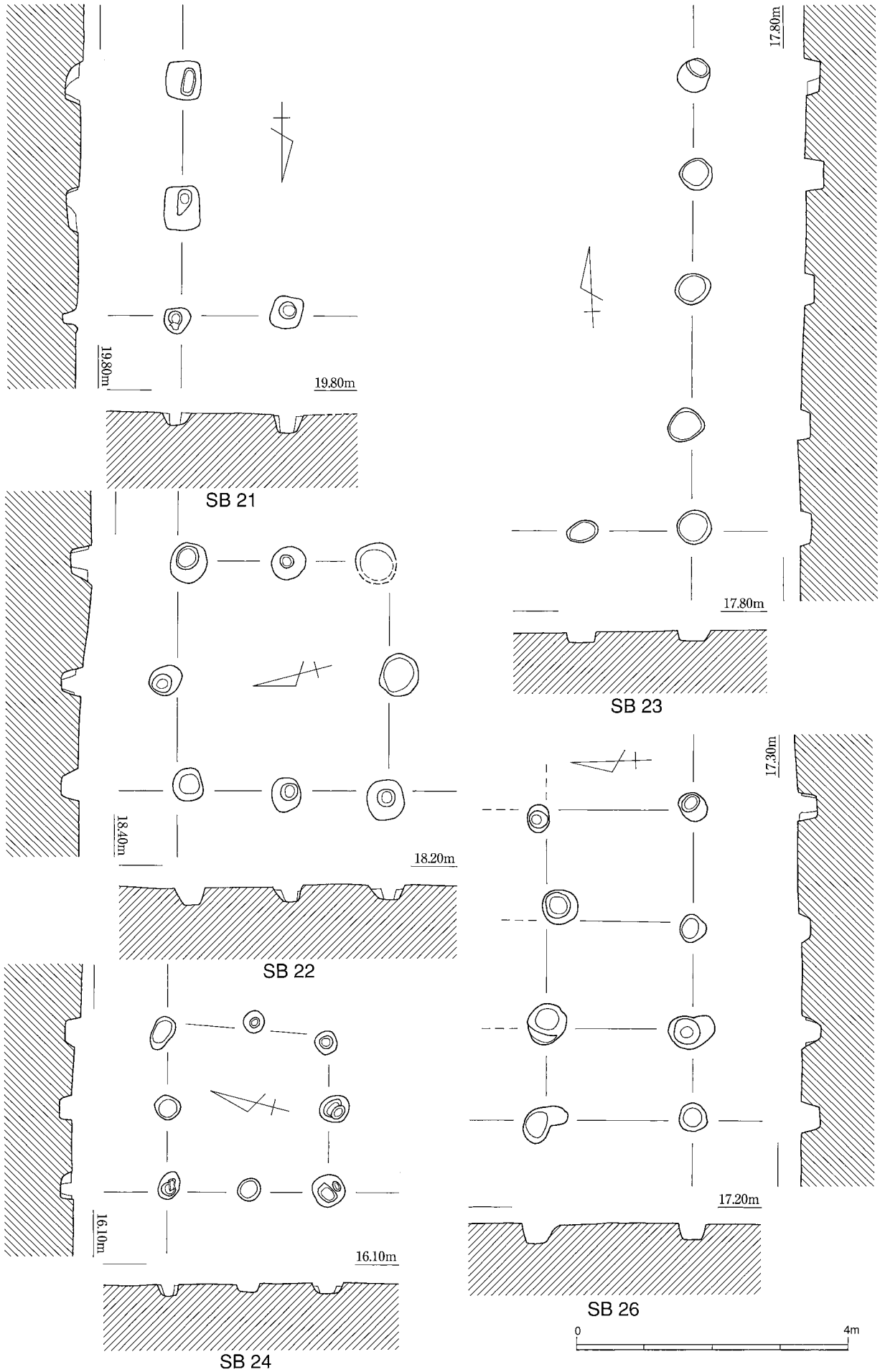


SB 19

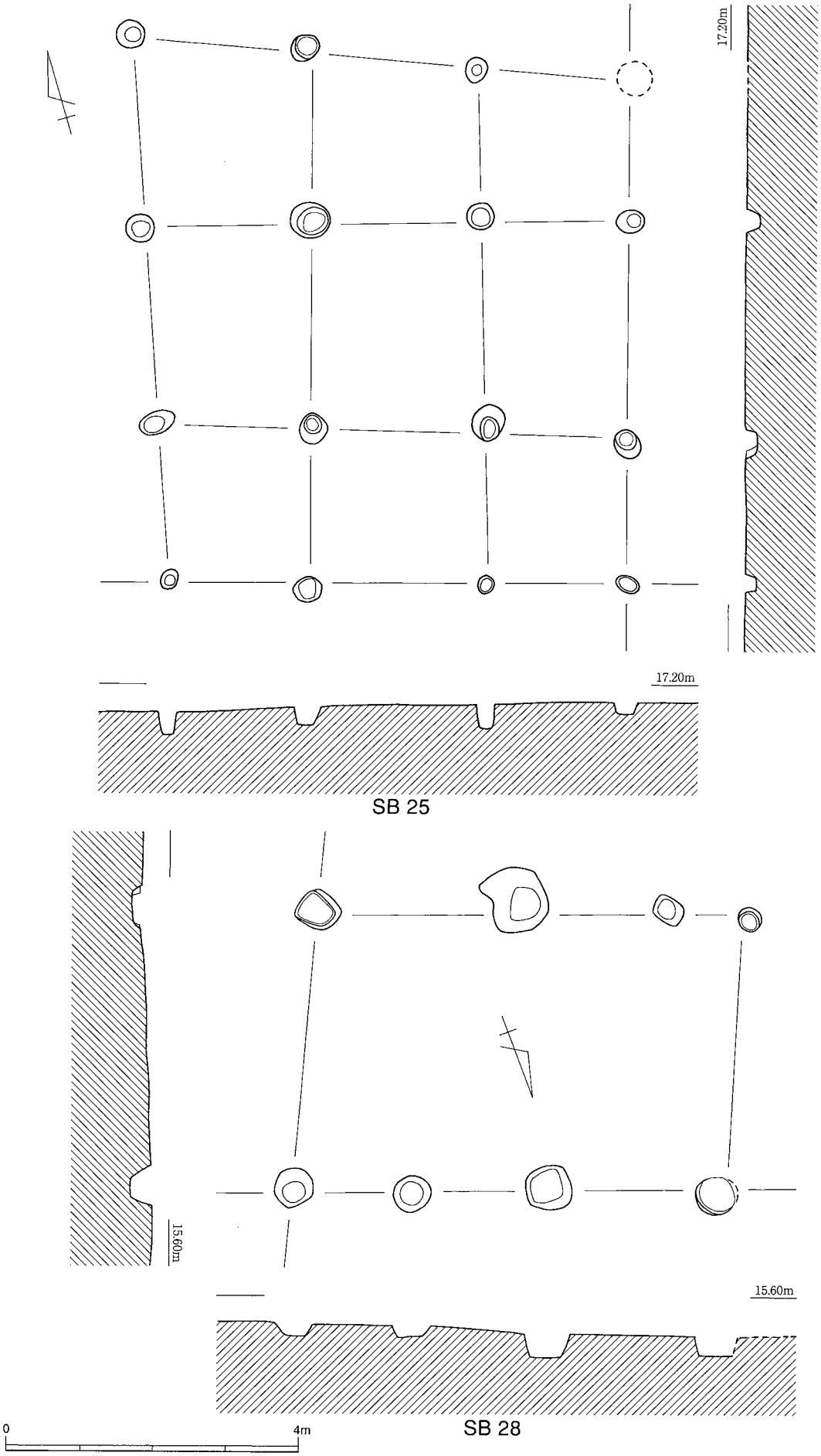


SB 20

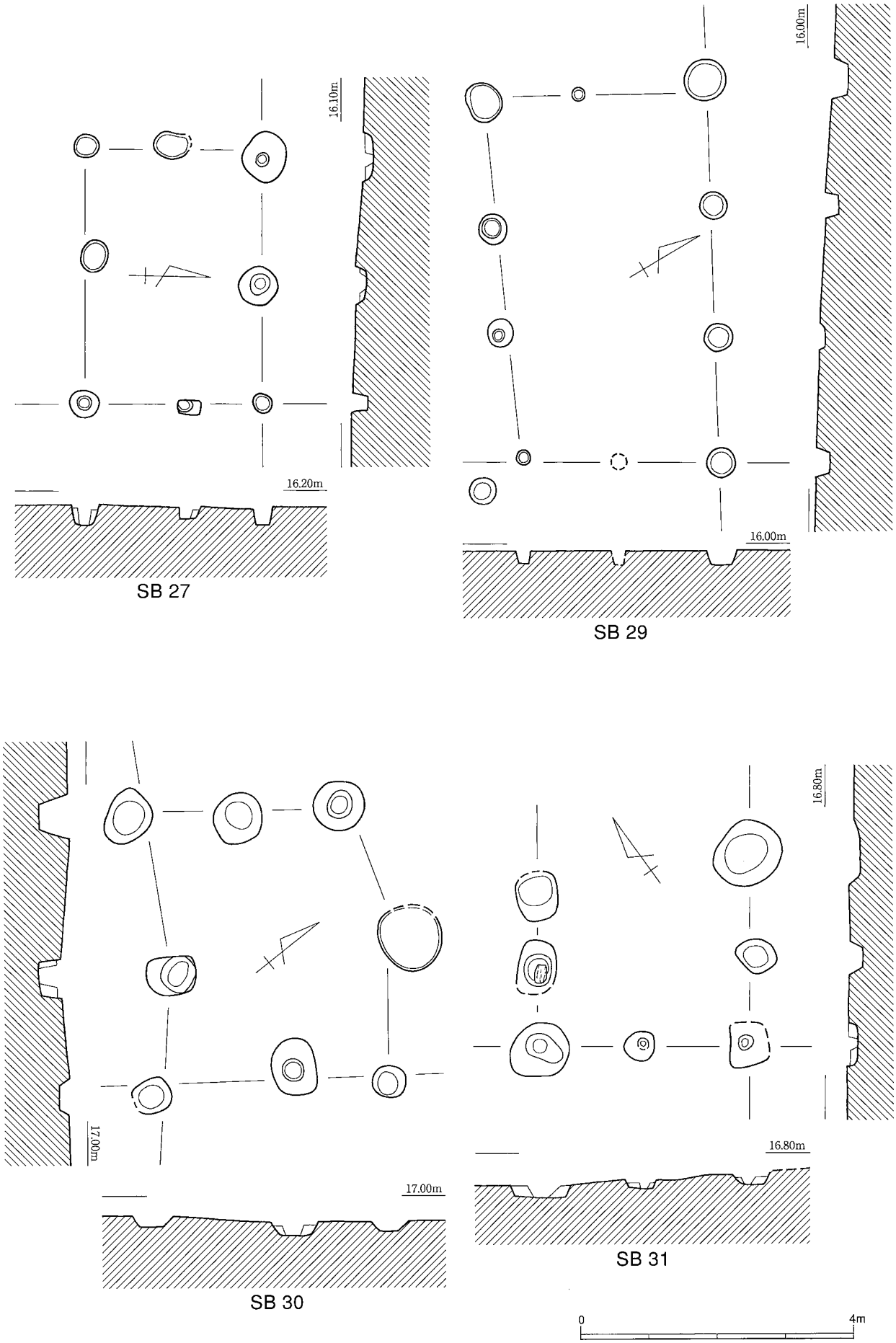
掘立柱建物6


19.80m
19.80m
SB 21
17.80m
17.80m
SB 23
18.40m
18.20m
SB 22
17.30m
17.20m
SB 26
16.10m
16.10m
SB 24
0
4m

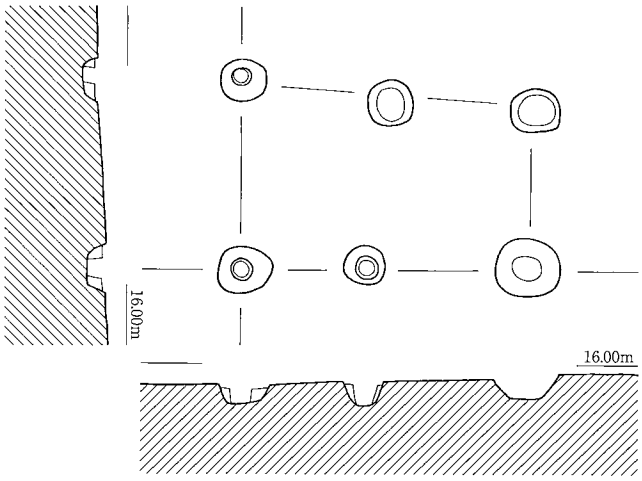
掘立柱建物７



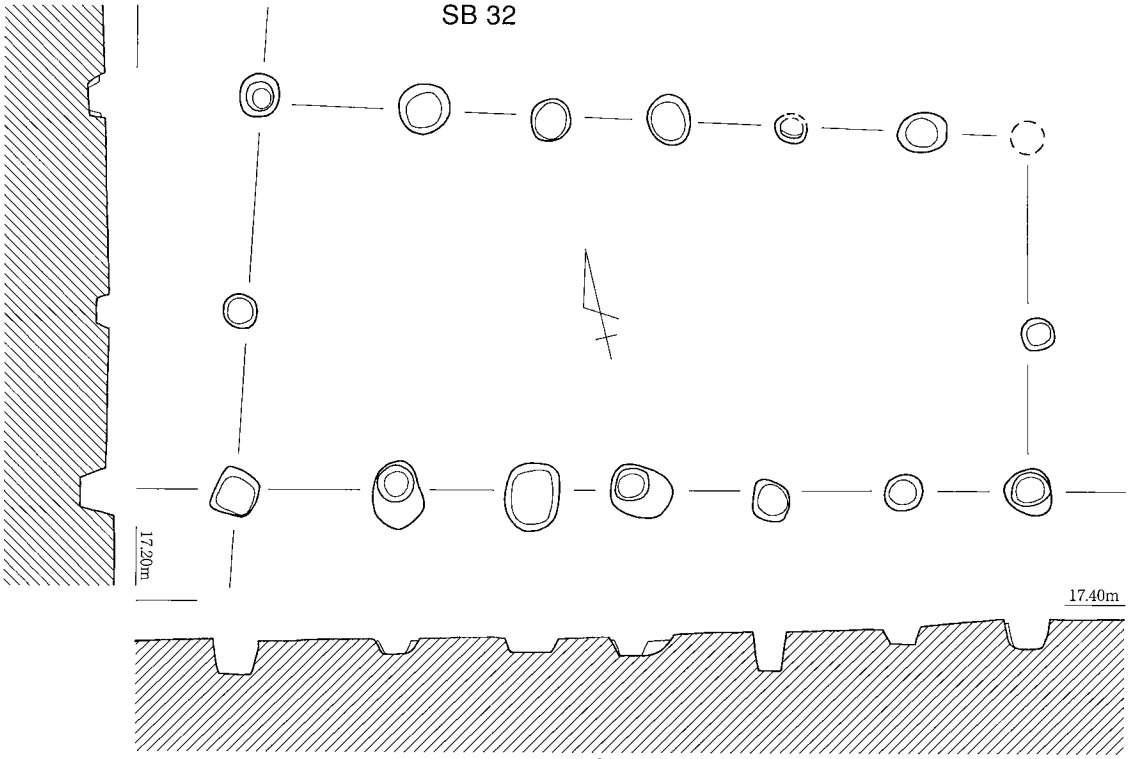
掘立柱建物8


16.10m
16.20m
SB 27
16.00m
16.00m
SB 29
17.00m
17.00m
SB 30
16.80m
16.80m
SB 31
0
4m

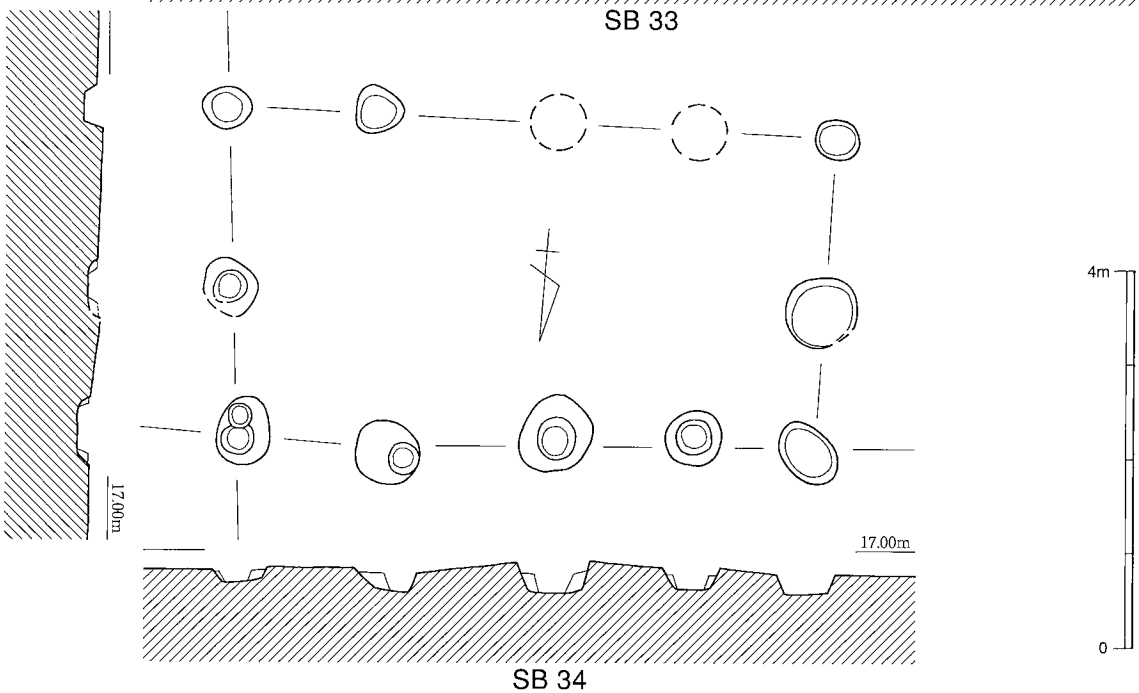
掘立柱建物9



SB 32

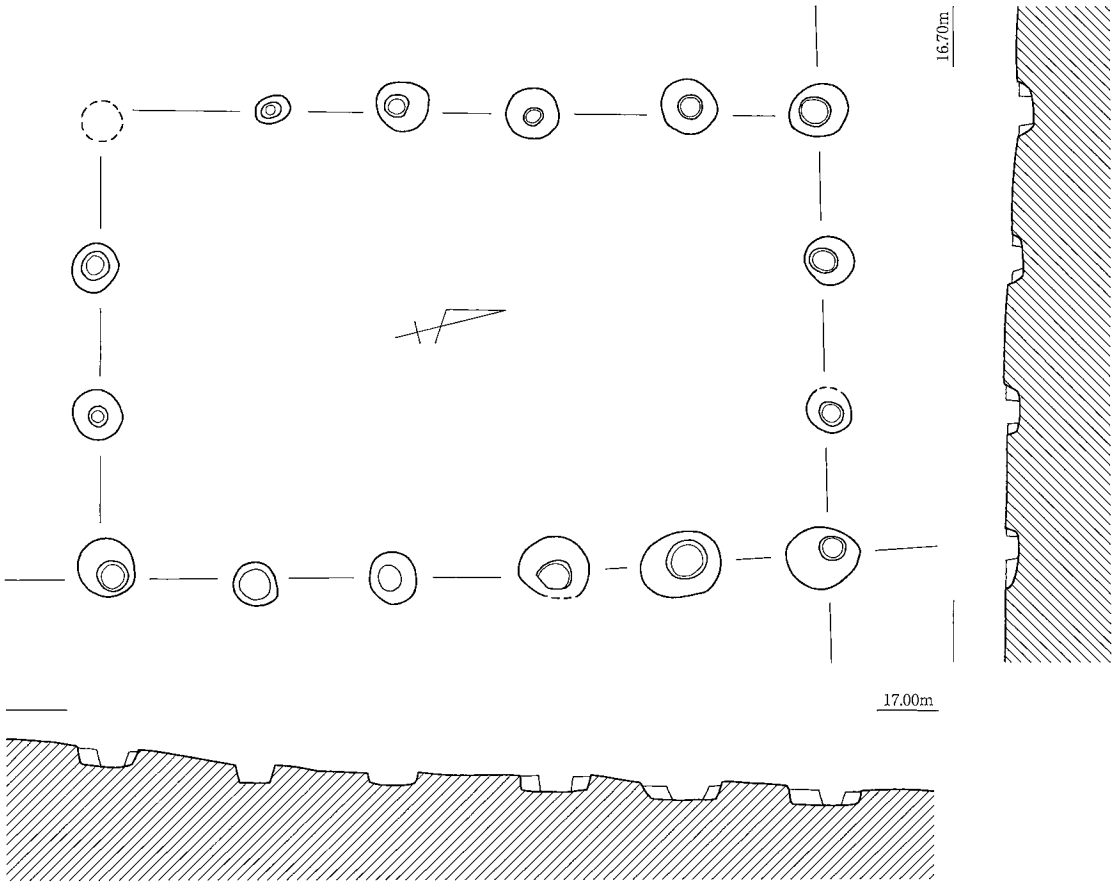


SB 33

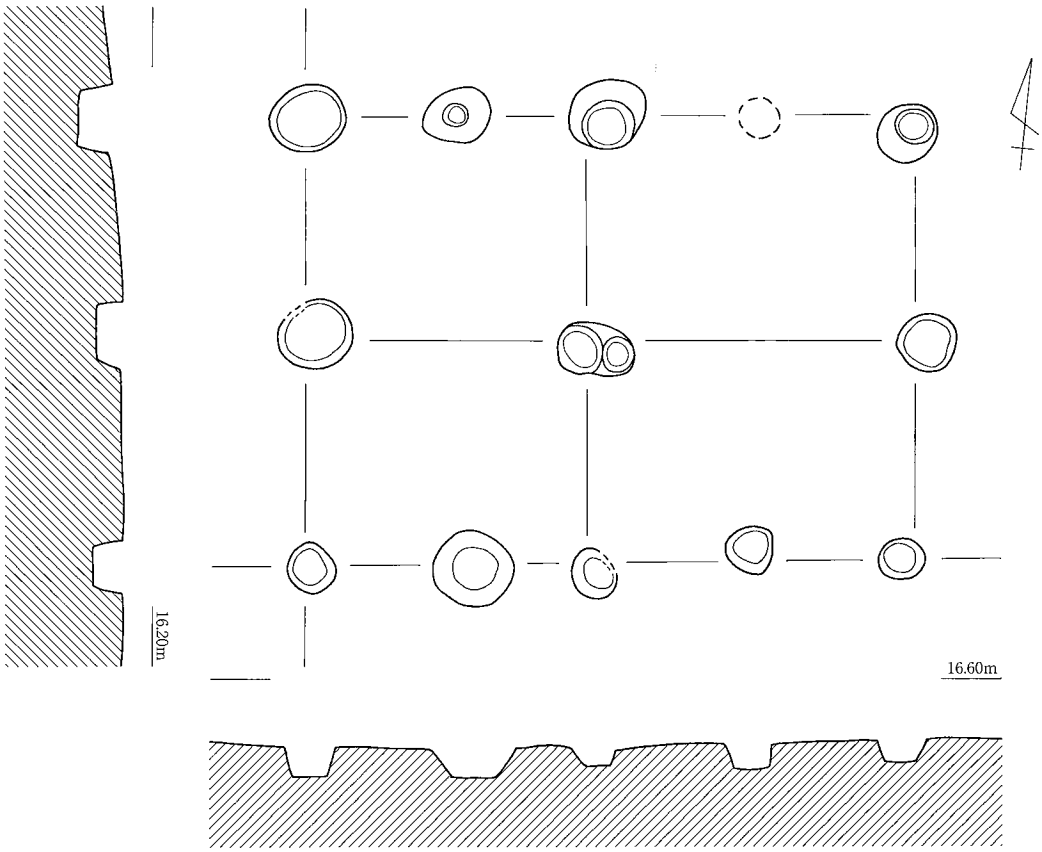


SB 34

掘立柱建物10



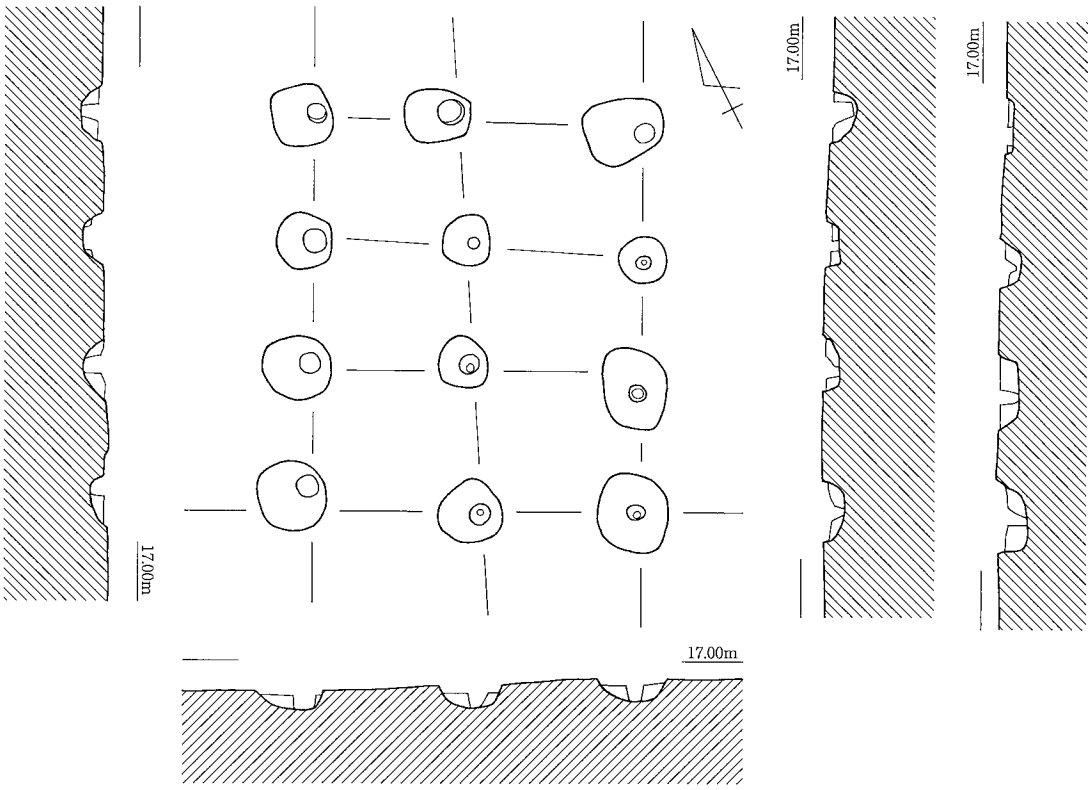
SB 36



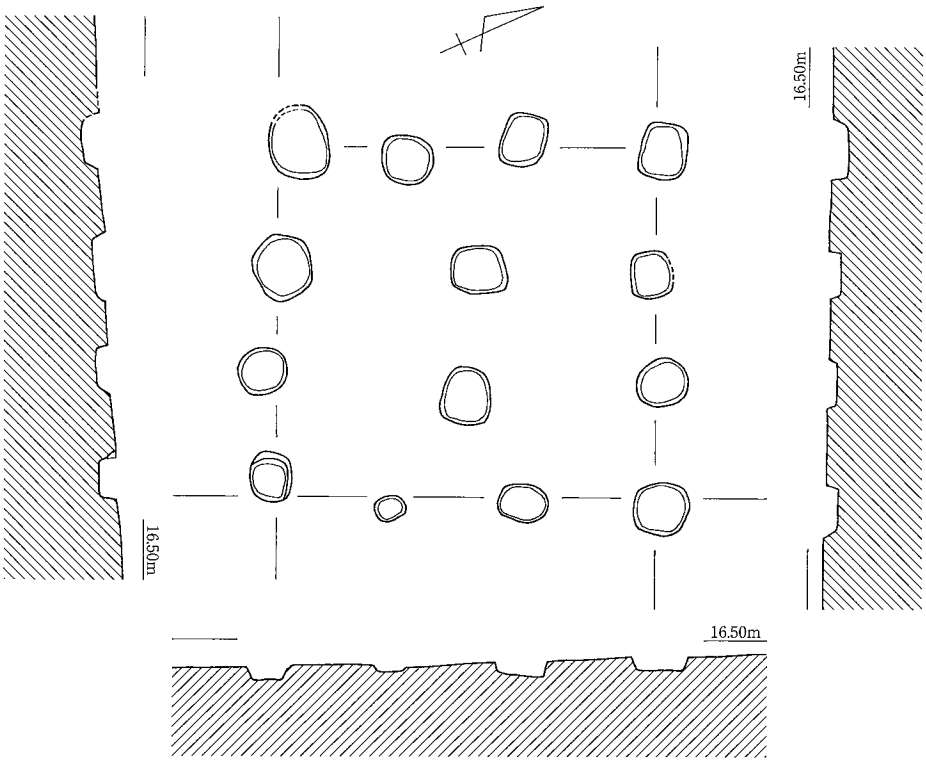
SB 35

0 4m

掘立柱建物11

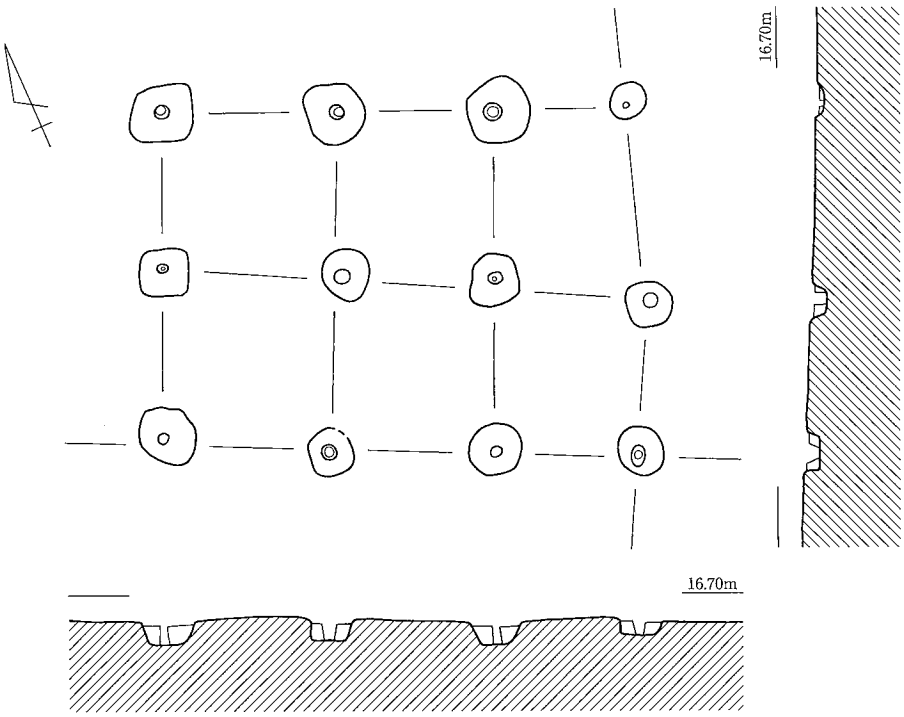


SB 37

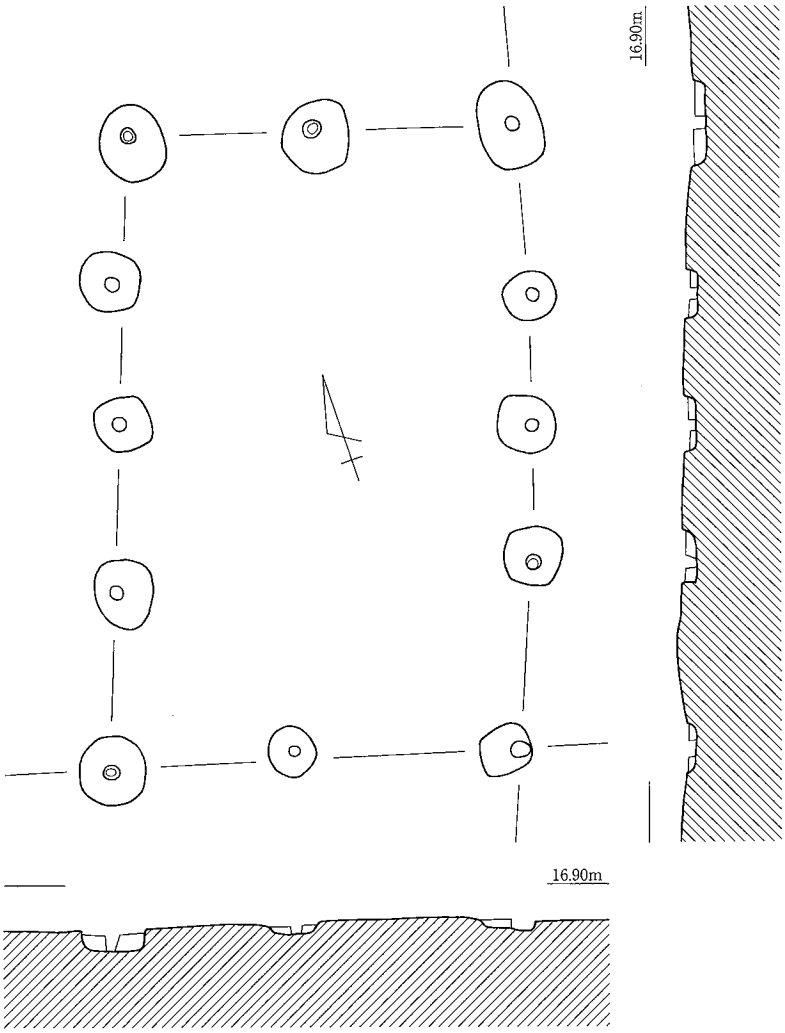


SB 38

掘立柱建物12

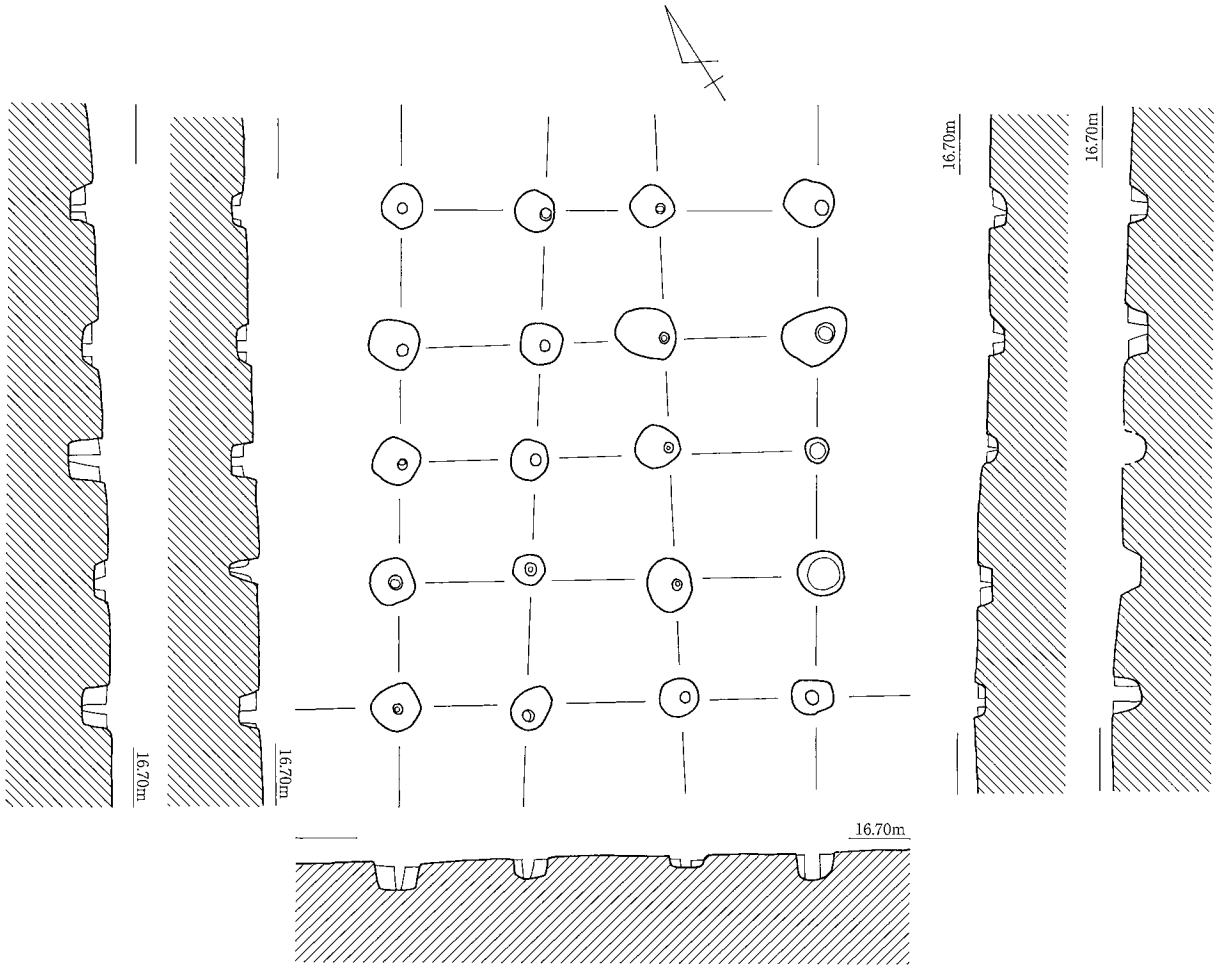


SB 39

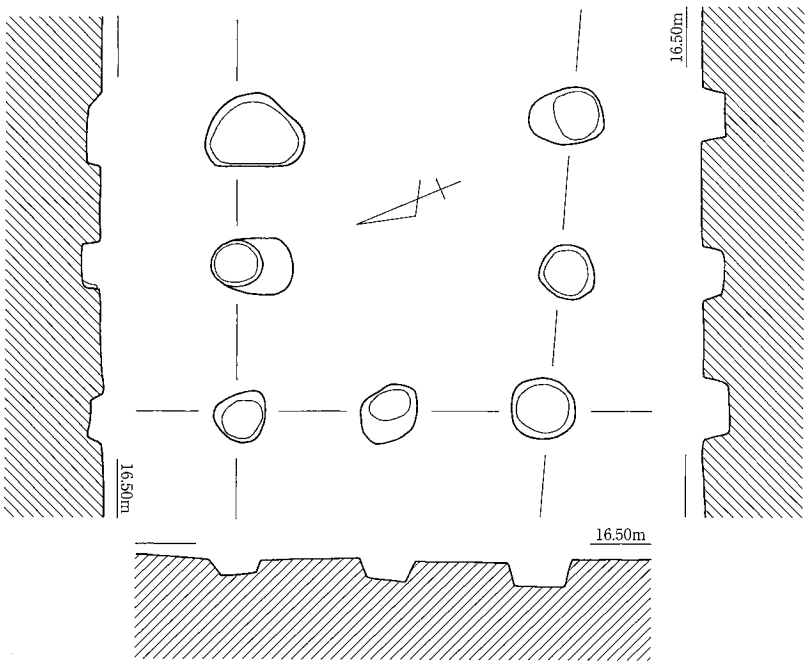


SB 40

掘立柱建物13

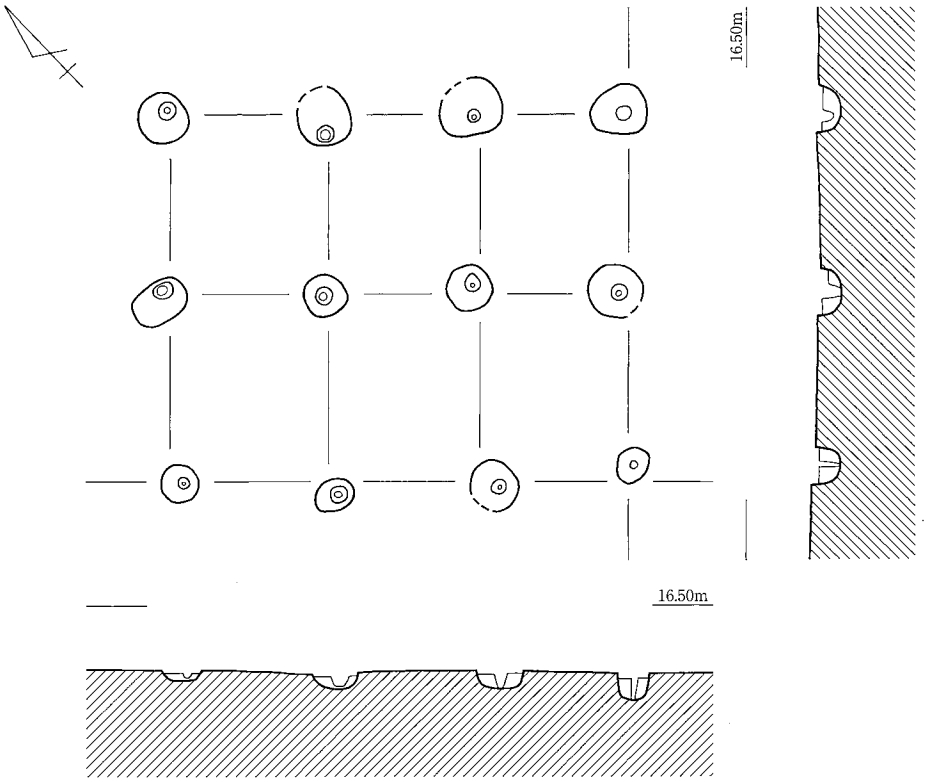


SB 41

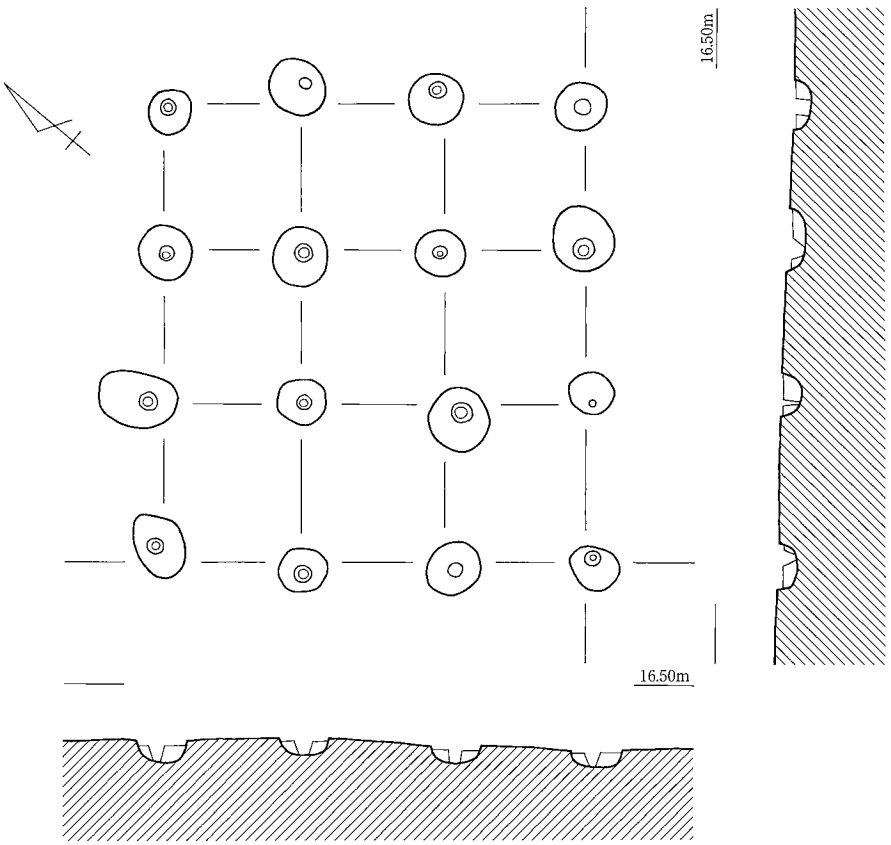


SB 42

掘立柱建物14

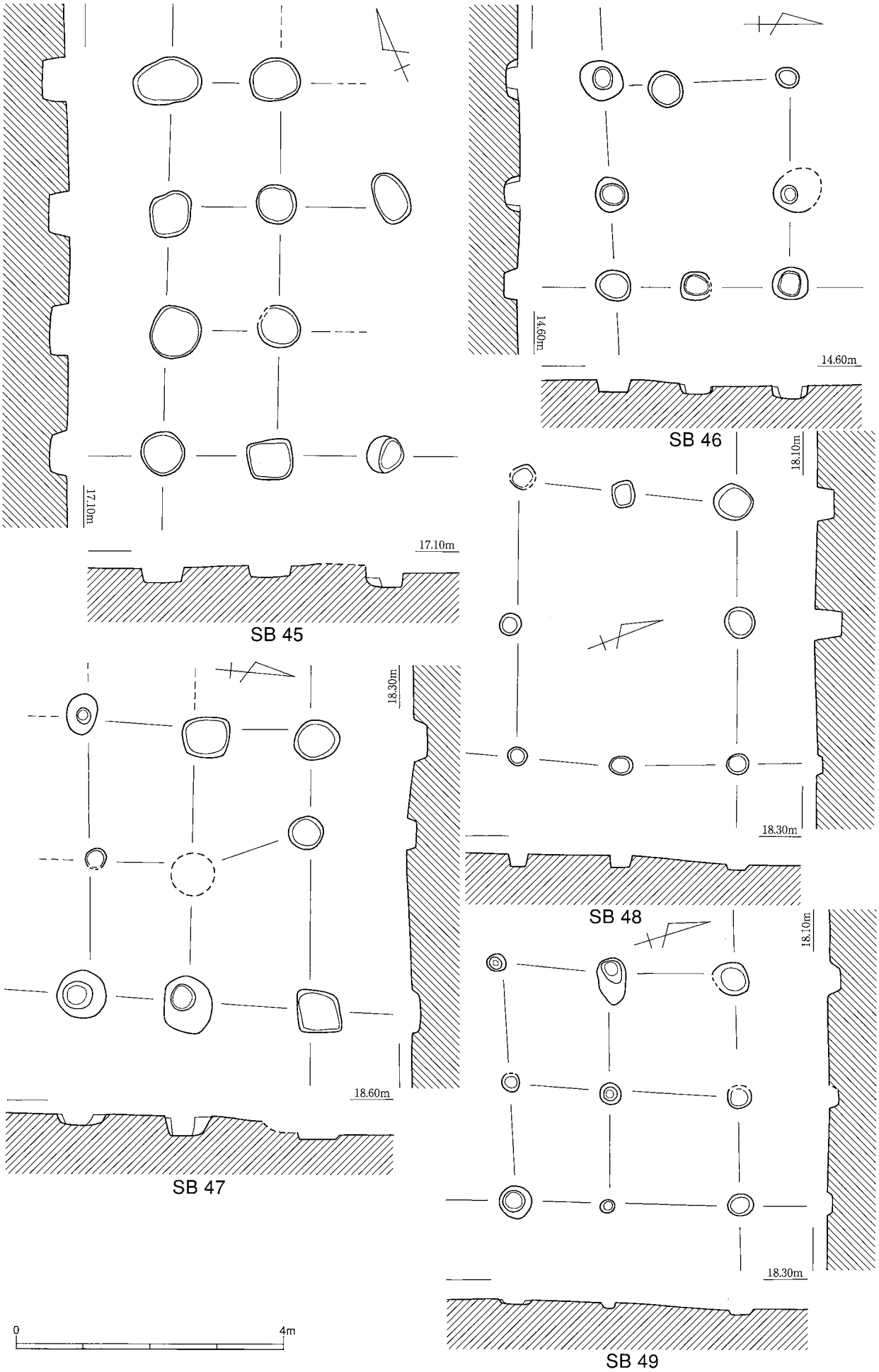


SB 43

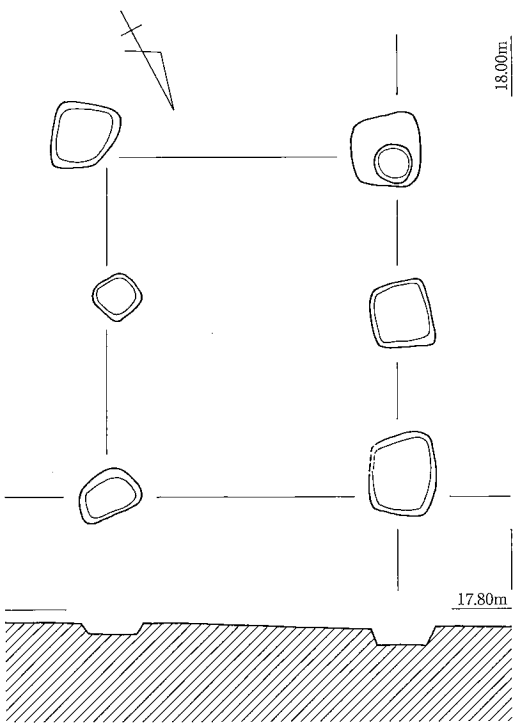


SB 44

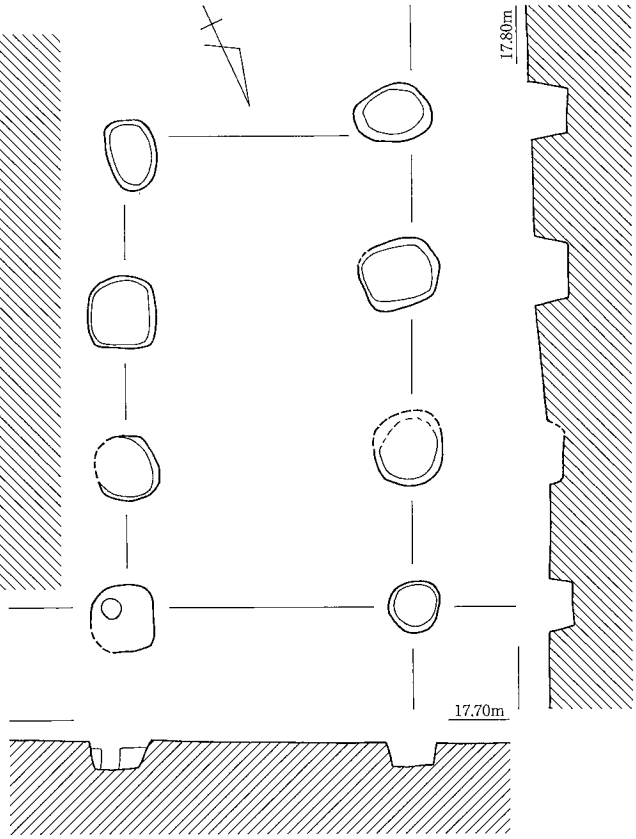
掘立柱建物15


17.10m
17.10m
SB 45
14.60m
14.60m
SB 46
18.10m
18.30m
SB 48
18.30m
18.60m
SB 47
18.10m
18.30m
SB 49
0
4m

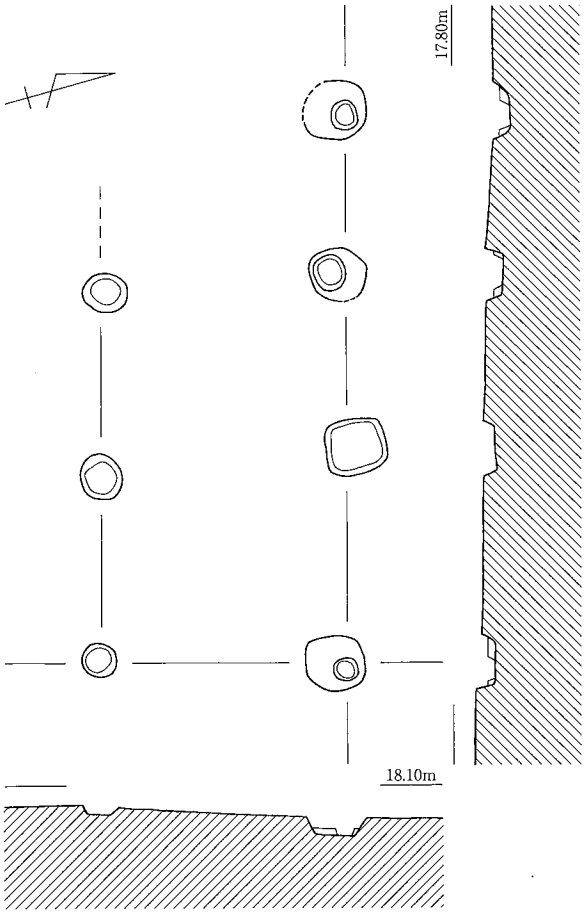
掘立柱建物16



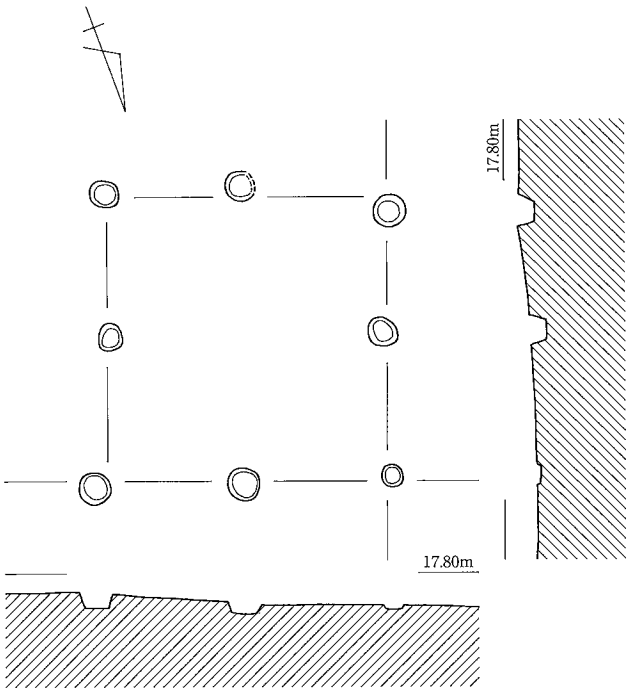
SB 50



SB 51

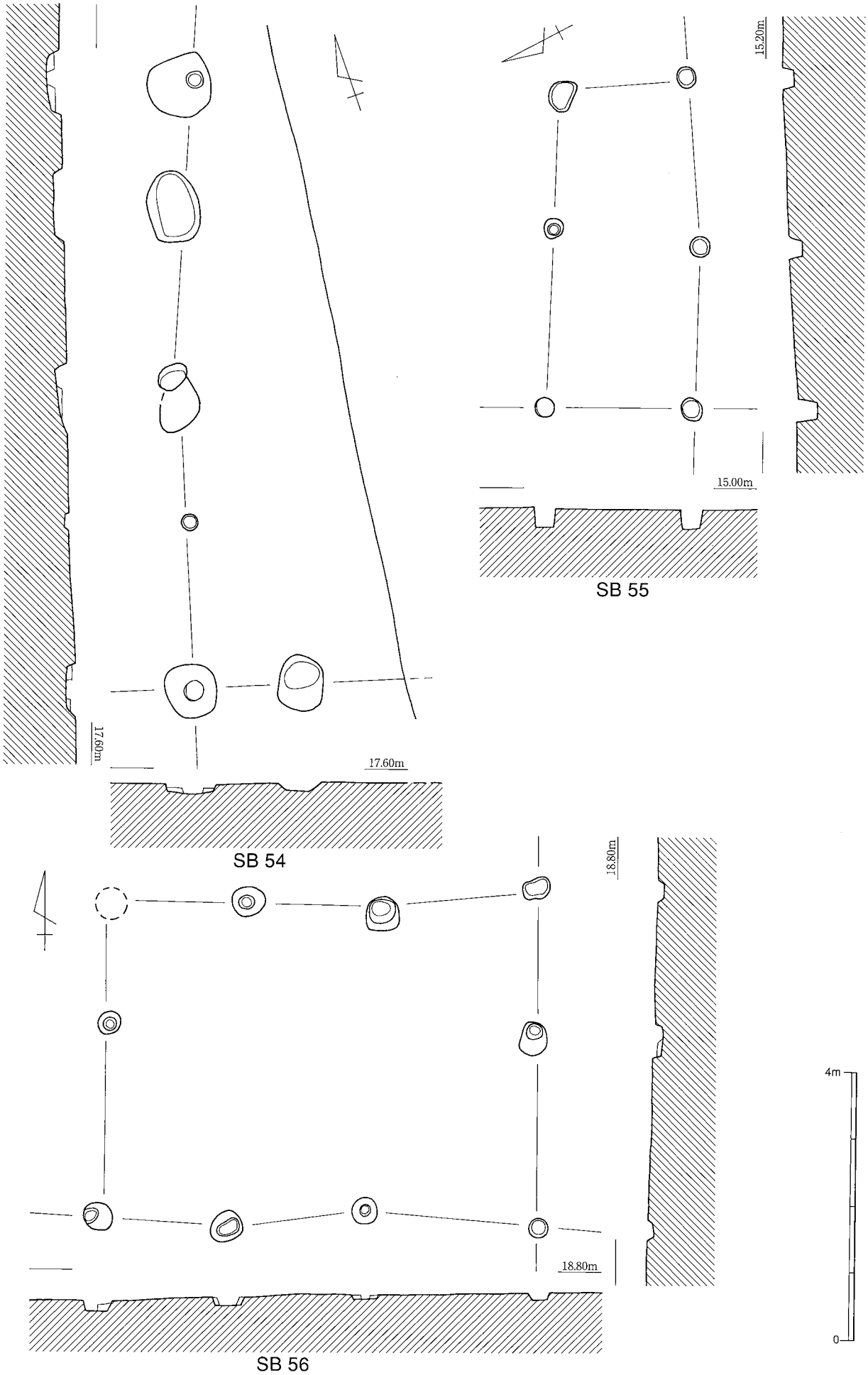


SB 52

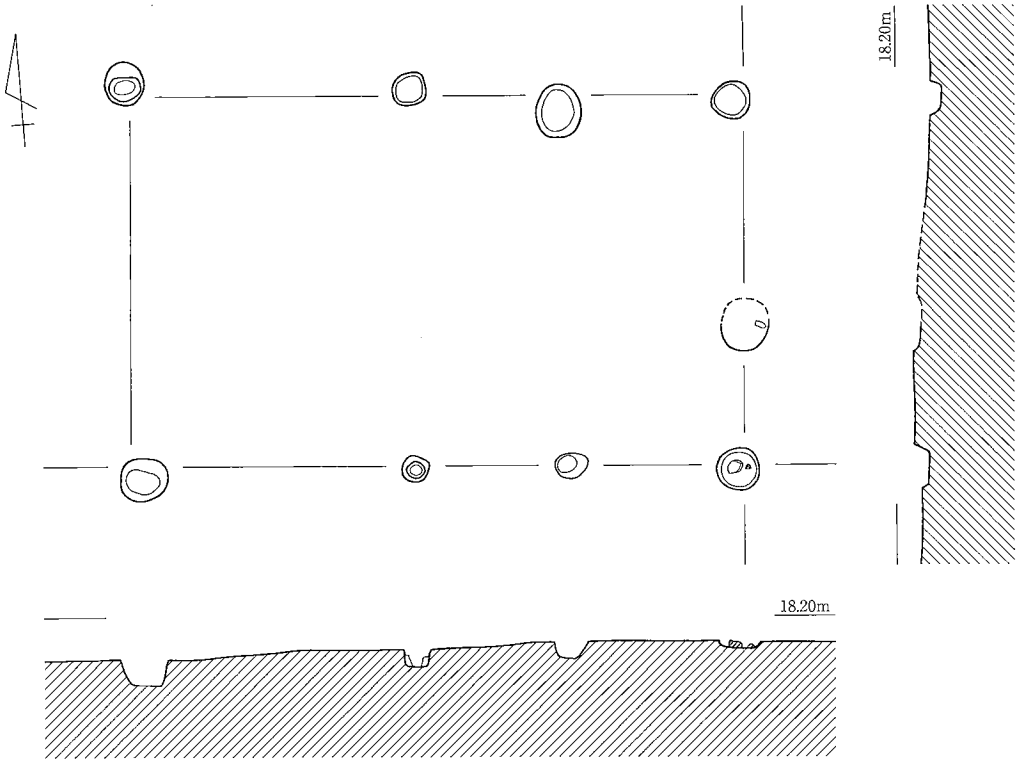


SB 53

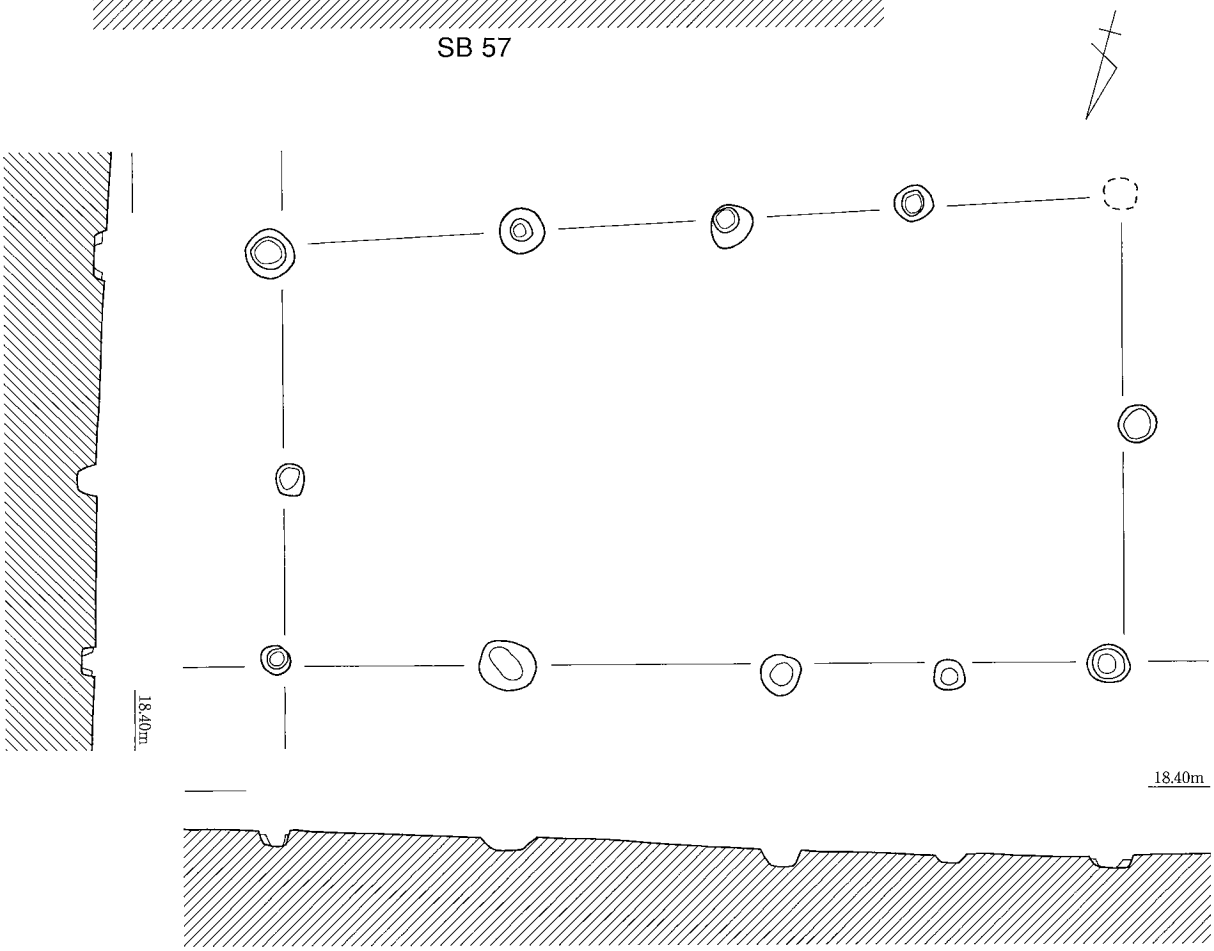
掘立柱建物17



掘立柱建物18

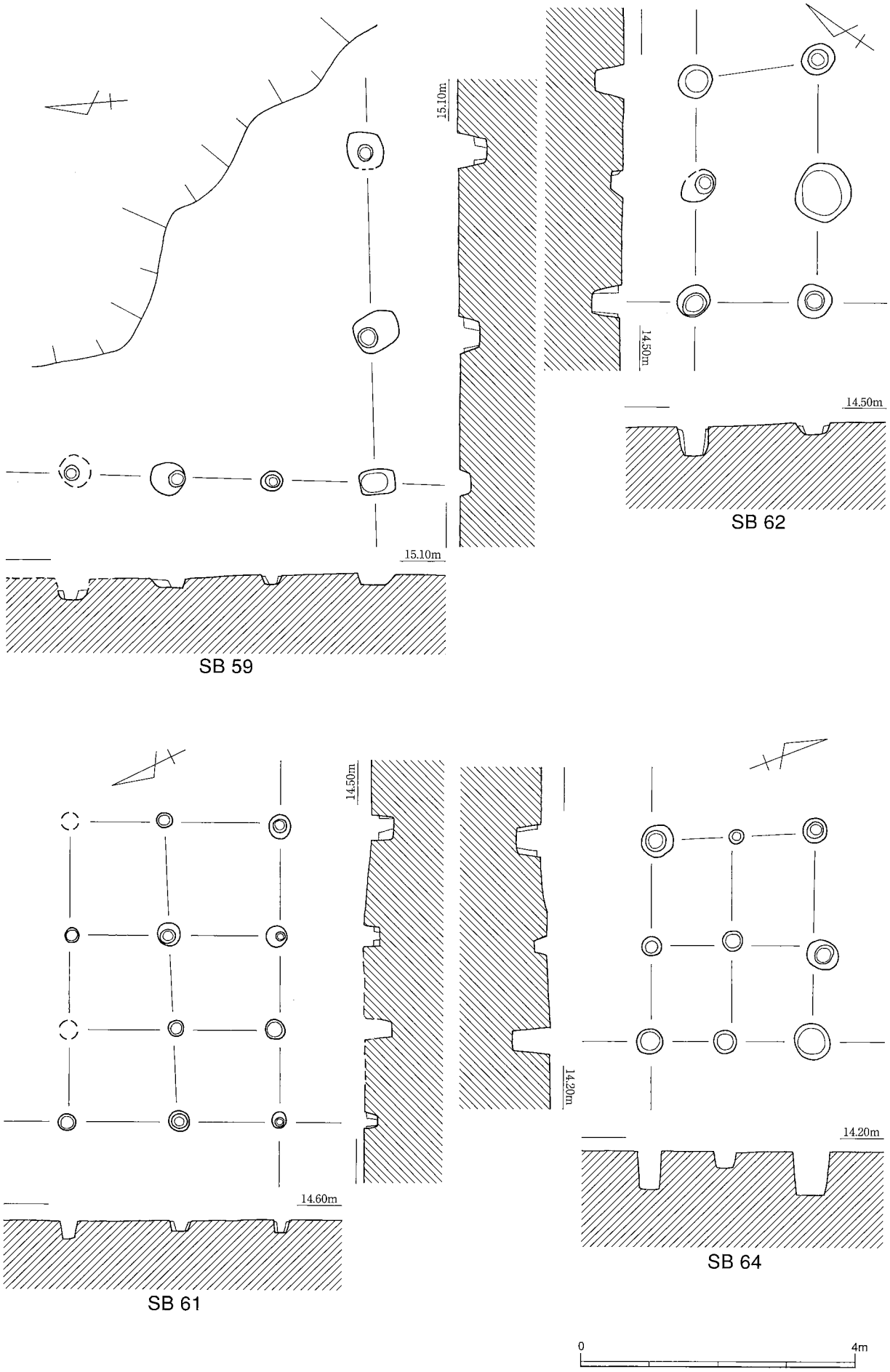


SB 57

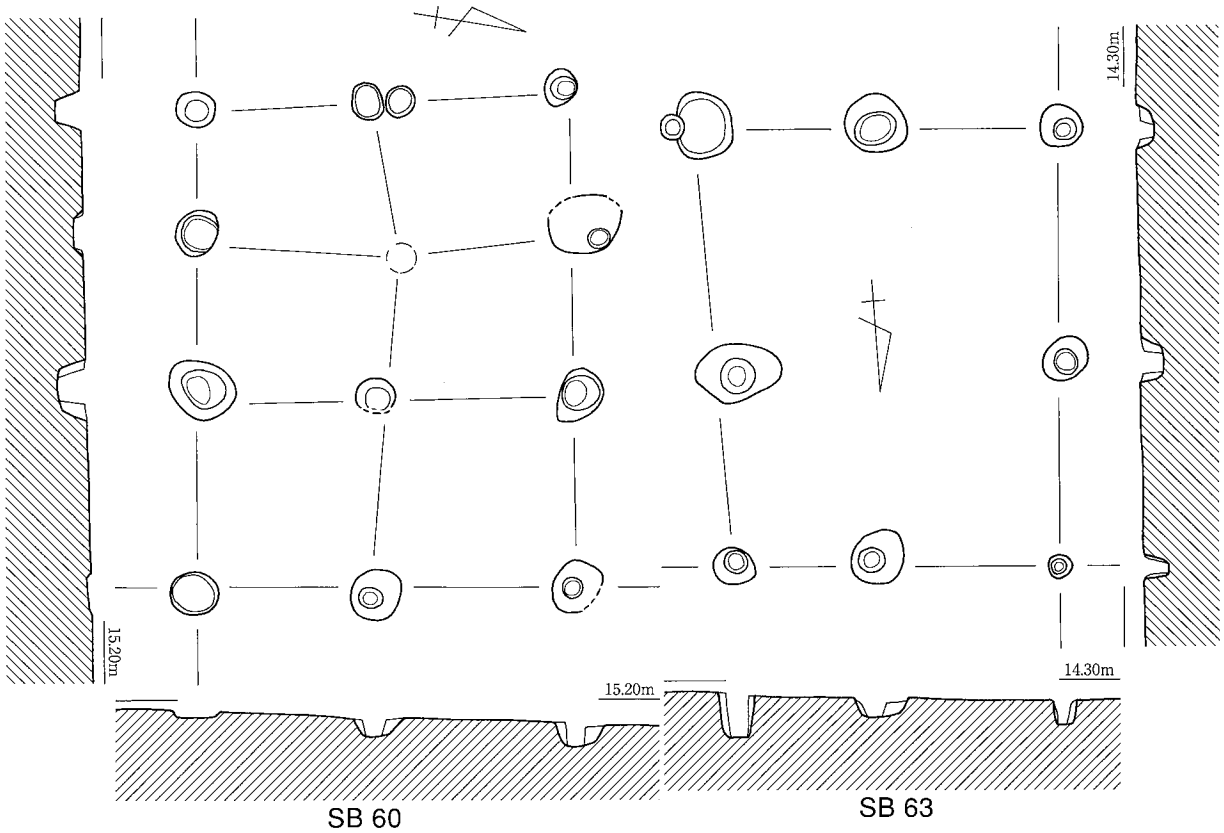


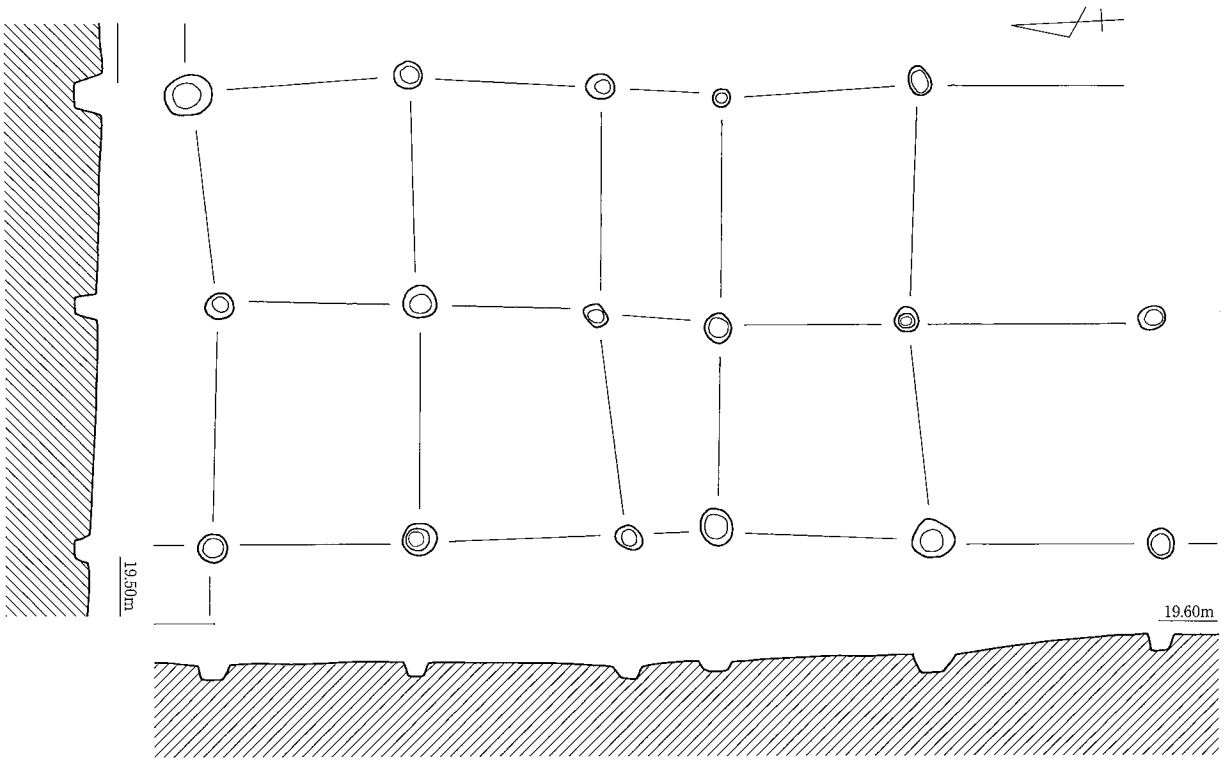
SB 58

掘立柱建物19


15.10m
14.50m
14.50m
SB 62
15.10m
SB 59
14.50m
14.20m
14.20m
14.60m
SB 61
SB 64
0
4m

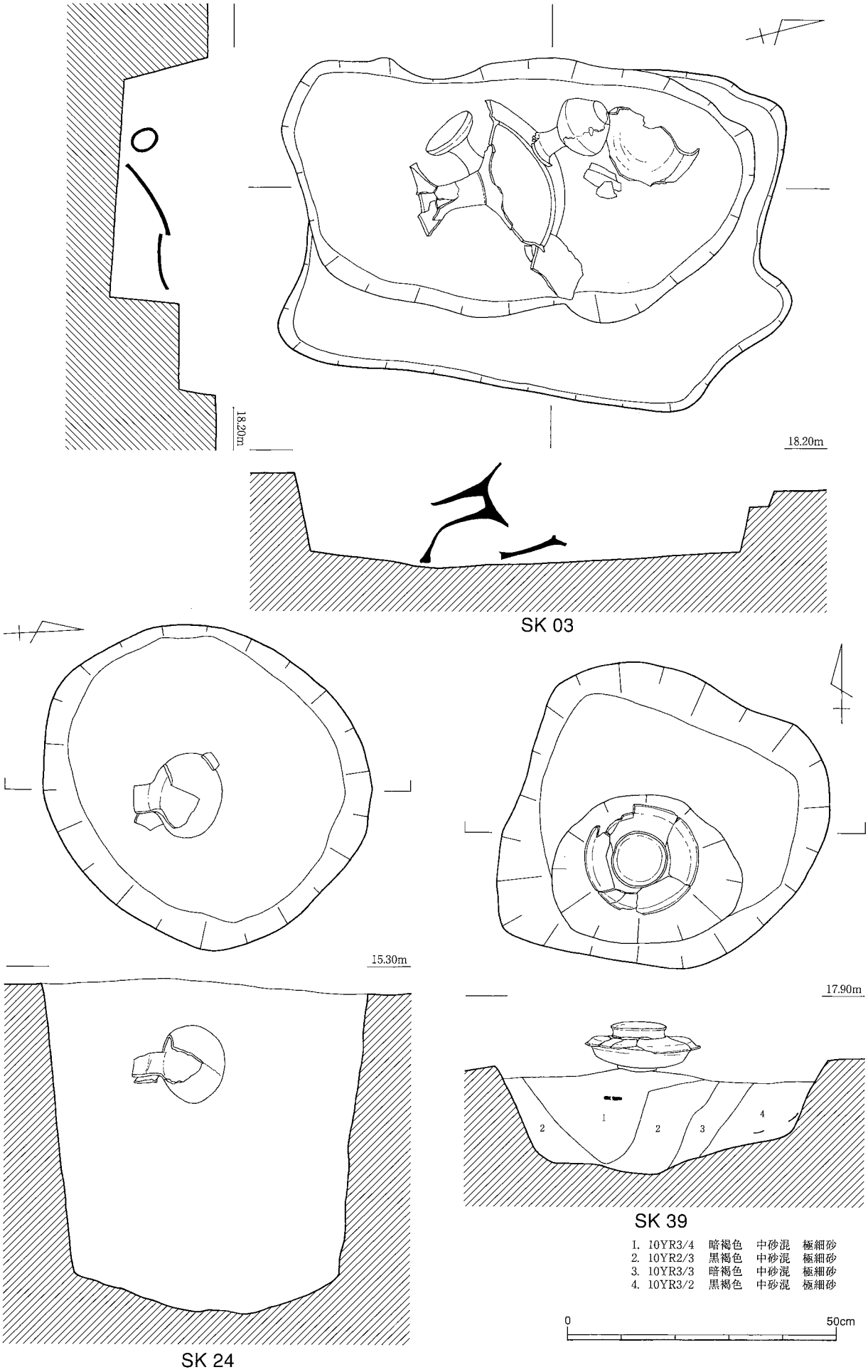
掘立柱建物20



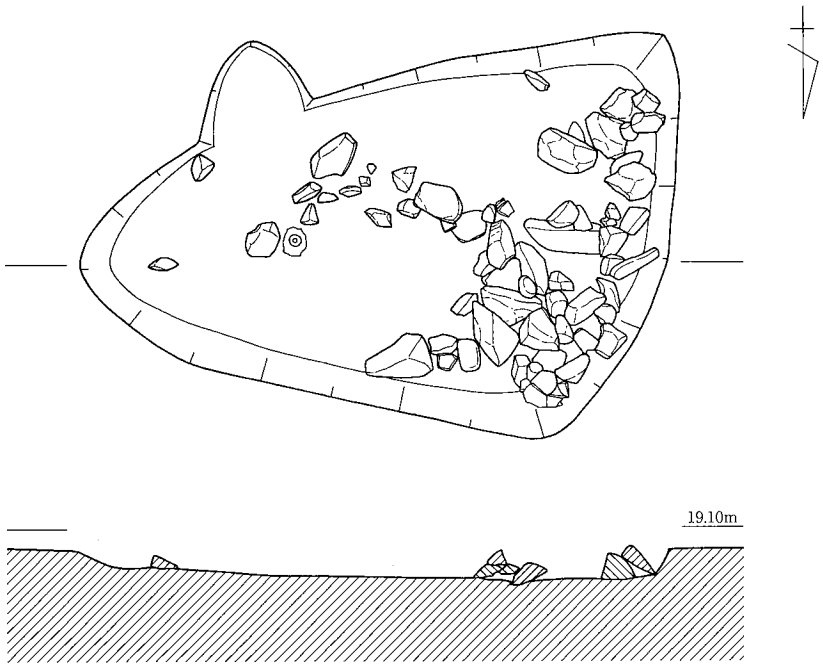


0 4m

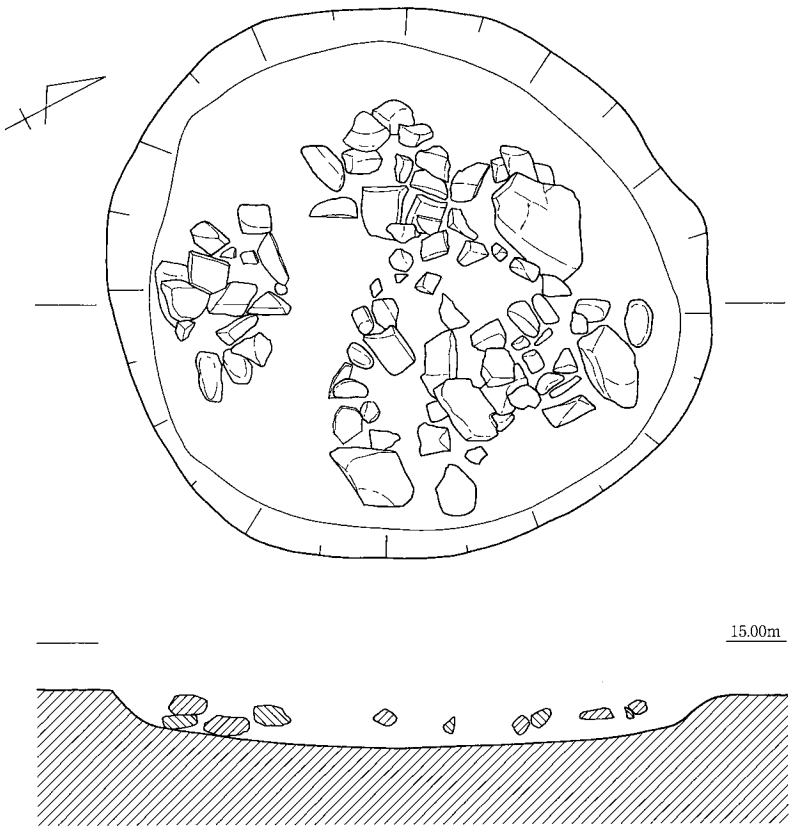
掘立柱建物21


18.20m
18.20m
SK 03
15.30m
SK 24
17.90m
1
2
2
3
4
SK 39
1. 10YR3/4 暗褐色 中砂混 極細砂
2. 10YR2/3 黒褐色 中砂混 極細砂
3. 10YR3/3 暗褐色 中砂混 極細砂
4. 10YR3/2 黒褐色 中砂混 極細砂
0
50cm

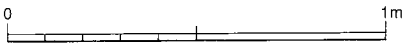
土坑1



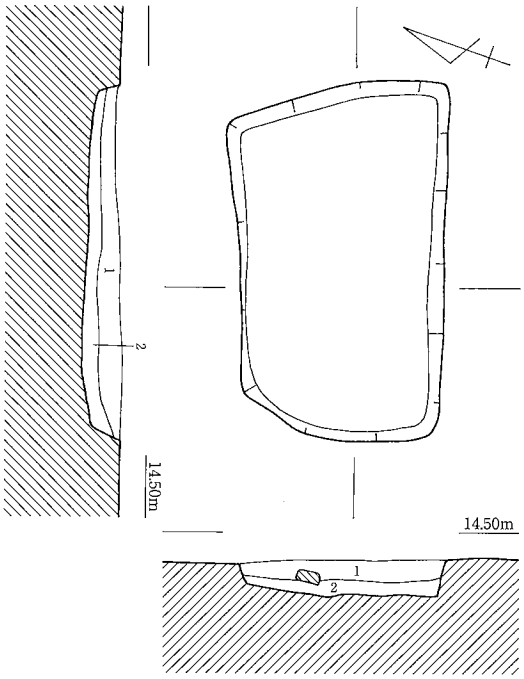
SK 40



SK 35

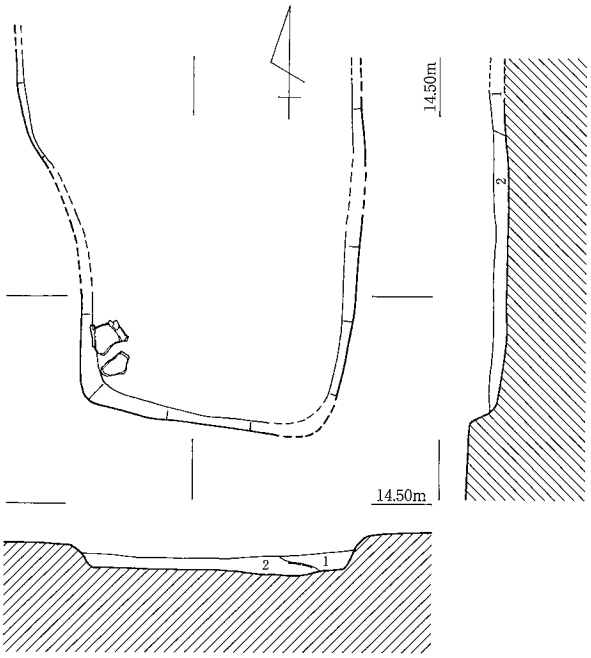


土坑2



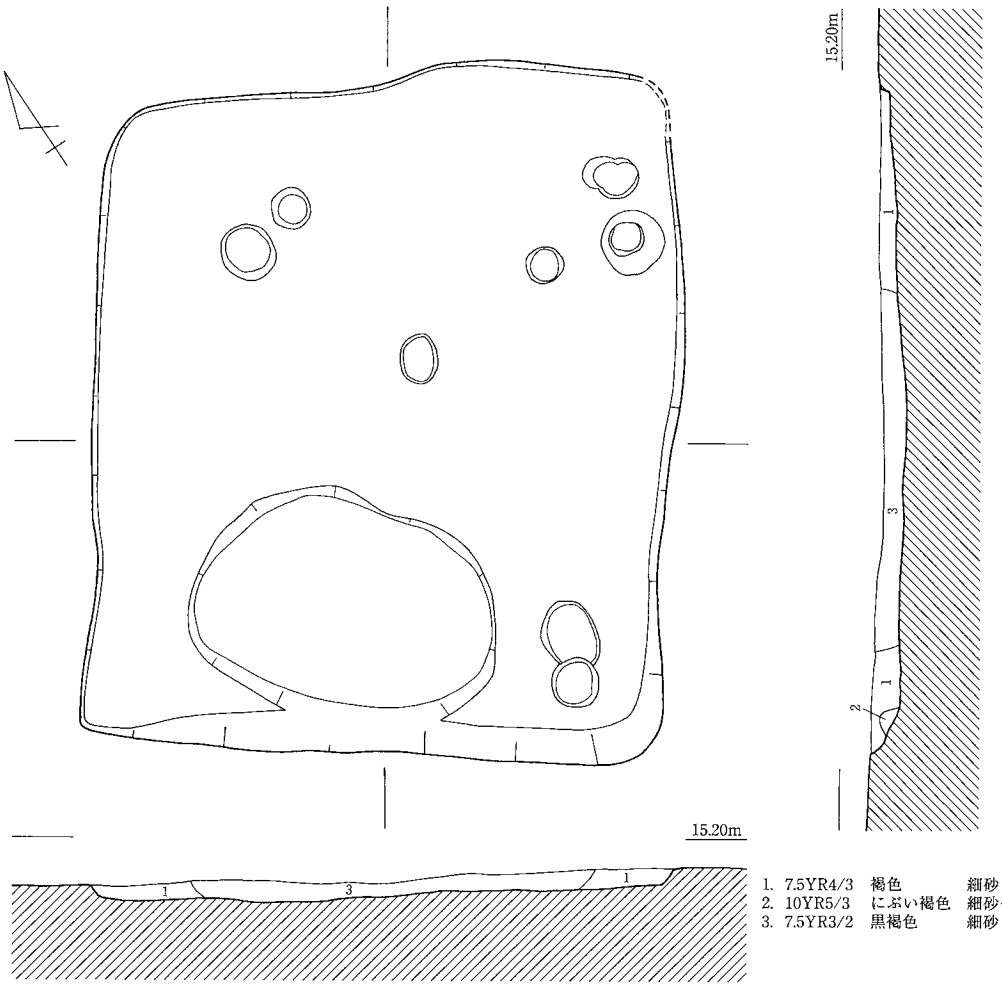
SK 10

1. 10YR4/2　灰黄褐色　極細～細砂
2. 10YR5/2　灰黄褐色　細砂～粗砂



SK 13

1. 10YR5/1　褐灰色　シルト混じり細砂　炭化物含む
2. 10YR3/2　黒褐色　シルト混じり細砂　1より多くの炭化物含む

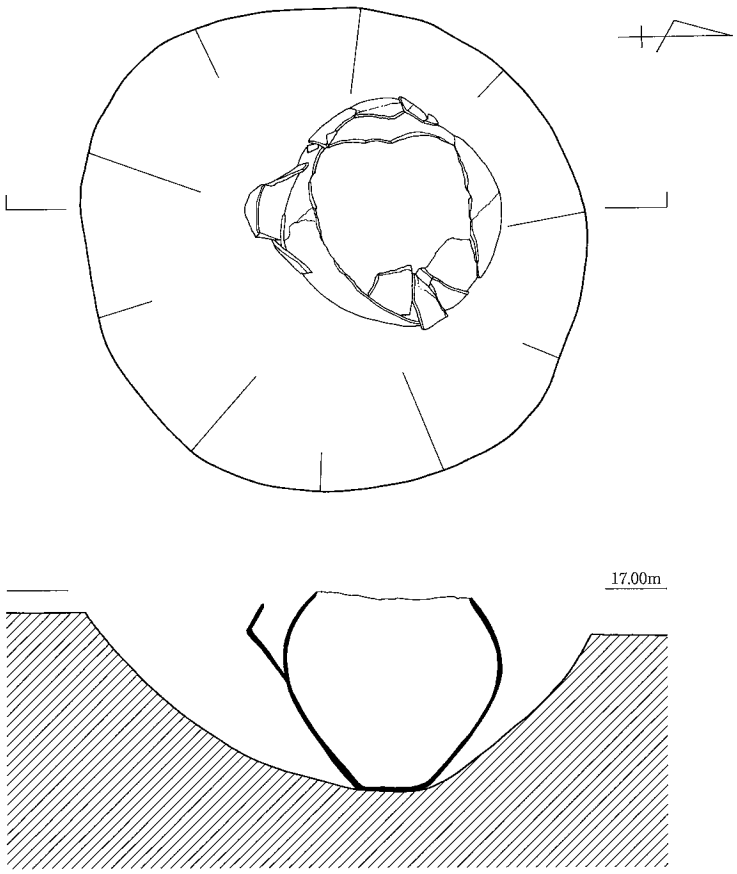


1. 7.5YR4/3　褐色　細砂　粗砂含む
2. 10YR5/3　にぶい褐色　細砂～極細砂
3. 7.5YR3/2　黒褐色　細砂　粗砂、小礫含む

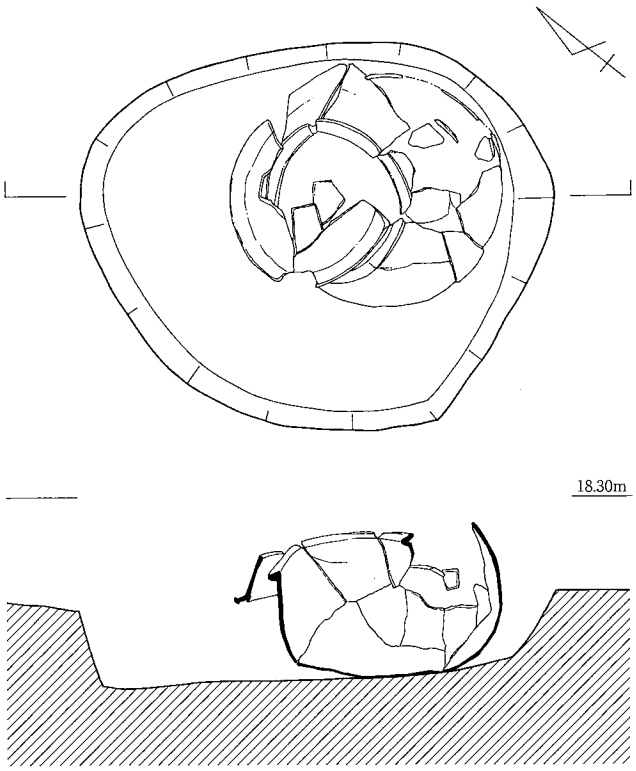
SX 02

0　4m

土坑3・不明遺構



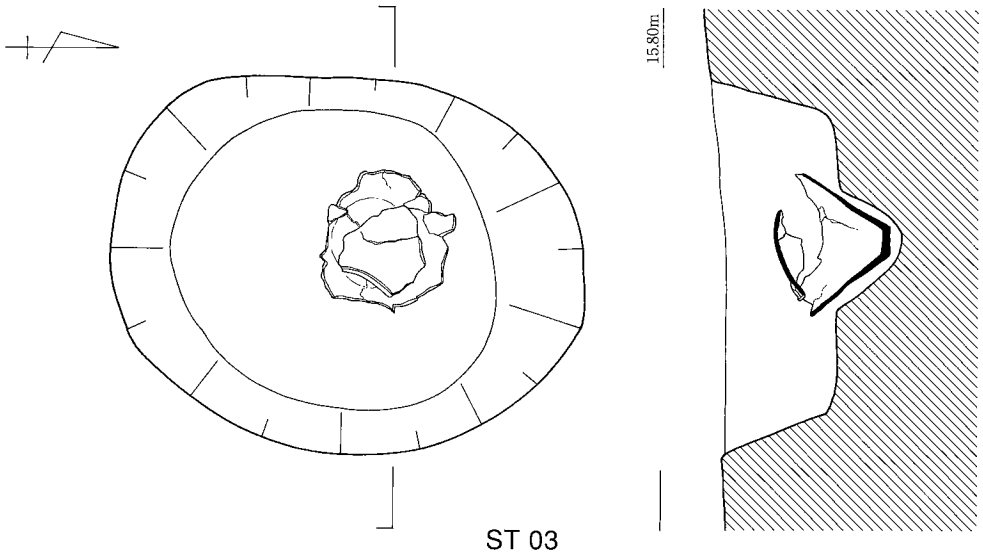
ST 01



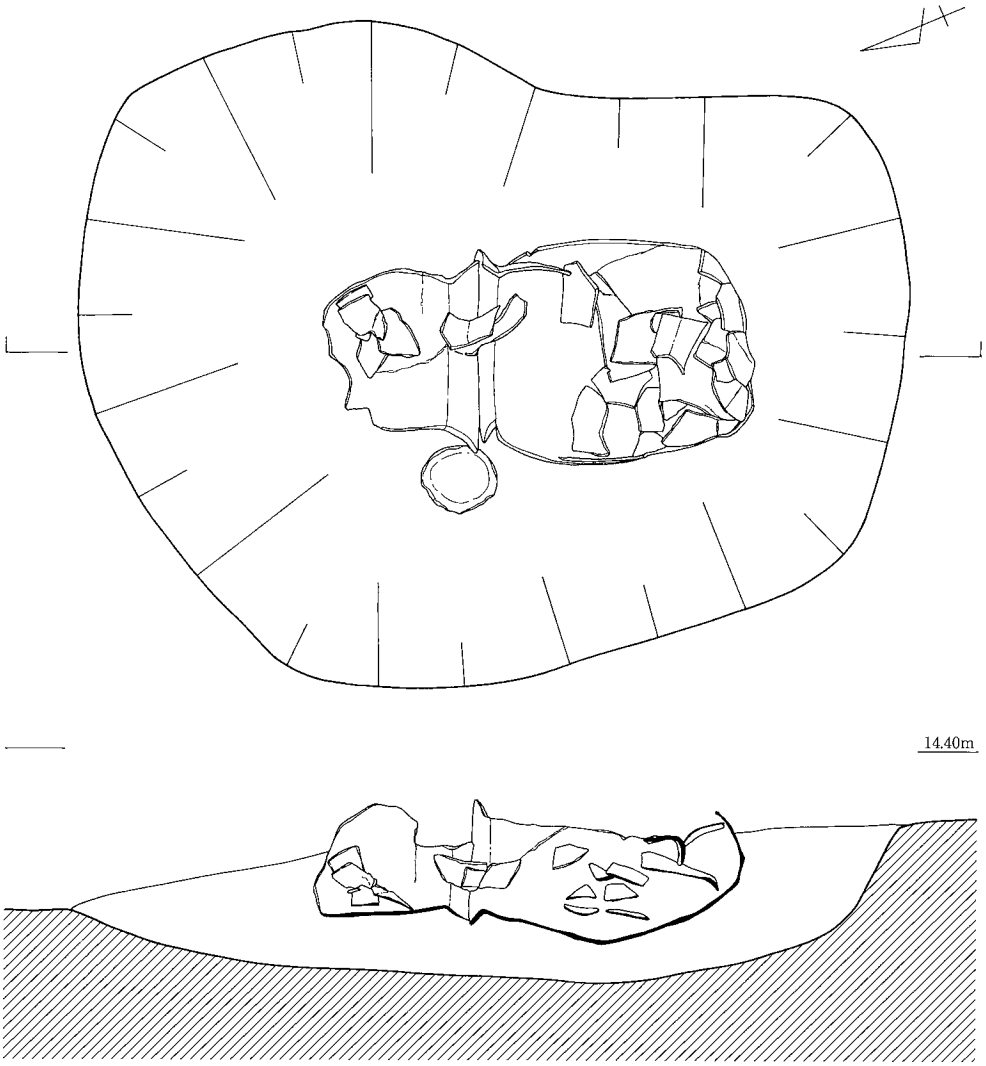
ST 02

0 50cm

埋設土器 1

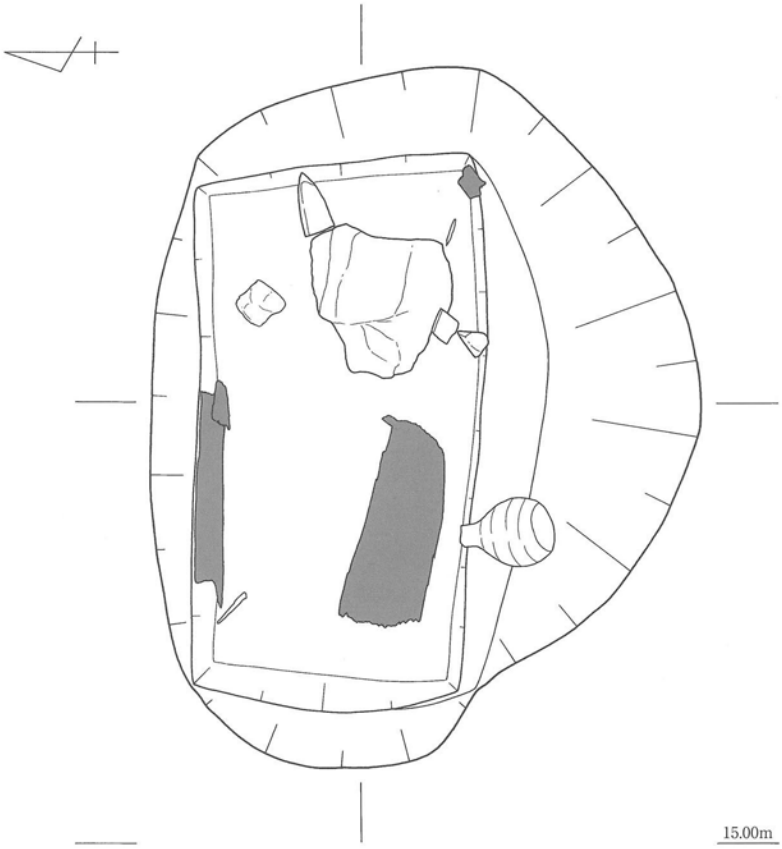


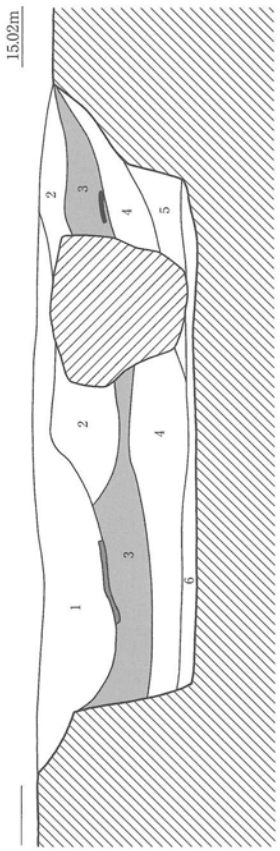
ST 03

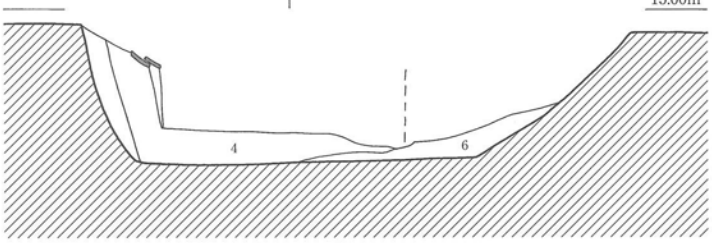


ST 04

埋設土器２







SX 01

1. 7.5YR4/2　灰褐色　中砂混細砂
2. 7.5YR2/3　極暗褐色　シルト質極細砂
3. 炭層
4. 7.5YR2/3　極暗褐色　極細砂 炭板下
5. 10YR2/3　黒褐色　極細砂 炭少
6. 10YR2/3　黒褐色　極細砂 炭少＋シルト混じる

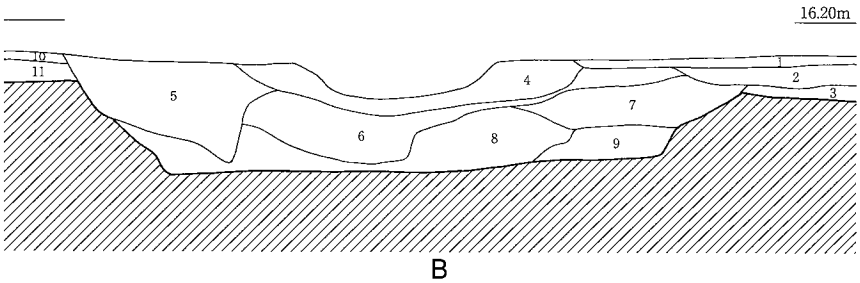
炭層

炭化材

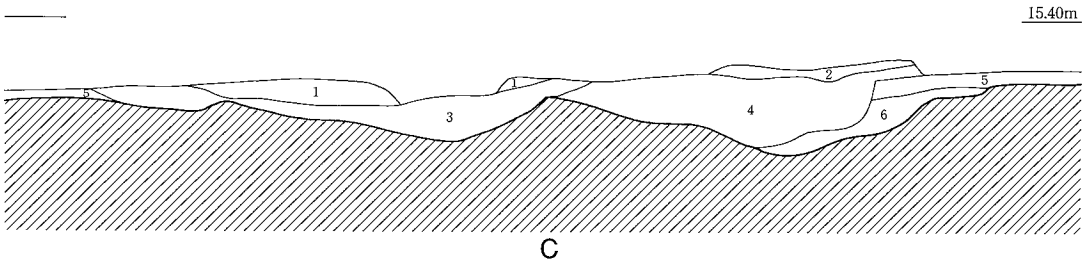
0　50cm

流路１セクション位置図

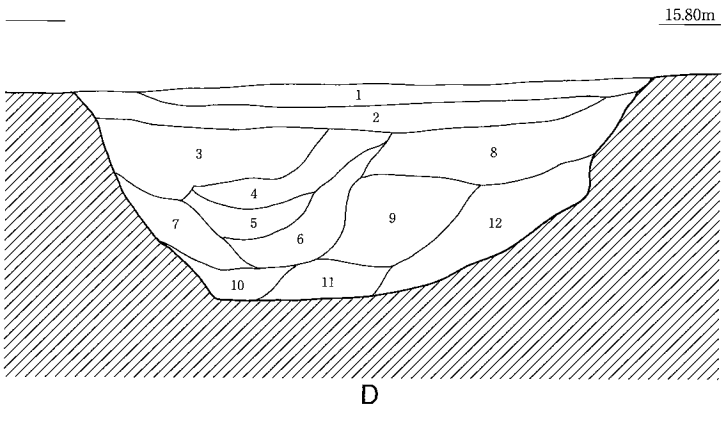
1. 2.5Y 4/2　暗灰黄色　極細砂～大礫
2. 2.5Y 4/2　暗灰黄色　細砂～中礫
3. 10YR 4/1　褐灰色　シルト質極細砂
4. 10YR 5/4　にぶい黄褐色　中砂～中礫
5.　小礫～大礫
6. 2.5Y 4/3　オリーブ褐色　大礫混粗砂
7. 5Y 5/1　灰色　大礫混極細砂～粗砂



1. 10YR 6/2　灰黄褐色　極細砂
2. 10YR 4/2　灰黄褐色　極細砂
3. 10YR 6/1　褐灰色　細砂
4. 5YR 6/6　橙色　細砂～大礫
5. 10YR 4/1　褐灰色　中砂～大礫
6. 5YR 6/6　橙色　細砂～大礫
7. 5Y 4/1　灰色　シルト質極細砂
8. 5Y 5/1　灰色　粗砂～大礫
9. 5Y 4/1　灰色　細砂
10. 10YR 5/1　褐灰色　中砂混極細砂
11. 10YR 6/1　褐灰色　細砂



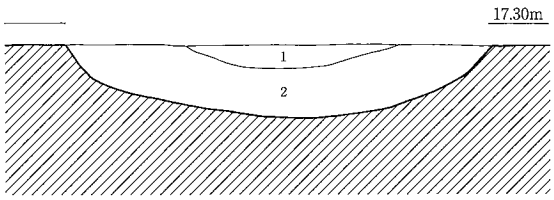
1. 7.5YR 3/2　黒褐色　中砂混細砂
2. 7.5YR 4/1　褐灰色　中砂混細砂
3. 7.5YR 2/3　極暗褐色　大礫～極細砂混粗砂
4. 7.5YR 2/3　極暗褐色　大礫～極細砂混粗砂
5. 7.5YR 3/4　褐色　中砂混極細砂
6. 7.5YR 3/3　暗褐色　中砂混極細砂



1. 10R 4/2　灰赤色　細砂
2. 10R 5/2　灰赤色　細砂
3. 10YR 2/2　黒褐色　シルト混粗砂（直径10～20cm大角礫多量に含む）
4. 10YR 4/3　にぶい黄褐色　シルト混粗砂（直径5cm大円礫多量に含む）
5. 10YR 4/2　灰黄褐色　粗砂（直径10cm大角礫多量に含む）
6. 7.5YR 3/2　黒褐色　粗砂
7. 5YR 4/1　褐灰色　シルト混粗砂
8. 10R 3/2　暗赤褐色　細砂
9. 5YR 4/2　灰褐色　粗砂（直径2mm大礫多量に含む）
10. 10YR 5/1　褐灰色　シルト混粗砂～小礫
11. N 1.5/0　黒色　直径5mm大礫（有機質を多く含む）
12. 10R 5/1　赤灰色　小礫を含む細砂

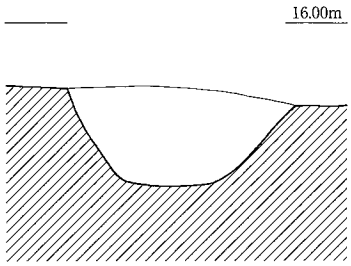
0　4m

流路１

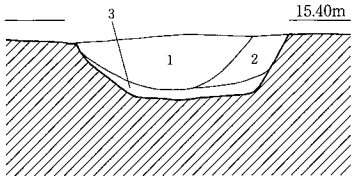


SD 51

1 礫層
2 10YR4/2 灰黄褐色 中礫混細砂 旧河道北側溝

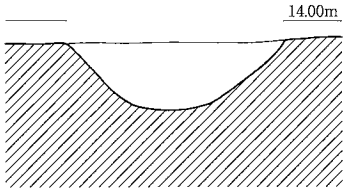


SD 20

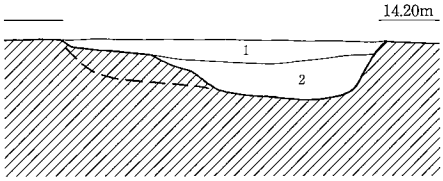


SD 24

1. 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質極細砂（礫混）
2. 10YR3/1 黒褐色 シルト質極細砂（ローム混）
3. 10YR7/3 にぶい黄橙色 シルト質極細砂

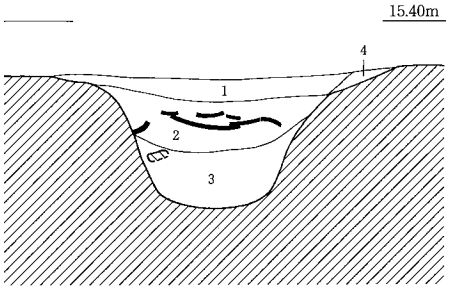


SD 29



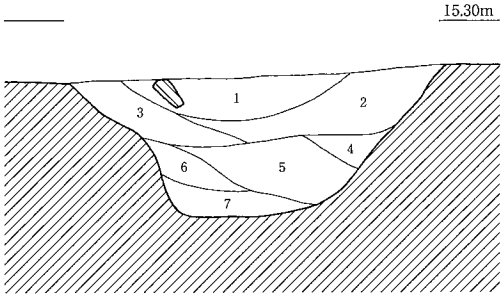
SD 30

1. 5YR4/3 褐色 粗砂 ややシルト含
2. 10YR4/2 灰黄褐色 細～粗砂



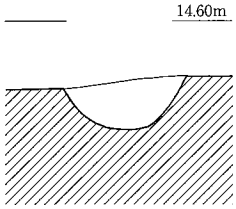
SD 38

1. 10R4/2 灰黄褐色 極細砂混じり細砂
2. 10R3/2 黒褐色 極細砂混じりシルト
3. 2.5YR5/1 赤灰色 中～粗砂
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト～極細砂

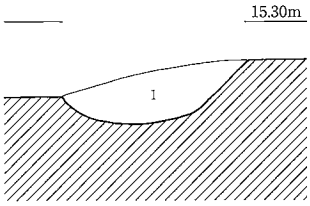


SD 42

1. 7.5YR5/3 にぶい褐色 直径2～3cm 礫密
2. 7.5YR3/3 暗褐色 細砂～極細砂 Mn集積
3. 7.5YR5/3 にぶい褐色 極細砂
4. 5YR2/1 黒色 粗砂
5. 7.5YR6/1 褐灰色 直径5cm礫～直径3mm礫密集
6. 7.5YR3/3 暗褐色
7. 5YR2/1 黒褐色 粗砂～礫 直径3mm 角礫主体

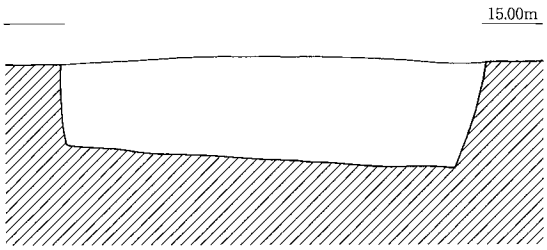


SD 36

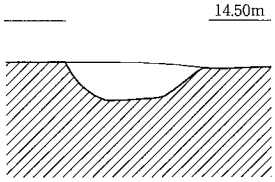


SD 39

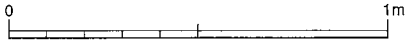
1 10YR3/3 暗褐色 細砂～シルト

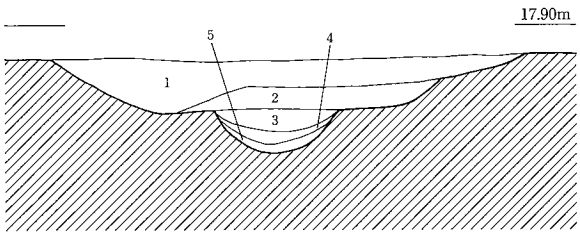


SD 41

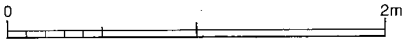


SD 15



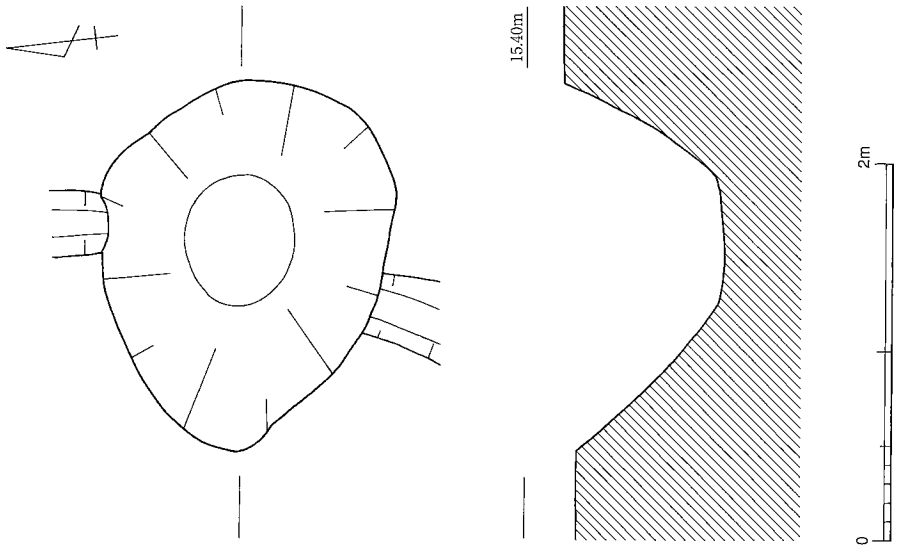


1. 10YR2/3 黒褐色 極細砂質シルト（ロームブロック混）土器片混じる
2. 10YR5/1 褐灰色 中砂（シルト、ロームブロック混）
3. 10YR6/1 褐灰色 中砂
4. 5B4/1 暗青灰色 シルト混じり細砂（中砂混）
5. 5B5/1 青灰色 シルト質極細砂（中砂混）

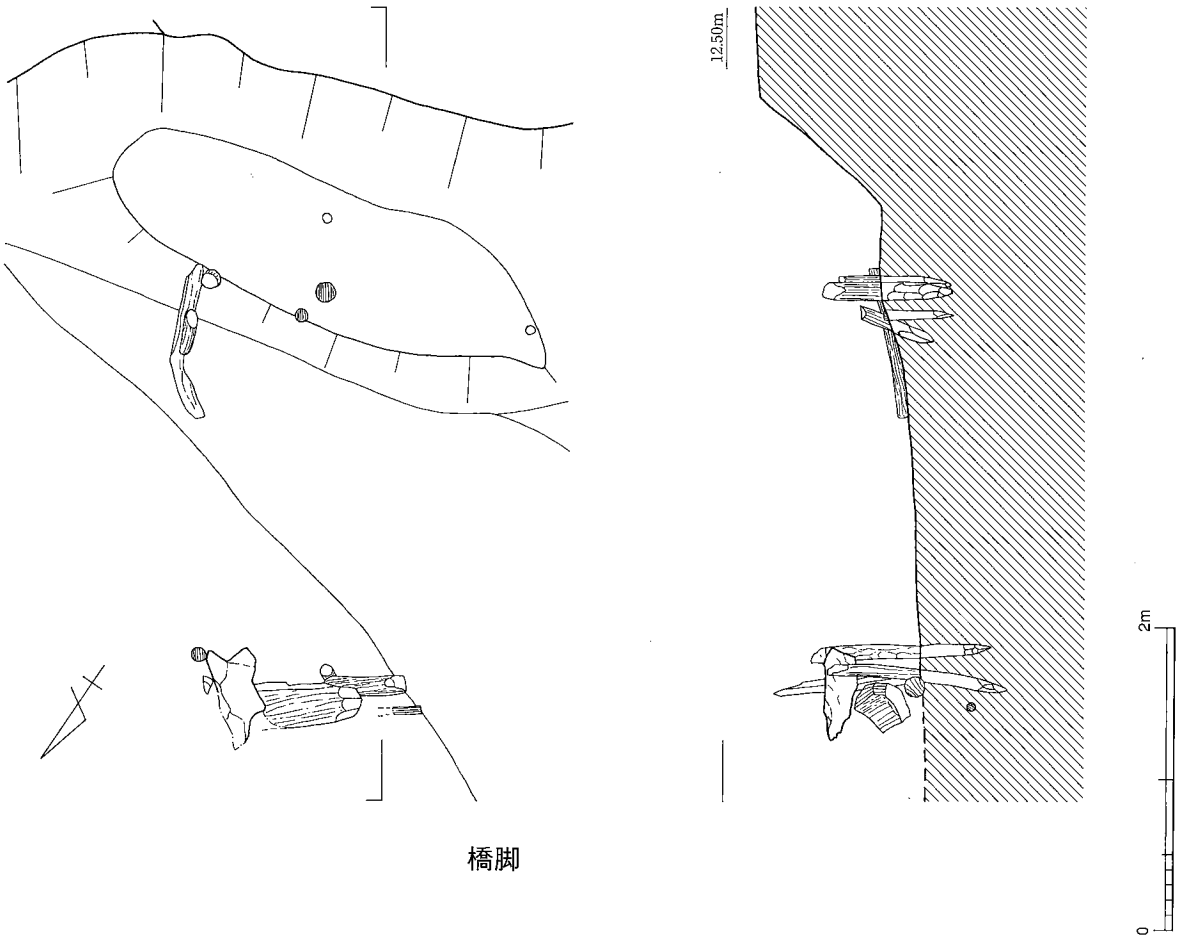


SD 50

溝

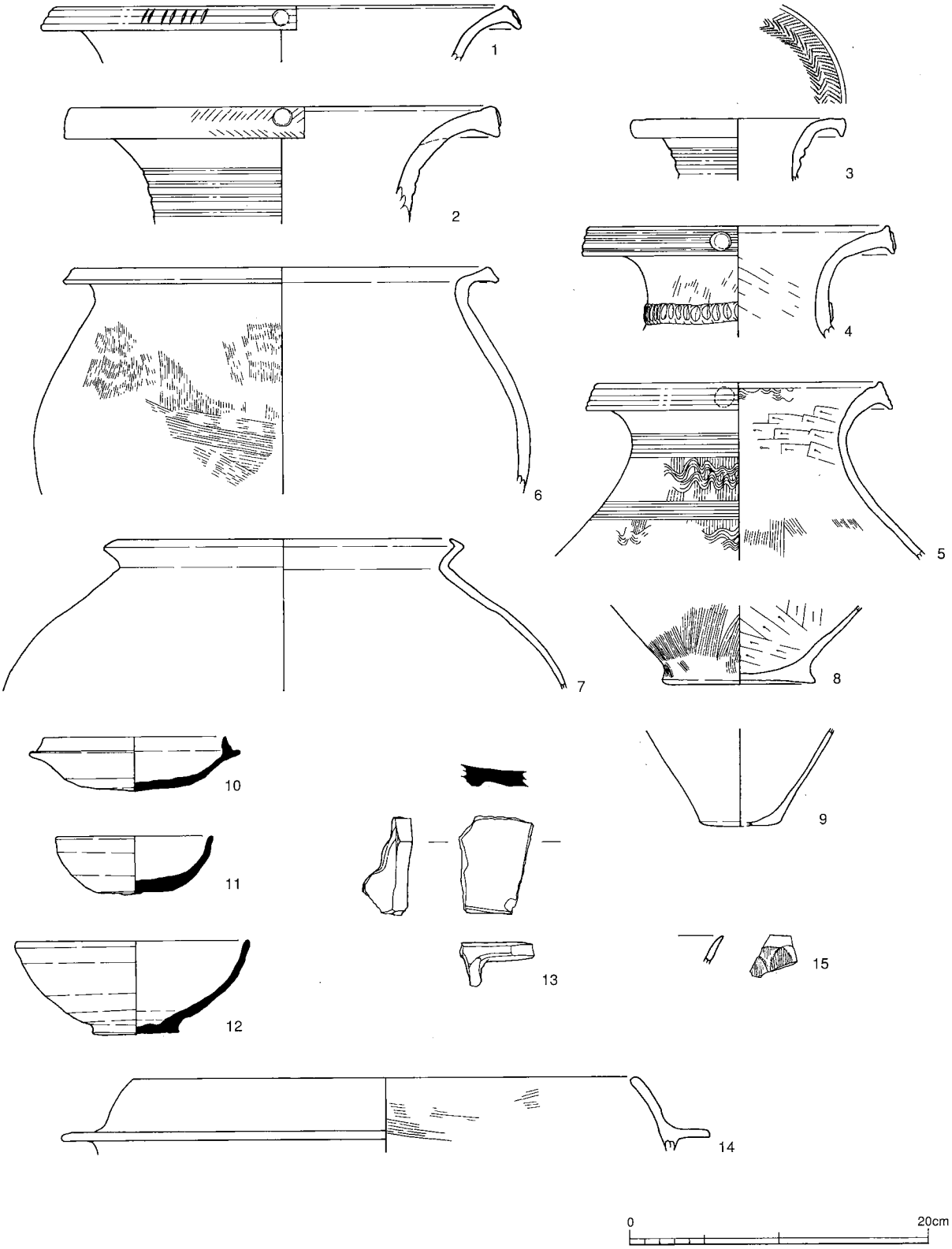


SE 01

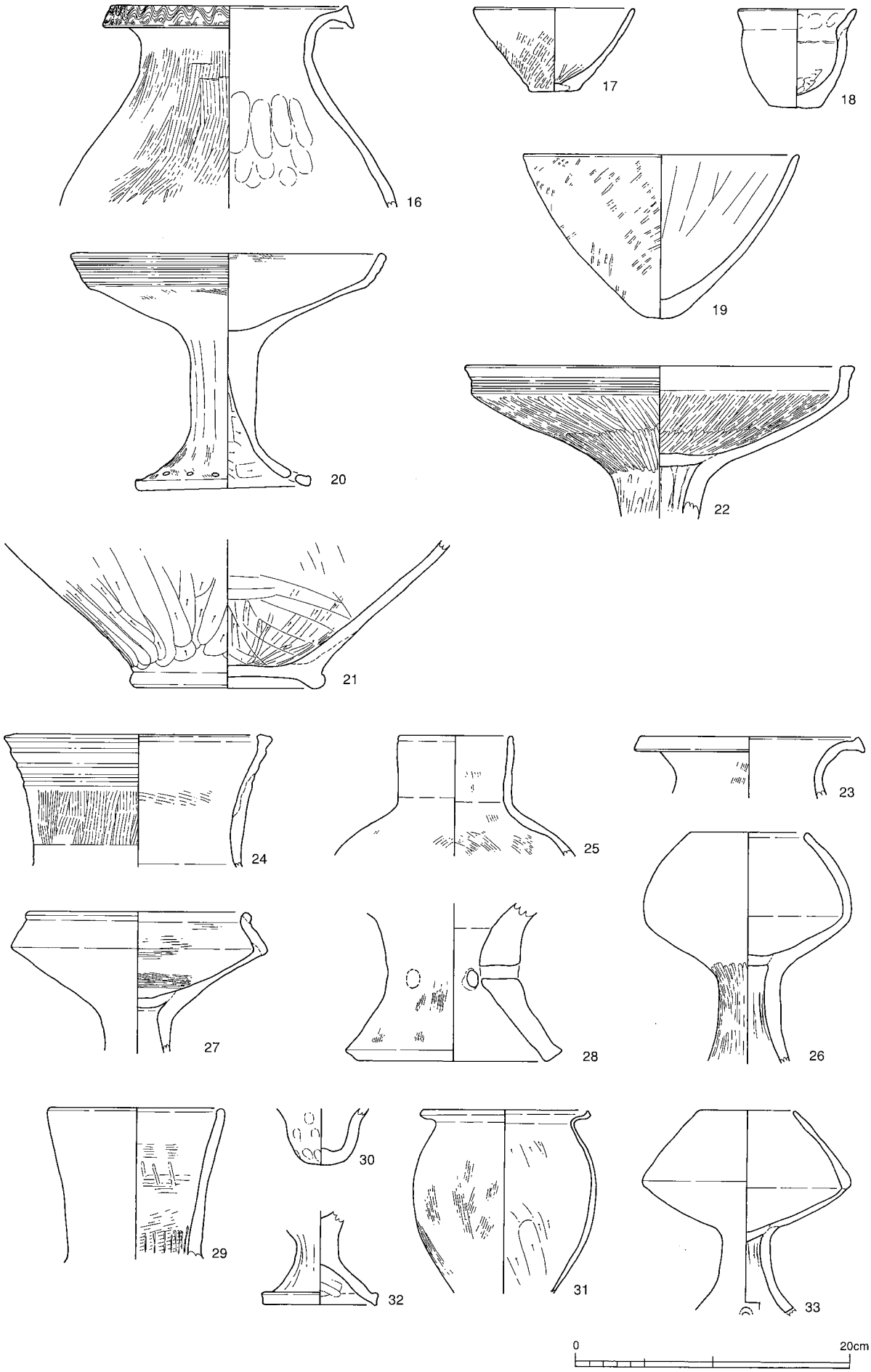


橋脚

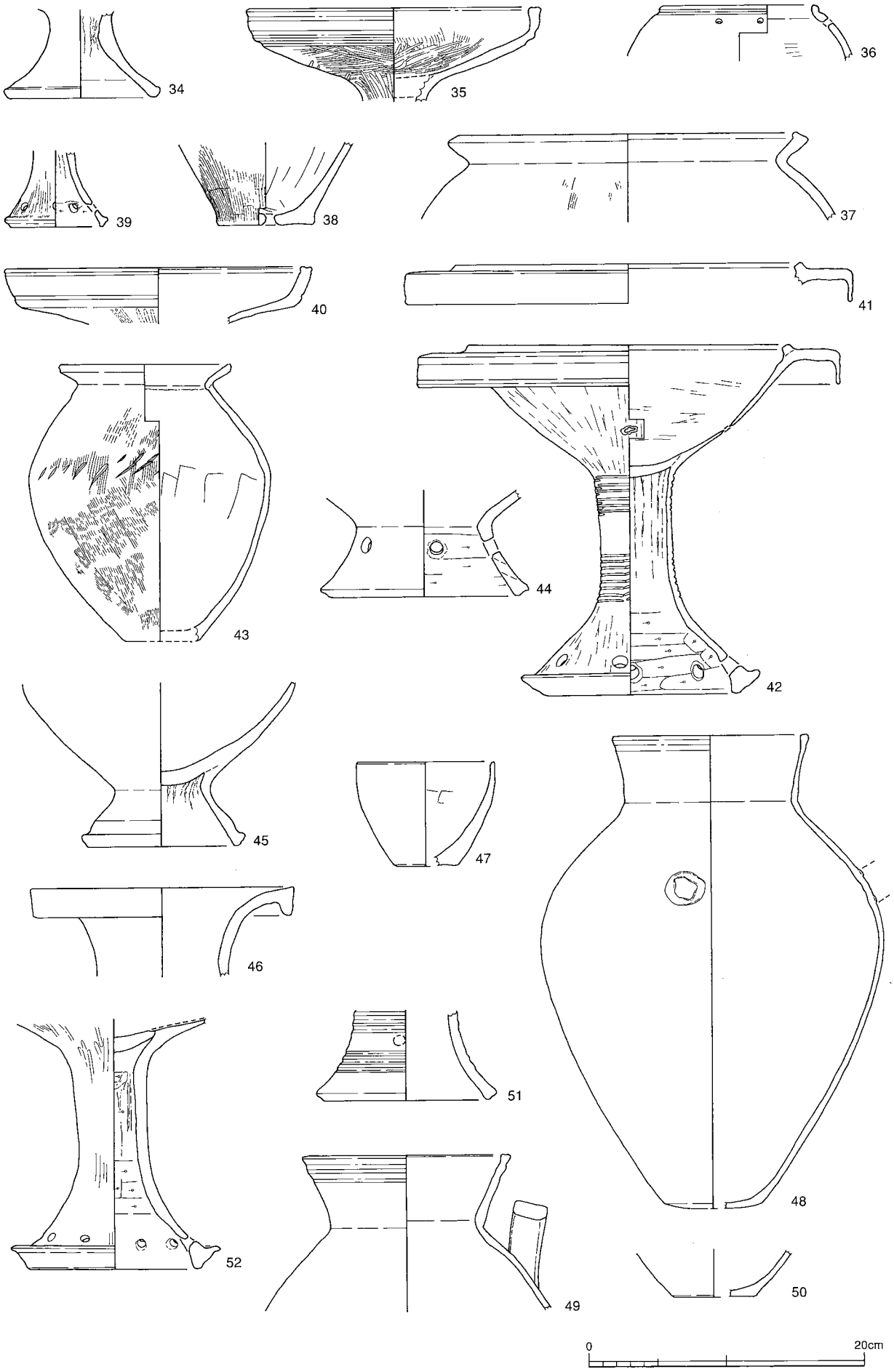
井戸・橋脚



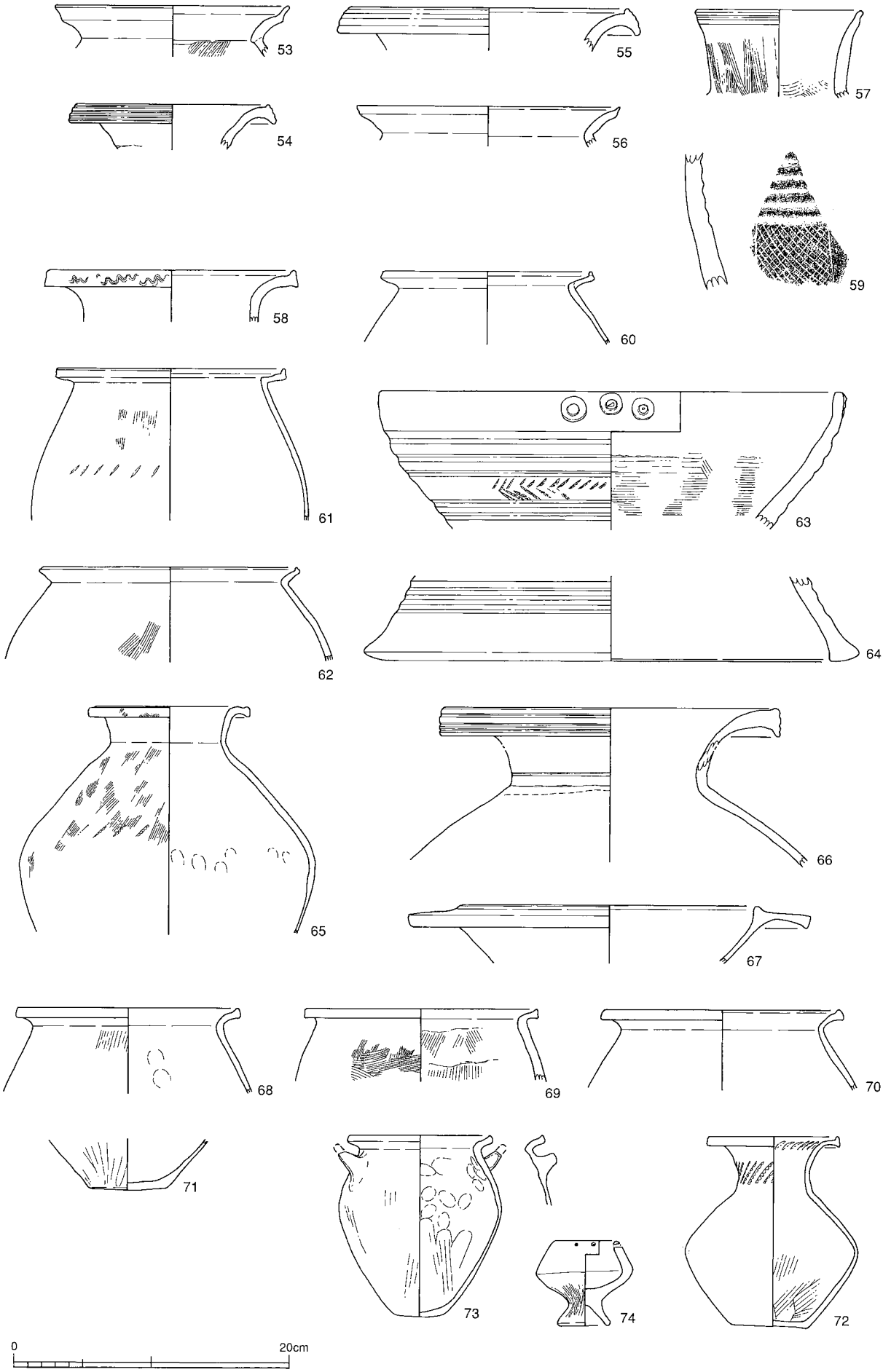
確認調査出土土器



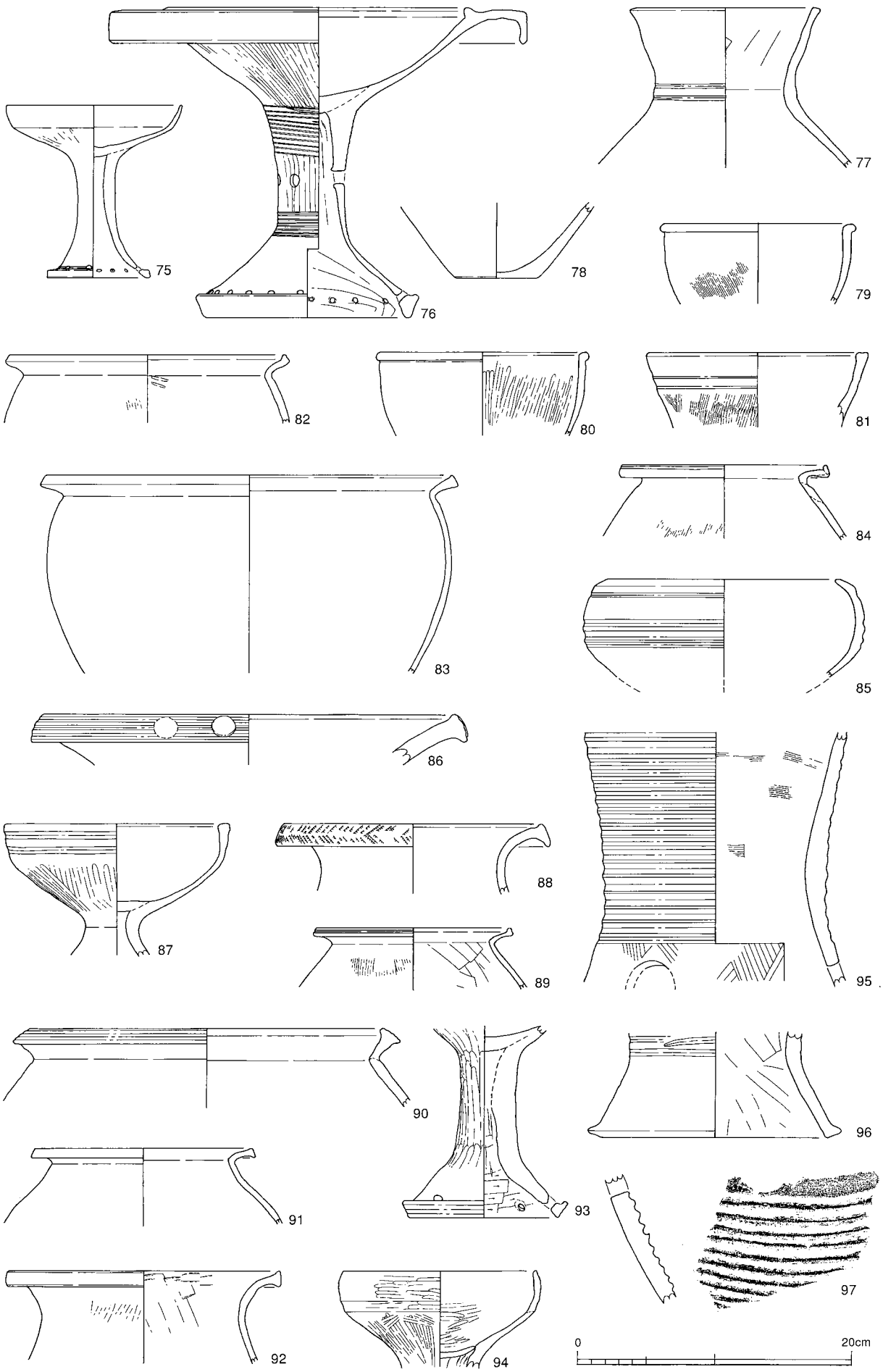
弥生時代の土器１（竪穴住居）



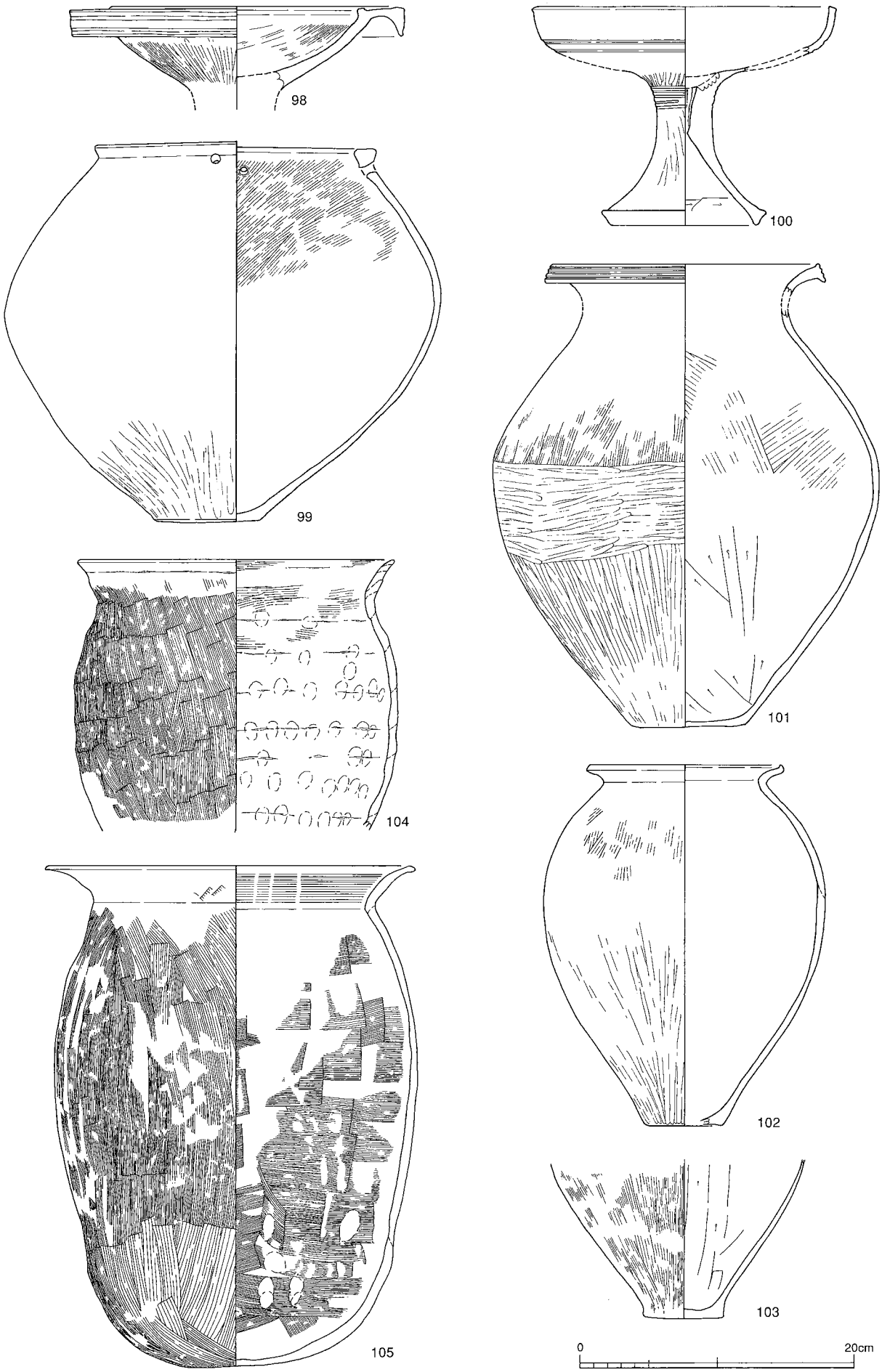
弥生時代の土器２（竪穴住居）



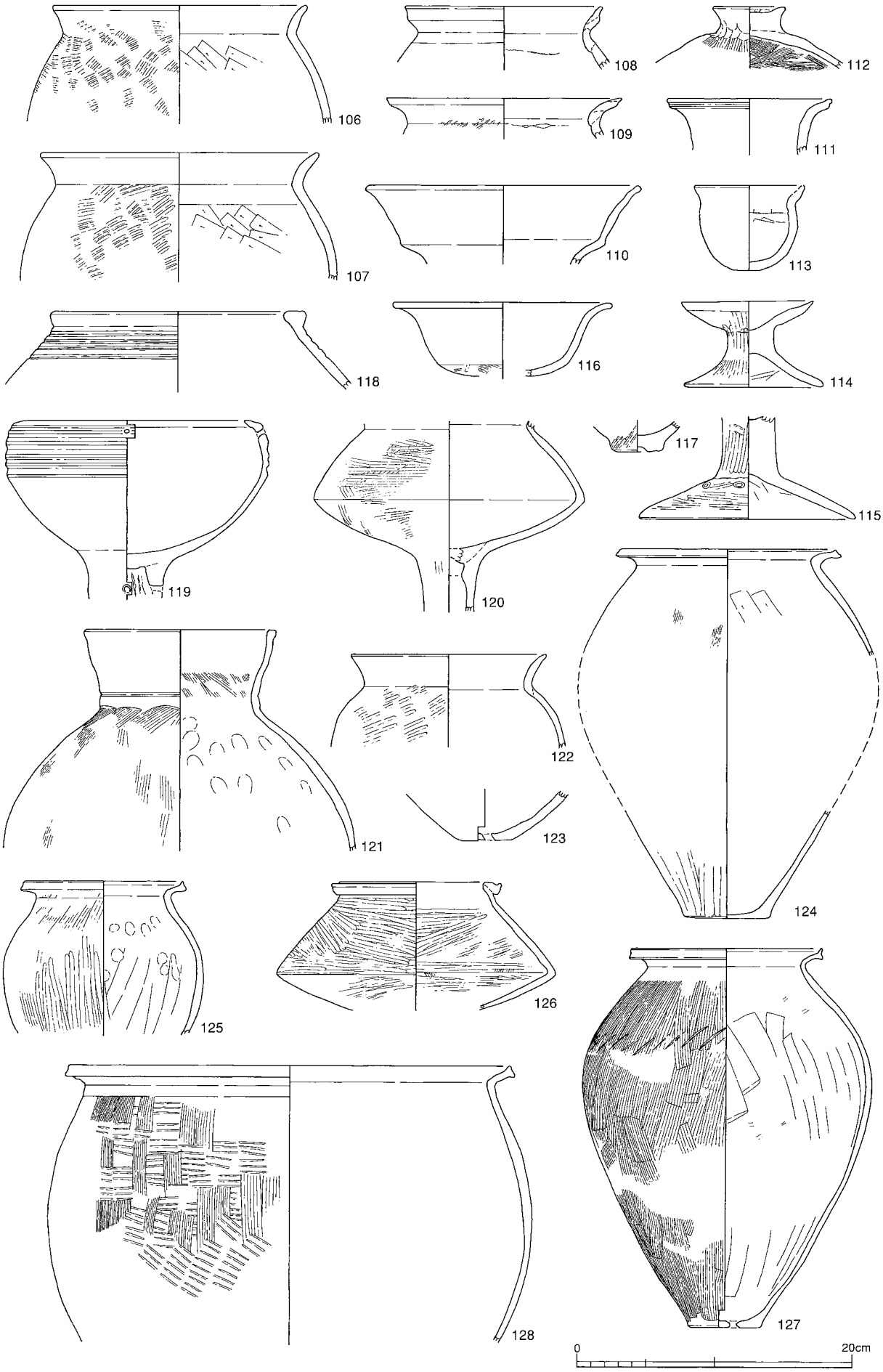
弥生時代の土器３（竪穴住居・土坑）


75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
0
20cm

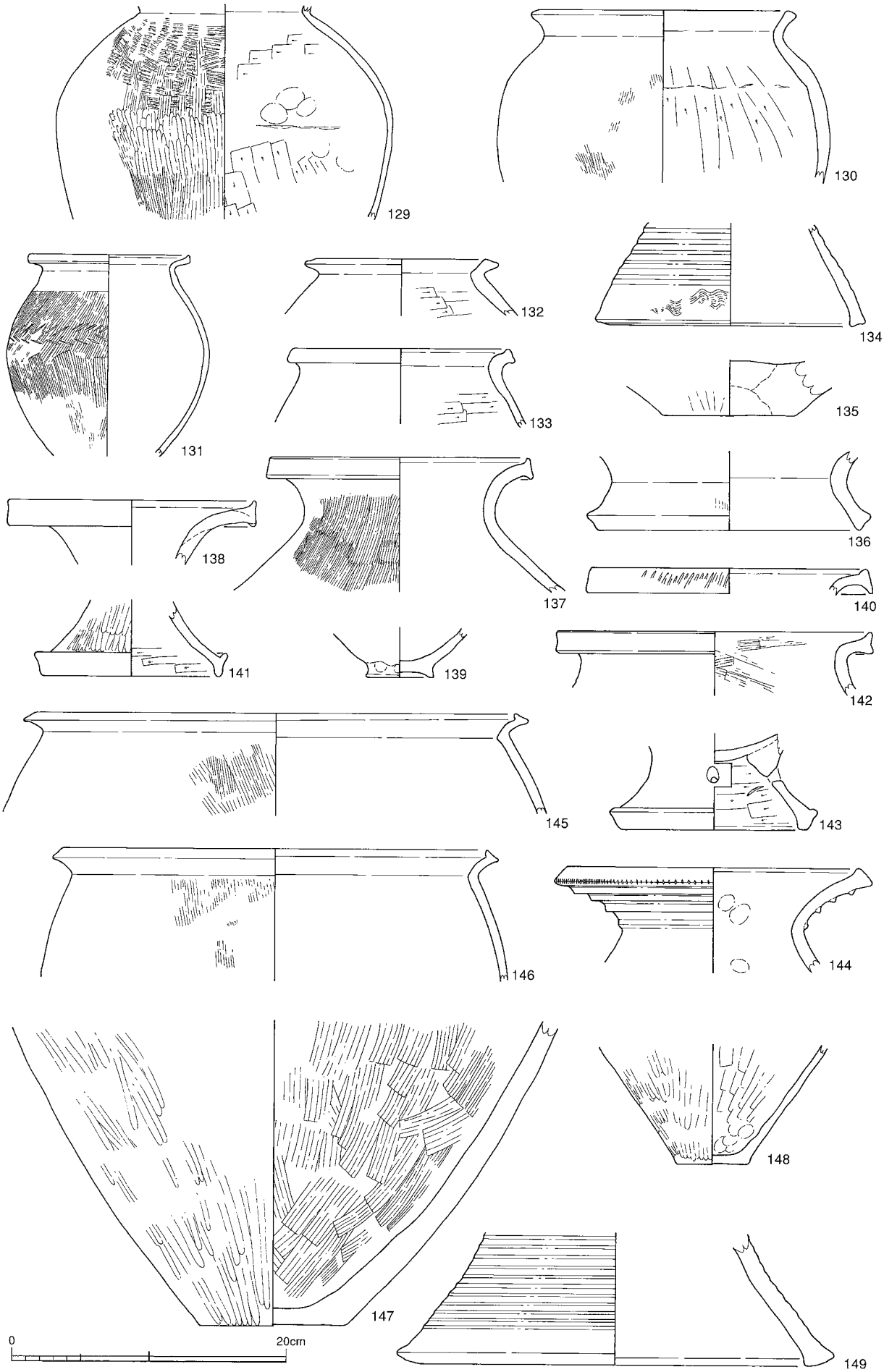
弥生時代の土器４（土坑）



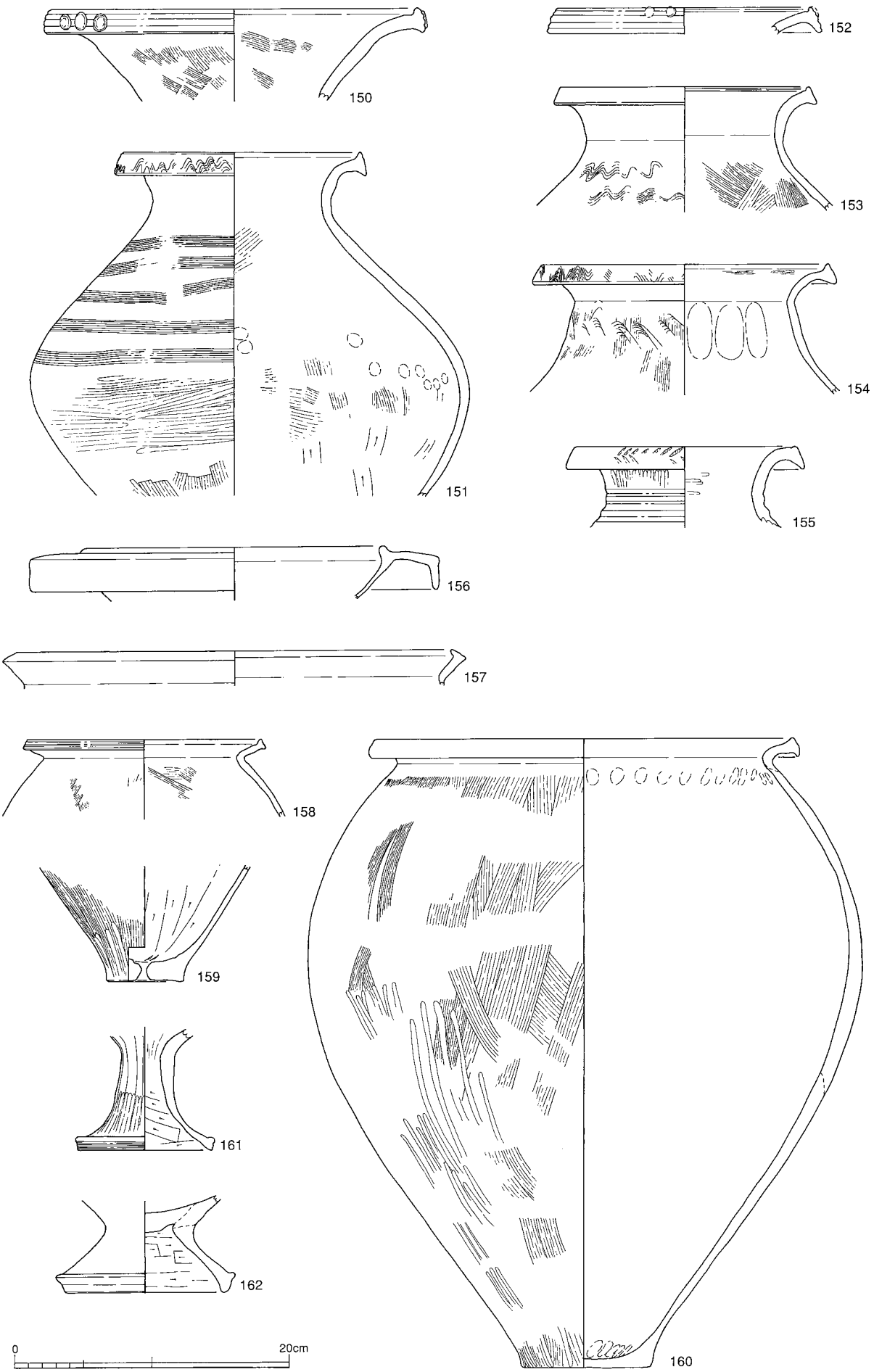
弥生時代の土器5（埋設土器）



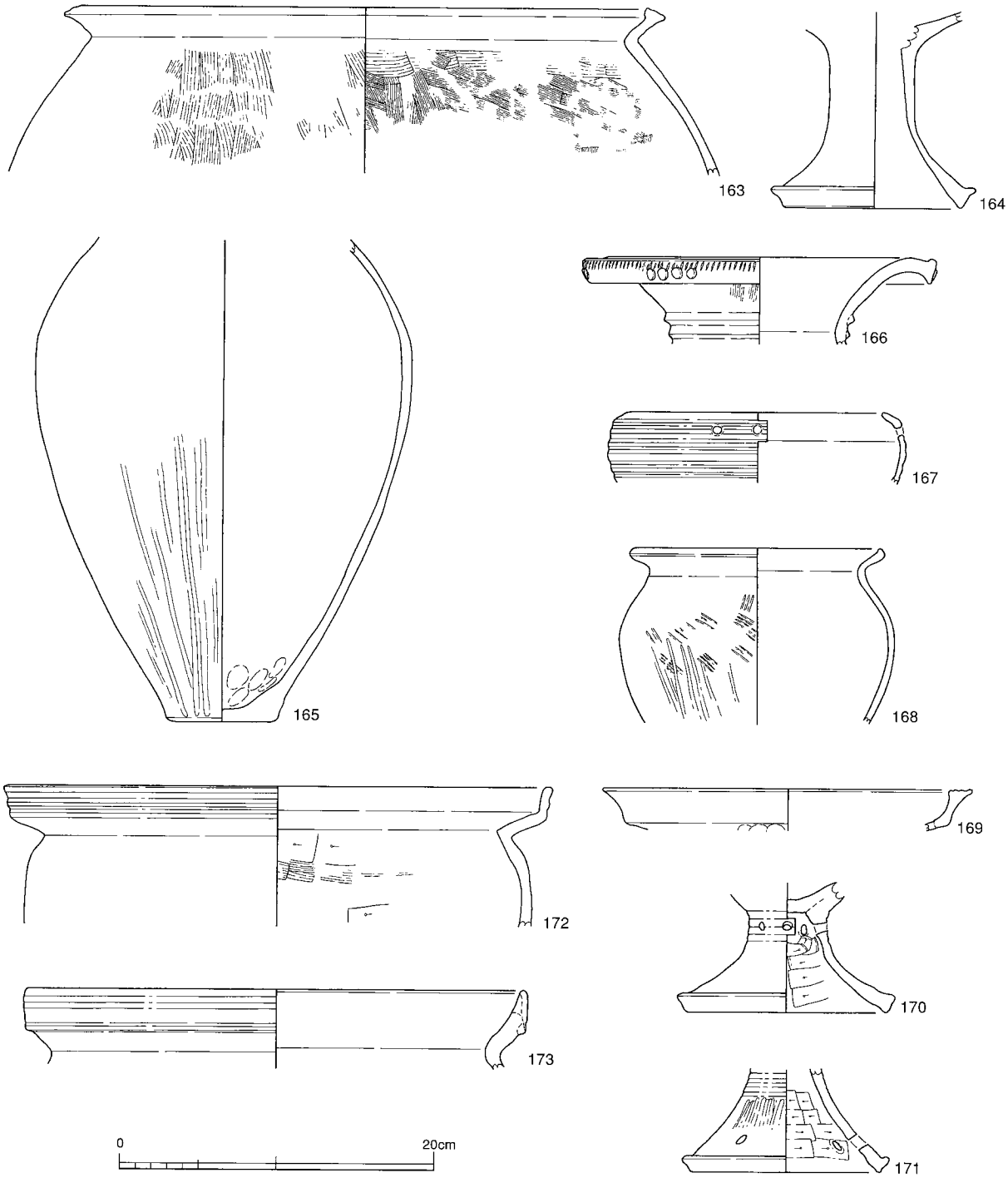
弥生時代の土器6（方形区画溝「SD04」・ピット）



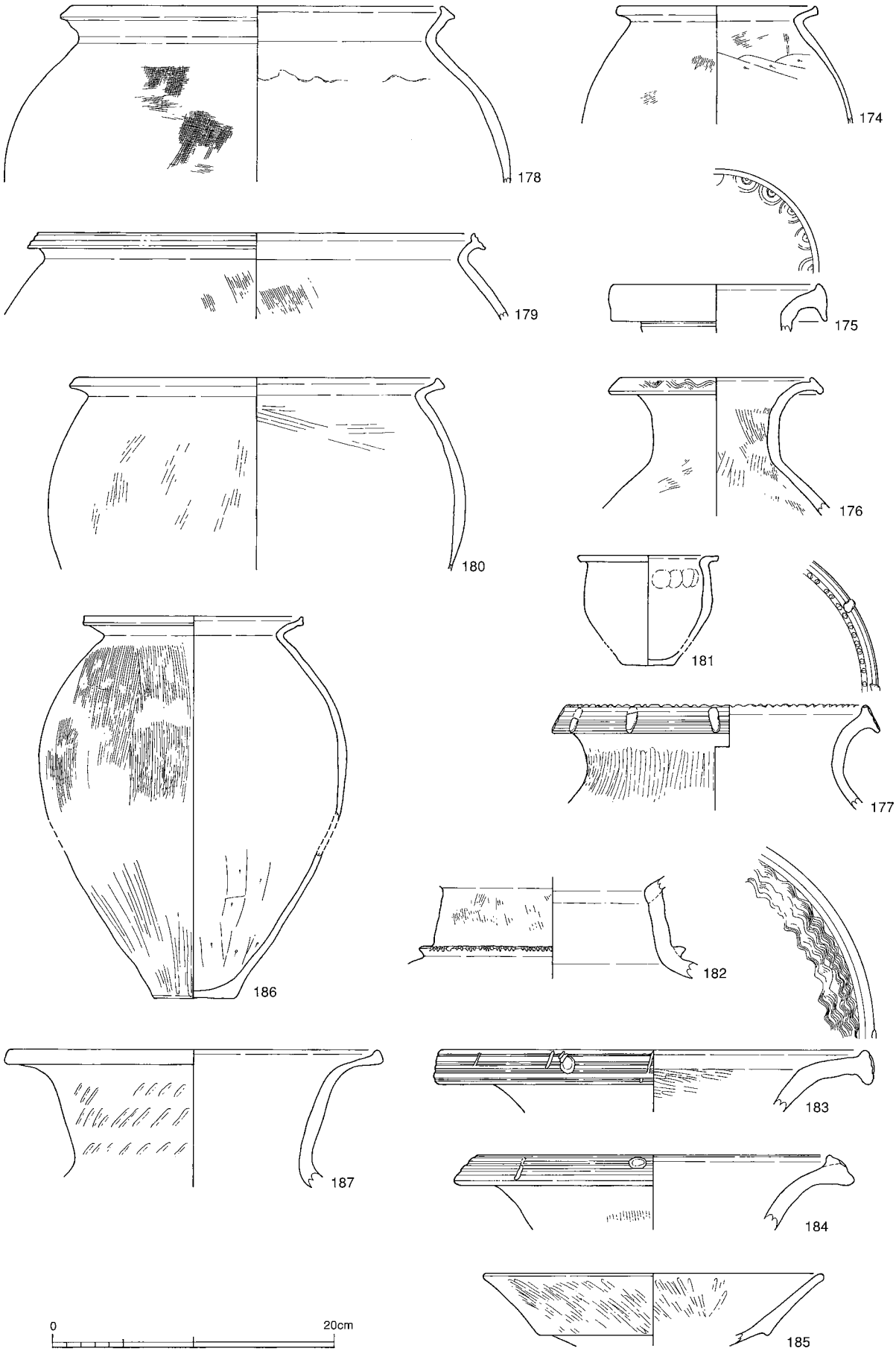
弥生時代の土器7（ピット・溝・流路）



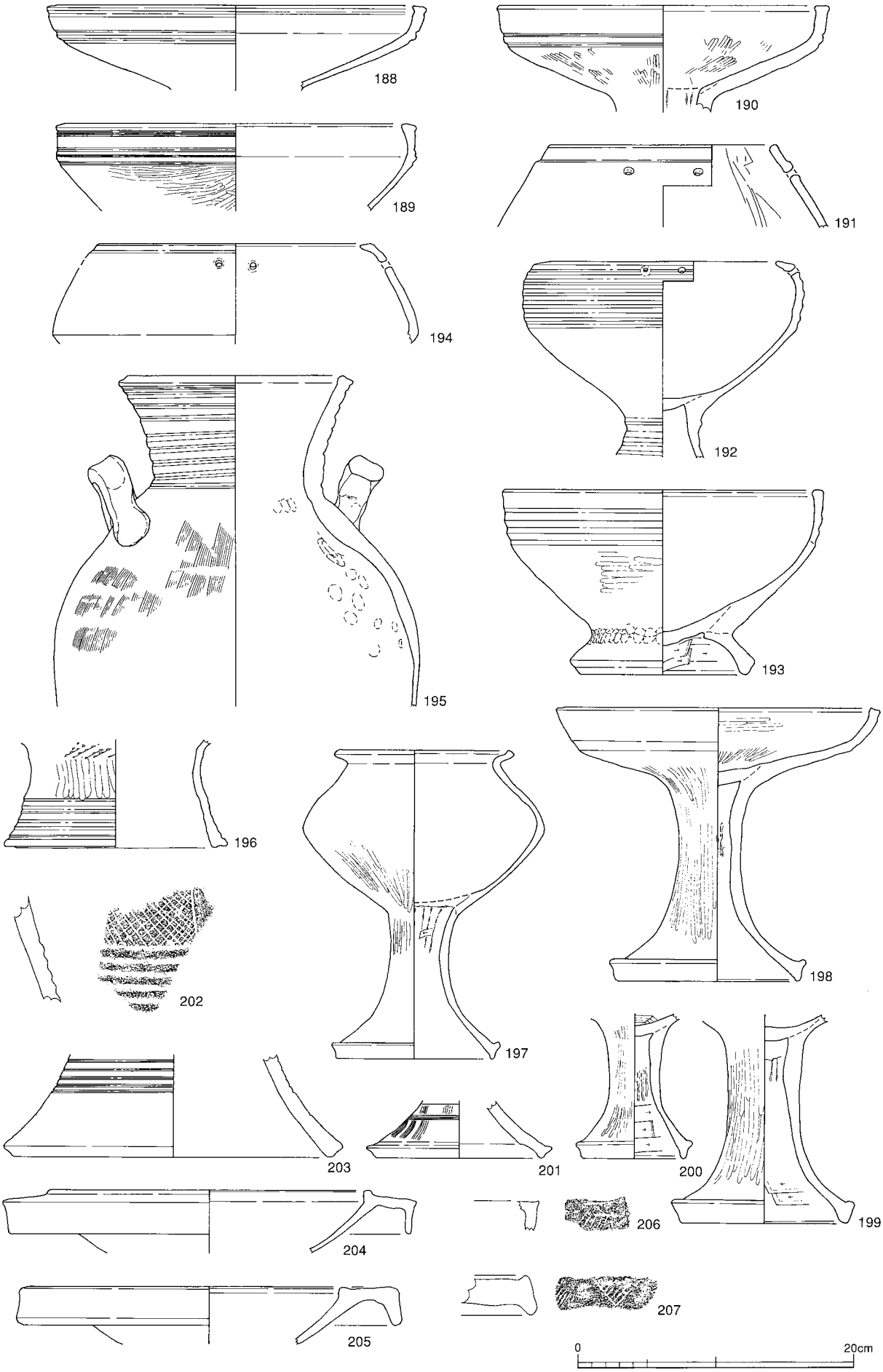
弥生時代の土器8（溝）



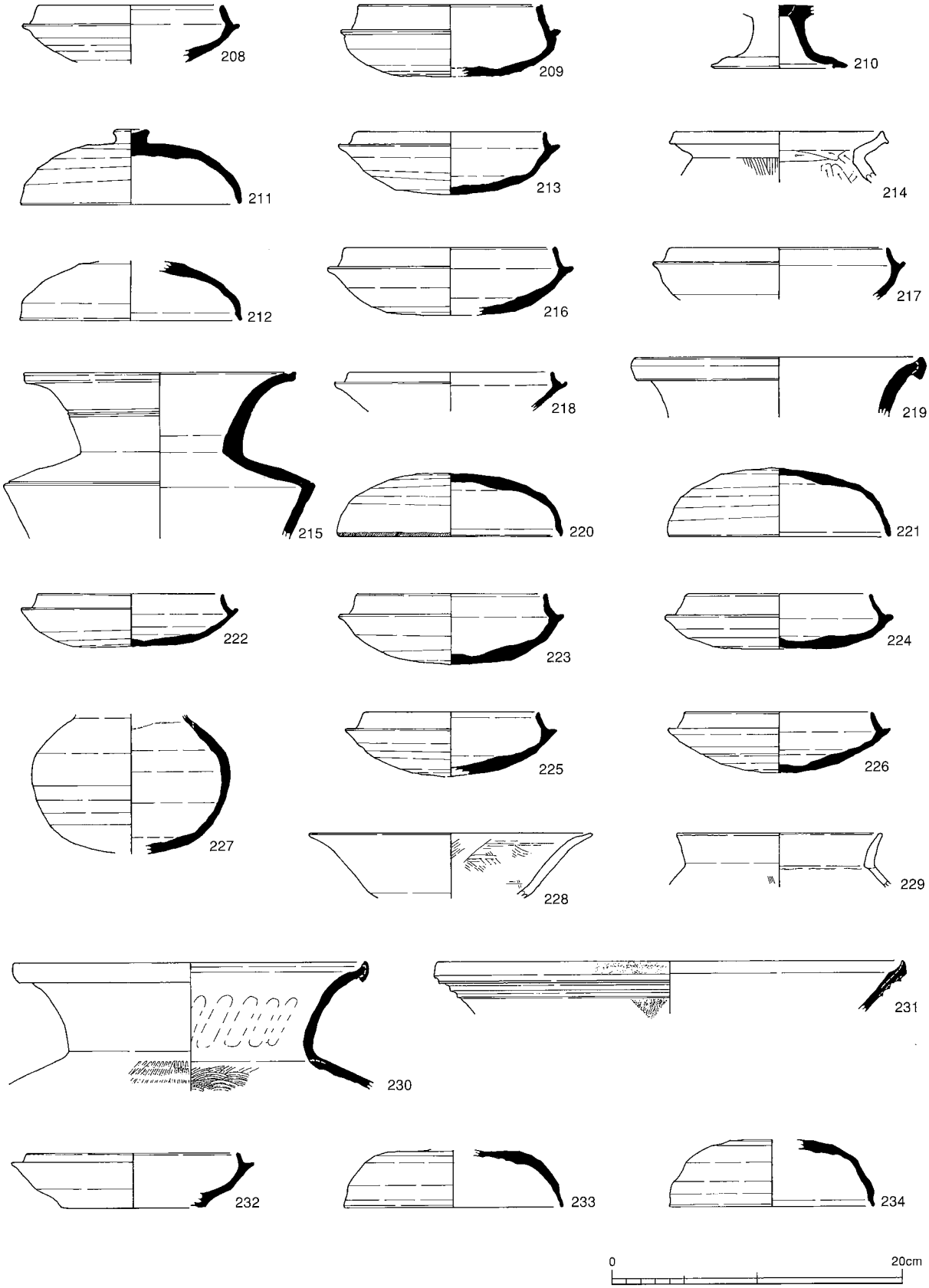
弥生時代の土器９（流路）



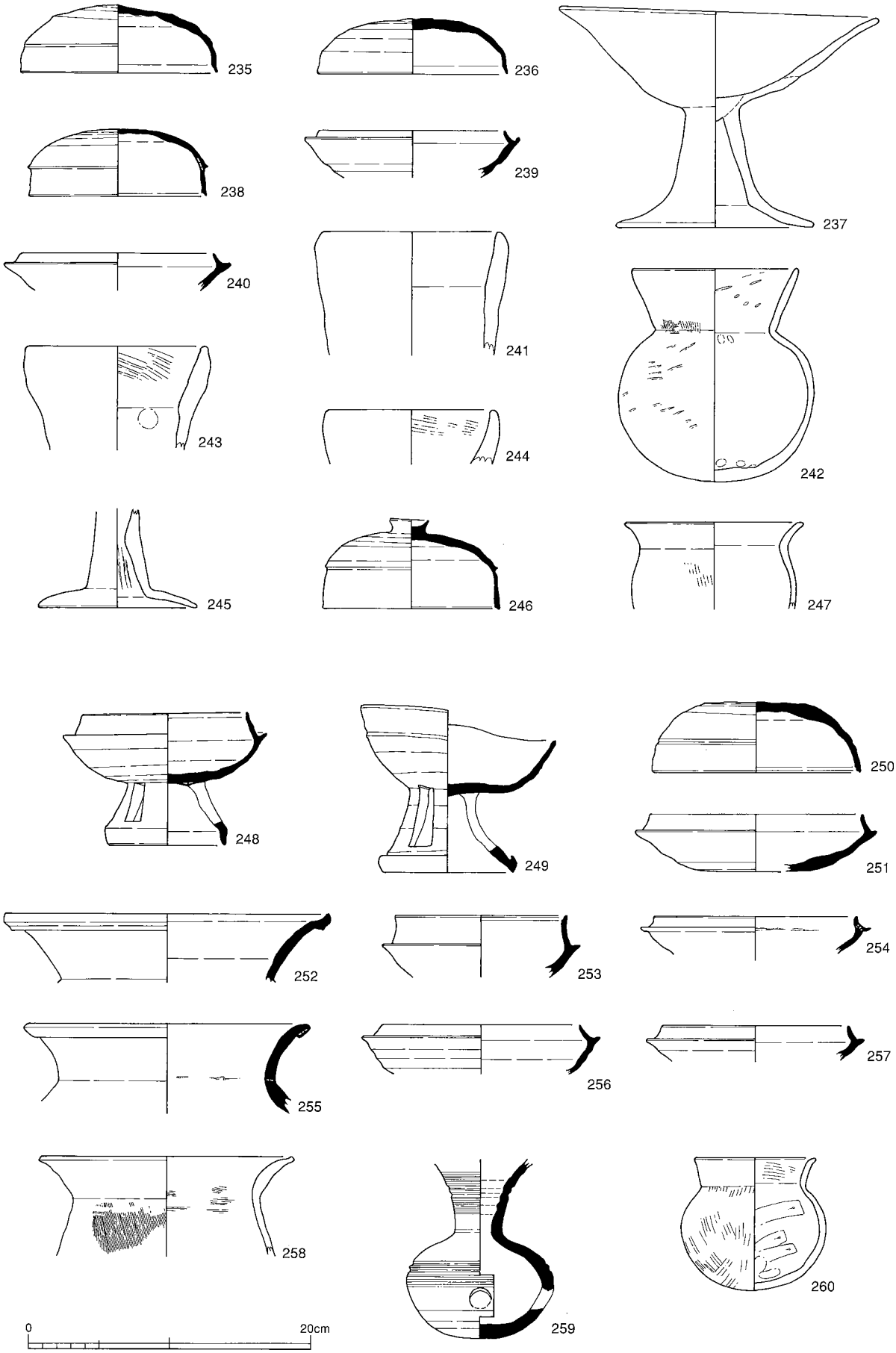
弥生時代の土器10（包含層）



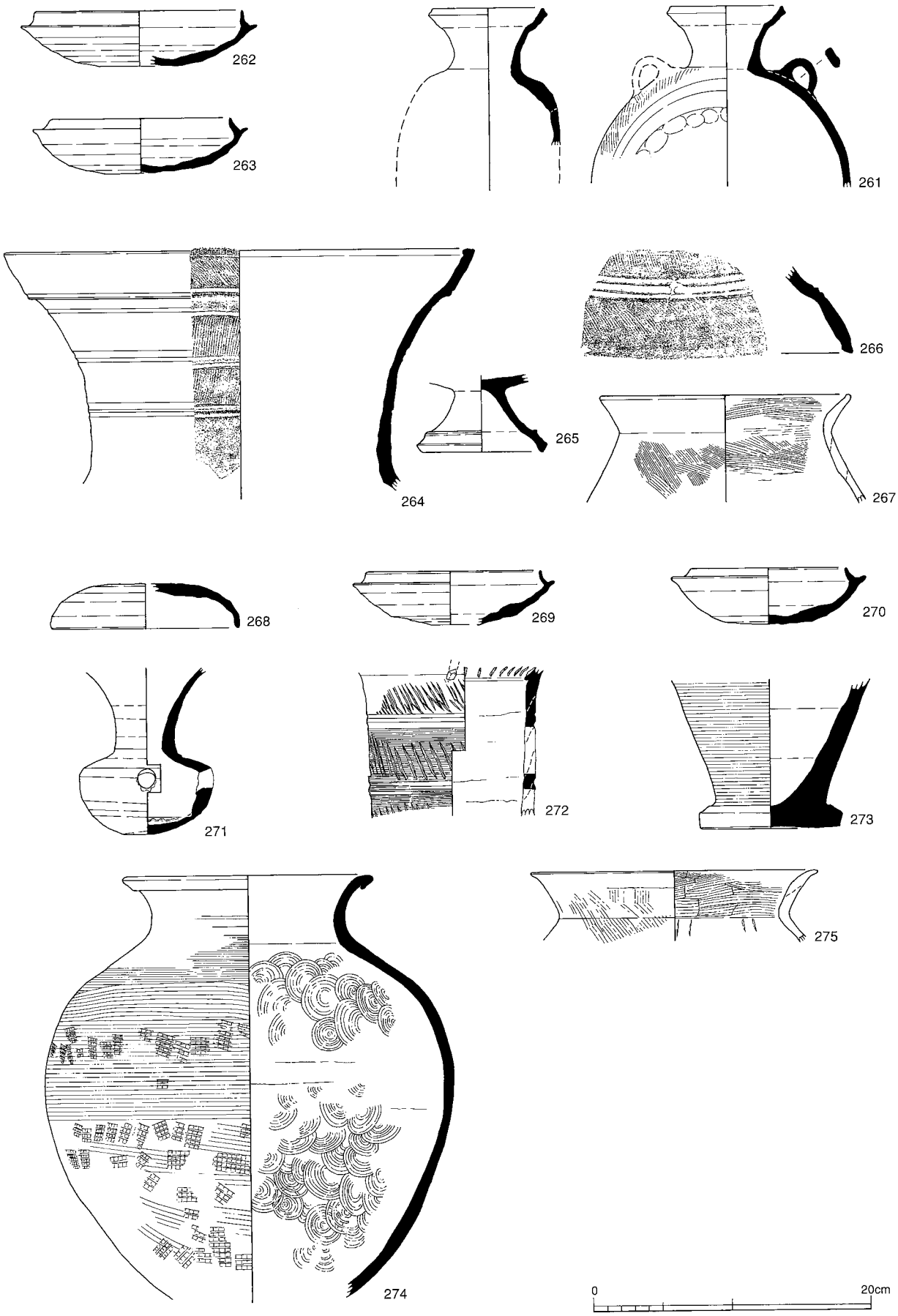
弥生時代の土器11（包含層）



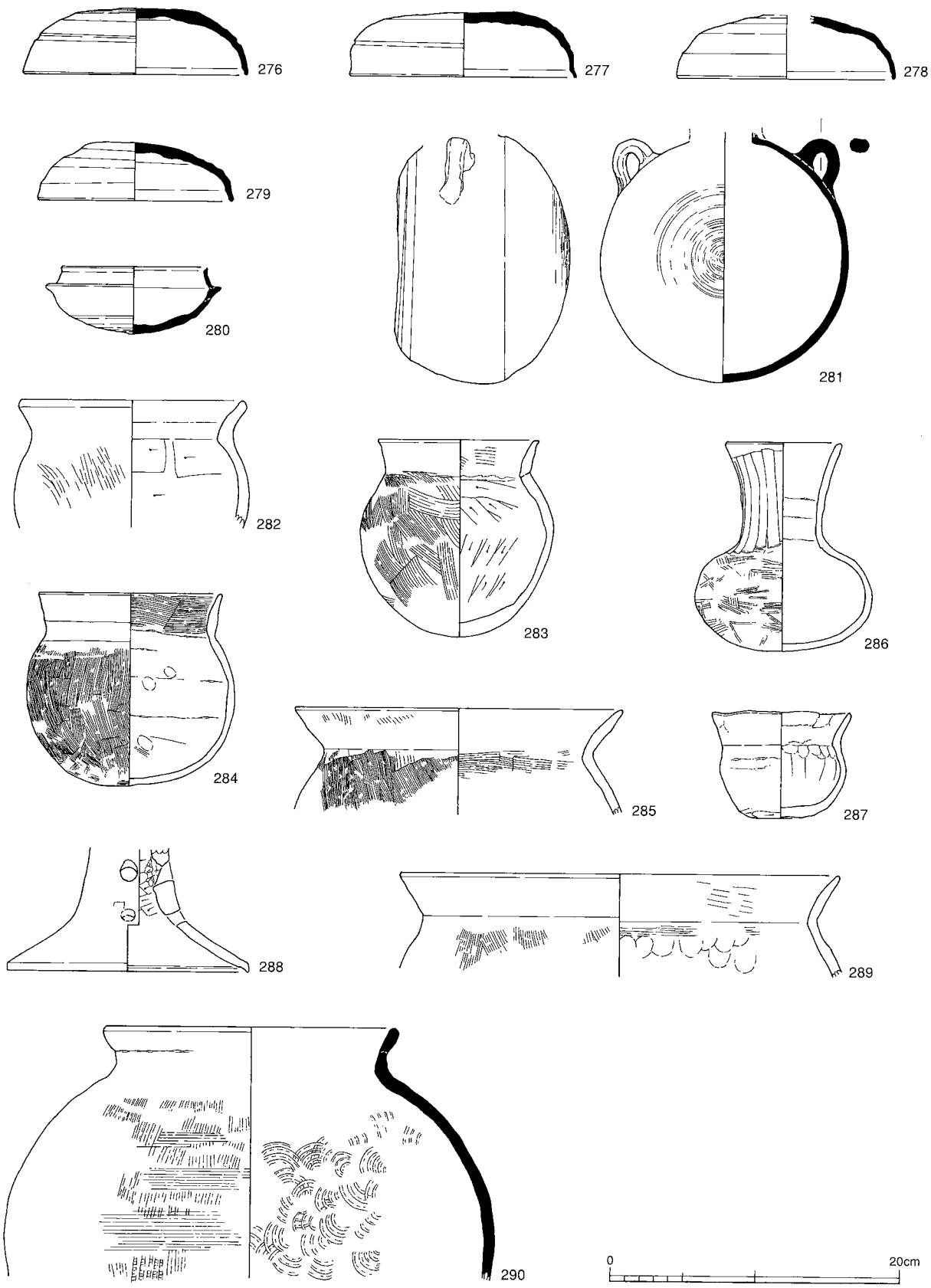
古墳時代の土器１（竪穴住居・掘立柱建物）



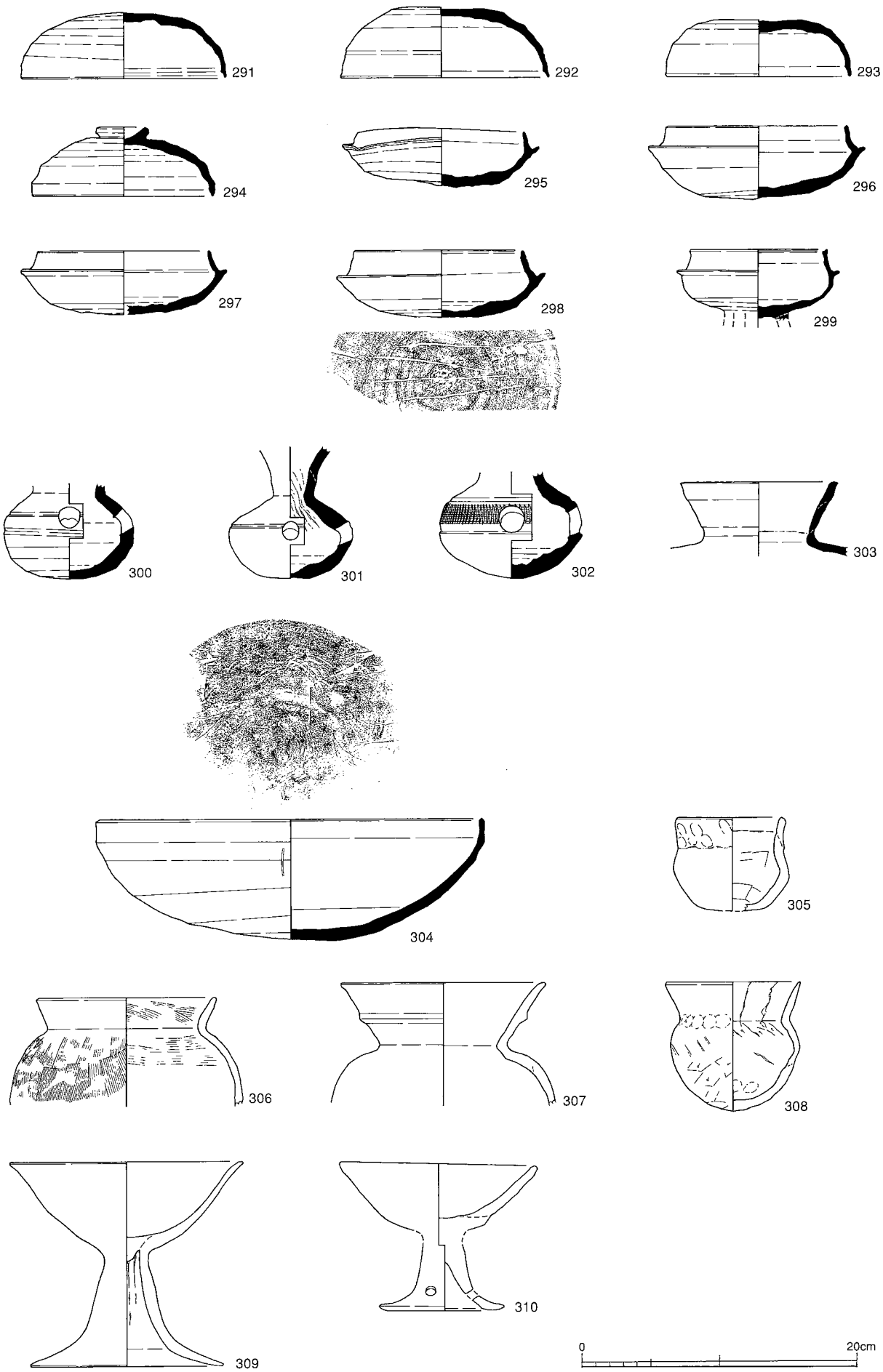
古墳時代の土器2（ピット・溝・土坑）



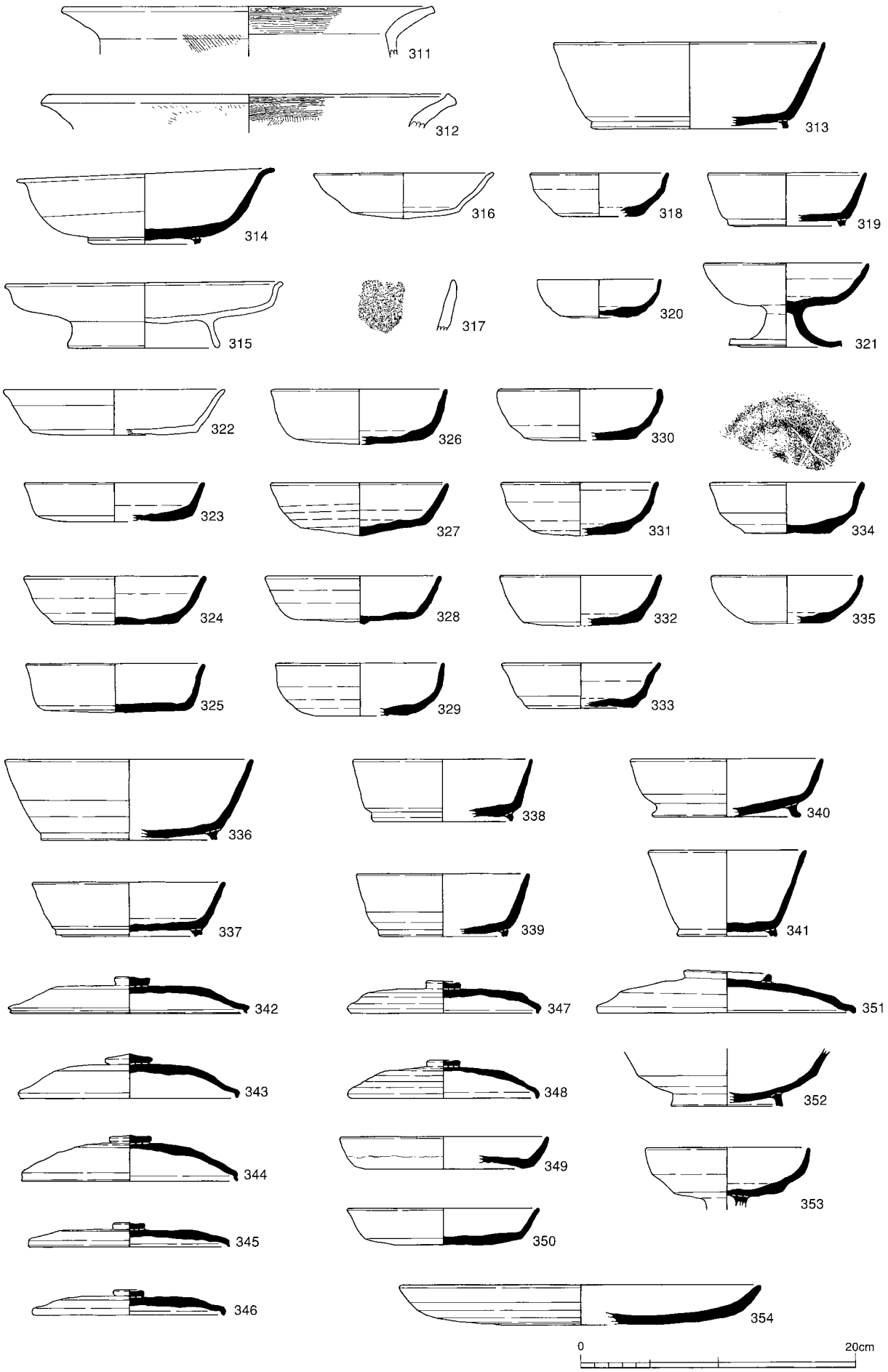
古墳時代の土器３（溝・流路）


276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
288
289
290
0
20cm

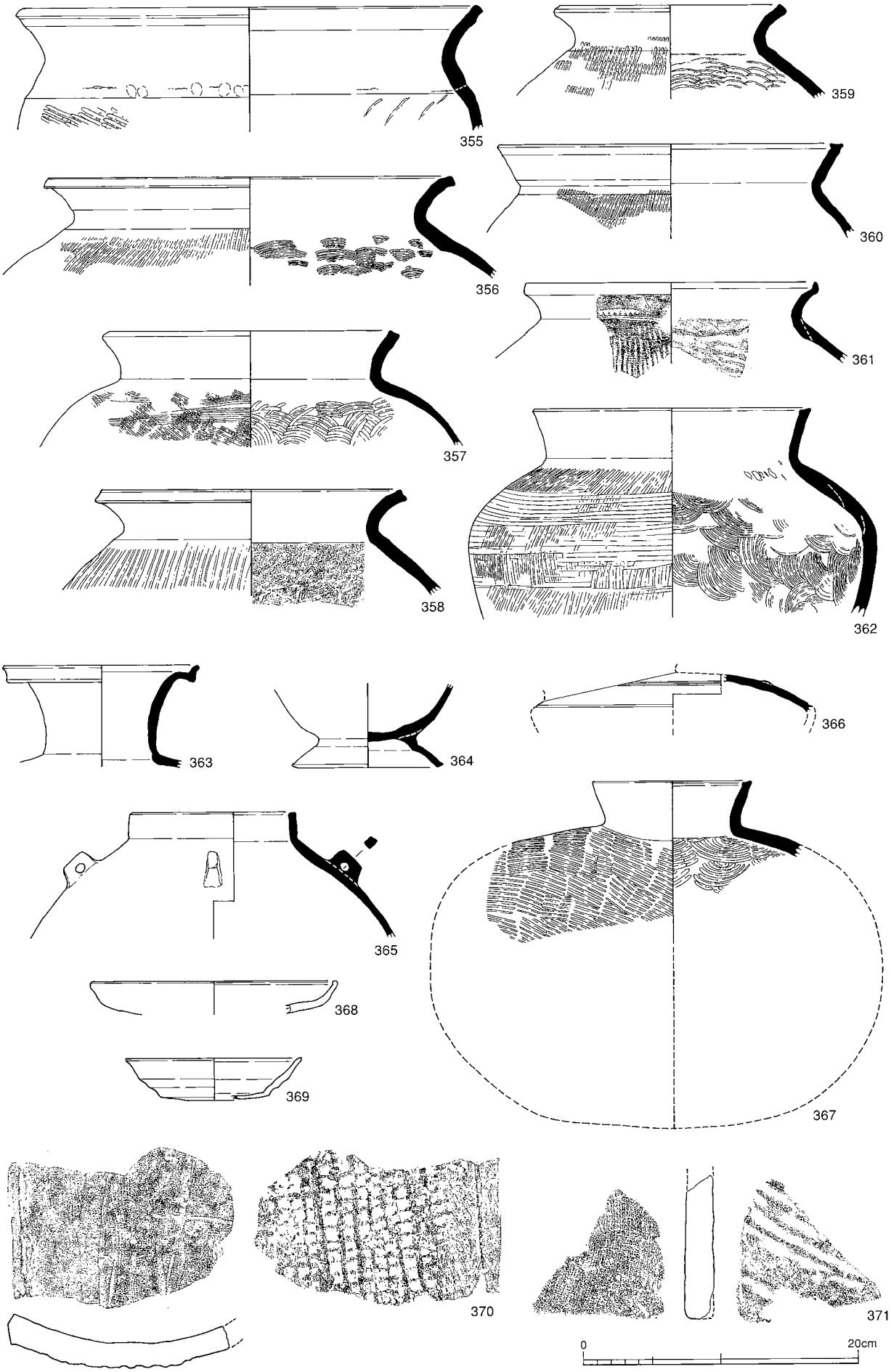
古墳時代の土器４（流路）



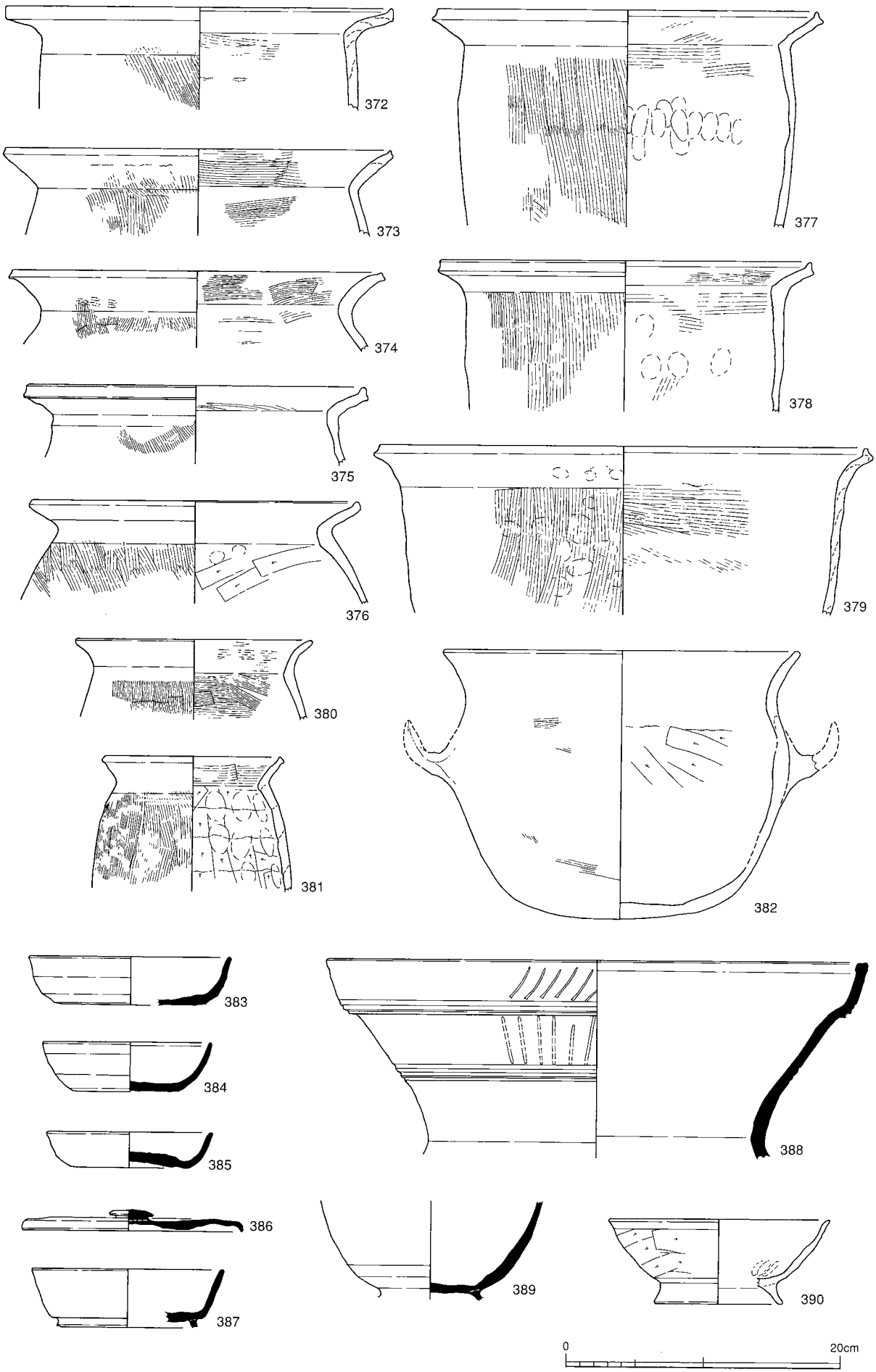
古墳時代の土器５（包含層）



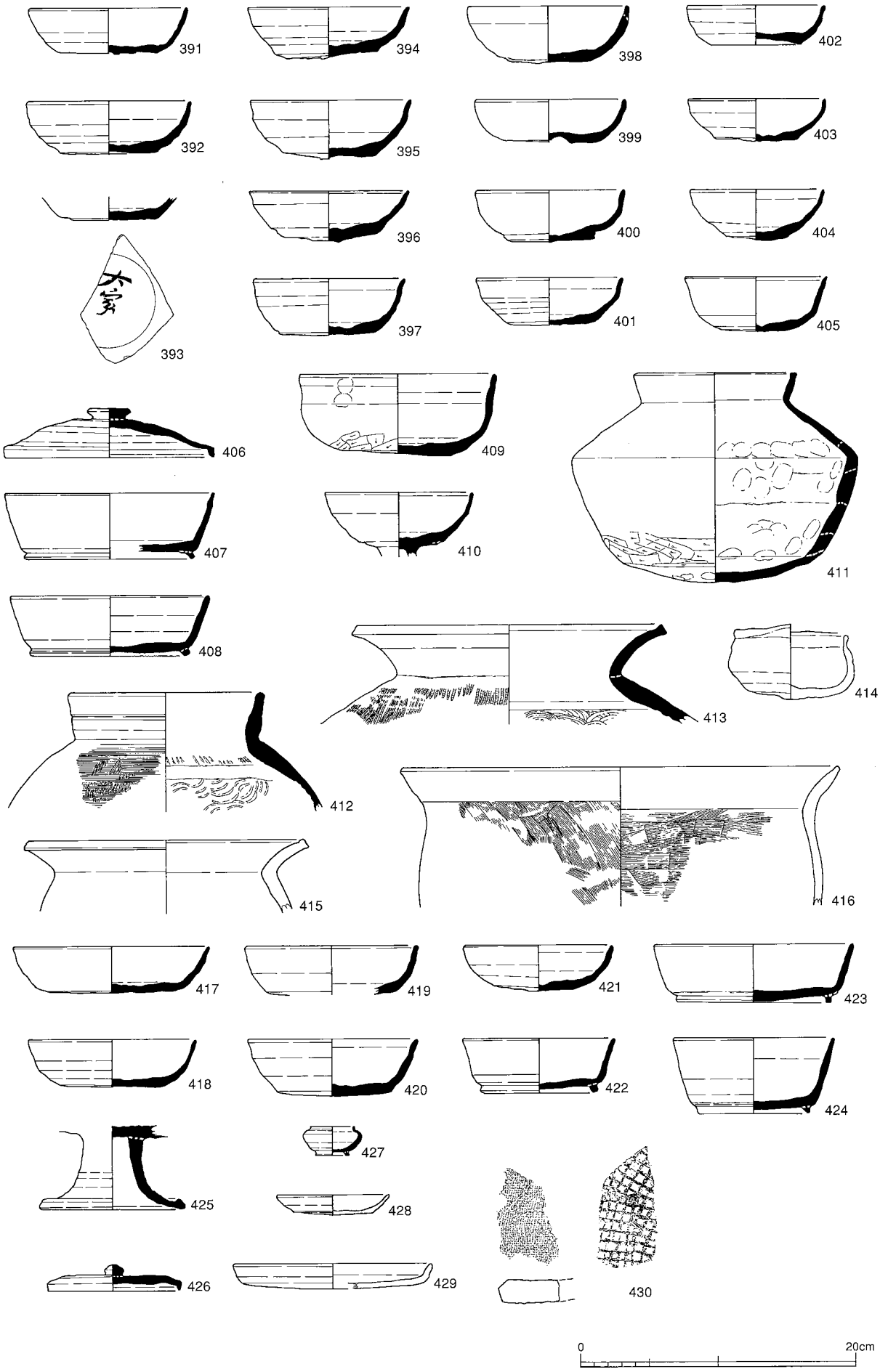
奈良時代の土器1（ピット・溝・流路）


355
359
356
360
361
357
358
362
363
364
366
365
368
367
369
370
371
0
20cm

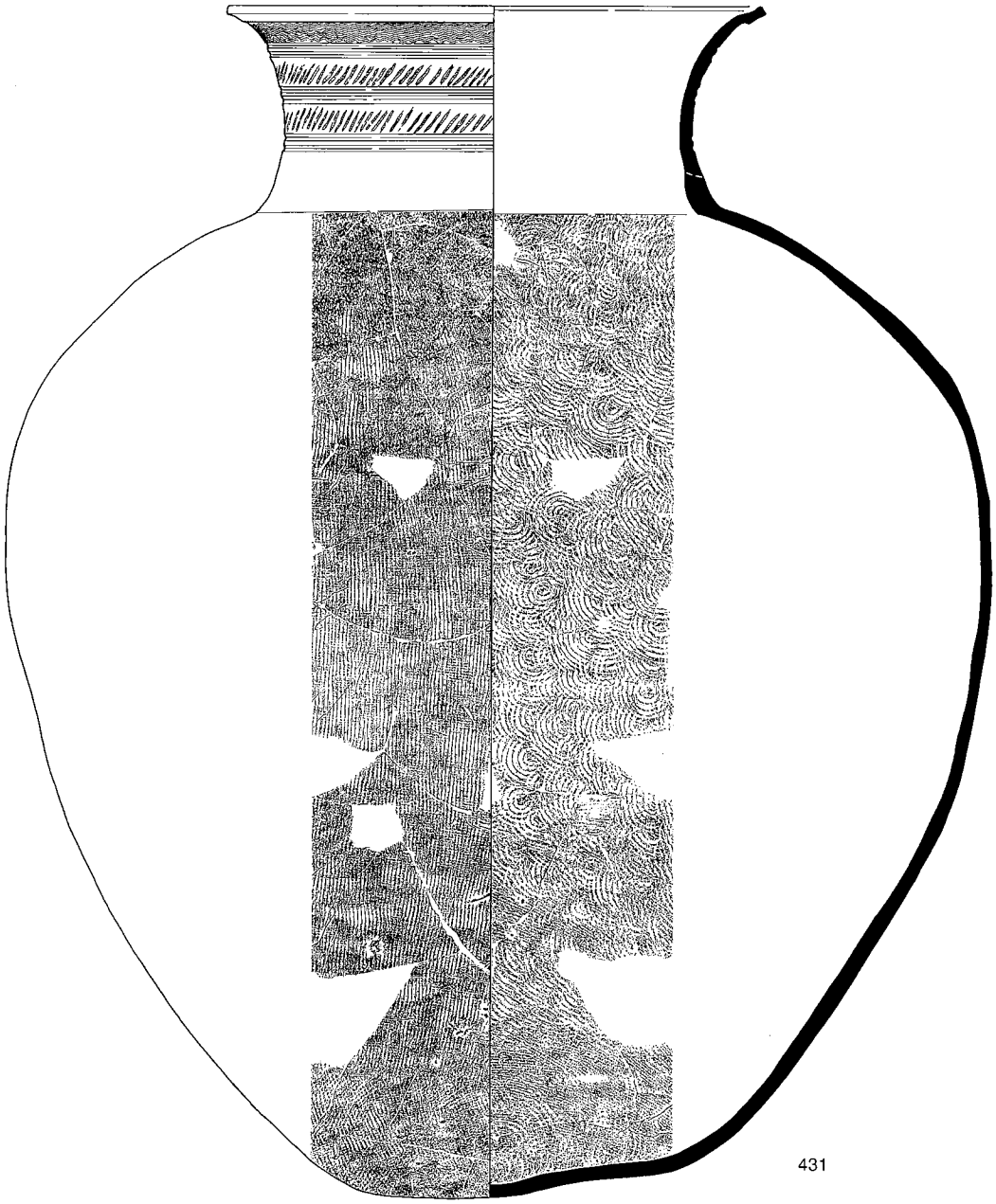
奈良時代の土器２（流路）

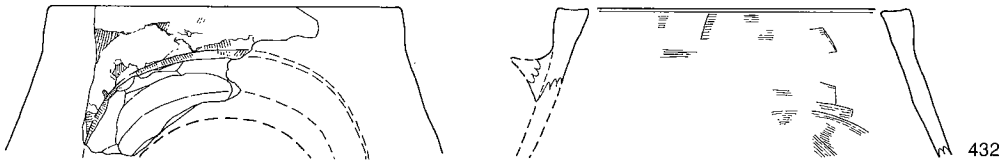

372
373
374
375
376
377
378
379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
0
20cm

奈良時代の土器3（流路）

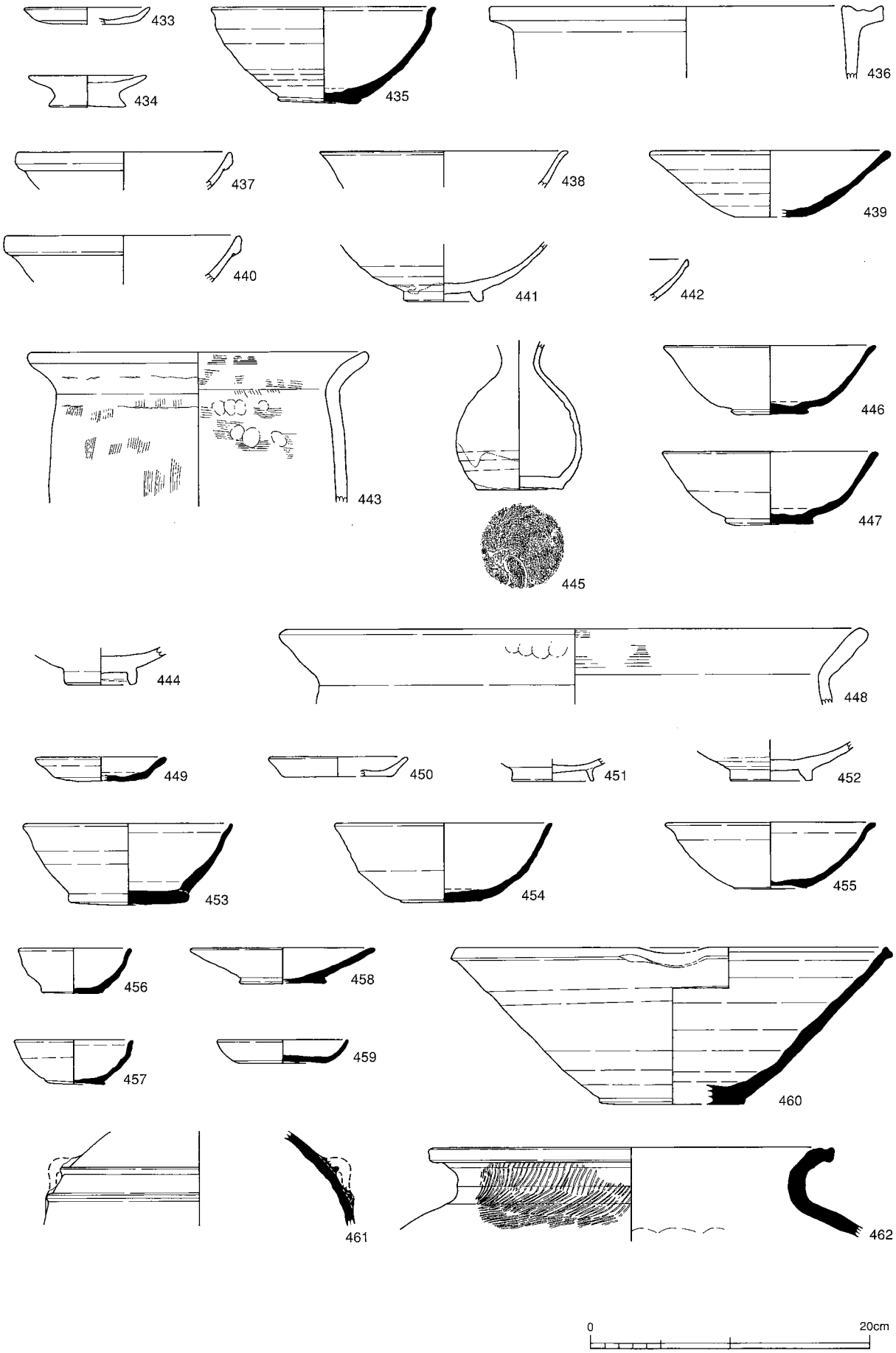


奈良時代の土器４（流路・包含層）

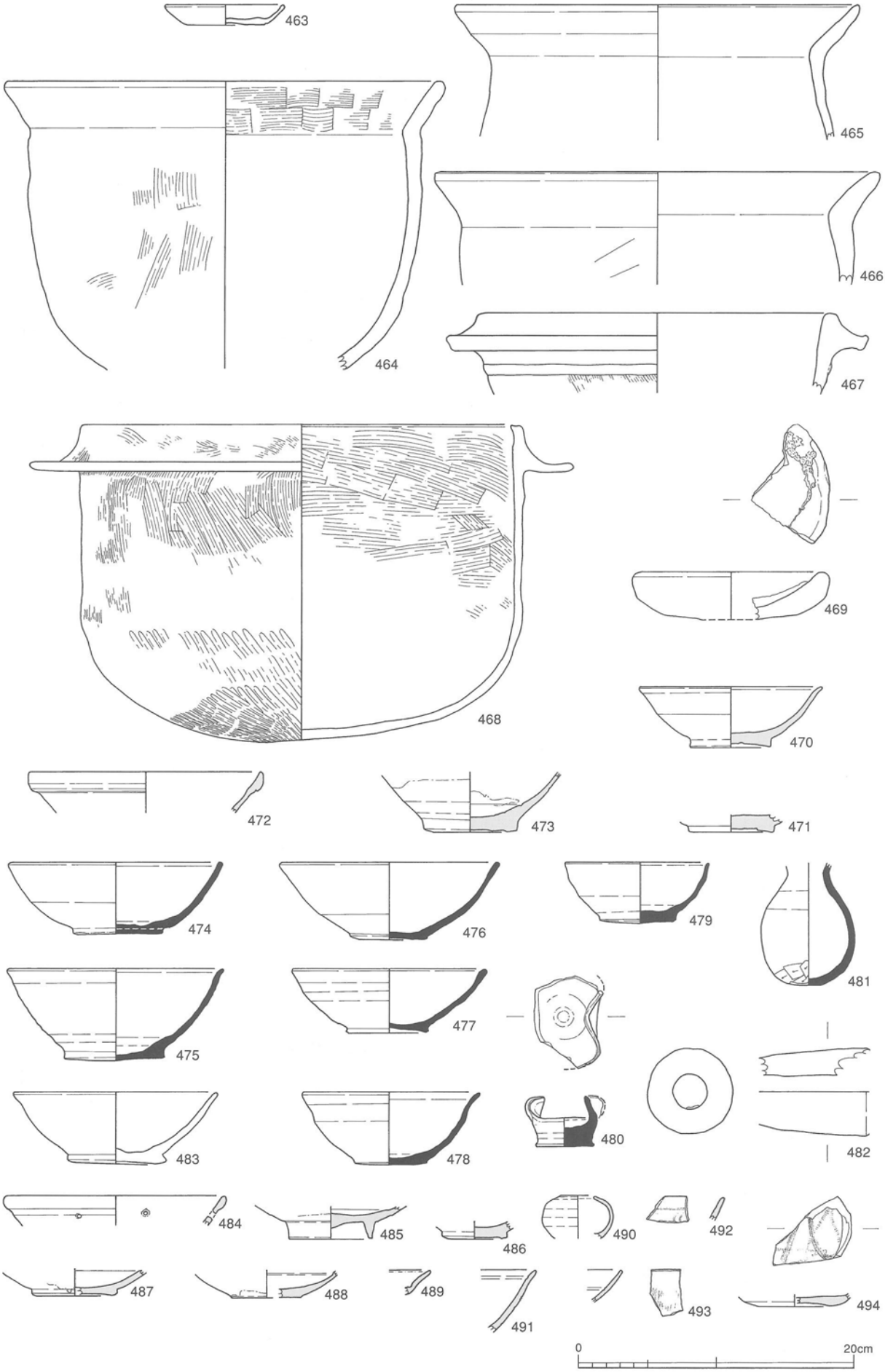




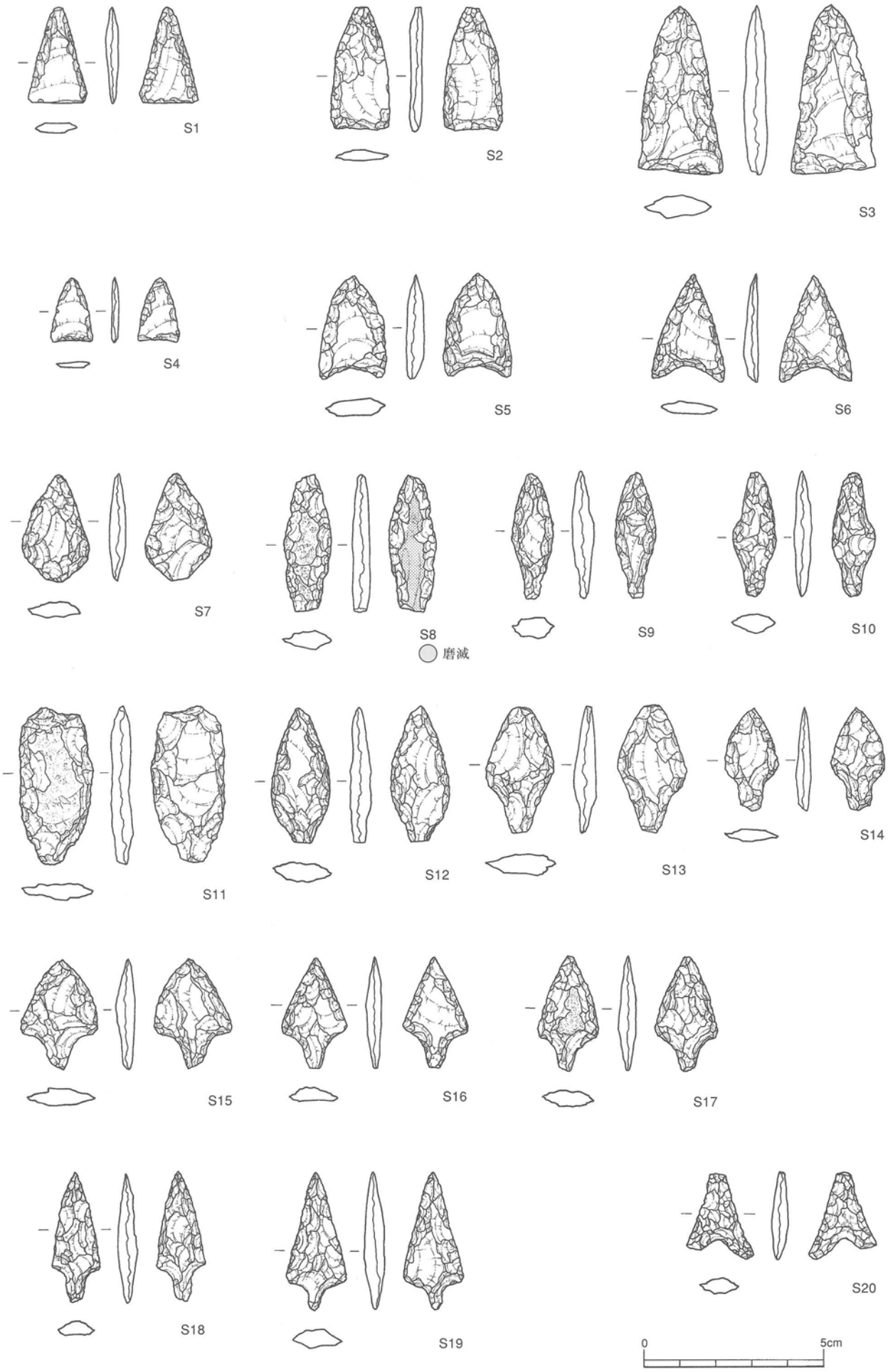
奈良時代の土器5（流路・包含層）



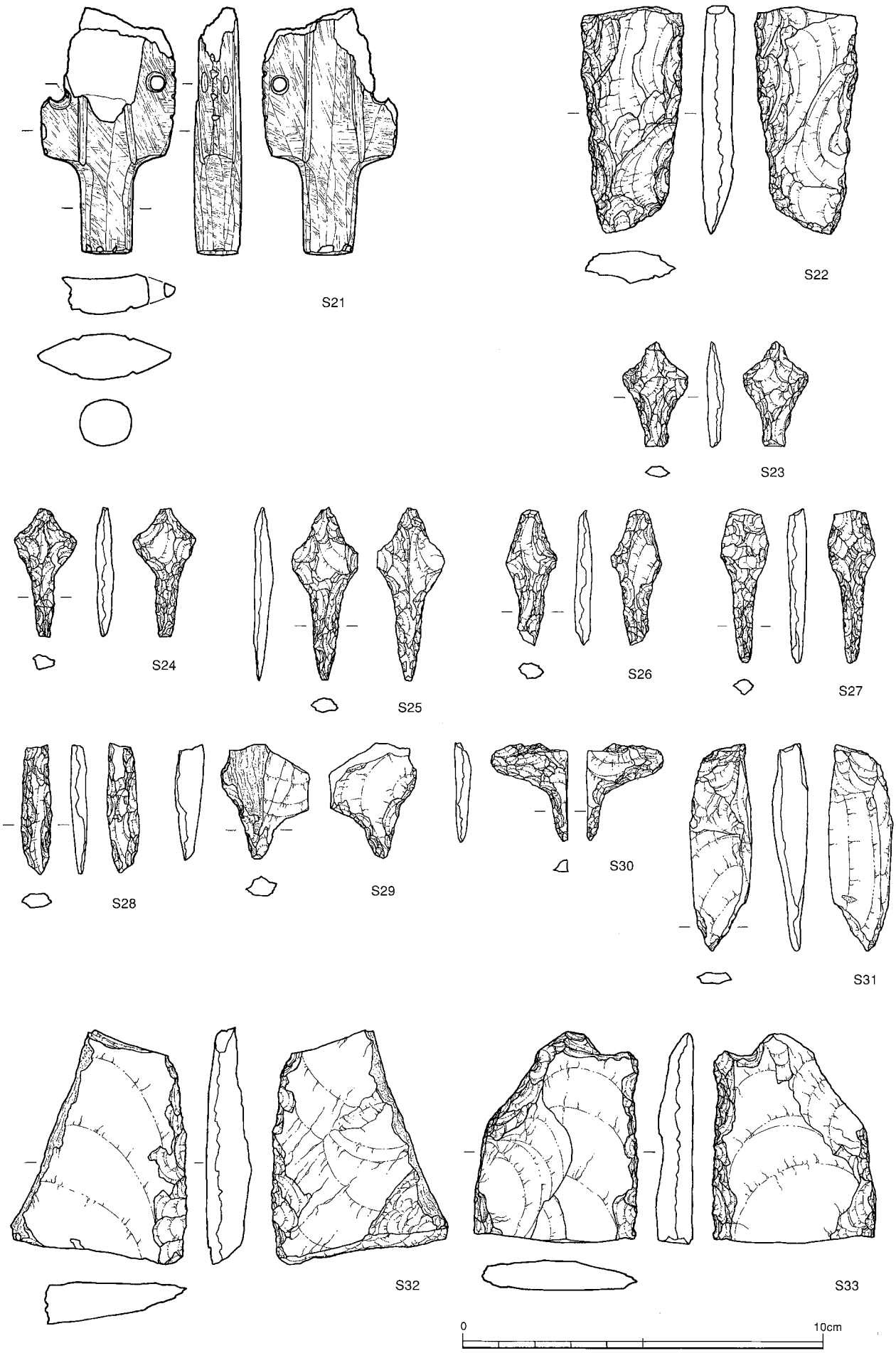
平安時代以降の土器１（ピット・溝・土坑・流路）



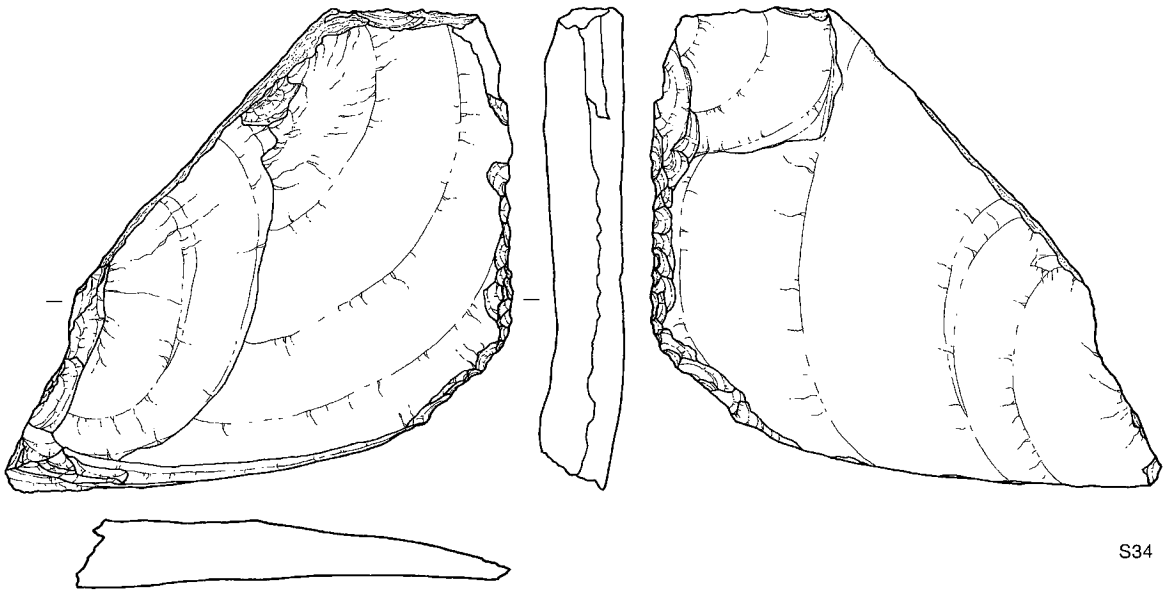
平安時代以降の土器２（流路・包含層）

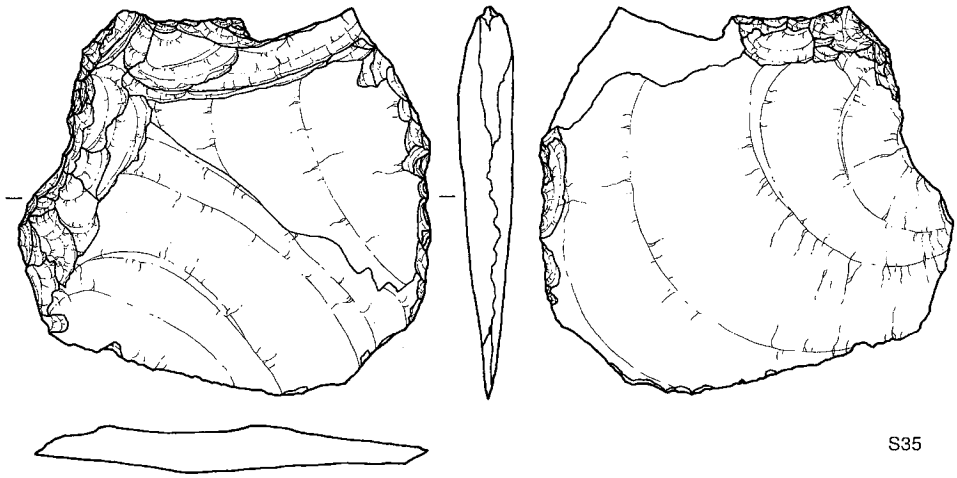

S1
S2
S3
S4
S5
S6
S7
S8
磨滅
S9
S10
S11
S12
S13
S14
S15
S16
S17
S18
S19
S20
0
5cm

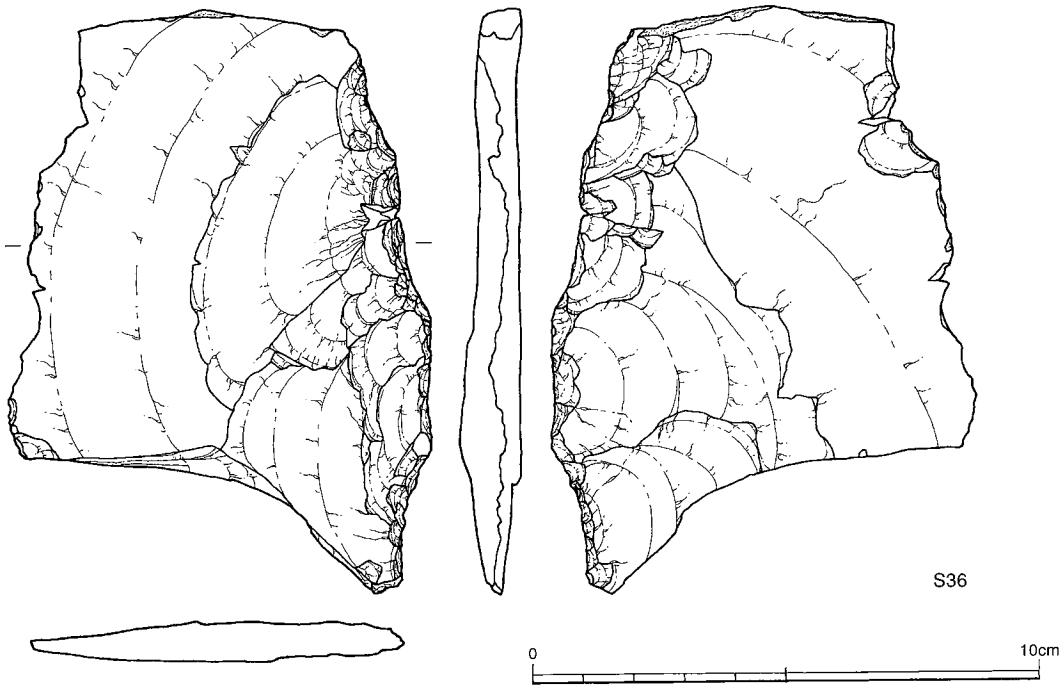
打製石鏃



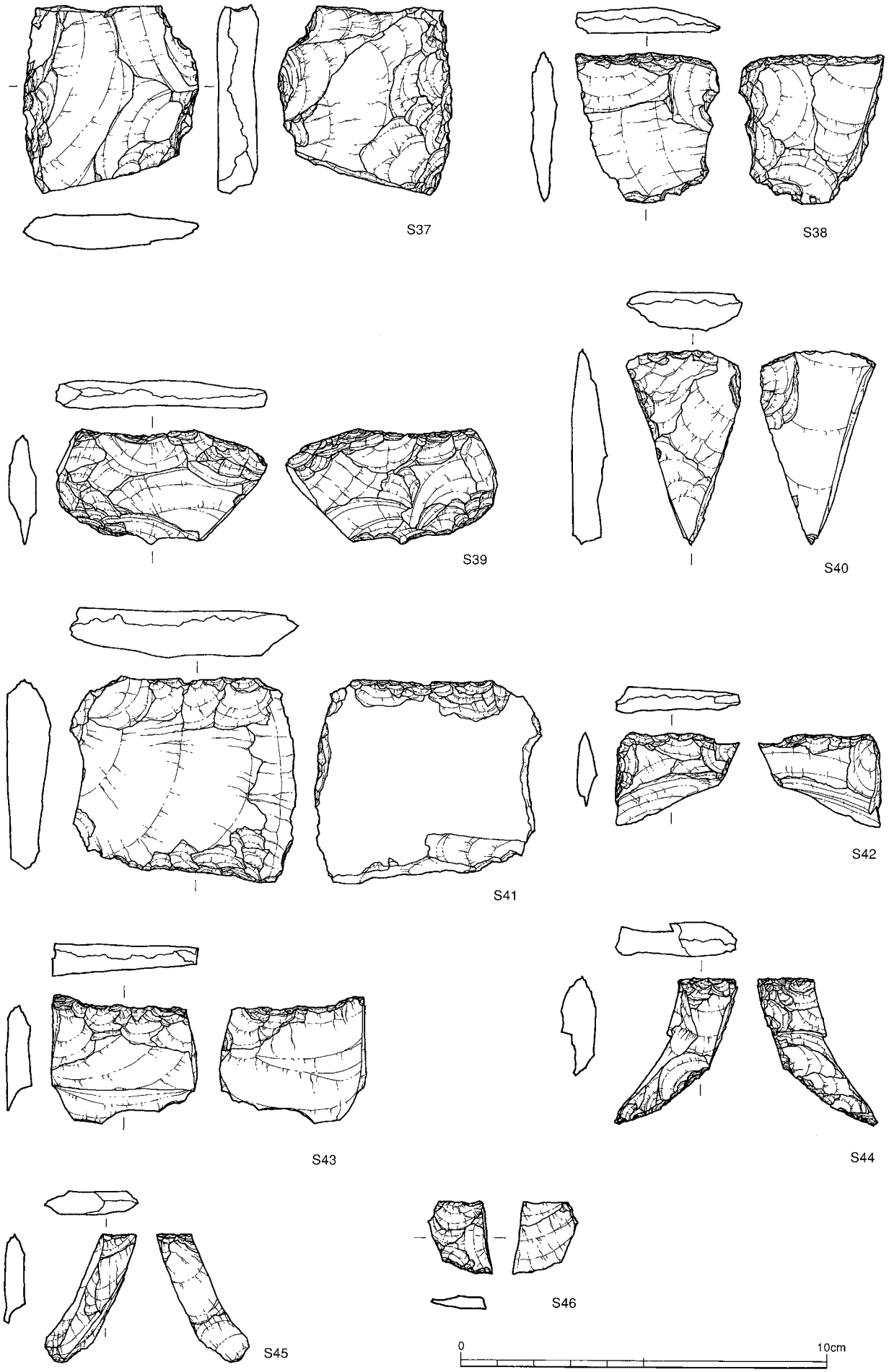
銅剣形石剣・打製石剣・石錐・削器1



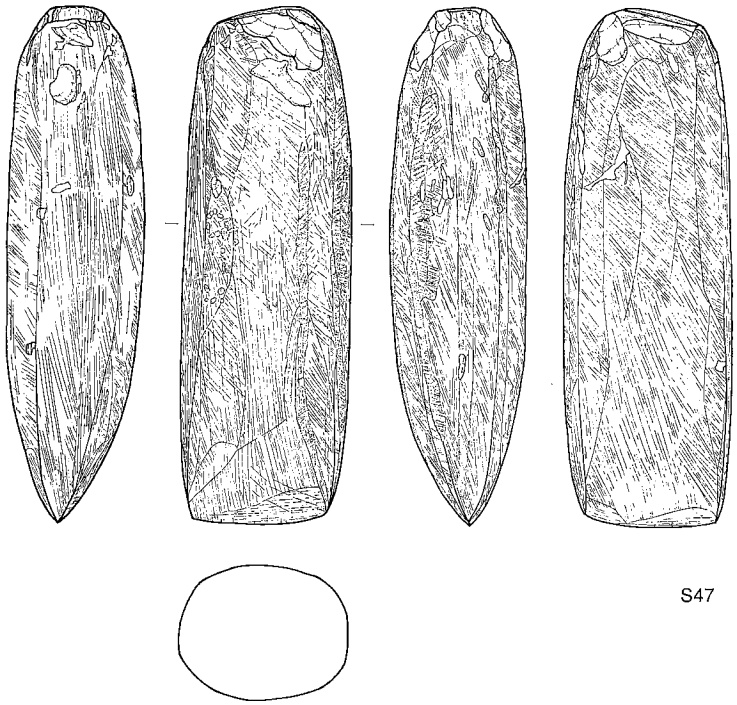




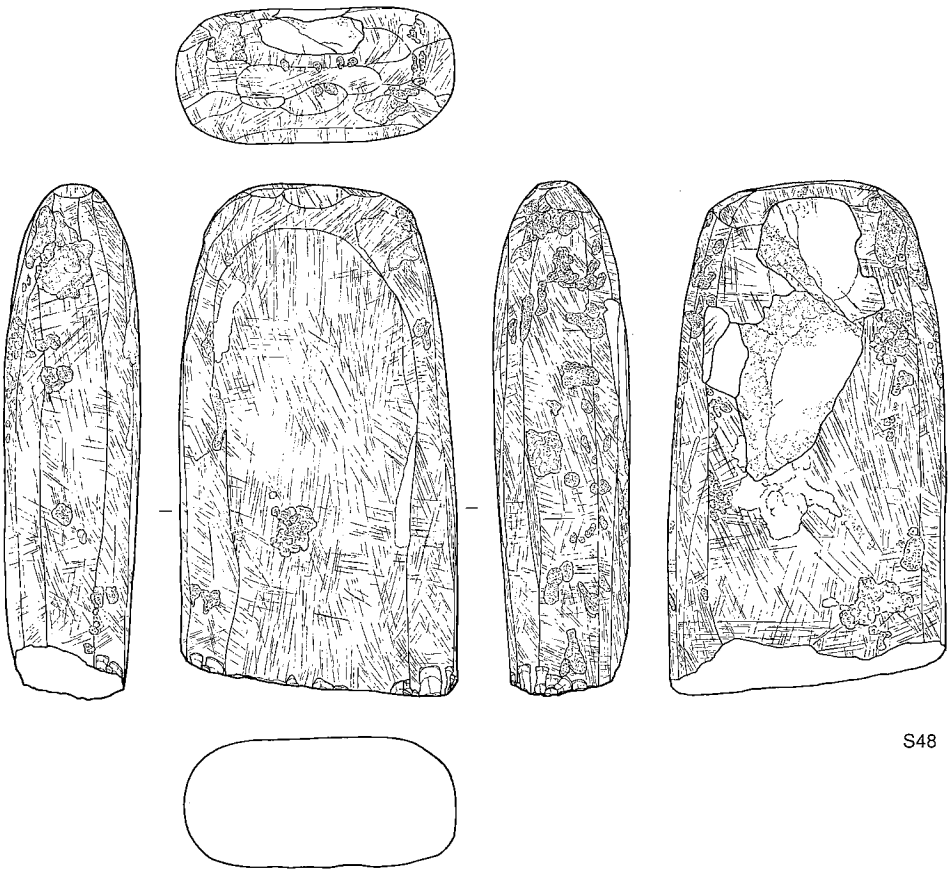
削器2



削器3・楔形石器



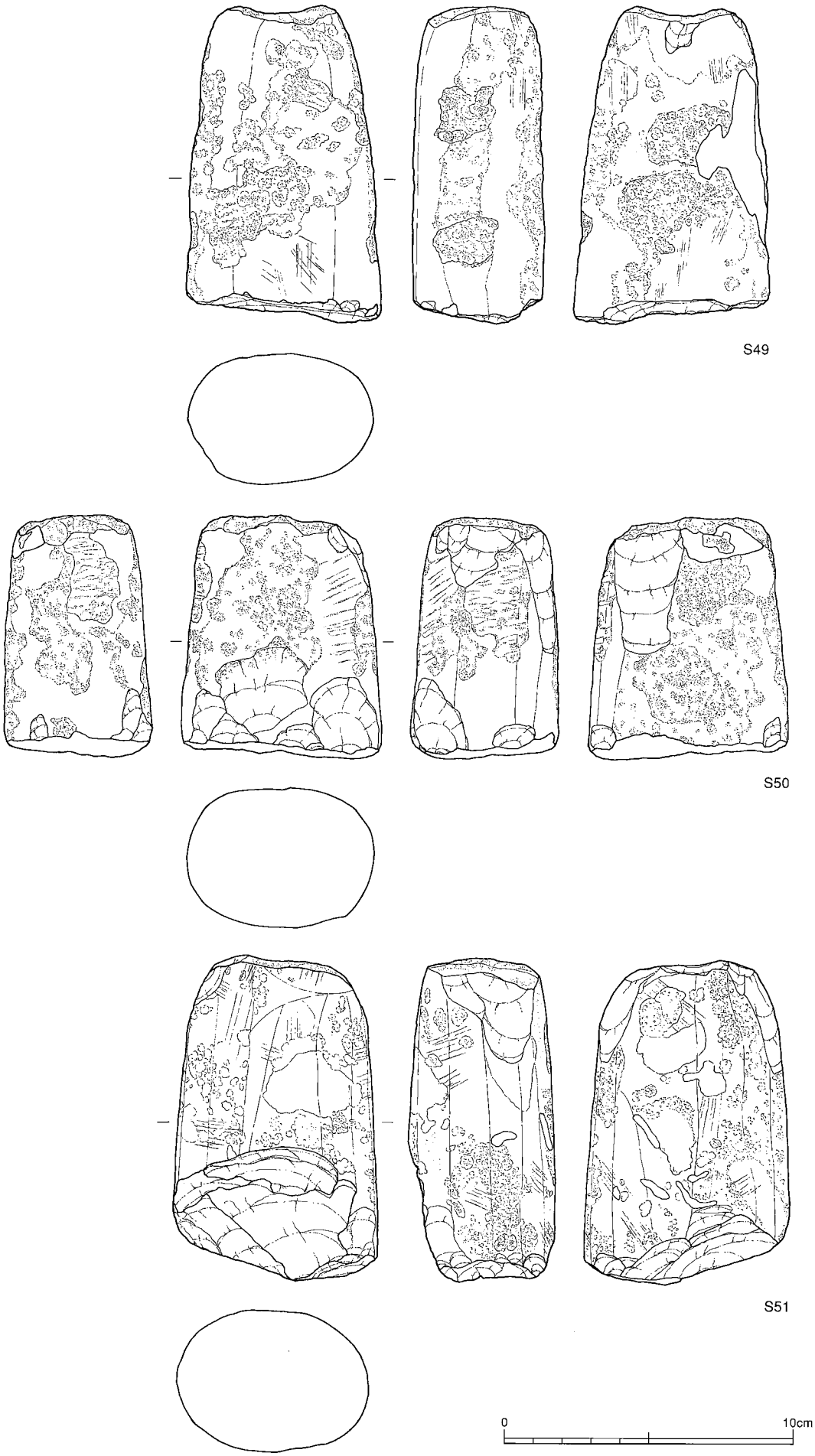
S47



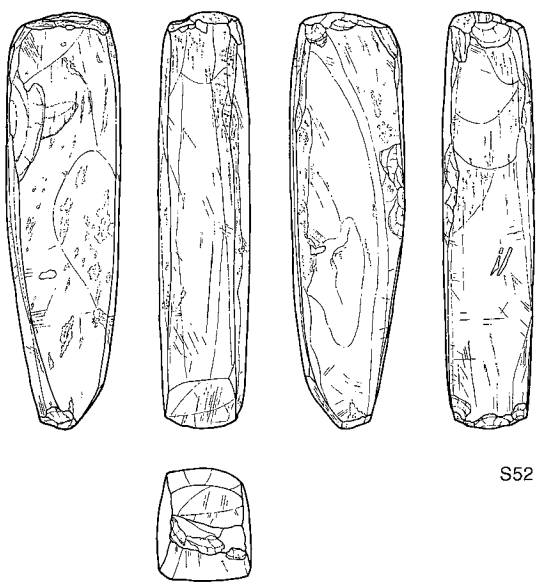
S48

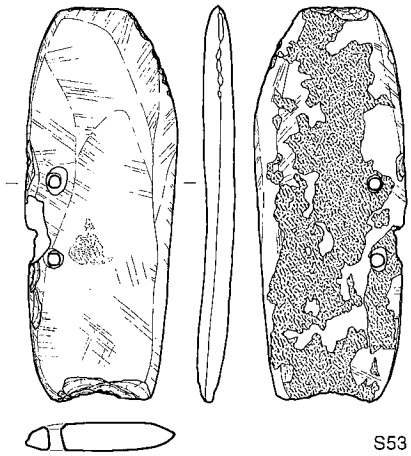
0 10cm

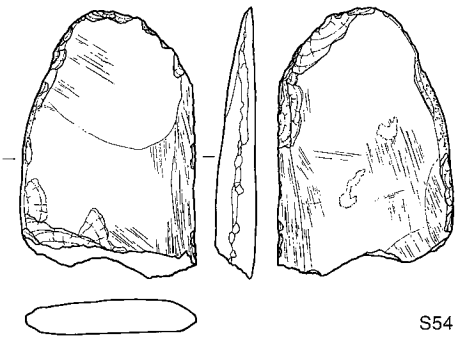
磨製石斧1

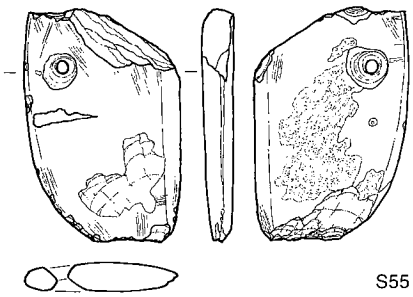


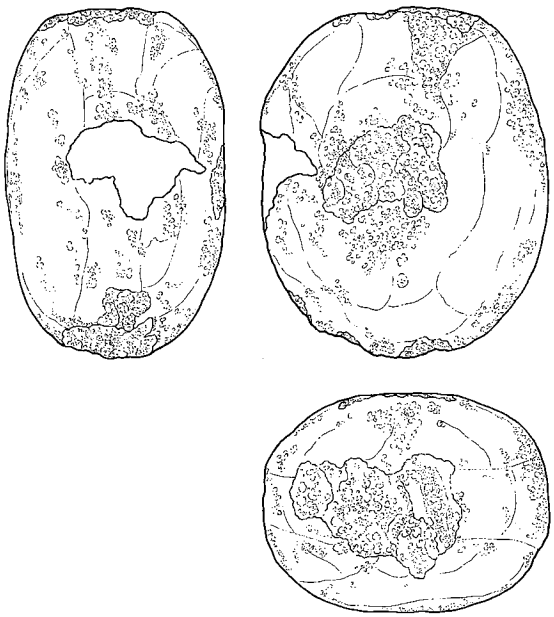
磨製石斧2

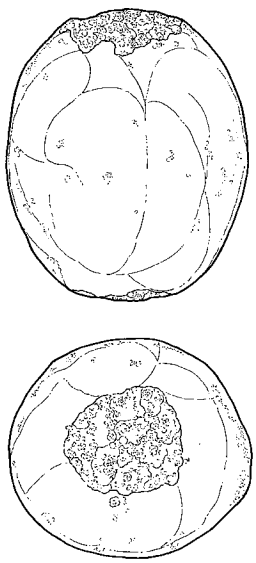


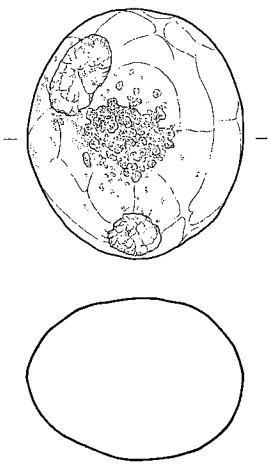


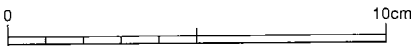




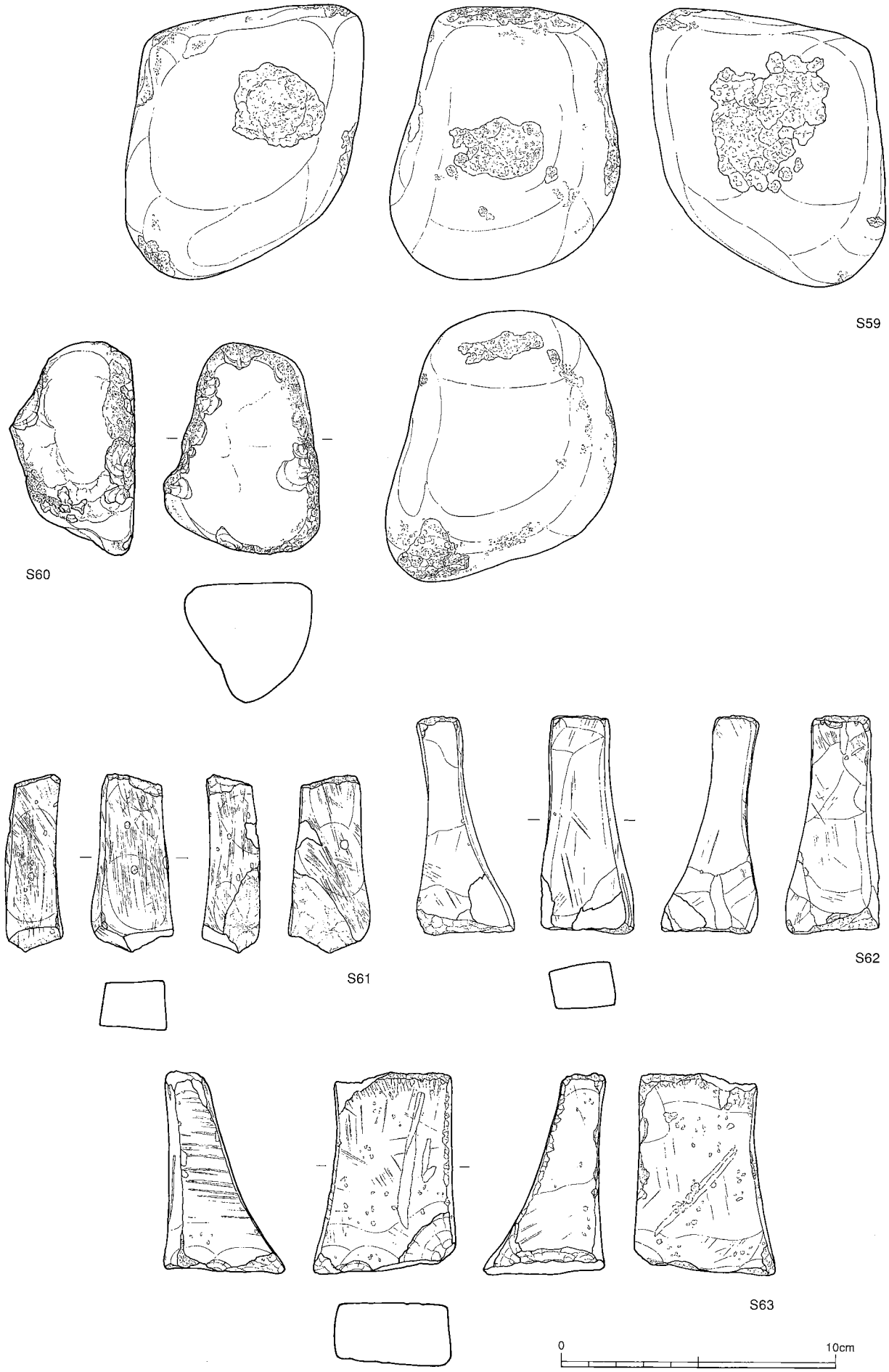




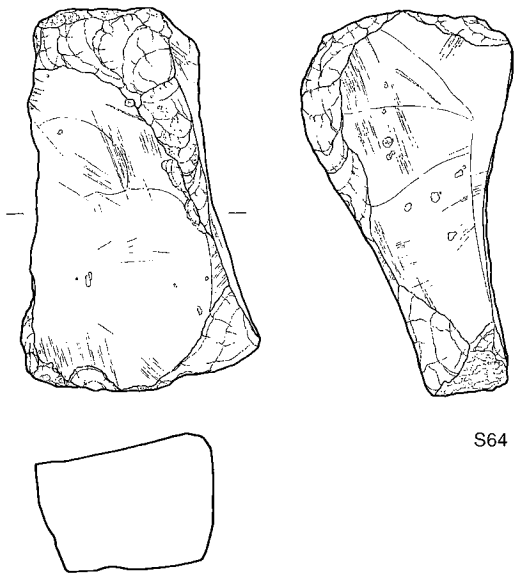




磨製石斧3・磨製石庖丁・敲石1

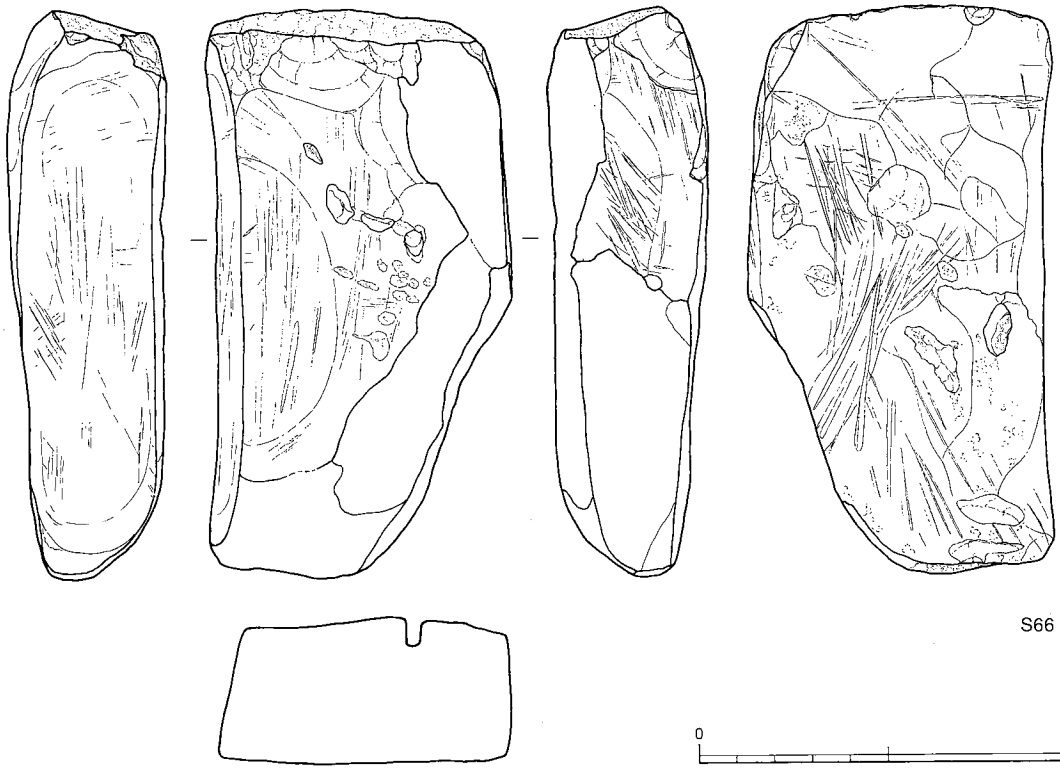


敲石2・砥石1



S64

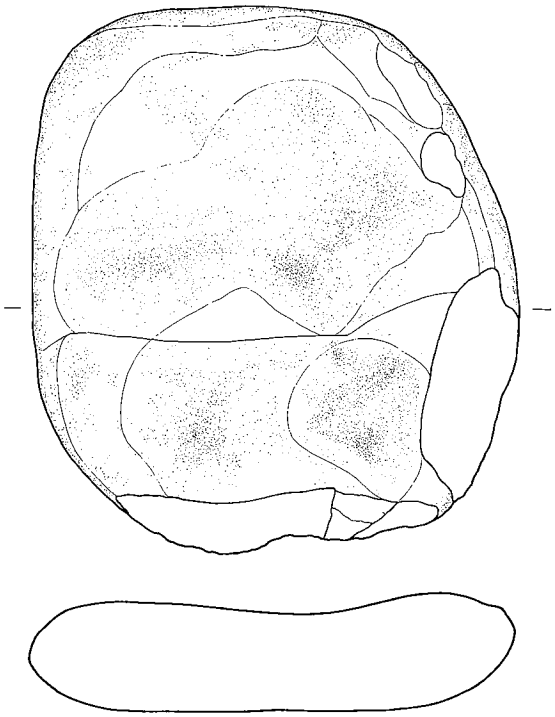
S65



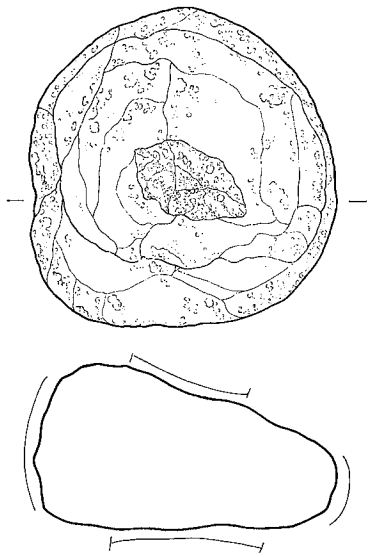
S66

0 10cm

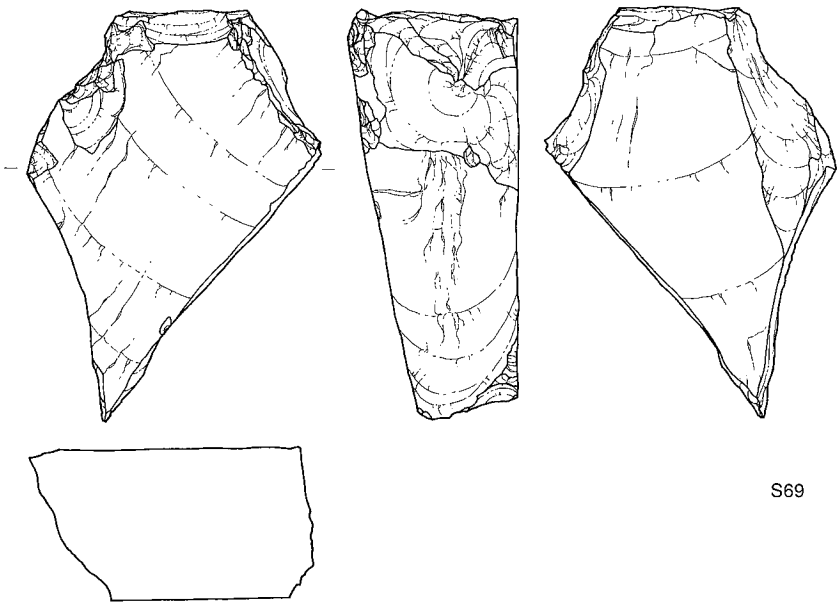
砥石2



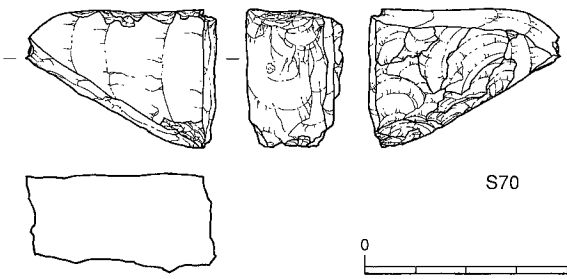
S67



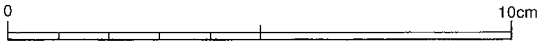
S68



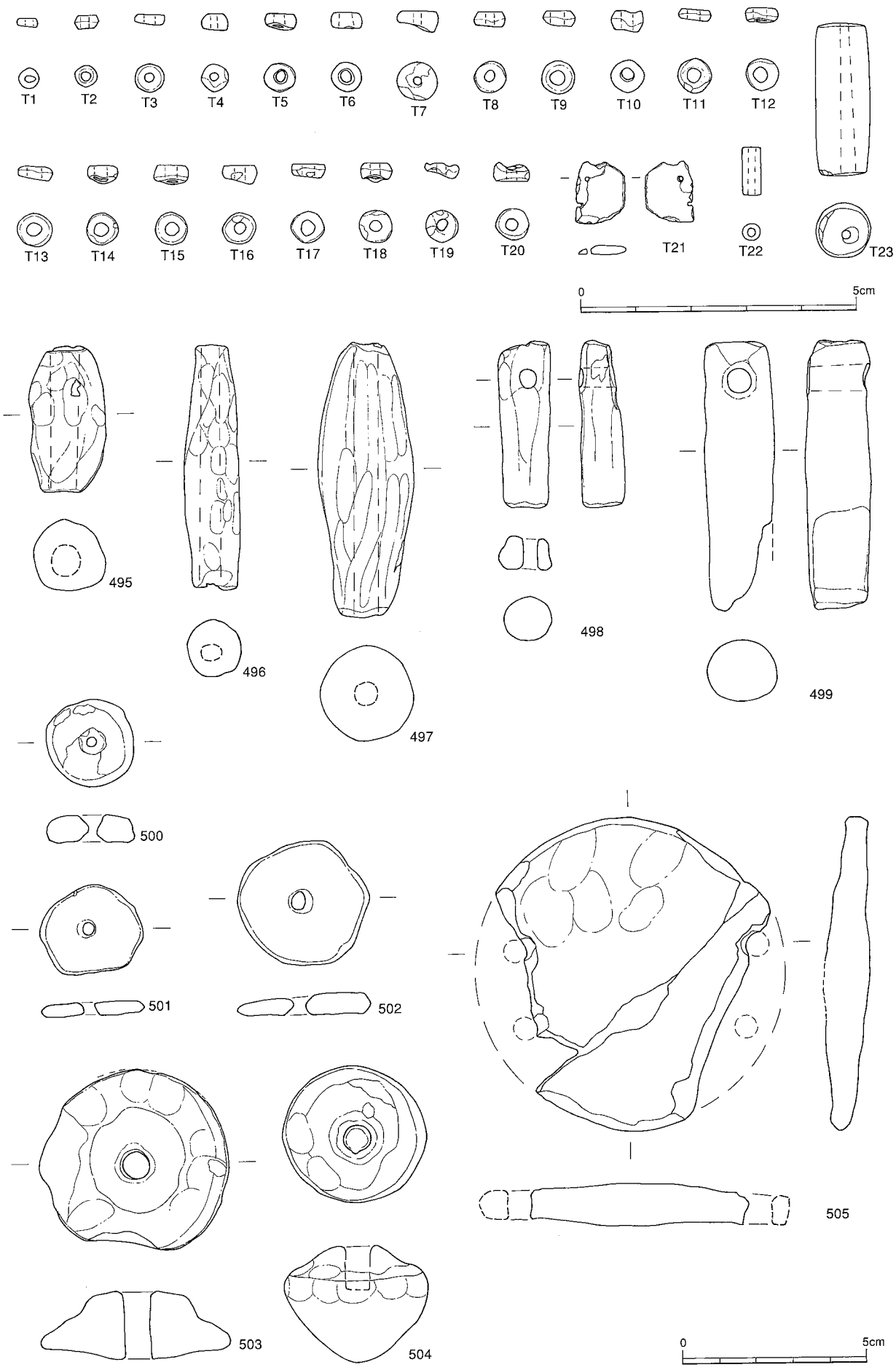
S69



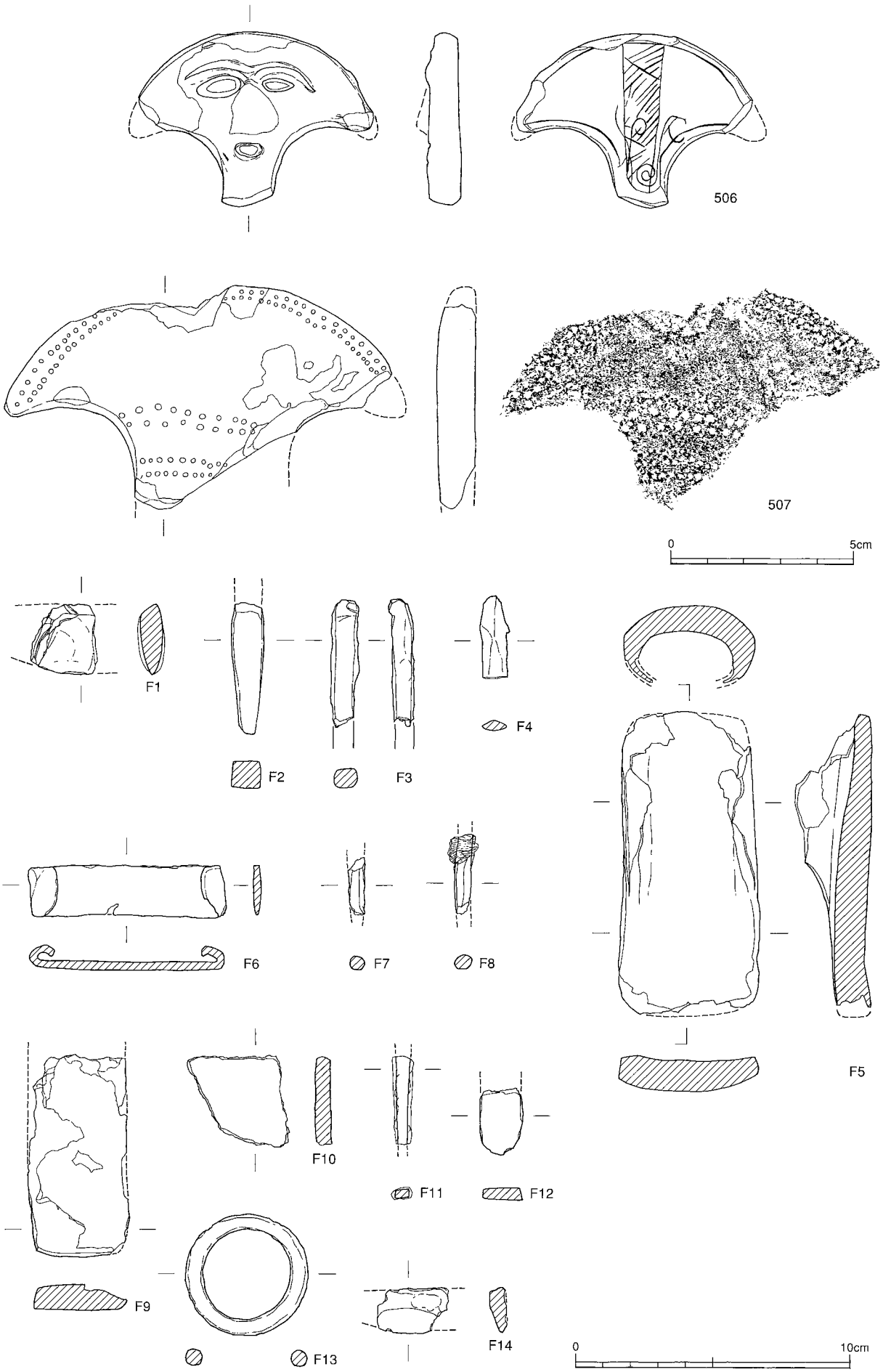
S70



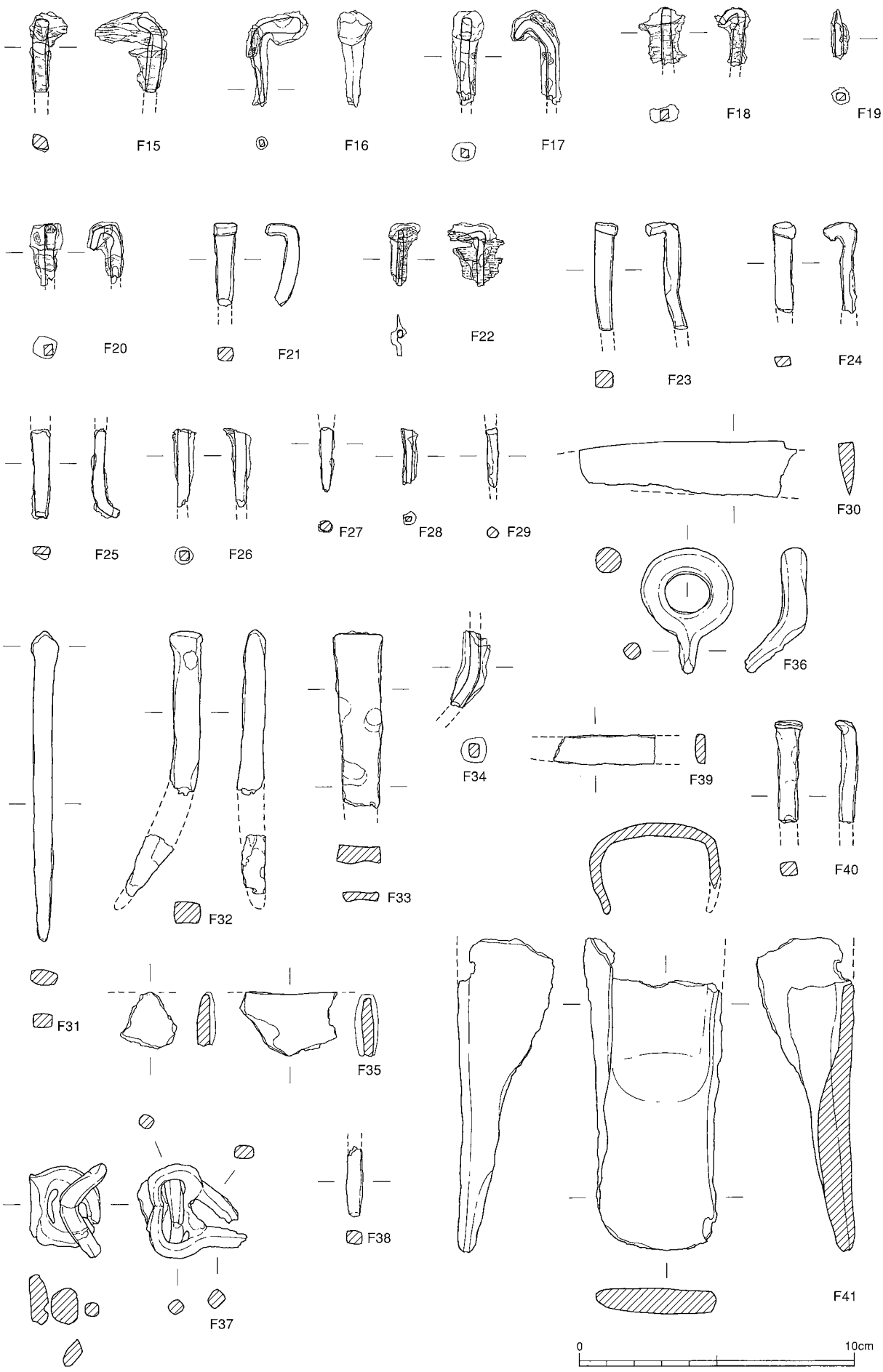
石皿・凹み石・石核


T1
T2
T3
T4
T5
T6
T7
T8
T9
T10
T11
T12
T13
T14
T15
T16
T17
T18
T19
T20
T21
T22
T23
0
5cm
495
496
497
498
499
500
501
502
503
504
505
0
5cm

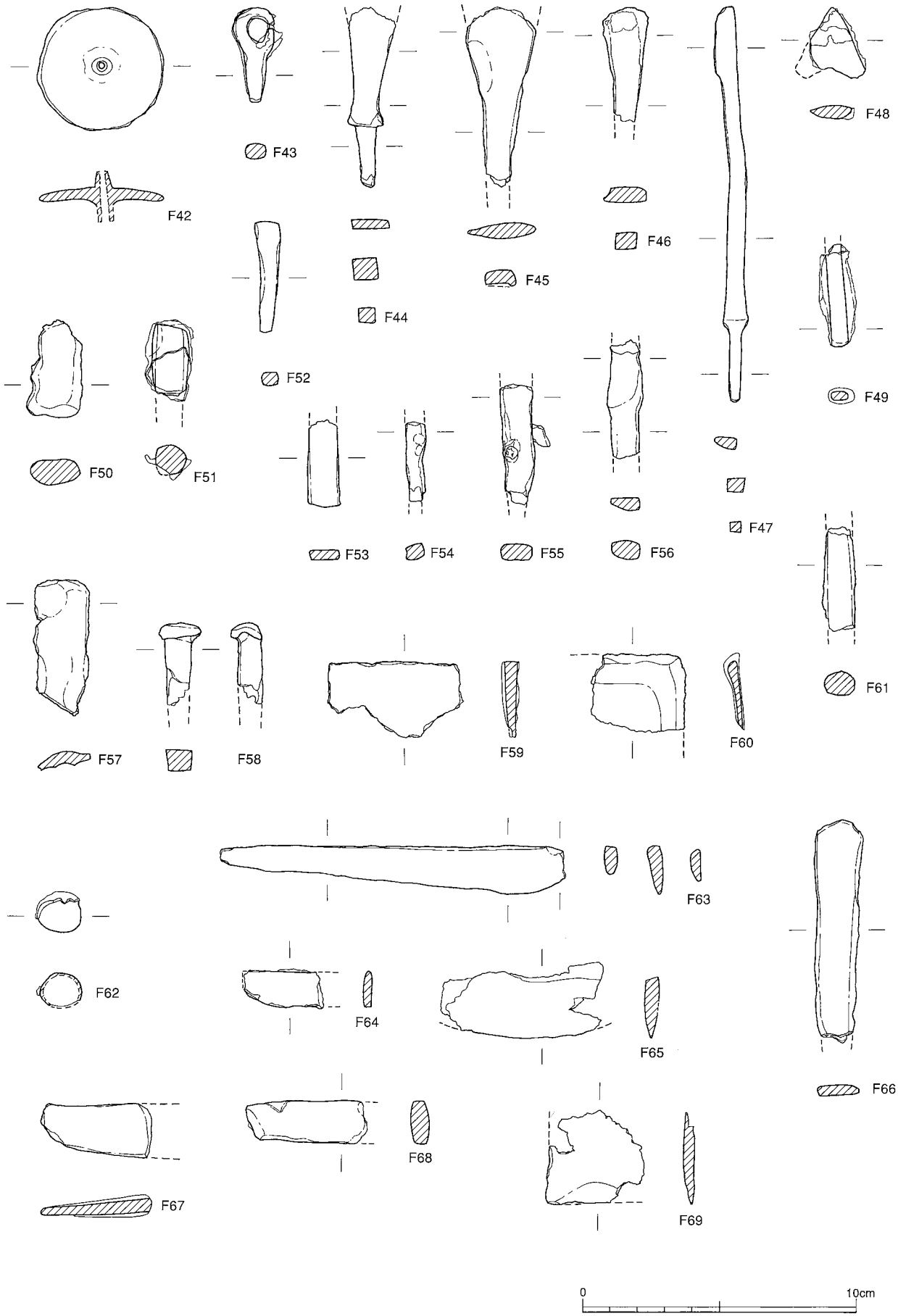
石製品・玉類・土製品1



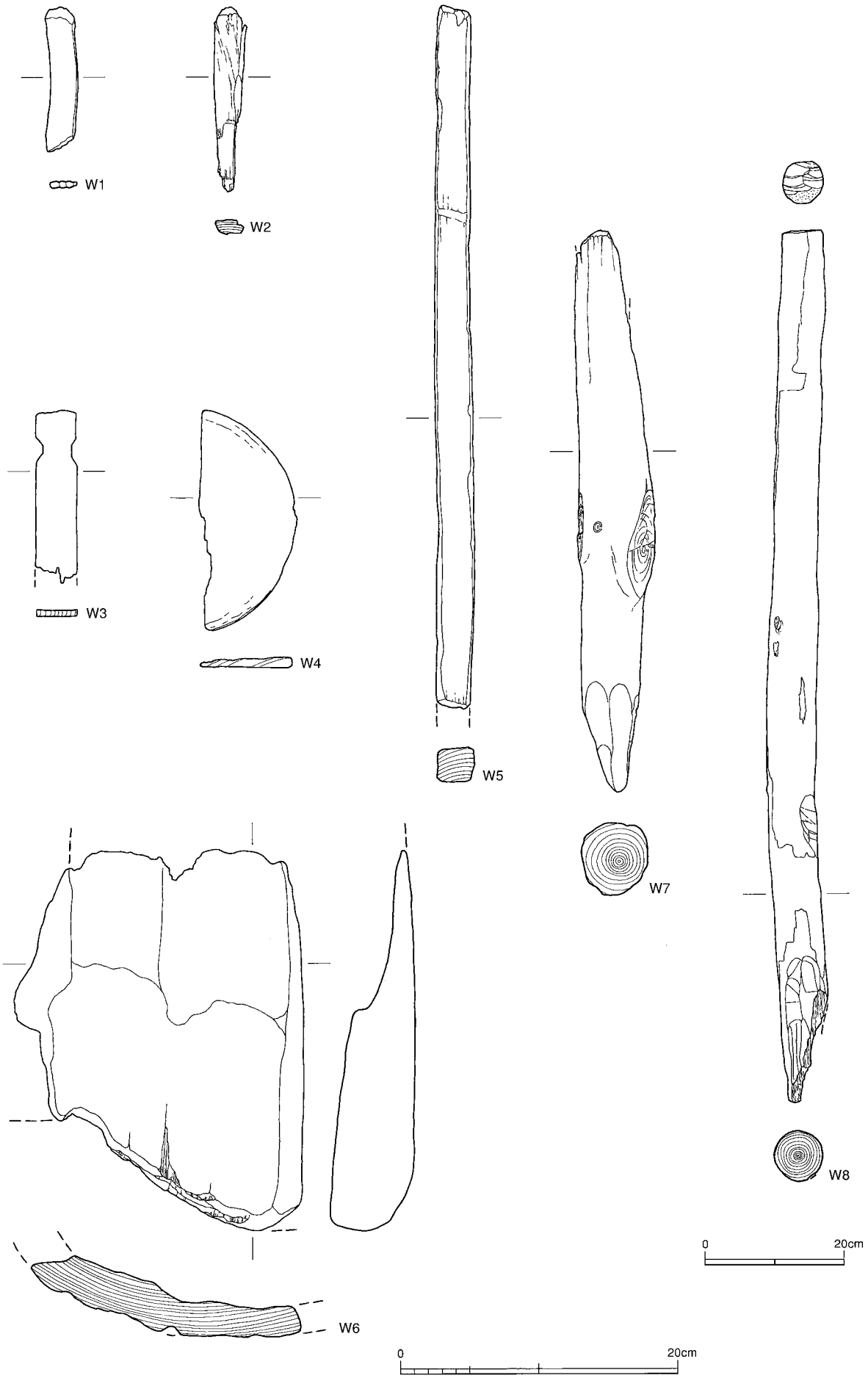
土製品2・金属器1


F15
F16
F17
F18
F19
F20
F21
F22
F23
F24
F25
F26
F27
F28
F29
F30
F31
F32
F33
F34
F35
F36
F37
F38
F39
F40
F41
0
10cm

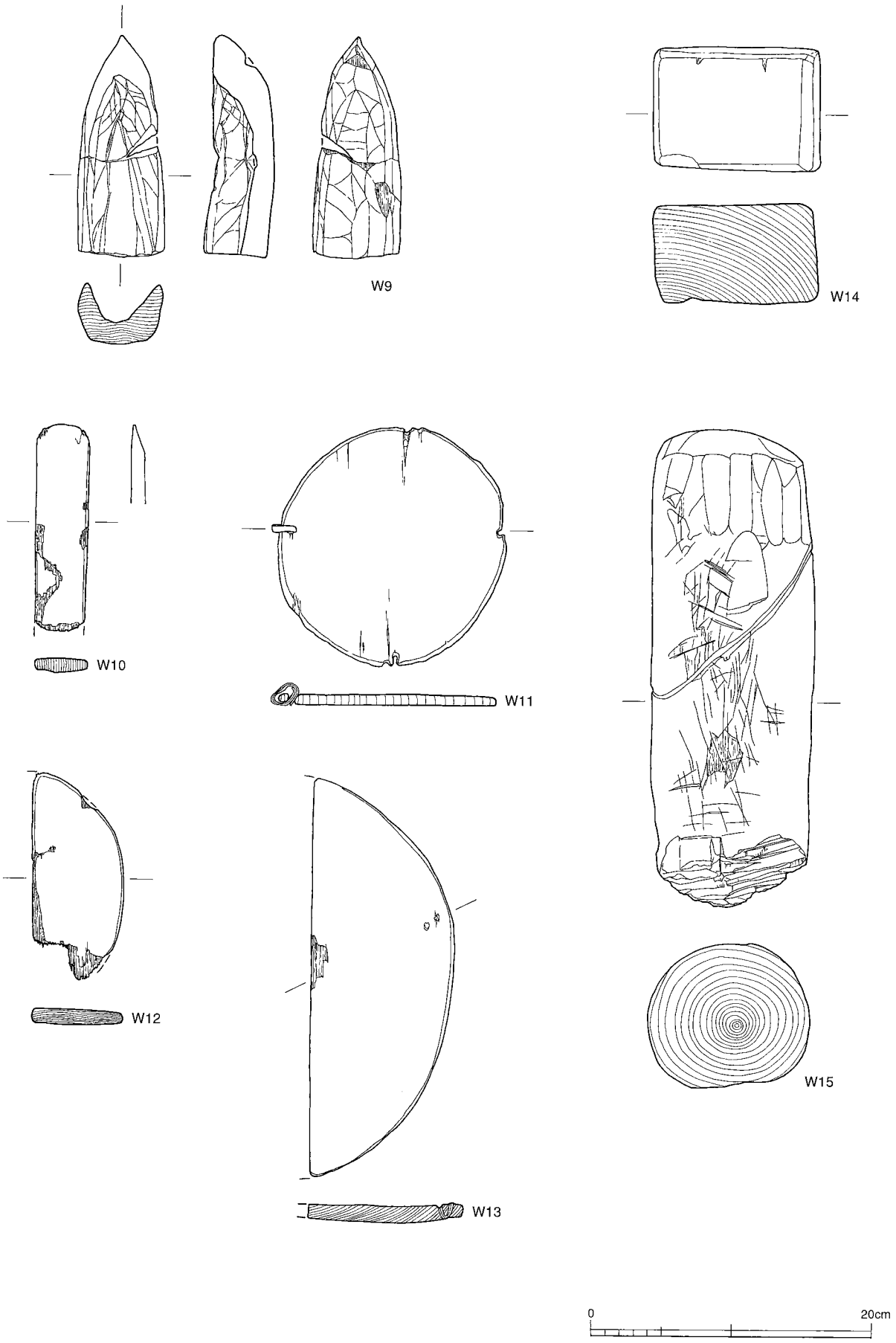
金属器2


F42
F43
F44
F45
F46
F47
F48
F49
F50
F51
F52
F53
F54
F55
F56
F57
F58
F59
F60
F61
F62
F63
F64
F65
F66
F67
F68
F69
0
10cm

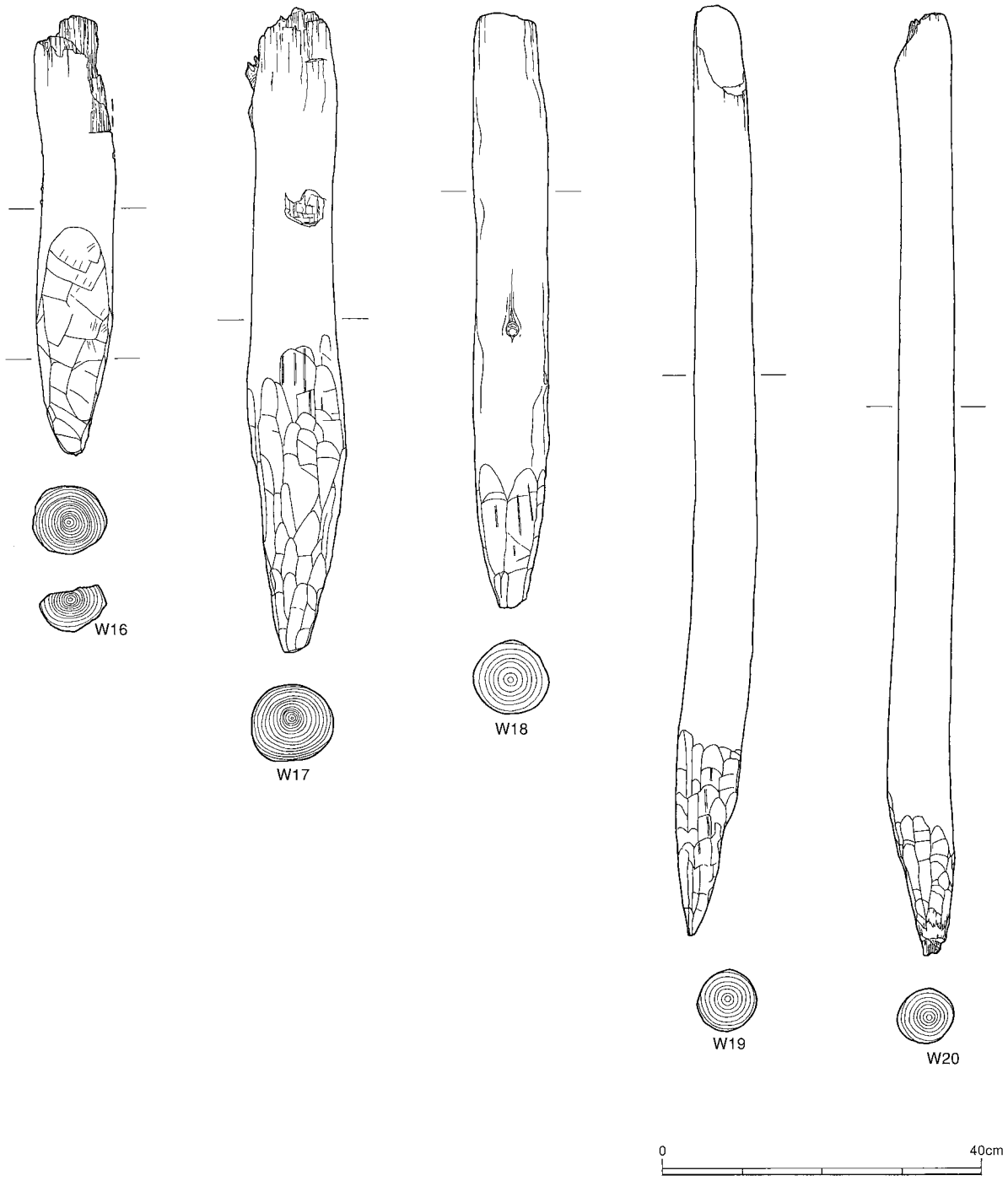
金属器3



木器1（包含層・流路）

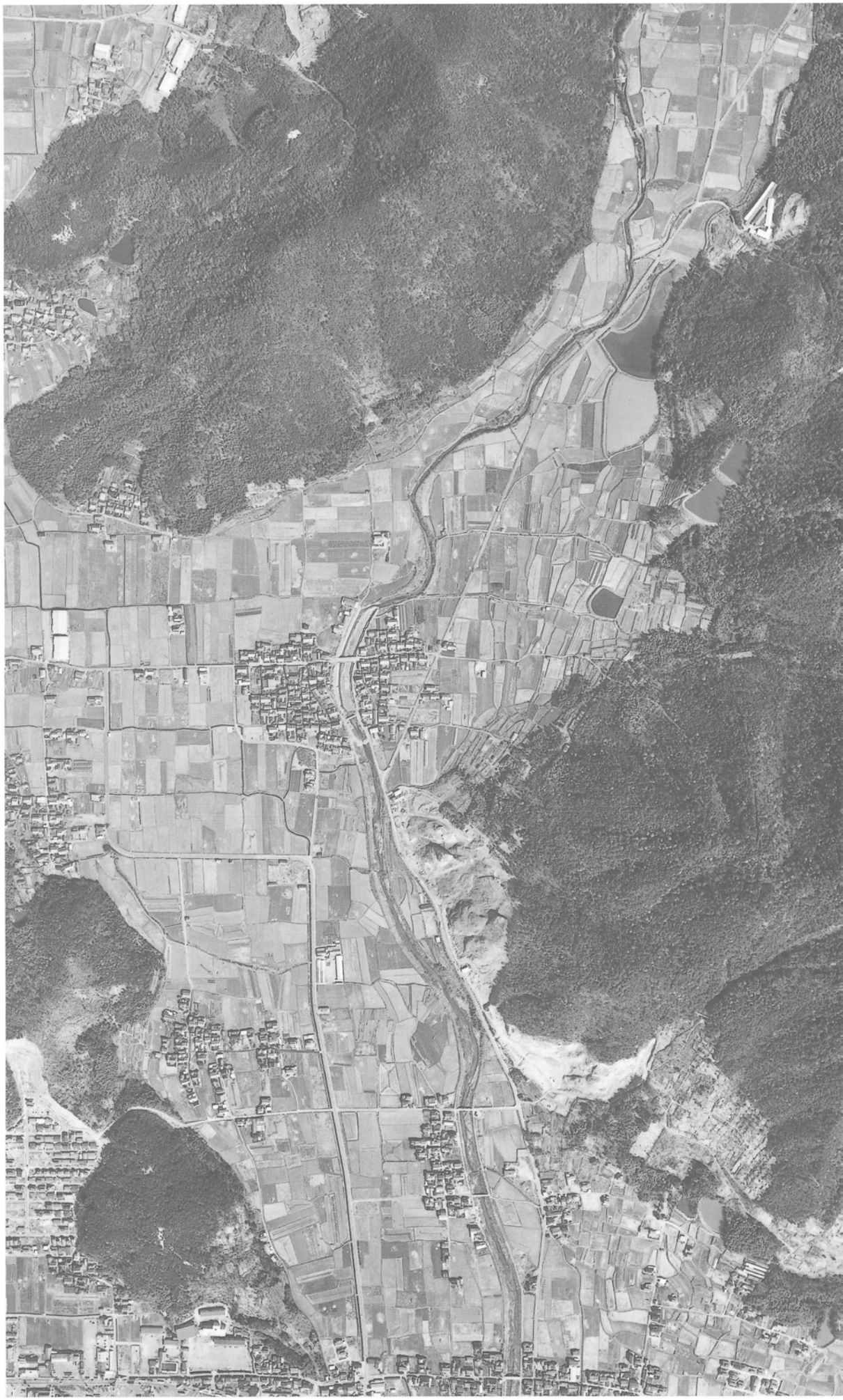


木器２（流路）

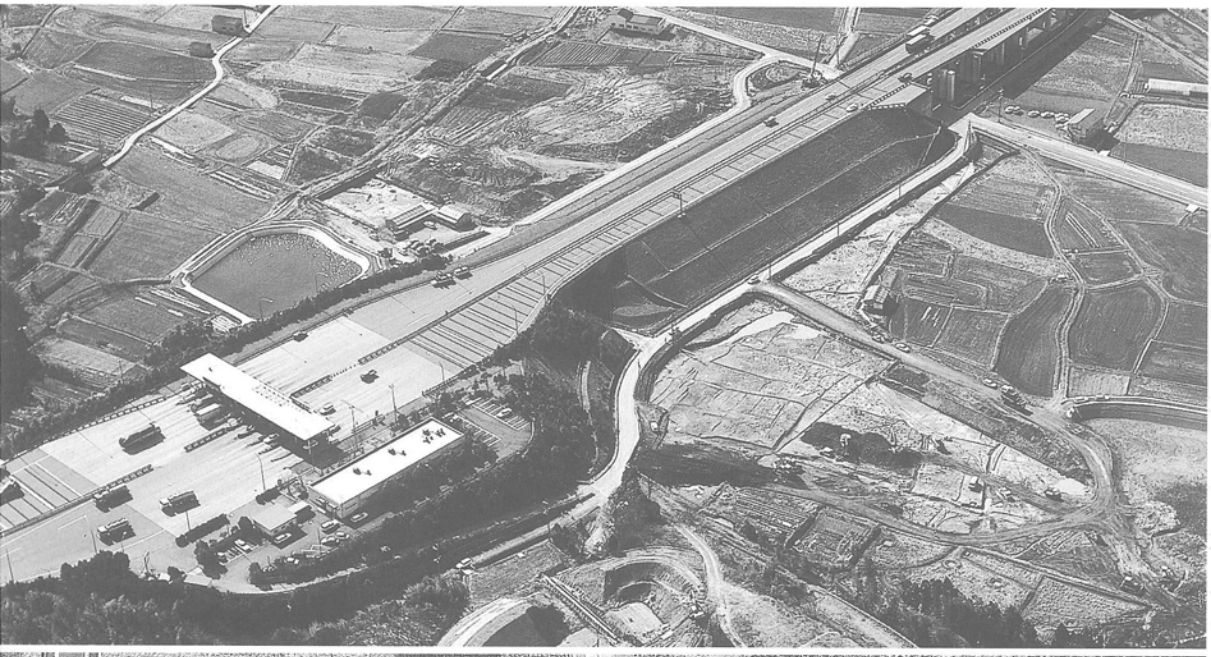


木器3（流路・橋脚）

写真図版



亀田遺跡
調査前空中写真
(1974. 国土地理院撮影)



亀田遺跡全景
（北東から）

No. Ⅱ地点
（真上から）

C－3・4・6・7、
D－3～5区

D－3～5区
（東から）

A－1・2、B－1～7、
D－1・2区
（南から）

E地区
（真上から）

調査区東半遺構群
（真上から）

調査区南半
（西から）

調査区東半
（北から）

A－3区
（西から）

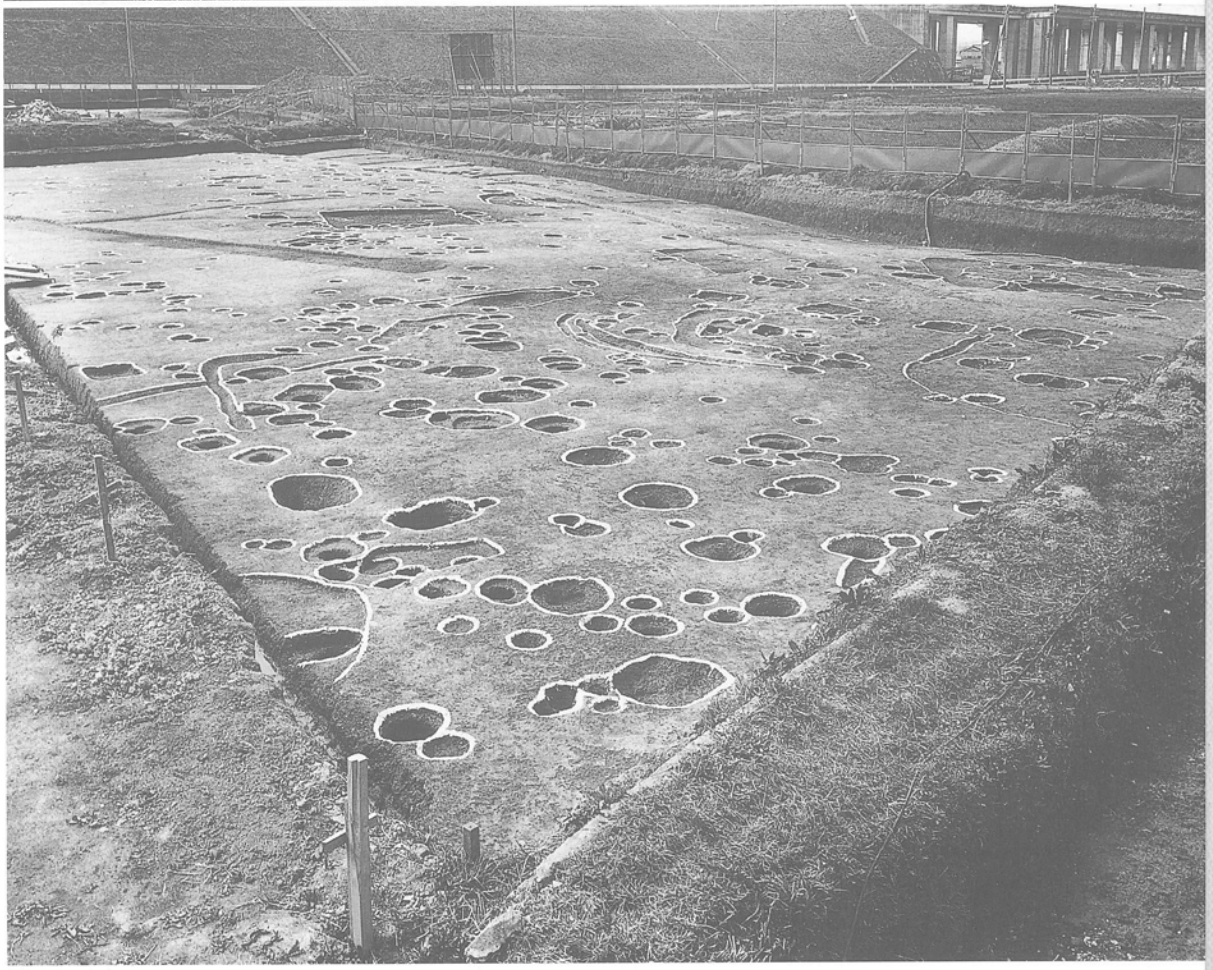
A－4区
（南西から）

C－2区
（西から）

C－6区
（南西から）

D－3区
流路上面の遺構群

C－3～5区
（北東から）

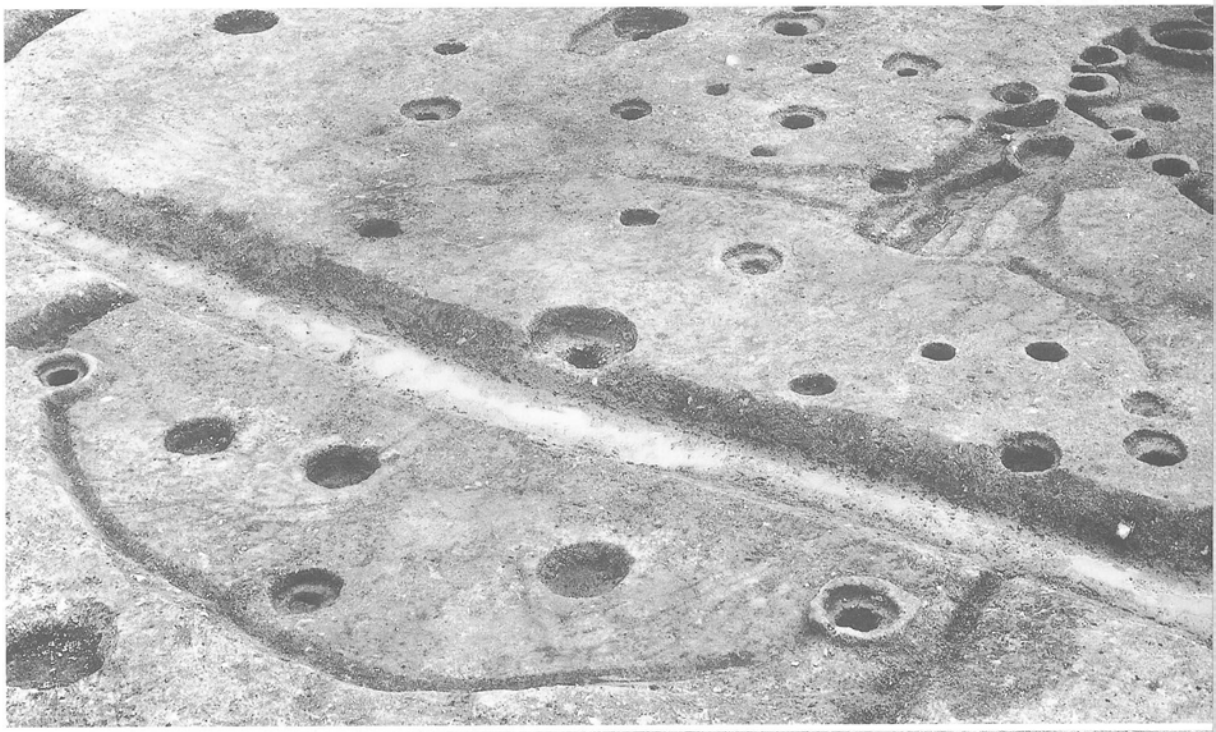


C－3・4区
（北東から）

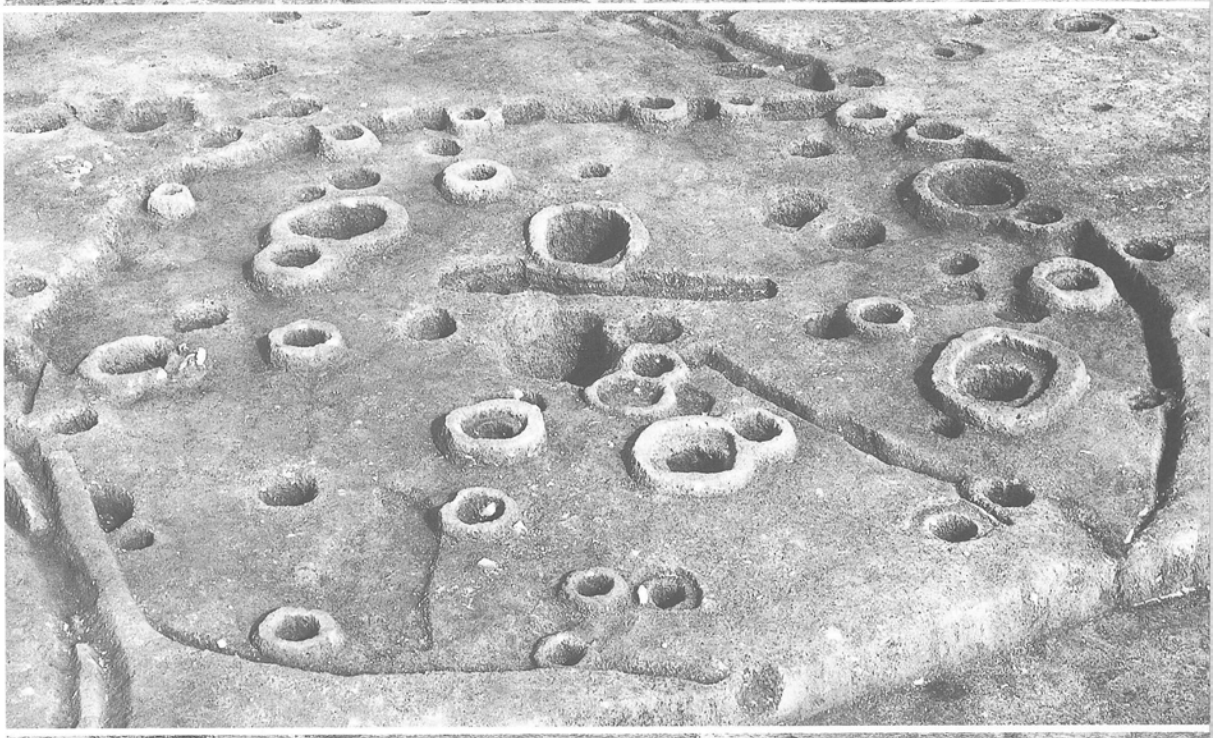
C－3・4区
（南から）

C－3・4区
（北から）

E区（東から）

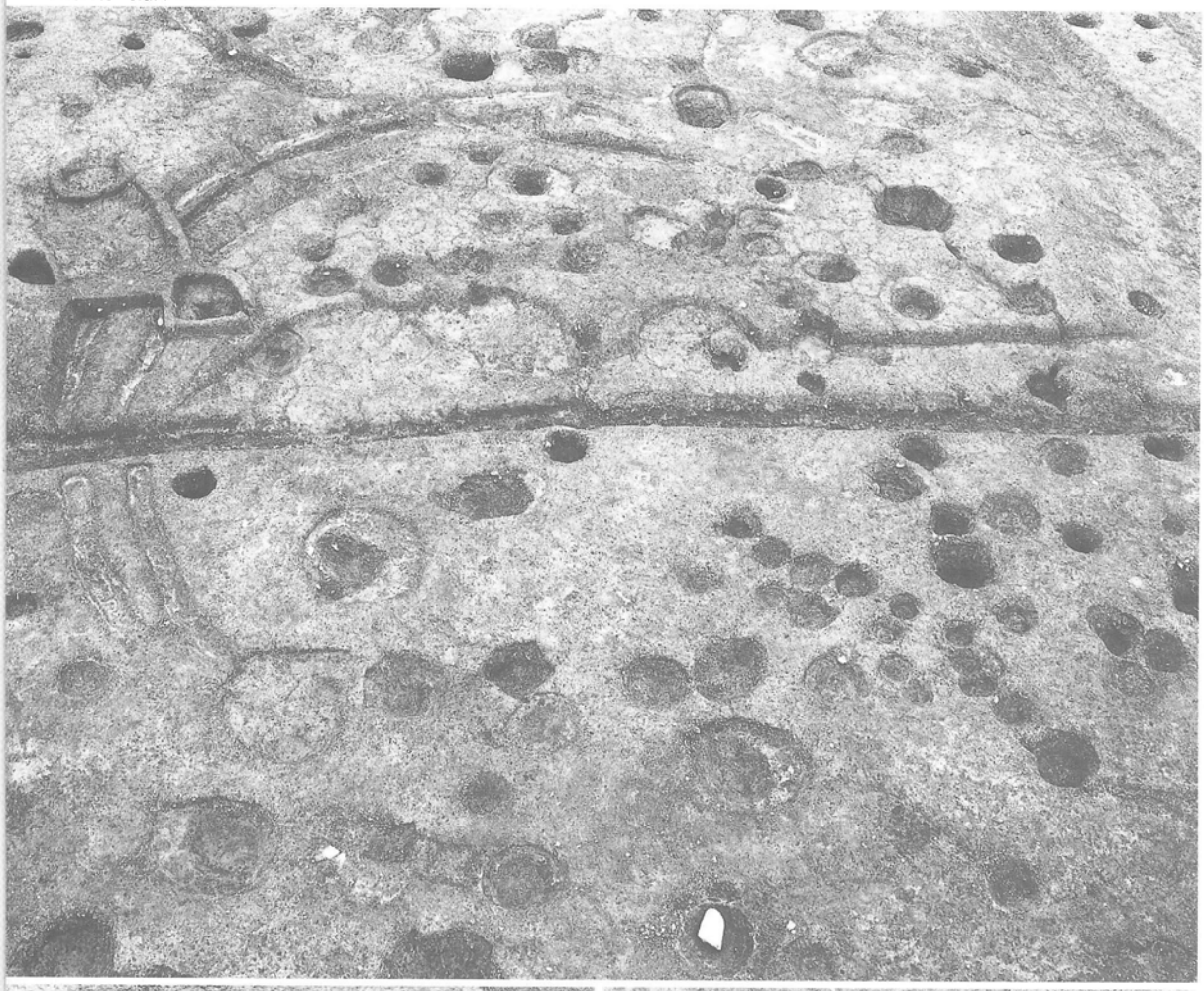


SH01（西から）

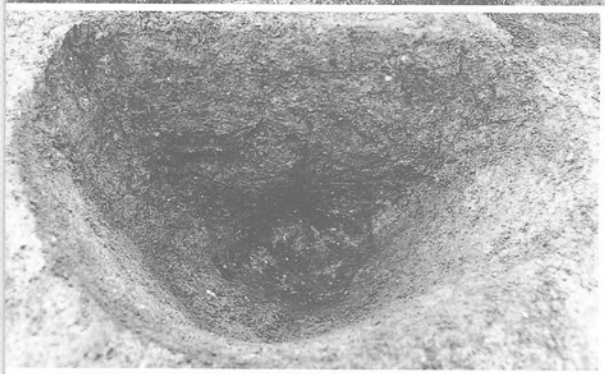


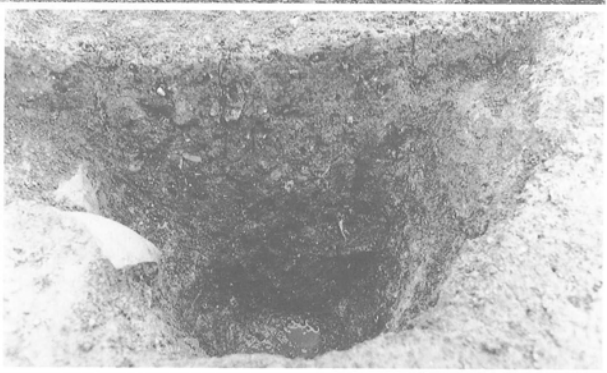
SH02（西から）

SH03（西から）



SH04（北から）





左
SH02 中央土坑
（西から）

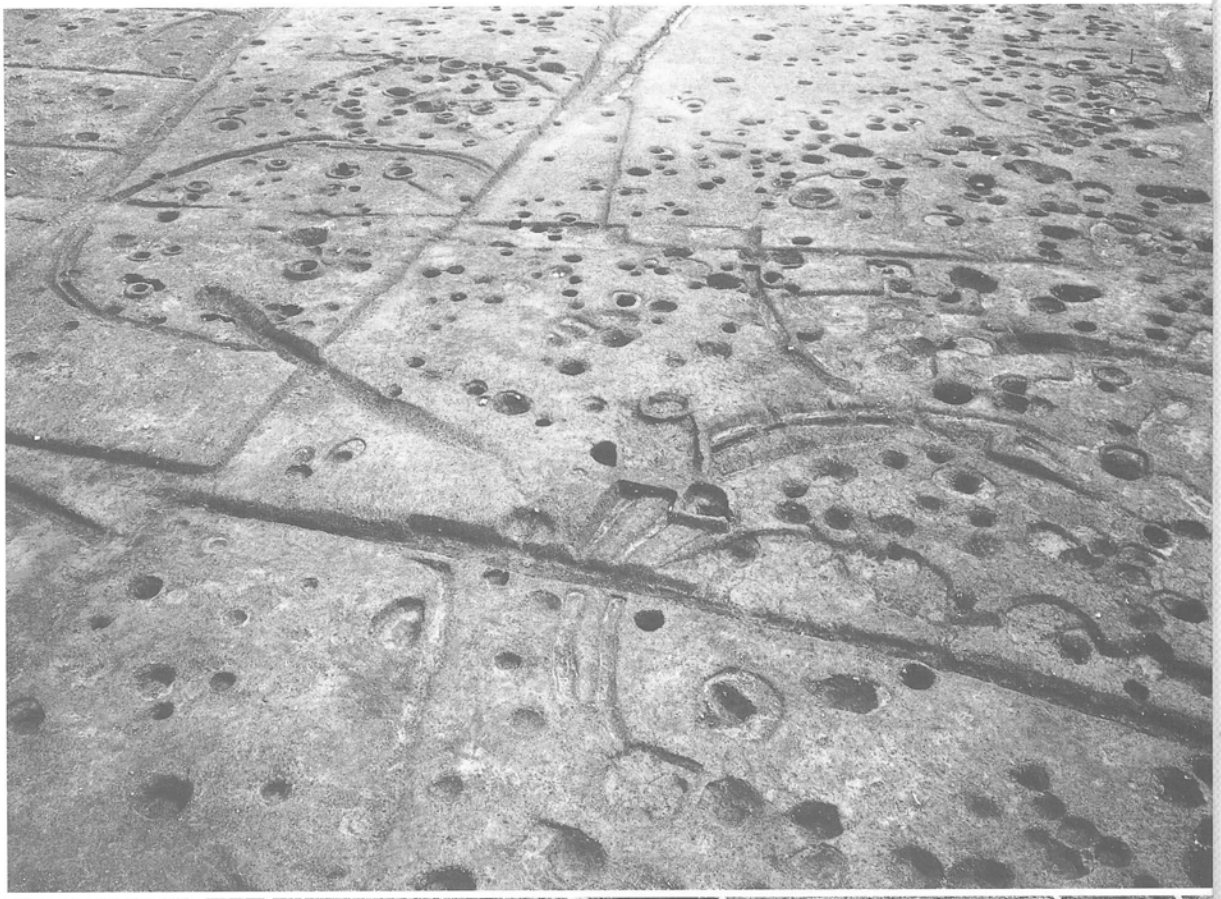
右
SH03 中央土坑
セクション（南から）

左
SH03 中央土坑
（東から）

右
SH03 周壁溝内弥生土器
出土状況

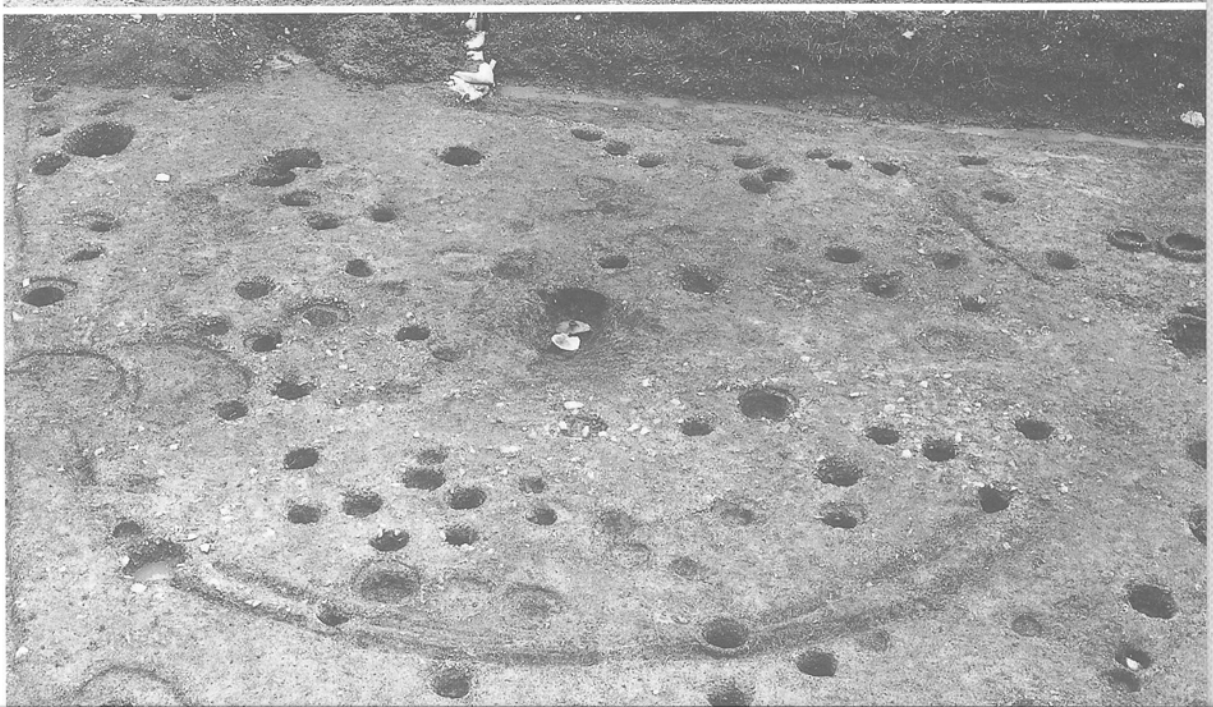
左
SH04 遺物検出作業
風景

右
SH04 周壁溝内弥生土器
出土状況



SH01～04
（北から）

SH05（西から）

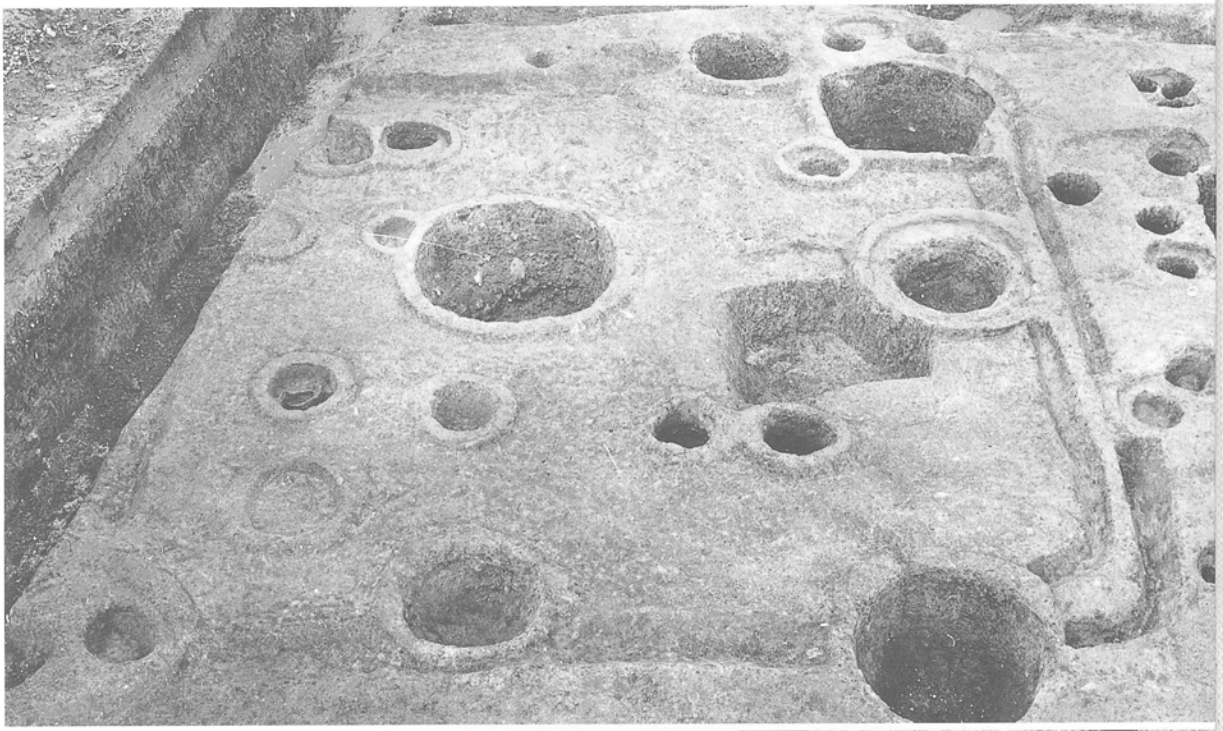


SH06（東から）

SH06 検出作業風景

SH06 中央土坑遺物
出土状況（東から）

SH07（西から）



SH08（南から）

SH9, 10（北西から）

SH11（西から）

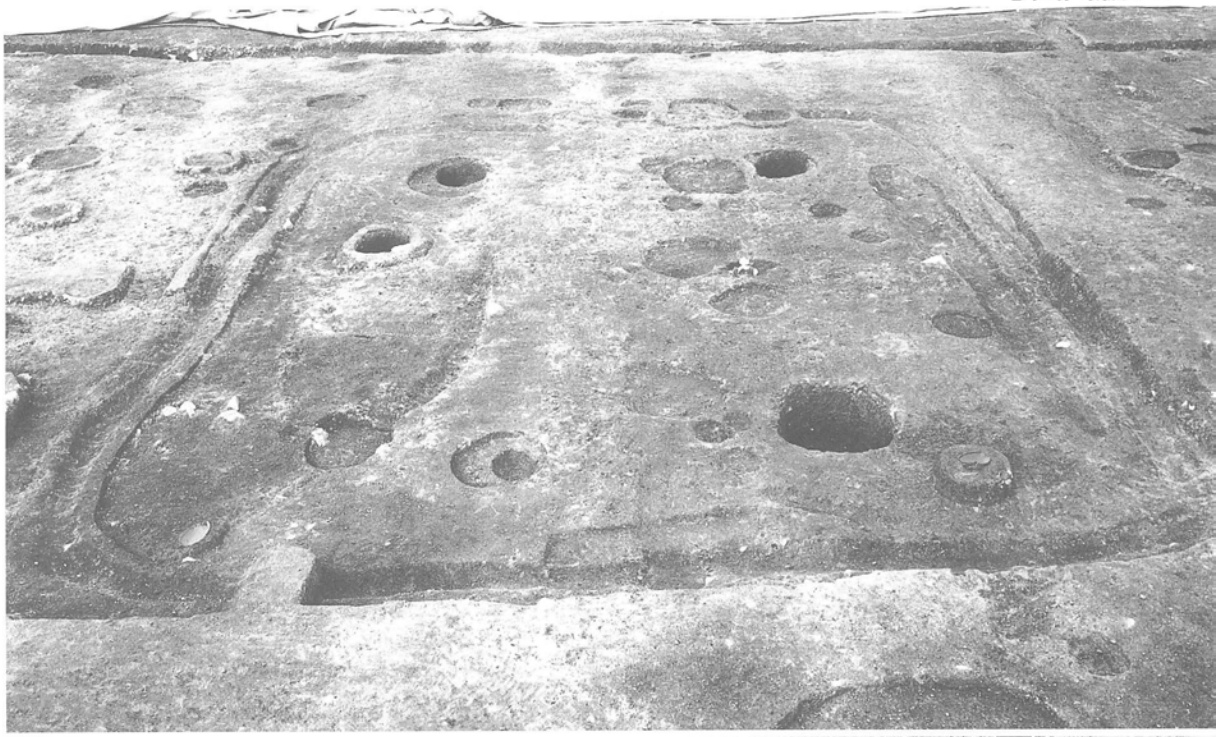
左
SH11, 12（南から）

右上
SH12 カマド
（北から）

右下
SH12 カマド
（東から）

SH12（西から）

SH13, 14
（西から）

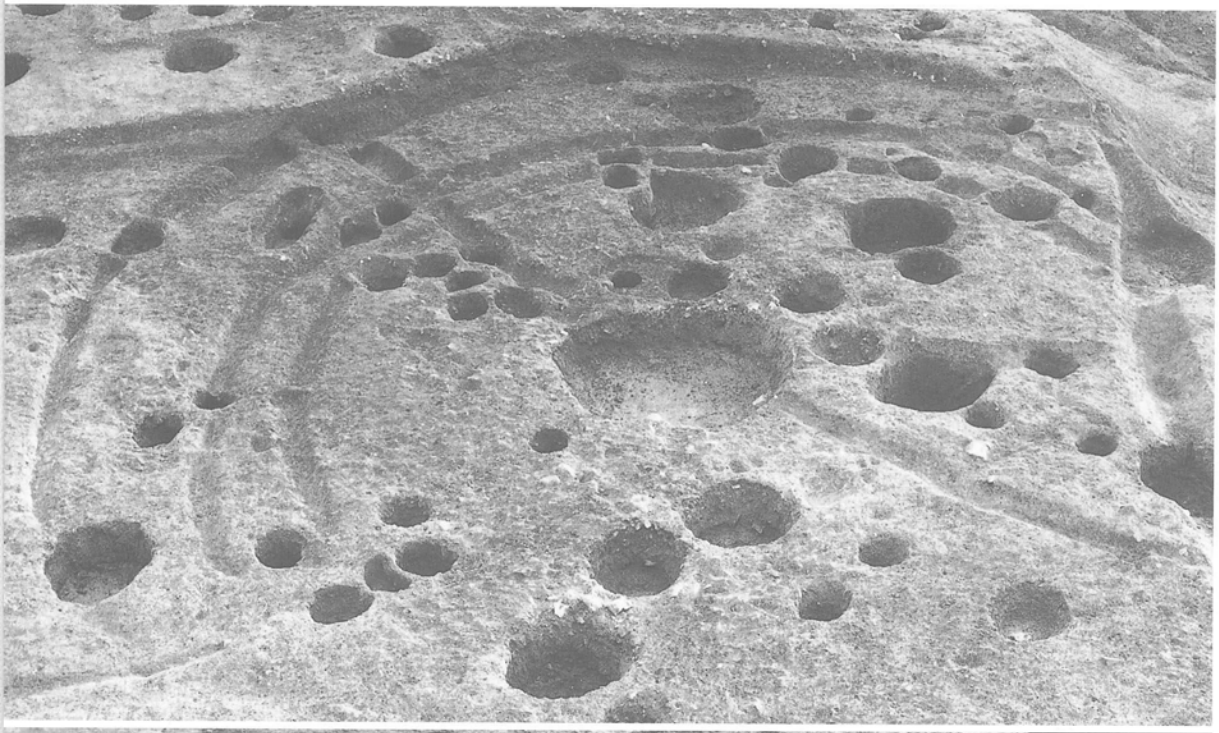


SH13（北から）

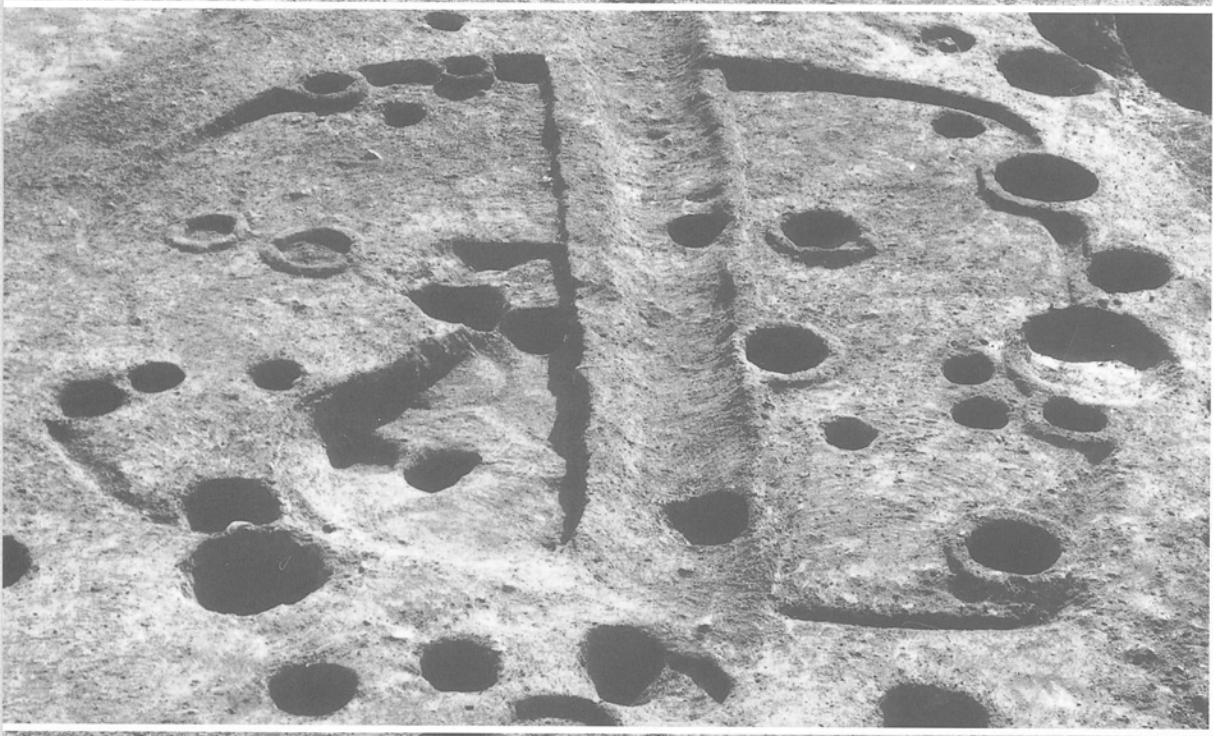
中段左
SH13
床面検出作業風景

中段右
SH14
炭化材検出状況

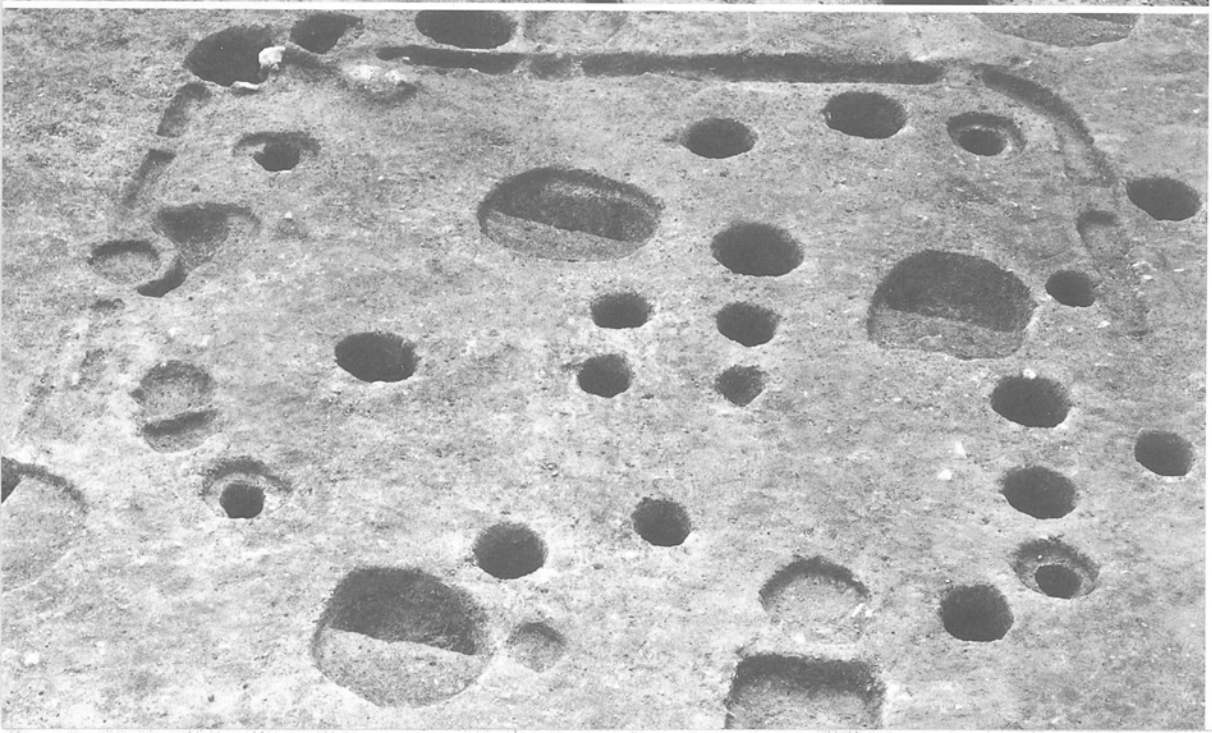
SH14
炭化材検出状況
（北西から）



SH14（北から）

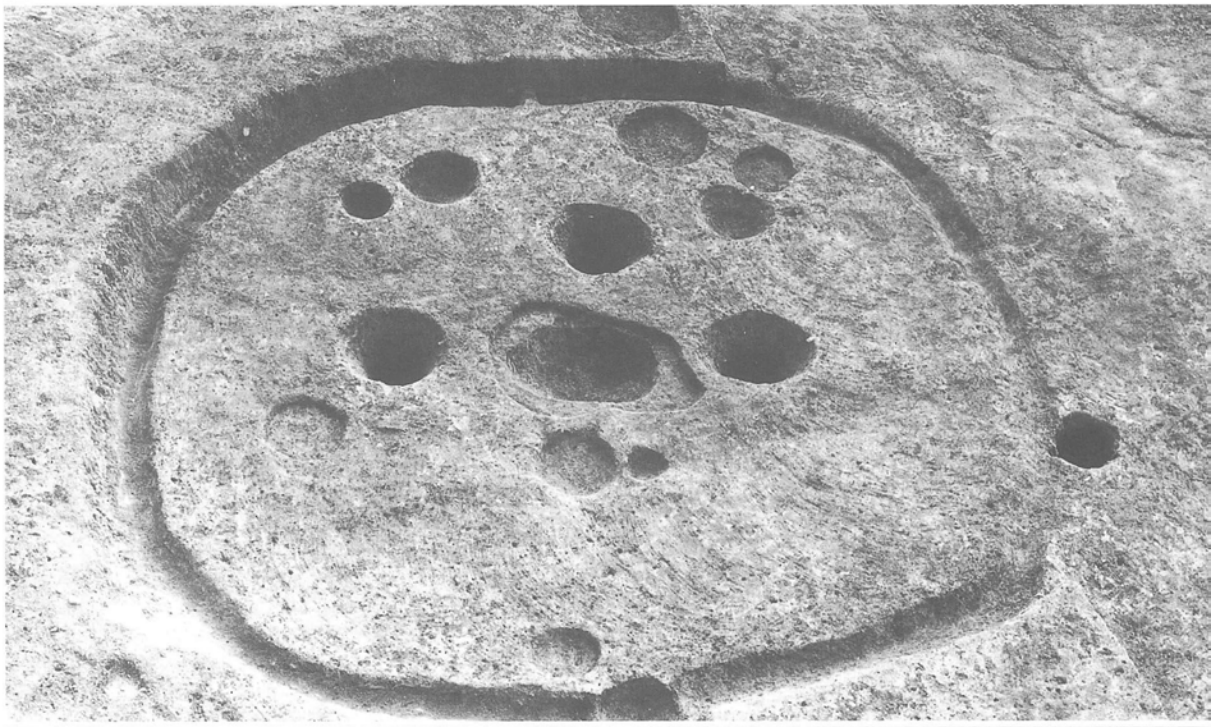


SH15（北から）

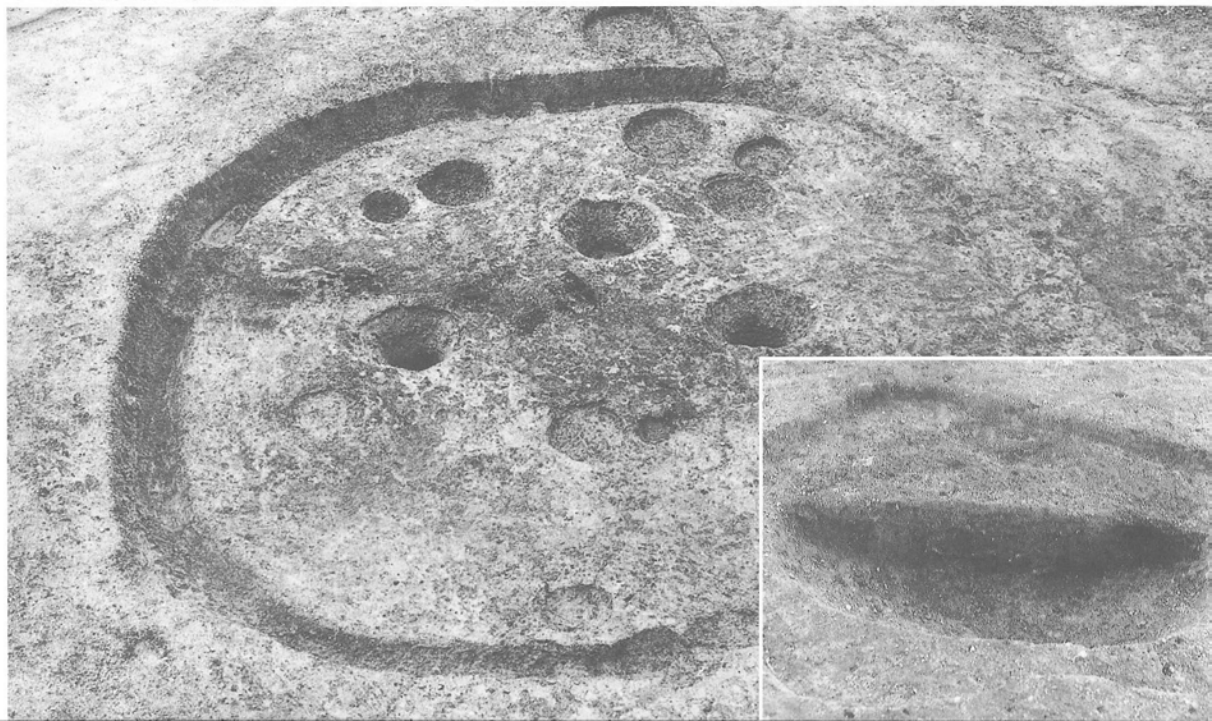


SH16（南から）

SH17（西から）



SH18（南から）



SH18
炭化材検出状況
（南から）

下段右下
SH18中央土坑
（南から）

SH19（南東から）

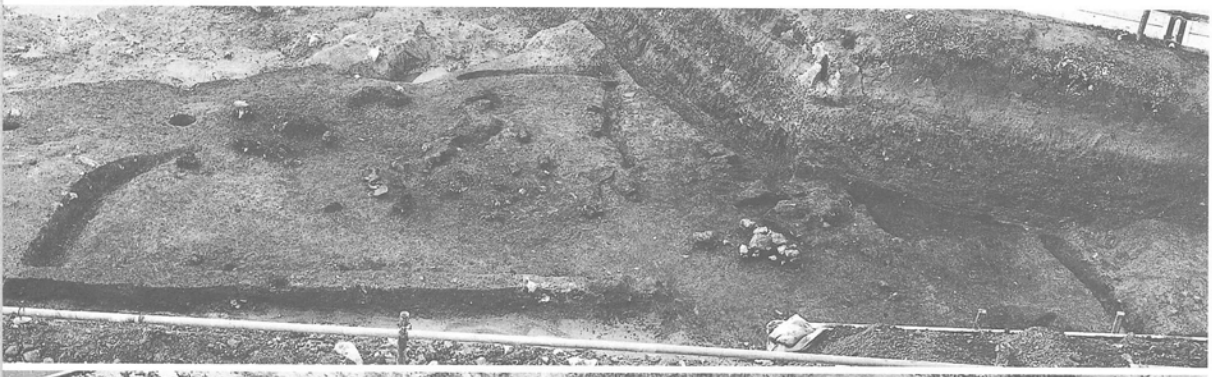
SH20 西半部
（南から）

SH20 東半部
（南から）

SH21 西半部
（南東から）

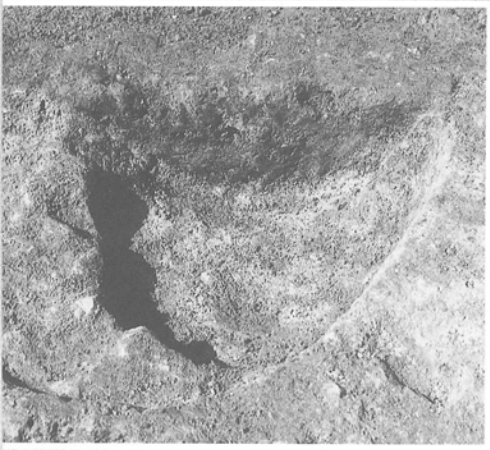
SH21 東半部
（南東から）

SH18～21
（南西から）



SH22 西半部
炭化材検出状況
（東から）

SH22 東半部
炭化材検出状況
（南から）



左
SH22 中央土坑
セクション
（西から）

右
SH22
床面炭化材検出状況
（南東から）

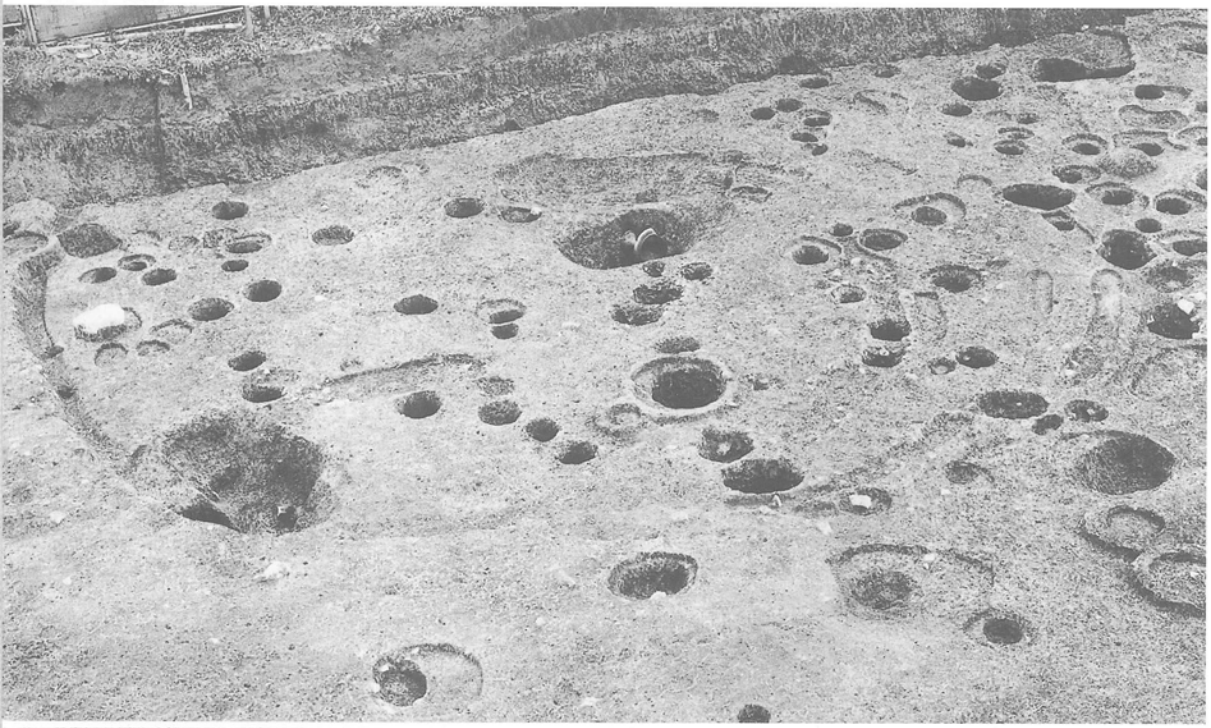
SH22 西半部
完掘状況（東から）

左
SH22 床面
台石出土状況（西から）

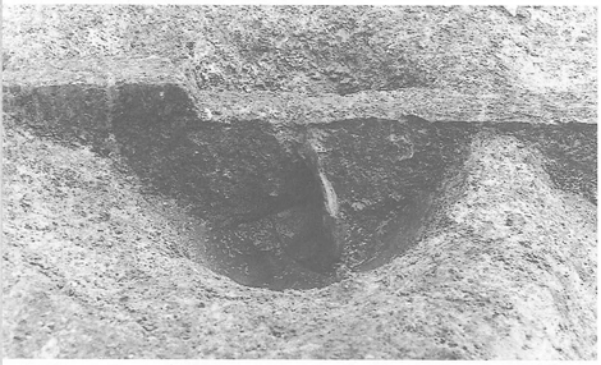
右
SH22 作業風景

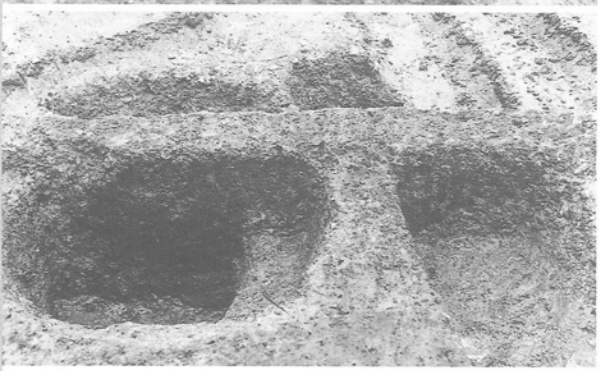
SH22 西半部
（南から）

SH22 東半部
（南から）



SH23（北から）





左上
SH23 中央土坑
セクション
（西から）

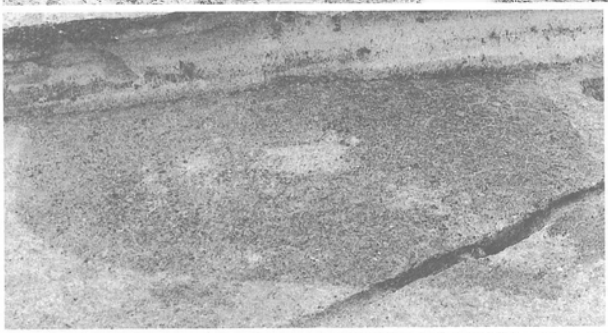
左下
SH24 中央土坑
セクション
（西から）

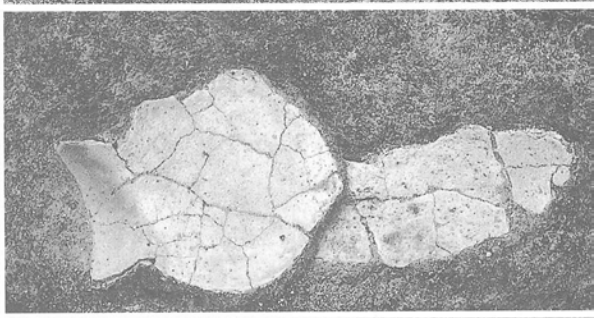
右
SH23 中央土坑
弥生土器出土状況
（西から）

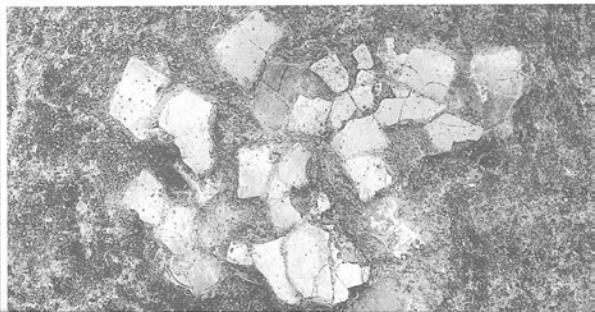
SH24（西から）

左・右
SH24
弥生土器出土状況

SH24 完掘状況
（西から）



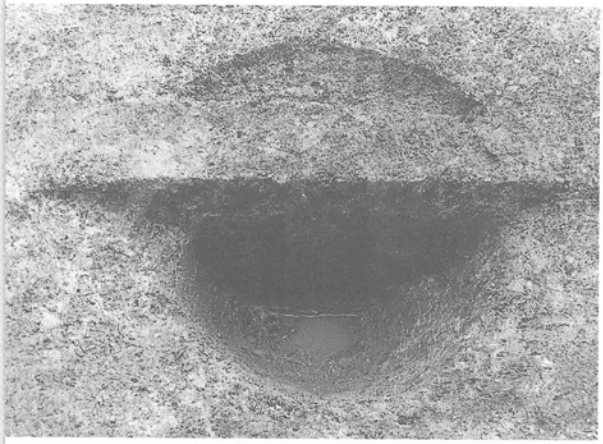


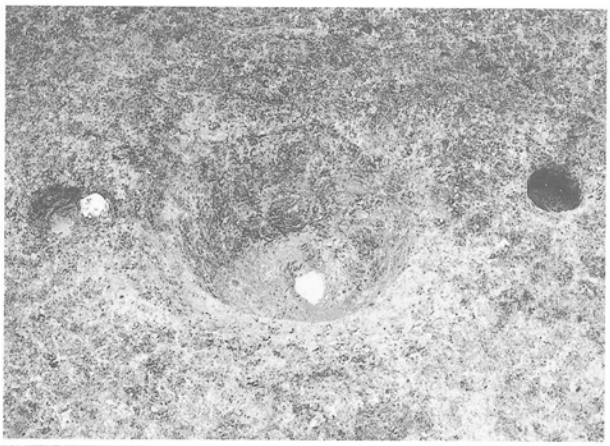


左上
SH25 検出状況
（北から）

左下
SH25
弥生土器出土状況
全景（南から）

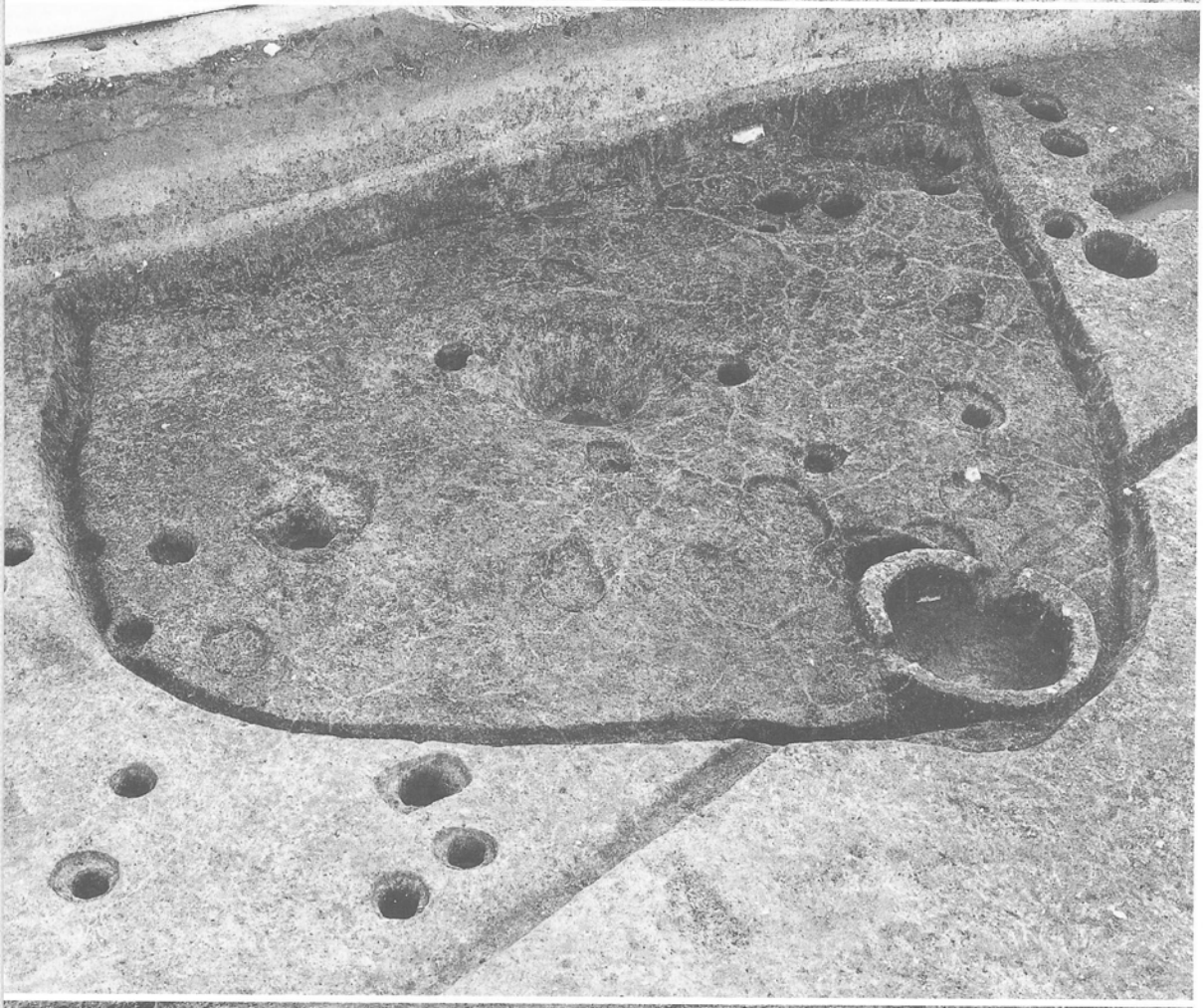
右・上中下
SH25
弥生土器出土状況



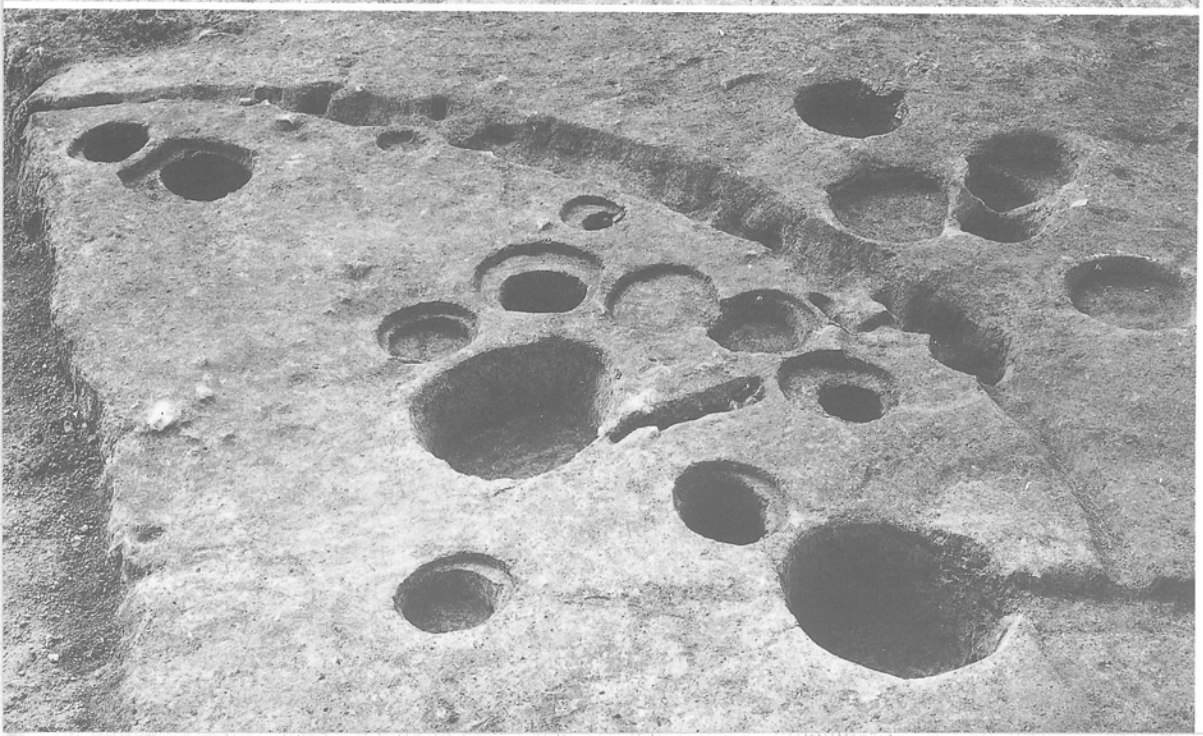


左
SH25 中央土坑
セクション
（西から）

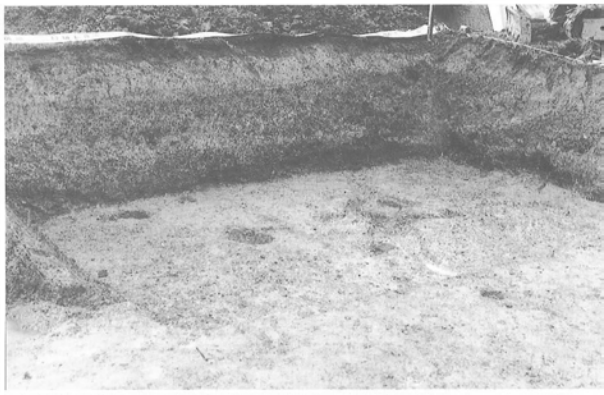
右
SH25 中央土坑
（北から）

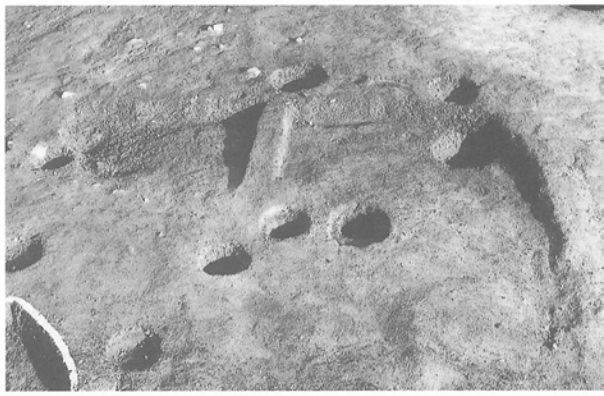


SH25（北から）



SH26（南から）





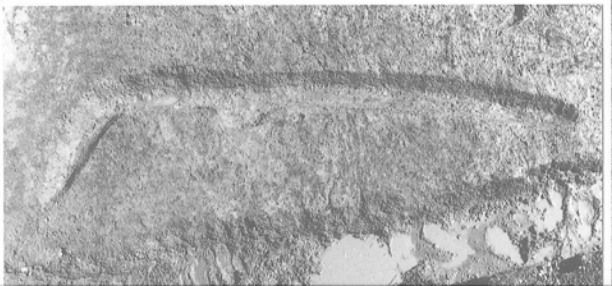
左上
SH27（南から）

右上
SH28（南東から）

左下
SH29（南東から）

右下
SH31（西から）

SH30（西から）

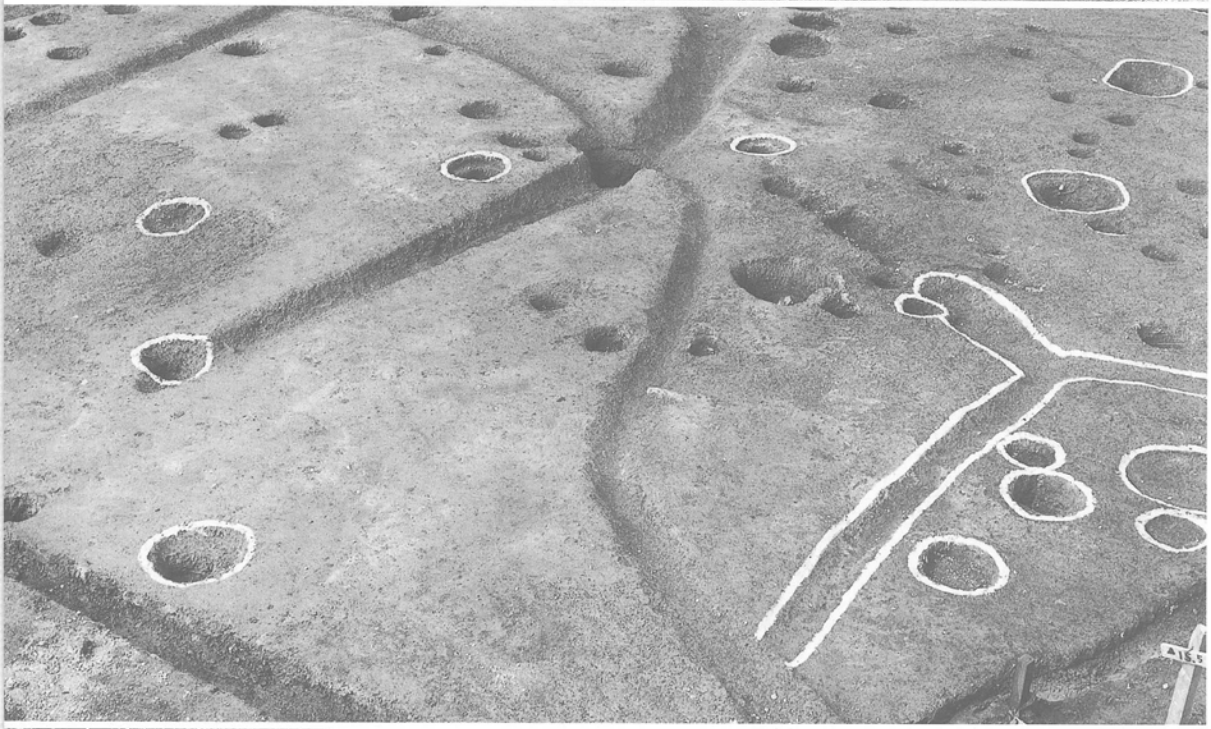


左上
SH32（北から）

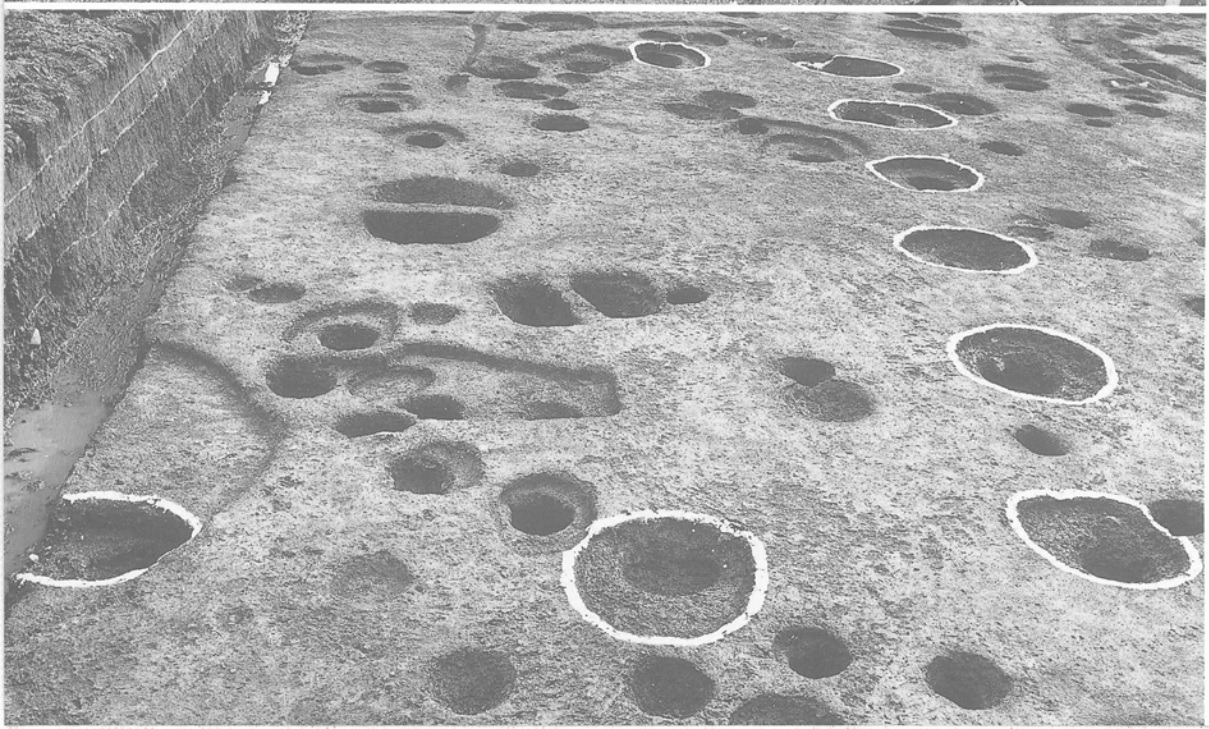
左下
SH33（西から）

右
作業風景

SB01（南から）

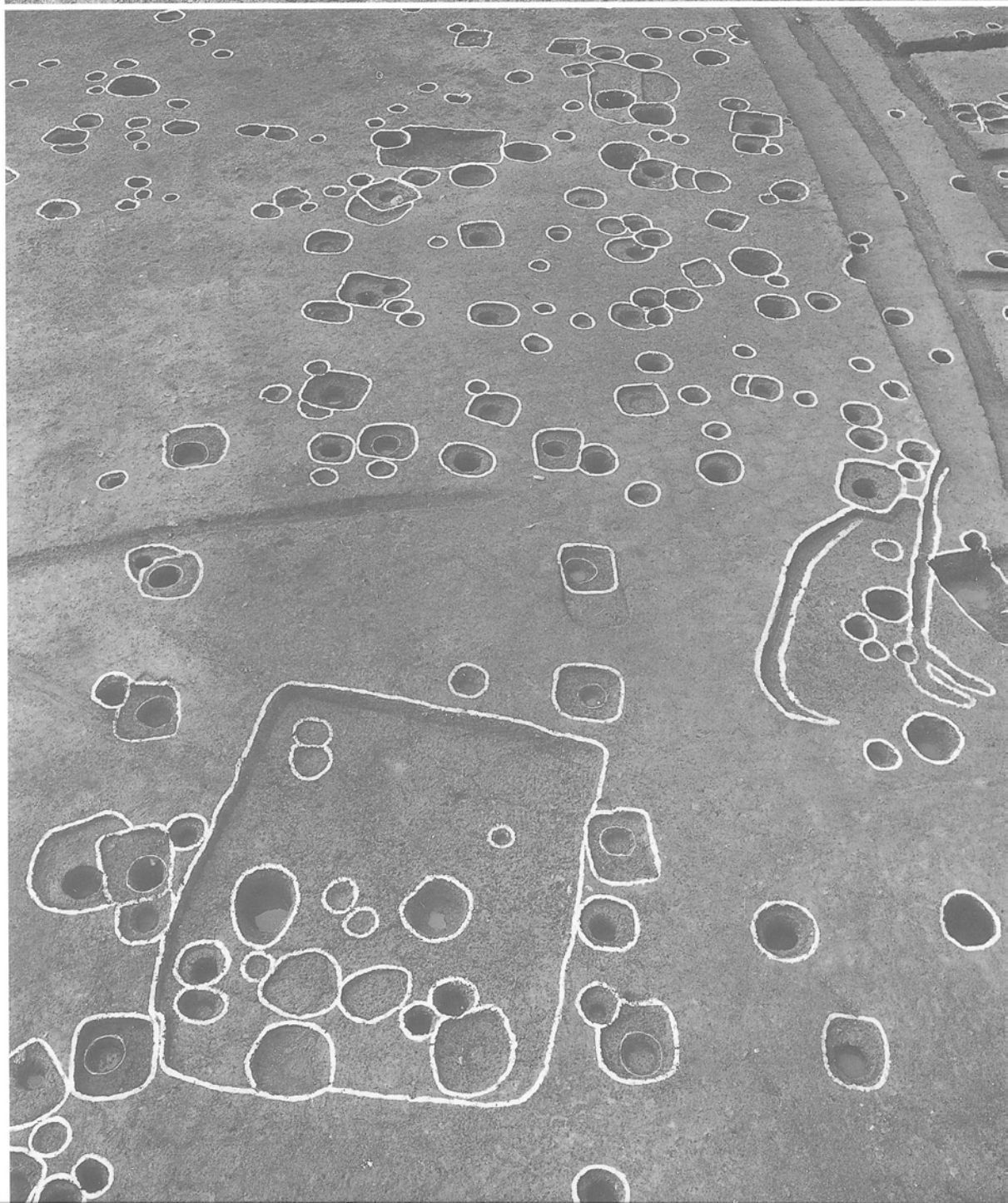


SB03（南東から）

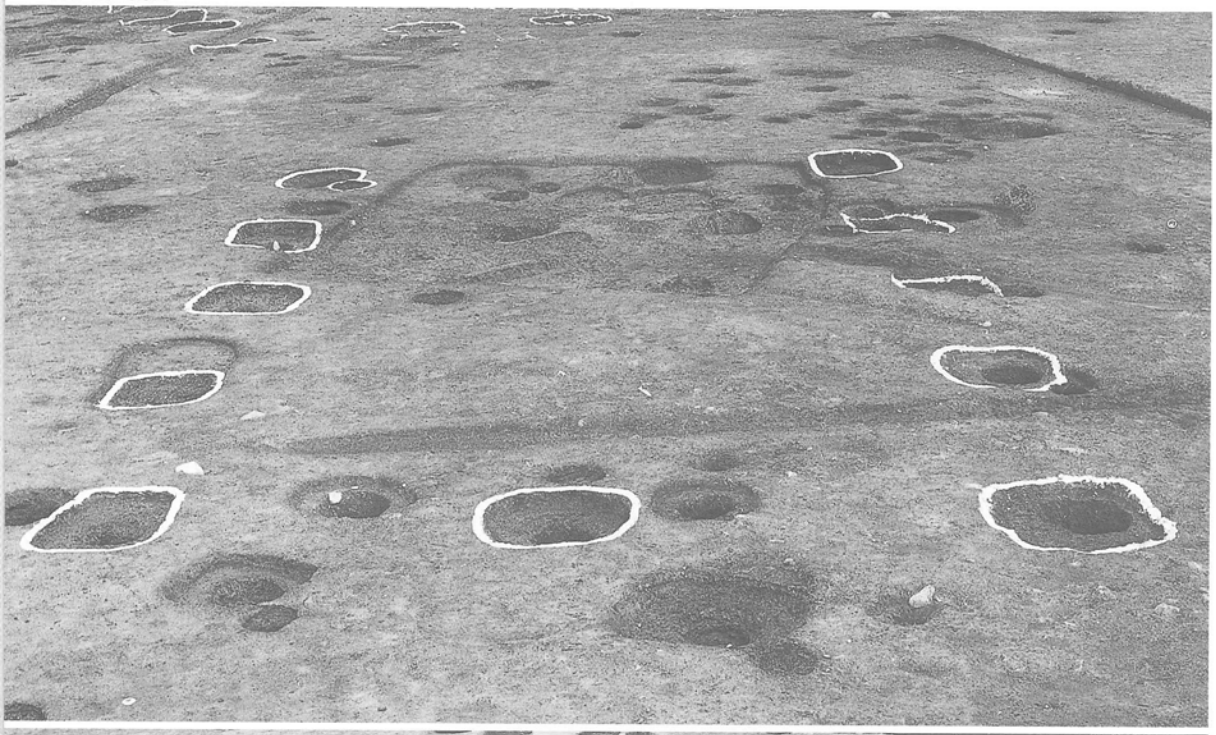


SB05（北から）

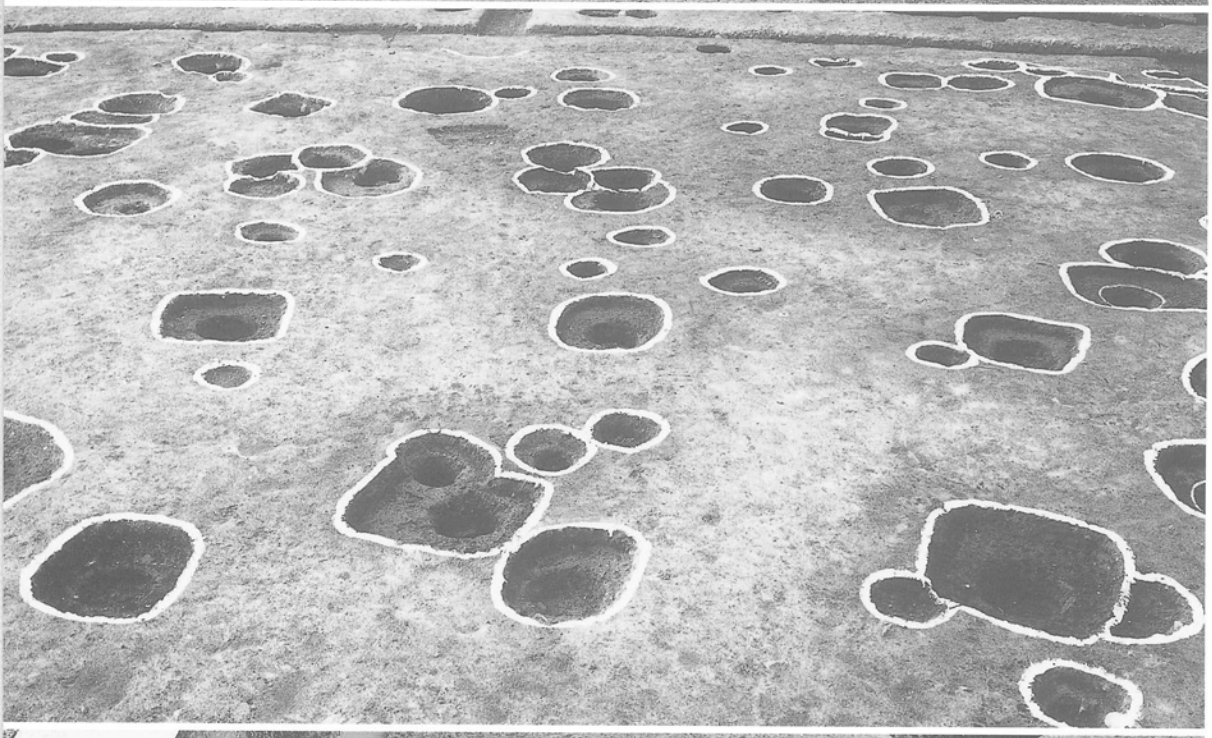
SB06（南から）



SB08～12
（北から）



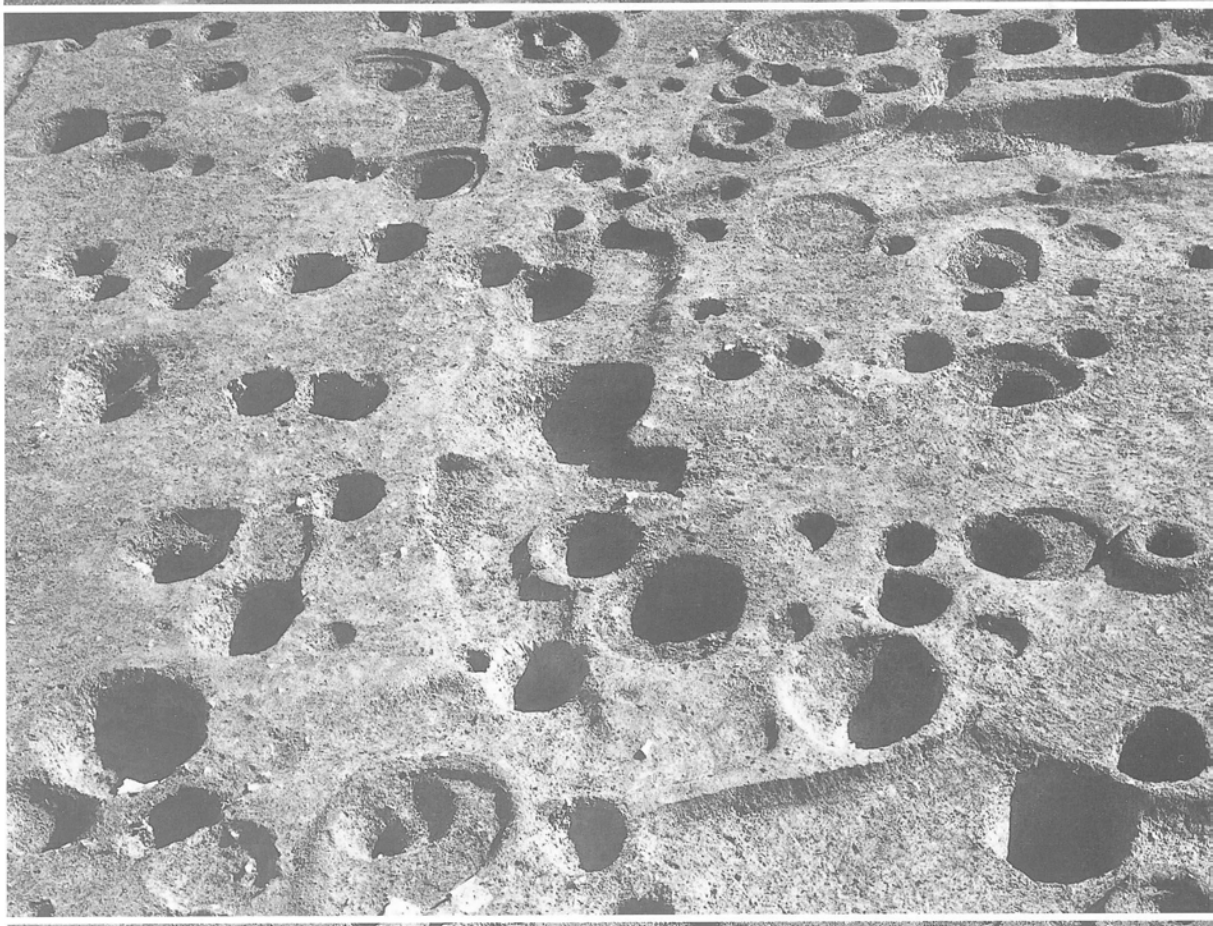
SB08（南から）



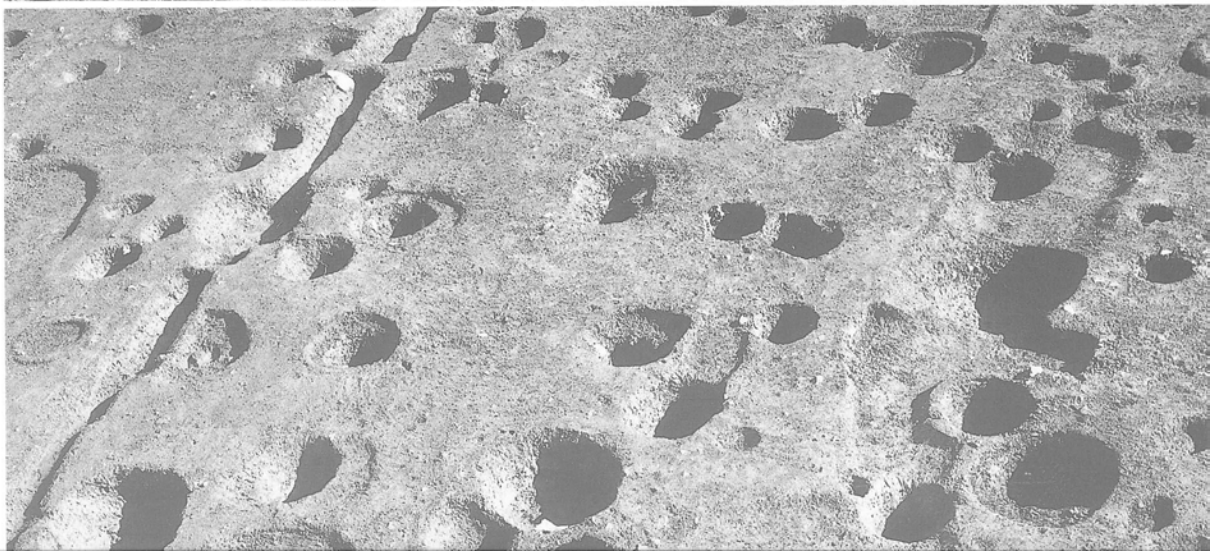
SB10（東から）

SB15（南から）

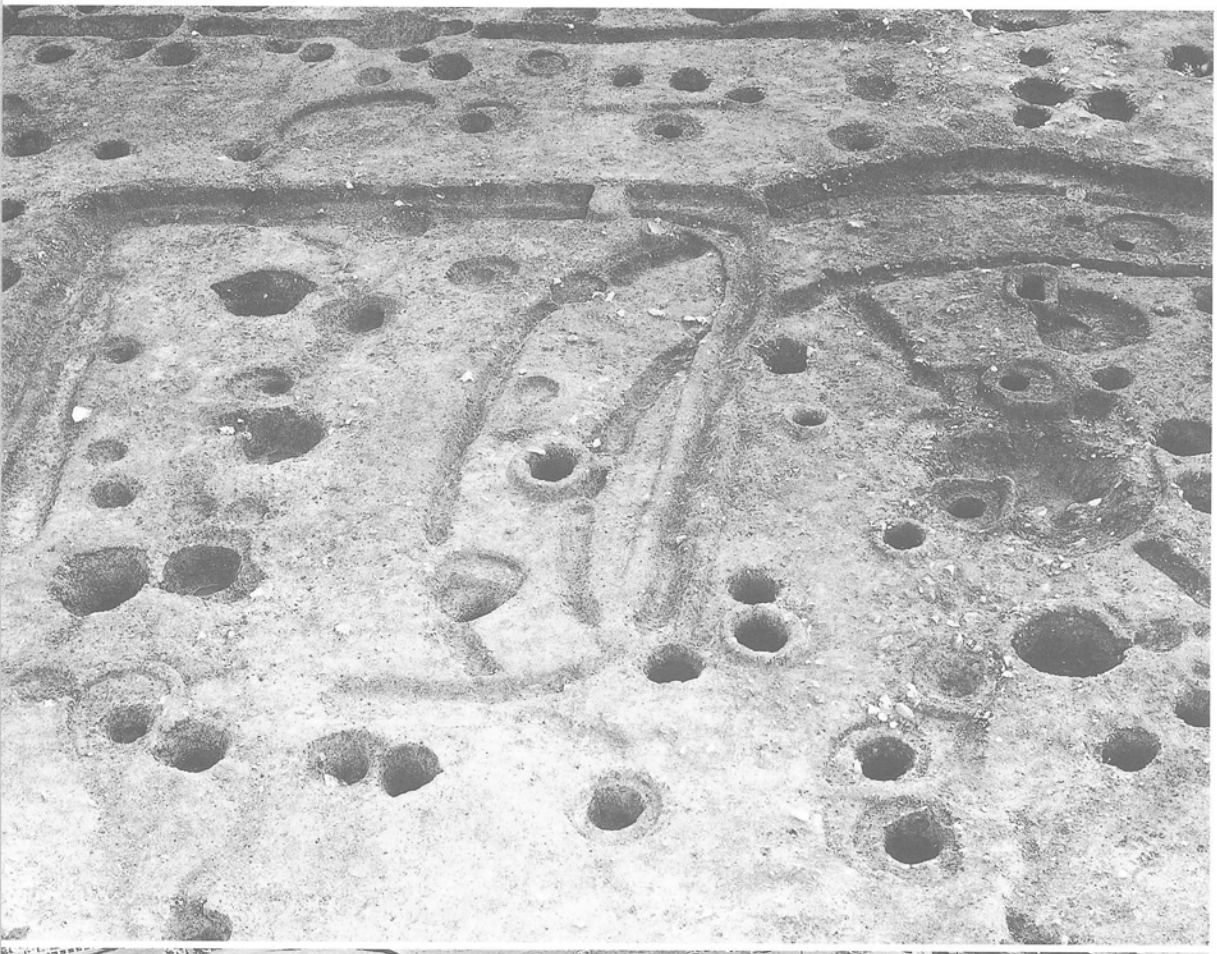
SB16（南から）



SB33（西から）

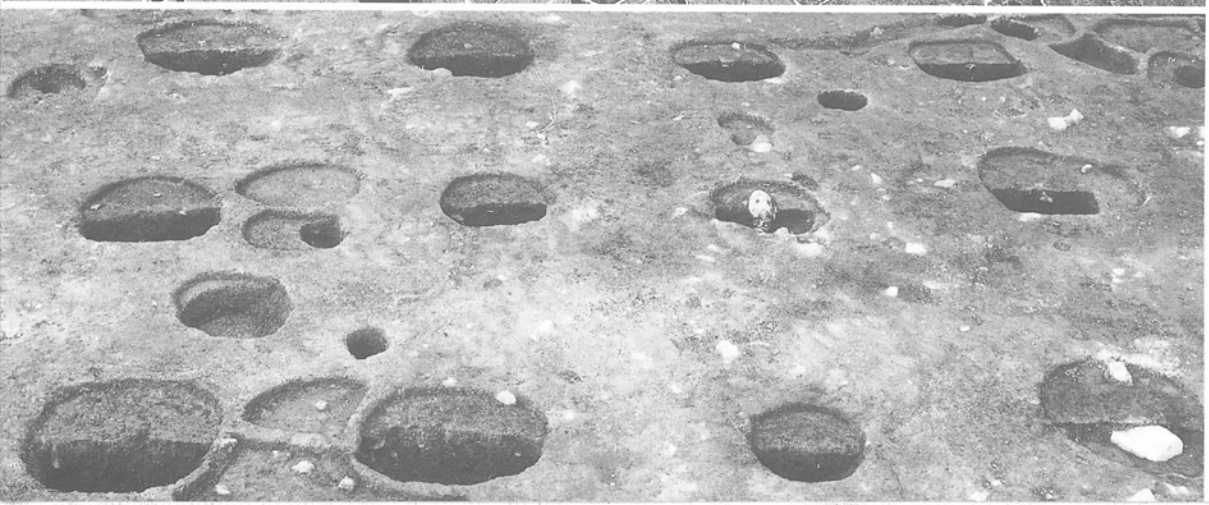


SB34, 35（西から）



SB36（北から）

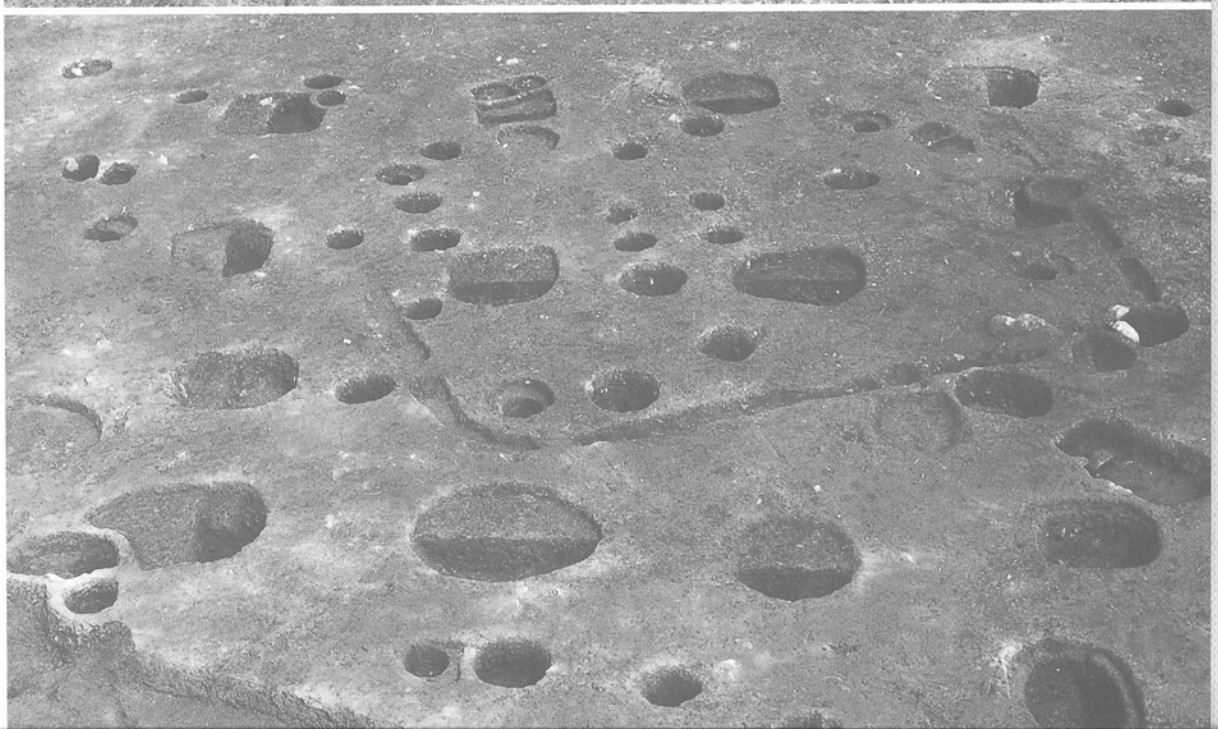
SB37～45
（南西から）



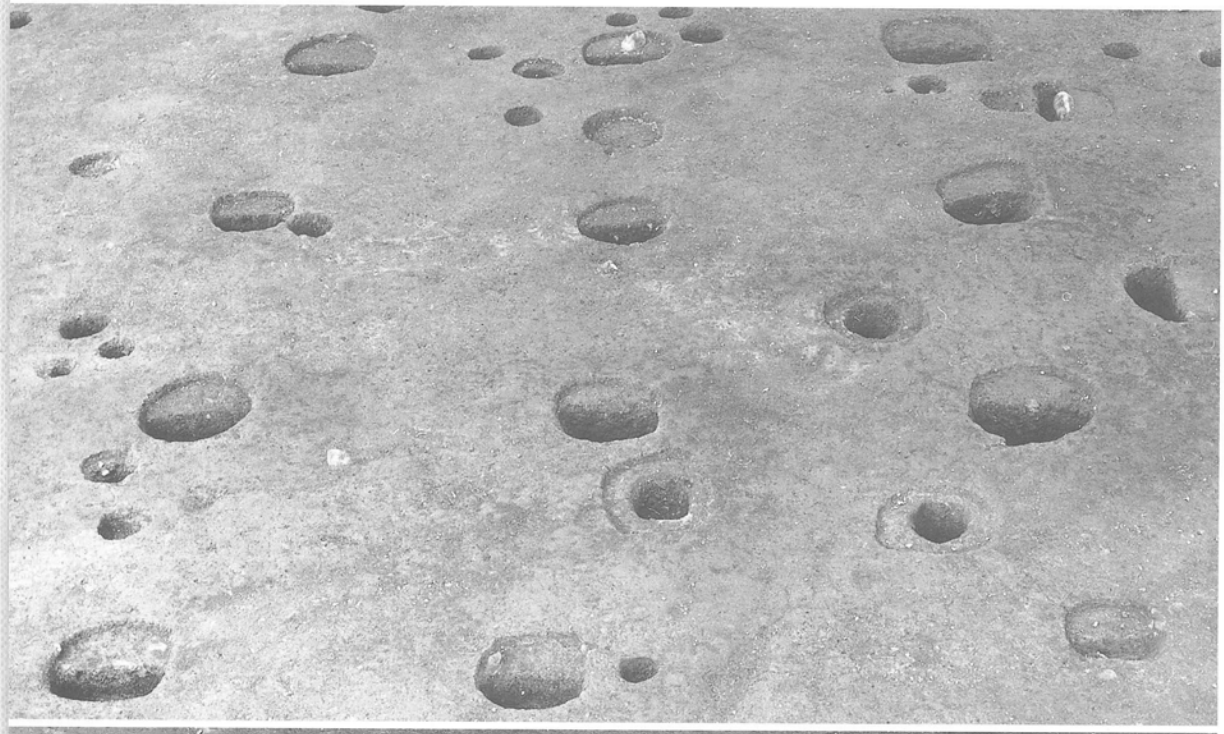
SB37（東から）

B区掘立柱建物群
（北西から）

SB38（西から）

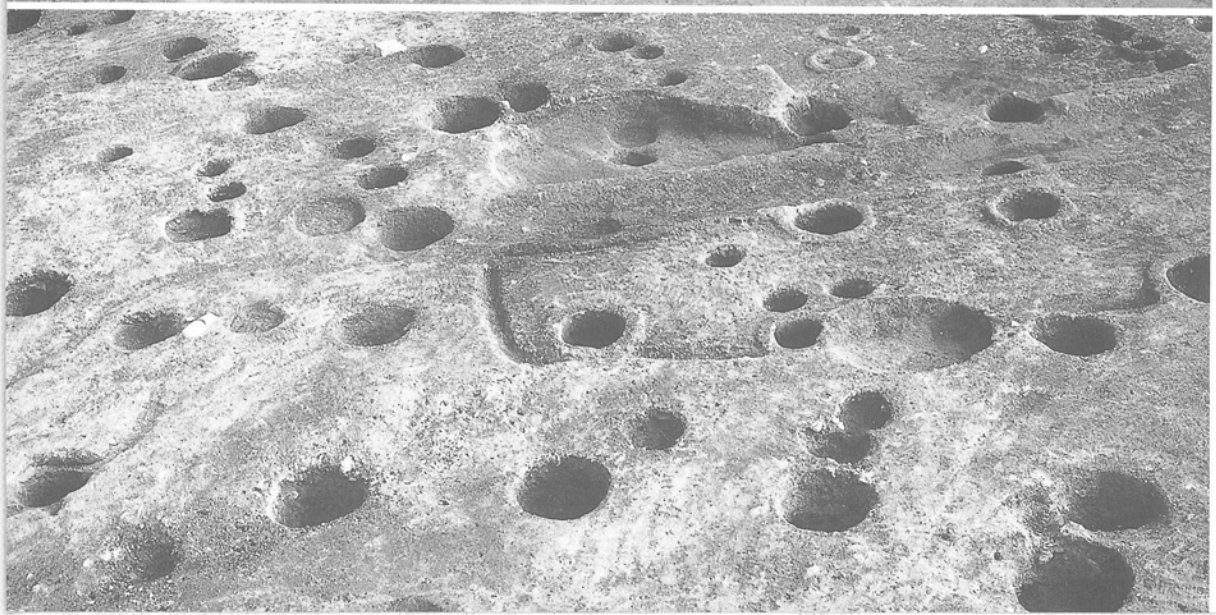


SB38（南から）



SB39（東から）

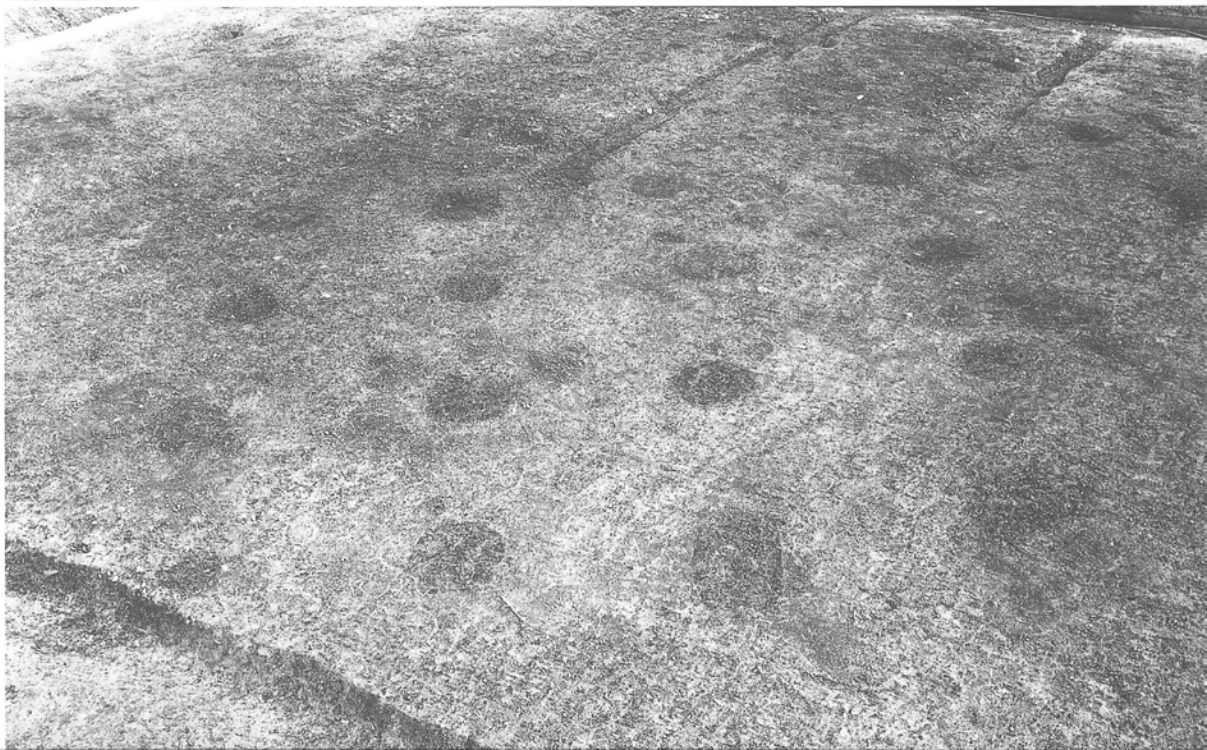
SB40（南から）



SB41（西から）

SB42～45
（北東から）

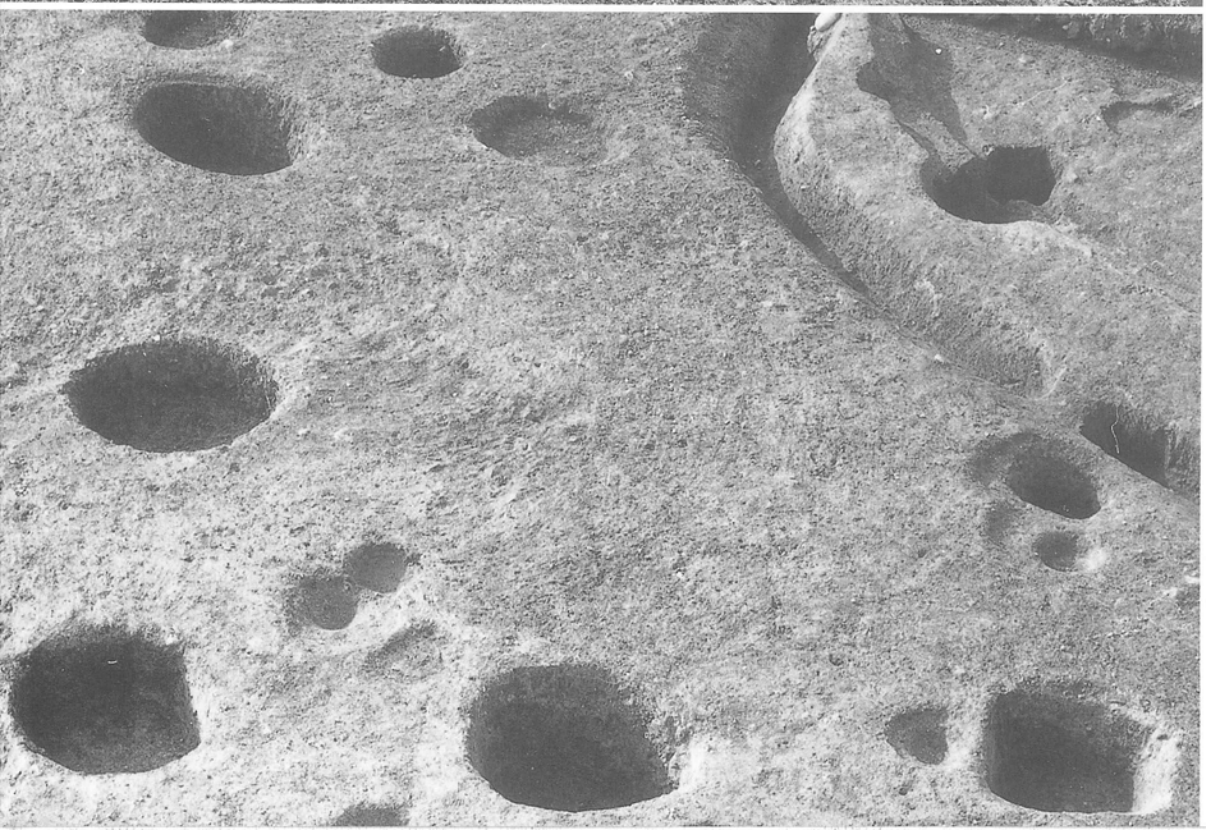
SB43（南東から）



SB44 検出状況
（北東から）

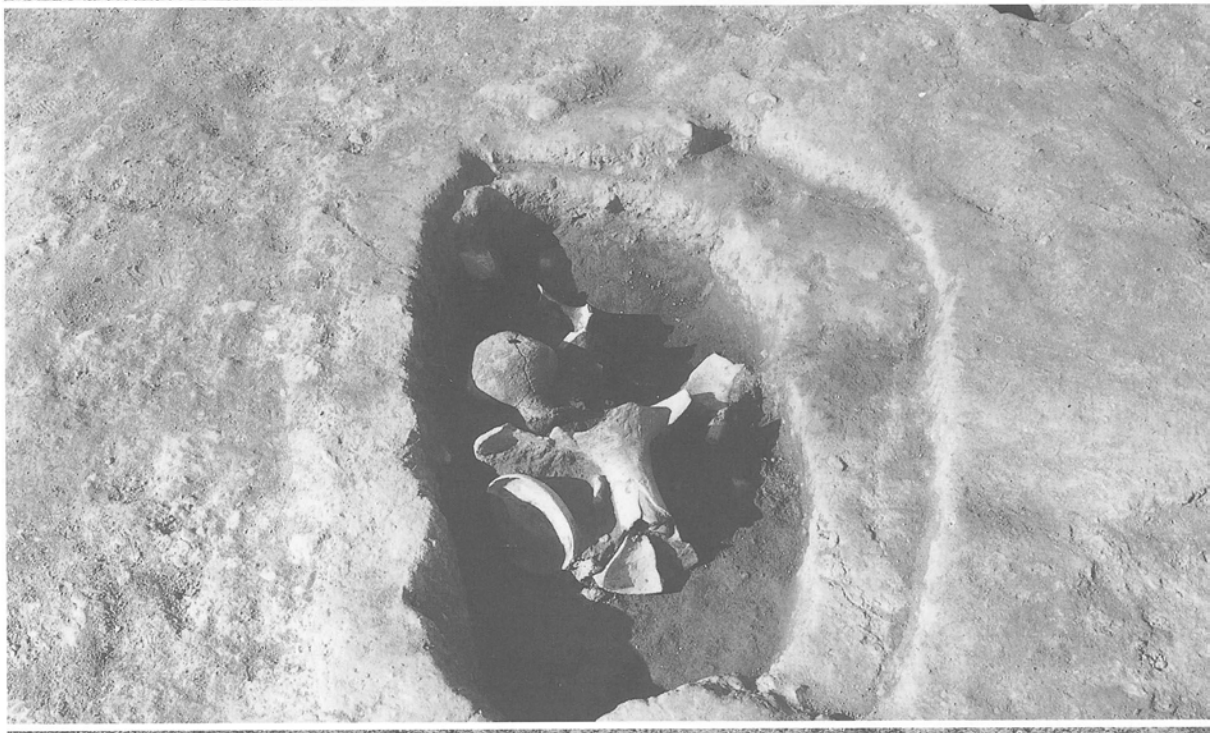
SB44（南東から）

SB45（南から）

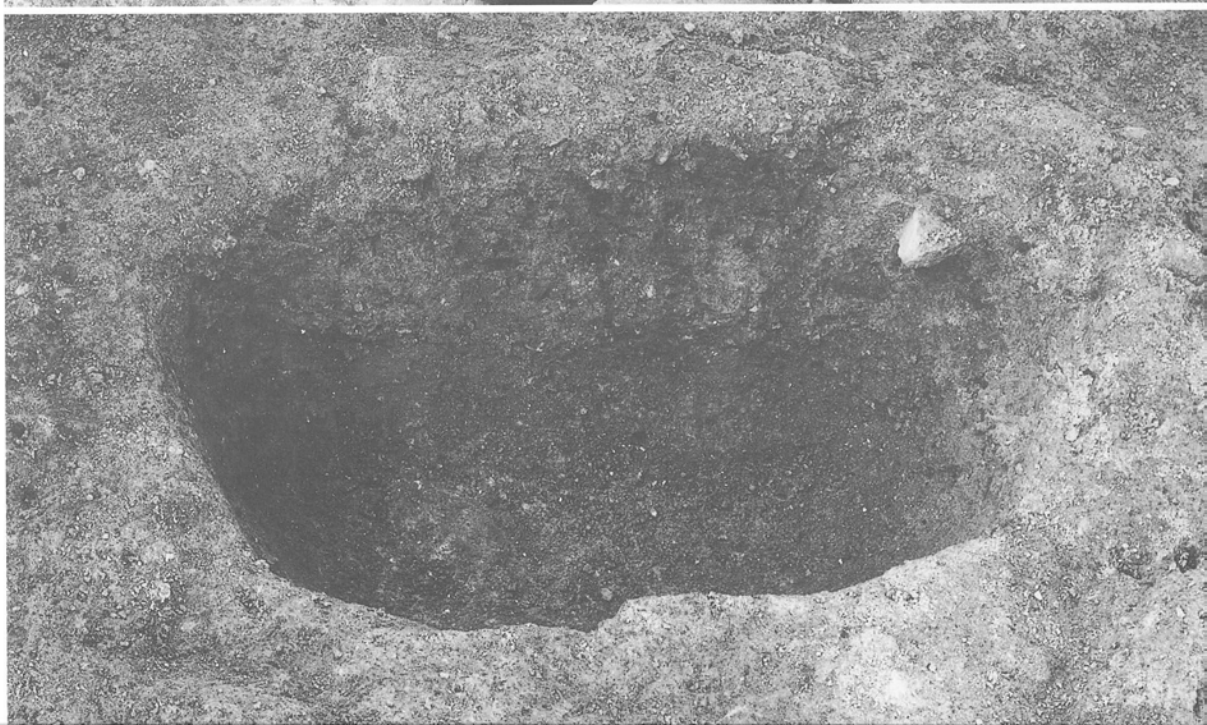


SB46（東から）

SK03
弥生土器出土状況
（東から）



SK03
弥生土器出土状況
（南から）



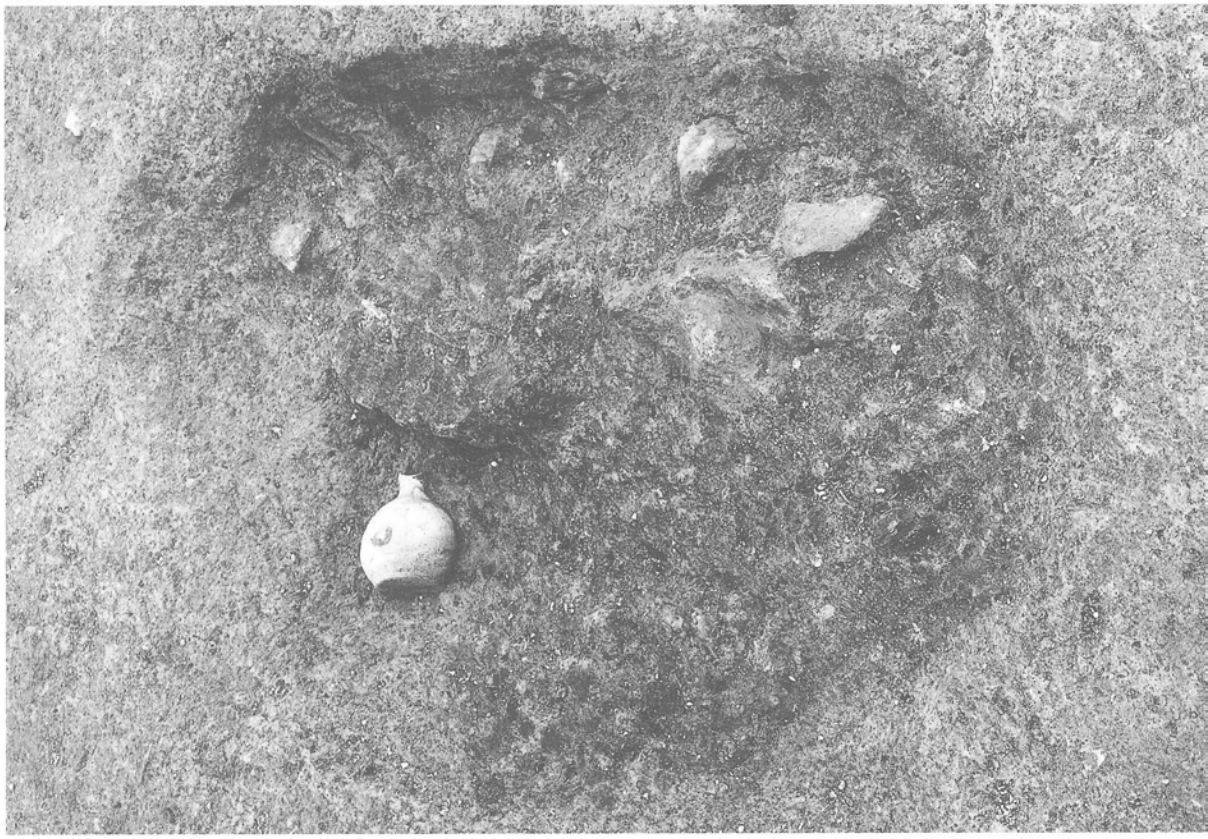
SK03
完掘状況
（南から）

SK24（南東から）

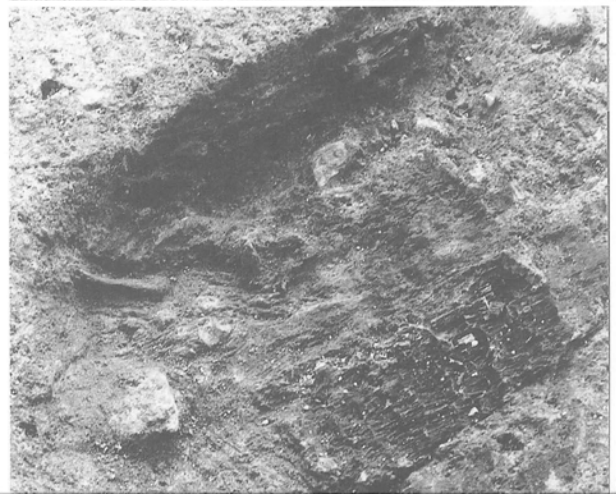
SK39（北から）

SK35（北東から）

SX01 検出状況
（南から）



SX01
遺物出土状況
（南から）

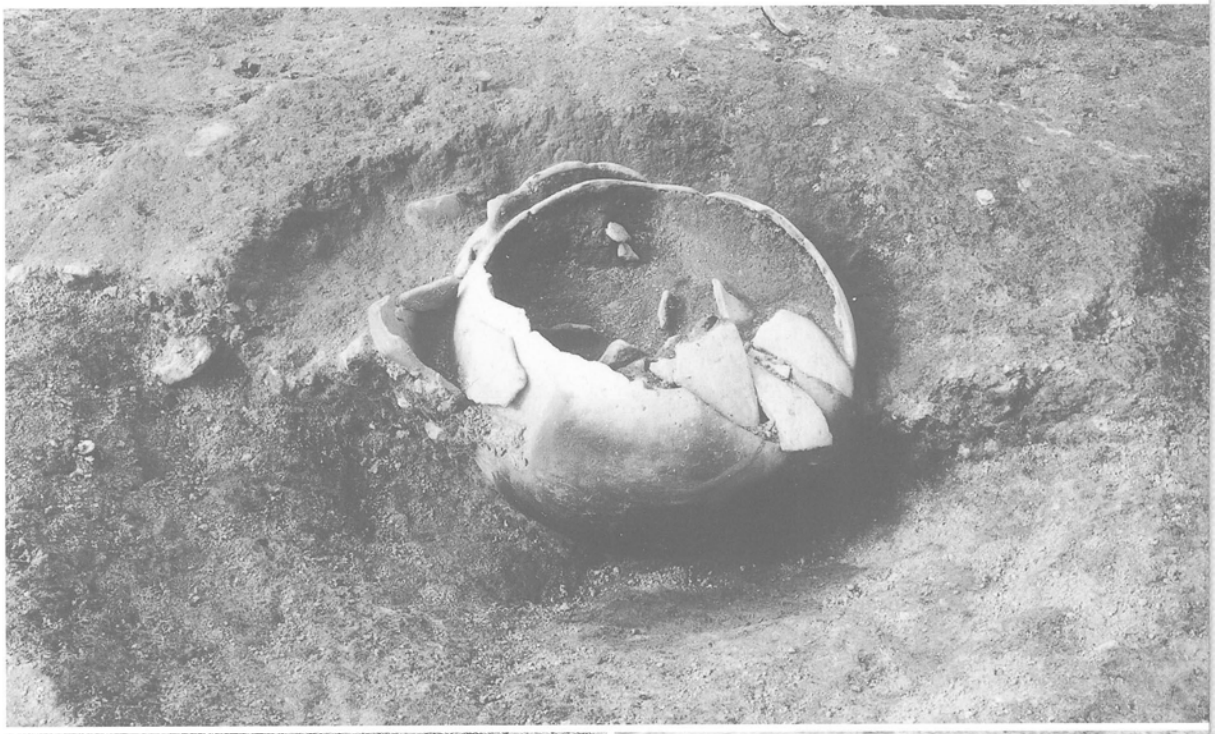


左
炭化棺材検出状況

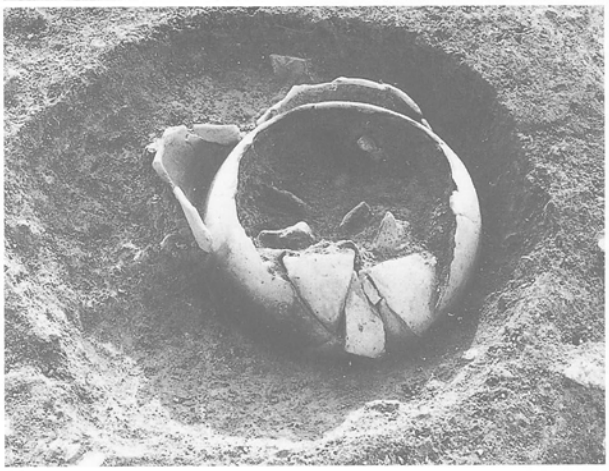
右
灰釉陶器出土状況

SX01 完掘状況
（西から）

SE01（南から）



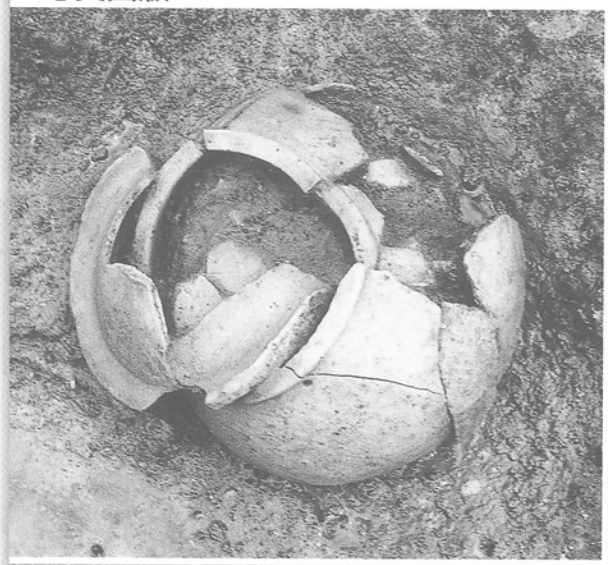
ST01（南から）

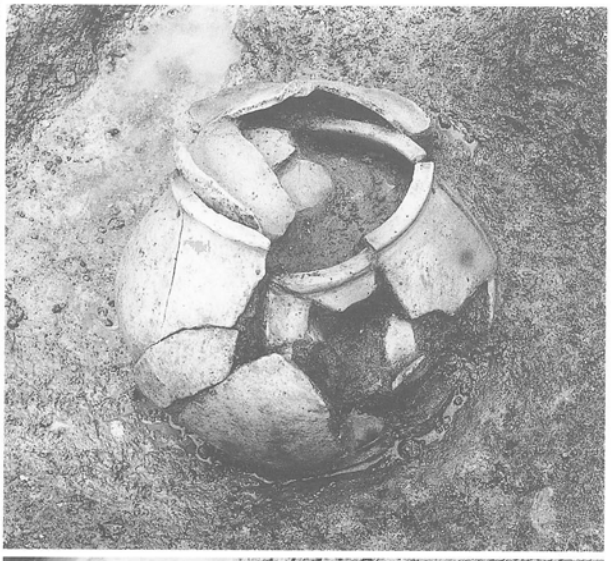


左
ST01（東から）

右
ST01（南東から）

ST02 検出状況
（南から）



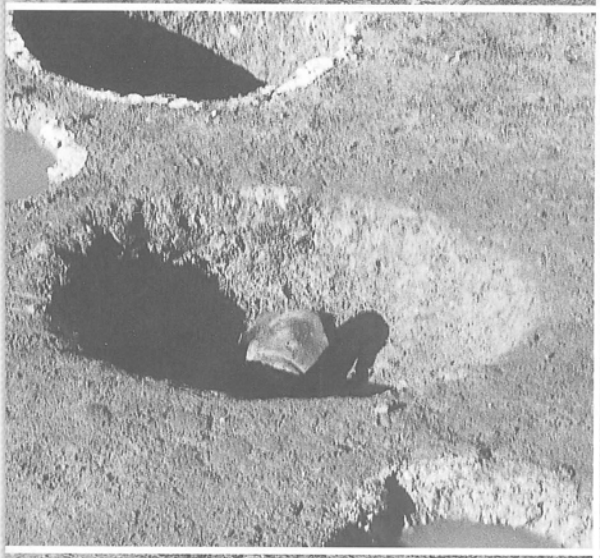


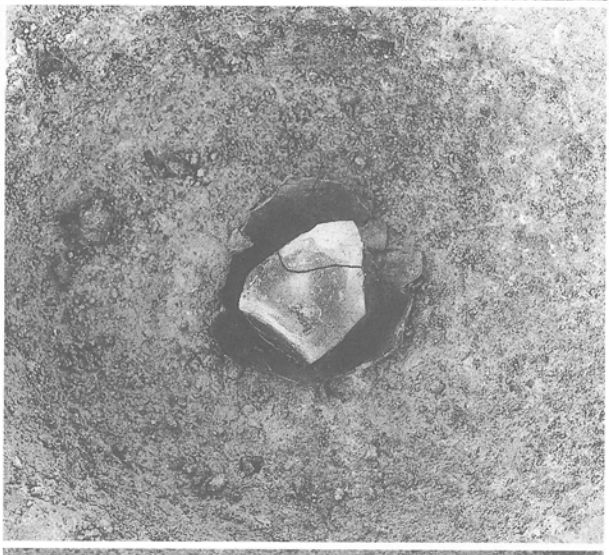
左
ST02 検出状況
（南西から）

右
ST02 検出状況
（南東から）

左
ST02 棺身
（南西から）

右
ST02 棺身
（東から）





左
ST03（南東から）

右
ST03（東から）

左
ST04（西から）

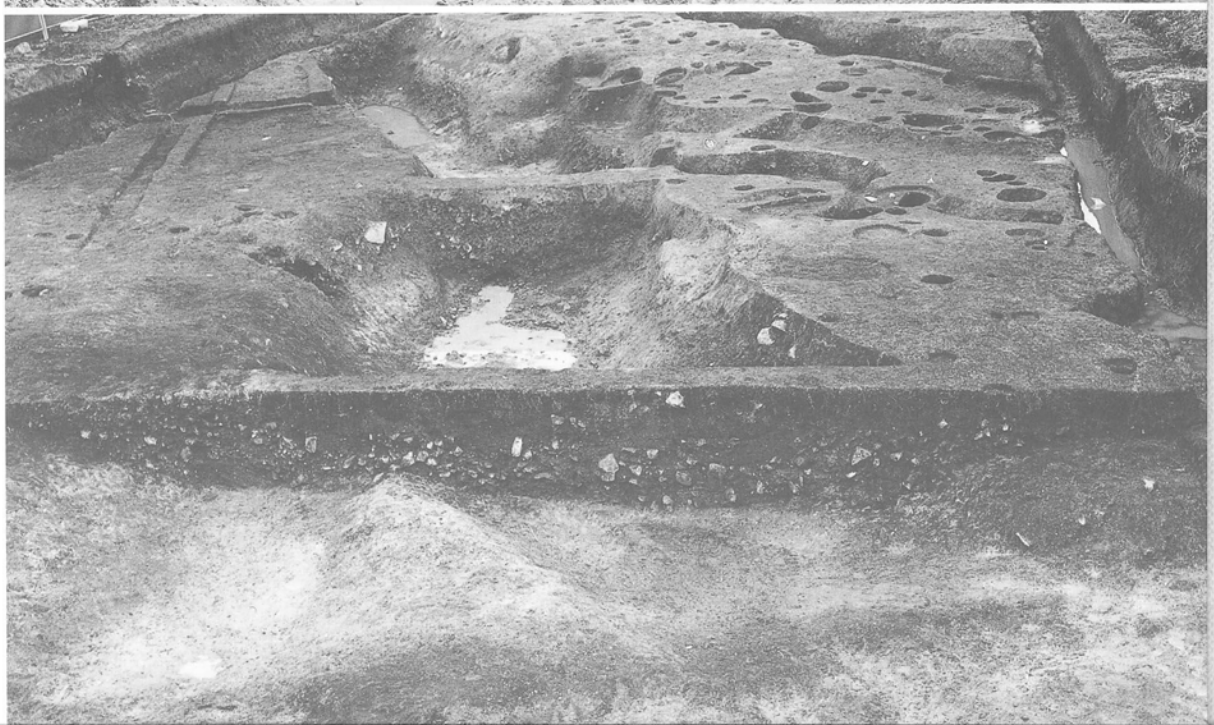
右
ST04（北から）

流路（西から）

左
流路
東セクション
（東から）

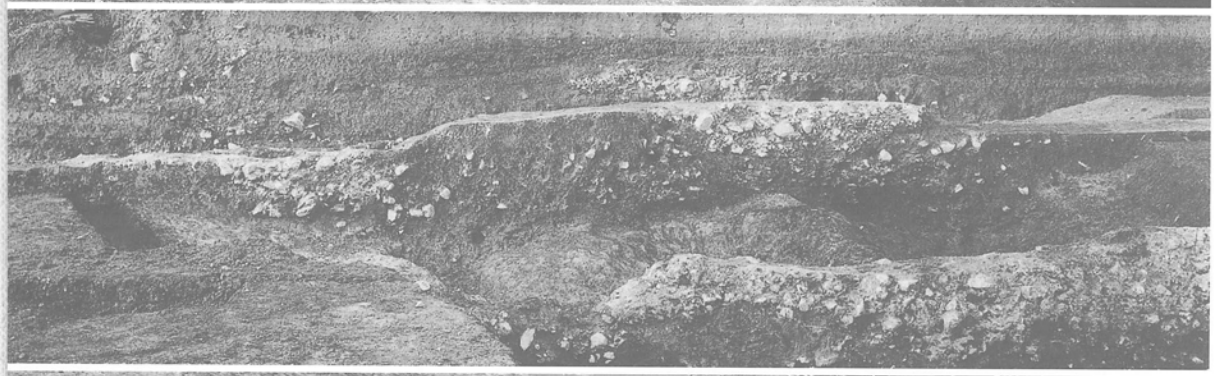
右
流路
西セクション
（東から）

SD500
北側セクション
（南東から）



SD500（南東から）

流路（南東から）



流路
セクション
（南東から）

SD500 杭列検出状況
（東から）